

ねん ぶつ りん みなみ い せき
念 仏 林 南 遺 跡 II

老人ホーム第二松寿園建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995.3

社会福祉法人 松 寿 園
石川県小松市教育委員会

ねん ぶつ りん みなみ い せき
念 仏 林 南 遺 跡 II

老人ホーム第二松寿園建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995.3

社会福祉法人 松 寿 園
石川県小松市教育委員会



念仏林南A道路全景（南西方より）



念仏林南A道路3次調査区全景

〈遺跡全景航空写真〉



3号壑穴住居跡のカマド全景（土器出土状況）



12号壑穴住居跡のカマド全景（土器出土状況）



4号壑穴住居跡のカマド全景（土器出土状況）



12号壑穴住居跡のカマド全景（完備）



5号壑穴住居跡のカマド全景（土器出土状況）
（左寄りの石製支脚と右寄りの高杯脚部支脚）

〈古墳時代後期の壑穴住居跡作り付けカマド(1)〉



13号竪穴住居跡のカマド全景（支脚を有した小型カマド）



11号竪穴住居跡のカマド全景（土器出土状況）



14号竪穴住居跡のカマド全景（土器出土状況）



15号竪穴住居跡のカマド全景（土器出土状況）



16号竪穴住居跡のカマド全景（左寄りに支脚）

〈古墳時代後期の竪穴住居跡作り付けカマド(2)〉



19号壑穴住居跡のカマド全景 (土器出土状況)



19号壑穴住居跡のカマド全景 (手前左寄りに支脚)



25号壑穴住居跡のカマド全景 (右奥壁屈曲)



21号壑穴住居跡のカマド全景 (土器出土状況)



26号壑穴住居跡のカマド全景

〈古墳時代後期の壑穴住居跡作り付けカマド(3)〉



〈古墳時代中期の土師器組成〉



〈古墳時代後期の土器組成〉
(上段は須恵器食器、下段は土師器食器と煮炊具)



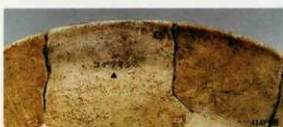
〈古墳時代中期煮炊具使用痕〉



〈古墳時代後期煮炊具使用痕(1)〉



〈古墳時代後期の煮炊具使用痕(2)〉



〈古墳時代後期煮炊具使用痕(3)〉

例 言

1. 本書は、社会福祉法人松寿園が小松市月津町（つきづまち）795番地内で実施する老人ホーム第二松寿園建設及び増築に伴って、昭和59・60年度及び平成5年度に実施した念仏林南遺跡（ねんぶつりんみなみせき）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土品整理・報告書刊行は、社会福祉法人松寿園の依頼を受け、小松市教育委員会が主体となり実施した。
3. 発掘調査の原因、調査面積、調査期間、担当者は次のとおりである。

〈1次調査〉	原因	養護老人ホーム建設	調査面積	3,300㎡
	調査期間	昭和59年8月27日～10月13日		
	担当者	小松市教育委員会 社会教育課 樫田誠・望月精司		
〈2次調査〉	原因	養護老人ホーム周縁外構工事部分	調査面積	1,430㎡
	調査期間	昭和60年3月4日～5月13日		
	担当者	小松市教育委員会 社会教育課 望月精司		
〈3次調査〉	原因	特別養護老人ホーム建設	調査面積	4,025㎡
	調査期間	昭和60年5月20日～昭和61年3月31日		
	担当者	小松市教育委員会 社会教育課 望月精司		
〈4次調査〉	原因	特別養護老人ホーム増築	調査面積	750㎡
	調査期間	平成5年4月8日～7月1日		
	担当者	小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室 望月精司		
4. 発掘調査にあたって、下記各氏の協力を得た。
江野直子・小塩博之・高野裕幸・竹内宇哲・宮田佐和子・渡辺謙
5. 出土品整理及び報告書作成は、望月が担当し、下記各氏の協力を得た。
打田外喜代・樫田誠・国本久美子・久藤紀佐子・津田隆志・橋雅子・宮田佐和子・山口美子
6. 写真撮影は、遺構を望月・樫田が、遺物を望月・津田が担当した。
7. 本書の編集は、望月が担当し、執筆分担は目次に示した。また、土師器の蛍光X線分析については、奈良教育大学教授三辻利一氏に、鉄滓の組成分析について大澤正巳氏に依頼し、至稿を戴いた。心から感謝の意を表したい。
8. 本書で示す方位は、基本的に真北で示しているが、個別遺構図では一部磁北を示している。なお、第3図の念仏林遺跡と念仏林南遺跡の位置には小松市発行2,500分の1国土基本図を、第4図の念仏林南遺跡周辺の遺跡分布には国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和62年発行「小松」、「動橋」）を使用した。
9. 本調査において出土した遺物をはじめ遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体から御協力・御指導を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表したい（敬称略）。
上野亨一、宇野隆夫、柿田祐司、加納他家男、川畑 誠、木立雅朗、北野勝次、北野博司、田嶋明人、出越茂和、中 稔、橋本渥夫、浜岡賢太郎、平口哲夫、安 英樹、吉岡康暢、石川県立埋蔵文化財センター、石川県埋蔵文化財保存協会

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	(権田誠)	1
第1節 位置及び地理的環境		1
第1項 小松の地形		1
第2項 月津台地と遺跡の立地		3
第2節 歴史的環境		4
第1項 周辺の遺跡		4
第2項 周辺の遺跡状況と念仏林南遺跡		7
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査概要	(望月精司)	10
第1節 1次調査		10
第2節 2次調査		12
第3節 3次調査		13
第4節 4次調査		15
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物		19
第1節 縄文時代の遺構と遺物		19
第1項 遺構	(望月)	19
第2項 遺物	(望月・権田)	20
第2節 弥生時代の遺構と遺物		29
第1項 遺構	(望月)	29
第2項 遺物	(津田隆志)	39
第3項 小結	(津田)	50
第3節 古墳時代中期の遺構と遺物	(望月)	53
第1項 遺構		53
第2項 遺物		60
第3項 27号住居跡及び周辺土坑出土一括土師器群小考		74
第4節 古墳時代後期の遺構と遺物		78
第1項 遺構	(望月)	50
第2項 遺物	(望月・横雅子)	50
第3項 まとめ	(望月)	79
第5節 古代以降の遺構と遺物	(望月)	356
第Ⅳ章 考 察		357
第1節 滑石製紡錘車に関する一考察	(横雅子)	357
第2節 念仏林南遺跡出土土器の胎土分析	(三辻利一・望月)	367
第3節 念仏林南遺跡出土鉄滓の金属学的調査	(大澤正己)	385
写真図版		1-57

第 I 章 遺跡の位置と環境

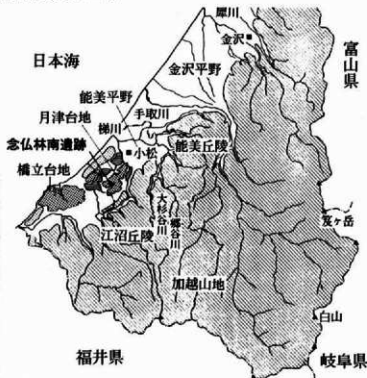
第 1 節 位置及び地理的環境

第 1 項 小松の地形

小松市は、石川県下第二の都市で、人口・面積ともに金沢市に次ぎ、県下西南部（南加賀地域）の中心都市をなしている。市域は、北西縁で日本海に面し、南端は、市域の最高峰大日山（1369 m）を境に福井県勝山市に接している。海岸部から山岳部までを擁する南北に長い市域は、その大部分が山地・丘陵で占められており、海岸線に沿った狭長な平野部に市街地と農地が集中している。行政上、人口の集中するこの平野部を主たる対象として、北部・東部・中部・南部の各地区に呼称区分されている。

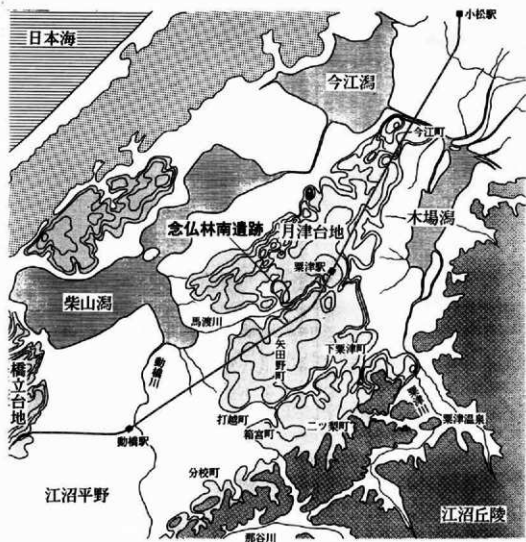
市域の北部地区は、手取川扇状地の南縁と接して、梯川の沖積低地が広がっており、西に中心市街地及び東に農地が展延している。また、その東側は、白山より連なる加越山地の北西縁をなす能美丘陵がとりまいている。沖積地を東流する梯川は、県下では手取川に次ぐ規模をもつ一級河川で、その流れは東側丘陵部を境に90度方向を変えて南へ遡上し、上流部の郷谷川・大杉谷川を介して、白山山系大日連峰に源を発している。

中南部地区は、かつては、今江湖、木場湖、柴山湖という、いわゆる加賀三湖を擁して、たぐいまれな水郷風景をとどめていた。しかし、大規模な干拓事業によって、今



第 I 図 小松市の位置と地形

江潟はそのすべてを、柴山湖はその3分の2を失い、いまは幻の景観となってしまった。この加賀三湖は、もともとは沿岸洲によって閉塞されて生じた海跡湖(ラグーン)である。今江潟のみが、梯川の河口部で合流する前川によって、海と連結しており、さらに、木場潟と柴山湖は、それぞれ今江潟と芋裏のごとく小川で連結していた。現在は、木場潟が前川によって、柴山湖が新設水路の新堀川によって、日本海と連結している。各湖の周囲には、閉塞後の潟埋積平野として、低湿地帯が形成されている。一方、加賀三湖及びその潟埋積平野によって囲まれている標高10~20mの月津台地は、柴山西接部の台地及び加賀市橋立台地と同様の中位海成段丘として、更新世堆積物をのせているが、橋立台地に比べれば平坦な地形で占められている。そして、今江潟・柴山湖と海岸線の間は、北を梯川、南を橋立台地が区切る、完新世の大規模な海岸砂丘が形成されている。月津台地上からは、木場潟を前にして白山を望むことができる。白山を頂点として、



第2図 月津台地と周辺の地形

その前山地帯をなす広大な加越山地は、漸次高度を減じて平野部に達している。この加越山地の前縁をふちどって平野部に面している丘陵部を江沼丘陵と呼んでいる。江沼丘陵は、途中に梯川の大きな開折をはさんで北方の能美丘陵に連なっていく。丘陵縁辺、そしてそこから海岸部にかけて分布する各地形の配置は、海岸線と平行する北東-南西方向への傾きをもっており、海成地形の名残りを示している。

以上のように、小松市中南部は、背後に広大な山地・丘陵を擁し、平野部を潟湖と潟埋積平野及び台地と砂丘が構成する、豊富な地形構造となっている。

第2項 月津台地と遺跡の立地

遺跡の所在する月津台地について、もう少し詳しく見てみたい。月津台地は、近・現代の開発が著しく、土採取や谷の埋立、農地開発等によって、現在ではほとんど旧地形の把握が困難な状況にある。そこで、陸地測量部発行で、明治42年測量の5万分の1測量図をもとに、往時の地形を読み取ったのが第2図である。江沼丘陵の前縁部には、木場潟に注ぐ粟津川と、柴山潟に注ぐ動橋川の支流郡谷川との開折によって分断された南西方向に細長い低丘陵が横たわっている。台地地形は、その丘陵の北東半部から派生して、今江・柴山潟と、木場潟を分かちように、一見能登半島のような形状で広がっている。柴山潟・今江潟に面する北西縁辺部の標高が高く、複数の小頂部をもつ起伏の激しい地形となっており、他は、比較的平坦な地形である。台地を刻む大小の開折谷が、周囲の低地部に向かって発達している。わけても、打越町から下粟津町にむかって長く延びる谷は、丘陵前縁の台地部から一旦区切るかたちとなっており、一応これを月津台地の南東端の境としておきたい。月津台地はそのほぼ中央部で、馬渡川による開折谷が粟津駅に向かって深く入り込み、木場潟側からの開折谷とともに台地を強くくびれさせて、ちょうど粟津駅を境に北西半部と南東半部に台地を区別している。馬渡川による開折谷は、その中で北東方向に分枝してY字形をなすが、この二つの谷にはさまれた台地先端部が念仏林南遺跡である。背後（北側）の台地奥部には、浅谷二つで区画された空白部（遺跡の詳細未詳）をはさんで念仏林遺跡が存している。台地先端部は、実際には中央部に幅の狭い開折谷が1本入り込んでいて二つの舌状台地を成しており、地形的には二つの遺跡として区分されるべきものを合わせて念仏林南遺跡と呼んでいる（詳細は次章）。



第3図 念仏林南遺跡の立地

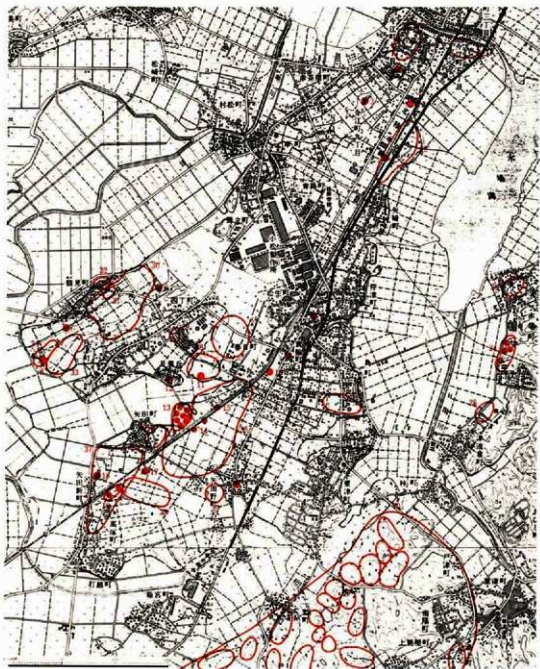
第2節 歴史的環境

第1項 周辺の遺跡

小松市中南部地区では、台地部と丘陵部の二極を舞台に、特徴的な遺跡の分布が示されている。即ち台地部は、縄文時代～中世にまでわたって断続的に営まれた集落の舞台となっており、その東南部の戸津町から加賀市分校町にかけての江沼丘陵前縁部では、古墳時代から中世にかけての窯跡が密集し、北陸有数規模の南加賀古窯跡群を形成している。また、製鉄遺跡も多く、この窯跡群と重複しながら、北方の木場湯東岸丘陵部にまで分布を伸ばしている。

それでは、中南部地区の本遺跡周辺を中心に、具体的な遺跡展開のあり方を追ってみたい。この地域で確認されている最古の資料は、念仏林遺跡(27)出土の石椁で、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての所産であるが、単独の検出状態である。集落としての明確な展開がみられるのは、三湖が入江の状態にあったと考えられる縄文時代前期で、木場湯東南岸丘陵縁の大谷山貝塚(25)など、貝塚を伴った集落が、湯に面して営まれているが、この時期の遺跡分布は未だよく把握されていない。縄文時代中期になると、月津台地上を舞台に多くの集落が営まれるようになる。念仏林遺跡や、本遺跡(28)、茶臼山A遺跡(33)のほか、この時期の遺物は台地上の他遺跡でも複合するかたちで採取されている。後・晩期になると、遺跡の分布は丘陵部に中心を移し、台地上からしだいに姿を消してゆく。次に集落が展開するのは、弥生時代末に属するもので、本念仏林南遺跡では、良好な竪穴住居跡を検出している。この時期以降、古墳時代を通して遺跡数は増加し、これらが複合して大規模な遺跡が台地上を占有している。特に、後期の集落では、月津と矢田野とを分断して柴山湖に通じる大きな開析谷の周囲に、念仏林南遺跡・矢田野遺跡(35)・矢田B遺跡(36)・刀何理遺跡(38)などが群集し、該期の古墳分布との重なりをみせている。本念仏林南遺跡は、縄文中期や弥生末、さらには古墳前・中期集落が重複しており、周辺遺跡もこれと同様な展開をみせていることが予想される。

次に古墳の分布であるが、月津台地上の多くの古墳は、一括して三湖古墳群と汎称されているが、現在知見にのぼっている古墳のほとんどは開発によって消滅している。台地上では今までのところ後期古墳以外の展開は確認されていない。最も古墳が集中するのは、柴山湖に通ずる馬渡川の開析谷周囲で、右岸には念仏塚古墳(11)、念仏林古墳(12)、左岸には、無名古墳群(16)、百人塚古墳(15)、矢田野古墳群(14)、30m級の前方後円墳2基を含む僧屋古墳群(13)など、小規模円墳を主体とした濃密な分布状態を示す。6世紀前半代を中心とした小円墳の多くは、粘土室(箱形粘土棺)を内部主体とすると考えられている。この左岸部の西端には、家形石棺を持つ狐森古墳(17)、横穴式石室内に家形石棺をもつ矢田新九山古墳(18)が盟主墳的な内容を示して存在している。後者は採集遺物から6世紀中葉頃に位置付けられる。谷奥部の栗津駅方向に進むと、多量の円筒埴輪や人物埴輪・馬形埴輪が出土した矢田野エジリ古墳(10)と、40m級の前方後円墳の裏輪塚古墳(9)が隣接しており、谷頭部にあたる栗津駅のすぐ東には、切石横穴式石室をもつ



- 1～19表参照 20御幸塚城跡(中世) 21五郎座貝塚(縄文) 22薬師遺跡(時代不詳) 23池田城跡(中世) 24木場古墳群(古墳) 25大谷山貝塚(縄文) 26鳥遺跡(古墳～奈良) 27念仏林遺跡(縄文) 28念仏林南遺跡(縄文・弥生末・古墳) 29月津新遺跡(縄文) 30額見町遺跡(縄文～中世) 31額見神社前A遺跡(縄文) 32額見神社前B遺跡(弥生～古墳) 33茶臼山A遺跡(縄文) 34茶臼山祭祀遺跡(奈良) 35矢田野遺跡(古墳) 36矢田B遺跡(古墳) 37矢田新遺跡(奈良) 38刀何理遺跡(古墳) 39矢田野神社前遺跡(平安) 40南加賀古窯跡・製鉄跡群(古墳～中世)

第4図 周辺の遺跡分布

符津石山古墳(5)がある。同種の石室と考えられるものが、矢崎B古墳(4)、矢田野町の中村古墳(19)でも検出されたと伝えられており、一定距離をおいた散在傾向がみられる。いずれも6世紀の後半代のものであろう。また、谷部を望んで展開するこれら地区とやや距離を置いて、二つのグループがみられる。一つは、柴山湖に面する台地の北東縁沿いに存する臼のほぞ古墳(6)と左門殿古墳(7)、茶臼山古墳(8)である。臼のほぞ古墳は全長52mを測る月津台地最大の前方後円墳、茶臼山古墳は、径約25m二段築成の円墳である。両者は重要な位置付けを担うものと考えられ、本地域では墳丘の完存する希有の存在でもあるが、残念ながら年代的決め手に欠けている。もう一つのグループは、台地最北端のいわゆる三湖台と称する高台にある御幸塚古墳(1)、近隣の土百古墳(3)、狐山古墳(2)で、先にふれた切石積横穴式石室の矢崎B古墳を含めて、一応一つのまとまりを成している。木場潟を挟んだ対岸の木場古墳群(24)の内容は不明である。

奈良時代になると木場潟西岸台地上の島遺跡(26)、柴山湖に面した矢田新遺跡(37)、中世までの複合遺跡である額見町遺跡(30)等の存在が知られている。しかし、この時代以降、特に平安時代を中心とする時期の集落の展開はまだ確認されていない。

南加賀古窯跡群(40)は、現在確認されているもので、須恵器窯跡160基、土師器窯跡27基、中世陶(加賀古陶)窯跡31基を数える大窯跡群で、中世陶への転換期に若干のブランクはあるものの、須恵器生産の開始から約900年の間、連続と生産を行っている。須恵器生産の開始は、5世紀末ないし6世紀初頭と考えられ、二ツ梨・戸津町付近の、月津台地とのつながりをもつ丘陵部にまず営まれることが注目される。この中には、埴輪併焼窯の二ツ梨豆岡山(殿様池)古窯跡が含まれており、県内唯一確認されている埴輪窯となっている。

表 月津台地の古墳一覧(番号は第4図共通)

No.	名称	所在地	墳形	規模m	埋葬施設	備考
1	御幸塚古墳	今江町	前方後円	全長30	不明	後円部先端削取、埴輪・須恵器・直刀
2	土百古墳	*	円	径10	不明	削滅、管瓦
3	狐山古墳	*	円	-	切石縦合石棺?	削滅
4	矢崎B古墳	矢崎町	円	-	切石積横穴式石室	削滅、馬具、金環m
5	符津石山古墳	符津町	円	-	切石積横穴式石室	削滅、須恵器・直刀・金環m
6	臼のほぞ古墳	津町	前方後円	全長52	不明	主体部・墳頂部破壊
7	左門殿古墳	額見町	円	-	不明	大部分削平
8	茶臼山古墳	月津町	円	径28	不明	主体部破壊、二段築成、須恵器
9	殿輪塚古墳	島町	前方後円	全長40	箱形粘土棺	削滅、須恵器・玉他
10	矢田野エツノ古墳	矢田野町	前方後円	30	不明	削滅(地下に副葬坑)、埴輪・須恵器
11	念仏塚古墳	月美丘町	円	-	不明	削滅
12	念仏林古墳	月津町	円	-	箱形粘土棺	削滅、須恵器・直刀・鉄斧・金環m
13	御座古墳群 1号墳-8号墳	矢田町	前方後円 2基 円6基	7号全長35 8号全長30 径9-13	2-4号-箱形粘土棺 7-8号不詳、他不明	削滅、2号-須恵器・直刀他、1・3号-須恵器、 4号-須恵器・埴輪・玉類、7号-須恵器・埴輪・ 直刀他、8号須恵器・埴輪・銀環
14	矢田野古墳群	矢田野町	円2基	-	不明	墳丘破壊
15	百人塚古墳	矢田町	円	-	不明	削滅
16	無名古墳群	矢田町	円10基?	-	箱形粘土棺?	削滅
17	狐森古墳	矢田町	円	-	家形石棺	削滅
18	矢田新丸山古墳	矢田新町	円	-	横穴式石室、家形石棺	墳丘一部・主体部破壊
19	中村古墳	矢田野町	円	-	切石積横穴式石室	削滅、須恵器・金環

第2項 周辺の遺跡状況と念仏林南遺跡

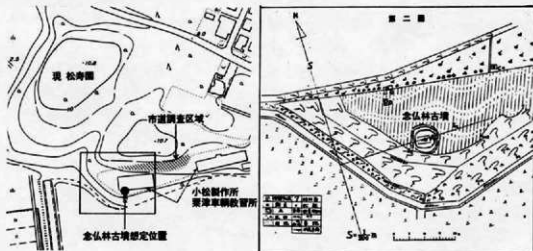
1. 念仏林遺跡と念仏林南遺跡

栗津駅の南西部一帯は、藩政時代には6万坪にも及ぶ官有林であった。そして、密林の広大さに、この地を抜ける人々は心細さのあまり、知らず知らずのうちに念仏を唱えてしまうといったことから、俗称「念仏官山」あるいは「念仏林」と呼ばれるようになったという。大正14年には、70万㎡の広大な栗津牧場がこの地に開場している。現在の遺跡地図上における念仏林遺跡を包括する区域である。昭和 年に牧場が閉鎖されてからは、荒蕪地となっていた。

念仏林遺跡は、昭和24年に小松高等学校地歴班考古部の分布調査によって発見された。台地上の畑地となっている箇所、弥生土器や土師器及び縄文土器を採取したことから、縄文遺跡研究の目的で試掘調査を実施したのである。ところが、このとき設定したトレンチに粘土使用の特殊な埋葬施設が発見され、急遽、古墳調査に切り替わった。これが念仏林古墳であり、南加賀における特殊な埋葬施設「箱型粘土棺」の発見初例となった調査である。そして、念仏林遺跡は、念仏林A（縄文）・B（弥生）・C（土師器）・D（古墳時代須恵器）・念仏林古墳という5つの複合遺跡として周知され、遺跡地図上に記載された。この念仏林遺跡は、小松短期大学建設に先立ち、昭和60・61・62年度の3次にわたってその半分近くが調査された。

一方、念仏林南遺跡が発見されたのは、昭和59年、特別養護老人ホーム第二松寿園建設に先立つ試掘調査によってである。当時この地は雑木林で、開墾を受けた形跡はなく、この一帯では珍しく良好な自然地形を残していた。台地の先端部にあたり、踏査の段階から、なんらかの遺跡が眠っているであろうことは容易に予測できた。案の定、試掘調査によって縄文時代から古墳時代にいたる良好な集落跡が展開していることが確認されたのである。

念仏林遺跡と念仏林南遺跡の調査を通じて不思議なことに気付き始めた。昭和24年に小松高等



第5図 念仏林の位置

学校地歴班によって出された念仏林古墳発掘調査報告書に記載された内容と、念仏林遺跡の内容に食い違いが見られるのである。まず第一に、念仏林遺跡は縄文時代単独遺跡で、弥生土器や土師器の散布が見られないこと。第二に、古墳の立地についてであるが、台地の南向き先端部にあり、眼下に田地が広がって眺望がよいとされているが、遺跡地図に記載されている範囲ではどうい考えられない立地であること等である。一方、この矛盾点は、念仏林南遺跡に当てはめると、全て解決する。つまり、昨年度念仏林南遺跡Ⅰとして報告した市道建設に伴って発掘調査した地点が土地利用の状況から言って、まさに小松高等学校地歴班によって調査された地点であった公算が大きいのである。古墳調査当時、耕地となっていた部分が、現在小松製作所栗津車輛教習所の施設が建設されている部分に該当しているのではないだろうか。これらのことから、周知の念仏林遺跡が実は新発見の遺跡であり、念仏林南遺跡が真の念仏林遺跡であった可能性が極めて高いと言える。小松高等学校地歴班による念仏林古墳の報告文記載位置がやや漠然としていたことから、その誤認が独り歩きしてしまったと思われる。

2. 念仏林南A遺跡と念仏林南B遺跡

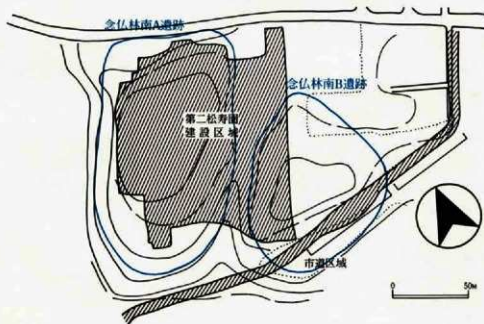
念仏林南遺跡は、第Ⅰ章の遺跡の立地でも述べたように、中央に開析谷を挟んだ二つの舌状台地の先端部からなり、地形的には二つの遺跡として捉えられるものである。遺跡名称は前回報告の「念仏林南遺跡Ⅰ」に従い、北西側台地をA遺跡、南東側台地をB遺跡とする。この遺跡を2つに分けた理由として、地形的なものもあるが、遺跡の内容が異なる点が大きな要因である。基本的に、A遺跡は古墳時代後期、6世紀末～7世紀初頭を前後する時期の集落であり、他の時期の遺構は極少ない。これに対し、B遺跡は古墳時代後期に位置付けられる遺構は確認できておらず、遺物に関しても極めて少ない量が散布する程度である。B遺跡の主体は縄文時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期の3時期で、多量の遺物のほか、各時期の竪穴住居跡が検出されている。A遺跡にもB遺跡と同様の時期の遺物や遺構は存在するが、縄文時代中期の遺構は大半が落とし穴土坑であり、住居跡等の生活の場としての位置を占めておらず、また、弥生時代後期についても、面的に調査したにもかかわらず、検出された遺構は竪穴住居跡3軒のみで、他の付属遺構もなく、遺物量は調査面積がB遺跡の3倍近くであるにもかかわらず、B遺跡よりも確実に少ない。5世紀中頃の古墳時代中期についてもそうで、台地南端部に1軒竪穴住居跡が存在する程度で、土器の分布から見ても、この住居跡周辺のみ分布し、一等地と言ってもよいような台地中央部を避けるかのように、遺構が存在している。つまり、A遺跡は古墳時代後期の集落形成がされるまでは、ほとんど手付かずの地域であったと言える訳で、古墳時代後期まではB遺跡からの集落派生という形で存在であったろうと考える。

以下に、昨年度報告している念仏林南B遺跡の内容を簡単にまとめておく（なお、詳細は「念仏林南遺跡Ⅰ」を参照）。

念仏林南B遺跡は昭和59年に養護老人ホーム建設によって台地西側縁辺の一部900㎡が調査さ

れ、平成3年に台地南側の一部610㎡が調査されている。検出遺構は老人ホーム工区、市道工区あわせると、縄文時代中期遺構が竪穴住居跡3軒と平地式住居跡1軒で、遺物量は少ないが、比較的まとまった群構成をしている。竪穴住居跡は楕円形の大型のもので、念仏林遺跡において検出したタイプと同様である。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構は、竪穴住居跡1軒と土坑1基のみで、遺構自体は少ないが、包含層中の遺物量は多く、未調査区域に中心が存在するものと予想する。竪穴住居跡は隅丸方形のプランで、深く掘り込まれており、A遺跡の弥生時代後期のものと類似した特徴をもつ。古墳時代中期の遺構は、竪穴住居跡6軒と多く、比較的まとまって検出されている。市道工区が東西に長い調査であったこともあるが、区域内に連なるように、南側に面する形で分布している。遺物出土量も多く、B遺跡の中心となる時期と思われる。

さて、念仏林南B遺跡は市道工区と養護老人ホーム工区とがあり、本来、養護老人ホーム工区の部分は、調査原因から考えて、本報告において取り扱うべきものである。しかし、遺跡の性格を考えれば、一括して報告するのがよいと判断されたため、昨年度の市道建設に伴う念仏林南遺跡の発掘調査報告書「念仏林南遺跡Ⅰ」の報告の際に、昭和59年度の養護老人ホーム建設に伴う発掘調査区域も併せて報告した訳である。よって、本報告ではB遺跡部分に該当する7・8・9号竪穴住居跡については報告しておらず、念仏林南A遺跡のみの報告となっている。なお、調査が前後したため、昨年度報告した念仏林南B遺跡の住居跡（7・8・9号住居跡）はそのまま欠番となっているので、ご了解願いたい。



第6図 念仏林南A・B遺跡と工事範囲

第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査概要

第1節 1次調査

第1項 調査に至る経緯

昭和59年7月、教育委員会は、市福祉課より月津町区内での老人ホーム建設計画を聴取、工事計画が8月初旬着手であったため、急ぎ、原因者である社会福祉法人松寿園と協議を行った。

7月、社会福祉法人松寿園より協議書が提出された。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地とはなっていなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地念仏林遺跡に隣接し、これまで開発の行われていない、良好な台地であったため、新たな埋蔵文化財の確認される可能性は極めて高いと判断。小松市教育委員会は事前に試掘調査を行い、埋蔵文化財有無及び範囲の確認をする必要がある旨を回答した。また、養護老人ホーム工事完成が本年度であることもあり、調査着手を速めねばならなかったため、急ぎ、文化庁への届け出、通知を行った。

8月7日～8月25日、工事区域9,800㎡を対象とする試掘調査を実施した。工事区域には南西側から北東側へ大きな谷部が存在し、北西側と南東側に台地が分断されていたため、まずは広い方の北西側台地（A遺跡）から調査にかかった。調査方法は、人力によるトレンチ調査で行い、黄褐色土の地山面で遺構確認を行った。トレンチは1.5m×10mのものを15m間隔で計15本入れたが、ほぼ全てのトレンチにおいて遺物の散布が見られ、竪穴住居跡と思われる遺構も確認できた。また、傾向としては、中央谷部へと徐々に傾斜する部分からの遺物はやや希薄であり、谷部での遺構・遺物の検出はないものと判断され、谷の向こう側に位置する南東側台地においても遺跡分布は希薄であろうと判断した。よって、南東側台地については調査開始後、状況確認することとし、まずは北西側台地から発掘調査に着手することとなった。

8月24日、以上の調査結果を社会福祉法人松寿園へ報告し、8月27日より発掘調査を開始した。1次調査は工事開始が迫っていたことで、調査面積を極力減らすため、養護老人ホームの建物予定区域以外の周回道路や駐車場区域は2次調査で行うこととし、純粋な建物区域のみを対象とした。なお、当調査における調査経費は、突発的事態であったため、予算計上しておらず、社会福祉法人松寿園の直営事業として実施した。

第2項 調査概要

1次調査は、養護老人ホーム建造物区域（4,500㎡）のみを対象としたもので、遺跡の存在しない谷部を除く、北西側台地と南東側台地を合わせた3,300㎡を調査面積とした。調査は昭和59年8月27日より開始。まず、重機による表土除去（小樹木などの表層のみ）を南側から行い、併行して、調査区域内のグリッド設定を行った。グリッド設定は、建物主軸に合わせる形で、任意

に10m×10mメッシュで行い、北西側台地（A遺跡）については、南北列南からA・B……、東西列西から1・2……でナンバリングした。南東側台地（B遺跡）に関しても、同一のグリッド軸で平行移動して行ったが、グリッド番号については北西側と識別できるように、南北列南から1・2……、東西列東からあ・い……とした。表土除去直下には遺物包含層が存在しているため、包含層の掘り下げは、人力で行い、グリッドごと



1次調査区3号住居跡調査風景

とに随時遺物を取り上げながら、密集する区域又は良好な遺物に関しては現位置のまま残し、地山面まで掘り下げていった。包含層除去後、随時黄褐色土の地山面で遺構プラン確認に入ったが、地山面では既に当時の生活面よりも下になっており、竪穴住居跡の存在する箇所は包含層中から遺物が密集する傾向が見られた。このため、遺構確認については、包含層中の遺物密集を目安として、密集箇所の回りからせめる形でプランを出した。3・4・5・7・8・9号住居跡についてはこの方法で行ったが、1・2・6号住居跡については、遺物密集無くして、貼り床状床面や焼土分布が見られ、住居跡として積極的に評価すべきか悩むが、報告では一応、竪穴住居跡として扱っている。

9月10日より、3・4・5号住居跡の掘り下げを開始する。調査はまず、包含層掘り下げで出土した遺物を残し、プラン確認した段階で、全景写真を撮影。その後、包含層遺物を住居跡上層遺物として取り上げ、基本的にカマド付近に軸が通るように、セクションベルトを十字に設定。4分割で掘り下げを開始した。遺構内の遺物は基本的に層位で取り上げたが、まとまった遺物や床面遺物に関しては現位置のまま残した。これら遺物の出土状況写真、図面完了後、カマド周辺の焼土分布範囲を残して、壁・床面出し作業に入った。床面はいずれも貼り床していたため、検出は比較的容易であったが、壁の検出は、地山からの掘り込みが浅く、難しかった。その後、柱穴プラン確認、半截して、土層断面図作成後、完掘した。ここで一度、全景写真を撮影。カマド部分の掘り下げに入る。カマド部分はキの字にセクションを設定。袖を残しながら、随時断面図作成し、掘り下げた。カマド床面の焼け具合は弱く、袖も崩れたものが多かったため、掘り上げりの状態が良好でないものが多かったが、煮炊具の一括廃棄されたものが目立った。出土状況図・写真撮影を行い取り上げた。全景写真、平面図、エレベーション図作成し完了。続いて、貼床をはがし、貼床土層図作成し、ピット掘り下げ後、床下掘り方平面図作成。全景写真を撮影し、3軒の住居跡の全ての調査を10月8日までに完了した。

9月16日、南東側（B遺跡）区域の包含層掘り下げ開始。北西側（A遺跡）では少なかった古

頃時代中期や弥生時代、縄文時代の遺物を多く検出。北西側とは時期や内容の異なる遺跡が当該区域に存在することが予想された。9月20日より、南東側7～9号住居跡の掘り下げ開始。北西側と同様の方法で調査を行ったが、7号住居跡は遺物も多く、深くしっかりした掘り込みをもってしたが、8・9号住居跡については浅く、床面・壁も曖昧で、しっかりとしたプランを確認できなかった。この掘り下げは、10月10日までに完了した。

10月8・9日、調査区域の遺構分布及び地形測量を業者に委託して行った。

10月11・12日、調査区域の全景写真のため、全城を清掃、同月13日、全景写真撮影。全ての作業を完了し、1次調査を完了した。

以上の調査は、工事日程が迫っていたこともあり、十分な調査期間がもてなかったため、調査員2名体制で、作業員常時20～30人を雇用し、土・日曜日、祝祭日なしで、日没まで調査を行う、まさに緊急調査体制で望んだ。しかも、9月20日以降は、2名の調査補助員や学生等を動員し、行ったもので、3,300㎡の面積を一月半という短期間で調査した。

第2節 2次調査

第1項 調査に至る経緯

2次調査は1次調査を行った養護老人ホーム建造物に付随する周縁外構工事（周回道路・駐車場・玄関）に伴う発掘調査で、1次調査の時点で、その日程等（4月より着手）は打ち合わせ済みであったが、玄関部分の工事計画変更と取り付け道路部分の工事のため、3月初旬に一部調査実施の要望が社会福祉法人松寿園より出され、急遽、調査に入ることとなった。2次調査区域の文化庁への発掘届けは、既に1次調査に含めて提出されていたため、教育委員会からの発掘通知のみ文化庁へ提出し、昭和60年3月から調査に入った。なお、調査に関する経費・事務の執行は1次調査と同様、原因者直営で行った。

第2項 調査の概要

2次調査は工事変更のため早急に調査対応が必要となった、玄関・道路部分の255㎡（a地区）と4月から調査に入った駐車場・道路部分の1,175㎡（b地区）に分けられる。

a地区の調査は対象区域のほとんどが建造物工事の工用道路としてバラス等が敷かれ、踏み固められていたため、その部分を取り除いた段階で、既に地山が露出。遺物包含層は確認できなかった。また、遺構についてもピットが検出されたのみで、竪穴住居跡の検出もなく、昭和60年3月4日に表土除去した後、3月5日に遺構確認、掘り下げて調査を完了した。

b地区の調査は昭和60年4月3日より開始した。1次調査と同様、表土を重機で除去した後、1次調査時のグリッドをそのまま北側に延長する形で、5m×5mメッシュで設定。1次調査と区別するため、グリッド番号は南北列南からア・イ……、東西列西から1・2……とし、J

1がア1・イ1・ア2・イ2に該当するようにした。当調査では、1次調査での反省をもとに、地山面でのプラン確認の前に、包含層中黒褐色土上面（当時の生活面と予想していた面）でプラン確認を試みたが、土層の違いを把握しきれず、この面で確認された遺構はなかった。よって、1次調査同様、地山面まで下げてプラン確認を行うこととなった。包含層の掘り下げは1次調査同様、遺物集中は遺物を残しながら行ったが、竪穴住居跡以外でも下に掘立柱建物跡が存在する箇所では包含層中で遺物の集中が見られることが分かった。掘立柱建物跡は2棟検出したが、そのうち1棟（2号掘立柱建物跡）はa地区へと柱穴が続いており、a地区で調査したピットがこれに続くことが、図上復元によって分かった。ただ、a地区調査区のピットは間が飛んでいる箇所があり、柱間に柱穴の抜けるタイプなのか、単に確認できなかったのか、不明と言わざるおえない。掘立柱建物跡は柱穴半截、断面図作成後、完掘し、エレベーション図、平面図を作成した。また、当調査区でも竪穴住居跡を1軒検出した。調査方法は基本的に1次調査と同様であるが、覆土遺物を上層から全点ドットマップ、レベリングし、一括廃棄遺物のみ出土状況図を作成した。

5月11日、全ての遺構掘り下げを完了。b地区の全景写真を撮影し、13日の午前をもって2次調査を完了した。

第3節 3次調査

第1項 調査経緯

3次調査は1次調査の養護老人ホームの西側に並列して建てられる、特別養護老人ホーム建設に伴う調査で、計画当初より、養護老人ホーム西側での工事のため、1次調査の内容から、工事区域全域を発掘調査対象とすることで了解済みであり、社会福祉法人松寿園からの開発に先立つ協議、試掘依頼等は行わず、直接、発掘調査依頼及び文化庁への発掘届を提出してもらった。教育委員会はこれを受けて、昭和60年4月15日発掘調査通知を文化庁へ提出。5月20日から調査着手することとした。また、今回は事前に本年度発掘調査を実施することは決まっていたため、予算化しており、土地所有している小松市土地開発公社と小松市とで委託契約を締結し、受託事業として実施した（小松市土地開発公社が用地取得を行っていたため、原因者である社会福祉法人松寿園とは直接的には委託契約を交わさず、小松市土地開発公社が一時代替わりする形で、委託契約を締結した）。

第2項 調査の概要

3次調査は養護老人ホーム西側に並列して建てられる特別養護老人ホームの建造物用地及び周回道路部分4,025㎡を対象としたものである。調査は昭和60年5月22日より開始。1次調査同様、調査区域の表層部分を重機によって表土除去した。グリッド設定は、2次調査区域b地区の5m×5mグリッドを西側に延長する形で行い、グリッド番号は東西列北から1・2……、南北列

東からあ・い……とした。

5月24日より、作業員による包含層除去を開始する。包含層除去の方法は基本的に1次調査と同様の方法で行い、地山面で遺構の確認を行った。包含層除去は北側から行ったが、北側の道路に接する区域付近では、黒色土が厚く堆積。地山面が北に向かって傾斜しており、比較的深い谷が入り込んでいることを予想させた。包含層除去は確認面での乾燥・風化を防ぐため、遺構確認、遺構掘り下げと随時併行する形で行った。

6月3日より、竪穴住居跡の上層遺物のドットマップ作成に入る。当調査でも2次調査同様、遺構上層及び覆土内遺物は全点ドットマップ作成し、まとまったものは出土状況図を作成した。

6月17日より、竪穴住居跡の掘り下げを開始。2次調査と同様の方法で行った。

7月2日、11号住居跡完掘。線刻の石製紡錘車出土。この時点で既に、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、土坑2基検出。

7月15日、13号住居跡で床面から多量の炭化材出土。火災住居か。

9月4日、1～9ラインに存在する11～16号住居跡、3～7号掘立柱建物跡、16～25号土坑の掘り下げ、図面、写真を完了し、この区域での全景写真を撮影。全体測量図も作成した。今日で連続54日の晴天続きを記録。作業員・調査員の体力も限界に近い。9月7日、57日ぶりの雨。豪雨となり、以後、秋雨続く。

9月6日、10ラインから南側の遺構掘り下げ開始。10月21日までに17～23号住居跡、8～12号掘立柱建物跡、26～32号土坑を調査する。予想以上に遺構が多く、当初見積もりをはるかに越え、年内調査完了は無理と判断。調査費も足らず、11月1日、委託契約金の変更契約を行う。

12月5日、25ラインから南側の27号住居跡及び周辺土坑を除いて、遺構の調査はほぼ完了。北側から竪穴住居跡の貼り床はがしに入る。

12月7日、突然の降雪。そのまま根雪となり、現場は雪に閉ざされた。

2月18日、今年の冬は大雪であったため、依然として、現場は50cm以上積雪があり、除雪作業



3次調査区包含層掘り下げ風景



3次調査参加者

に入ったが、その夜、さらに降り積もる。

2月25日、再度除雪作業に入る。以後、毎日除雪作業に動き、3月10日までに除雪を完了する。

3月10日、調査再開。3月28日までにはほぼ全ての遺構調査完了。

3月29日、航空写真の準備及び撮影。

3月30・31日、遺構の補足調査及び全体図・地形コンタ図作成し、全ての作業を完了する。

3次調査は予想以上の遺構の多さ、夏の猛暑、記録的な晴天続き、突然の大雪と、読みを大きく覆す調査であったが、調査員1人体制でもなんとかやり逃げた。また、覆土内のドットマップ作成については、途中、やり始めたことを後悔したが、止める訳にもゆかず、作業員の協力もあり、なんとかやり逃げた。若さゆえ可能であった調査である。

第4節 4次調査

第1項 調査に至る経緯

1～3次調査で、当初計画されていた老人ホーム建設に必要な区域は調査完了していたが、新たに、平成元年3月、特別養護老人ホームの建物を西側に増築する計画が浮上し、取り扱いに関する協議が社会福祉法人松寿園より出された。しかし、この計画も一時中断し、増築計画はなくなったものと思っていたところ、平成4年10月27日、再び、協議が出され、調査対応することとなった。平成5年3月、文化庁への埋蔵文化財発掘届出が出され、教育委員会もこれを受けて文化庁への埋蔵文化財発掘調査通知を提出した。今回の調査は社会福祉法人松寿園と小松市との委託契約で行うこととし、平成5年4月8日より調査を開始した。

第2項 調査の概要

4次調査は既存の特別養護老人ホームの増築に伴うもので、増築区域は860㎡であったが、3次調査において既に調査済みの区域があったため、実質の調査面積は750㎡であった。

4月13日、調査開始。16日までに調査区域の表土除去を実施。

4月14日、グリッド設定。3次調査のグリッドを延長して設定したつもりであったが、グリッド杭が動いていたためか、南北軸が1度東に振り、東西列が1m近く南へずれてしまった。グリッド番号は南北列東から1・2……、東西列北からA・B……とし、3次調査区とのグリッドとは4次1列が3次き列と、4次



4次調査区包含帯掘り下げ風景

2列が3次列と対応する。包含層掘り下げは3次調査と同様であるが、表土除去の段階で遺構・遺物が少ないと判断されたため、遺物は全てドットマップを作成して取り上げた。

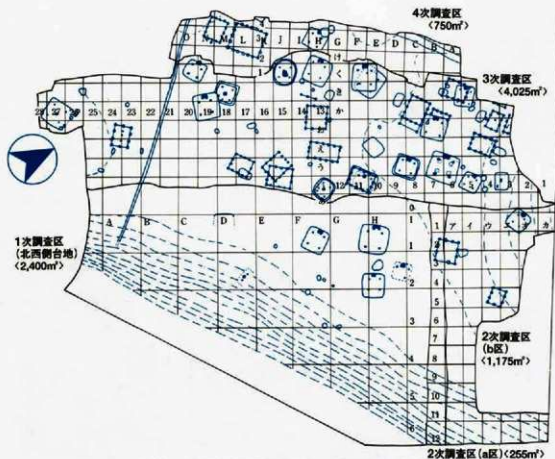
4月26日、竪穴住居跡を確認、掘り下げ開始。3次と同様の方法で調査した。

5月20日、掘立柱建物跡2棟検出。

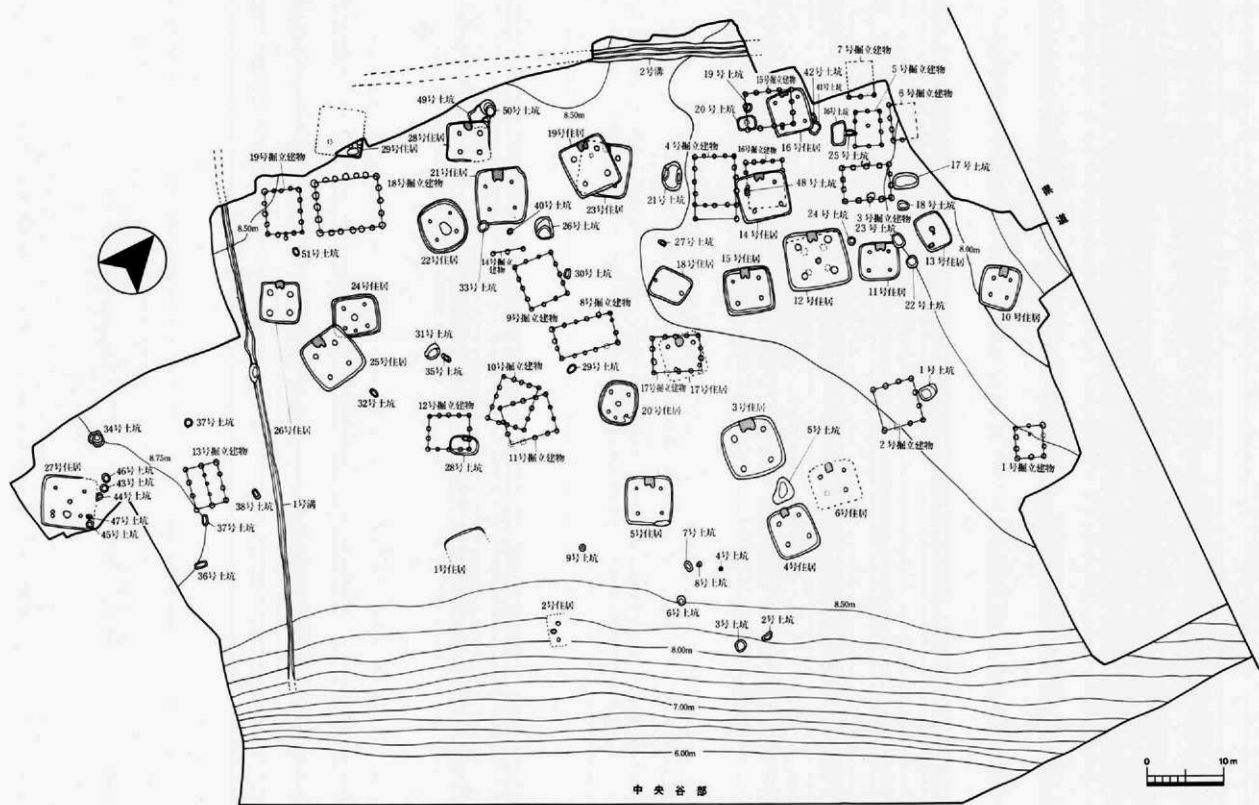
6月1日、K4グリッドで遺構がかかったが、調査区域外のため、拡張して確認したところ、竪穴住居跡と判明。可能な限り拡張して調査した。

6月21日、ほぼ全ての遺構調査完了。今回の平面図は全てラジコンヘリによる写真測量（業者委託）のため、全城清掃し、6月22日写真測量。6月24日をもって全ての作業を完了した。

4次調査は、3次調査の反省から、遺構が密集することを前提に計画し、さらに、作業の軽減化を図るため測量委託して実施したが、遺構数は少なく、1ヶ月以上も調査期間を短縮した。



第7図 念仏林南A遺跡調査区とグリッド配置図 (S=1/1,000)



中央谷部

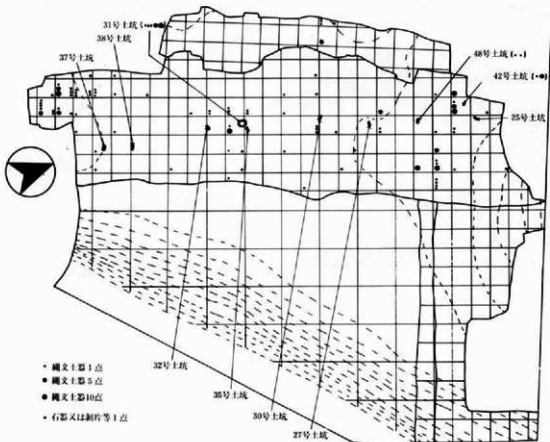
第8图 念仏林南A遺跡遺構全体図 (S=1/500)

第三章 発見された遺構と遺物

第1節 縄文時代以前の遺構と遺物

第1項 遺構

石器に旧石器時代まで溯るものがあるが、遺構として確認できるものはいずれも縄文時代中期のものである。第9図には縄文時代の遺構分布と遺物分布を示した。遺物分布自体が少量のため、漠然とした感じではあるが、遺構と遺物のクロスする部分は31号土坑と42号土坑の付近のみで、周縁1グリッド程度の範囲で広がっている。これは土坑内遺物の出土状況とも対応し、この2基の土坑以外からは遺物の出土がほとんどない。これはこの2基の土坑以外は陥穴土坑であるため、生活遺跡に関連する遺構（消費に関連する遺構）としての性格を有していないためである。さて、遺物は遺構の存在しない区域からも出土しているが、集中分布を示すほどではなく、南西端区域でやや多い程度である。



第9図 縄文時代の遺構分布と遺物分布 (S=1/1,000)

1. 土坑

土器廃棄状の円形土坑は図示した31号土坑の他に42号土坑がある。42号土坑は直径1.5m程度の円形のもので、深さ40cm程度、少量ながら土器が出土している。

31号土坑（第8図）は210cm×180cmの楕円形プランのもので、深さ35cm程度のやや浅いすり鉢形である。覆土は上層で暗褐色土、中層から下層にかけて黒味の強い黒褐色土が堆積している。遺物の出土はさほど多くはなく、図示した獣頭状装飾突起をもつ有文土器を中心に十数点分布する。

2. 陥穴土坑

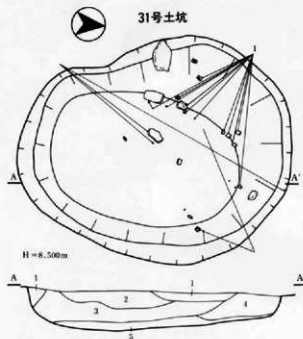
25・27・30・32・35・37・38・48号土坑がこのタイプのもので、台地のほぼ中央部、南北に直線上に連なるようにして分布している。比較的土坑間は空く傾向が見られ、10m弱～20m弱間隔を空けて、東西へ長軸を向けて、意識的な配置をしているかのような分布を示す。平面形態は隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、規模は長軸100～150cm、短軸50～80cmを測る。いずれも深さは80cm以上あり、1m程度が一般的、深いもので115cmある。壁面の立ち上がりは比較的急で、下底面でのプランは上端同様、隅丸長方形又は楕円形を呈する。さて、陥穴土坑には通常下底面に杭等を埋設したと思われる小ピットを伴う場合が多いが、当遺構においても、25・27・32・37・38号土坑で確認されており、いずれも下底面の中央に一か所掘り込まれている。ピットは細いものが多く、掘り込みも浅いものが多い。覆土はいずれの土坑も同様の土層、同様の堆積状態を示し、他と異なるような意識的な埋没の仕方をするものはない。土層は全体的に黒味の強い黒褐色土が主体的で、暗褐色土が間層として入り、黒褐色土と互層をなしている。上層から下層までしまりに欠ける軟質土層であり、杭等を埋設したような土層は確認できていない。いずれの土坑でも遺物の出土は極少なく、48号土坑で土器が2点出土している以外は極細片のみである。

第2項 遺物

1. 土器

土器はいずれも縄文中期に位置付けられるもので、破片数では183点を数える。大半が縄目文様のみ破片で、文様をもつものは46点存在する。図示したものは、そのうちの比較的大きな破片であるが、1～3の31号土坑出土以外のものは包含層出土のものである。

1・2は同一個体のもので、獣頭状装飾突起を口縁部に2個以上配する有文土器である。口径40cm近くを測る大型のもので、外傾する器形を呈す。文様は口縁端部の文様帯に蓮華状文、口縁端部外面からその下に半隆起線爪形文と多条半隆起線文、そして縦位半隆起線文で区画された中に格子目文が充填されている。このような文様構成をもつものは基本的には深鉢器形のものであるが、金沢市中平遺跡出土の浅鉢（『鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』第81図53）のような当資料に類似した文様構成のものもあるため、なんとも言い難い。が、口径の大きさや外傾の度合いは浅鉢的であり、浅鉢とするのが妥当であろう。また、格子目状文をもつものに9・10が



31号土坑覆土層註

- 1層 暗褐色土：黒褐色砂・炭化粒少量含有。軟質。
 2層 黒(褐)色土：黄土粒・炭化粒少量含有。軟質。
 3層 黒褐色土：黄土粒・炭化粒少量。焼土粒微量含有。やや軟質。
 4層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。硬質。
 5層 暗褐色土：黄土粒多量(3割)混在。しまり有り。硬質。

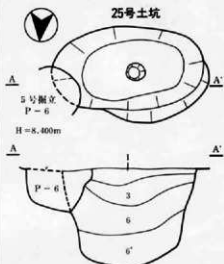
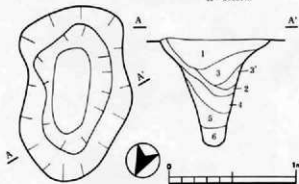
陥穴土坑覆土層註

(25号, 27号, 30号, 32号, 35号, 37号, 38号土坑)

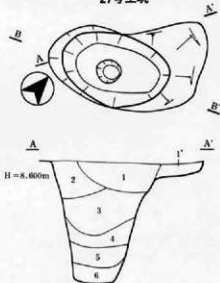
- 1層 暗褐色土：黄土粒・黒褐色土少量含有。 4層 暗褐色土：黄土粒多量(2割)含有。軟質。
 1'層 1層に近いが、含有物なし。軟質。 5層 暗褐色土：黄土・黄土多含有。軟質。
 2層 暗褐色土：黄土粒多量含有。 6層 暗褐色土：黄土粒少量含有。軟質。
 3層 暗褐色土：黄土粒・褐色土粒少量。炭化 6'層 6層に近いが、全く黒く、含有物なし。
 粒微量含有。軟質。 7層 暗褐色土：黄土粒多量(2割)含有。炭
 3'層 3層に近いが、黄土粒多含有。 きなし。

30号土坑

H = 8.600m



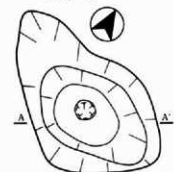
27号土坑



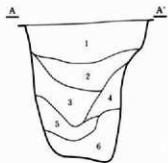
H = 8.600m

第10図 縄文時代の土坑(1) (S=1/30)

35号土坑

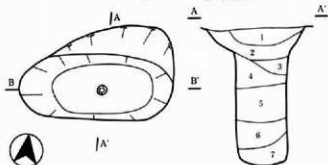


H = 8.500m

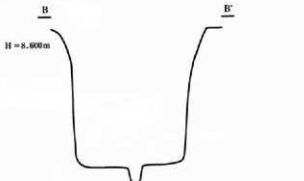


32号土坑

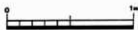
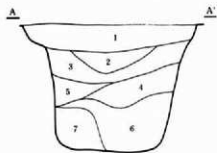
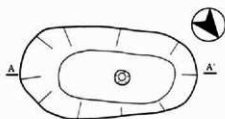
H = 8.600m



H = 8.600m



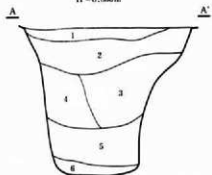
37号土坑



36号土坑



H = 8.600m



第11図 縄文時代の土坑(2) (S=1/30)

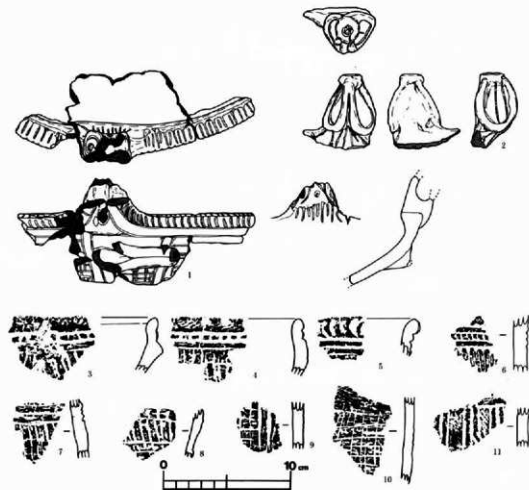
あるが、これも半隆起線文で区画されたものであり、基本的には同系統の文様構成をもつ。

3・4は縄文が一部施される平口縁のもので、その下を横位半隆起線爪形文と半隆起線文、そしてその下を縦位半隆起線文を引き並べるものである。基本的に7・8も同様の文様構成と思われるもので、縦位半隆起線文の下に横位半隆起線文が引かれている。

5は口縁部に爪形文隆帯をもつ平口縁のもので、その下には横位半隆起線文が巡る。

6は欠損するため、判別が難しいが、横位楔形無文帯をもつものと推察され、その下には半隆起線爪形文、そしてその下に蓮華状文が施されるものである。

11は半隆起線文で区画された中に斜線文か斜格子目状文を充填させるものである。



第12図 縄文時代の土器 (1~3は31号土坑、他は包含層出土、S=1/3)

以上の土器群は縄文中期前葉に位置付けられる土器群であり、前回報告している念仏林南B遺跡（『念仏林南遺跡I』）とはほぼ同時期に位置付けられるものである。編年的には6のような新崎式の範疇に入るものも一部あるが、大半は3・5・7・8のような、それよりもやや遡る徳前C式や中平式に位置付けられるものであり、新保式から新崎式への過渡の様相の土器群である。

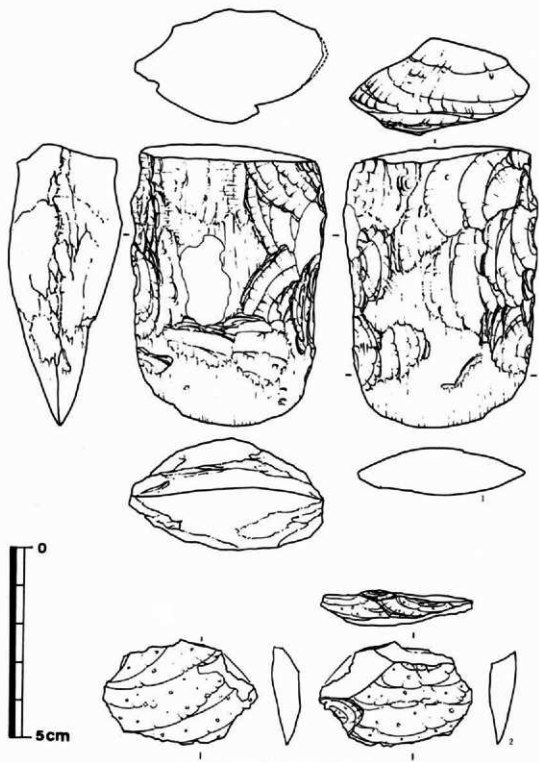
さて、これらの土器の胎土を観察すると、4つに分類可能である。まず、A類であるが、細かな砂粒を多く含むもので、雲母や角閃石も含み、質感はややサラサラしている。図示したものは9・10のみであるが、縄文のみの破片に多く、77/172を占める。B類はA類同様細かな砂粒を含むものだが、A類ほど多くはなく、代わりに1～2mmの流紋岩系砂粒を多量含み、雲母を目立って含むものである。質感はA類に類似し、縄文のみの破片のみであるが、30/172を占める。C類も細かな砂粒を含むものであるが、その量は極少なく、全体的に粘土質を帯びるものである。土器粒のような軟質の粘土粒を含み、角閃石を少量含む。量は30/172で、1・2・4～6が該当し、有文土器で目立つ存在である。D類は砂粒が目立たない粘土質のもので、比較的C類に類似した胎土と言えるが、角閃石を含まない点と赤褐色の粘土粒を目立って含む点で異なる。これについても有文土器で目立つ胎土であり、3・7・8が該当、35/172を占める。つまり、以上の4つの胎土は、A・Bの微砂粒を含む胎土とC・Dの粘土質の胎土に大別できそうであり、それらが、前者は粗製土器に、後者は有文土器に偏る傾向が見られる。有文土器と粗製土器とに機能分化があったと言いが、文様に凝るものは粘土質系のを、そうでない粗製のものは砂粒を多く入れるものを使い分ける傾向は、機能による胎土選択の可能性もあり、興味深い。この問題については、蛍光X線分析の分析結果と照合させてから、考察で再度述べてみたい。（以上 望月）

2. 石器

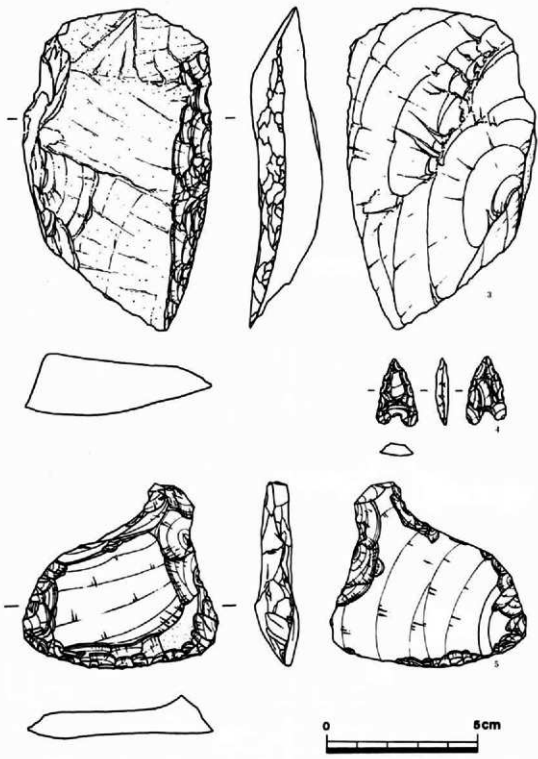
(1) 旧石器時代の石器（第13図）

1は、刃部磨製石斧で、旧石器時代終末期ないし縄文時代草創期に属するものと考えられる。短冊形の刃部削半欠品で、両面研磨を受けている刃部は、やや薄型で整った断面凸レンズを成すが、身部では急激に厚さを増し、表裏の区別可能な断面三角形状となる。この身部断面は、一応当該期の特徴を備えた形態といえる。ただ、表面の刃部は、研磨に先行して、刃先の方から平坦な剥離を施して断面を扁平化させているため、刃先に限って言えば、身部の表裏とは逆の印象を受ける。刃部作出のための研磨は、円刃を成す範囲の両面で入念に施し、現存長の約1/2の範囲にまでは、剥離稜線の高まり部に研磨が及ぶ。折損部に近い上1/3の範囲では、左側縁部の表面と右側縁部の裏面という錯交する位置、さらに表面の中央峰部の各部に摩擦がみられる。この部分には、僅かに横方向の条痕が観察されるため、刃部研磨とは別の着装に係わる摩擦痕の可能性もある。現存長7.4cm、幅5.2cm、厚さ2.9cm、重さ115.9gを計る。石材は、安山岩と考えられる。

2は、横長剥片で、旧石器時代所産のものによくみられる、多孔質に強く風化した輝石安山岩であるため抽出した。風化が激しく、また、小剥片であるため、剥離面の観察は難しいが、打面



第13图 旧石器时代石器实测图 (S=1/1)



第14图 縄文時代石器実測図 (S=4/5)

と主要剥離面の関係や、腹面の状態等から、北陸における瀬戸内系石器群に帰属する可能性を想定した。長さ2.8cm、幅4.0cm、厚さ0.75cm、重さ7.5gを計る。

(2) 縄文時代の石器 (第14・15図)

石鏃 (4) 弥生時代のものととの区別は必ずしも明確ではないが、主として周辺遺跡に見られる縄文石鏃の使用石材を考慮して分離した結果、1点のみの抽出となった。えぐりはやや深いが、挟入剥離は単純で、胸への調整も少なく、脚端は丸みをもつ。

削器 (3) 横長の大型剥片の末端縁に長い刃部を作出している。刃部平面観は弱い弧を成し、側面観も、素材剥片の属性により弓形である。刃部の角度は各部約55度前後を維持している。

石匙 (5) やや大型の横型石匙で、つまみを片方に寄せ、対角の刃部を尖頭とするタイプ。この尖頭部が素材剥片の打面位置にあたり、バルブ補正のための裏面調整がみられる。刃部の角度は、尖頭部周囲の両面調整部で60~70度、片面調整部では、50~60度である。

打製石斧 (6) 比較的小型かつ薄型で、刃部側片と考えられる。左右非対称であり、また、縁辺調整も雑である。斜めに折損したものとすれば、撥形にも復元は可能である。

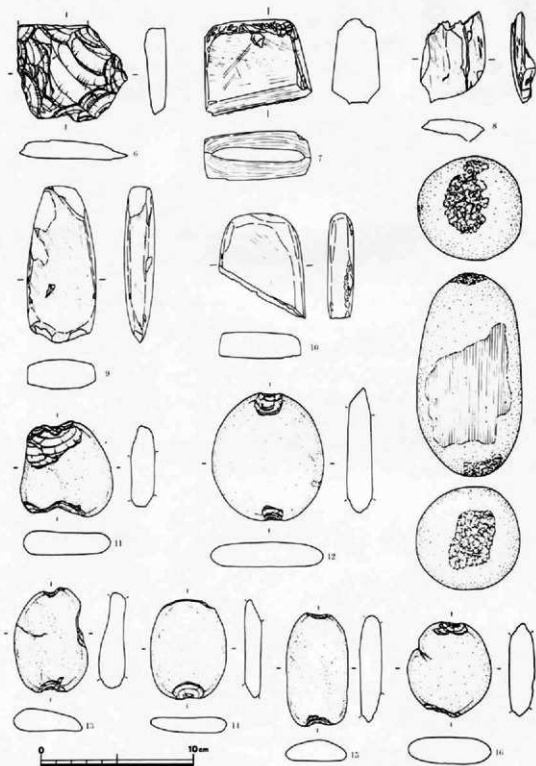
磨製石斧 (7~10) 全形を留めるのは9のみである。全て定角式で、刃部は円刃となる。不思議なのは8で、大型定角式の頭部にあたる形態であるが、両面からV字の切り込みを入れたもので、切り込み面は、表面の研磨と同様の美しい研磨がなされている。幅も減じるよう、左右両端では表裏の溝をつなげており、折るための擦り切りではないことは確かである。

石錘 (11~16) 全て打欠石錘である。12のみやや大型で、他は、ほぼ同様の法量を示す。

敲石 (17) 大型の長円礫を利用したもので、両端に、垂直方向主体の顕著な敲打痕を有する。一側面には弱い磨面もみられる。大きさと敲打方向から、石器製作以外の加工用途に使用されたものと考えられる。

番号	器種	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	石材	出土地点	備考
3	削器	10.5	6.2	2.0	136.9	流紋岩	3次き22Gr	
4	石鏃	2.2	1.4	0.4	1.0	輝石安山岩	2次表探	
5	石匙	6.0	6.4	1.2	41.8	流紋岩	3次く25Gr	横形石匙
6	打製石斧	(6.4)	7.2	1.4	(71.5)	凝灰岩	3次え11Gr	撥形?基部欠
7	磨製石斧?	(6.0)	7.0	3.2	(253.5)	蛇紋岩	3次表土	
8	磨製石斧	(6.0)	(4.3)	(1.5)	(37.5)	蛇紋岩	3次お13Gr	定角式、円刃、刃部片
9	磨製石斧	10.3	4.5	2.0	164.1	蛇紋岩	3次28土坑122	定角式、円刃
10	磨製石斧	(7.0)	(5.8)	(1.7)	(111.6)	砂岩	3次21住338	定角式、基部片
11	石錘	6.3	6.0	1.6	67.2	片麻岩	3次き26・27Gr	打欠石錘
12	石錘	8.4	7.4	1.7	137.2	石英隕岩	3次う3Gr下層	*
13	石錘	6.9	4.9	1.7	63.5	石英安山岩	3次き24Gr	*
14	石錘	6.5	5.0	1.1	52.3	石英隕岩	3次か4Gr表土	*
15	石錘	7.4	4.0	1.4	51.7	凝灰岩	3次き25Gr	*
16	石錘	6.2	5.5	1.7	74.5	角閃安山岩	3次き25Gr	*
17	敲石	13.4	6.9	6.8	851.9	石英安山岩	3次27住210	両端敲打、磨面有

(以上 櫻田)



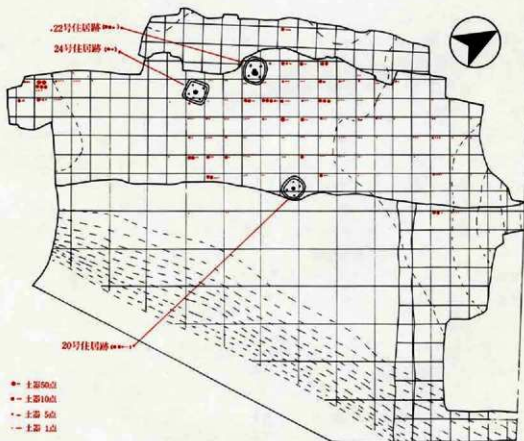
第15图 縄文时代石器实测图 (S=2/5)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

第1項 遺構

弥生時代後期から一部古墳時代前期まで下るものも含んでいるが、ここでは一括して取り上げることとする。遺構としては20号竪穴住居跡と22号竪穴住居跡、24号竪穴住居跡が該当し、20号・22号竪穴住居跡は弥生時代後期、24号竪穴住居跡は古墳時代前期に位置付けられる。他にこれら住居に関連するような付属遺構は確認できず、3軒の竪穴住居跡のみである。遺物は数点の土玉状の土錘と石錘がある以外は、土器であり、住居跡、包含層出土の土器分布状況は第16図のとおりとなる。出土量は概して少なく、当該時期よりも遺構数の少ない古墳時代中期の土器よりも全体量は確実に少ない。

さて、土器の分布状況であるが、竪穴住居跡の位置する台地の中央付近、3軒の竪穴住居跡が形成する空間に多く見られ、その後ろ側、20号住居跡の東側や22・24号住居跡の西側には分布は拡がらず、その間のみでまとまる。南北への分布域の拡がりは、北へはやや延びているが、南側へは延びず、24号住居跡付近で途切れている。また、もう一か所、古墳時代中期の竪穴住居跡で



第16図 弥生時代の遺構分布と遺物分布 (S=1/1,000)

ある27号住居跡付近にも集中区域があり、ややまとまって土器が出土している。竪穴住居跡区域とはその間に空白区域があるため、別の集中区域と考えれば、南西側の調査区域外に当該時期の遺構が存在する可能性をもつ。

1. 20号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域い12・13、あ13Grで検出された竪穴住居跡で、台地の中央部に存在する。主軸は北から西へ31度振る。

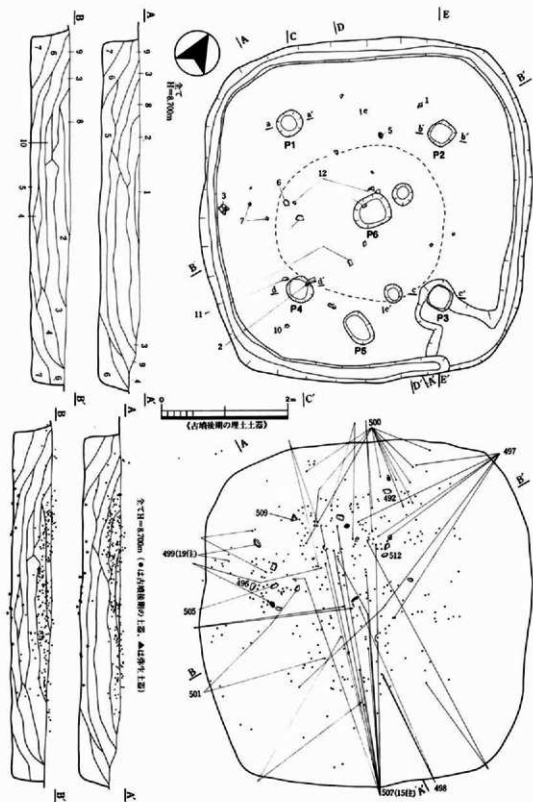
(規模と形態) 規模は南北540cm、東西520cmを測るやや胴張りの隅丸方形プランを呈するもので、床面積は約27㎡を測る。この住居は深く、だいたい50～60cm程度の深さで、壁はほぼ直立して立ち上がる。壁の直ぐ下には壁溝が巡るが、南東側のコーナーでは主柱穴のP3に繋がるように広がっている。壁溝の深さは10～20cm、幅は上端で20～28cm程度を測る。

(柱穴その他のピット) 主柱穴はP1～P4の4本で、P1・P4は上端で円形プランを呈すが、下端は方形のプランを呈し、P2・P3は上端から方形のプランを呈す。径は上端で40cm前後、深さは80～90cmを測る。壁から120～140cm程度のところに掘られており、主柱穴間を結ぶと南北260cm、東西240cmを測る。主柱穴覆土は上層から下層まで黄土塊を多量混在する暗黄褐色土で、上層は硬質、中層は軟質、下層はやや砂質を帯びる。柱と柱穴掘り方の太さがあまり変わらないものであり、覆土はいずれも抜き取り後の埋め戻し土であると考えられる。この4本の主柱穴以外にも南東側主軸上の壁よりに楕円形状のピットが1本掘られているが、深さ15cm程度の浅いものであり、主柱穴と同様に扱えるものではない。付属的な柱穴や入り口の施設に伴うものと予想される。

(炉穴) 炉と断定できるような焼床面は確認できないが、住居のほぼ中央には、焼土塊を混在する黒褐色土の浅いすり鉢状の落ち込みがあり、それを炉穴とすることもできる。しかし、この下には50×60cmの隅丸形状の、深さ55cmのピットが存在しており、形態や位置から見れば、特殊ピットと呼ばれているものに類似する。このピットは炭化粒を含有する暗黄褐色土を40cm程度埋めてから、すり鉢状の焼土塊・炭化粒を含む黒褐色土が堆積しているようで、この黒褐色土のすり鉢プランは、90cm×100cm程度の楕円形を呈す。特殊ピットと呼ばれるものに該当することは間違いないが、どのような性格のものであるかは判断し難い。なお、このすり鉢状の黒褐色土の落ち込みは、この周辺の主柱穴で囲まれた部分の貼り床を切って掘り込まれている。

(床面状況) 床面はフラットで、高低、起伏は認められない。さて、炉穴の項目でも述べたように、主柱穴に囲まれた部分には120×130cm程度の範囲で5cm程度一段下がった部分がある。ここには黄土粒を含む硬質の黒褐色土があり、すり鉢状落ち込みに切られていることから、貼り床の掘り方部分と予想される。貼り床はこの部分のみで、この周縁では、地山のままの床である。

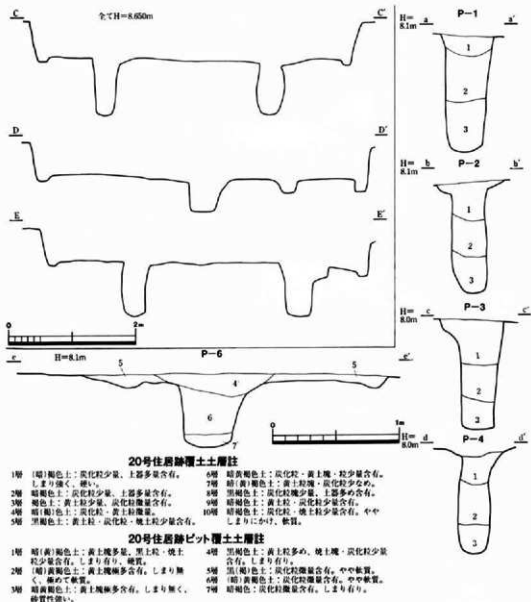
(床面遺物の出土状況) 当該時期の土器は床面直上からのみ出土しており、埋土中に混在することはほとんどない。さて、床面出土の土器であるが、比較的図化できており、それは遺物の項



第17図 20号住居跡平面図(土層は下層土層のみ)及び覆土上層遺物ドットマップ(全て古墳後期) (S=1/60)

で述べる。接合する資料は少なく、11の高坏のみ4点（もう1点は埋土下層の土器）と接合する程度である。土器出土状況から、いずれの土器も住居廃絶かその直後に伴う可能性が高く、住居の廃絶時期を反映する土器群と予想される。

（覆土堆積と埋没・混入土器群の状況） 床面出土遺物でも述べたように、当住居に伴う土器は床面直上（やや覆土下層も含む）からの出土のもので、ほぼ5・6・7層に限られる。6・7層は最初に堆積する土層で、壁際の周辺流れ込みや住居に伴う土の可能性をもつ暗黄褐色土である。これが堆積した後、5層が溜まるわけであるが、炭化粒や焼土粒などを含む黒褐色土であり、床面の状況を反映した土層となっている。この層以後堆積する土層は、暗褐色系の土層が主であり、



第18図 20号住居跡エレベーション図・ピット断面図（上：S1/60、下：S=1/30）

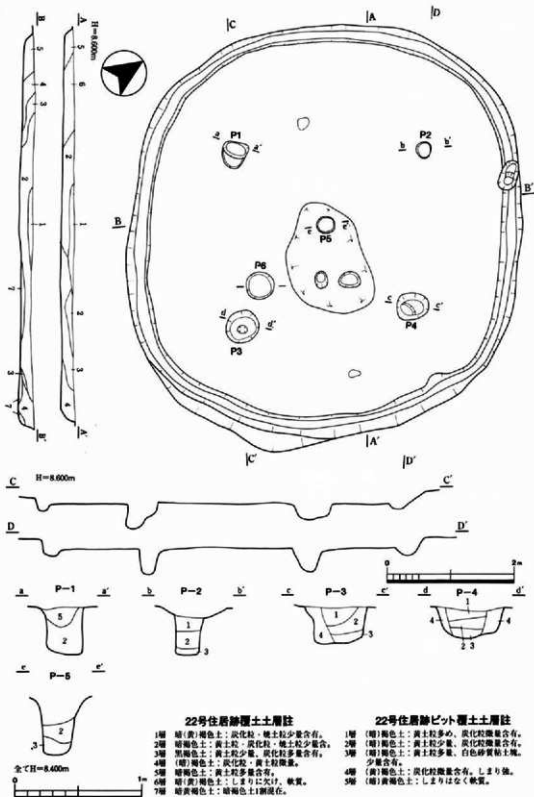
当該時期の土器は皆無に近く、代わって、古墳時代後期の土器が混在してくる。ただ、3層まではその混在は極少なく、明瞭に上層の1・2・8層とは出土量が異なる。3層までの土層も土器が混在することから、古墳時代後期に堆積したものとも考えられるが、出土量の違いは、明瞭であり、上層からの混在と考え、古墳時代後期の堆積土層は上層の1・2・8層のみと理解したい。さて、この上層出土の土器は、古墳時代後期のものに限られ、出土量も通常の古墳時代後期の竪穴住居跡埋土からのものに匹敵する量である。遺構内で多く接合しており、周辺の古墳時代後期の竪穴住居跡出土土器とも多く接合関係をもっている。図示できたものは、特に須恵器で、土師器については点数は多いが、大半が破片で、接合資料は少ない。土層堆積を見ると、後世に土坑を掘り直したような痕跡はなく、通常の堆積状況であるため、当住居の掘り込みが深かったため、窪地残存であったものと予想され、廃棄土坑的に使用されたものと思われる。

2. 22号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域く15Grに存在する竪穴住居跡で、台地の中央からやや西側に立地する。主軸は北から西へ58度振り、グリッドに沿った向きを採る。

(規模と形態) 規模は長軸が660cm、短軸が615cmを測るやや楕円形に近い、調張り隅丸方形プランを呈するもので、床面積は約35㎡を測る。この住居は20号住居とは対照的に浅いもので、深さはだいたい20cm程度で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。この住居でも壁には壁溝が巡るが、20号住居のように途切れるようなことはなく、同じ太さで全周し、深さ5～10cm、幅は上端で30cm程度を測る。

(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1～P4の4本で、P1とP2は径25～30cm、P3とP4は径50cm程度を測り、深さは前者が80cm程度、後者が50cm程度を測る。これは、前方と後方の柱穴が異なるものであるが、後方の柱穴覆土を見ると、掘り方が大きいだけで、柱痕は径30～40cm程度であり、4本とも柱の太さに違いはなく、柱穴の掘り方と柱の建て方に違いがあるものである。当該時期の竪穴住居跡としては概して柱穴の深さが浅く、位置についてもきっちりとした方形を形成しておらず、ややずれて、特にP2の位置が北側にずれている。柱穴の位置は、壁からだいたい150～170cmのところ掘られており、主柱穴間を結ぶとP2を除外すれば、長軸290cm、短軸270cmを測る。柱穴覆土は上層から下層まで褐色味の強い暗褐色土で、黄土粒が多く混在するものである。この4本の主柱穴以外では、住居中央にピットが存在している。このピットは径25cmの円形で、深さ45cmを測るしっかりしたものである。覆土は主柱穴と同様の土で、この周辺がやや楕円形状にくぼんでいる。20号住居で見られた住居中央のピットに類するものではあるが、覆土が柱穴のものとはほぼ同様であることは大きく異なる。20号住居でも述べたように、特殊ピットと呼ばれているものに類似するが、明瞭な2段掘りの形態をもっていないことや、通常の柱穴と同様の太さ、深さをもつ点で、同様に扱ってよいものか判断しかねる。また、住居南側のP3近くに円形のピットがあるが、主柱穴よりもやや浅いものであり、性格は不明である。



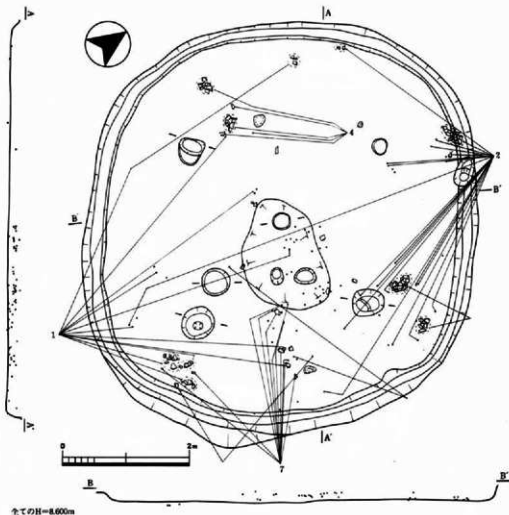
第19図 22号住居跡平面・断面図及びピット断面図 (上：S=1/60,下：S=1/30)

(炉穴) 床面で炉のような焼土の集中や被熱痕跡は確認できず、炉の存在自体不明である。

(床面状況) 床面はフラットで、高低、起伏は認められない。床面は貼り床状のものは確認できず、地山をそのまま床に使っていたようである。主柱穴に囲まれた部分でやや硬質の床を確認している。

(覆土堆積状況) 壁際から順に堆積したレンズ状堆積を示すもので、これと言った特殊な堆積を示す状況は確認できない。基本的に炭化粒・焼土粒を含有する暗褐色系の土である。

(遺物の出土状況) 遺物出土状況図に示したように、比較的まとまった土器が住居内から出土しているが、床に貼り付いたような出土をするものではなく、僅かではあるが、床面との間に間層を挟む。ただし、極床に近い層での出土であり、住居廃絶まもない時期のものと思される。また、当住居においても古墳時代後期の土器が混在するが、上層出土のものであり、出土量は極少ない。20号住居のような窪みが残ったという感じはなく、周辺包含層からの混在品と考える。



第20図 22号住居跡遺物出土状況図 (S=1/60)

3. 24号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域き18Gr周辺に位置する竪穴住居跡で、台地のやや南西寄りに立地する。古墳時代後期の25号住居跡に切られて存在しているが、25号住居跡よりも深く掘られていたため、床面は完存している。主軸は北から西へ46度振る。

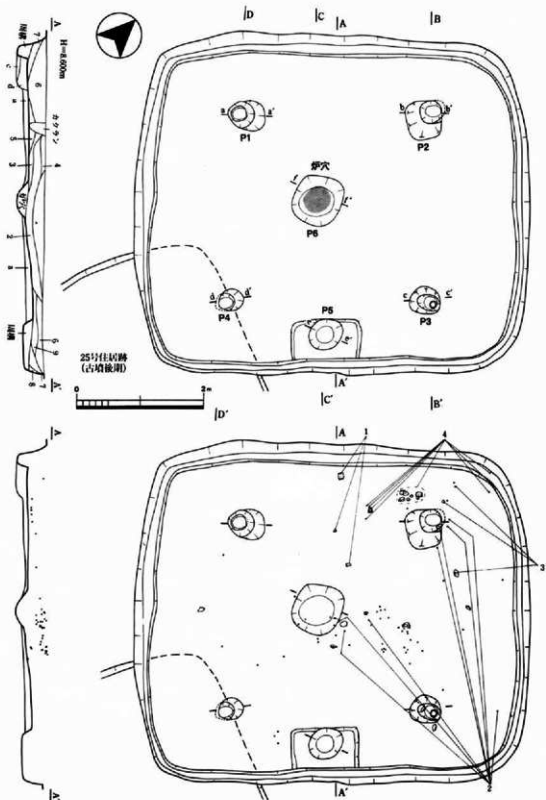
(規模と形態) 規模は長軸625cm、短軸535cmを測る横に長い隅丸長方形プランを呈するもので、弥生時代後期のものに比べて胴の張りがなく、方形に近くなっている。床面積は約32㎡を測る。深さは25～30cm程度で、壁はやや外傾気味に立ち上がる。壁の直ぐ下には全周する壁溝が走り、壁溝の深さは5～15cm、幅は上端で20～25cm程度を測る。

(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1～P4の4本で、いずれも径25cm前後、深さ75cm程度を測るほぼ円形を呈す。ただ、床面近くでは浅い窪み状に住居中央に向かって広がっており、上端規模で見ると50cm程度の楕円形となる。壁からの間隔は、長軸の壁から140cm、短軸の壁から110cmと短軸では壁寄りに柱があり、主柱穴間を結ぶと長軸で320cm、短軸で300cmと、竪穴のプランよりも正方形に近づいている。主柱穴覆土は上層から下層まで黄土塊混じりの暗褐色土で、しまりなく軟質の土層を呈している。20号住居の柱穴と共通する、柱と柱穴掘り方の太さがあまり変わらない形態であり、覆土はいずれも抜き取り後の埋め戻し土であると考えられる。この4本の主柱穴以外にも南東側主軸上の壁寄りに円形のピットが掘られているが、深さ40cmを測るしっかりした掘り方のもので、その外周には110×60cmの浅い土坑が掘られ、壁溝と連続している。所謂2段掘り形態をもつ特殊ピットであり、特に変わった遺物の出土などはないが、覆土下層には主柱穴とは異なる黒褐色土層が存在している。

(炉穴) 掘り方を伴う炉穴ピットで、ほぼ住居の中央に設けられている。ピットの規模は70～80cm程度の略円形で、深さは25cm程度。底面の平坦なしっかりした掘り込みのものである。覆土は炭化粒・焼土粒を微量混在させる、しまりのある暗黄褐色土で、上面の7cm厚のみ被熱している。被熱範囲は炉穴ピット中央の40cm程度の範囲で、上面から厚さ2cmは硬質にガリガリに焼けている。掘り方ピットは炉の地下式構造的な意味合いで掘られたものであると考えられるが、湿気防止のような役割を果たし得るかはやや疑問である。

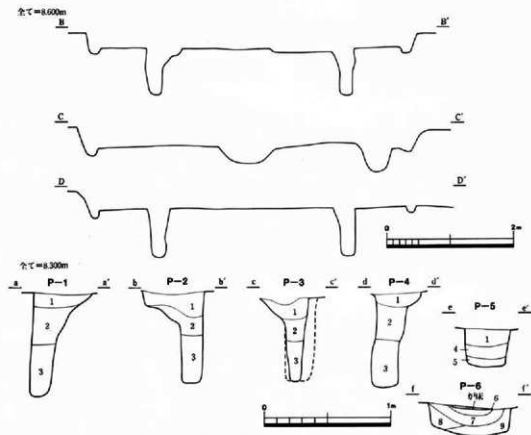
(床面状況) 床面は住居中央付近と南西側コーナー付近で周辺よりもやや下がる傾向があるが、強い高低差はなく、ほぼフラットである。さて、弥生時代後期の住居跡には全面で貼り床が確認された例はなく、20号住居跡で中央付近の一部のみに確認された程度であるが、当住居では古墳時代後期の住居跡と同様に、ほぼ全面で貼り床が確認されている。土層は暗褐色土中に黄土硬塊が多量混在する硬質の土で、古墳時代後期のものに類似する。

(覆土堆積と遺物出土状況) 当住居の土層断面図を見れば分かるように、住居中央には当住居が埋没した後に掘り込まれた浅い土坑状の切り合いが確認でき(1・2・4層)、ここから古墳時代後期の土器が出土している。遺物断面ドットの中央上層付近の集中は、この時期のものであり、20号住居のように大量の遺物ではないが、定量廃棄されている。古い住居の陥没を利用した



第21図 24号住居跡平面図及び遺物ドットマップ (S=1/60)

廃棄土坑の掘り直しであり、他の廃棄土坑と同様の性格をもつものと理解する。この古墳時代後期の土層以外は、当該時期の埋没土層であり、ほんの上層で古墳時代後期の遺物が混在する以外は、古墳時代前期の土器である。土器は概して床面近くから出土しているが、床面よりもやや浮いて出土するものばかりで、住居廃絶後に廃棄されたものである。出土量はさほど多くはなく、住居内接合も少ない。包含層からの遺物もこの住居の時期のものは少なく、分布図で示した大半は弥生時代後期のものである。(望月精司)



24号住居跡覆土層註

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1層 暗(黄)褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。硬質。 | 5層 黄褐色土：暗褐色土混在。やや軟質。 |
| 2層 黒褐色土：黒土少量、炭化粒少量含有。やや軟質。 | 6層 暗褐色土：黄土粒少量含有。やや軟質。 |
| 3層 暗褐色土：黄土粒・炭多量、炭化粒少量含有。やや軟質。 | 7層 黒褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。軟質。 |
| 4層 暗(黄)褐色土：黄土粒少量含有。やや硬質。 | 8層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有。軟質。 |
| | 9層 暗(黄)褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。やや軟質。 |

24号住居跡貼り床下土層註

- | | |
|---|-----------------------------|
| 1層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量、炭化粒少量含有。硬質。しまり有り。貼り床土。 | 1層 暗褐色土：黄土粒・炭土粒・炭化粒多量含有。硬質。 |
| | 2層 暗(黄)褐色土：暗褐色土少量含有。やや軟質。 |

24号住居跡ビット覆土層註

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1層 暗褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。 | 6層 暗赤褐色土：黄土多量含有。硬質穴上。 |
| 2層 暗(黄)褐色土：黄土粒・炭多量含有。やや軟質。 | 7層 暗(黄)褐色土：炭化粒・焼土粒微量含有。しまり有。 |
| 3層 暗(黄)褐色土：黄土粒・炭多量含有。しまり無。 | 8層 暗黄褐色土：炭化粒・焼土粒微量含有。しまり有。 |
| 4層 暗褐色土：黄土粒少量含有。やや軟質。 | 9層 暗黄(黄)褐色土：炭化塊少量含有。しまり有。 |
| 5層 暗黄褐色土：炭化粒微量含有。やや軟質。 | |

第22図 24号住居跡エレベーション図：ビット断面図(上：S=1/60,下S=1/30)

第2項 遺物

当該期の遺物のうち、土器は、出土したものを全てをあわせると破片数にして約1,000点あり、器種には、甕、壺、高坏、器台、鉢、蓋、土鍬がある。個体数にすると下表の通りである。遺物包含層のものについては、体部の破片等で他の破片と同一個体が否か判別し難いものが多く、個体数にすることは避ける。個体数の換算方法は、破片全てを対象として、筆者の主観で破片を個体ごとに分け、その分けたものを残存部分の大小に関係なく全て1個体として数えた。土器以外では石器が3点出土した。遺物の時期は弥生時代後期（法仏式期）と古墳時代前期（古府クルビ式期）とがある。なお当該期の土器の胎土は、A：砂質の素地、B：普通の粘土質の素地、C：緻密な粘土質の素地、D：粘土質の素地に細かい砂粒を多く含む、の4種類に分けられる。また胎土中に、白く光る粒子、黒く光る粒子を含むものがある。本項末の胎土表の中にある「胎土」、「光る粒子」はこれらを指す。

出土土器個体数構成表

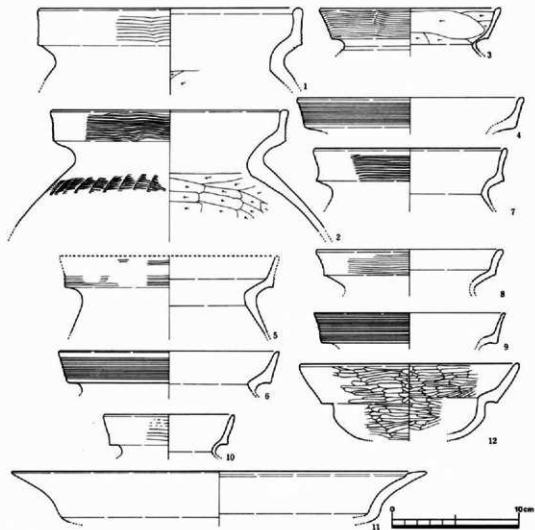
竪穴住居跡	甕	壺	高坏	器台	鉢	器種不明	計
20号	16(9) 66.6%	1(1) 4.2%	4(1) 16.7%	0(0) 0%	1(1) 4.2%	2(0) 8.3%	24(12) 100%
22号	18(5) 85.6%	1(1) 4.8%	0(0) 0%	0(0) 0%	1(1) 4.8%	1(0) 4.8%	21(7) 100%
24号	1(0) 8.3%	1(1) 8.3%	5(2) 41.7%	5(3) 41.7%	0(0) 0%	0(0) 0%	12(6) 100%

左段：個体数（ ）内の数字は実測個体数。 右段：各竪穴住居跡内における構成比率。

1 20号竪穴住居跡出土遺物（第23圖）

甕（1～9） 1・2は有段口縁をもち口縁帯に擬凹線を施す甕（以下「有段口縁擬凹線甕」という。）で口縁部が直立する。端部は丸い。内面は頸部の屈曲部分からやや下がったところより下をへら削りする。つくりは重厚な感じを受ける。1は口縁部外面にススが付着。2は、肩部外面に9条のハケ状具による連続斜行刻みがあるが、口縁帯の擬凹線で9条のハケ状具を使った痕跡があり、ハケ目の幅もほぼ同じであることから口縁帯の擬凹線と同じハケ状具を使ったと思われる。胴の張り是比较的強い。内外面にススの付着はなく煮炊具に使われていなかった感じがする。3～6は有段口縁擬凹線甕で口縁部がまっすぐ外傾する。端部は丸い。3は、体部の残存部分が少なく図化できないが、頸部の屈曲部分より下の内面がへら削りされ、口縁部内面もへら削りされている。口縁部外面にはススが付着し黒斑もある。また頸部外面には2条の稜線がある。5は、図化できないが頸部の屈曲部分からやや下がったところより下の内面がへら削りされている。7～9は有段口縁擬凹線甕で口縁部が外反する。端部は丸い。7は、図化できないが頸部の屈曲部分より下の内面がへら削りされている。外面にはススが少量付着している。

壺（10） 10は有段口縁をもち口縁帯に擬凹線を施す小型の壺。口縁部はまっすぐ外傾し、端部



第23図 20号竪穴住居跡出土土器 (S=1/3)

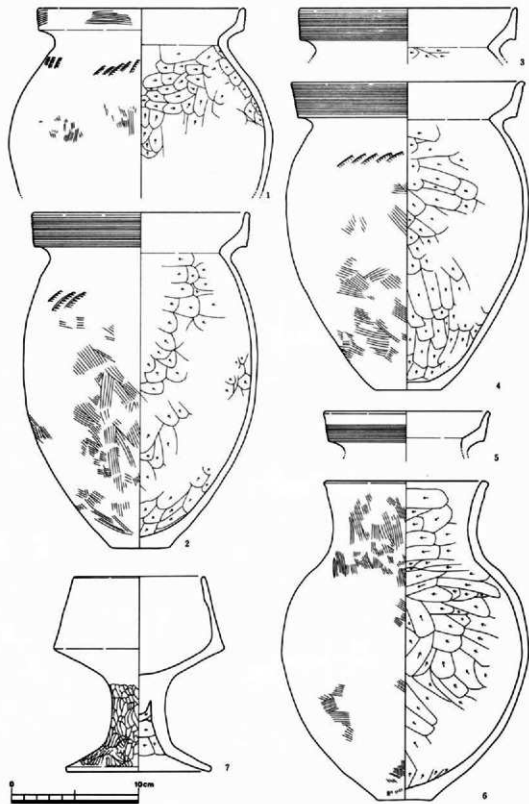
は自然におさめている。

高坏 (11) 11は、底部で屈曲し外傾・外反しながら立ち上がる有段の坏部で、口縁部内面は段をもって肥厚、上端はほぼ水平に面が取られ、端部はやや先細りする。調整は剥落激しく不明。

鉢 (12) 12は有段口縁をもつ鉢。内外全面が入念にヘラ磨きされている。

2. 22号竪穴住居跡出土遺物 (第24圖)

甕 (1~5) 1~3は有段口縁擬凹縁甕で口縁部が直立する。端部は丸い。1は、頸部の屈曲部分からわずかに下がったところより下の内面がヘラ削りされ、胴部外面にはかすかにハケ調整の跡が認められる。口縁部の幅は狭く擬凹縁は4条。また胴部外面には6条のハケ状具による連続斜行刻みがある。全体的なプロポーションは球形。口縁・体部外面にススが附着している。

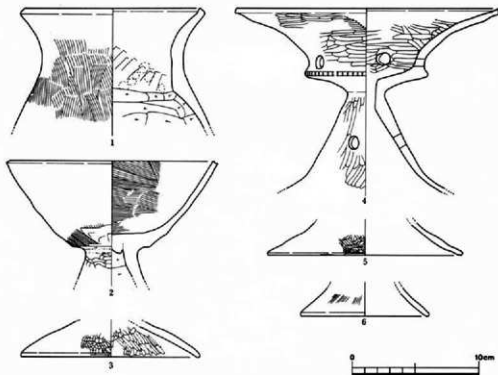


第24图 22号竖穴式住居跡出土土器 (S=1/3)

2は、頸部の屈曲部分より下の内面がヘラ削りされ、外面は、肩部に8～9条のハケ状具による連続斜行刻みがあり、その連続斜行刻みより下がハケ調整される。全体的なプロポーシオンは比較的胴長。体部外面にはススが附着。3は頸部の屈曲部分より下の内面がヘラ削りされている。4は有段口縁擬凹線帯で口縁部がまっすぐ外傾する。端部は丸い。頸部の屈曲部分より下の内面がヘラ削りされる。外面は、肩部に7条のハケ状具による連続斜行刻みがあり、その連続斜行刻みより下の部分がハケ調整されている。全体的なプロポーシオンは倒卵形で胴部の上約1/3のところを最大径がおかれる。体部外面にススが附着し特に中位が顕著。5は有段口縁擬凹線帯で口縁部が外反し擬凹線帯が口縁帯下半のみにある。端部はほぼ丸い。口縁部外面にススが附着。壺(6)6は口頸部が外反し、頸部から肩部への移行がややなだらかに作られた短頸長胴壺。口縁端部は丸い。内面は口縁部から底部までヘラ削りされる。外面は、全てハケ調整されているが、口縁端部付近ではハケ目が横ナデで消されている。底部に5cm大の黒斑が1つある。台付無頸壺(7)7は、底部で屈曲し内傾しながらまっすぐ立ち上がる体部をもち、支柱はやや下方に広がり強く外反して裾部に至る。口縁端部付近は内側へやや肥厚しており、脚部は内面がヘラ削り、外面がヘラ磨きされている。

3. 24号壑穴住居跡出土遺物 (第25図)

壺(1)1は外反する口頸部をもち、頸部から肩部にかけてなだらかに移行する短頸長胴壺。口縁端部は斜めに面を取り内側に少し突出する。頸部内面は指頭圧痕上をヘラナデし、体部内面



第25図 24号壑穴住居跡出土土器 (S=1/3)

はヘラ削りされている。外面は、ハケ調整されているが、口縁部ではハケ調整後横ナデされている。また胴部は残存していないが、あまり張らないようである。

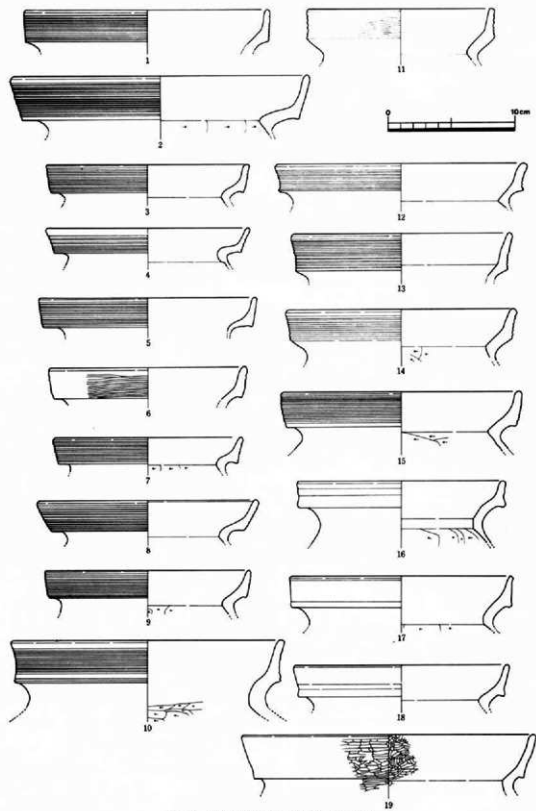
高坏（2・3）2は碗型の坏部とハの字状に開く脚部をもつ東海系の高坏。坏部外面下半ではハケ目上をヘラナデしている。上半においてもハケ目をナデ消した跡が認められる。なお内面はハケ調整されている。また口縁端部の面に凹線が1条ある。坏底部外面はヘラ削りされ、底部の立ち上がり部分が段になっている。脚部は、外面がヘラ磨き、内面がヘラ削りされている。坏部内外面と脚部外面には黒斑がある。3の脚部は、棒状の支柱が付く無段脚の高坏の脚部と推定される。やや内湾気味にハの字状に開き、端部は丸い。内外面ヘラ磨きされている。

器台（4～6）4は、底部と体部との境が外に突出し、そこから外反して開く受部とハの字状に開く脚部をもつ、古府クルビ式期に見られる器台。底部と体部との境の突出部に縦方向の刻みが並び、円形の透穴が受部（5個）と脚部（数不明）にある。口縁端部は面が取られている。また受部の底部外面と脚部の内面以外はヘラ磨きされている。受部内外面と脚部外面に黒斑が認められる。5・6はハの字状に開く器台の脚部と思われる。端部は丸い。5は裾部内外面に黒斑がある。6は外面に1単位5条のハケ目が縦に引かれている。

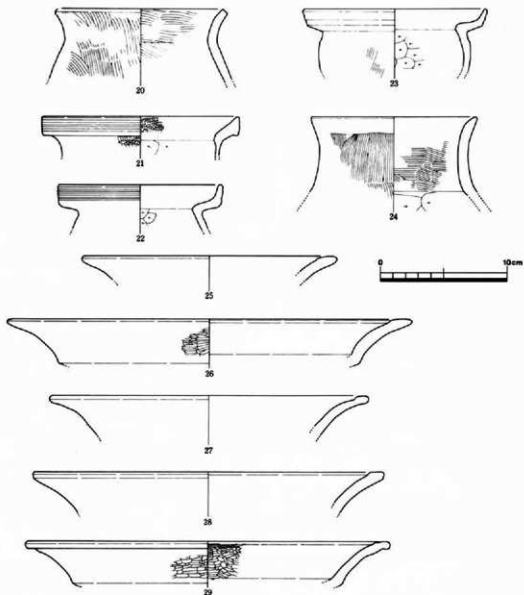
4. 遺物包含層出土遺物（第26～29図）

甕（1～20）1は有段口縁擬凹線甕で口縁部が直立し、端部は丸い。外面にススが微量付着。2～9は有段口縁擬凹線甕で口縁部がまっすぐ外傾する。端部は丸い。2・3・7・8・9の内面は頸部の屈曲部分より下がヘラ削りされている。また4の内面は頸部の屈曲部分より若干下がったところより下がヘラ削りされている。4・8は外面にススが付着し、7も口縁部内面と頸部外面にススが付着している。10～14は有段口縁擬凹線甕で口縁部が外反する。端部は丸い。10・11・12・14の内面は頸部の屈曲部分から下がヘラ削りされている。また11・13・14は外面にススが付着している。15は有段口縁擬凹線甕で口縁部が内湾する。端部は丸い。内面は頸部の屈曲部分より下がヘラ削りされている。16～19は有段口縁をもち口縁帯に擬凹線がないもの。端部は丸い。16は口縁部が直立し口縁帯下端が外下方に突出、口縁帯に2条の沈線がある。頸部内面は垂直に面が取られ、その面より下はヘラ削りされている。17は口縁部が直立し口縁帯外面の上端付近と下端付近は段をもって肥厚する。内面は頸部の屈曲部分から若干下がったところより下がヘラ削りされている。18は口縁部がまっすぐ外傾し口縁帯下端が外下方に突出する。19は口縁部が内湾し内外面がヘラ磨きされている。20はくの字口縁で端部は面が取られている。内外面はハケ調整され、内面の調整は体部→口縁部の順に行なわれている。口縁部内外面にススが少量付着。19・20は壺ともいえようが、19は口径が大きいことより、20はススの付着により、甕とした。

壺（21～24）21は断面三角形の口縁部をもち、口縁帯に擬凹線を施す広口壺。内面は、口縁部がヘラ磨き、頸部の屈曲部分より下がヘラ削りされている。外面は頸部がヘラ磨きされている。22は有段口縁をもち口縁帯に擬凹線が施されている。口縁部は直立し端部は丸い。内面は頸部の屈曲部分より下がヘラ削りされている。23は有段口縁をもち口縁帯に擬凹線が施されないもの。口



第26图 遺物包含層出土土器(1) (S=1/3)



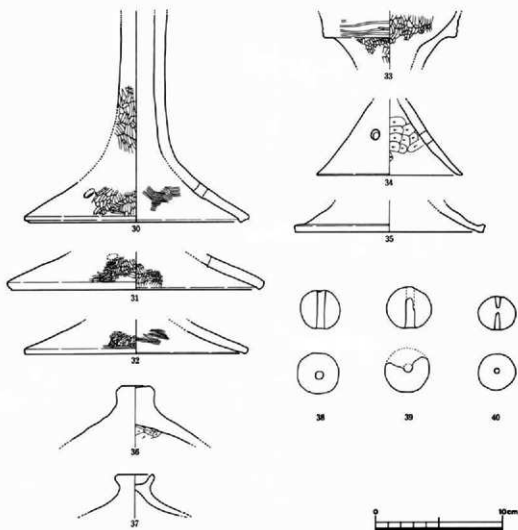
第27図 遺物包含層出土土器(2) (S=1/3)

縁部はまっすぐ外傾し口縁帯に1条の稜線がある。内面は頸部の屈曲部分より下がヘラ削りされ、外面は体部にハケ調整の跡がある。24は口頸部が外反し、頸部から肩部にかけてなだらかに移行する短頸壺。口頸部内面は横方向のハケ調整がなされ、体部内面はヘラ削りされている。外面は、縦方向のハケ調整がなされ、口縁部では横ナデによってそのハケ目が消されている。

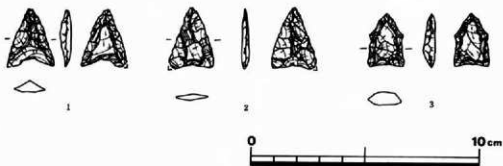
高坏 (25~33) 25~29は底部で屈曲し外傾・外反しながら立ち上がる有段の坏部で、口縁部内面が段をもって肥厚、上端はほぼ水平に面が取られる。25・26は端部がやや先細りし、27~29は

端部が丸い。26は外面に赤彩された跡が認められる。30～32は棒状の支柱が付きラッパ状に開く高坏の脚部と推定される。30・31は数が不明であるが円形の透穴があり、端部は内側へ少し突出する。また30・32は、内面ハケ調整、外面ヘラ磨きで、31は内外面ヘラ磨きである。

器台（33～35）33は有段口縁をもつ器台の口縁部と推定される。口縁部には1本の棒状具で施文されたと考えられる凹線文がある。また頸部外面と口縁部内面がヘラ磨きされている。34・35はハの字状に開く器台の脚部と思われる。34は端部が先細りし端部付近に黒斑がある。また数は不明であるが円形の透穴がある。内面がヘラ削りされている。35の端部は横ナデによって面が取られ外上方に少し突出する。



第28図 遺物包含層出土土器(3) (S=1/3)



第29図 遺物包含層出土石鏃 (S=3/5)

鏃 (36・37) 36は体部が直線的に開き鈕部は柱状である。また内面がへら削りされている。37は体部がやや外反して開き、鈕頂部は凹んでその端部が外に張り出す。

土鏃 (38～40) 38～40は球状を呈する管状土鏃である。40は中心の孔が貫通されていない。

石鏃 (第29図1～3) 1～3は凹基の石鏃。平面形は、1・2が三角形状、3は左右の両辺が平行するような五角形状を呈する。先端部角は1が 47° 、2が 48° 、3が 75° 。

20号竪穴住居跡出土土器観察表 (残存は、残存口縁周/復元した口縁全周)

No.	器種	焼成	色調	法量(cm)	残存
1	甕 口縁	良	浅黄橙	口径 21.0	1/12
2	甕 口縁	良	橙	口径 18.6	4/9
3	甕 口縁	並	浅黄橙	口径 14.2	1/1
4	甕 口縁	並	橙	口径 17.6	1/18
5	甕 口縁	不良	浅黄橙	口径 16.4	1/9
6	甕 口縁	並	浅黄橙	口径 17.2	1/9
7	甕 口縁	並	浅黄橙	口径 15.2	1/12
8	甕 口縁	不良	鈍い橙	口径 14.6	5/36
9	甕 口縁	並	浅黄橙	口径 14.8	1/18
10	壺 口縁	不良	内: 黄橙 外: 橙	口径 10.2	1/6
11	高坏 口縁	良	赤み帯びた鈍い橙	口径 32.8	5/18
12	鉢	良	内外: 浅黄橙	口径 17.4	1/12

22号竪穴住居跡出土土器観察表 (残存は、残存口縁周/復元した口縁全周)

1	甕 口縁	並	浅黄橙	口径 16.2	1/1
2	甕	並	褐灰	口径 16.6 底径 4.4 器高 26.6	1/2
3	甕 口縁	良	浅黄橙	口径 17.0	1/18
4	甕	並	内: 浅黄橙 外: 鈍い橙	口径 18.2 底径 5.0 器高 24.5	1/2
5	甕 口縁	並	浅黄橙	口径 12.8	1/36

No.	器種	焼成	色調	法量(cm)	残存	7	台付鉢	並	内：坏部灰黄褐色 脚部鈍い黄褐色 外：鈍い黄褐色	器高 25.5 口径 10.2 底径 11.2 器高 15.4	1/2
6	壺	良	内：浅黄褐色 外：鈍い褐色	口径 12.4 口径 4.2	1/2						

24号竪穴住居跡出土土器観察表（残存は、残存口径(底部)周/復元した口径(底部)全周)

1	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 13.8	1/18	4	器台	並	浅黄褐色	口径 20.6	1/6	
2	高坏	坏部	並	鈍い黄褐色	口径 16.2	1/3	5	器台	脚部	灰白	底径 15.2	5/36	
3	高坏	脚部	良	浅黄褐色	底径 14.0	4/9	6	器台	脚部	並	鈍い黄褐色	底径 10.0	2/9

遺物包含層出土土器観察表（残存は、残存口径(底部)周/復元した口径(底部)全周)

1	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 19.0	1/12	18	壺	口縁	並	鈍い褐色	口径 16.7	1/12
2	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 23.1	4/9	19	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 23.0	1/18
3	壺	口縁	良	鈍い褐色	口径 15.8	1/9	20	壺	口縁	並	鈍い褐色	口径 13.0	7/36
4	壺	口縁	並	鈍い褐色	口径 15.8	1/12	21	壺	口縁	良	鈍い褐色	口径 15.4	1/9
5	壺	口縁	並	浅黄褐色	口径 16.8	1/9	22	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 12.8	1/12
6	壺	口縁	並	浅黄褐色	口径 15.3	1/18	23	壺	口縁	良	赤みの強い鈍い褐色	口径 14.4	5/36
7	壺	口縁	並	内：浅黄褐色 外：鈍い褐色	口径 14.6	1/12	24	壺	口縁	並	灰白	口径 13.0	1/9
8	壺	口縁	良	鈍い褐色	口径 17.1	1/12	25	高坏	口縁	良	鈍い褐色	口径 19.8	1/9
9	壺	口縁	良	灰白	口径 16.0	1/12	26	高坏	口縁	良	浅黄褐色	口径 31.2	5/36
10	壺	口縁	良	赤みのある鈍い褐色	口径 21.2	1/9	27	高坏	口縁	良	浅黄褐色	口径 24.8	1/9
11	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 14.4	1/12	28	高坏	口縁	良	浅黄褐色	口径 27.6	1/12
12	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 19.4	1/12	29	高坏	口縁	良	鈍い褐色	口径 28.4	1/12
13	壺	口縁	良	鈍い褐色	口径 17.0	1/18	30	高坏	脚部	良	浅黄褐色	底径 16.6	1/2
14	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 17.8	1/12	31	高坏	脚部	良	浅黄褐色	底径 19.8	1/9
15	壺	口縁	良	浅黄褐色	口径 18.6	1/12	32	高坏	脚部	良	鈍い褐色	底径 17.4	1/6
16	壺	口縁	良	鈍い褐色	口径 16.2	2/9	33	器台	受部	良	褐色		
17	壺	口縁	良	褐色	口径 17.2	2/9	34	器台	脚部	並	鈍い褐色	底径 11.4	2/9
							35	器台	脚部	良	黄褐色	底径 14.8	1/6

No.	器種	焼成	色調	法量(cm)	残存	
36	蓋	並	鈍い橙			
37	蓋	並	浅黄橙			
No.	器種	焼成	色調	重量(g)	法量(cm)	残存
38	土罎	並	黒	30.6	直径3.3	完形
39	土罎	不良	灰白	23.2	直径3.5	1/2

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質
40	土罎	良	橙	20.0	直径2.9	完形
遺物包含層出土石罎観察表						
No.	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質
1	石罎	2.5cm	2.0cm	0.5cm	1.82 g	輝石安山岩
2	石罎	2.8cm	2.0cm	0.3cm	1.20 g	輝石安山岩
3	石罎	2.4cm	1.6cm	0.6cm	2.15 g	輝石安山岩

出土土器胎土表

No.	胎土	光る粒子
20号整穴住居跡出土土器		
1	B	白・黒
2	B	なし
3	B	なし
4	B	白多量
5	B	なし
6	B	白・黒
7	B	白・黒
8	B	白・黒
9	B	白・黒(黒多量)
10	B	なし
11	B	白・黒
12	B	白
22号整穴住居跡出土土器		
1	B	黒
2	B	白・黒
3	B	白・黒
4	B	白・黒
5	B	白
6	B	白・黒
24号整穴住居跡出土土器		
1	B	白・黒
2	B	白・黒
3	A	白
4	B	白・黒
5	D	白・黒
6	B	白・黒
遺物包含層出土土器		
1	B	白・黒
2	B	白・黒
3	B	白・黒
4	B	白
5	B	白・黒(黒多量)
6	B	白・黒
7	D	白・黒
8	A	なし
9	A	白・黒
10	B	白・黒
11	B	白・黒
12	B	白
13	B	白
14	B	白・黒
15	B	白・黒
16	A	なし
17	A	白・黒
18	B	白・黒(黒多量)
19	B	白
20	D	白・黒
21	A	白・黒
22	C	白・黒
23	B	なし
24	B	白・黒
25	B	白多量
26	B	白・黒
27	D	白・黒
28	A	白
29	D	白・黒
30	B	白多量
31	B	白・黒
32	B	白多量
33	B	白・黒
34	D	白・黒
35	B	白・黒
36	B	白
37	B	白
38	B	白・黒(白多量)
39	B	白多量
40	D	白

第3項 小結

以上、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構と遺物について、その説明を行ってきたが、章の結びとして、竪穴住居跡の形態と土器の簡単なまとめをここで述べておきたい。

1. 竪穴住居形態について

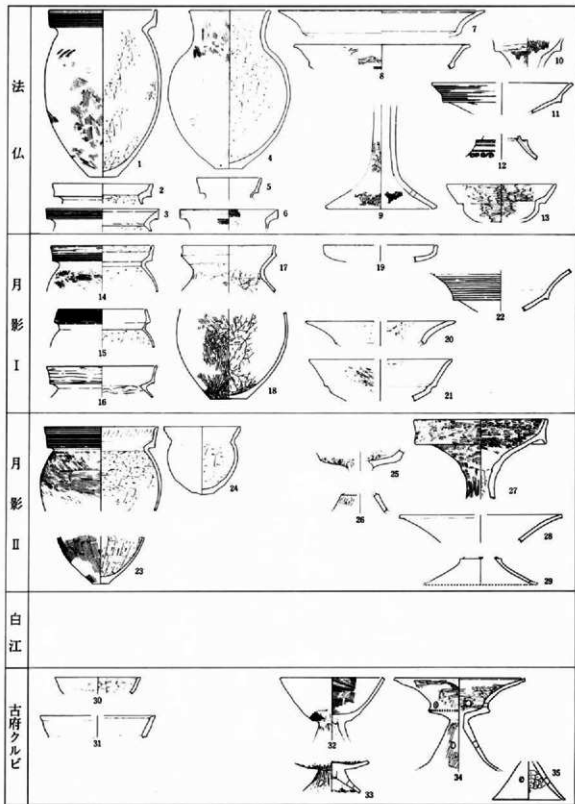
当該時期の竪穴住居跡は、20号住居、22号住居の弥生時代後期（法仏式期）と24号住居の古墳時代前期（古府ケルビ式期）の大きく2時期に区分できる。竪穴住居跡の形態もこの時期差に伴って、大きく形態変化しており、法仏式期と古府ケルビ式期の間に入る、前回報告された念仏林南B遺跡の7号住居跡をその間に入れれば、明瞭な形態変化を追うことができる。ただし、この内容については、既に念仏林南B遺跡の報告である「念仏林南遺跡I」で述べられているため、ここでは割愛し、以下の表提示のみとする。

住居名	主軸	縦軸×横軸	床面積	平面形	柱穴	床面	壁溝・壁高	柱間・風扱
20号住居	N-31-W	540×520cm	27㎡	脚張隅丸方形	4本	中央のみ脚床 他は地山床	有・55cm程度	
22号住居	N-58-W	660×615cm	35㎡	脚張隅丸方形 (楕円形に近い)	4本 (1本ズレ)	全面地山床	有・20cm程度	
24号住居	N-46-W	535×625cm	32㎡	隅丸長方形 (横長)	4本	全面脚床	有・25cm	

2. 出土土器について

前項では念仏林南A遺跡の遺物を見てきたが、以下、前回報告のB遺跡の土器を交えて、念仏林南遺跡における当該期の土器の編年的位置付けについて触れておく。なお当該期の遺構における遺物量が少ないため、遺物包含層出土土器（当該期に位置付けられない遺構における混入遺物を含む）を交えて話を進める。また、以下で用いる土器番号は、第30図の土器番号である。

まず法仏式期では、A遺跡の20号竪穴住居跡（以下「A20竪穴」と表記）出土土器と22号竪穴住居跡（以下「A22竪穴」と表記）出土土器、A遺跡遺物包含層（以下「A包含層」と表記）出土土器の一部、さらにB遺跡遺物包含層（以下「B包含層」と表記）出土土器の甕・高坏・器台の一部が該当する。まず甕は、有段口縁擬凹線甕が主流を占める。A20竪穴、A22竪穴、A包含層のものがそれにあたり、口縁部があまり発達しないものである。口縁形態には直立、直線的に外傾、外反の3種類があり、外反するものの外反度はあまり強くない。器壁は月影I式期に比べて厚く、特に口縁部から頭部にかけての差は明白である。肩部外面には連続斜行刻みを多用するようである。また口縁部に擬凹線が施されないものがA包含層、B包含層から出土しており、有段口縁擬凹線甕に準じ、口縁部があまり発達していない点から当該期に位置付けた。さらに断面三角形の口縁部をもち端部に擬凹線を施すものがB包含層から2点出土しているが、これらも当



第30図 念仏林南遺跡出土土器類年図(弥生後期～古墳前期) (S=1/6)

時期に位置付けられよう。壺ではA22堅穴の4のタイプの短頸長胴壺がある。月影Ⅰ式期の有段状の口縁をもつ短頸長胴壺に比べ器壁が厚く、それより古いことを示すであろう。またA20堅穴の小型短頸広口壺5、A包含層の断面三角形口縁の短頸広口壺6も当時期に位置付けられよう。高坏ではA20堅穴の7のタイプの坏部が主流を占めるようである。口縁部の発達が弱く、重厚感があり、端部は丸い場合と先細りする場合がある。またB包含層の8のタイプも口縁部の発達が弱く当時期に位置付けられるであろう。脚部は、A包含層の9のような、棒状の支柱からラッパ状に開き、重厚感のあるものが主流を占めるようである。器台には、器受部の発達が弱いA包含層の10、B包含層の11がある。その他、口縁部の伸びが比較的弱い、A20堅穴の鉢13も当時期に位置付けられよう。また、法仏式のメルクマールとなるスタンプ文が施されたものが、B包含層から4点出土している。

月影Ⅰ式期にはB遺跡1土坑（以下「B1土坑」と表記）出土土器がある。詳細は『念仏林南遺跡Ⅰ』第3章第2節小結を見ていただきたいが、これらは月影Ⅰ式古相に位置し、法仏式の新しい段階に位置する可能性もある。またB包含層出土土器には、B1土坑のものと同時期あるいは若干古いと思われるものがあり、B包含層の有段口縁擬凹線壺の大半はそれにあたる。壺では体部内面が入念にヘラ削りされ器壁が薄い短頸長胴壺17・18（同一個体）があり、外面がハケ調整され肩部に把手が付いたものもある。高坏では、法仏式期の主流タイプの形態を呈し、坏部の底径に対する口縁部の長さの比が大きくなった20がある。また坏底部が碗状を呈する21は、Ⅱ式の可能性も考えられたが、口縁部の発達度が比較的弱い点からⅠ式に位置付けた。器台では、器受部が発達した22がある。なお、A遺跡に当時期のものは認められない。

月影Ⅱ式期ではB遺跡11号住居跡出土土器がある。これらは月影Ⅱ式期の新しい段階に位置するもので、白江式段階に及ぶ可能性もある。詳細は『念仏林南遺跡Ⅰ』第3章第2節小結を見ていただきたい。なお、月影Ⅱ式期においても、A遺跡のものは認められない。

白江式期については、今回のA・B両遺跡の報告では認められなかった。ただし、B遺跡の未掘部分に当時期のものが存在する可能性があることを付しておきたい。

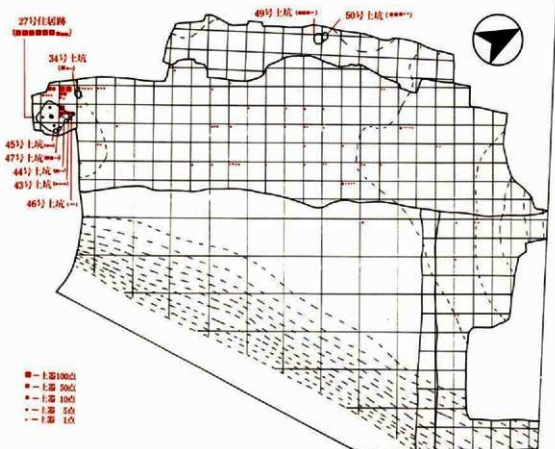
古府クルビ式期では、A遺跡24号堅穴住居跡の東海系高坏32と器台34、B包含層の布留系の壺30・31と東海系高坏33がある。A包含層のハの字状に開く小型器台の脚部35も位置付けられる。

以上の通り、当遺跡における土器の編年的位置付けを行ってみたが、ここで気づいた点を述べると、法仏式がA遺跡、月影Ⅰ式がB遺跡に集中している傾向が見られる。A遺跡とB遺跡は中央に開析谷を挟んで立地しているが、法仏式期から月影Ⅰ式期に移行する段階、あるいは法仏式期の新しい段階に、居住域がA遺跡からB遺跡に移動したのではないかと考えられる。B遺跡に未掘部分があり、その箇所には法仏式期のものが存在する可能性があるため、傾向性が見られるに留めておくが、注目しておきたい点である。最後に、南加賀における当該期の土器様相、即ち地域性の問題に触れたかったが、筆者の力量不足の他に遺物量が少ないこともあって断念せざるを得ない。今後の他遺跡の調査により、追求されるべき課題の一つであろう。（津田隆志）

第3節 古墳時代中期の遺構と遺物

第1項 遺構

古墳時代中期の中でも比較的後半に近い時期のもので、西側に位置する49・50号土坑以外はほぼ5世紀後半の単一時期にまとまるものである。5世紀後半の遺構は、調査区域の南端に集中して分布する。竪穴住居跡1軒(27号住居跡)とそれに関連する付属的土坑で、住居跡の北側に34号土坑、43～47号土坑の6基が連なって存在している。これらの土坑は比較的完形に近い遺物の出土があり、住居跡との接合関係もあることから、なんらかの意図で住居跡に付属するものとして掘り込まれたものと考えられる。遺物の分布はこの住居跡と土坑が存在する南端区域に集中し、台地中央部ではほとんど分布していない。調査区域西側の2基の土坑周辺にはほとんど遺物の分布がなく、当該時期の遺跡の広がりはこれより西へは望めない。調査区域外に遺物分布が延びる可能性をもつのはやはり遺物の集中があった竪穴住居跡の存在する南端区域で、ここから南側の台地が切れる部分まで遺構分布の広がりがあったものと予想する。また、この時期の遺構は、前回報告している念仏林南B遺跡において確認されており、狭い調査区域の中で竪穴住居跡4軒を



第31図 古墳時代中期の遺構分布と遺物分布 (S=1/1000)

調査している。この遺構分布も台地の南側にまとまって分布する傾向をもち、類似した様相をもつ。ただ、B遺跡については台地中心部が未調査のため確実ではなく、当該時期の遺構が台地全城に広がっている可能性もある。

1. 竪穴住居跡 (27号住居跡)

(立地) 調査区域の南端に位置するが、台地としてはこの部分が最も小高い部分であり、ここから南側へと再び傾斜している。主軸は南北の線上からやや西へ振っている。

(規模と形態) 住居跡の北コーナーから東側にかけての壁が立ち上がらないため、正確ではないが、南北660cm、東西680cmを測る正方形に近いプランを呈するものと思われる。壁は深いところで25cm、浅いところで5cmを測り、ほぼ直立して立ち上がる。床面積は推定で42㎡を測る。

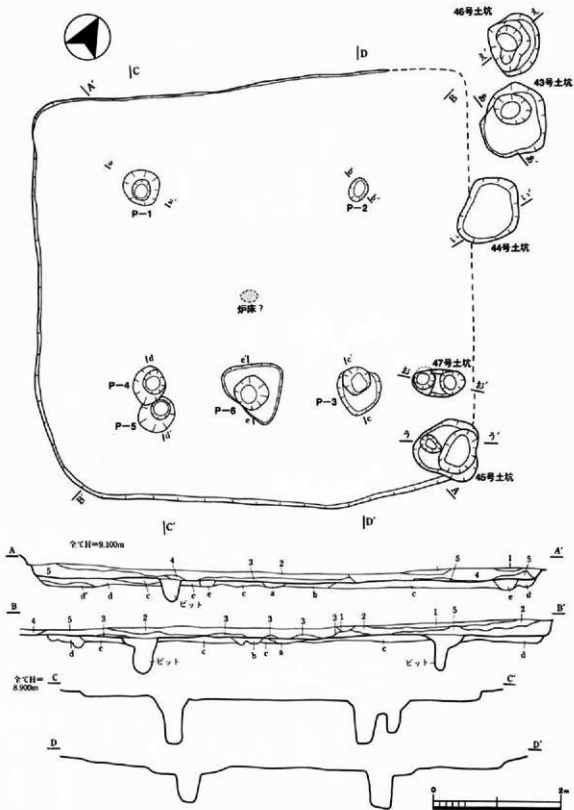
(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1～P4で、径30～40cmのほぼ円形、深さ60～70cmを測る。壁から160～180cm内側に入ったところに掘り込まれており、柱間を結ぶと南北300cm、東西330cmのほぼ正方形を呈す。覆土は上層にしまりのあるやや黒めの土が存在するが、下層は黄土粒を多量に含む軟質の暗褐色土で、壁際は地山に近い黄褐色土である。主柱穴のP3とP4を結ぶ線上若干南よりの中間にはP6がある。このピットは主柱穴に類似した覆土をもつもので、深さや形態を見ても同様の特徴をもち、付属的な柱穴と推察する。

(炉) 炉の確認はないが、住居跡床面のほぼ中央に焼土分布の確認された部分がある。30～50cm程度の楕円形状の範囲で、一部被熱して赤く焼けている部分もあるが、全体が硬質に焼き固まった感じはなく、焼土まじりの土が分布しているといった感じである。

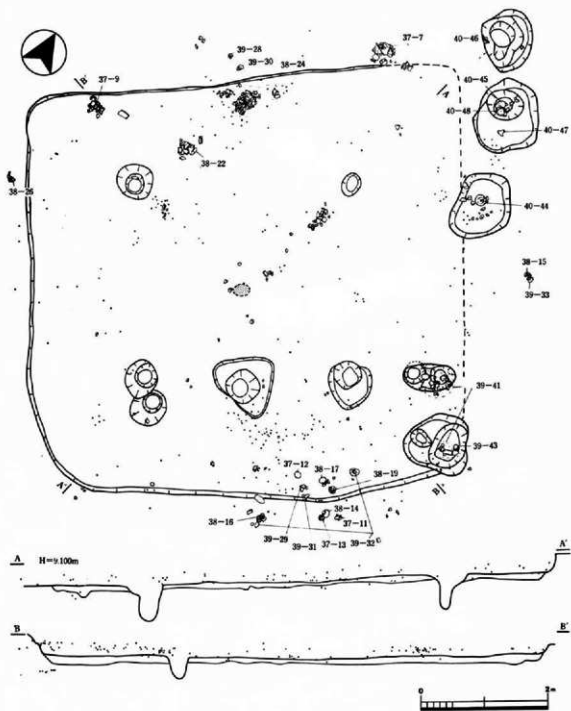
(覆土堆積状況) 上層は基本的に暗褐色土であるが、中層から下層では壁際と中央で異なる土層が堆積している。壁際から2mの範囲(主柱穴までの範囲)は暗黄褐色土で、住居跡中央に向かって徐々に薄く、その途切れた部分の中央部分で床直付近に焼土混じりの黒褐色土が堆積している。一般的なレンズ状堆積と呼ばれるものである。

(床面状況) 床面は中央部分が壁際よりも5cm前後下がる傾向はあるものの、ほぼフラットである。床は全面貼り床で、主柱穴に囲まれた区域を中心として、硬質の黄褐色土塊を多量に混在する締まりの強い暗黄褐色土が存在するが、壁際から50～100cmの部分は比較的軟質な地山に近い暗黄褐色土となっている。

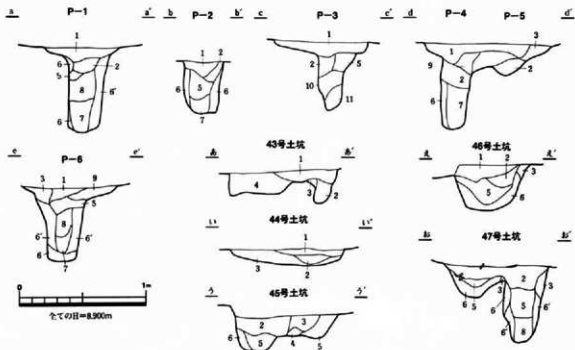
(遺物出土状況) 当住居跡出土の遺物は、数点の緑色凝灰岩以外は全て土器で、670点を数える。分布は遺物出土状況図を見れば分かるように、比較的まとまった出土が多く、一括廃棄された感じを受ける。床面につぶれた感じで出土するものもあるが、基本的には床面より5cmから10cm程度浮いて存在するものが多く、住居跡が廃絶された段階で、一括廃棄された感じが強い。これら一括土器は北壁側と南壁側に集中する傾向をもち、北壁側では主に甕や壺等の大型品を中心として、細かな破片が密集するような形で、南壁側では主に高坏・小型壺等の小型精製土器群を中心として、完形や半完形の割れの少ない状態で出土している。また、土器接合関係を見ても、北壁



第32図 27号住居跡及びその周辺土坑平面・断面図 (S=1/60)



第33図 27号住居跡及びその周辺土坑遺物出土状況図 (S=1/60)



27号住居跡土層註

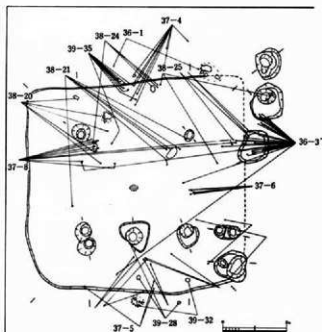
- 1層 暗褐色土：炭化粒微量含有。ややしまり有。
 2層 暗褐色土：黒土粒多め。炭化粒・焼土粒少量含有。
 3層 黒褐色土：焼土粒微量含有。しまり有。
 4層 暗(黄)褐色土：炭化粒少量含有。しまり有。
 5層 暗黄褐色土：炭化粒少量含有。
 6層 黄褐色土：地山よりやや暗い。しまり弱。

27号住居跡貼り床下土層註

- a層 暗(赤)褐色土：赤褐色焼土塊多量含有。硬質。0.9m?
 b層 暗褐色土：炭化粒少量含有。硬質。
 c層 暗(黄)褐色土：黄褐色土塊混在。硬質。貼り床土。
 d層 暗(黄)褐色土：炭化粒少量含有。やや軟質。
 e層 黒褐色土：黄土塊少量含有。やや軟質。

27号住居跡ピット及び43~47号土坑層土層註

- 1層 暗(赤)褐色土：炭化粒少量含有。しまり有。
 2層 暗褐色土：黄土粒多め含有。しまり強。
 3層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。しまり有。
 4層 暗(黄)褐色土：地山土に近い。しまり強。
 5層 暗褐色土：しまりなく軟質。
 6層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。しまり強。
 6'層 6層よりも褐色が強く、暗い。
 7層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有。しまりなく軟質。
 8層 黒褐色土：しまりなく軟質。
 9層 暗(黄)褐色土：しまり有。
 10層 暗褐色土：黄土塊多め含有。しまり強く硬質。
 柱支えの貼り土。
 11層 暗黄褐色土：黄白色~灰白色砂質土・暗褐色土を混在。しまり強く硬質。柱支えの貼り土。



第34図 27号住居跡及びその周辺土坑の断面図と遺物接合図 (S=1/30,右下のみS=1/120)

側の土器群はこの土器群内でよく接合するものが多いのに対し、南壁側土器群は住居跡間で接合関係をもたず、そのみ存在する場合が多い。これは北壁側と南壁側と異なる廃棄による土器群であることを意味するかのようであり、興味深い。

2. 住居跡付属土坑

27号住居跡の周辺にはこれに関連するかのような土坑群が存在する。いずれも住居跡の東側に存在し、34号土坑以外は住居跡の東壁に沿うような形で連なって存在する。この東壁沿いの土坑はいずれも1m程度の小土坑であり、やや大型のピットという感じである。

(1) 34号土坑

27号住居跡の5m北側に存在する土坑で、約2m×2mの不整形を呈す。深さは中央の深いところで35cmを測り、そこからすり鉢状に壁側へ徐々に立ち上がる。覆土は上層に薄く黒褐色土が乗るが、下は暗褐色系の土で、下層はやや黄色を帯びる。この土坑からは27号住居跡同様、まとまった遺物が出土しており、図示できたもので、甕2個体、高坏7個体を数える。甕についてはまとめて出土してはいるものの、やや破片がばらつく傾向をもち、これは41-53の接合の多い破片復元品の高坏でも同様である。これ以外の高坏はいずれも坏部のみか脚部のみの半完形品で、これら図示した遺物以外では、小破片が30点出土したのみであった。なお、この土坑では41-53の高坏のみ27号住居跡の覆土上層遺物（2片）と接合関係をもつ。

(2) 住居跡東側小土坑群

27号住居跡の東壁沿いに連なる小土坑群で、北から46号・43号・44号・47号・45号の5基存在する。46号と43号、44号は近接して存在し、ほぼ同規模を呈す。47号はややピット状、45号は前3基と同様の規模で、住居跡の南東コーナーに囲り込まれている。

(46号土坑) 住居跡の北コーナー付近に位置する80cm×90cmの不整形のもので、深さ35cmを測る。覆土は暗褐色系の土が主で、やや軟質。遺物は少なく、高坏と手捏ねのミニチュア土器が出土する程度で、他の遺構との接合も見られない。

(43号土坑) 120cm×100cmの不整形のもので、深さ17cmを測る浅い土坑である。覆土は暗褐色系の土で、やや黄色味が強い。遺物は完形に近い碗や半完形の高坏が出土するなど概して出土量は多く、下方に隣接する44号土坑や27号住居跡の覆土遺物と接合関係をもつ（36-3、38-25）。

(44号土坑) 43号土坑に類似する形態をもつ土坑で、100cm×90cmの不整形を呈し、深さ12cmを測る。覆土も43号土坑と類似。遺物の出土も完形の高坏が出土する点で類似する。43号土坑と27号住居跡の覆土遺物との接合関係が見られる。

(47号土坑) 土坑として扱ったが、径30～40cm程度のピットが東西に2個つながったもので、覆土も住居跡内の柱穴覆土と類似する。この土坑の覆土上層には甕がまとめて廃棄されたように出土しており、45号土坑と接合している（39-41）。

(45号土坑) 住居跡の東コーナー壁に位置する土坑で、約100cm×100cm不整形を呈する。深さ

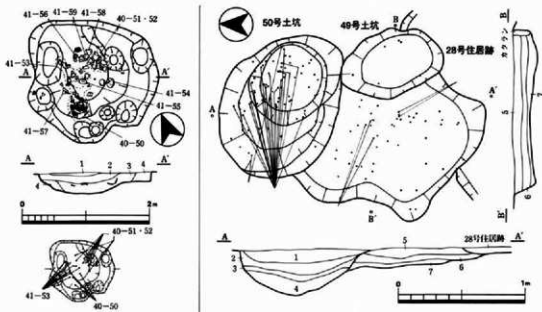
は他の遺物を出土する土坑と同様、15cm程度と浅く、覆土も暗褐色系の土である。遺物は47号土坑と接合関係にある甕の他、手捏ね状の小型壺が1点出土する程度である。

以上、小土坑群は43・44・45号土坑で類似した規模、プランを呈し、土器の接合関係や出土状態から見ても、ほぼ同様の目的で掘り込まれた遺構であると判断される。土器の廃棄の仕方としては27号住居跡と共通する特徴（小型壺や高坏は半完形又は完形品、甕は小破片での一括廃棄）をもち、27号住居跡の覆土遺物の接合状態を見ても、住居跡の遺物の廃棄が土坑群の廃棄と同時に進行していたものと判断され、廃棄において何らかの意味をもたせていたものと評価する。

3. 49・50号土坑

調査区域の西側、古墳時代後期の28号住居跡の北側に重複して存在する土坑で、49・50号土坑が2基重複して存在する。

(49号土坑) 50号土坑と28号住居跡に切られて存在するもので、140cm×160cmの不整楕円形を呈



- 34号土坑覆土土層註
- 1層 黒褐色土：黄土粒少量、炭化粒微量含有。
 - 2層 暗褐色土：黄土粒、炭化粒少量含有。
 - 3層 暗(黄)褐色土：炭化粒、塊少量含有。
 - 4層 暗(褐)色土：黄土粒多め、炭化粒微量含有。

- 49・50号土坑覆土土層註
- 1層 黒褐色土：塊土塊多め、炭化塊少量含有。
 - 2層 黒褐色土：炭化塊少量含有。しまり強。
 - 3層 黒褐色土と黄褐色土との混在土(半々)。
 - 4層 黒(黄)色土：炭化粒、塊多め、黄土粒少量含有。
 - 5層 黒(黄)褐色土：炭化粒、塊土粒、黄土粒多め含有。
 - 6層 黒黄褐色土：炭化粒、黄土粒少量含有。
 - 7層 暗褐色土：(黄)黄褐色土多量混在。炭化粒含有。

第35図 34号土坑及び49・50号土坑平面・断面図 (左：S=1/60、右：S=1/30)

す。土坑の形態は底面がほぼ平坦で、壁がほぼ直立の竪穴状を呈し、深さは15cmを測る。覆土はやや黄色を帯びた黒褐色土で、炭化粒や焼土粒の含有がある。遺物の出土は少なく、上層で28号住居跡の遺物が混在する。

(50号土坑) 49号土坑を切って存在する、110cm×90cmの楕円形土坑で、底面はすり鉢状を呈し、深さは35cmを測る。覆土は上層から下層まで黒褐色土で、上層には焼土塊が、下層には炭化粒・塊が多く混在する。遺物は甕の破片が比較的多く出土するが、小破片が主である。

第2項 遺物

古墳時代中期の遺物は6点の緑色凝灰岩を除いて、全て土器である。土器は破片総数で1,282点を数え(接合したもの及び同一個体と判断したものは破片数にかかわらず1点として算出)、遺構別では27号住居跡670点、周辺土坑51点、49・50号土坑66点、包含層495点である。いずれも土師器であり、須恵器は1点も出土していない。ここで、各遺構出土の遺物説明を行う前に、土師器の器形分類と胎土分類について述べておくこととする。

1. 土師器の分類

(1) 器形分類

この項では古墳時代中期でも特に出土量の多い5世紀後半頃の土師器について分類する。

器種は甕・小型甕・壺・小型壺・高坏・塊(鉢)・ミニチュア土器が確認される。

(甕) 口縁部器形と胴部器形により分類する。

口縁部器形は、「く」字状外反又は外傾を呈するA類、口縁部に段をもちや受け口状となるB類、「く」字状外傾した後口縁端部内側が肥厚して端部に面を形成するC類に分けられる。A類は通常「く」字状口縁と呼ばれるもので、口縁端部形態から端部丸く仕上げるA a類、端部が角張るA b類に細分可能である。B類は有段口縁甕の段が微弱となったもので、段を形成する部分でやや受け口状となるB a類と段を形成する部分で屈曲しないB b類に細分可能である。C類はいわゆる「布留系」甕と呼ばれるもので、口縁端面がほぼ水平なC a類と口縁端面が内傾するC b類に区分できる。

胴部器形は、やや長胴気味の1類と球胴気味の2類に分けられる。

(小型甕) 器高15cm以下のもので、胴部最大径と口径がほぼ同じの鉢状器形を呈すものである。田嶋明人氏が小型土器として分類(田嶋1987)したものであるが、スス痕が明瞭についていたことにより、煮炊具と判断し、小型甕として扱った。

(壺) 有段口縁のもののみで、段形成後直立する器形のものである。2法量ある。

(小型壺) いずれも球形に近い胴部をもつもので、口頸部器形により3つに分類できる。A類は頭部のすばまりが比較的強く、口頸部が外傾して真っすぐ長く延びるものである。B類もA類と類似した器形を呈すが、口縁部に段を形成、胴部に穿孔をもち、磁形を呈す。C類は頸部太く、

口縁部立ち上りの短いもので、A・B類とは異なる器形に類するものである。

(高坏) 坏部から脚部まで器形が分かる資料が少ないため、坏部と脚部に分けて分類する。

坏部器形は、底部が大きく平坦で屈曲部に突帯状のものが付き体部外反するA類と底部が平坦で体部外傾の坏型を呈するB類、底部小さくそのまま体部へ外傾して立ち上がる碗型を呈するC類に分類できる。A類は口縁端部や屈曲部の突帯がシャープなA1類と厚ぼったいA2類に、C類はナデ調整主体のC1類と刷毛調整主体のC2類にさらに細分される。脚部器形はいずれも裾部で屈曲して開くものであるが、細い筒状の脚部から裾で強く屈曲するa類とやや「ハ」状に開き気味となる脚部から裾で屈曲するb類、裾の屈曲が弱く、緩く開いて行くc類に分類できる。

(碗・鉢) 碗と鉢の区分が困難なものもあるため、一つの器種として扱った。A類は小型で浅身の碗器形を呈するもので、底部の明瞭でない丸底のA1類と明瞭な底部のあるA2類に細分できる。B類はやや小型で深身器形を呈するもので、明瞭な底部を有し、口縁部は短く外屈するものである。C類はやや大型の丸底鉢状器形を呈するもので、口縁部が短く外屈するものである。D類はやや小型の鉢状器形を呈するもので、体部がやや丸く張り、口縁部で「く」字外反をするものである。

(ミニチュア土器) いずれも手づくねのもので、底部の丸い碗形を呈するA類、平底状のB類、壺形を呈するC類に分けられる。

(2) 胎土分類

土師器の胎土は生地自体の質感やきめ、含まれる鉱物の種類・量等により5類に分類した。

A類は極細かな砂粒が少量入るものの、全体的にやや粉っぽい印象を受ける肌色系統の素地で、1～3mm程度の流紋岩系の砂粒を疎らに含み、赤色酸化粒や雲母状の鉱物を含む。

B類はA類よりもやや砂質を帯びる素地で、色調はA類に近いが、細かな砂粒の入り方はC類に近い。1～3mmの流紋岩系の砂粒を多量に含み、赤色酸化粒や雲母状の鉱物もA類同様含む。

C類は砂質系の器面がザラつく素地をもつもので、色調はややくすんだ淡肌色を呈し、大きな砂粒の混入はほとんど見られない。雲母状の鉱物を多量に含むことを特徴とする。

D類は小型器種に見られる胎土でA類に近いやや粉っぽい素地のものである。砂粒はあまり目立たず、全体的に赤味が強く、赤色酸化粒が目立つ。雲母状の鉱物はA類と同程度入る。

E類はこの中では比較的粘土質を帯びる素地で、赤色酸化粒を多めに含み表面が濃肌色に発色するものが多い。砂粒は細かなものが少量入る程度で、他と同様に雲母状鉱物を含む。

2. 27号住居跡出土の土師器

27号住居跡からは器種分類で上げた全ての器種が出土している。比較的図示可能な完形若しくは半完形のものも多く、個体識別での器種構成は(高坏が脚部ないしはその接合部による個体識別数やミニチュア土器が破片識別による個体数である以外は、口頸部による個体識別数による数量算出)、壺30、小型壺2、壺2、小型壺19、高坏26、碗(鉢)8、ミニチュア土器6である。

壺が最も多いのは通常であるが、小型壺と高坏がそれぞれ20%、28%の高い量比をもち、少ないながらミニチュア土器が定量存在することも特徴的である。以下に各器種の説明を行う。

《壺》概して厚手のものが主体的で、内面の粘土組織み痕跡が残るものが多く見られる。調整は口縁部内面に刷毛調整の施されるもの(2・3)や底部外面にヘラ削り(3)が見られる以外は、基本的に外面が粗い刷毛調整、内面がヘラ削り調整であり、全体的に粗雑な調整の感じを受ける。器形はA類が主体を占め、特にA a類が多いようである。図示したA a類(2)とA a 2類(1)、A b 1類(3)の他、破片で7点出土しており、胴部器形では1類の長胴気味のもものが主体的である。B類は量的に少ない器形で、図示したB a 1類(4)の他にはB b類に近いものが破片で出土しているのみで、図示したものがながい、破片数ではC類とした「布留系」壺の方が4点と多い。胎土はA類とB類の識別が困難なものがあり、これについてはA B類とした。主体はA・B・C類で、C類が半数に近い221/462を占め、次いでA類、B類の順で、A類・B類ともに同系列の胎土と位置付ければ、A B系統で半数以上を占めることとなる。これら以外ではD類に近いものが3点確認しているが、小破片のため、壺ではない可能性もある。

《小型壺》壺同様、厚手で、外面に粗い刷毛調整が施されるもので、内面に粘土組織みの痕跡を残す。頸部のあまり窄まらない広口壺状器形で、底部は丸底だが、壺のようにぶ厚くしてある。確認した個体数は図示した2点のみであるが、小破片では壺と区別がつかず、これに含まれている可能性をもつ。胎土はいずれもA類、5には底部外面と胴部外面に広く煤が付着している。

《壺》図示した有段口縁の2点だけである。胴部外面に粗い刷毛調整、内面にヘラ削りを施す大型製品(7)と外面ナデ又は磨き?で内面ヘラナデの小型製品(8)が存在する。大型製品はいわゆる「山陰系」とされるタイプで、口頸部の有段は小さくなり、胴部の大きく張る器形となっている。胴部上半のみ図示したが、下半の破片もあり、個体としては底部のみを欠損する半完形品である。胴部下半外面には煤が付着している。8の小型製品は調整や色調(濃肌色)が以下で述べる小型壺に類しており、小型壺に属すべきものかもしれない。

《小型壺》胴部径15cm以下のもので、基本的に底部丸底の小型丸底壺(罎)と言われるものである。全体に器内は厚い傾向があり、特に底部は1cm以上の厚手が多い。外面の調整は一部底面付近でヘラ削りや刷毛調整が見られるものの、胴部下半は指ナデによるものが主体的で、それより上では横ナデが一般的である。外面が比較的きれいに器面調整するのに対し、内面は粘土組織みの痕跡を残すものが多く、粗く指ナデされている。器形は最もポピュラーなA類が、図示した10~13の他、破片で4個体確認しており、胴部やや大型の9も含めれば、9/18の半数を占める。また、胴部のやや角張る14もあり、これはA'類とする。B類は胴部器形はA類に類するものの、口縁部に段を形成する須恵器産の模倣器形で、胴部穿孔のある15・16と穿孔をもたない17がある。破片でも1点確認している。C類も胴部器形はA類に類するものだが、頸部太く、口縁部の短い器形で、図示した19の他、破片で3点出土している。胎土は器形ごとに偏る傾向はなく、いずれの器形でもA類が主体的であり、19/27で大半を占める。C類は8/27を占める。

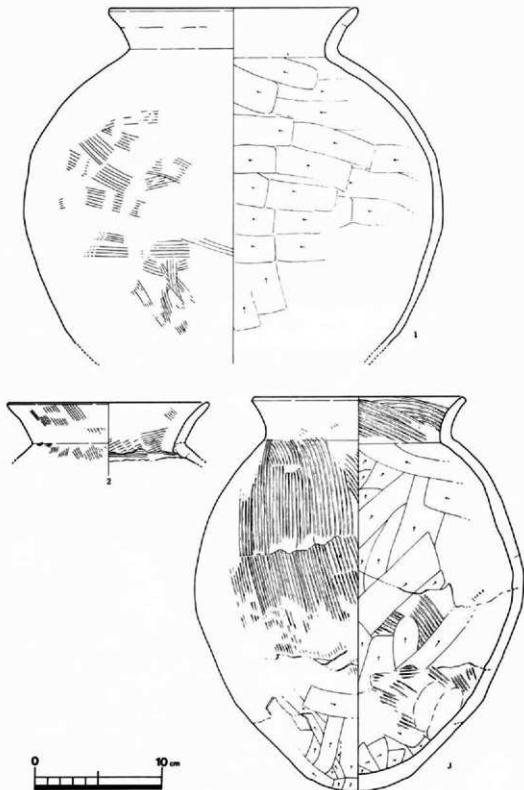
〔高坏〕これまでの土師器同様、粘土積み痕跡が見られるものがあり、作りの丁寧なものを除いては坏部と脚部の接合部分と坏部の底部と体部の境にその痕跡を明瞭に残している。調整は脚部においてヘラ磨きを行う比較的丁寧なものも見られるが、粗い刷毛調整を行う粗雑な厚手の作りのものも定量存在し、器形と呼応する向きが見られる。器形は大型法量のA類が図示したシャープな作りのA1(20)と器肉が厚く、調整も粗雑なA2(21)の他、破片でA1類と目されるものが2点出土しているのみである。脚部は完形のものを見ると、b類がつくようで、22・23がその脚部となろう。主体を占めるのは中型のC類で、坏部では9/13の割合で存在し、a類及びc類(29)脚部がこれにつくものと推察する。調整は一部刷毛の入る28があるが、外面磨き状の薄手の30~32が主体的で、坏部は横ナデを主体とするC1(24・26)が目立つ。胎土は他の器種ではほとんど見られないD類が27/108の定量25%を占めるのが特徴であるが、やはり主体はA類で68/108の過半数を占める。C類は13/108を占める。

〔堦・鉢〕浅い小型の碗状A類は、図示したA1(34)とA2(33)の他、4個体破片で確認している。いずれもヘラ磨きを施すものだが、A1は横磨きで薄手、A2は縦磨きでやや厚手を呈し、底部では他の器種でも見られるような円盤状に厚くなっている。胎土は他の器種では見られないE類が器形A1類に見られ、全体的にはA類主体だが、C類やD類もあり、ばらつく。

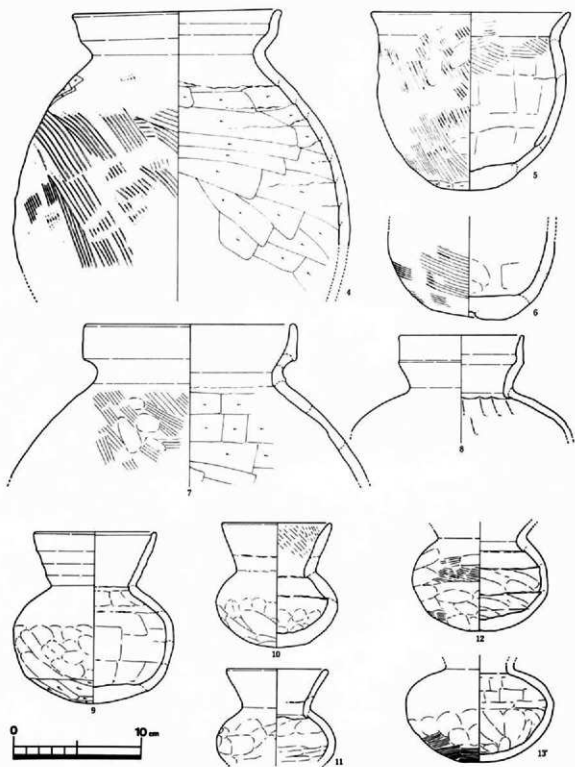
鉢状器形のC類・D類は図示した35・36のみで、破片では確認していない。C類は底部のぶ厚

番号	器種	法量	色調	胎土	存率	番号	器種	法量	色調	胎土	存率
1	甕Aa2	□19.8,脚33.2	淡黄褐	B	1/5	21	高坏Aub	□21.5,脚13.9,高15.4	肌	A	3/4
2	甕Aa	□16.0	灰褐	C	□片	22	高坏b	脚11.9	薄肌	A	脚完
3	甕Ab1	□17.0,脚26.0,高31.0	薄肌	A	2/3	23	高坏b	—	赤薄肌	A	脚片
4	甕Ba1	□16.5,脚27.3	薄肌	A	2/3	24	高坏C1	□17.5	暗淡肌	A	坏完
5	小型甕	□15.8,脚14.9,高14.0	暗肌	A	2/3	25	高坏C2	□16.0	濃肌	D	坏3/4
6	小型甕	脚13.3	淡黄褐	A	1/5	26	高坏C1	□16.2	暗淡肌	A	坏片
7	壺	□16.8	淡黄褐	C	1/4	27	高坏C1	□17.0	肌	A	坏片
8	壺	□9.8	濃肌	A	1/3	28	高坏Ca	—	暗灰褐	D	1/4
9	小壺A	□9.7,脚12.6,高13.5	薄肌	A	3/4	29	高坏c	脚11.3	橙褐	D	脚2/3
10	小壺A	□8.6,脚9.6,高9.8	肌	A	完形	30	高坏a	脚11.3	淡黄褐	A	脚1/2
11	小壺A	□8.0,脚9.4	肌	A	1/5	31	高坏a	脚11.2	橙褐	D	脚完
12	小壺A	脚10.8	濃肌	A	4/5	32	高坏a	脚12.6	肌	A	脚完
13	小壺A	脚11.6	肌	A	1/3	33	鉢A2	□10.1,底4.0,高3.6	肌	A	1/2
14	小壺A	脚11.8	淡肌	A	4/5	34	鉢A1	□11.8	肌	D	1/15
15	小壺B	□9.7,脚9.7,高10.0	肌	A	4/5	35	鉢C	□20.1,高8.7	(赤)肌	A	略完
16	小壺B	□8.7,脚10.2,高8.7	暗灰	C	3/4	36	鉢D	□12.7	薄肌	A	1/10
17	小壺B	□9.5,脚10.5,高11.3	薄肌	A	略完	37	ミニA	□4.3,高3.5	肌	C	略完
18	小壺?	—	薄肌	A	預片	38	ミニB	□4.8,底3.2,高3.4	灰	C	略完
19	小壺C	□8.3,脚10.2,高8.0	暗淡肌	C	4/5	39	ミニB	底4.2	薄肌	A	底片
20	高坏Aa	□22.8,脚14.3,高14.4	濃肌	A	略完	40	ミニC	□3.5	暗淡肌	C	1/5

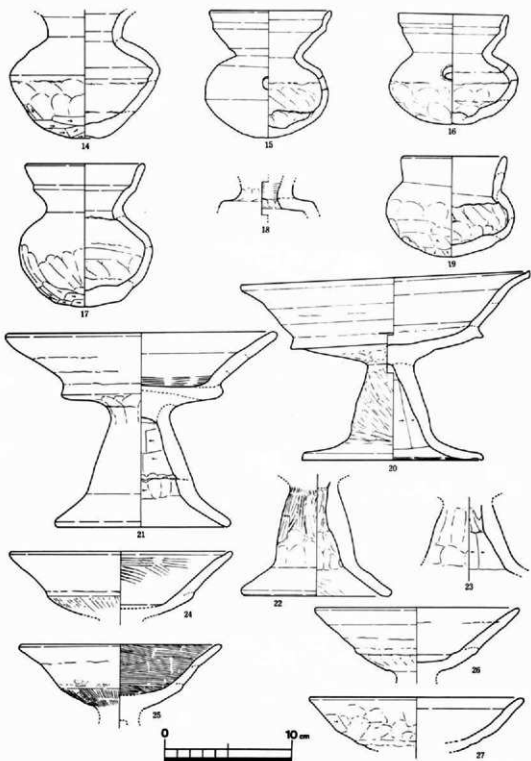
表 27号住居跡出土土師器



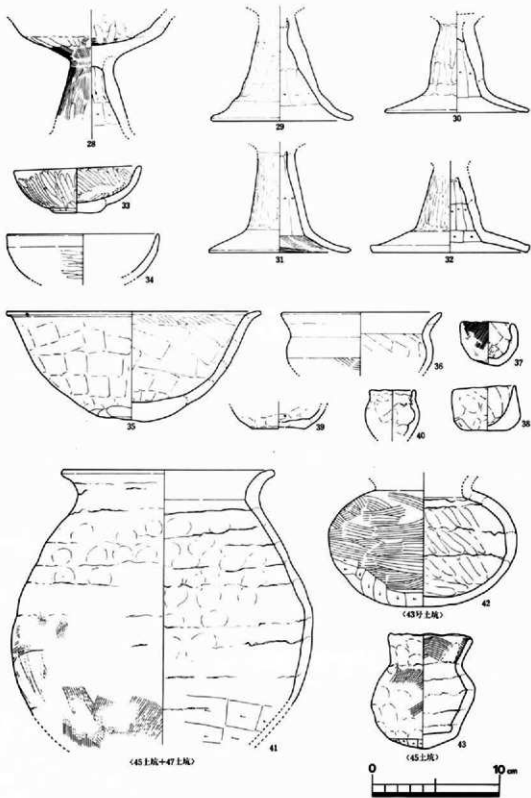
第36図 古墳時代中期の土器(1) (S=1/3、全て27号住居跡出土)



第37図 古墳時代中期の土器(2) (S=1/3, 全て27号住居跡出土)



第38図 古墳時代中期の土器(3) (S=1/3. 全て27号住居跡出土)



第39図 古墳時代中期の土器(4) (S=1/3、上段27号住居跡、下段周辺土坑出土)

い円盤状のもので、やや丸底風を呈する。調整は底面をヘラ削りする以外はヘラナデされており、外面に薄く煤が付着している。D類は全体的に薄手のもので、体部外面下半は刷毛調整、上半はヨコナデである。

《ミニチュア土器》一部37のように刷毛の見られるものもあるが、基本的には器面に指ナデ痕の残る手づくね品である。図示した37～40の他、破片で2点出土している。胎土はC類が目立ち、4/6の割合、他はA類である。

3. 住居跡付属土坑出土の土器

(1) 住居跡東側小土坑群

27号住居跡に付属する土坑群で、住居跡覆土遺物と接合関係にあるものが多く、同一の土器群としても捉えられるものである。以下に出土器種数を記すが、45・47号土坑は多くが接合しているため、併せて記す。

43号土坑 小型壺1個体、高坏2個体、碗1個体以外は甕の小破片3点のみ。

44号土坑 完形の高坏1個体以外は甕口縁部破片1個体のみ。

45号土坑 甕1個体、小型壺2個体以外は甕の小破片2点のみ。

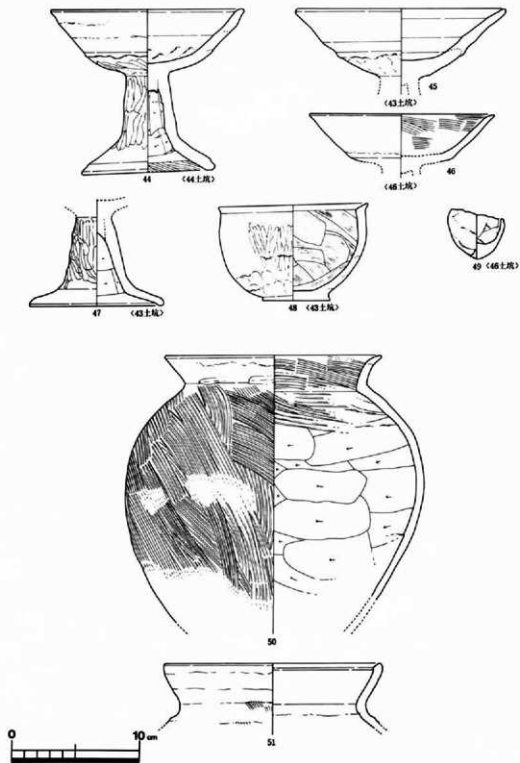
46号土坑 高坏1個体、ミニチュア土器1個体のみ。

以上が器種数であるが、図示したものの以外での小破片等の出土は極少なく、ほとんどが完形・又は半完形で出土しているか、接合によって完形復元のできるものである。この傾向は27号住居跡でも言えたことであるが、小土坑群ではそれが一層顕著と言える。以下に器種ごとに述べる。

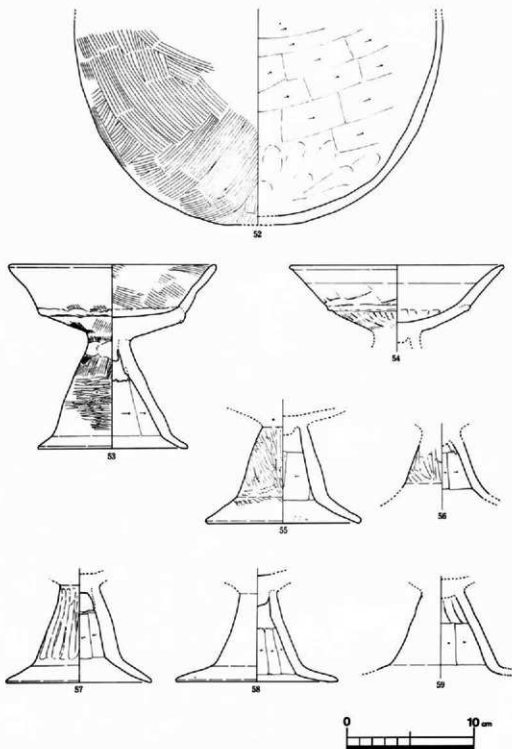
《甕》図示した45・47号土坑出土のA a 1類器形(41)以外に44号土坑からA a 類破片1点と43号土坑から胴部破片2点が出土している。41は口縁部の肥厚する他のA a 類とはやや異なる器形で、やや胴部下半に重心をおく下膨れ状を呈す。また、調整では胴部上半は内外面とも指おさえのナデを施すのみで、粘土粗積み痕跡を明瞭に残し、刷毛調整は胴部下半のみで行い、内面のヘラナデ調整も下半のみである。胴部上半の調整は甕としてはやや異質のものであるが、他の小型壺や高坏では一般的な技法であり、搬入品のイメージはない。この甕には口縁部と胴部中位以下の外面で厚い煤の付着が見られ、内面にもコゲ状の黒色化した部分が確認される。

《小型壺》図示した43号土坑出土A 類器形口縁部欠損品(42)と45号土坑出土A 類器形手づくね状完形品(43)の他に、47号土坑からA 類器形の口縁部破片が1点出土している。43号土坑の42は胴部の張るやや大型のもので、内面調整は他のものと変わらないが、外面は刷毛調整をしており、特徴的である。また、45号の43は一回り小型のもので、器種としてはこれに入れたが、全体に指頭痕を残す手づくねタイプで、ミニチュア土器として扱うべきものかもしれない。

《高坏》44号土坑出土の完形品の他、43号土坑から坏部の完形と脚部の完形、46号土坑から坏部破片が出土している。44号土坑の44は、坏部器形C 1類、脚部器形a 類のもので、ナデや磨きを基本とする調整を施すが、器内は厚手であり、脚部の開きや作りもややシャープさに欠け、外面



第40図 古墳時代中期の土器(5) (S=1/3、上段岡辺土坑・下段34号土坑出土)



第41図 古墳時代中期の土器(6) (S=1/3、34号土坑出土)

粘土積みの接合痕跡を残す。43号土坑の45・47も基本的に44と同類器形のものであるが、47の脚部は44よりも磨きが丁寧で、作りもシャープである。胎土は44がA類、45・47がD類である。46号土坑の46は体部立ち上がりの屈曲する、B類器形の歪形とされるもので、器内は薄手、内面には刷毛調整を施す。胎土も他と異なるE類であり、搬入品の可能性をもつ。

《坑》43号土坑出土の深身B類器形の完形品1点のみで、外面は粗い磨きを施すが、器面には粘土組織み痕跡が残る。内面はヘラナデ、底面は磨いてる。

《ミニチュア土器》A類器形を呈する手ずくねのもので、外面が焼き斑によって黒色化している。

(2) 34号土坑

27号住居跡に関連する土坑であるが、土器の接合関係は27号住居跡の覆土上層とのみで、小土坑群ほどではない。器種は甕が3個体以外は全て高坏であり、破片を含めると9個体出土している。小土坑群と同様、完形又は半完形での出土が多く、小破片での出土は数えるほどしかない。

《甕》図示したA a 1類器形の50とC b 2類器形の51・52の他、C a 類器形の口縁部破片が1点出土している。個体数として捉えられるものはこれのみであるが、胴部破片では27点出土している。50のA a 1類であるが、調整では胴部に粗い刷毛が入り、内面の胴部上位まで刷毛、内面中位以下でヘラ削りを施し、削り取りによってだいぶ薄く仕上がっている。外面の口縁部と胴部中位に帯状の煤、内面の胴部中位に帯状のコゲが確認される。51・52は接合していないが、同一個体として判断できるものである。底部は丸底を呈する球形胴部をもつもので、外面にはやや粗目の刷毛が施され、内面にはヘラ削りが施される。外面には薄く煤がつき、内底面には厚くコゲ状のものが付着している。胎土はどちらもA類だが、焼き色では50がやや赤味を帯びた淡肌色を呈し、焼成も硬質で特徴的である。

《高坏》図示した完形のB b 類器形53と坏部完形のC 2類器形54、坏部C類器形の破片2点以外は、いずれも脚部のみのものである。脚部はC類坏部に伴うと思われるa類が多くを占めるが、やや「ハ」字に開き気味になるものが多く(56・58)、A・B類坏部に伴うと思われるb類に近い器形を呈す。ただ、b類よりも器内は薄く、小型である。b類脚部(55・57・59)は概して器内厚く、基部径から太い感じを受ける。さて、53の高坏はB類坏部としたものであるが、これに類するものはなく、脚部もb器形の中でも脚部の広がり短く、異質なものである。調整は内面が刷毛、外面の接合部付近が刷毛、脚部下方では細かな横方向の磨きが入っている。ただ、厚手の作りや坏部の立ち上がり部の接合部分を残す特徴は、他の高坏と差はないものであり、胎土も高坏に多いD類と搬入品のものではない。

4. 27号住居跡周辺包含層出土の土器

27号住居跡周辺の包含層からは多量の土器が出土しているが、破片での出土が主で、住居跡や土坑のように図示できるような完形に近いものは少ない。よって、図示していない、土器群の概要を中心にして述べることにする。

まず、器種であるが、甕が口頸部での個体数換算で34個体を数え、高坏が脚部の個体数でそれと同数の34個体を数える。壺は確認できず、小型壺が口縁部及び大きな胴部片で10個体、他に碗3個体とミニチュア土器1個体が確認されている。甕が主体的で、胴部破片の量が多いことから、破片数では9割方を占める。ただ、高坏の量は多く、小型壺よりも確実にその量を上回っている。また、碗の個体数が少ないながら、定量存在することは注目される。以下に器種ごとに説明する。

《甕》口縁部器形はA a類が9個体と主体を占めるが、他の器形もA b類3、B b類1、C a類2と定量ある。胎土はA類及びB類が主体で、併せて7割半を占め（A類とB類の区分が明瞭にできないものもあるため、量比ははでないが、A類5割、B類2割半程度か?）、他は全てC類である。

《小型壺》図示したA類器形の60とC類器形の61以外では、A類器形の口縁部と思われるものが3点出土しているのみで、他は胴部破片である。胎土はC類主体である。

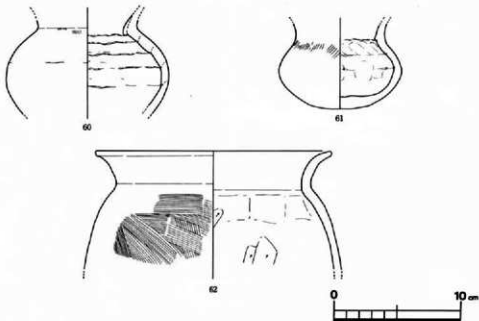
《高坏》確認個体数は多いが、C類器形の破片が2点出土する以外は、いずれも器形のわからない体部破片か脚部の破片である。胎土はA類が6割の過半数を占め、次いでC類が3割、高坏胎土としては目立つはずのD類胎土は1割にも満たない。

《碗》薄手A1類の破片のみで、口縁部破片が3個体、体部破片が3個体出土している。胎土はA類とC類がある。

《ミニチュア土器》手づくねのA類が1点出土している。胎土はA類。

5. 49・50号土坑出土の土器

2基重複している土坑で、出土量は概して少なく、大半が甕の破片である。遺構別では49号土



第42図 古墳時代中期の土器(7) (S=1/3、上段包含層・下段49号土坑)

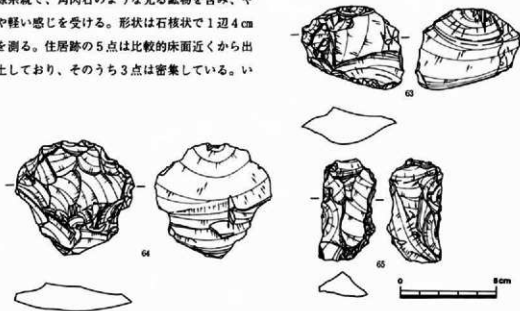
坑で図示したA b 1類器形(62)の他、壺の破片1点、甕の口縁部破片1点、甕の胴部破片31点
 が出土している。50号土坑は全て甕の破片で、口縁部片1点と胴部片32点出土している。胎土は
 大半がA・B類で、B類が主体的、C類は1割未満である。破片のみであるため、時期の比定は
 困難だが、甕の口縁部器形や刷毛の具合から、27号住居跡に伴う一連の土器群よりは後出するも
 のと判断する。

番号	器種	法量	色調	胎土	存率	番号	器種	法量	色調	胎土	存率
41	甕Aa1	□16.8,脚23.7	淡黄褐	C	2/3	53	高坏Bb	□16.3,脚11.8,高14.5	灰褐	D	略完
42	小壺A	胴14.8	濃肌	C	胴完	54	高坏C1	□16.8	濃肌	A	坏完
43	小壺A	□6.7,胴8.0,高9.0	薄肌	C	略完	55	高坏b	脚12.3	肌	A	坏完
44	高坏C1a	□15.3,脚10.5,高13.0	肌	A	完形	56	高坏a	—	暗淡肌	A	脚片
45	高坏C1	□16.4	濃肌	D	坏完	57	高坏b	脚11.4	濃肌	A	脚完
46	高坏B?	□14.5	肌白	E	1/5	58	高坏a	脚12.8	淡黄褐	A	脚完
47	高坏a	脚10.6	濃肌	D	坏1/2	59	高坏b	—	淡黄褐	A	脚片
48	鉢B	□11.6,底5.3,高7.6	肌	D	完形	60	小壺A?	胴12.8	黄褐	A	1/2
49	ミニA	□4.2,高3.5	淡黄褐	C	略完	61	小壺C?	胴9.7	肌	B	4/5
50	甕Aa1	□17.0,脚23.5	(赤)肌	A	4/5	62	甕Ab1	□18.6,脚20.5	暗薄肌	A	口片
51	甕Cb2	□17.2	淡黄褐	A	全体						
52	同一器種	胴29.0			1/4						

表 土坑及び包含層出土土器

6. 土器以外の遺物(第43図)

27号住居跡の覆土及び周辺の包含層からは6点の緑色凝灰岩の剥片が出土している。包含層の
 1点は住居跡の5点のものよりも色が薄く、薄
 緑系統で、角閃石のような光る鉱物を含み、や
 や軽い感じを受ける。形状は石核状で1辺4cm
 を測る。住居跡の5点は比較的床面近くから出
 土しており、そのうち3点は密集している。い



第43図 古墳時代中期の石製品 (S=1/2,全て27号住居跡出土)

いずれも3～6cmの大きさのもので、厚さ1cm程度の剥片である。石質はいずれも同質で、淡青緑系統を呈し、緻密で、包含層のものよりも重量感がある。いずれも製品（玉）製作時の剥片であると予想するが、石器のようにところどころ緑部を加工しており、搔器状の石器として加工したものかもしれない。

第3項 27号住居跡及び周辺土坑出土一括土師器群小考

これまで、27号住居跡を中心として遺構と遺物を述べてきたが、ここで27号住居跡を中心とする古墳時代中期の土師器様相についてまとめ、本節の結びとしたい。

《27号住居跡及び周辺土坑出土土器の出土状態の評価》

まず、27号住居跡の土器群の評価については、住居跡自体に伴うものとは言えないが、その住居跡廃棄直後に投げ込まれた土器群として評価でき、また、周辺土坑も住居跡覆土土器との接合関係から同時廃棄、これらもをあわせて、27号住居跡廃棄後（廃棄直後？）に投棄された一括性の高い土器群として評価する。包含層遺物についても、この住居跡・土坑の所在する区域より出土しているため、これらも同様の土器群として捉えることはできるが、一括性という点からははずれており、27号住居跡及び周辺土坑出土の土器群のみを一括土器群として取り扱うこととし、以下に、以上の一括性を前提とした、当土器群の様相を述べることにする。

《器種構成》

当土器群は土師器のみで構成されており、1点の須恵器も出土していない。これは谷を挟んだ東側に位置する念仏林南B遺跡でも同様で、基本的には土師器のみ構成される土器組成であったと判断する。ただ、土師器の中には小型壺B類のような確実に須恵器模倣した器種も定量出現しており、焼き物の種類の違いはあっても須恵器の形は土器組成の中に既に含まれているものと言える。

土師器は、破片数では壺が圧倒的多数を占めるが、個体識別数では壺・高坏・小型壺が比較的均衡した数値を示す。まず最も占有率が高いのは高坏の31%で、次いで壺の27%、小型壺の22%、3器種あわせると全体の80%も占める。他の器種では碗・鉢類の9%とミニチュア土師の7%がやや多い傾向をもつが、前記3器種とは大きな占有率の差をもち、小型壺と壺では2%と低率である。以上の、高坏・小型壺の供献土器が高率、そしてミニチュア土師が定量存在する、祭式的要素をもつ器種が高い率で存在することが第1の特徴と言える。第2の特徴としては、器種交替の時期にあたっていることで、消滅してゆく伝統的器種と新たに出現してくる器種が併存し、いずれも低率で存在する。当土器群では従来の大型の壺形器種がほぼ消滅の様相、以後新器種として土師器食器の定量占める碗・鉢等の出現期の様相、以後に繋がるかはやや不明だが、小型壺も新器種として出現している。

《主な器種の特徴》

〔甕〕

図を見れば分かるように、「く」字口縁のA類が主体であるが、破片での口縁部数も加算すると、6割程度の占有率であり、C類の「布留系」が3割弱と予想のほか多い割合を占める。口縁部破片数での量であるため、見た印象とは異なっているが、C類甕が必ずしも消滅段階にあるとは言いがたい。しかし、いずれも、概して厚手、調整も粗い刷毛で、胴部粘土接合痕を残すものが目立つ傾向にあり、粗製の印象を受ける。

〔壺〕

小型のものが従来の壺形土器の系統に属す可能性が薄く、大型のみを取り上げれば、有段口縁の「山除系」と呼ばれるもので、口縁部は小型化しているが、まだしっかりとした器形を保持しているものである。従来の壺の形を保つ最終段階であろう。

〔小型壺〕

甕形のB類が出現しているが、2割と少なく、主体は以前から継続する小型壺（増）器形のA類である。6割近くの高い率をもち、短頸壺状のC類はB類同様少ない。B類は須恵器の甕を模倣した器種だが、いずれも小型の甕で、それぞれ器形に差はあるものの、頸部の太さや胴部器形の感じからTK208型式からTK23型式のものをモデルにしていたものと思われる（胴部と口頸部の比率や頸部屈曲の感じからTK216型式へは逆上らず、TK47ほど口頸部は大きくならない）。また、A類類似器形で一回り小型（ミニチュアよりは大型）のものが存在し、手づくね状の成形をしており、特徴的である（田嶋氏の言う小型壺B類から手づくね土器への祭祀器種交替を示唆?）。

〔高坏〕

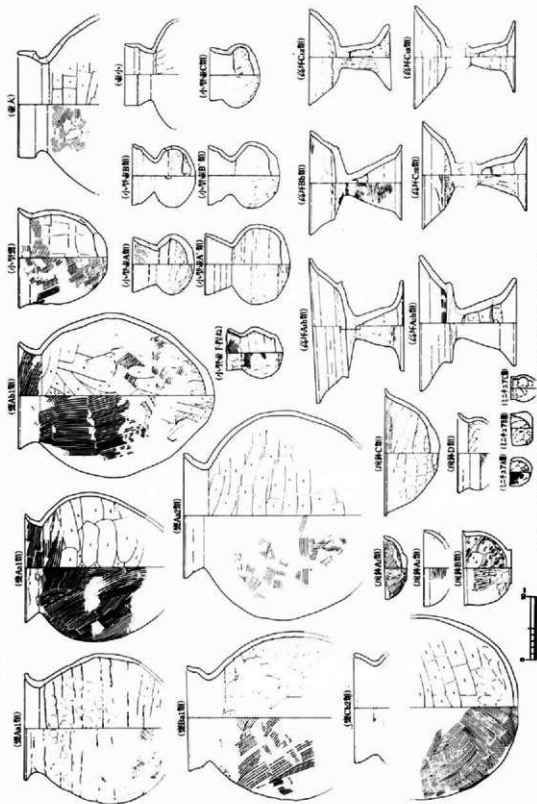
坏型の坏部をもつB類が少量存在する以外は、一般的な法量はC a類、大型法量はA b類には器形統一されている。割合はC a類が6割半、A b類が3割程度で、C a類はミガキ調整を基本とする1類が主体的、A b類はやや厚手の作りの悪い2類が主体的と言える。

〔瓏・鉢〕

浅身の瓏器形A類は少量存在するものの、その量は極少量であり、以後に続く器形と目されるA 1類は破片のため、底部器形が分からないのと、確実に平底のA 2類が存在することは、定型前の初源の様相と言えるものである。他の瓏・鉢についても個数は少なく、定量存在するような器種ではない。

《当土器群の特徴と編年の位置付け》

当該時期の土器編年については、南加賀地域を主体とした田嶋明人氏の編年がある。氏の編年は漆町遺跡で報告した漆町編年（田嶋1986）をベースとしているが、翌年永町ガマノマカリ遺跡の報告で編年を修正し、弥生時代後半から中世初期までのより一層体系的な編年軸を策定してい



第44図 27号住居跡及び周辺土坑出土土師器群の組成 (S=1/6)

る(田嶋1987)。この田嶋氏の土器編年において、当土器器群がどのような位置付けができるか、田嶋氏の設定した土器概念と当土器器群の特徴は一致するのか、以下に考えてみた。

全体的な様相から、田嶋氏の言う古墳3様式に該当する土器器群と言えるもので、3様式I期の特徴として上げている項目と3様式II期の特徴として上げている項目の両方で合致する部分がある。まず、I期に該当する特徴を列挙すれば、「布留系」甕C類(永町ガマノマガリ遺跡分類「以降ガマと標記」甕A類)の残存傾向、小型壺A類の主体的存在(ガマ小型壺A類)、甕の定型前段階、須恵器の未共伴の状況で、これのみを見ると、3様式I期の設定概念に対応していることになる。しかし、I期では未だ定型的に出現しておらず、II期になって定型化すると言われる、高坏A b類(ガマ高坏A2・A3類)や小型壺B類(ガマ扁形A2類)、ミニチュア土器の存在は明らかにII期に該当する型式概念の項目であり、両期の様相が共存している。つまり、過渡期として位置付け可能ということとなるが、ただ、II期を特徴づけると言える甕C類の消滅、小型壺A類の減少、甕類の定型化(完成)、須恵器の共伴は当該土器群には認め難いものであり、3様式II期の様相を田嶋氏が「12群(3様式I期)土器に萌芽的に認められた諸要素の定着・完成期」(田嶋1987)であるとしていることを考えれば、当土器群は依然として定着以前の段階にあるわけであり、I期の型式概念の範疇におさまるものと考えたい。II期の様相に対比できる高坏A b類、小型壺B類の存在は、I期(漆12群土器)の標識とした漆町遺跡132号土坑の資料(田嶋1986)に、脚裾端部面をもち筒部がやや膨らむ大型の脚部が存在しており、これが高坏A b類になる可能性があること、そして、扁形の小型壺B類はやや定型前の形ではあるが胴部穿孔した小型壺がI期の新相として位置付けられている高屋遺跡方形周溝状遺構において存在していることから、十分にI期に逆上り得る要素であり、II期への過渡的要素を含んでいることは間違いないが、土器様相としてはI期に該当するものと判断する。ただ前述では小型壺B類のモデルをTK208型式~TK23型式に求めており、田嶋氏がII期の須恵器併行関係をTK208型式に求めていることを考えれば、限りなく、II期に近い段階として位置付けられるものと言える。

以上、当土器器群をあくまでも一括性を前提とした資料として扱い、既存の編年軸の中で、対比、位置付けてきた。田嶋氏の提示した古墳3様式I期そしてII期への変化は、対象とした遺跡が当遺跡と近い距離にあるため、概ね合致する様相であり、I期からII期への変化をみるにおいて良好な資料が提示できたと思う。ただ、高坏A b類や小型壺B類がI期の新しい段階で定型化したものが存在していることは新しい知見であり、遺跡としての差も考慮する必要があるが、一つの様相として提示できるものと考ええる。

引用・参考文献

- 櫻田 誠 1994「古墳時代中期の遺構と遺物」『念仏林南遺跡I』小松市教育委員会
田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1987「遺構・遺物の検討」『永町ガマノマガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物

第1項 遺構

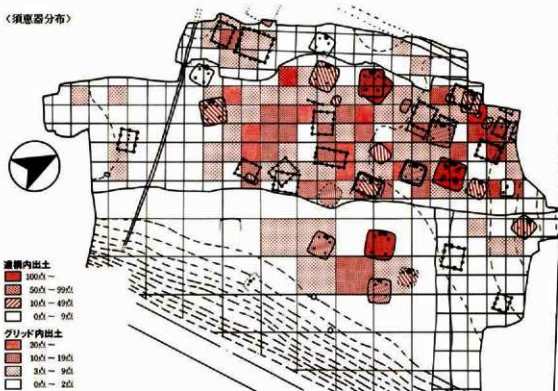
古墳時代後期としたが、飛鳥時代にかかっている時期のものであるため、～古代初期とすべき時期のものである。中心は、6世紀末～7世紀初頭の時期で、少量ではあるが、7世紀中頃まで下るものも存在する。遺構は竪穴住居跡22軒と掘立柱建物跡19棟、土坑9基、溝2条があり、念仏林南A遺跡のほとんどの遺構は当該時期に属する。B遺跡では当該時期の遺構を1カ所も確認していないことから、それまでのA・B両遺跡において営まれた遺跡としての形ではなく、A遺跡でのみ構成されるまとまりをもった村落であったものと考えられる。

さて、遺構の分布は調査区域のほぼ全域に広がっているが、中央から北側にやや集中する傾向がある。遺跡自体はもう少し北西側に伸びて、谷の入る部分まで存在するものと予想されることから、集中区域がほぼ遺跡の中央になるものと予想されるのであるが、南側への遺構の伸びはなく、東西に走る溝の付近から遺構が見られなくなる。つまり、調査区域の南側と北西側に存在する溝が、遺跡の区画溝であった可能性があるわけで、東側と北側の谷とあわせて、方形に区画された中で、村落を営んでいた可能性をもつ。ただ、溝の外側でも13号掘立柱建物跡と36号土坑の2つの遺構が確認されているので何とも言い難いが、36号土坑は墓坑の可能性があると13号掘立柱建物跡は倉庫としての可能性があり、さらに、包含層遺物がこの溝の周辺で極めて減少すること、36号土坑出土の遺物が7世紀中頃と新しい時期に属し、包含層遺物の数少ない7世紀中頃の遺物が溝より南側に多く見られることを総合させれば、溝より南側に遺構が存在していたとしても、溝の北側とは異なる時期か異なる性格の遺構の可能性が高く、溝で遺跡は一度区切られていると見て妥当と判断される。溝と谷に区画された中で遺構分布は、比較的遺構どうしでの重複が少なく、特に同種建物どうしでの重複は、竪穴住居跡どうして19号住居跡と23号住居跡のみ、掘立柱建物跡どうして10号掘立柱建物跡と11号掘立柱建物跡のみの1例ずつと極少ない。竪穴住居跡と掘立柱建物跡との重複でも、14号竪穴住居跡と4号掘立柱建物跡・16号掘立柱建物跡、17号竪穴住居跡と17号掘立柱建物跡、16号竪穴住居跡と15号掘立柱建物跡の3例のみであり、41の建物が存在するには、重複の少ない遺構配置であると言えよう。遺構の主軸は、溝や谷の方形区画の軸（北西）に沿うものが最も多く、7割近くはほぼ類似した方向を向き、それよりやや西に向く、グリッド方位に沿ったものが定量存在する。区画に沿った北西方位からグリッド方位までの範囲の中で、ほぼ建物の主軸はそろっており、計画性の高さを感じさせる。建物遺構の他は、土坑があるのみで、墓坑と思われる36号土坑の他は、全て土器捨て土坑である。建物跡に隣接しているものが多く、付属的な土坑として性格付できるものと思われる。

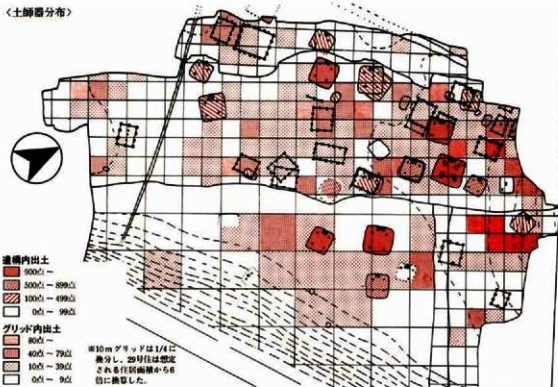
1. 竪穴住居跡

(1) 1号竪穴住居跡

〈須恵器分布〉



〈土師器分布〉



第45図 古墳時代後期の遺構分布と遺物分布 (S=1/1,000)

(立地) 1次調査区域D1Grで検出された住居跡状の堅穴遺構で、1号溝から北へ10m、東側谷部傾斜の始まる手前に位置する。主軸は北から西へ60度近く振っており、Gr方位に沿う形で存在している。

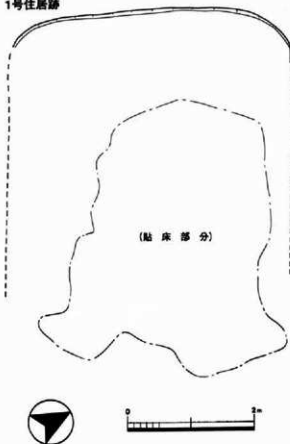
(規模と形態) 掘り込みが浅く、明確に壁が立つのは、北西側の面とそれの両側のコーナーのみである。この遺構は貼り床状の硬質に踏み締まったような部分が発出されたことから遺構を確認しており、遺構プランも貼り床状を追うことによって確認しているため、明確な規模・平面プランはとらえていない。さらに、遺物の出土も極少ないことや、柱穴も確認されなかったことから、住居跡ではない可能性が高く、単なる堅穴遺構として取り扱うべきものかもしれない。

(2) 2号堅穴住居跡

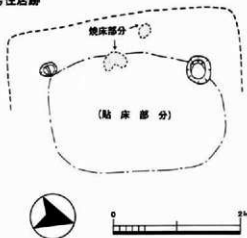
(立地) 1次調査区域D2Grで検出された住居跡状の堅穴遺構で、1号堅穴住居跡の5m東側、東側谷部傾斜の始まりかけの部分に位置する。主軸は遺構がどちらに向くのか不明であるが、いずれも北西側を向くことに合わせれば、北から西へ30度近く振っている。

(規模と形態) 1号堅穴住居跡と同様、掘り込みが浅く、貼り床状の硬質面を確認したのみで、明確な壁の立ち上がりを確認していない。ただ、床面に焼けた箇所が確認され、また、柱穴状のピットが2本検出されたことより、1号堅穴住居跡よりは住居跡としての可能性が高く、焼土部分で土師器も多く分布している。

1号住居跡



2号住居跡



第46図 1号住居跡・2号住居跡平面図 (S=1/60)

(3) 3号竪穴住居跡

(立地) 1次調査区域G1・H1Grで検出された大型の竪穴住居跡で、東側谷部傾斜始点から20m西側に入った所に位置する。主軸は北から西へ58度振るグリッド方位に近いものである。

(規模と形態) 規模はカマドを上面と捉えて、縦軸・横軸を設定して測ると、縦が壁際700cm、中軸上760cm、横が壁際660cm、中軸上750cmを測る。胴張り正方形プランを呈する。壁は西側コーナー付近で20cm以下とやや浅くなるものの、以外は30～34cm程度と深く、ほぼ直立して立ち上がっている。床面積はカマドも入れて約49㎡を測り、当遺跡で2番目に大きな竪穴住居跡である。

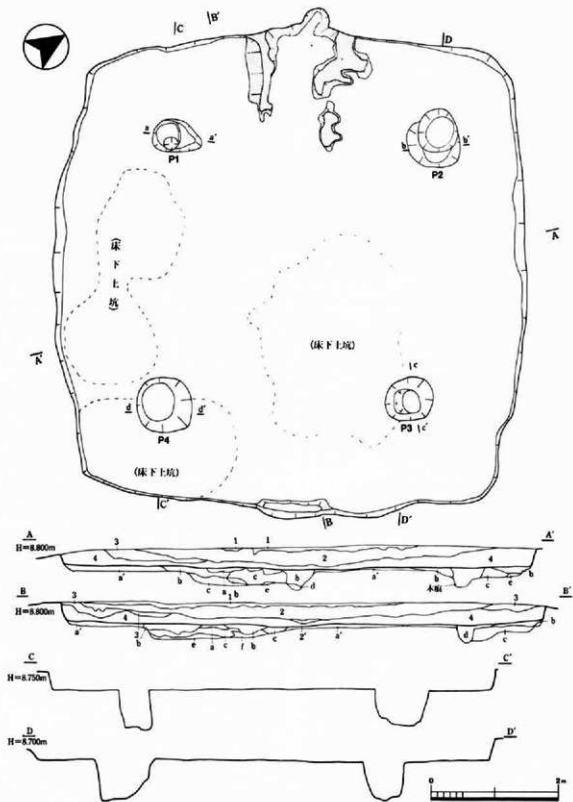
(覆土堆積状況) 上層は褐色味の強い暗褐色土、中層は土器を多く混在させる黒褐色土、下層は黄褐色土が堆積している。住居跡壁際から中央に向かって徐々に薄くなるレンズ状の堆積である。

(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1～P4で、径50～60cmのほぼ円形、深さ60～65cmを測る。壁から100～120cm内側に入ったところに掘り込まれており、柱間を結ぶと縦420cm、横400cmの少しばかり縦に長い、正方形に近い形を呈す。柱穴覆土はP4で柱痕(柱痕径は15cm)抜き取り穴状の覆土堆積が見られた以外は、全て掘り方まで同質の土が堆積するもので、住居跡覆土下層よりも黒い、暗褐色土が堆積している。4本の主柱穴以外では、住居跡に伴うと思われるピットはない。

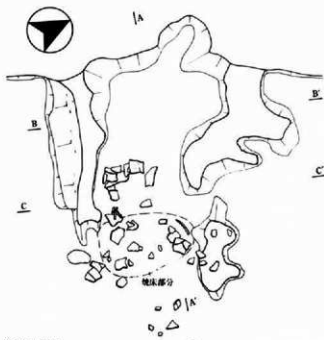
(カマド) カマドは北側壁の中央に位置し、規模は縦170cm、横190cmを測る。床は地山床面を少し掘り込み、黄白色系砂質粘土塊を多量混在させる暗褐色土を貼って作られ、奥壁側も同様の土を貼っている。天井は全て崩壊、袖部の残りもやや悪く、所々途切れている。袖構築土は黄白色系砂質粘土をベースとするが、暗褐色土も混在させる傾向があり、下から上まで粘土で作るのではなく、下の基礎となる部分は暗褐色土と混ぜて固めた土で、その上に黄白色砂質粘土が乗っていたと予想する。本カマドの火床面は、燃焼部のみ、奥壁から115cm手前、50cmの範囲でのみ存在し、他は袖についても焼けた面は確認できていない。カマド奥は住居跡奥壁の外側には突出せず、内側で粘土貼り、傾斜を緩くして作られている。運出し施設が奥にあるのであろう。カマド覆土は上層で住居跡覆土と同様の土が、下層で焼土粒を多く含む土層が堆積。天井崩壊土の土は確認できなかった。

(床面と床下の状況) 床面は、全面フラットで、壁際から中央までほぼ均一な高さをもつ。全面貼り床で、貼り床土は黄土塊と黒褐色土塊の混在する硬質の土であるが、一部床下土坑の存在する部分では黄土塊を多く含むものの、やや軟質の土で貼られている。この床下土坑は3カ所ほど掘られているが、不定形な浅い大きな土坑で、少なからず、遺物が出土している。覆土を見ると、確実に床下に存在しており、黒色系の土層堆積もないことから、土坑に土砂堆積する以前に当住居跡が掘り込まれたか、当住居跡の竪穴掘り方段階に伴い、何らかの目的で掘り込まれたものと考え。3基の土坑ともほぼ同様の土で埋められている。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土の遺物は、用途不明の石が数点ある以外は、全て



第47图 3号住居跡平面·断面图 (S=1/60)



全てH=8.600m



全てH=8.400m



第48図 3号住居跡カマド平面・断面図及びピット断面図 (S=1/30)

3号住居跡壁土層註

- 1層 暗黄褐色土：やや砂質。
- 2層 暗褐色土：暗黄褐色土少量混在。上部多め、炭化粒少量含有。
- 2'層 2層に近似的るも、やや明るい。
- 3層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有。しまり有。
- 4層 黄褐色土：黄土粒多量含有。しまり有。

3号住居跡貼り床下土層註

- a層 暗黄褐色土：黄土と暗褐色土層により構成された貼り床土。
- a'層 a層と同様貼り床土だが、やや明るい。
- b層 暗褐色土：黄土粒多め、黄土粒少量含有。しまり有。
- c層 暗黄褐色土：黄土粒・炭多量含有。硬質。貼り床軟質層。
- d層 暗褐色土：黄土粒少量含有。
- e層 暗黄褐色土：黄土粒・炭多量含有。
- f層 暗褐色土：黒土層と黄褐色土混在。黄土粒少量含有。極硬質。

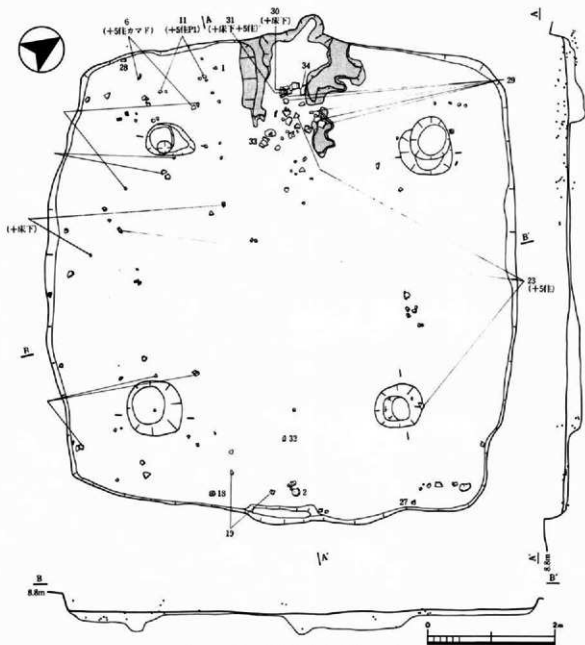
3号住居跡ピット壁土層註

- 1層 暗褐色土：黄土・炭多量含有。
- 2層 暗(黄)褐色土：黄土・炭少量含有。
- 2'層 2層よりも軟質。
- 3層 暗(黄)褐色土：軟質。
- 4層 褐色土：黄土粒多量含有。砂質。
- 5層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。軟質。
- 6層 (暗)黄褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。
- 7層 黄褐色土：暗褐色土少量混在。軟質。

3号住居跡カマド壁土・床下土層註

- 1層 暗黄褐色土：しまりに欠け。砂質土。
- 2層 暗褐色土：ややあいまり有。
- 3層 暗褐色土：黄土粒多め含有。
- 4層 暗褐色土：黄土粒多め含有。しまり有。カマド床土。
- 5層 黄褐色土：粘土質で、硬質。
- 6層 暗(黄)褐色土：しまり有。
- 7層 暗(黄)褐色土：しまり有。
- 8層 暗褐色土：黄土粒含有。しまり有。砂質土。
- 9層 暗黄褐色土：黄褐色砂質土多量混在。
- 10層 暗褐色土：砂質粘土の塊けた層。
- 11層 暗(赤)褐色土：黄土多量混在。
- 12層 暗赤褐色土：地山の塊けた層。
- 13層 暗褐色土：黄土多量混在。
- 14層 黄褐色土：焼熱のためやや赤味帯びる。
- 15層 黄褐色砂質粘土：暗褐色土少量混在。カマド焼結層土。硬質。
- 16層 暗黄褐色砂質土：やや硬質。
- 17層 暗褐色土：黄土粒少量含有。しまり有。
- 17'層 17層よりもやや明るい。
- 18層 暗褐色土：黄褐色土砂質土多量含有。砂質。
- 19層 暗褐色土：黄褐色土砂質土少量。黄土粒多め。しまり有り硬質。カマド床土。
- 19'層 19層に近似的るもやや明るく、やや砂質。
- 20層 (暗)褐色土：黄土粒少量含有。
- 21層 暗黄褐色土：焼砂質粘土多量混在。炭化粒・黄土粒多量含有。カマド焼結層土。
- 22層 暗(暗)褐色土：焼砂質粘土少量含有。

土器で、須恵器139点、土師器918点を数える。点数の割に分布図がやや疎らなのは、上層の遺物の地点を記録せず取り上げたのと大きめの破片のみ図示したためで、実際はもっと密に遺物分布が見られる。しかし、大型住居としてはやや遺物量は少なめで、カマド周辺と、奥壁側と手前壁側の壁際にはば集中し、土師器煮炊具の大きめの破片類はカマドの火床面周辺にままとまっている。カマド出土の土師器煮炊具は完形復元できるものは1個体もなく、当カマド設置の土器として位



第49図 3号住居跡遺物出土状況図 (S=1/60)

置付けできるものはないが、29・30の甕と33の甌はカマド内のみで接合し、比較的大きめの破片であることから、当住居跡に伴うものとして位置付け可能である。また、食膳具では2の須恵器坏H身と18の土師器甕が正位の状態ではほぼ完形品で床面近くから出土しており、いずれも手前壁際から出土していることから、住居跡に伴うものと判断され、住居跡の帰属時期を想定させる資料である。これら以外の遺物は、出土状況や接合状況から判断して、周辺からの廃棄遺物と考えられるものであるが、24・25の小型甕のみは床下土坑からのまとまった出土であり、当住居跡以前の廃棄品である。当住居跡と接合関係にあるのは、5号竪穴住居跡と4号竪穴住居跡、20号竪穴住居跡埋土で、特に5号竪穴住居跡とは多数点見られる。覆土間のみでなく、カマド覆土や支柱穴内との接合もあり、両者の密接な関係が予想できる。

(4) 4号竪穴住居跡

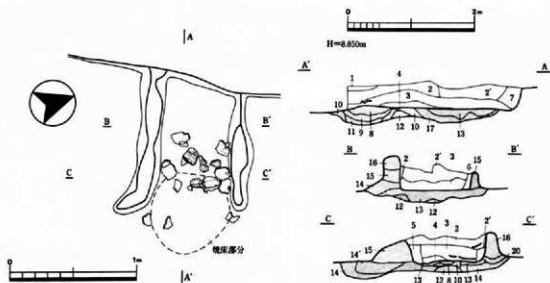
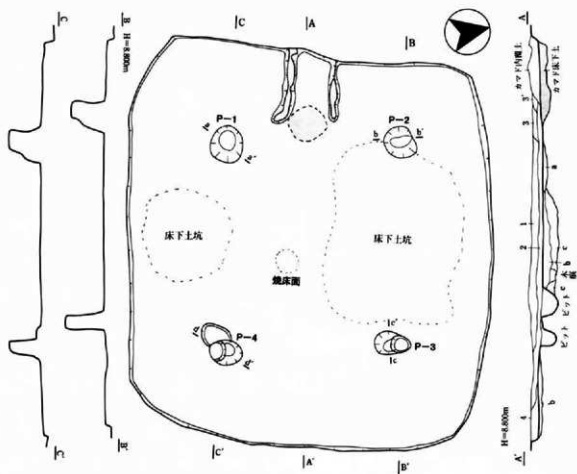
(立地) 1次調査区域H2・G2・H3・G3Grにまたがって存在する竪穴住居跡で、3号竪穴住居跡の5m南側、東側谷部傾斜始点と3号竪穴住居跡とのほぼ中間ぐらいに位置する。主軸は3号竪穴住居跡とほぼ同様のグリッド方位に近い軸をとるが、北から西へ67度と、3号竪穴住居跡よりも少しばかり、西側に振っている。

(規模と形態) 規模は、縦が610～620cm、横が550～560cmを測る。平面プランはやや縦に長い方形プランで、コーナーのやや丸い形態である。壁は10～15cmと浅く、ほぼ直立して立ち上がる。床面積はカマドも入れて約32㎡。

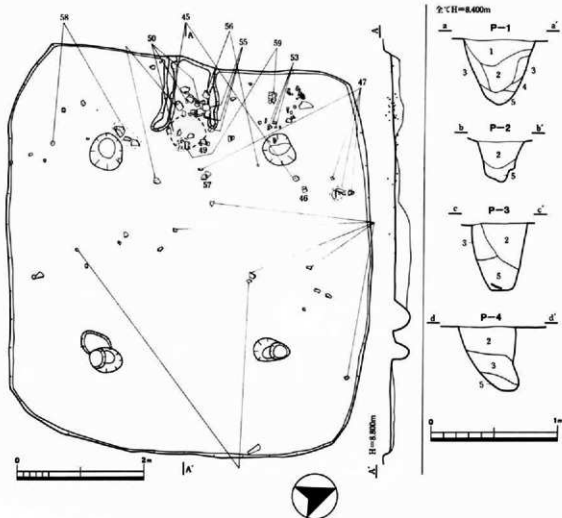
(覆土堆積状況) 手前壁際側から40cmまでで黄褐色系の流れ込みの土層が存在する以外は、上層・下層ともに暗褐色土である。上層はやや砂質、下層では黄土塊多めに存在し、カマド近くでは焼土粒の分布が目立つ。

(柱穴と他のピット) 支柱穴はP1～P4で、いずれも深さ50～60cmを測るが、大きさはP1とP2が径50cm程度の大型、P3とP4が径30cmの小型となっており、掘り方でも同様、大きさに違いが存在する。柱穴は壁から120～150cm内側に入ったところに掘り込まれており、柱間を結ぶと縦330cm、横280cmの長方形を呈す。柱穴覆土はP1とP3で掘り方の裏込め土的な黄褐色土が確認できるが、柱痕状の覆土堆積は確認できず、掘り方でも同質の土が堆積している。覆土は上層で通有の住居跡下層類似土が堆積するものの、下層では住居跡覆土には見られなかった軟質の黒褐色土が堆積しており、注目される。埋め戻しの土か。4本の支柱穴以外では、住居跡中央に2つピットが存在するが、当住居跡に伴うと思われるピットとは思われない。

(カマド) カマドは北側壁のほぼ中央に位置し、規模は縦140cm、横90cmを測る。床は地山床面を10cm程度掘り込み、黄白色系砂質粘土塊を多量混在させる暗褐色土を貼って作られる。天井は全てなくなっているが、袖部の残りは比較的良好である。袖構造土は黄白色系砂質粘土をベースとするが、暗褐色土も混在させる傾向があり、下から上まで粘土で作るのではなく、下の基礎となる部分は暗褐色土と混ぜて固めた土で、その上に黄白色砂質粘土が乗っていたと予想する。本カマドの火床面は、燃焼部のみ、奥壁から75cm手前、65cmの範囲でのみ存在し、焼きが強く、



第50図 4号住居跡平面・断面図及びカマド平面・断面図 (上: S=1/60, 下: S=1/30)



- 4号住居跡埋土層註**
- 1層 暗褐色土：炭化物少量含有。やや砂質。
 - 2層 暗褐色土：黄土多め。炭化物少量含有。
 - 3層 暗褐色土：黄土塊・炭化物多め。黄土粒少量含有。
 - 4層 暗黄褐色土：黄土塊少量。黄土粒多量含有。

- 4号住居跡貼り床下土層註**
- a層 暗黄褐色土：地山土の硬質土。貼り床土。
 - b層 暗黄褐色土：黄土塊と暗褐色土塊により構成された硬質の貼り床土。
 - c層 暗黄褐色土：黄土塊と暗褐色土の混在土。

- 4号住居跡ピット埋土層註**
- 1層 (黄)褐色土：黄土多め。炭化物少量含有。
 - 2層 暗褐色土：黄土粒・炭粒少量含有。
 - 3層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。
 - 4層 暗赤褐色土：黄土粒・炭化物多め含有。
 - 5層 黄褐色土：黄土粒少量含有。しりり無軟質。

- 4号住居跡カマド埋土・床下土層註**
- 1層 暗褐色土：黄土粒・黄土粒少量含有。
 - 2層 褐色土：黄褐色砂質粘土塊少量含有。
 - 2'層 黄褐色土砂質粘土塊多量含有。
 - 3層 暗褐色土：黄土粒・炭化物少量含有。
 - 4層 暗褐色土：黄土粒多量含有。
 - 5層 暗褐色土：黄土粒・黄土粒少量含有。
 - 6層 黄褐色土砂質粘土と褐色土の混在土。
 - 7層 暗褐色土：黄褐色土砂質粘土粒少量含有。
 - 8層 暗褐色土：硬質に焼けてしまったカマド床。
 - 9層 赤褐色土：硬質ではないが、地山焼土。
 - 10層 暗褐色土：炭化粉・黄土粒少量含有。
 - 11層 赤褐色土：地山焼土(生焼?)。
 - 12層 黄褐色土：暗褐色土・炭化物少量含有。
 - 13層 暗黄褐色土：黄褐色土砂質粘土塊少量含有。しりりよく硬質。焼けていないカマド床。
 - 14層 暗褐色土：黄褐色土砂質粘土多量含有。
 - 14'層 黄褐色土砂質粘土塊混在。
 - 15層 暗黄褐色土：黄褐色土砂質粘土塊多量混在。カマド跡埋土。
 - 16層 黄褐色砂質粘土：硬質。カマド跡埋土。
 - 17層 暗褐色土：黄褐色砂質粘土粒・炭化物含有。

第51図 4号住居跡・遺物出土状況図及びピット断面図 (左：S=1/60、右：S=1/30)

被熱層も厚く、袖よりもかなり手前まで焼けている。カマド奥は住居跡奥壁の外側には出ず、住居跡の壁をそのまま使用しているため直立気味に立ち上がる。カマド覆土は天井崩壊土を予想させるような黄白色砂質粘土塊を多量混在した土層が奥壁側の上層で確認でき、同様の土層が袖周縁でも確認できる。覆土下層では焼土粒を少量含む暗褐色土が堆積し、床面近くではより焼土粒の量が増える。ここでは7層は覆土として捉えたが、黄白色砂質粘土を含んだ土であるため、壁立ち上がりの貼り土である可能性があり、そう考えると、床面の貼り土の立ち上がりと符合する。

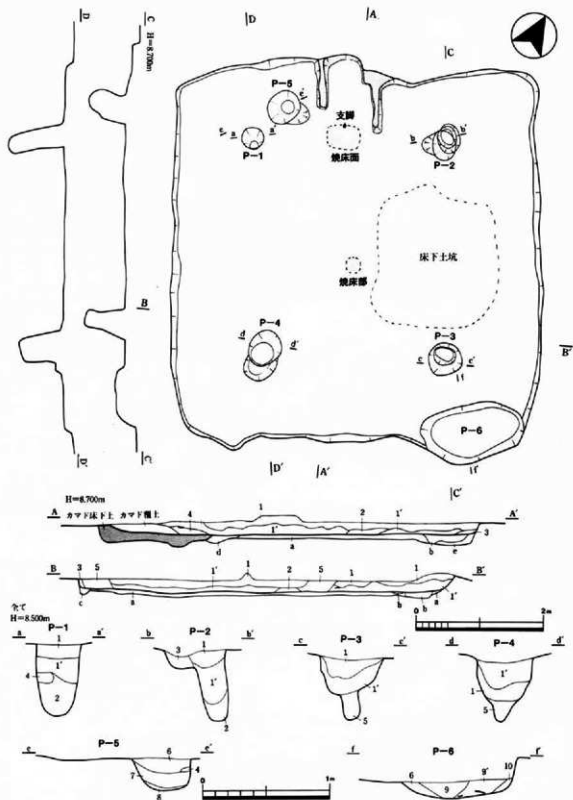
(床面と床下の状況) 床面は、壁際よりも中央が約10cm下がる傾向が見られるが、面的にはフラットである。この床面には、主柱穴に囲まれた中、住居跡のほぼ中央に、径40cm程度の範囲で床面の焼けた部分が存在する。被熱層がさほど厚くないため、継続的な炉として使用したかは定かでないが、住居跡中央に存在することを考えれば、囲炉裏的な施設とも考えられる。貼り床は住居跡中央付近を中心に主に東側で確認できるのみで、カマド周辺や西側壁際では地山のままの床となっている。貼り床土は地山の硬質化したような硬質黄褐色土層と黄土塊と暗褐色土塊の混在する硬質土層があり、前者の層は地山に類するため、地山の踏み固めて硬質化したものとも考えられる。後者の貼り床土は主柱穴の東側や床下土坑の存在する部分で確認でき、この中に少量ながら遺物も混在している。床下土坑は2カ所ほど掘られているが、いずれも主柱穴の上下にははみ出さず、不定形な浅い大きな土坑が掘られている。覆土は貼り床同様の土が堆積し、遺物も少なく、掘り方に関連するものと予想される。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土の遺物は、手前側壁際の床面から砥石状石器と用途不明の石が数点ある以外は、全て土器で、須恵器81点、土師器504点を数える。出土点数は3号竪穴住居跡の約半分、接合も少ない。遺物分布はほぼカマドとその周辺の奥壁域とに集中し、それ以外では極疎らである。須恵器はほとんど破片であり、比較的床面から浮いて出ており、当住居跡に伴うものはない。これに対し、土師器は45・47の高坏が大きな破片で、床面直上より出土しており、煮炊具も50の鉢や58の甕、59の甔がカマド内及びカマド周辺の床面からまともに出て出土している。当カマド設置の土器として位置付けできるものではないが、大きめの破片であることから、当住居跡に伴うものとして位置付け可能である。当住居跡と他の遺構との接合関係は、混入品的な覆土上層の須恵器甕のみで見られ、42の須恵器甕で5号竪穴住居跡・6号竪穴住居跡とが、43の須恵器甕で5号竪穴住居跡・3号土坑とが接合している。覆土上層どうしでの遺物接合であるため、さほど強い因果関係は感じない。

(5) 5号竪穴住居跡

(立地) 1次調査区域F1Grで検出された竪穴住居跡で、3号竪穴住居跡から南西へ8m、東側谷部傾斜始点から10m西側に入った所に位置する。主軸は北から西へ30度振る、比較的北方を向いた方位である。

(規模と形態) 規模は縦が580~600cm、横が580cmを測る、ほぼ正方形の平面プランを呈す。壁は15cm前後と浅めで、やや外傾気味に立ち上がっている。床面積はカマドも入れて約35㎡を測



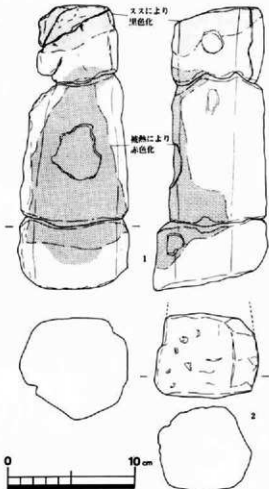
第52図 5号住居跡平面・断面図及びピット断面図 (上: S=1/60, 下: S=1/30)

る。

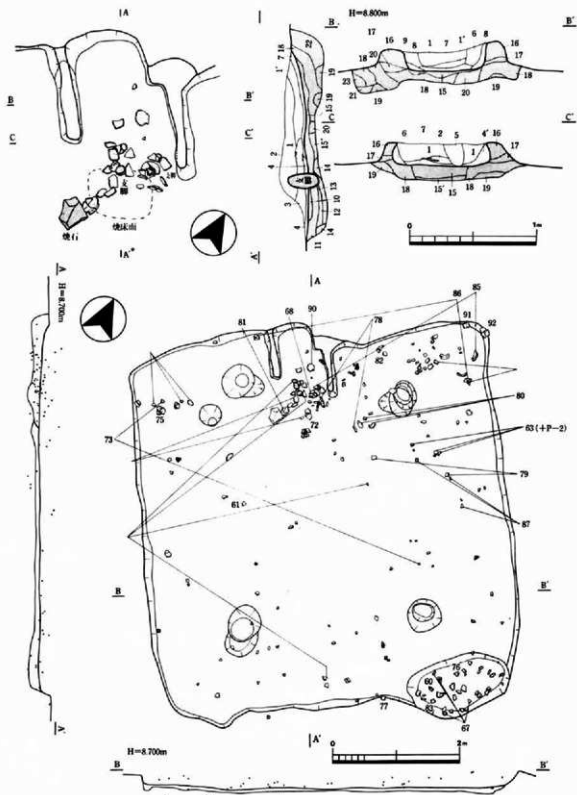
〔覆土堆積状況〕 覆土は上層から下層まで暗褐色系の土層で、下層がやや黒味を帯びる傾向はあるが、概して同質。カマド周辺でのみ焼土粒・炭化粒を多く含む土層が確認できる。

〔柱穴と他のピット〕 主柱穴はP1～P4で、径30～40cmのほぼ円形を呈す。深さはP1とP4が70～90cmと深いに対し、P2・P3は60cmと通常であり、対応するかのように、前者では南側にもぐりこむようにして、後者は反対の北側にもぐりこむようにして掘り込まれている。位置は壁から120～140cm内側に入ったところで、柱間を結ぶと縦320cm、横300cmの少しばかり縦に長い、正方形に近い形を呈す。柱穴覆土は住居跡覆土同様、暗褐色系の土で、下層がやや暗く軟質、掘り方の裏込めの土を除去すると、掘り方の柱穴は径50～60cmまで大きくなる。主柱穴以外では、カマド左横にあるP5と住居跡左手前壁際にある浅い土坑状のP6がある。P5は径50cm弱、深さ25cmの浅いピットで、炭化粒・焼土粒を多く含み、カマド粘土状の砂質の土がたまっている。カマド内遺物との接合も多く、位置的にもカマドに関連するピットとして考えている。P6は90cm×160cm、深さ15cm程度の浅い土坑状のもので、P5同様、焼土粒・炭化粒の含有が多く、遺物も多量に混在する。

〔カマド〕 カマドは北側奥壁の中央に位置し、規模は縦150cm、横100cm、住居跡奥壁内で作られている。右袖と左袖の長さが異なり、奥壁部分の段もやや意識的なため、右袖は拡張の可能性があり、それに対応するかのように、支脚も2つ横に並列している。左側の支脚は軽石状の石製で、直立したまま床面に4cmほど入り込む形で残存していた。長さ23cm程度の円柱形で、根元8～9cmから先の7cmへとやや先細りしている。全体は淡黄褐色を呈すが、先端部4cmのみがスス状に黒色化、床面直上の4cm程度が被熱のため赤褐色化している。石製支脚はこの他、カマド内覆土から1点破片で出土している。次に、右の支脚であるが、これは土師器高坏の脚部のみを再利用したもの(68)で、床面を掘り込まず直置きする形で設置されている。支脚使用の高さは12cmで、上端から4cmまでの部分がススで黒色化している。検出状態では2つの支



第53図 5号住居跡出土支脚(1はカマド設置のまま。S=1/3)



第54図 5号住居跡カマド平面・断面図及び遺物出土状況図(上:S=1/30、下:S=1/60)

5号住居跡覆土土層註

- 1層 暗褐色土：黄土塊・炭化粒微量含有。
 1'層 1層に近似するも、やや暗く、しまり有。
 2層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。
 3層 (暗)褐色土：黄土粒多量含有。
 4層 暗褐色土：黄土塊・焼土粒少量含有。
 5層 暗(褐)色土：焼土粒・黄土粒微量含有。

5号住居跡貼り床下土層註

- a層 黄土塊と暗褐色土の混在した硬質貼り床土。
 b層 暗褐色土：焼土粒・炭化粒多量含有。
 c層 (暗)褐色土：黄土粒・炭化粒微量含有。
 d層 暗褐色砂質土：焼土粒・炭化粒多量含有。
 e層 暗黄褐色土：黄褐色砂質粘土粒多量含有。

5号住居跡ピット覆土土層註

- 1層 暗褐色土：黄土粒少量含有。
 1'層 1層に近似するも、やや黒い。
 2層 暗(褐)色土：炭化粒微量含有。軟質。
 3層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有。
 4層 黄土塊。
 5層 暗(黄)褐色土：黄土塊多量含有。軟質。
 6層 淡褐色砂質土：炭化粒・土器多量含有。
 7層 暗褐色土：黄土塊・焼土粒・炭化粒少量含有。しまり有。
 8層 暗黄褐色土：炭化粒・土器少量含有。砂質。
 9層 暗褐色土：焼土塊・炭化粒・白色粘土塊・黄土粒少量含有。やや砂質。
 9'層 9層に近似するも、黄土粒多く、砂質強い。
 10層 褐色土：黄褐色土混在。

5号住居跡カマド覆土・床下土層註

- 1層 暗褐色土：黄土粒・黄褐色砂質粘土塊・炭化塊少量含有。
 1'層 1層に近似するも、やや暗い。
 2層 暗褐色土：焼土塊少量含有。
 3層 暗褐色土：焼土粒・黄土粒微量含有。
 4層 暗(赤)褐色土：焼土粒多量含有。
 4'層 4層に近似するも、焼土粒多量含有。
 5層 黒褐色土：黄土粒・焼土粒微量含有。
 6層 黄褐色土：黄褐色砂質粘土多量混在。
 7層 暗(赤)褐色土：焼土粒少量含有。
 8層 暗褐色土：黄褐色砂質粘土塊多量含有。
 9層 暗褐色土：焼土塊多量、黄土塊少量含有。
 10層 橙褐色土：硬質に焼けたカマド床面上。
 11層 赤褐色土：蒸熱したカマド床の砂質土。
 12層 暗赤褐色土：地山焼土。
 13層 淡赤褐色土：地山被熱層(生焼け)。
 14層 暗黄褐色土：炭化粒少量含有。
 15層 黄褐色砂質土：暗褐色土混在。貼り床土を呈す硬質のカマド床(焼土化してない)。
 15'層 15層に近似するも、暗く、やや軟質。
 16層 黄褐色砂質粘土：硬質。カマド袖構築土。
 17層 16層と暗褐色土の混在土。
 18層 暗(黄)褐色土：黄褐色砂質粘土含有。砂質。
 19層 黄褐色砂質土：暗褐色土混在。
 20層 暗褐色土：黄土粒少量含有。
 21層 黒褐色土：黄土粒少量含有。
 22層 暗褐色土：黄土塊少量含有。軟質。

脚は同時使用されていたものであり、2つ掛け用に改装したものと予想する。これはカマドの床下土層の右と左の違いによっても現れており、袖の位置を右へ20cmほど拡張したものと予想する。貼り床土と奥壁は黄白色系砂質粘土塊を多量混在させる暗褐色土を基本とし、袖構築土のみ比較的純度の高い黄白色系砂質粘土を使っている。本カマドの火床面は、奥壁から100cm手前の燃焼部のみ、支脚の存在する部分から手前のみである。カマド奥壁は床面から徐々に緩く立ち上がるもので、煙出し施設は確認できない。カマド覆土は袖に沿って袖部崩壊土状のカマド粘土塊の混在が見られるが、天井の崩壊したような土層堆積はなく、住居跡覆土に少々焼土粒が多く混じった程度の土層が堆積している。

(床面と床下の状況) 床面は、フラットで、壁際付近50～80cmを除く、ほぼ全面に黄土塊と暗褐色土塊を混在させた土で硬く貼り床してある。壁際も貼り土が存在するが、中央よりは軟質で、焼土粒・炭化粒を少量含有する。この硬質の貼り床のほぼ中央には、20cm程度の焼けた部分がある。4号竈穴住居跡でも確認されたもので、被熱層はさほど厚くはないが、確実に床面が焼けている。囲炉裏状のものか。床下には上下主柱穴の間に浅い土坑が1カ所確認される。180cm×220cm程度の方形のもので、硬質の貼り床土によって埋められている。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土の遺物は、石器状のものが数点ある以外は、全て

土器で、須恵器55点、土師器1,048点を数える。通有の大きさの住居跡の割には、出土点数は多く、特に土師器の量が目立つ。分布図は、主に中層以下の大きめの遺物を図示しているものだが、これを見ると、住居跡中央部（支柱穴に囲まれた区域）を除く周縁部分で多く分布しており、特にカマド内と右奥壁付近、そしてP6での出土が目立つ。さて、須恵器は出土点数が少なく、大半が破片で、当住居跡に伴うと判断できるものはない。これに対し、土師器はP6出土の高坏67やカマド支脚の高坏68、P1横床面出土の甕75、P2横床面出土の甕80など当住居跡に伴うと判断される資料は多く、煮炊具でもカマド内から81の小型甕と90の甕が、右奥壁床直上から91・92の甕が比較的良好な形で出土しているが、土師器煮炊具のカマド内部での接合は少なく、カマド使用の煮炊具をそのまま廃棄したという感じはない。他の遺構との接合では、前述した通り、3号竪穴住居跡と4号竪穴住居跡とで見られるが、後の廃棄遺物である上層遺物のみの接合であり、直接5号竪穴住居跡に伴う遺物と接合する遺構は確認できない。

(6) 6号竪穴住居跡

(立地) 1次調査区域H2・I2Grに位置する竪穴住居跡で、3号・4号竪穴住居跡の3mほど北側に存在する。主軸は柱穴と思われるピット配置から想定して北から西へ60度振っており、3号竪穴住居跡とほぼ同様のグリッド方位に近い軸をとる。

(規模と形態) 遺物の分布密度と焼土分布から竪穴住居跡と判断したもので、明確なプラン確認ができず、掘り下げたものである。地山のかかなり上から竪穴住居跡を掘り込んでいるため、地山面からの掘り込みがほとんど無く、壁が確認できず、規模・平面形態は確認していない。しかし、柱穴の位置から想定するに、5～6m程度の方形プランを有していたものと予想される。

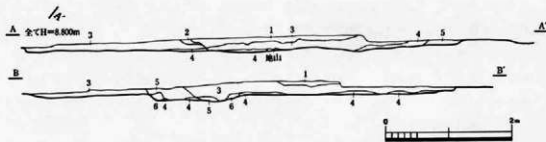
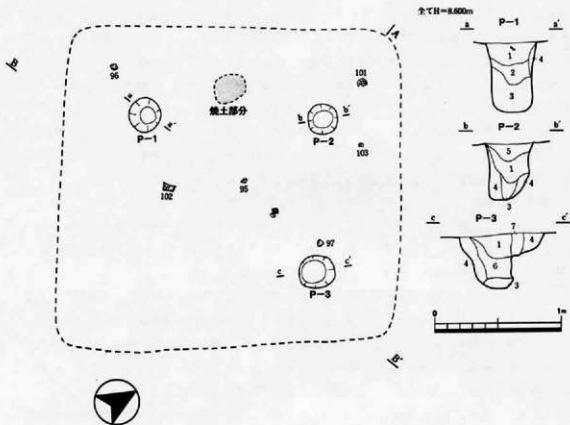
(覆土堆積状況) 覆土は暗褐色系の土で、包含層の土よりもやや褐色味が強い。

(柱穴) 柱穴は3本確認したのみで、あるべきはずの南側のピットは確認できていない。3本の柱穴は径35cmの円形で、深さ45～55cmを測るしっかりしたものである。柱穴覆土は上層が淡暗褐色土、下層が暗(褐)色土で、柱痕状の堆積を示す。

(カマド) カマドは確認できていないが、P1とP2の間（北西側壁より中央）、やや壁よりに焼床面が存在する。位置的にカマド燃焼部にあたり、焼床面の範囲や被熱層の厚さもカマドのそれに類似するが、カマド構築土である砂質粘土の分布が確認できていないため、積極的にカマドとして位置付けできない。

(床面と床下の状況) 床面は、やや中央が下がる傾向が見られるが、ほぼフラット。地山土をそのまま床面として使用しており、貼り床はされていない。ただ、床面中央が周縁よりもやや硬質となっている。

(遺物の出土状況) 浅い住居跡であるため、遺物の出土は少なく、須恵器12点、土師器73点を数えるのみである。大きな破片は下層や床面直上での出土が多く、上層では土師器小片が主に出土している。遺構内での接合は、目立ったものがなく、他の遺構との遺物接合については、須恵器甕片で1点、4号竪穴住居跡とあるのみである。



6号住居跡平面土層註

- 1層 黒(黄)色土：やや砂質。
- 2層 暗褐色土：やや軟質。黄土粒多量含有。
- 3層 (黄)褐色土：黄土粒少量含有。
- 4層 暗黄褐色土：しまりあり。硬質。
- 5層 暗(黄)色土：しまりあり。
- 6層 淡暗褐色土：黄土粒多量含有。しまりあり。

6号住居跡ピット土層註

- 1層 淡暗褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。
- 2層 暗褐色土：黄土粒少量。黄土塊少量含有。やや軟質。
- 3層 暗(黄)色土：黄土粒多量含有。
- 4層 暗黄褐色土：黄土粒・塊多量含有。
- 5層 淡褐色土：黄土粒少量含有。しまりあり。
- 6層 淡褐色土：黄土粒・塊多量含有。
- 7層 暗褐色土：褐色土塊と黄土塊を混在する硬質の土。

第55図 6号住居跡平面・断面図及びピット断面図 (右上的みS=1/30, 他はS=1/60)

(7) 10号竪穴住居跡

(立地) 2次調査区域エ1・オ1Grに存在する竪穴住居跡で、当調査区で最も北側に位置し、徐々に北側谷部へと傾斜する転換点に立地する。主軸は北から西へ26度振る、竪穴住居跡の中で最も北に方位をとる。

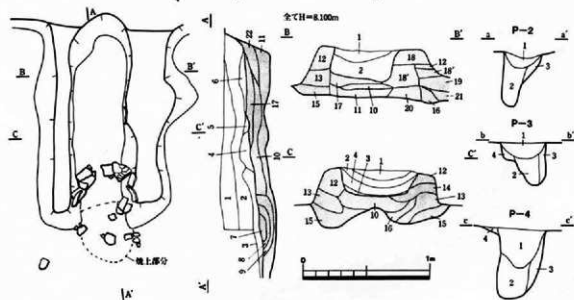
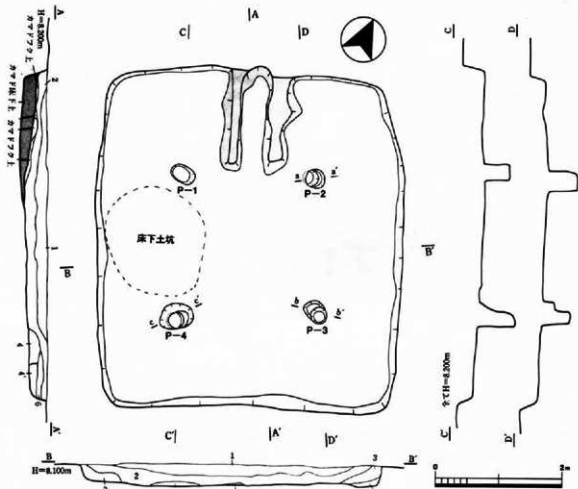
(規模と形態) 規模は、縦が520～530cm、横が460～480cmを測る。平面プランはやや縦に長い方形プランで、北東コーナーのみやや角がとれている。壁は25～35cmと比較的深く、ほぼ直立して立ち上がる。床面積はカマドも入れて約24.5㎡を測る。

(覆土堆積状況) 両側壁際で黒褐色土が確認される以外は、上層・下層ともに暗褐色系の土層である。きれいな所謂レンズ状堆積をしており、カマド近くでは焼土粒の分布が目立つ。

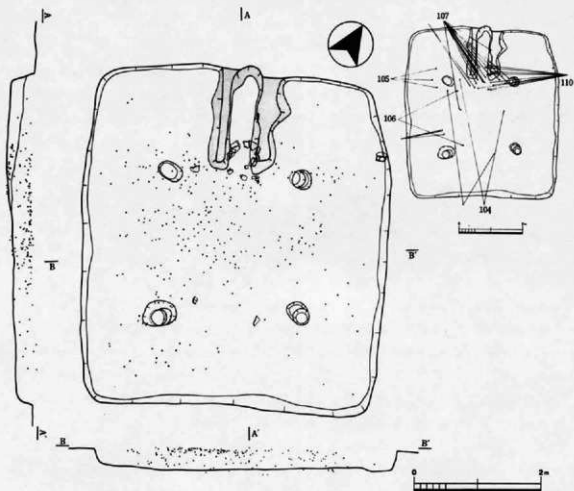
(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1～P4で、他にピットは確認されていない。いずれの柱穴も径30cmと細く、深さはP4が60cmを測る以外は、40cm程度を測る。柱穴の位置は、側壁側から120～140cm内側に、カマド側から160cm程度内側に、手前側から140cm程度内側にそれぞれ入ったところに掘り込まれており、柱間を結ぶと縦220cm、横はカマド側が200cm、手前側が220cmの台形状を呈す。柱穴覆土はいずれも掘り方の裏込め土的な黄土粒多めの褐色土が確認され、柱痕状のやや暗めの軟質土の堆積も確認される。

(カマド) カマドは北側壁のほぼ中央に位置し、規模は縦160cm、横100cmを測る。床は地山床面を浅く掘り込み、黄褐色土と暗褐色土混在の硬質貼り床状土の上に焼土塊・黄白色系砂質粘土塊を混在させた暗褐色土を貼って作られたもので、概して焼きは弱い。天井は全てなくなっているが、袖部の残りは良好で、ほぼ完存に近い。袖構築土は黄白色系砂質粘土をベースとするが、暗褐色土も混在させる傾向があり、下から上まで粘土で作るのではなく、下の基礎となる部分は暗褐色土と混ぜて固めた土で、その上に黄白色砂質粘土を貼り付け、構築していたものと予想する。本カマドの火床面は、燃焼部のみ、奥壁から140cm手前、径45cm程度の範囲でのみ存在し、焼きは強く、11cmもの厚さの被熱層が存在し、袖よりも手前まで焼けている。この火床面から奥壁へは床面が7度程度で徐々に緩く立ち上がっており、奥壁で60度と急となっている。カマド奥は住居跡奥壁から僅かに突出してはいるものの、住居外に張り出すものではなく、ほぼ住居跡内で収まっている。カマド覆土は天井崩壊土を予想させるような黄白色砂質粘土塊を多量混在した土層が下層のほぼ全域で確認でき、一度に天井が崩れた、又は、崩したことが予想できる。それから上層では焼土粒多めの暗褐色土層が堆積しており、住居跡覆土に類似するもので、通常に堆積した土層であろう。

(床面と床下の状況) 床面は、中央から北側壁に向かってやや下がる傾向があるが、面的にはほぼフラットである。貼り床は、土層図を掲載していないが、ほぼ全面に存在し、地山掘り方に20cm程度厚さの貼り土が貼付されている。貼り土は、黄土塊と暗褐色土塊の混在する硬質土が主で、奥壁側でこの土層の下に黒褐色系の土層が一部存在する。床下土坑は西側の2本の主柱穴のあたりから西側壁際に存在するもので、不定形な浅い大きな土坑である。覆土は貼り床同様の土



第56図 10号住居跡平面・断面図及びギカマド平面・断面図、ピット断面図（上：S=1/60、下：S=1/30）



10号住居跡覆土土層註

- 1層 暗褐色土・黄土粒・焼土粒・炭化粒微量含有。
- 2層 暗(褐)色土・黄土粒・炭化粒少量含有。
- 3層 暗褐色土・黄土粒・炭化粒少量含有。
- 4層 (暗)褐色土・黄土粒・炭化粒少量含有。
- 4'層 4層に近似するも、黄土粒土やや少なめ。
- 5層 暗褐色土・黄土粒少量含有、やや軟質。
- 6層 暗(褐)色土・黄土粒多め含有。

10号住居跡カマド覆土土層註

- 1層 暗褐色土・黄土粒・焼土粒・炭化粒微量含有。
- 2層 暗(褐)色土・黄土粒少量含有、しまり無。
- 3層 (暗)褐色土・黄土粒多め含有。
- 4層 暗(褐)色土・黄土粒・焼土粒少量含有。

10号住居跡カマド覆土・床下土土層註

- 1層 暗褐色土・黄土粒・焼土粒・炭化粒微量含有。
- 2層 暗(褐)色土・黄土粒・炭化粒少量含有。
- 3層 暗(褐)色土・炭化粒・焼土粒多め含有。
- 4層 暗褐色土・炭化粒・焼土粒多め含有。
- 5層 暗(褐)色土・炭化粒・黄土粒少量含有。

- 6層 暗褐色土・黄砂粘土・焼土多め含有。
- 7層 黄褐色土・砂質粘土・硬質に焼結、カマド床。
- 8層 赤褐色土・やや硬質の焼土。
- 9層 暗赤褐色土・炭土混在、焼土塊・黄砂粘土少量含有。
- 10層 暗褐色土・炭化粒、焼土塊多量含有。硬質カマド床。
- 11層 暗黄褐色土・陥り床状硬質黄土塊多量含有。
- 12層 黄褐色土・砂質粘土・硬質焼結カマド粘土、内側焼土化。
- 13層 暗黄褐色土・砂質粘土・炭化粒・焼土粒少量含有。硬質。
- 14層 暗(黄)褐色土・黄砂粘土・焼土粒・炭化粒多量含有。
- 15層 暗褐色土と黄褐色土の混在土。
- 16層 暗黄褐色土・暗褐色土少量混在。
- 17層 暗褐色土と黄褐色土・砂質粘土の混在土、焼土塊・炭化粒少量含有。北焼結のカマド床。
- 18層 暗褐色土・黄砂粘土・炭化粒多量含有、しまり強く、硬質、カマドの粘土。
- 18'層 18層に近似するも、やや軟質。
- 19層 暗褐色土・焼土塊・黄砂粘土多量混在。
- 20層 暗(褐)色土・黄砂粘土混在。
- 21層 暗褐色土・黄土粒・炭化粒少量含有。
- 22層 暗褐色土・黄土粒少量含有。

第57図 10号住居跡遺物ドットマップと接合図(左:S=1/60, 右:S=1/120)

が堆積し、遺物も少なく、掘り方に関連するものと予想される。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土の遺物は、全て土器で、しかも須恵器破片10点以外は、全て土師器である。土師器は252点、須恵器とあわせた総点数でも262点であり、他の通常規模の竪穴住居跡の半分以下である。遺物分布は竪穴住居跡のほぼ中央を中心として、上層から中層にかけて多いが、これらは小破片が主で、それらの接合も少なく、後の堆積に伴うものである。当住居跡に伴うものとしては、カマドを中心に分布する下層から床面に存在する、104の内面黒色の蓋(高坏)や107の鉢、110の甗が上げられる。特に、107の鉢と110の甗はほぼ完形に復元できており、カマドの袖土崩壊土中やカマド床面に存在することから、カマド廃棄に伴うものと判断され、当カマドの設置土器であると予想する。

(8) 11号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域い5Gr付近に存在する竪穴住居跡で、台地が北東側に緩く傾斜してゆく手前、12号竪穴住居跡・15号竪穴住居跡と同一主軸で3軒並んで存在する。主軸は北から西へ45度と、比較的北向きに方位をもつもので、12号竪穴住居跡よりも僅かばかり北に向いている。

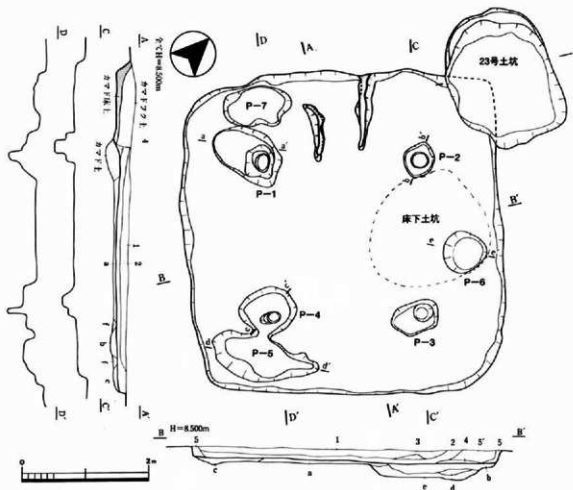
(規模と形態) 規模は、縦が500cm前後、横が500cm前後で、平面プランは隅丸正方形を呈す。壁高は16~20cmで、ほぼ直立して立ち上がる。床面積はカマドも入れて約25㎡である。

(覆土堆積状況) 両側壁際に軟質の黒色系の土が存在する以外は、上層から下層まで暗褐色系の土層が堆積しており、上層は下層よりもやや褐色味が強い。カマド近くでは焼土粒の分布が目立つ。

(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1~P4で、P3のみ深さ35cmと浅いが、他は深さ45~50cmを測る。いずれも柱痕は細く、径20cm程度であるが、掘り方は径60~70cmを測る。柱穴は壁から120~130cm内側に入ったところに掘り込まれており、柱間を結ぶと縦250cm、横245cmの正方形を呈す。柱穴覆土は自然堆積的な黒褐色系の軟質の土ではなく、埋め戻し土的な暗(黄)褐色土で、掘り方の裏込め土は地山との区別が難しいほどの黄褐色土である。4本の主柱穴以外では、P1の奥とP4の手前に浅い土坑状ピットが、P3の側壁側に浅いピットが存在する。いずれのピットも柱穴の覆土上層と同様の土が堆積しており、当住居跡に伴うと思われるピットである。

(カマド) カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、規模は縦130cm、横110cmを測る。床は住居跡貼り床と同様、地山掘り方の上に貼り土をするもので、カマド部分のみ焼土塊を多量混在させた暗褐色土を貼って作られる。天井は全てなくなっているが、袖部は左袖の一部が崩れている以外は残っており、黄白色系砂質粘土塊を混在させた(暗)黄褐色土をベースに構築されている。カマド火床面は燃焼部のみで、奥壁から100cm手前、縦40cm、横65cmの不整形で床が焼けている。被熱層は15cmと厚く、袖よりもかなり手前まで焼けている。カマド覆土は全体的に焼土塊の混在した層が多く分布し、特に下層において顕著である。一部天井崩壊土を予想させるような黄白色砂質粘土塊を多量混在した土層もあるが、極一部で、焼土の混在の多い覆土である。

(床面と床下の状況) 床面は、高低でも面的にもフラットで、ほぼ全面に貼り床がされている。



11号住居跡壁土土層註

- 1層 (暗)褐色土：黄土粒・炭化粒微量含有。やや硬質。
 2層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒微量含有。
 3層 (暗)褐色土：黄土粒多量含有。やや硬質。
 4層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒微量含有。硬質。
 5層 暗(暗)色土：黄土粒含有。やや軟質。
 5'層 5層に近附するも、やや黒い。

11号住居跡貼り床下土土層註

- a層 黄褐色硬質土を主体に、暗褐色土混在。貼り床上。
 b層 淡暗褐色土：黄土粒多量、黒色土粒少量含有。硬質。
 c層 淡暗褐色土：黄土粒・炭少量含有。やや軟質。
 d層 暗褐色土：黄土粒多量含有。硬質。
 e層 暗褐色土：黄土粒多量、炭化粒少量含有。硬質。
 f層 暗黄褐色土：地山より暗く。硬質。

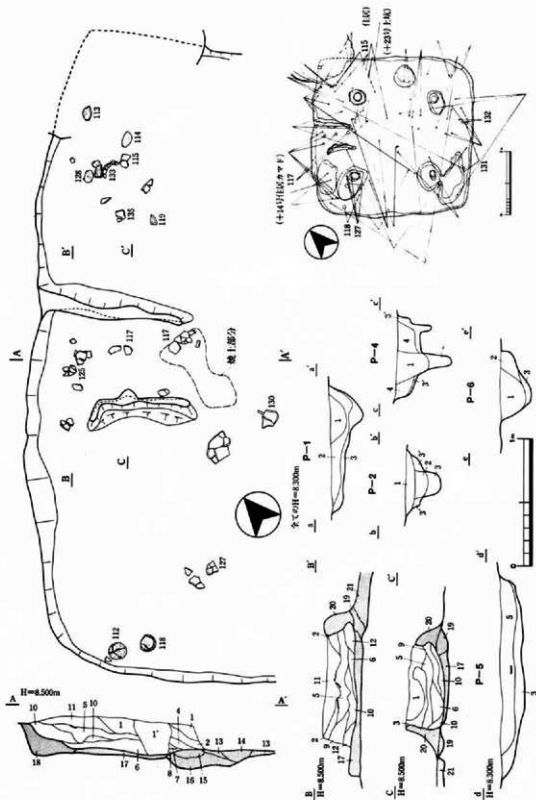
11号住居跡ビット罫土土層註

- 1層 暗褐色土：黄土粒少量含有。しきり有り。
 2層 暗(黄)褐色土：黄土粒少量含有。
 3層 暗黄褐色土：黄土粒少量含有。しきり無。
 3'層 3層に近附するも、やや黒い。
 4層 暗(暗)色土：黄土粒少量含有。しきり有り。
 5層 暗褐色土：黄土粒・粘土少量含有。

11号住居跡カマド罫土・床下土土層註

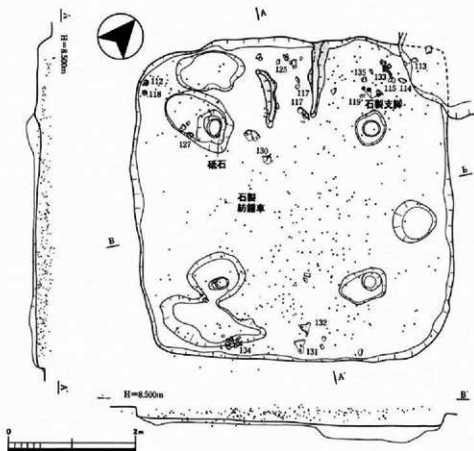
- 1層 暗褐色土：黄土粒多量、黄土粒微量含有。しきり有り。
 1'層 1層に近附するも、黄土粒含まず。軟質。木版状。
 2層 暗褐色土：黄土粒多量・黄土粒少量含有。しきり有り。
 3層 暗褐色土：黄土粒多量含有。黄砂粘土大量混在。
 4層 暗(赤)褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。
 5層 暗(赤)褐色土：黒色土硬質土粒多量含有。しきり有り。
 6層 暗赤(暗)色土：黄土粒・黒赤褐色硬質土粒多量含有。
 7層 暗(赤)褐色土：黄土粒多量。炭化粒少量含有。
 8層 暗赤褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。
 9層 暗黄褐色土：黄砂粘土多量含有。カマド天井崩壊土。
 10層 暗黄褐色土：黄土粒少量含有。やや硬質。
 11層 暗(暗)色土：黄土粒少量含有。しきり有り。
 12層 暗褐色土：黄土粒・黄砂粘土多量含有。壁崩壊土。
 13層 暗(赤)褐色土：黄土粒少量含有。やや硬質。床土。
 14層 黒褐色土：炭化粒少量含有。やや軟質。
 15層 暗褐色土：黄土粒主体の硬質土。カマド床土。
 16層 淡赤褐色土：地山硬質土。やや生焼け状。
 17層 暗褐色土：表面に赤褐色硬質土を含むカマド床土。焼けは弱く。黄土粒少量含有。
 18層 暗褐色土：やや硬く。しきり有り。焼けていない。
 19層 暗褐色土：黄砂粘土少量含有。
 20層 (暗)黄褐色土：黄砂粘土大量混在するカマド地土。
 21層 黄褐色土：黄土粒多量含有。硬質の貼り床上。

第58図 11号住居跡平面・断面図 (S=1/60)



第55図 11号住居跡、カマド周辺平面・遺物出土状況及びカマド断面・ピット断面図、遺物接合図（右下のみS=1/30、他はS=1/30）

貼り床は支柱穴に囲まれた中が最も硬質の黄褐色土塊主体の貼り床で、その周縁は、やや軟らかい淡暗褐色土が存在している。床下土坑はP2とP3の間、側壁際にかけて存在するもので、深さ20cm程度。覆土は貼り床同様の土が堆積し、遺物も少なく、掘り方に関連するものと予想する。(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土の遺物は、住居跡中央付近下層覆土から石製紡錘車が、右奥隅付近下層覆土から石製支脚が、P1柱穴上から砥石が出土する以外は、全て土器で、須恵器38点、土師器603点を数える。概して須恵器に比べ、土師器の量が多いが、土師器は破片での出土が多く、図示したものは須恵器が多い。遺物分布はドットで見ると、住居跡中央から手前側に多いが、大半は小破片であり、破片の大きな遺物で見ると、P2奥の右奥隅付近とカマド周辺、手前壁側に集中している。小破片は上層から下層まで均等に分布しており、この住居跡に伴うものではない。住居跡廃絶後の廃棄又は流れ込みであろう。大破片は主に下層から床面に分布するが、これについても床面に残されていたという印象ではなく、後の廃棄品という印象である。ただ、これらは床面近くでまとまった出方をしているのと、完形に近いものが多いことを考えると、住居跡廃絶直後に廃棄された土器群である可能性が高く、特にカマド内の117と125、カ



第60図 11号住居跡遺物ドットマップ (S=1/60)

マド前の130、奥左隅の118、奥右隅の113・114・119・128・133、手前壁際の131・132・134は同時期の廃棄品として捉えて妥当と思われる。また、他の遺構との接合では、覆土中層付近の遺物と14号堅穴住居跡カマド、18号堅穴住居跡、23号土坑とが接合している。

(9) 12号堅穴住居跡

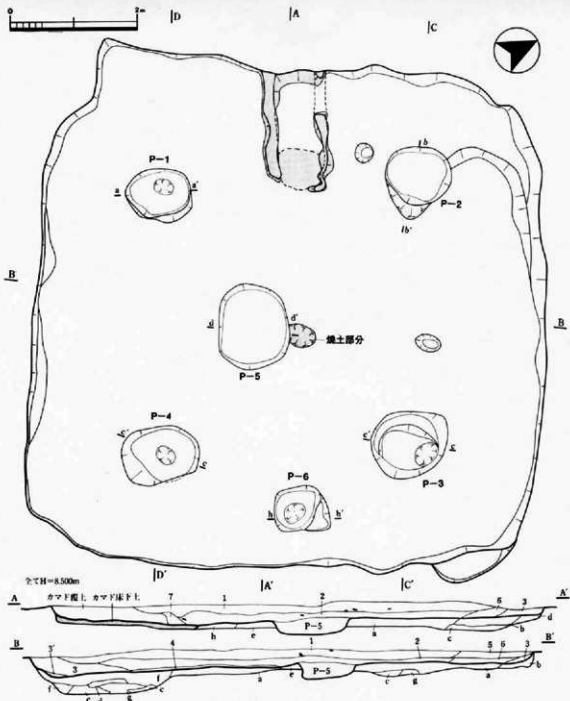
(立地) 3次調査区域う6・う7・い6・い7Grにまたがって分布する大型の堅穴住居跡で、北東傾緩傾斜始点から5m南側に入った所、11号堅穴住居跡と15号堅穴住居跡の間に位置する。主軸は北から西へ64度振り、これら3軒の中では最も西へ向く住居跡である。

(規模と形態) 規模は縦が780~800cm、横が奥壁付近760cm、手前壁付近800cmを測る当遺跡で最も規模の大きなもので、平面形はやや台形を呈する。壁高は20~30cmと大型住居跡のわりには浅く、やや外傾して立ち上がっている。床面積はカマドも入れて約60㎡を測る。

(覆土堆積状況) 各壁際には3層とした黒味のある軟質の土層が堆積し、中が暗褐色系の土、上層は褐色味が強く、やや硬質、下層はやや暗く、黄土粒を含むという通常に見られる土層堆積ではあるが、この住居跡で特徴的なのは、手前側の壁付近と左側の壁付近に6層とした黄土塊を多量に含む硬質の土層が存在することである。この層は貼り床土ほどの硬質さはないが、土質はそれに類するものであり、意識的に埋め戻したものと考えられ、住居跡内に段を形成しているかのようで、ベット状遺構の可能性をもっている。しかし、この部分でちょうど側壁側に段があり、また手前側壁でも同様にあることから、壁を貼り替えたものである可能性もあり、床下で別の柱穴が検出されることも、建て替えの可能性を示唆している。この点については、項目を改めて詳述する。

(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1~P4で、平面形は円形ないしは楕円形を呈す。大きさは柱痕の径40cm前後、掘り方径90cm前後を測る大型のもので、そのわりには深さ40~45cmと浅い。壁から180~220cm内側に入った所に掘り込まれており、柱穴を結ぶと縦420~440cm、横380~400cmと少し縦長ではあるが、正方形に近い形を呈す。柱穴覆土は左列のP1とP4のみ硬質の黄褐色土で上層を埋め戻しているが、他は4本とも同質の土層で、柱痕抜き取り穴のところには暗褐色系の軟質土が、その周縁では軟質の黒褐色土を間に挟む感じで、縮まりのある黄褐色土が上下に存在し、掘り方の裏込め土的堆積をしている。4本の主柱穴以外では、住居跡の中央に浅い土坑状のP5が、手前壁際に浅いP6が存在し、いずれも当住居跡に伴うピットと思われる。

(カマド) カマドは北側壁の中央に位置し、規模は縦190cm、横100cmを測る。床は地山掘り方の上に焼土塊・黄白色砂質粘土塊を多量混在させた暗(黄)褐色土を貼って作られ、奥壁側も同様の土を貼っている。天井は全て崩壊しているが、袖部の残りはよく、黄白色系砂質粘土をベースに黒褐色土を混ぜた硬質土で構築している。この袖構築土はすべて焼土粒・炭化粒を混ぜたしまりのある暗褐色土の上に乗っており、この土層を基礎にした上で構築していることがわかる。火床面はカマドの燃焼部のみで、奥壁から140cm手前、横80cm、縦40cmの範囲でのみ存在し、他は焼土塊が分布するだけで、袖についても焼けた面は確認できていない。カマド奥は住居跡奥壁の



全てH=8.500m

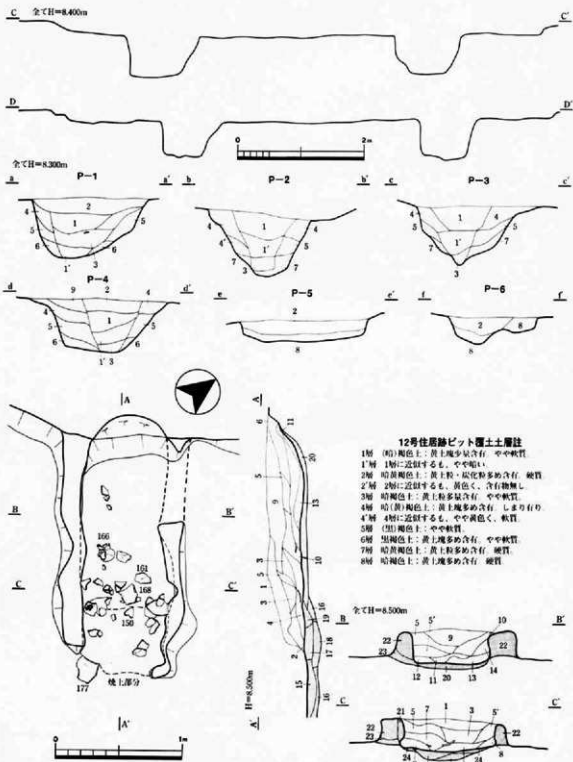
12号住居跡埋土層註

- 1層 暗褐色土；黄土粒・焼土粒微量含有。やや硬質。
- 2層 暗褐色土；黄土粒多量。焼土粒微量含有。しまり有り。
- 3層 暗褐色土；黄土粒微量含有。やや軟質。
- 3'層 3層に近照する。やや濃い。
- 4層 (黒)褐色土；黄土粒少量含有。やや硬質。
- 5層 (黒)褐色土；黄土粒少量含有。やや軟質。
- 5'層 5層に近照する。やや濃い。
- 6層 暗褐色土；黄土粒・焼土多量。しまりあり。硬質。
- 7層 暗(黄)褐色土；黄土粒多量。焼土粒少量含有。

12号住居跡貼り床下土層註

- a層 暗褐色土；黄土粒多量。黒褐色土少量混在。炭化粒・焼土粒微量含有。硬質の貼り床土。
- b層 暗褐色土；黄土粒多量。焼土粒少量含有。硬質の貼り床土。
- c層 暗褐色土；黄土粒多量。焼土粒少量含有。硬質の貼り床土。
- d層 暗褐色土；黄土粒多量。焼土粒少量含有。硬質の貼り床土。
- e層 暗褐色土；黄土粒多量。焼土粒少量含有。硬質の貼り床土。
- f層 暗褐色土；黄土粒多量。焼土粒少量含有。硬質の貼り床土。
- g層 暗(黄)褐色土；黄土粒・焼土多量含有。しまりあり。
- h層 暗(黄)褐色土；黄土粒多量。焼土粒少量含有。

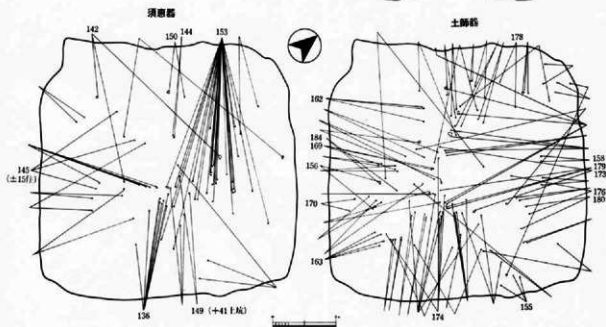
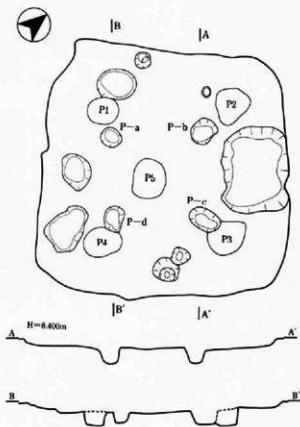
第61図 12号住居跡平面・断面図 (S=1/60)



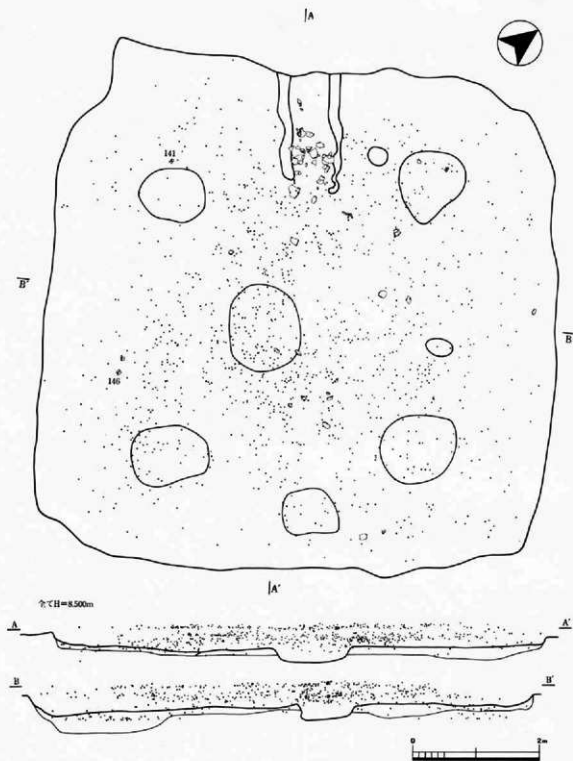
第62図 12号住居跡、断面図・ピット断面図及びカマド平面・断面図 (上：S=1/60、下：S=1/30)

12号住居跡カマド圍土・床下土土層註

- 1層 暗(黄)褐色土：黄土層・焼土粒微量含有。しまり有り。
- 2層 暗褐色土：黄砂粘土地多量。焼土大塊(天井遺構)少量含有。しまり有り。
- 3層 暗褐色土：黄砂粘土大塊混在。しまり有り。
- 4層 暗褐色土：黄土粒・焼土粒多量含有。しまり有り。
- 5層 (暗)褐色土：黄砂粘土大塊・焼土大塊多量含有。
- 5層 5層に近接するも、焼土塊含有無し。
- 6層 暗(赤)褐色土：黄土層少量含有。しまり有り。
- 7層 暗(黄)褐色土：黄土粒・塊多量。黄砂粘土大塊少量含有。
- 8層 暗褐色土：黄土層・焼土粒少量含有。やや軟質。
- 9層 暗褐色土：黄砂粘土多量。炭化粒少量含有。
- 10層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。
- 11層 暗(黄)褐色土：硬質焼土塊少量含有。しまり有り。
- 12層 暗(黄)褐色土：硬質焼土塊多量含有。壁脚遺上。
- 13層 黒褐色土：黄土層多量含有。やや軟質。
- 14層 暗(赤)褐色土：硬質焼土塊・黄砂粘土多量含有。
- 15層 暗褐色土：硬土層・炭化塊・黄砂粘土多量含有。床上。
- 16層 (暗)黄褐色土：炭化粒。焼土粒少量含有。しまり有り。
- 17層 赤褐色土：硬質に硬結した粘土。カマド焼床上。
- 18層 赤赤褐色土：地山の被熱層。生焼け状。
- 19層 暗(赤)褐色土：焼土粒・塊多量含有。炭化粒少量含有。
- 20層 暗黄褐色土：表面に硬土層・炭化塊を多量含有したカマド床上。やや塊き固く。しまり有り。
- 21層 赤褐色土：硬質に硬けたカマド燻壁土。
- 22層 黄砂粘土層と黒褐色土の混在土。硬質。カマド焼土。
- 23層 暗褐色土：黄土粒・焼土粒多量含有。しまり有り。
- 24層 黒褐色土：黄土層多量混在。粘り床状カマド床上。



第63図 12号住居跡床下ビット平面・断面図及び遺物接合図 (S=1/120)



第64図 12号住居跡遺物ドットマップ (S=1/60)

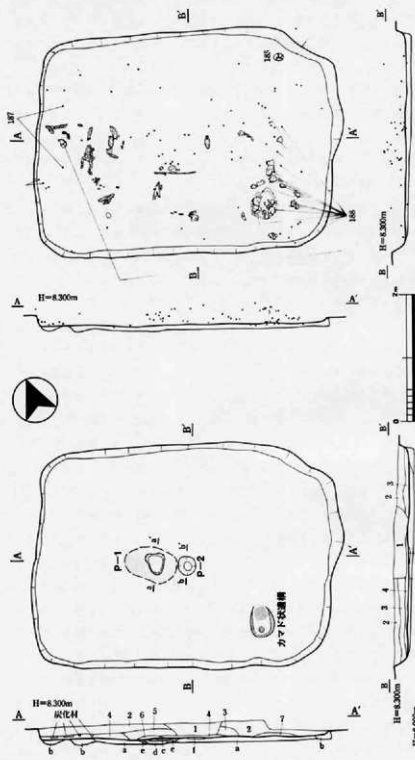
外側には突出せず、内側で床土を貼り、立ち上がりの傾斜を緩くして作られている。カマド内覆土は流れ込み的な土層が下層に存在するものの、両袖側や中層から上層にかけてはカマド天井崩壊土と思われる黄白色砂質粘土大塊・焼土大塊の混在した土が存在しており、内部に土が流れ込んだ後に、カマド天井が崩れたことが予想できる。

〔床面と貼り床〕 床面は、主柱穴に囲まれた部分が若干下がる傾向はあるが、ほぼ平坦である。床面には一部被熱で焼土化している部分があり、これは住居跡のほぼ中央、主柱穴の中央に位置する。径40cm程度のもので、やや中央が窪んでいる。囲炉裏的なものかもしれない。床は全面貼り床で、中央部分の貼り床土は黄土硬塊と黒褐色土の混在する硬質の土であるが、側壁際に行くときやや硬さに欠ける黄褐色系の土が貼られている。

〔床下の状況と住居の建て替え〕 貼り床を剥がすと地山掘り方が検出されるが、この住居跡では通常住居跡に見られる床下土坑がP2・P3の間、右側壁側に存在する以外に、4本の柱穴が検出されている。この柱穴は床上から掘り込まれるP1～P4の主柱穴からそれぞれ内側に80cmほど入った所に掘り込まれており、柱穴を結ぶと280cm×280cmのほぼ正方形となる。柱穴の大きさは径60cmとやや小型となるが、深さは上の柱穴とほぼ同じような深さであり、この床下の4本の柱穴はこれを主柱穴とする住居跡が存在したことを予想させ、12号堅穴住居跡の以前にやや小型の堅穴住居跡が存在した可能性を示唆している。これは先に覆土のところでも述べたように、住居壁の不整形部分の存在や壁際の貼り床状土の存在から当初一回り小型であった通常規模の堅穴住居跡を一回り壁を広げて、大型住居に建て替えたのではないかと予想するものである。

〔遺物の出土状況と接合関係〕 当住居跡出土の遺物は、覆土上層から礫石が1点出土する以外は、全て土器で、須恵器135点、土師器1,613点の他、混入土器である弥生土器、縄文土器が十数点出土している。遺物のドットマップは弥生・縄文の混入土器を除いた須恵器・土師器のみを示したもので、平面図では壁際に少なく、中央に行くに従って多くなる傾向が見られ、断面では壁際の特に下層に少なく、レンズ状堆積を示すかのように、中央に行くに従って、密度は増加し、下層まで土器が分布するようになる。また、住居跡内での接合関係では比較的接合する点数は多いものの、基本的に2～4点程度が大半で、接合して行って完形になるようなものは少なく、逆に他の遺構との接合は、11号・14号・15号・21号堅穴住居跡、41号土坑と5遺構にも及び特に15号堅穴住居跡との接合は6点を数える。これはこの土器群がこの住居跡の廃棄後に埋没する過程で周辺からの廃棄又は流れ込んだ土器群、しかも、あまり一括性の高くない廃棄に伴う土器群であることを示すものであり、そう考えると、当住居跡に伴う可能性をもつものは、カマドで一括出土した土器群のみとなる。この土器群は天井崩壊土の下に存在するもので、甌や長壺などの土師器煮炊具が主に存在している。完形復元できるものがほとんど無いことから、カマド設置の土器である可能性は薄い、カマド崩壊前に中に廃棄されたものであり、この住居跡の廃棄に伴うものと判断して妥当である。

(10) 13号堅穴住居跡



13号住居跡及び床下層注

a層 暗褐色土：黒土粒多量混在。硬質の張り床土。
 b層 暗褐色土：黒土粒多量、灰化粒少量混在。中硬土。
 c層 暗褐色粘粘土：硬質、中硬土。
 d層 暗褐色土：黒土粒多量混在。
 e層 暗褐色土：黒土粒・焼土粒少量混在。
 f層 暗褐色土：焼土粒の塊行した上、軟質。
 g層 暗褐色土：暗褐色土多量混在、軟質。

13号住居跡出土層注

1層 暗褐色土：灰化粒・黒土粒含有。
 2層 暗褐色土：灰化粒・黒土粒含有。
 3層 暗褐色土：黒土粒・焼土粒少量含有。
 4層 暗褐色土：灰化粒多量、灰化粒・焼土粒少量含有。軟質。
 5層 暗褐色土：焼土粒・黒土粒少量含有。
 6層 暗褐色土：焼土粒・焼土粒少量含有。
 7層 暗褐色土：灰化粒多量含有。

13号住居跡ピット出土層注

1層 暗褐色土：焼土粒・黒土粒・灰化粒少量含有。硬質。
 2層 暗褐色土：焼土粒・黒土粒多量含有。やや軟質。
 3層 暗褐色土：黒土粒多量、焼土粒・灰化粒少量含有。やや軟質。
 4層 暗褐色土：黒土粒多量含有。

第65図 13号住居跡平面・断面図及び遺物出土状況図 (左下のAS=1/50、他はS=1/60)

(立地) 3次調査区域い3・い4・う3・う4Grにまたがって分布する竪穴住居跡で、北東側傾斜部分に立地する。主軸はグリッド方位とほぼ同様の北から西へ67度振る。

(規模と形態) 規模は縦が470cm、横が350cmの小型長方形で、やや隅丸の形状をしている。壁高は15~20cmで、やや緩く立ち上がる。床面積は約16㎡と小さい。ピットは2本中央付近に存在するものの、柱穴ではなく、壁外でもピットの確認はないが、壁外柱穴のタイプであろう。

(覆土堆積状況) 当住居跡の床面には炭化材や焼けた灰、焼土が分布している。これは床面直上の層でも同様で、炭化粒や炭化材、焼土粒を含む層となっている。このような層は床面直上層のみで、それ以上では、通常見られるような暗褐色土が堆積している。

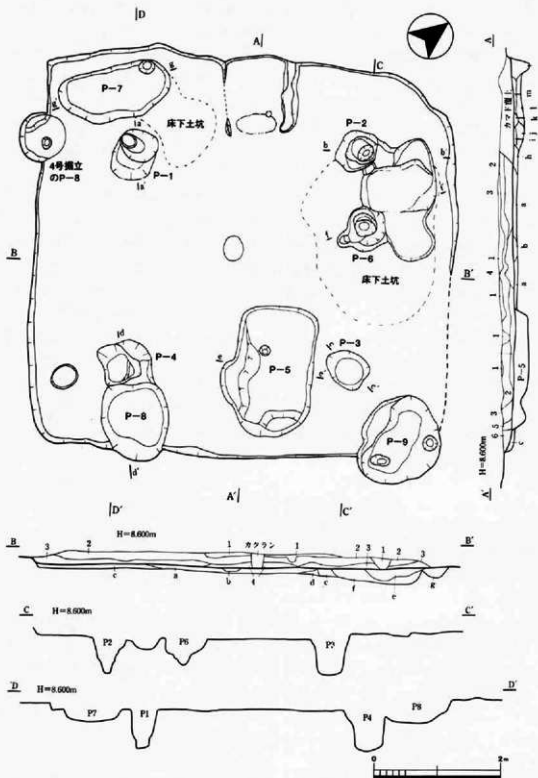
(炉とカマド状遺構) 当住居跡は中央に炉、南隣付近にカマド状遺構が存在している。カマド状遺構は、壁から30cm手前に作られ、幅38cm、長さ50cmの小型のものである。厚さ3cm程度の黄白色砂質粘土で馬蹄形状に壁を巡らし、やや奥に支脚を設けた簡単なもので、焚口から燃焼部の床面と粘土壁のみ焼けている。構造的に簡易ではあるが、カマドとして機能していたものと予想する。次に炉であるが、黒褐色土で周縁を固め、中央に炉床を作っているもので、下層は焼土塊混在土、上層は粘土を使用している。焼きは強く、表面は硬質に焼け、80×60cmの範囲で被熱している。この炉の中央には径30cm、深さ30cmのピットが空いており、中には焼土粒・炭化粒の多量混在した土が堆積していた。この手前にも同じ程度のピットがあり、いずれもこの炉に付随するものと考えられる。炉状のものは他の竪穴住居跡でも確認されるものであるが、いずれも地山又は貼り床が被熱しただけのもので、このような粘土貼りを行っている炉は当住居跡だけである。カマドも通常の形態とは異なり、住居形態も他とは違う小型のものであることから、炉が特別な意味をもっていた可能性があり、注目される。

(床面と貼り床) 床面は、ほぼ平坦で、全面に貼り床している。貼り床土は壁際のみやや軟質の黄褐色土が存在する以外は、暗褐色土に黄土硬塊の多量混在した硬質の貼り床土で、床下に目立った土坑やピット等は確認できない。

(遺物の出土状況) 当住居跡出土遺物は須恵器4点、土師器87点と極端に少ないが、カマド状遺構で使用されたと思われる188の把手付き土師器丸甕がカマド状遺構周辺に遺存しており、そして東隣床面付近でも完形の須恵器短頸壺185が上から転がった感じで出土している。遺物の少ない住居跡のわりには当住居跡に伴う遺物が存在しており、良好な資料である。さて、当住居跡床面には土器以外に炭化材が遺存しており、比較的長いものも確認できる。焼土の分布も見られ、黒色灰も分布している。焼けた木材や焼土はこの家屋の焼失を連想しがちであるが、床面に焼けたような痕跡がないことや、家の材としては炭化材が少なすぎることから、周りから廃棄された可能性もあり、すぐさま焼失家屋とは言えない。ただ、他の竪穴住居跡や掘立柱建物跡で建物が焼けたような痕跡のあるものはなく、この住居跡が焼けたと見る方が妥当である。

(11) 14号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域お7Gr付近に存在する竪穴住居跡で、台地の北東側、12号竪穴住居跡



第66図 14号住居跡平面・断面図 (S=1/60)

の東側に隣接し、4号・16号掘立柱建物跡と重複している。主軸は北から西へ54度と、12号竪穴住居跡よりも僅かばかり北に向いている。

（規模と形態） 規模は、縦が630cm前後、横が660cm前後で、平面プランはやや隅が丸いもの、ほぼ正方形を呈す。壁高は5～10cm程度であるが、一部東壁で立たない部分もあり、概して地山からの掘り込みが浅い。床面積はカマドも入れて約41㎡である。

（覆土堆積状況） 手前壁際に軟質の黒色系の土が存在する以外は、上層から下層まで暗褐色系の土層が堆積しており、カマド近くでは焼土粒の分布が目立つ。

（柱穴その他のピット） 主柱穴はP1～P4で、掘り方径50～60cmの不整形を呈す。いずれも深さ60cm前後を測り、奥列のP1とP2は柱痕状の小ピットが一段深くなる。柱痕径はだいたい20cm程度。柱穴は壁から120～140cm内側に入ったところに掘り込まれており、柱間を結ぶと360cm×360cmの正方形を呈す。柱穴覆土は住居跡覆土類似の暗褐色土が柱痕状に入り、その周りを暗褐色土と黄褐色土の混在した掘り方裏込め土が固めている。4本の主柱穴以外では、P3とP4の間に方形土坑状のP5が、P2とP3の間に柱穴状のP6が、左奥隅に楕円形土坑状のP7が、左手前壁際と右隅壁際に円形土坑状のP8とP9が存在するが、全て当住居跡に伴うものとは考えられず、P6、P8、P9は住居跡廃絶後に伴う可能性が高い。

（カマド） カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、規模は縦130cm、横120cmを測る。床は住居跡貼り床と同様、地山掘り方の上に貼り土をするもので、カマド床表層部分のみ焼土を多く混ぜた暗褐色土を貼って作られる。袖部分のみの残存で、しかもその袖部分も左袖ではほとんど崩壊しており、残りが悪い。黄白色砂質粘土で作られており、内側が被熱して赤褐色化している。床面は燃焼部のみ焼けているだけで、奥壁から100cm手前、縦40cm、横60cmの範囲である。この火床面の切れた部分のすぐ奥には支脚が埋め込まれている。若干右よりで、左にもう一つはいるようなスペースがあることから2個掛けを予想する。軽石製のもので、火前、燃焼部側の方は赤褐色に良く焼けている。カマド覆土は床面直上層で焼土塊の極多量混在した層が見られる以外は、通常の焼土粒混じりの暗褐色土で、袖土状の砂質粘土の存在は、左袖崩壊部分でのみ確認される。

（床面と床下の状況） 床面は、高低でも面的にもフラットで、全面に貼り床がされている。この床面には一部焼けた部分があり、住居のほぼ中央、40cm程度の範囲で被熱して赤褐色化している。比較的良く焼けており、囲炉裏的なものであったのだろう。貼り床土は主柱穴に囲まれた中が最も硬質の、黄土硬塊を多量混在させる暗褐色土の貼り床で、その周縁は、やや軟らかい暗褐色土と黄褐色土の混在土となっている。床下土坑はP7に延長する感じのものと、P2とP3の間、側壁際にかけて存在する浅い土坑状のものがある。後者は当遺跡のどの竪穴住居跡でも普遍的に見られるもので、覆土は硬質貼り床ではないものの、黄土塊を多く混在する暗褐色土である。

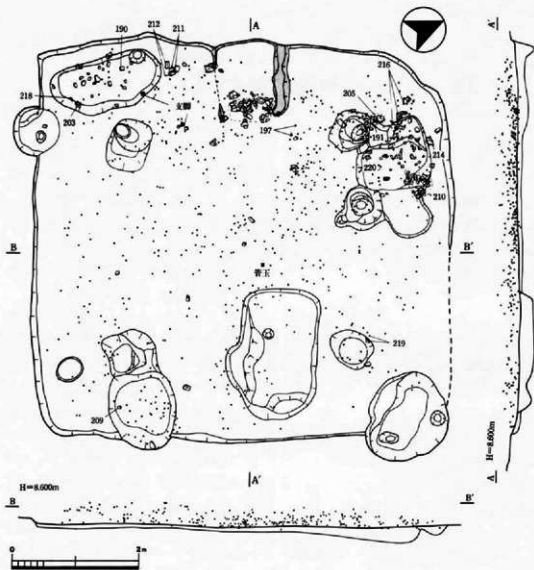
（遺物の出土状況と接合関係） 当住居跡出土遺物は、住居跡中央付近覆土中層からヒスイ製管玉が、左奥隅付近下層覆土及びカマド内から石製支脚が、P4柱穴覆土から磁石が出土する以外は、全て土器で、須恵器55点、土師器1,166点を数える。遺物分布は、カマド燃焼部付近、左奥

14号住居跡跡土層群

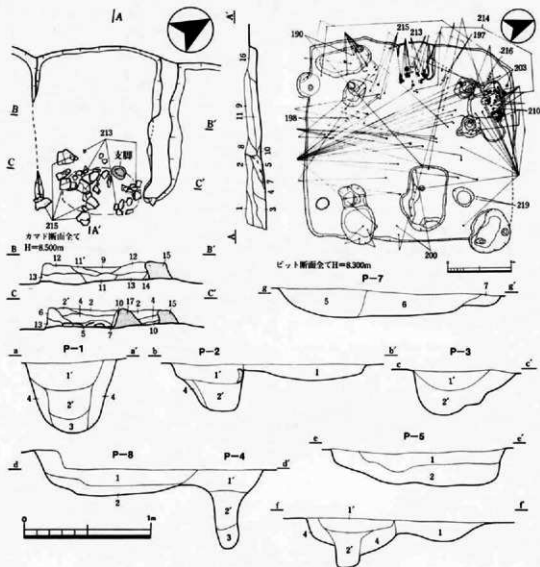
- 1層 暗褐色土：含有物なし。
 2層 暗褐色土：黄土粒少、焼土粒少量含有。
 3層 暗褐色土：黄土粒少含有。硬質。
 4層 暗褐色土：焼土粒少含有。軟質。
 5層 暗褐色土：黄土多量混在。
 6層 暗褐色土：軟質。

14号住居跡跡り層下土層群

- a層 暗褐色土：黄土硬地多量混在。硬質。居り床土。
 b層 赤褐色土：居り床境土。硬質。
 c層 暗褐色土と黄土混在の軟質床土。
 d層 黄褐色土：暗褐色土少量混在。
 e層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒少含有。
 f層 暗褐色土：黄土多量含有。弱硬質。
 g層 (暗)褐色土：黄土粒少量含有。
 h層 暗褐色土：焼土・炭化粒少量含有。
 i層 赤褐色土：硬質焼粘土。カマド床土。最も硬質強い。
 j層 淡赤褐色土：地山焼熟土。生焼状。
 k層 暗(赤)褐色土：焼土粒多量含有。炭化粒少量含有。カマド床土。
 l層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有。
 m層 暗褐色土：黄土粒・焼土粒多め含有。焼けの強いカマド床土。
 n層 暗褐色土：黄土粒多量含有。



第67図 14号住居跡遺物ドットマップ (S=1/60)



14号住居跡ビット層土層註

- 1層 暗褐色土：黄土粒多量、炭化物・焼土粒微量含有。
- 1'層 1層に近接するも、黄土粒少なく、焼土粒少量含有。
- 2層 暗(赤)色土：黄土粒・炭化物・焼土粒微量含有。
- 2'層 2層に近接するも、軟質。
- 3層 暗褐色土：黄土粒多量含有、軟質。
- 4層 暗褐色土と黄褐色土との混在土。
- 5層 暗褐色土：黄土粒・炭化物・黄砂粘土少量含有。
- 6層 暗(赤)褐色土：焼化物・炭化物・黄砂粘土多量含有。
- 7層 暗黄褐色土：焼土塊・黄土粒少量含有。
- 8層 暗褐色土：黄土塊多量含有、硬質。
- 9層 暗(赤)褐色土：黄土粒多量、焼土粒少量含有。もろく、塊状。
- 10層 暗褐色土：黄土粒少量含有。もろく、塊状。
- 11層 暗褐色土：黄砂粘土・焼土塊多量含有、硬質。
- 12層 暗褐色土：焼土塊多量含有、カマド跡付近の土。
- 13層 暗(赤)褐色土：黄土粒多量、焼土粒多量、硬質。
- 14層 暗褐色土：黄土粒多量、焼土粒少量含有、硬質。
- 15層 暗褐色土：黄砂粘土多量混在、油断焼土。
- 16層 暗(赤)褐色土：黄砂粘土・炭化物少量含有。
- 17層 11層に近接するも、やや明る。

14号住居跡カマド層土・床下土層註

- 1層 暗(赤)褐色土：黄土粒微量含有。
- 2層 暗褐色土：黄砂粘土少量含有。
- 2'層 2層に近接するも、黄砂粘土塊多量混在。
- 3層 暗褐色土：黄土粒多量含有。
- 4層 暗(赤)褐色土：黄土粒多量、焼土粒少量含有。やや硬質。
- 5層 暗褐色土：焼土塊多量含有、軟質。
- 6層 暗(赤)褐色土：黄土粒多量含有。カマド跡焼土。
- 7層 黄褐色土砂質粘土：硬質のカマド跡土。内側焼熱のため、やや焼土化。
- 8層 暗褐色土：黒褐色硬質焼土・炭化物少量含有。
- 17層 赤褐色塊状の粘土。支脚。

第68図 14号住居跡カマド平面・断面図及びビット断面図、遺物接合図 (右上のみS=1/120、他はS=1/30)

隔の浅いP7土坑内、P2から右側の浅い土坑内の3カ所を中心として存在し、土器接合もこの3カ所での接合、図示したもののこの区域から出土したものが主体を占める。出土した地点が住居内土坑やカマドである点やそれぞれに接合していることを考えれば、当住居の廃絶後の廃棄・流れ込み的な土器群というよりは、住居廃絶時に所有していた土器を投棄していったものと考えるのが妥当と思われ、図示したものとしては190・191・203・205・206・210～216が該当する。これ以外の土器群については、比較的小破片が多いことや床面付近での出土が少ないこと、接合があまり見られないことから廃絶後の流れ込み的土器群として妥当である。また、他の遺構との接合関係では、覆土中層付近の遺物が21号土坑と41号土坑と接合しているが、概して少ないほうであり、竪穴住居跡どうしの接合は12号住と見られる。

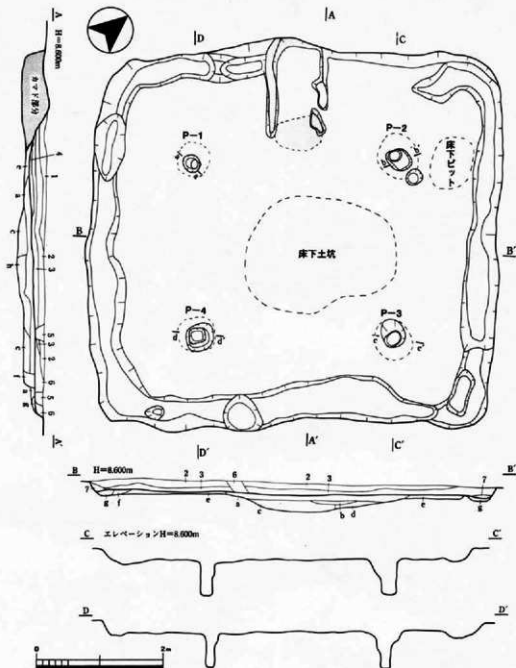
(12) 15号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域う8・う9Gr付近に存在する竪穴住居跡で、台地中央部のやや北側、12号竪穴住居跡の南側に隣接する。主軸は北から西へ50度と、12号竪穴住居跡よりもやや北向。(規模と形態) 規模は、縦が580cm前後、横が640cm前後で、平面プランはやや隅丸の横長方形を呈す。壁高は15cm前後とやや浅く、壁には幅40～50cm、深さ5～10cmの幅広の浅い壁溝が巡る。ほぼ全周するが、カマド右奥壁のみ途切れており、溝内にところどころ土坑状の掘り込みをもつ。床面積はカマドも入れて約37㎡である。

(覆土堆積状況) 両側壁際と手前壁際に軟質の黒色系の土が存在する以外は、上層から下層まで暗褐色系の土層が堆積しており、上層は褐色味が強く、カマド近くでは焼土粒の分布が目立つ。(柱穴) 主柱穴はP1～P4で、柱径20～30cm、掘り方径50～60cm、深さ55～60cmを測る。柱穴は奥壁から170cm、手前壁から140cm、側壁から160cm前後内側で掘り込まれており、柱間を結ぶと縦280cm、横310cmの横長方形となる。柱穴覆土は柱痕に軟質の黒褐色土が入り、その周りを(暗)黄褐色土の掘り方裏込め土が固めている。

(カマド) カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、規模は縦150cm、横95cmを測る。天井はなく、袖部分のみの残存で、しかも右袖は半壊している。床は地山をやや掘り込み貼り土をするもので、表層部分のみ焼土を多く混ぜた暗褐色土を貼っているが、特に、燃焼部では粘土状のものを貼付している。袖は床の貼り土の上に黄白色砂質粘土塊と暗褐色土を混在させた硬質土で構築されている。床面は燃焼部のみ焼けているだけで、奥壁から120cm手前、縦50cm、横70cmの範囲である。カマド覆土には天井崩壊したような土が一部ブロック状に見られるものの、カマド内に天井土全てが落ち込んだ感じはなく、カマド内の土器出土がほとんどカマドに伴ったものではないことも考えあわせ、天井土除去後、住居廃絶後に堆積した土層と見たい。

(床面と床下の状況) 床面は、周溝で外周がくぼむ以外は、高低でも面的にもフラットで、周溝部分を除くほぼ全面に貼り床がされている。貼り床土は主柱穴に囲まれた部分を中心としてカマド付近までが最も硬質の、黄褐色土と黒褐色土の混在させた貼り床で、その周縁、特に側壁側ではやや軟質の暗褐色土と黄褐色土の混在土となっている。床下土坑は主柱穴に囲まれた部分の



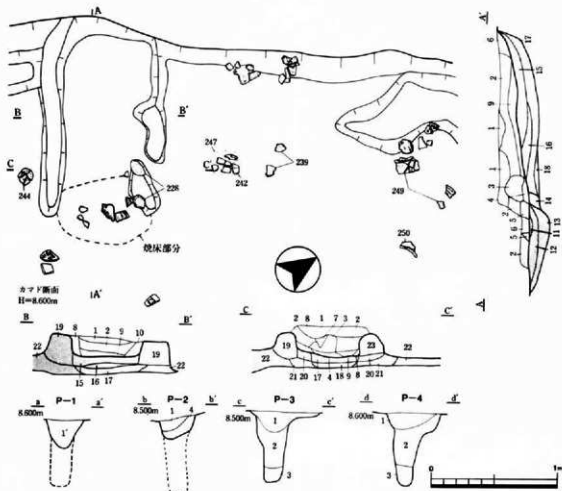
15号住居跡層土土層註

- 1層 暗(暗)褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。
- 2層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。
- 3層 暗(暗)褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。
- 4層 暗褐色土：黄土粒多め含有。
- 5層 暗褐色土：軟質。炭化7。
- 6層 暗褐色土：黄土粒多量含有。軟質。
- 7層 暗褐色土：黄土粒少量含有。やや軟質。

15号住居跡跡り床下土土層註

- a層 暗褐色土と黄褐色土の混在皮。硬質に粘り床土。
- b層 暗褐色土：黄土地多量混在。やや軟質。
- c層 暗(黄)褐色土：黄土地極多量。黄土粒少量含有。
- d層 暗褐色土と黄土地の混在土。しまり有り。
- e層 暗褐色土：黄土地多め含有。やや軟質。床土。
- f層 淡暗褐色土：炭化粒・黄土粒少量含有。潤滑層土。
- g層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。潤滑層土。
- h層 褐色土・黄土・暗褐色土の混在土。やや軟質。

第69図 15号住居跡平面・断面図 (S=1/60)



15号住居跡ピット層土層註

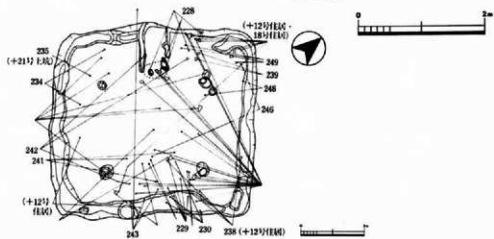
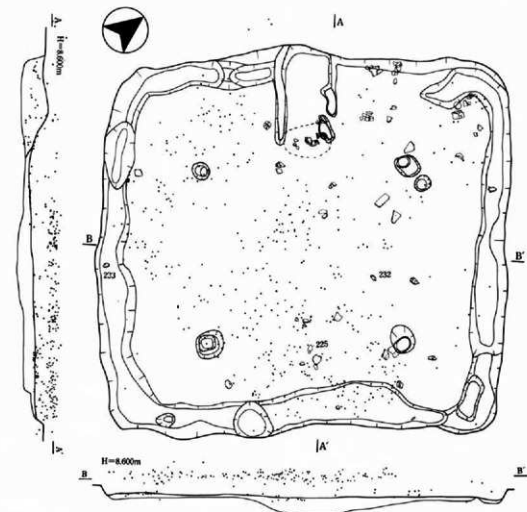
- 1層 暗褐色土：黄土粒少量含有。
- 1'層 1層に近接するも、やや暗く、しまり強い。
- 2層 黒褐色土：黄土粒少量含有。しまりはなく軟質。
- 3層 暗褐色土：黄土粒多量含有。しまりなく軟質。
- 4層 暗褐色土：黄土粒多量含有。

15号住居跡カマド層土・床下土層註

- 1層 暗褐色土：黄土粒・塊少量含有。
- 2層 暗褐色土：黒土粒・黄土粒少量含有。
- 3層 黄褐色土・砂質粘土大塊：カマド天井崩壊土。
- 4層 暗褐色土：黄砂粘土塊多量含有。
- 5層 暗褐色土：黄土粒多量、黄土粒少量含有。
- 6層 暗褐色土：黄土粒少量含有。やや軟質。
- 7層 暗褐色土：黄土塊多量含有。軟質。
- 8層 暗褐色土：黄土塊・黄土粒多量含有。やや軟質。
- 9層 (暗)褐色土・黄土粒・黄土粒多量含有。やや砂質。
- 10層 (暗)褐色土・黄土粒多量、黄土粒少量含有。

- 11層 黄白色砂質粘土：硬質焼結したカマド床土。火皿状。
- 12層 赤褐色粘土：硬質焼結したカマド床土。
- 13層 赤褐色土：地山崩壊土。生焼け状。
- 14層 暗赤褐色土：黄土粒多量含有。
- 15層 暗褐色土：黄土粒・焼土粒・炭化粒多量含有。ややしまり有り。焼けていないカマド床土。
- 16層 黒褐色土：黄土粒・塊多量、炭化粒多量含有。焼けていないカマド床土。
- 17層 暗褐色土：黄土粒多量、炭化粒少量含有。一部床土。
- 18層 (暗)黄褐色土：黄土粒少量含有。
- 19層 黄砂粘土と暗褐色土の混在地。硬質のカマド粘土。
- 20層 黒褐色土：炭化粒・黄土粒多量含有。砂質。
- 21層 暗赤褐色土：黄土粒多量混在。焼土粒・炭化粒少量含有。砂質。
- 22層 黒褐色土：黄土粒・塊多量、黄土粒少量含有。
- 23層 黄砂粘土と暗褐色土の混在土。塊状。カマド粘土だが、崩壊土の可能性。

第70図 15号住居跡カマド平面・断面図及びピット断面図 (S=1/30)



第71図 15号住居跡遺物ドットマップ及び遺物接合図 (上: S=1/60, 下: S=1/120)

やや右寄りに設けられており、160cm×240cmの浅い土坑である。覆土は貼り床土とはほぼ同様、やはり掘り方に伴うものであろう。また、P2の右にも床下ピットが確認されている。

（遺物の出土状況と接合関係） 当住居跡出土遺物は、全て土器で、須恵器85点、土師器736点を数える。点数的には土師器が多いが、比較的須恵器の量が目立ち、他の遺構との接合も目立つ。主に12号竪穴住居跡とであるが、18号竪穴住居跡、21号土坑とも接合関係にある。遺物分布は、カマド周辺から右奥隅付近と手前側中央付近にやや大きめの破片や完形に近いものが出土しているが、床面からは若干浮いて出土しているものがほとんどで、断面のドットでも大半が覆土上層からの出土であることを示しており、図示した遺物の中で、当住居跡に伴うと判断できるものはほとんどない。大半が住居跡廃絶後の周辺からの廃棄遺物と考えられ、カマド内出土のものも基本的には同様と思われる。P1出土の227が住居跡の時期に比較的近いものか。

（13）16号竪穴住居跡

（立地） 3次調査区域き5・き6Gr付近に存在する竪穴住居跡で、台地の北西側、調査区域の北隅付近に位置し、15号掘立柱建物跡と41号土坑と重複している。主軸は北から西へ57度ふる。

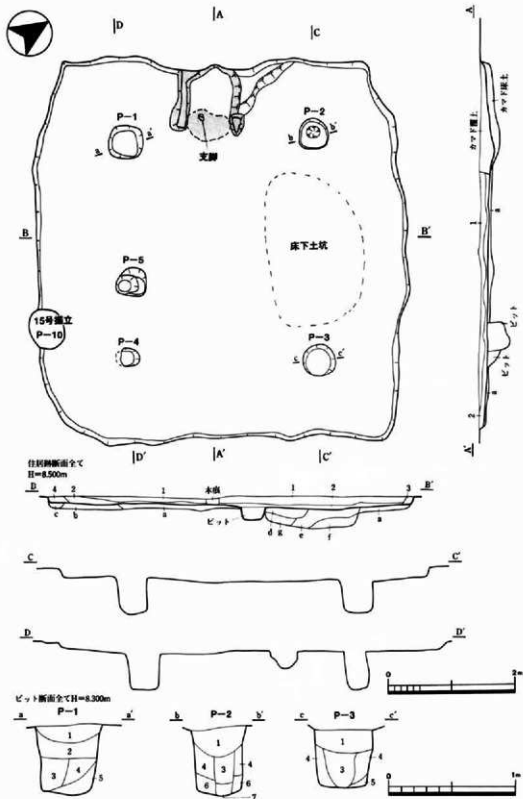
（規模と形態） 規模は、縦が580～600cm、横が580cm前後で、平面プランはやや隅が丸いもののはほぼ正方形を呈す。壁高は10cmと浅く、壁は直立気味、床面積はカマドも入れて約33㎡である。

（覆土堆積状況） 壁際に軟質の土が存在する以外は、上層から下層までしまりの強い暗褐色系の土層が堆積しており、カマド近くでは焼土粒の分布が目立つ。

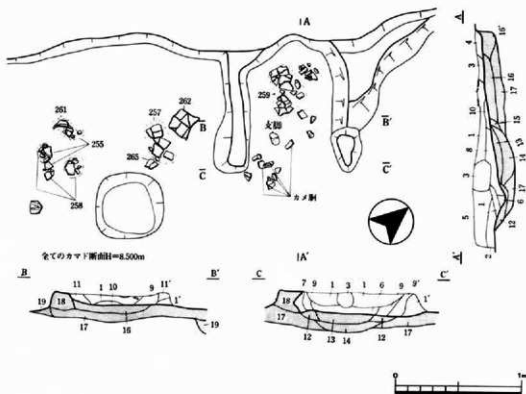
（柱穴と他のピット） 主柱穴はP1～P4で、掘形径40～50cmの不整形円形を呈す。いずれも深さ50～60cmを測り、柱径はだいたい20cm程度と思われる。柱穴は壁から120～140cm内側に掘り込まれており、柱間を結ぶと縦350cm、横300cmの長方形となる。柱穴覆土は柱痕に軟質のもろい暗褐色の土が入り、その下を黄褐色土で叩き締め、その周りには暗褐色土と黄褐色土の混在した締まりある掘り方裏込め土が固めている。4本の主柱穴以外では、何本かピットが確認されたが、当住居跡に伴うと判断されるものはなかった。

（カマド） カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、規模は縦110cm、横95cmを測る。天井はなく、袖部分のみの残存で、しかも右袖はほとんど崩壊している。床は地山をやや掘り込み貼り土をするもので、表層部分のみ焼土塊を多く混ぜた暗褐色土を貼っているが、特に、燃焼部では粘土状のものを貼付している。袖は床の貼り土の上に黄白色砂質粘土塊と暗褐色土を混在させた硬質土で構築されている。床面は燃焼部のみ焼けているだけで、奥壁から70cm手前、縦45cm、横60cmの範囲である。さて、この燃焼部のやや奥側中央から左寄りには軽石製支脚が立ったまま、遺存しており、右の空き具合を考えて、2個掛けの可能性をもつ。カマド覆土には天井崩壊したような土が一部燃焼部付近と袖近くで見られるものの、まとまってつぶれた感じの土は確認されず、比較的混在した土層堆積を示す。これは土器の出土でも同様で、比較的カマド内の奥、床よりも浮いて出土しており、カマド使用の土器ではなく、カマド廃棄の際に捨てられたものであろう。

（床面と床下の状況） 床面は、主柱穴内がやや下がる傾向はあるものの、面的にフラットで、



第72図 16号住居跡平面・断面図及びピット断面図 (上: $S=1/60$, 下: $S=1/30$)



16号住居跡覆土土層註

1層 暗(黄)褐色土：黄土粒多、炭化粒少量含有、硬質。
 2層 暗褐色土：黄土粒少量含有、しまり強い。
 3層 暗褐色土：黄土粒少量含有、やや軟質。

10号住居跡貼り床下土層註

a層 黄土地と暗褐色土の混在した硬質貼り床土。
 b層 黄土地と暗褐色土の混在土。しまり有るが硬質さに欠ける。床土。
 c層 暗(黄)褐色土：黄土粒多め含有、しまりやや有り。
 d層 黄褐色土：暗褐色土多く混在、硬質。
 e層 暗褐色土：黄褐色土多量混在、やや軟質。
 f層 暗褐色土多く混在、軟質。
 g層 黄褐色土：暗褐色土多量混在、やや軟質。

16号住居跡ビット覆土土層註

1層 暗褐色土：黄土粒少量含有、やや軟質。
 2層 暗(黄)褐色土：黄土粒少量含有、軟質。
 3層 暗(黄)褐色土：含有物なし、しまりなくもろい。
 4層 暗(黄)褐色土：黄土粒少量含有、ややしまり有り。
 5層 暗褐色土：黄褐色土多量混在、ややしまり有り。
 6層 暗(黄)褐色土：黄土粒多め含有、しまり有り。
 7層 暗黄褐色土：黄土粒多め含有、緻密。

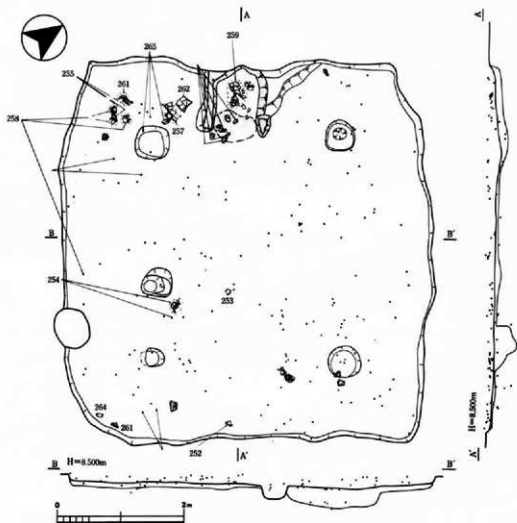
16号住居跡カマド覆土床下土層註

1層 暗褐色土：黄土粒・黄褐色砂質粘土多め、炭化粒少量含有、軟質。
 1'層 1層に近接するも、やや暗く、黄土粒少なめ。
 2層 黄褐色砂質粘土土：カマド式并崩壊土。
 3層 暗褐色土：焼土塊・炭化塊少量含有。
 4層 暗褐色土：黄土地・泥地土塊多め含有。
 5層 暗褐色土：黄土粒少量含有、やや硬質。
 6層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有、やや硬質。
 7層 暗黄褐色土：黄砂粘土多量、焼土粒多め含有。
 8層 暗褐色土：黄土粒・焼土粒多め含有、やや硬質。
 9層 暗(黄)褐色土：黄砂粘土粒多め含有。
 9'層 5層に近接するも、黄砂粘土粒少ない。
 10層 暗黄褐色土：暗褐色土混在、焼土塊多量含有。
 11層 暗褐色土：焼土塊多量、黄土粒多め含有。
 11'層 11層に近接するも、焼土塊少なめ、黄土粒多い。
 12層 暗黄褐色土：黄砂粘土土塊・焼土塊・炭化粒多め含有。
 13層 赤褐色土：硬質塊粘土。カマド床土。
 14層 赤褐色土：地山礫土。生焼け状。
 15層 暗赤黄褐色土：焼土粒多量、黄土粒・炭化粒少量含有、硬質周縁土。
 16層 暗褐色土：焼土塊多量、炭化粒少量含有、焼けていないカマド床土。
 16'層 16層に近接するも、焼土塊少なめ、黄土粒多い。
 17層 暗黄褐色土：炭化粒微量含有、軟質。
 18層 暗褐色土と黄褐色砂質粘土土塊の混在土。硬質のカマド土。
 19層 暗褐色土：炭化粒・黄土粒少量含有、やや軟質。

第73図 16号住居跡カマド平面・断面図 (S=1/30)

全面に貼り床がされている。貼り床土は左側壁側がやや軟質の土層が存在する以外は黄土塊と暗褐色土の混在した硬質土で、これをはがすと、P2とP3の間、側壁際にかけて浅い土状の床下土坑があわられる。これは比較的どの竪穴住居跡でも普遍的に見られるもので、覆土は硬質貼り床土と黄土塊を多く混在する暗褐色土で埋められている。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土遺物は、全て土器で、須恵器26点、土師器360点と量は少ない。遺物分布は、カマド内とP1奥の左奥隅付近にはば集中し、土器接合もこの付近で多いが、いずれも床面より僅かに浮いて出土しており、住居使用状態での遺物とは思われない。つまり、住居廃棄時か廃棄後に捨てられたものと思われるものであるが、比較的まとまって出土していることを考えれば、住居廃棄直後のものと判断可能で、252・253・254・255・257・258・259・262は一括性の高い遺物と考えたい。



第74図 16号住居跡遺物ドットマップ接合図 (S=1/60)

(14) 17号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域い11Gr付近、台地のほぼ中央に立地する竪穴住居跡で、17号掘立柱建物跡と重複して存在する。主軸は柱穴とカマドの位置から北から西へ51度を振るものと考ええる。

(形態・覆土等) 遺構が浅いことと掘立柱建物跡が重複していることから、竪穴住居跡の壁の立ち上がりを確認しておらず、覆土堆積でもそのような箇所は確認できていない。よって、当遺構を竪穴住居跡と考えた理由は柱穴の配置とカマド燃焼部と思われる焼土面の位置が他の竪穴住居跡と同様であったためと、方位が同様であったことによる。規模は柱穴間の規模から縦横約6m程度と思われ、通常規模のものである。

(柱穴とカマド) 主柱穴は4本で、掘り方径60～70cm程度の円形、柱径は25cm前後と推察する。深さはいずれも45cm程度。柱間を結ぶと縦320cm、横300cmの縦長方形となる。柱穴覆土は柱痕に軟質の黒褐色土が入り、その周りを(暗)黄褐色土の掘り方裏込め土が固めている。このP1とP2の間には床面が焼けた部分があり、5cm程度の厚さに被熱している。位置的にカマドの燃焼部と思われ、この焼け面の上層では袖土を思わせるような黄土塊の混在も確認できる。

(床面と床下の状況) 硬質の貼り床が確認された部分は、カマド燃焼部から主柱穴に囲まれた部分で、黄土塊と暗褐色土の混在した硬質土。その周辺ではやや軟質の黄褐色土が存在している。この貼り床をはがすと、P2の下方、P3寄りに他の竪穴住居跡同様、浅い土坑状の床下土坑が存在しており、貼り床状の土で埋められている。

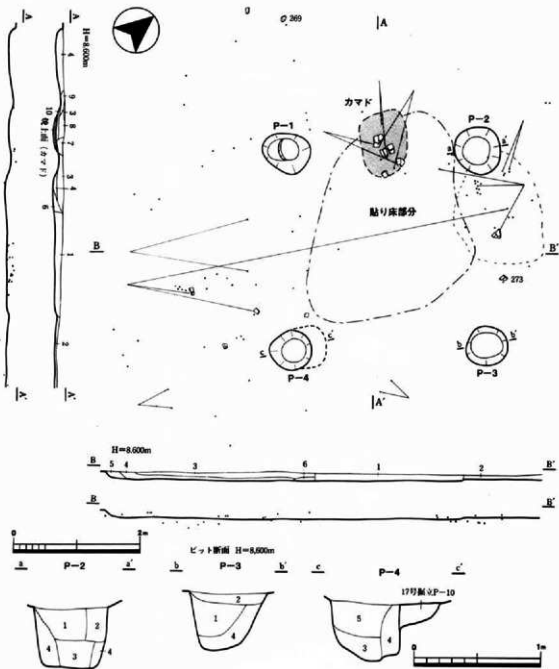
(遺物の出土状況と接合関係) カマド燃焼部に数個の土師器煮炊具の大きめの破片がまとまる以外は、極希薄な遺物出土であり、接合も少ない。通常の竪穴住居跡のような遺物分布ではなく、もともと住居の掘り込みをもたなかった可能性もある。遺物は、いずれも床面近くのものであるが、上記の出方からカマド周辺以外は、当住居跡に伴うものとは考え難く、当住居跡に帰属すべきものではないと判断する。

(15) 18号竪穴住居跡

(立地・規模・形態・覆土) 3次調査区域え10・え11Gr、台地のほぼ中央に位置する小型の竪穴住居跡で、410cm×530cmの隅丸長方形を呈す。住居内にカマドや焼床面はなく、住居の方位をどちらにとるか判断しにくい。該期の遺構で西から南側に方位をもつものはなく、他の遺構にならえば、北から西へ31度主軸をふる横長の竪穴住居跡と判断する。壁高は5～10cmと浅く、壁はなだらかに立ち、床面積は約21.5㎡を測る。覆土は、壁際に軟質の暗褐色土が存在する以外は、しまりの強い黒褐色土が堆積している。

(柱穴と他のピット) 住居内にピットは10ほど確認できるが、柱穴状の深さをもつものはP3とP8の2基のみで、住居の長軸ライン上、両側壁に近いところに位置する。いずれも深さ60cm程度のもので、柱痕状の覆土堆積は確認できていないが、位置・深さからこの2本しか柱穴として判断できるものはなく、2本主柱穴の建物と判断する。

(床面と床下の状況) 床面は、中央付近は黄土塊と暗褐色土の混在する硬質の貼り床が存在す



17号住居跡埋土層註

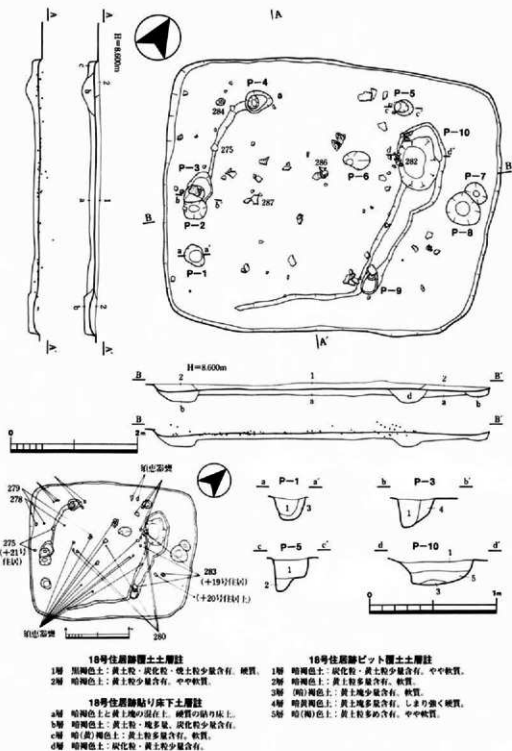
- 1層 黒褐色土：黄土多量混在。硬質。貼り床上。
- 2層 暗褐色土：黄土多め含有。しまり有り。
- 3層 暗褐色土：黄土多含有。やや硬質・貼り床状。
- 4層 暗褐色土：黄土少量含有。しまり有り。
- 5層 黒褐色土：黄土少量含有。軟質。
- 6層 暗(濁)褐色土：黄土多量含有。しまり有り。
- 7層 黒褐色土と黄土混在土。黄土少量含有。
- 8層 暗(赤)褐色土：黄土多量。黄土少量含有。

- 9層 暗褐色土：焼土粒・炭化粒少量含有。やや軟質。
- 10層 (暗)赤褐色土：焼土地面多量。炭化粒少量含有。

17号住居跡ピット埋土層註

- 1層 暗褐色土：黄土多め含有。しまり有り。
- 2層 暗(濁)褐色土：黄土少量含有。やや軟質。
- 3層 黒褐色土：黄土多め含有。やや軟質。
- 4層 (暗)黒褐色土：暗褐色土少量混在。しまり有り。
- 5層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒多量含有。しまり有り。

第75図 17号住居跡平面・断面・ピット断面図 (上：S=1/60、下S=1/30)



第76図 18号住居跡平面・断面図及びピット断面・遺物接合図(上：S=1/60、下左：S=1/120、下右：S=1/30)

るものの、壁から60～70cmの部分はやや軟質の貼り床となっており、硬質の貼り床部分よりも面的にも若干下がっている。貼り床下には遺構はなく、ピットも確認できなかった。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土遺物は、全て土器で、須恵器23点、土師器69点である。全体的に量は少なく、特に土師器の量が少ない。これは通常の住居とは違う形態の当遺構の特徴を裏付けする可能性があり、住居としてではなく、作業場のな小屋として作られたものである可能性を示唆している。遺物分布は、ほぼ全面に散在しており、特に集中はなく、床面よりやや浮いて出土するものが大半である。接合は須恵器を中心に見られ、特に須恵器貯蔵具において顕著で、19号住居や21号住居、20号住居の上層など他遺構間との接合も多い。このような出土・接合状況は、住居跡の廃棄後に周辺から捨てられた可能性を示唆するものであり、大半はそのような遺物であると考えられる。ただ、284の土師器碗や275の須恵器坏のような床面直上で、完形か半完形のものも出土しており、このような遺物は住居に伴う可能性をもっている。

(16) 19号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域く10・く11Gr付近に存在する竪穴住居跡で、台地のやや西側に立地する。23号竪穴住居跡廃棄後に、主軸を変えて建てられおり、主軸は北から西へ69度ふっている。

(規模と形態) 規模は、縦が720cm前後、横が660cm前後で、平面プランはやや隅丸の縦長方形を呈す。壁高は30cmと深く、壁は直立気味。重複する23号竪穴住居跡よりも深いため23号の床面を一層掘り下げて存在する。床面積はカマドも入れて約47.5㎡である。

(覆土堆積状況) 壁際にやや黄土地塊の含有の多い土が存在する以外は、上層黒褐色土、下層暗褐色土の土層が自然堆積状に存在しており、カマド近くでは焼土粒の分布が目立つ。

(柱穴と他のピット) 主柱穴はP1～P4で、掘り方径70～80cmの略円形を呈す。いずれも深さ40cm程度と浅いが、P1とP3は柱痕状の小ピットが一段深く掘り込まれている。柱径は柱痕状覆土をもつものや小ピットからだいたい30cm程度と思われる。柱穴は壁からだいたい160cm内側に掘り込まれているが、奥壁からのみ180cm測り、柱間を結ぶと縦360cm、横340cmとやや正方形に近くなる。柱穴覆土はP1で柱抜き取り状の覆土堆積(柱抜き取り穴に軟質のもろい土が入るもので、その下は叩き締め強い黄土地塊混在土、その周りには暗褐色土と黄褐色土の混在した締まりある掘り方裏込め土が存在)が確認される以外は、比較的掘り方全面にわたって、遺構覆土と同様の土が堆積しており、柱抜き取り時に柱穴を掘り起こしたような状況を示す。4本の柱穴以外では、P1とP4の間、側壁際で浅い土坑状のP5が確認できるが、どのような意味合いで掘られたのかは不明。

(カマド) カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、焚口から奥へ向かってやや北に向いて作られている。規模は横110cm、縦は袖の残存する部分では140cmを測るが、支脚の位置から縦160cmはあったものと推察する。天井はなく、袖部分のみの残存で、両袖とも途中で壊れているようである。床は住居跡の貼り床同様、地山掘り方の上に貼り土するもので、床表層部分のみ焼土と黄白色砂質粘土を多く混ぜた暗褐色土を貼っているが、特に燃焼部では粘土状のものを貼付している。

袖は床の貼り土の上に黄白色砂質粘土塊と暗褐色土を混在させた硬質土で構築されている。床面は燃焼部（奥壁から70cm手前、縦45cm、横55cmの範囲）のみ焼けており、他の床面、壁面では明瞭な被熱痕跡は確認できない。さて、この燃焼部のやや奥、中央から左寄りには軽石製支脚が立ったまま、遺存しており、右の空き具合を考慮して、2個掛けの可能性をもつ。カマド覆土には天井崩壊したような土が一部燃焼部付近と袖近くで見られるものの、まとまってつぶれた感じの土は確認されず、比較的混在した土層堆積を示す。これは土器の出土でも同様で、カマド内のみで接合するものはなく、必ずカマド外のものとの接合関係にあり、カマド設置のものがつぶれた印象ではなく、カマド廃棄の際に捨てられたものと思われる。

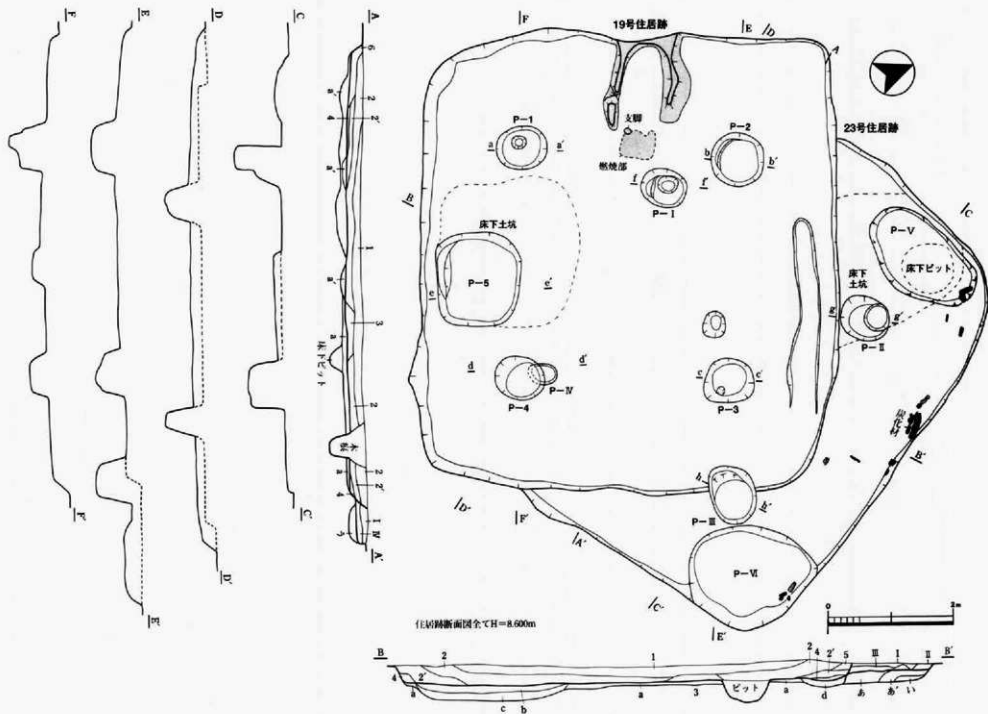
（床面と床下の状況） 床面は、壁際から中央へやや下がる傾向はあるものの、面的にフラットで、ほぼ全面に黄土塊と暗褐色土の混在した硬質土で貼り床がされている。この貼り床下の掘り方は凹凸が目立ち、P1とP4の間、側壁際にかけて浅い土坑状の床下土坑があわられる。これは比較的どの堅穴住居跡でも普遍的に見られるもので、覆土は硬質貼り床土と黄土塊を多く混在する暗褐色土で埋められている。

（遺物の出土状況と接合関係） 当住居跡出土遺物は、不明の石が若干存在する以外は、全て土器である。23号堅穴住居跡と重複しているため、当住居跡出土の土器数量を明確に算出しておらず、印象ではあるが、比較的多めの出土で、中でも須恵器の量が目立つ傾向をもつ。比較的大きな破片はカマド内とカマド左壁際にほぼ集中し、これらはその右手前に当たるP2周辺の土器群と接合するものが目立つ。カマドの部分でも述べたとおり、カマド内土器群はカマド廃棄後に捨てられたものであり、カマド使用に伴う土器ではないが、住居廃棄時又は廃棄直後に捨てられた土器群と推察し、比較的住居跡の時期を表す土器群(291・294・305・313・316・318・325・326)であると考えられる。これら以外の土器は小破片が主で、中央からやや右寄りに23号堅穴住居跡に連続するような形で分布し、床面から浮いて出土するものが多い。重複する23号堅穴住居跡との接合を初めとして、さらに、他の18号堅穴住居跡・21号住居跡・21号土坑とも接合しており、19号・23号堅穴住居跡の埋没に伴って周辺から廃棄又は流れ込んだものであると位置付ける。

(17) 23号堅穴住居跡

（立地） 19号堅穴住居跡に大半が重複し、それによって住居跡南西側が柱穴しか残っていない堅穴住居跡である。主軸は北から西へ30度ふっており、19号堅穴住居跡とは40度近い差がある。

（規模・形態・覆土） 住居跡左側が破壊されているため、横の規模は推測に基づくものであるが、縦720～740cm程度、横740cm前後を測る隅丸正方形であると考えられる。壁高は10～20cm程度、ほぼ直立して立ち上がる。カマドは破壊によってなくなっており、覆土も一部確認できるのみである。残存する部位での覆土では、上層については通常見られる暗褐色土が存在するものの、下層においては大きな炭化材や焼土塊を多量に含む黒色灰泥じりの黒褐色土が存在し、床面に遺存する形で壁際に燃え残ったような炭化材が存在している。残存部位のみからの判断ではあるが、焼失住居の可能性をもつものである。



19号住居跡層土土層注

- 1層 黄褐色土：灰化層、焼土粒、黄土粒少量含有。しまり有り。
- 2層 暗褐色土：黄土粒、焼土粒、灰化粒少量含有。やや硬質。
- 3層 暗(黄)褐色土：灰化層、焼土粒少量含有。
- 4層 暗褐色土：黄土塊多量、焼土粒多量含有。
- 5層 暗褐色土：灰化層少量含有。やや硬質。
- 6層 暗(黄)褐色土：焼土粒、塊多量含有。

19号住居跡跡り床下土層注

- a層 暗褐色土：黄土塊多量含有。硬質の跡り床土。
- b層 a層に反対する位。焼土大塊多量含有。
- 3層 暗褐色土：黄土塊多量、灰化粒少量含有。しまり有り。やや硬質。
- c層 暗(黄)褐色土：黄土塊、灰化粒少量含有。
- 3層 暗褐色土：黄土粒、灰化粒少量含有。

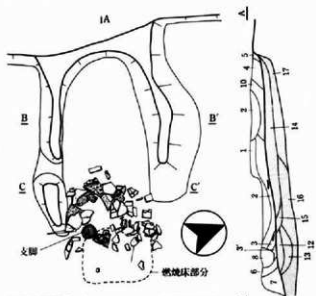
23号住居跡層土土層注

- 1層 暗褐色土：黄土粒少量含有。やや硬質。
- 2層 暗褐色土：灰化粒、焼土少量含有。硬質。
- 3層 暗褐色土：灰化層の土。灰化大塊多量、焼土粒、黄土粒少量含有。
- 4層 暗褐色土：面取のみの暗褐色。灰化大塊、焼土塊多量含有。

23号住居跡跡り床下土層注

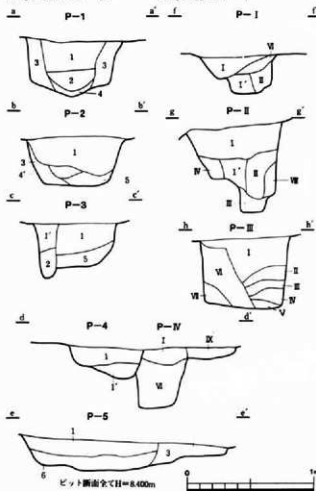
- a層 暗褐色土：黄土塊の塊状土。硬質の跡り床土。焼土塊、灰化粒少量含有。
- b層 a層に反対する位。黄土塊多量の塊状土。
- c層 暗褐色土：黄土塊の塊状土。灰化粒、焼土粒少量含有。しまり有り。
- d層 暗褐色土：黄土粒少量含有。

第77図 19・23号住居跡平面・断面図 (S=1/60)

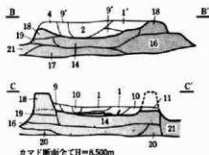


19号住居跡ピット IA'

23号住居跡ピット A'



ピット断面全てH=8.400m



カマド断面全てH=8.500m

19号住居跡カマド覆土・床下土層註

- 1層 暗褐色土：炭化粒少量含有、やや軟質。
- 1'層 1層に近接するも、やや明るく、焼土粒含有。
- 2層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量、炭化粒少量含有。
- 3層 暗(黄)褐色土：焼土粒・黄砂粘土少量含有。
- 3'層 3層に近接するも、焼土粒多量、硬質。
- 4層 暗褐色土：黄土塊多量、焼土塊少量含有。硬質。
- 5層 暗褐色土：黄土少量、焼土塊少量含有。硬質。
- 6層 暗黄褐色土：黄砂粘土多量、焼土塊少量含有。
- 7層 暗褐色土：焼土粒多量含有。軟質。
- 8層 黄白色砂質粘土：炭灰灰をもつカマド残塊。
- 9層 暗褐色土：焼土粒多量含有。軟質。
- 9'層 9層に近接するも、焼土粒少量含有。
- 10層 黒褐色土：炭化粒・黄土粒多量含有。硬質塊状。
- 11層 暗(黄)褐色土：黄土粒・塊多め含有。しまり有り。
- 12層 赤褐色土：硬質塊状粘土。カマド床土。
- 13層 淡赤褐色土：粘土塊状。生焼け灰。
- 14層 暗(黄)褐色土：焼土粒・黄砂粘土多量含有。しまり有り硬質。焼けの強いカマド土。
- 15層 暗(赤)黄褐色土：焼土粒多量含有。砂質。
- 16層 暗黄褐色土：黄土塊・炭化粒多め、焼土粒少量含有。しまり強い。硬質しないカマド床土。
- 17層 暗褐色土：炭化粒少量、黄土塊多め含有。硬質。
- 18層 暗褐色土と黄砂粘土の混在土。硬質のカマド粘土。
- 19層 暗黄褐色土：黄砂粘土多量、焼土粒少量含有。硬質。
- 20層 黄褐色土：炭化粒・暗褐色土少量含有。
- 21層 暗褐色土：炭化粒・黄土粒少量含有。軟質。

19号住居跡ピット覆土土層註

- 1層 (暗)褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。ややしまり。
- 1'層 1層に近接するも、やや暗く、焼土粒微量含有。
- 2層 暗(暗)褐色土：炭化粒微量含有。極軟質。
- 3層 暗(黄)褐色土：黄土塊多め含有。しまり有り。
- 4層 暗(暗)褐色土：黄土塊多量含有。ややしまり有り。
- 4'層 4層に近接するも、やや軟質。
- 5層 (暗)褐色土：黄土粒・焼土粒少量含有。やや硬質。
- 6層 暗褐色土：黄土粒少量含有。しまり有り。

23号住居跡ピット覆土土層註

- 1層 (暗)褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。ややしまり。
- 1'層 1層に近接するも、やや軟質。
- II層 暗褐色土：炭化大塊・粉多量、焼土多め含有。
- III層 暗褐色土：炭化粒・黄土粒少量含有。軟質。
- IV層 暗褐色土：黄土粒多量、炭化粒少量含有。
- V層 暗(暗)褐色土：黄褐色土混在。軟質。
- VI層 黄褐色と暗褐色土の混在土。しまり強い。
- VII層 暗黄褐色土：黄褐色土少量混在。しまり有り。
- VIII層 暗黄褐色土：黄褐色土多量混在。極軟質。
- IX層 黒褐色土：黄土塊・焼土塊・炭化粒少量含有。

第78図 19・23号住居跡カマド平面・断面図及びピット断面図 (S=1/30)

(柱穴とその他のピット) 主柱穴はPⅠ～PⅣの4本で、PⅣのみ掘り方径40cmを測るが、他は70～80cmの径を測り、柱径は柱痕状の覆土や掘り込みをもつものからだいたい30cm程度と思われる。大体深さは60cm程度であるが、PⅡのみ柱痕状に一段深くなっており、80cmの深さとなっている。柱穴は壁からだいたい170～180cm内側で存在し、柱間を結ぶと縦360cm、横380cmとやや横に長い方形となる。柱穴覆土はPⅣ以外では柱抜き取り状の部分に炭化材や焼土塊の混じった土が入り込み、その周りには暗褐色土と黄褐色土の混在した締まりある掘り方裏込め土が存在している。柱抜き取り穴に入る土は住居廃絶直後に一番最初に入る土であり、この中に炭化材・焼土塊が多量混在する状況は、当住居の焼失の可能性を高める。主柱穴以外のピットでは右手前隅と右奥隅に浅い土坑状のものが存在し、この中にも炭化材が混入している。

(床面と床下の状況) 床面は奥壁と手前壁近くがやや軟質の黄褐色土である以外は、黄土塊と暗褐色土の混在する硬質の貼り床となっている。床面には焼土塊や焼土粒の分布は見られるが、被熱したような痕跡のある部分はなく、火で床面が焼けたような感じはない。さて、貼り床下の掘り方には浅い土坑状のものがPⅤ付近であり、一部深いピット状となっている。

(遺物の出土と接合関係) 覆土上層から石製紡錘車が1点出土している以外は、全て土器である。19号住居跡の遺物と区別困難な部分もあるため、23号住居跡の出土量を明確に捉えていないが、浅い住居跡であるわりには概して出土量は多い。しかし、いずれも床面から浮いて出土するものであり、23号住居跡が埋没してから掘られる19号住居跡の覆土遺物と接合するものが多いことから、その大半は19号住居跡の廃絶後に捨てられたものであり、23号住居跡廃絶から19号住居跡建設までの間に存在する土器は極少ないと予想する。ただ、PⅥ内の土師器については炭化材とともに出土しており、住居跡埋没時のものである可能性をもつ。

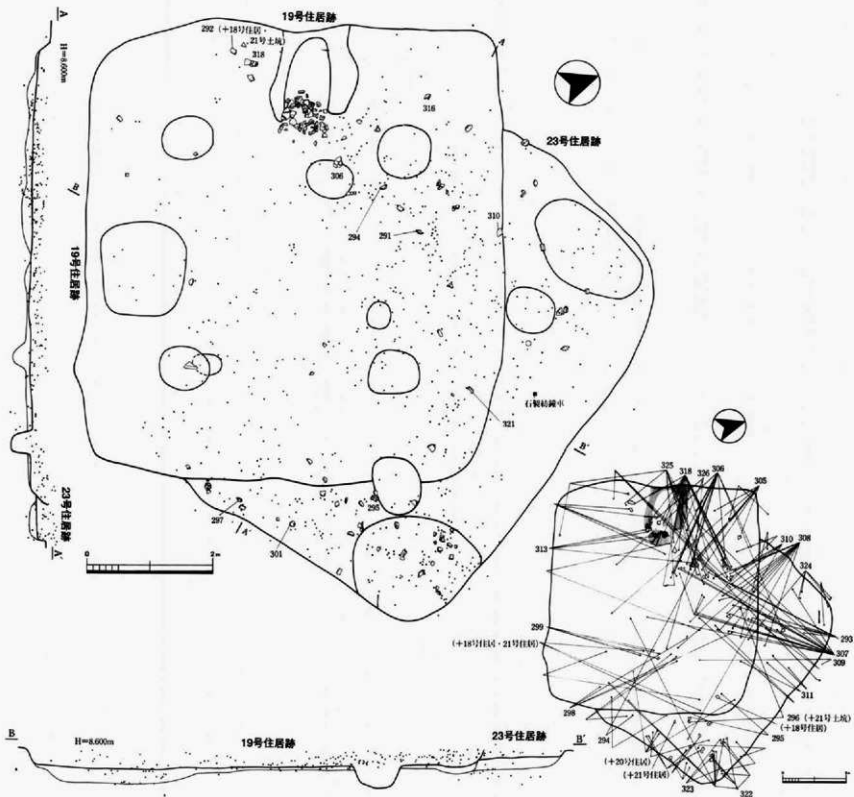
(18) 21号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域く13Grを中心に存在する竪穴住居跡で、台地のやや西側に立地する。主軸は北から西へ43度と、隣接する23・28号竪穴住居跡に近い方位をもつ。

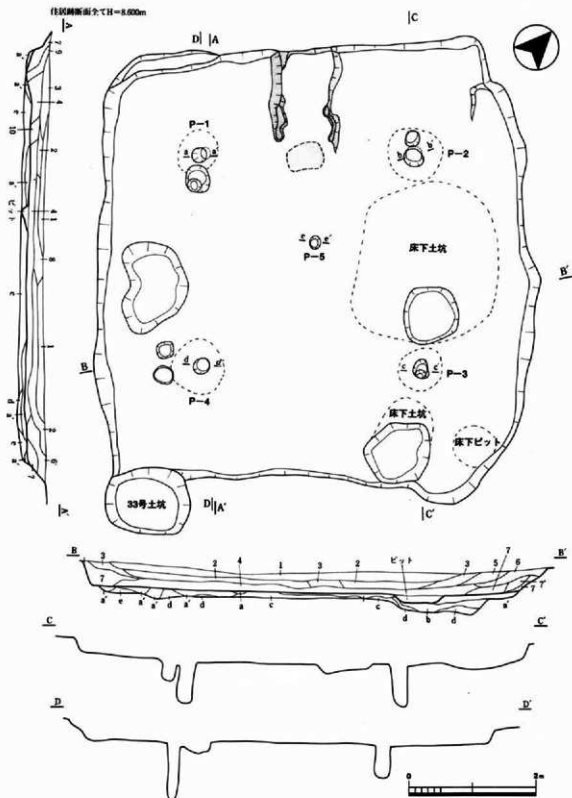
(規模と形態) 規模は、縦が670～700cm、横が660～680cm前後の大型で、平面プランは不整形正方形である。壁高は30～40cmと深く、壁は左側壁と奥壁が直立気味、手前壁と右側壁は立ち上がりがあり、しっかりとした壁が確認しづらい。床面積はカマドも入れて約45.53㎡である。

(覆土堆積状況) 壁際から徐々にレンズ状に堆積する土層を示しており、自然堆積状である。他の竪穴住居跡に比べ、概して黒味の強い土が存在しており、特に中層で顕著である。

(柱穴と他のピット) 主柱穴はPⅠ～PⅣで、柱痕径15cm程度、掘り方径は60～80cmの円形を呈す。深さはPⅠとPⅡが70cmと深く、PⅢとPⅣが60cm、55cmとやや浅い。柱穴は壁から160～170cm内側に掘られ、柱間を結ぶと340cm四方の正方形となる。柱穴覆土は柱痕に軟質黄土粒を多量に含む暗褐色土が入り、その周りには濁黄褐色の締まりある掘り方裏込め土が固めている。4本の主柱穴以外では、PⅠの下とPⅡの上、住居中央、PⅣの左に細いピットが存在し、柱穴状を呈すが、機能は不明。他にも浅い土坑状のものが手前右隅と両側壁付近に存在している。



第79図 19・23号住居跡遺物ドットマップ及び遺物接合図 (右下のみS=1/120、他はS=1/60)



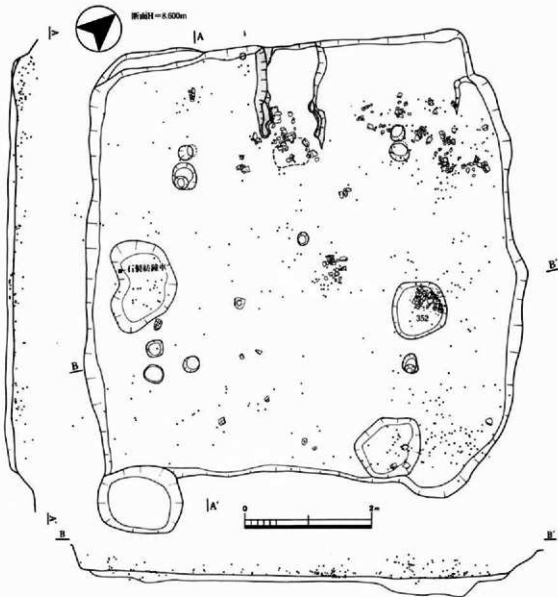
第80図 21号住居跡平面・断面図 (S=1/60)

21号住居跡部土層註

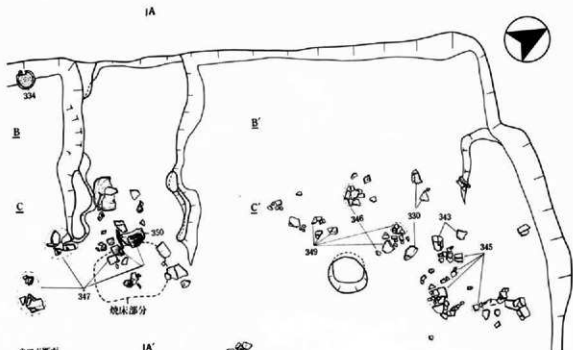
- 1層 黒褐色土：炭化穀・黄土粒微量含有。しまり有り。
- 2層 黒色土：暗褐色土少量混在。炭化物・黄土粒微量含有。
- 3層 暗褐色土：黒色土やや混在。黄土・炭化穀微量含有。
- 4層 暗褐色土：黄土・黒色土・炭化地少量含有。
- 5層 暗褐色土：黄土・黒色土少量混在。しまり有り。
- 6層 暗(黄)褐色土：黄土・炭化地少量含有。やや軟質。
- 7層 暗褐色土：炭化穀・黄土粒少量含有。しまり有り。
- 7'層 7層に近似するも。しまり弱く。軟質。
- 8層 褐色土：暗褐色土微量混在。炭化穀・塊多量含有。やや軟質。
- 9層 暗黄褐色土：黄土塊多量含有。炭化穀微量含有。
- 10層 暗褐色土：黄土粒・塊多量含有。やや軟質。

21号住居跡部より床下土層註

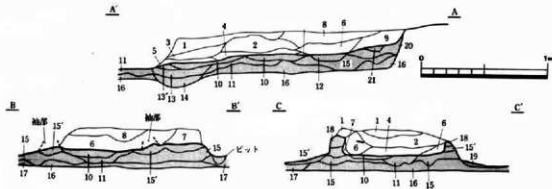
- a層 硬質黄土大塊主体で、黒褐色土が混入する硬質の貼り床土。
- a'層 a層に近似するも、暗褐色土混入で、黄土粒少量含有。
- b層 暗褐色土と黄土塊の混在土。しまり有るが、やや軟質。
- c層 黄褐色土：黄土塊と黄褐色土との混在。硬質貼り床上。
- d層 暗褐色土と黄土塊の混在土。しまり有り。
- e層 黄褐色土：地山よりやや軟く、褐色土少量混在。



第81図 21号住居跡遺物ドットマップ (S=1/60)



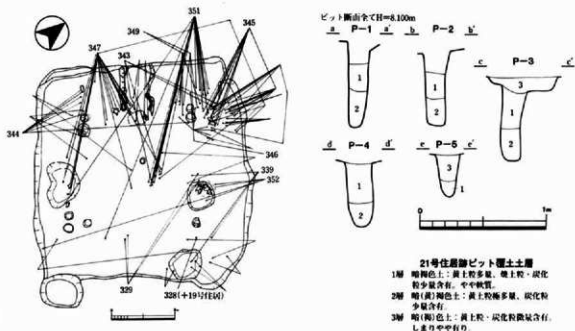
カマダ断面
全て目=8.500m



21号住居跡カマダ覆土・床下土層註

- | | |
|--|---|
| 1層 黒褐色土：炭化物多量、黄土少量含有。 | 12層 暗褐色土：黄砂粘土多量混在。本館跡カマダ床土。 |
| 2層 暗褐色土：黄土粒多量、炭化物少量含有。 | 13層 暗褐色土：硬質の硬土層。地山埋積。 |
| 3層 暗(黄)褐色土：硬土層・黄砂粘土少量含有。 | 13'層 13層に近附するも、硬さより強く、大粒状。 |
| 4層 暗褐色土：黄土粒少量、硬質硬土地多量含有。 | 14層 暗赤褐色土：地山火砕土。やや生焼け状。 |
| 5層 暗(赤)褐色土：硬土粒多量、硬土少量含有。 | 15層 暗(黄)褐色土：黄砂粘土少量含有。やや軟質。 |
| 6層 暗(黄)褐色土：黄砂粘土多量。やや軟質。 | 15'層 15層に近附するも、やや暗く、軟質。 |
| 7層 黄褐色土：黄砂粘土大塊多く混在。カマダ袖明硬土。 | 16層 黄褐色土：地山よりやや暗く、炭化物少量含有。 |
| 8層 (黄)褐色土：黄砂粘土多量含有。しまり有り。 | 17層 暗褐色土：黄土層・炭化物少量含有。跡り床土。 |
| 9層 暗(赤)黄褐色土：黄土粒多量含有。軟質。 | 18層 淡褐色土と黄砂粘土大塊の混在土。硬質のいカマダ土。 |
| 10層 暗(赤)褐色土：硬質硬土多量混在の被熱カマダ土。
黄土層・炭化物少量含有。硬さしまり強い。 | 19層 明黄褐色土：黄砂粘土粒多量含有。しまり強い。 |
| 11層 暗褐色土：黄土粒少量含有。しまり有り。 | 20層 黒褐色土：炭化物化したカマダ床土。黄砂粘土層・
硬土層・炭化物多量含有。ややしまりに欠ける。 |
| | 21層 暗(赤)褐色土：硬土少量含有。やや軟質。弱被熱。 |

第82図 21号住居跡カマダ及び周辺平面・断面図 (S=1/30)



第83図 21号住居跡遺物接合図及びピット断面図 (左: S=1/120, 右: S=1/30)

(カマド) カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、規模は縦160cm、横95cmを測る。天井はなく、袖と床部分の残存で、しかも袖の奥半分はほとんど崩壊している。床は住居貼り床と同様、地山掘り方の上に貼り土するもので、表層部分のみ黄白色砂質粘土塊・焼土塊を多く混ぜた暗褐色土を貼っているが、特に、燃焼部では粘土状のものを貼付している。袖は床の貼り土の上に黄白色砂質粘土塊と淡褐色土を混在させた硬質土で構築されている。床面は真ん中付近から燃焼部にかけて焼けてはいるが、特に燃焼部は焼けが強く、被熱層は15cm厚を測る。カマド覆土には奥壁付近を除いて中層から下層にかけてカマド袖か天井の崩壊したような黄白色砂質粘土塊や焼土塊が存在し、まとまってつぶれた感じの堆積を示す。カマドから出土した土器はこの層の中で存在し、接合もカマド内のみかその周辺とのみで、カマドで使用した炊炊具である可能性をもつ。ただ、これらはほとんどが胴部から下の部分で、完全復元できるようなものではなく、カマドがつぶれたそのままの状態ではない。

(床面と床下の状況) 床面は、面的にフラットで、全面が黄土塊と暗褐色土の混在した硬質土ないしは黄褐色土と黄土塊の混在した硬質土で貼り床がされている。この貼り床土は表層だけの部分もあり、ところどころ硬質貼り床の下に軟質の暗褐色土が存在する。掘り方は比較的凹凸が多く、P2とP3の間、側壁際にかけて浅い大きな床下土坑が掘られている。このような土坑はやや小さめのものがP3を挟んで手前側にもあり、右手前隅には床下ピットも存在する。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土遺物は、石製紡錘車が1点出土している以外は全て土器で、須恵器39点、土師器994点を数える。遺物分布は、左側がやや希薄ではあるが、概して分布密度が高く、特にカマド内とその周辺、P2奥付近、住居中央とその右側において大きな

破片が分布し、完形ないしは半完形にまで復元できた個体が数個体ある。接合するものが多く、ほぼ住居内に限られ（19号竪穴住居跡とはよく接合している）、比較的狭い範囲でつく傾向があり、一括して捨てたような土器群である印象を受ける。カマドの部分でも述べたように、住居廃絶時ないしはその直後に一括廃棄された可能性が高く、住居跡覆土中層から上層において分布するもの以外は、一括廃棄の土器群として位置付け、329・330・334・338・343～347・349～352の土器をそれとして上げたい。

(19) 26号竪穴住居跡

（立地） 3次調査区域のか19Gr付近に存在する竪穴住居跡で、台地の南西寄り、1号溝から北東へ6mのところの立地する。主軸は北から西へ76度と、竪穴住居跡中、最も西向きで、右奥隅では弥生時代の24号竪穴住居跡と一部重複している。

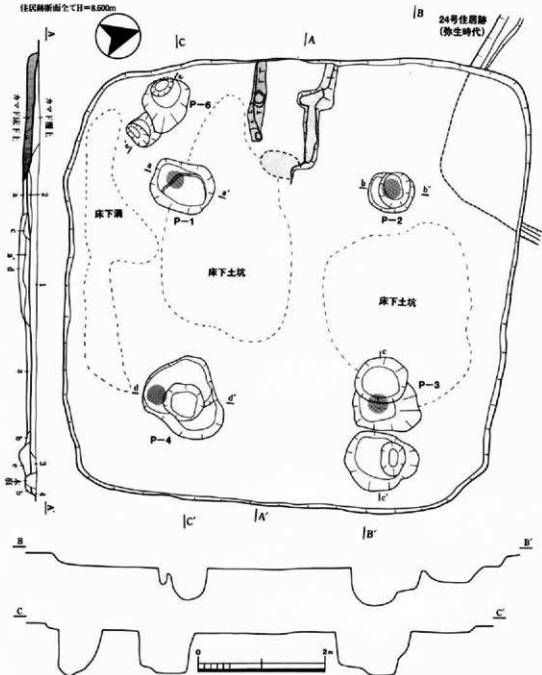
（規模・形態・覆土） 規模は縦横とも680～720cmを測り、平面プランは隅丸の正方形を呈すが、やや不整形。壁高は北側で15cmを測るが、南側では浅く5～10cmで、浅いため壁立ち上がりの不明瞭な部分が多く、住居プランの不整形の原因となっている。床面積はカマドも入れて約49㎡。覆土は手前壁際に焼土塊混在土や黄土混じりの土が存在する以外は、暗褐色土一層である。

（柱穴と他のピット） 主柱穴はP1～P4で、柱径は柱痕状土層堆積から察するに30cm程度、掘り方はP2のような径60cmのやや小さめのものもあるが、他は100cm前後の不整形の大型ピットである。深さは40～50cm前後で、柱痕のある部分がやや深くなる傾向があるが、P3のみ掘り方の方が深く、ピットを掘り直した感じとなっている。柱穴は手前壁からのみ150cm内側となっているが、他はだいたい200cm程度内側で、柱間を結ぶと縦350cm、横320cmの縦長方形となる。柱穴覆土はいずれも柱抜き取り状の軟質のもろい土が柱痕に入り、その周りには褐色土と黄褐色土の混在した締まりある掘り方裏込め土が存在する。4本の柱穴以外では、P3の手前に浅い小型土坑状のP5とP1の奥に柱穴状のP6が存在し、覆土的には当遺構に伴うものである。

（カマド） カマドは西壁のほぼ中央に位置し、規模は縦160cm、横100cmを測る。比較的残りが悪く、袖がしっかり残っているのは、右袖の前半分のみで、あとは袖の痕跡があるだけである。床は住居跡の貼床同様、地山掘り方の上に貼り土するもので、床表層部分のみ焼土と黄白色砂質粘土を多く混ぜた暗褐色土を貼っているが、特に、燃焼部では粘土状のものを貼付。袖は床の貼り土の上に黄白色砂質粘土塊と暗黄褐色土を混在させた硬質土で構築されている。被熱箇所はほぼ床面全体であるが、燃焼部以外はほとんど被熱痕を残さず、奥壁から140cm手前の燃焼部のみ厚さ10cmに良く焼けている。さて、この燃焼部のやや奥、若干右寄りに支脚の抜き取り穴があり、左の空き具合を考えると、2個掛けの可能性をもつ。カマド覆土は上層や袖崩壊部分に一部焼土塊や黄白色砂質粘土塊の混在が見られるが、それ以外では確認できず、つぶれた感じではなく、壊された後に、カマド土を除去したという印象である。これはカマド内の極少ない土器の出土状況からも言えることで、カマド設置の土器は天井除去の際に取り除かれた感じを受ける。

（床面と床下の状況） 床面は面的にフラットで、全面貼床である。壁際から1m程度はやや軟

住民跡断面全てH=8,600m



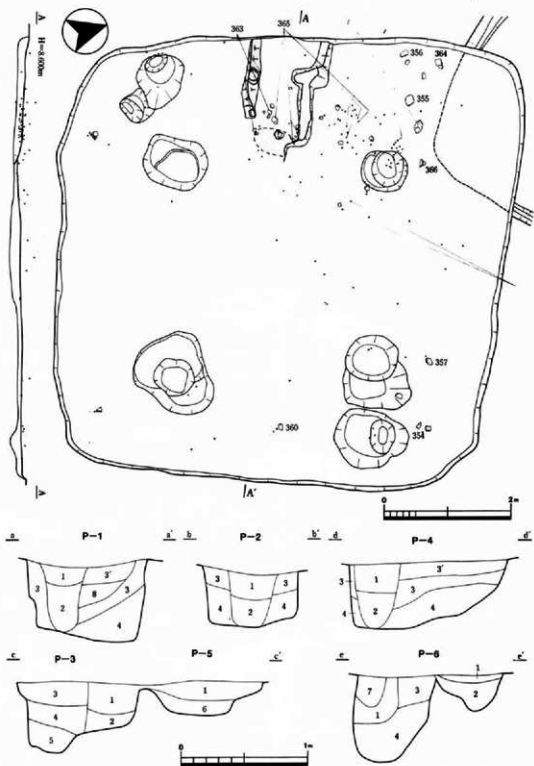
25号住居跡層土層註

- 1層 暗褐色土：炭化粒・黄土粒・焼土粒少量含有。しまり。
- 2層 暗褐色土：黄土粒多量含有。やや軟質。
- 3層 暗褐色土：焼土粒多め含有。しまり有り。
- 4層 暗褐色土と黄褐色土の混在土。硬質。

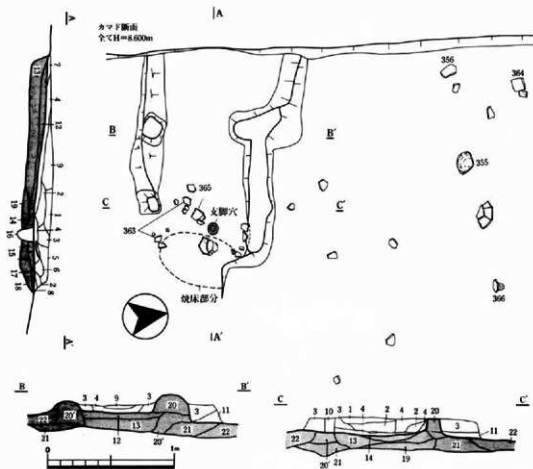
25号住居跡跡り床下土層註

- a層 硬質黄土層主体で、暗褐色土混在。硬質の粘り床土。
- a'層 a層に近似するも、暗褐色土やや多い。
- b層 暗黄褐色土：黄土粒混在。しまるが、やや軟質の床土。
- c層 暗黄褐色土：黄土粒と暗褐色土混在。硬質粘り床土。
- d層 暗黄褐色土：暗褐色土・黄土粒・炭化粒少量含有。
- e層 暗褐色土：黄土粒・焼土粒・炭化粒少量含有。

第84図 25号住居跡平面・断面図 (S=1/60、斜線は柱痕)



第85図 25号住居跡遺物ドットマップ及ピット断面図 (上: S=1/60, 下: S=1/30)



25号住居跡カマド覆土・床下土層注

- 1層 黒褐色土：黄土粒微量含有。しまり有り。
- 2層 暗黄褐色土：黄土粒多め。しまり強く、硬質。
- 3層 暗褐色土：黄砂粘土・炭化粒少量含有。しまり有り。
- 4層 暗(黄)褐色土：黄土粒・炭化物・焼土粒少量含有。
- 4層 4層に近似的も、黄土多め含有。
- 5層 暗(黄)褐色土：黄砂粘土少量、炭化物・焼土粒微量含有。しまり有り硬質。
- 6層 赤褐色土：焼土塊・粒多め含有。
- 7層 黒褐色土：硬質焼土塊多量含有。しまり有り。
- 8層 暗(赤)黄褐色土：黄土粒多め、炭化粒少量含有。
- 9層 暗黄褐色土：黄砂粒多量、硬質焼土少量含有。
- 10層 黄砂粘土と暗褐色土の混在土。カマド焼痕土。
- 11層 黒黄褐色土：黄砂粘土・炭化粒少量含有。硬質。
- 12層 暗(黄)褐色土：焼土粒多量・黄砂粘土粒多量含有。しまり有り。砂質。焼土の輪郭もカマド床土。
- 13層 暗黄褐色土：黄土多量、焼土粒少量含有。しまり。
- 14層 暗赤褐色土：黄土粒・焼土粒多量含有。カマド床土。焼土するも、焼き甘い。
- 15層 赤褐色土：硬質焼結土。カマド床土。
- 16層 黒褐色土：黄土粒多量含有。軟質。支脚柱も取り穴。
- 17層 黒褐色土：焼土粒多量混在。炭化粒少量含有。
- 18層 赤褐色土：地山焼結土。生焼け状。

- 19層 黄褐色土：暗褐色土・焼土粒微量含有。しまり有り。
- 20層 硬質黄砂粘土と暗黄褐色土の混在土。硬質だが、やや柔らかい。カマド焼土。
- 20'層 20層と同層だが、硬質黄砂粘土の割合少ない。
- 21層 (暗)黄褐色土：焼土塊多め含有。やや硬質。
- 22層 黄褐色土：黄土塊と暗褐色土塊混在の粘り床土。

25号住居跡ピット覆土土層注

- 1層 暗褐色土：炭化物・黄土粒少量含有。しまりに欠ける。
- 2層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。しまりなく極軟質。
- 3層 (暗)褐色土：黄土多量含有。しまり有り。
- 3'層 3層に近似的も、黄土塊多量で、硬質粘り床状。
- 4層 褐色土：黄土多量、炭化粒少量含有。しまり有り。
- 5層 黄褐色土：地山より暗く、しまりに欠け、炭化粒含有。
- 6層 暗(黒)褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。
- 7層 黒褐色土：炭化物・黄土粒少量含有。しまりに欠ける。
- 8層 (暗)黄褐色土：しまり有り。

第86図 25号住居跡カマド及び周辺平面・断面図 (S=1/30)

質の土が存在するが、それより中央では黄土塊中に暗褐色土を混在させた硬質土で貼っている。この貼床下の掘り方は凹凸が目立ち、左側壁付近ではやや浅い溝状の落ち込みが、P1のやや中央寄りからP4にかけては浅い大型の土坑が、P2とP3の間でも同様の大きさの土坑が存在。これらの土坑も硬質の貼床で貼ってある。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土遺物は、全て土器で、須恵器19点、土師器248点を数える。大型の住居であるわりには出土量は極少なく、他の住居の1/3程度で、分布は希薄。大半は床面から浮いて出土し、接合も少ない。ただ、唯一、カマドからP2周辺にかけてのみまとまる傾向があり、接合もここでのみあり、当住居跡の廃絶直後の一括廃棄土器の可能性をもつ。

(20) 26号竪穴住居跡

(立地) 3次調査区域く19・く20Grに存在する竪穴住居跡で、台地の南西側、1号溝に近接して存在する。主軸は北から西へ33度ふり、1号溝に沿った方位をとる。

(規模と形態) 規模は縦530cm前後、横540～550cmを測る小型住居で、平面プランはやや隅丸の正方形を呈す。壁高は10～20cmを測り、壁は直立気味。床面積はカマドも入れ約28.5㎡である。

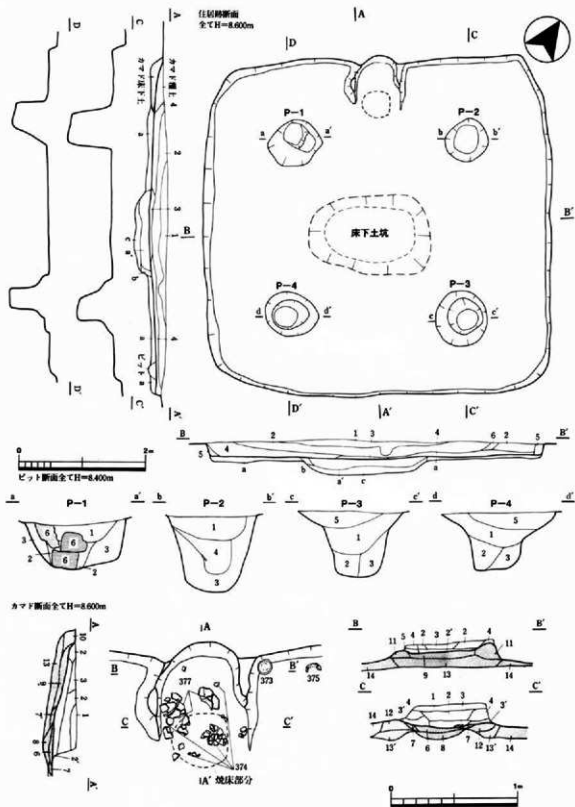
(覆土堆積状況) 上層に黒褐色土が存在する以外は暗褐色系の土で、壁際から徐々にレンズ状に堆積する自然堆積状の覆土をしている。

(柱穴) 主柱穴はP1～P4で、掘り方径60～80cmを測るが、柱径は柱痕状覆土から察するに径20cm程度と思われる。いずれも深さ60cm前後で、柱穴は壁から120cm内側に掘られており、柱間を結ぶと縦横290cmの正方形となる。覆土は柱痕に軟質の褐色土か黒褐色土が入り、その周りを黄褐色系の土で固めているが、P1のみ焼けたカマド袖土の大ブロックが入り込んでおり、カマド廃棄の際に混入したものと考ええる。

(カマド) カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、規模は縦80cm、横90cmの小型である。カマド奥壁が逆U字状に住居壁から若干出る形をしており、奥壁が丸くなっている。床は住居跡の貼床同様、地山掘り方の上に貼り土するもので、床表層部分のみ焼土と黄白色砂質粘土を混ぜた暗褐色土を貼っているが、特に、燃焼部では粘土状のものを貼付。袖は床の貼り土の上に黄白色砂質粘土と暗黄褐色土を混在させた硬質土で構築されている。被熱箇所は燃焼部にほぼ限られ、奥壁から60cm手前、40cmの範囲で焼けている。覆土は袖崩壊部分でやや黄白色砂質粘土の混在が目立つものの、それ以外では、住居覆土と変わらない土層であり、崩壊土は遺存なく取り除いた後に堆積した土層と推察する。

(床面と床下の状況) 床面は面的にフラットで、全面に貼床がされている。貼床土は住居中央に横向きに掘られた床下土坑の部分を除いて、全面黄土硬塊と暗黄褐色土の混在した硬質土で、床下土坑には下層に軟質の暗褐色土、上層に周りの貼床土よりもやや軟質の土が埋められている。

(遺物の出土状況と接合関係) 当住居跡出土遺物は、全て土器で、須恵器9点、土師器133点と出土量は極少ない。分布は、カマド内とその右奥、そして住居中央にはば集中し、特にカマド内が顕著である。カマド内とその周辺以外の土器は床面より浮いて出土するものばかりで、住居



第87図 26号住居跡平面・断面図及びピット、カマド図 (上: S=1/60, 下: S=1/30)

26号住居跡埋土土層註

- 1層 黒褐色土：黄土粒・黄土粒少量含有。やや軟質。
- 2層 暗(黄)褐色土：炭化粒・焼土粒微量含有。硬質。
- 3層 暗(黄)褐色土：炭化粒・焼土粒・黄土粒微量含有。
- 4層 暗褐色土：黄土粒多め。焼土粒微量含有。やや軟質。
- 5層 暗(黄)褐色土：黄土粒多め含有。やや軟質。
- 6層 暗(黄)褐色土：焼土粒・黄土粒多め含有。やや軟質。

26号住居跡貼り床下土層註

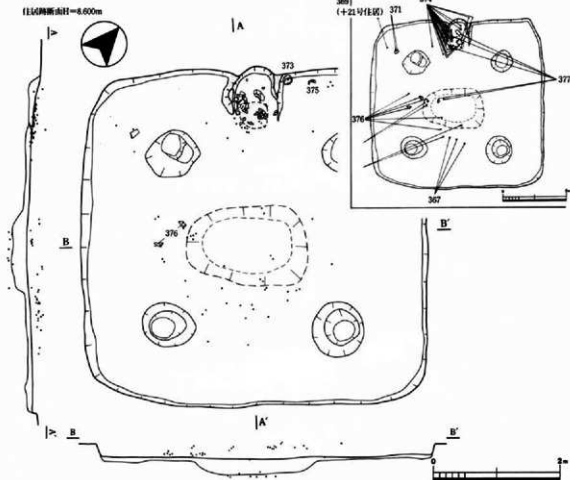
- a層 硬質黄土層主体で、暗褐色土混在。硬質の貼り床土。
- a'層 a層同様の貼り床だが、暗褐色土多く、a層より軟質。
- b層 暗黄褐色土：黄土粒多め含有。しまり有り。
- c層 暗褐色土：黄土粒炭化粒少量含有。やや軟質。

26号住居跡ピット埋土土層註

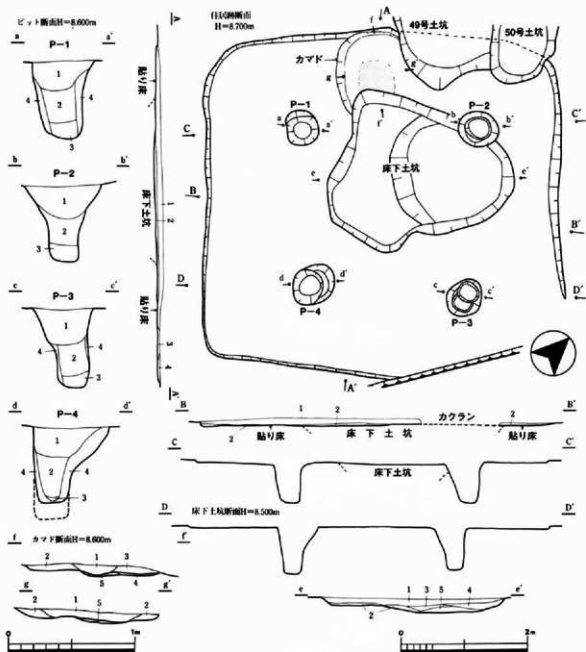
- 1層 暗褐色土：炭化粒・黄土粒・焼土粒少量含有。
- 2層 (暗)褐色土：黄土粒多量含有。しまりなく軟質。
- 3層 暗黄褐色土：炭化粒微量含有。やや軟質。
- 4層 暗褐色土：炭化粒多量。黄土粒少量含有。軟質。
- 5層 暗褐色土：黄土粒多め。炭化粒微量含有。
- 6層 焼けた黄砂粘土大塊。

26号住居跡カマド埋土・床下土層註

- 1層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒微量含有。しまりやや有り。
- 2層 暗褐色土：炭化粒・焼土粒・黄土粒少量含有。軟質。
- 2'層 2層に近似するも、やや明るく、しまりやや有り。
- 3層 暗黄褐色土：黄土粒多量。炭化粒・焼土粒微量含有。
- 3'層 3層に近似するも、やや暗く、しまり有り。
- 4層 暗褐色土：黄土粒多量。炭化粒・焼土粒少量含有。
- 5層 暗褐色土：黄砂粘土塊・焼土塊・炭化塊多め含有。
- 6層 赤褐色土：硬質焼粘土。カマド床土。火蓋状。
- 7層 赤(黄)褐色土：焼土塊・粒多量含有。鈹焼カマド床土。
- 7'層 7層同様だが、暗赤黄褐色を呈し、焼き強い。
- 8層 淡い赤褐色土：地山焼残層。やや生焼け。
- 9層 暗褐色土：焼土粒・炭化粒多量。黄砂粘土粒少量含有。しまり有り。焼けていないカマド床土。
- 10層 暗褐色土：黄土粒・焼土粒少量含有。やや軟質。
- 11層 黄砂粘土を主体とし暗褐色土少量混在するカマド焼粘土。硬質。
- 12層 (暗)黄褐色土：黄砂粘土粒多量混在。焼土粒・焼少量含有。しまり有り。カマド跡土。
- 13層 暗黄褐色土：炭化粒少量含有。しまり有り。
- 13'層 13層に近似するも焼土多く赤味おびる。
- 14層 黄褐色土：暗褐色土少量混在。硬質。貼り床土。



第88図 26号住居跡遺物ドットマップ及び遺物接合図 (右上のみS=1/120、他S=1/60)



28号住居跡ピット土層註

- 1層 暗褐色土：炭化粒・炭化粒多量。黄土粒多量含有。
- 2層 暗褐色土：黄土塊・炭化粒・炭化粒多量含有。硬質。
- 3層 暗(赤)褐色土：黄土粒・多量含有。

28号住居跡床下土坑覆土土層註

- 1層 黒褐色土：黄土塊少量混在。炭化粒・炭化粒多量含有。しまり強く、やや硬質。床土。
- 2層 黒(黒)色土：黄土塊多量。炭化粒少量含有。
- 3層 黒(黒)色土：炭化粒多量。黄土塊少量含有。
- 4層 黒(黒)色土：黄土塊・炭化粒・炭化粒少量含有。
- 5層 暗(黄)褐色土：黄土塊・黄土塊多量。炭化粒少量含有。

28号住居跡ピット覆土土層註

- 1層 暗(暗)褐色土：炭化粒多量含有。しまり有り。
- 2層 暗(黒)褐色土：黄土塊多量。炭化粒・炭化粒少量含有。
- 3層 暗(黒)褐色土：黄土塊多量。しまり強く、硬のた上。
- 4層 暗黄褐色土と黄褐色土の混在土。しまり有り。

28号住居跡カマド覆土土層註

- 1層 暗褐色土：黄砂粘土多量。炭化粒・炭化粒少量含有。
- 2層 暗黄褐色土：黄土塊混在。しまり強く、貼り床状。
- 3層 暗(赤)褐色土：黄土塊混在。黄土塊多量含有。
- 4層 暗褐色土に焼けたカマド床土：やや硬質。
- 5層 暗赤黄褐色土の焼けたカマド床土：黄土塊混在。

第89図 28号住居跡平面・断面及びピット・カマド断面図 (左：S=1/30, 右：S=1/60)

埋没時での遺物と考えられるものだが、カマド内とその周辺のものでは半完形程度に復元できるものが多く、浮いての出土が少ないことから住居廃絶時の一括廃棄土器として位置付けたい。

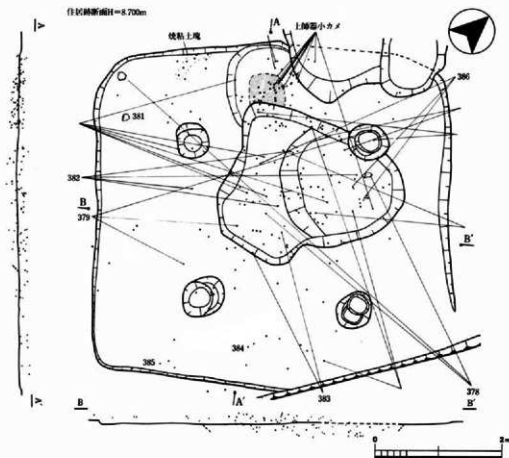
(21) 28号竪穴住居跡

(立地) 4次調査区域H3Gr付近に存在する竪穴住居跡で、台地西側に立地。21号竪穴住居跡の西側に隣接して存在する。主軸は北から西へ46度と、21号竪穴住居跡と類似した主軸をとる。

(規模・形態・覆土) 縦横540cm前後を測る隅丸正方形の小型住居跡である。壁高は5cm程度しか立ち上がらず、壁の確認が困難で、東側隅付近では壁が確認できていない。床面積は東隅壁が不明だが、約29㎡程度と思われる。覆土は暗褐色系の土で、手前壁際に焼土分布がある。

(柱穴) 主柱穴はP1～P4で、掘り方径40～50cmを測るが、柱径は柱痕状覆土から察するに径20cm程度と思われる。深さは奥側が60cm、手前側が70cmと手前側がやや深くなっている。柱穴は手前壁から130cm、奥壁から150cm、側壁から150～160cm内側に掘られており、柱間を結ぶとだいたい縦横260cmの略正方形となる。覆土は柱痕にやや軟質の褐色系の土が入り、底には柱当たりのつき固めた土が、そしてその周りを黄褐色系の掘り方土で固めている。

(カマド) 北西壁のほぼ中央に床面が焼けた部分があり、焼土塊の分布が見られたことにより、



第90図 28号住居跡遺物ドットマップ (S=1/60)

カマドと断定した。しかし、袖の痕跡も確認できず、燃焼部がわかるのみで、規模は不明だが、一応、燃焼部から前方のややくぼんだ部分をカマド範囲と想定する。このタイプのカマドは他にも確認されるものであり、残らなかったのではなく、構造の異なるカマドである可能性が高く、当住居ではそれを想定させるような遺物が出土している。カマドの左奥壁際床面から一括出土したもので、片面に被熱痕（黒色化）をもつきめ細かな粉状の粘土塊である。通常の粘土ではなく、軽く緻密なもので、6点ほど出土している。通常の作り付けのカマドとは異なり、仮設的に移動できる構造のものではなかったかと想定する。

（床面と床下の状況） 床面は面的にフラットで、全面に貼り床がされている。貼床土は住居ほぼ中央に掘られた浅い不整形円形の床下土坑の部分を除いて、全面黄土塊と黄褐色土の混在した硬質土で、床下土坑には下層に焼土塊混じりの黒褐色土、上層に黄土塊混じりの硬質黒褐色土が埋められている。

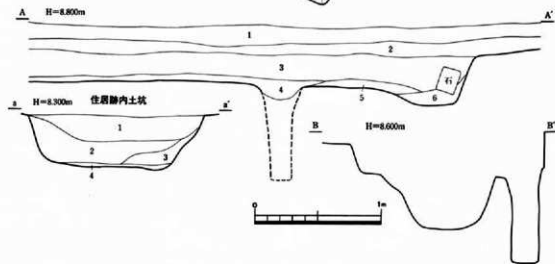
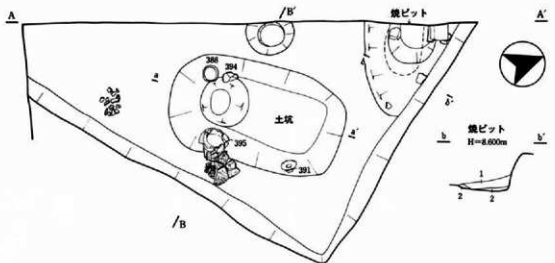
（遺物の出土状況と接合関係） 当住居跡出土土器は、須恵器9点、土師器137点と少なく、カマド周辺から床下土坑にかけて集中する以外は希薄である。遺構が浅いためにほとんどが床面近くの出土ではあるが、住居に直接伴うと判断できるようなものは少なく、強いてあげれば、左奥隅付近の378・381が該等する土器である。

（22）29号竪穴住居跡

（立地） 4次調査区域K4Grから西側へ、調査区域外へと続く竪穴住居跡で、台地西側に立地する。調査が一部分のため、詳細は不明だが、他の住居跡に習えば、主軸は北から約40度西へ振ると思われる。

（規模・形態・覆土・床面） 部分的な調査からの推察ではあるが、柱穴が壁から170cm程度を測ることから7m前後の大型の規模を有するものと推察。形態も角のしっかりした方形であり、壁の立ち上がりも高く、明瞭である。覆土は暗褐色系の土で、床面近くは黄土塊が混在。床面は全面貼床されている。部分的調査のため、床を剥がしておらず、掘り方は不明である。

（ピット・土坑） 柱穴は上端径35cm、柱径20cm、深さ75cmで、極めて軟質の土が入り込んでいる。底面は貼床状につき固めた感じとなっており、柱当たり該当。部分調査のため掘り方までは掘っておらず、柱痕のみの調査である。柱穴以外では、その手前、壁までの間に横向きに140cm×80cmの隅丸長方形の40cmの深さの土坑が存在している。上層から下層まで炭化塊・焼土塊を多量に含む暗褐色土が堆積しており、覆土内には須恵器坏Hの完形や胴部以下のみ欠損した土師器壺などが入っている。このようなしっかり掘られた土坑は他の住居跡には見られなかったものであり、土坑下層の土器と住居床面の土器とが接合していることから、この遺構は住居使用時に掘られていた可能性が高く、なんらかの施設として存在。貯蔵穴的なものを想定する。この他にも、右側壁際には焼土分布の見られる浅いピットが存在している。焼けた粘土塊や焼けた大きな切石など見られ、鍛冶滓も数点出土。周辺に炭化塊の多量混在した黒色砂質土が分布しており、炉床のような焼床部分がないため鍛冶炉的なしっかりした遺構とは言い難いが、なんらかの



29号住居跡内土坑層註

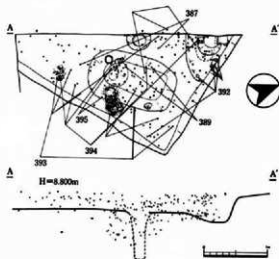
- 1層 暗褐色土：炭化粒少量含有，珪藻土。
- 2層 黒褐色土：炭化粒少量含有，礫土上層土。遺構流入土。
- 3層 暗(部)褐色土：炭化粒少量，黄土粒多含有，遺構埋没土。
- 4層 暗(部)褐色土：黄土多め含有，床面崩壊層。
- 5層 黒灰(陶)色砂質土：焼土塊・炭化塊多量含有，焼ビット周辺土。
- 6層 暗(部)褐色土：焼土多量混在，焼土塊多量含有，焼ビット覆土。土器多量混在。

29号住居跡焼ビット土層註

- 1層 黒灰色砂質土：白色砂土多量混在，炭化塊多量含有。
- 2層 暗灰褐色砂質土：黄土塊含有。

29号住居跡内土坑埋土層註

- 1層 暗(黄)褐色土：炭化塊・焼土塊多量含有，しまり有り。
- 2層 暗(黄)褐色土：炭化塊・焼土塊多め含有，やや軟質。
- 3層 暗(黄)褐色土：黄土少量混在，炭化粒多量含有。
- 4層 (暗)黄褐色土：焼土塊・炭化塊多量，黄土塊多め含有。つぎ固めたような硬質土。



第91図 29号住居跡平面・断面図及び遺物ドット接合図 (右下のみS=1/60、他はS=1/30)

鍛冶に関連した遺構であると予想する。

(遺物の出土状況と接合関係) 一部分の調査ではあるが、須恵器9点、土師器166点が出土しており、比較的濃密な分布を示す。土坑内廃棄土器を中心として完形・半完形に復元できたものが多く、接合もこの土坑内土器を中心としている。土坑内の土器は上層から下層までほぼ均等に入っており、接合も土坑上・下層の土器と住居床面の土器など、比較的一挙に埋められた感じがあり、土器の一括性を物語っている。また、この土坑内土器と18号掘立柱建物跡の柱穴出土土器(上層と中層の2点)との接合が見られ、位置的にも東に隣接する大型建物であり、18号掘立柱建物跡の廃棄遺物の可能性もある。

2. 掘立柱建物跡

(1) 1号掘立柱建物跡

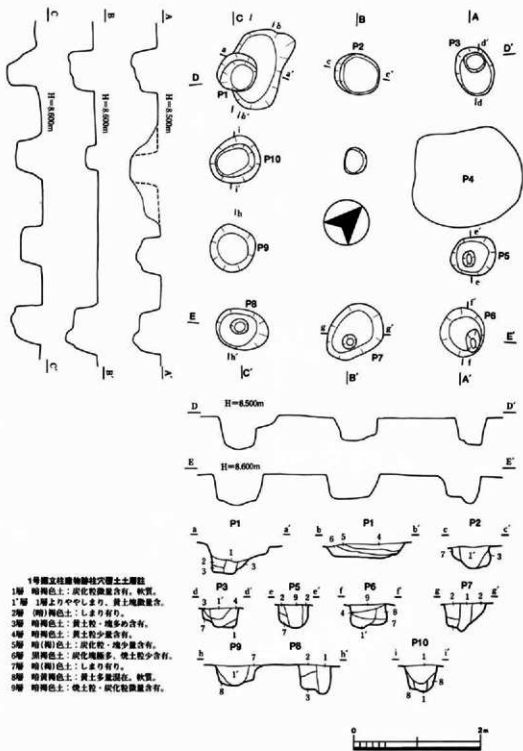
2次調査区ウ5・エ5Grに位置する側柱建物跡で、緩く北西側に傾斜する台地の北東端付近に立地する。やや1棟だけ離れた感じで存在しており、主軸は北から西へ44度振る。規模は梁行2間(385cm)×桁行3間(400cm)、床面積15.4㎡を測り、柱間はほぼ均等で、梁行で190cm、桁行で140cmである。柱掘り方は建物規模が小さめの割りには概して大きく、径70~80cmの略円形、深さは四隅の柱が50cmであるが、その間の柱は40cm程度とやや浅くなっている。覆土は柱痕部分が暗褐色の軟質土、掘り方埋土は黄土塊を含む暗褐色系の土がしまりよく埋められている。柱穴覆土から土師器変片が十数点出土しており、時期の特定はできないが、該期にはほぼ位置付けられる。さて、この建物は側柱建物であるが、縦P2-P7、横P4-P10ライン上に小型の柱穴が存在しており、性格は良く分からないが、覆土からこの建物に伴うものと予想される。

(2) 2号掘立柱建物跡

2次調査区域のア2・ア3Grに位置する建物跡で、台地北側に立地する。この建物の中央で、丁度調査が年度を分けたため、掘立柱建物跡の存在を確認した時点では、既に片側の工事が行われており、柱穴を十分に確認し切れていない。そのため、南側の柱穴を検出しておらず、建物規模もこれでいいのか判断しかねる。主軸としては北から西へ56度振るものと推察する。柱間はほぼ均等で梁行、桁行ともに180cmで、規模は確認している柱穴では梁行・桁行ともに3間の540cm、床面積29.2㎡と推察する。ただ、南西側にさらに伸びる可能性もあり、断定はできない。柱掘り方は径50~60cmで、方形に近いものもあるが、略円形が多く、柱の深さは四隅が40cm前後と深いが、その間は20cm程度と浅いものばかりである。出土遺物はP5から須恵器の胸部破片と土師器変胴部片が数点出土しており、基本的に堅穴住居跡と同様の6世紀末前後と推察する。

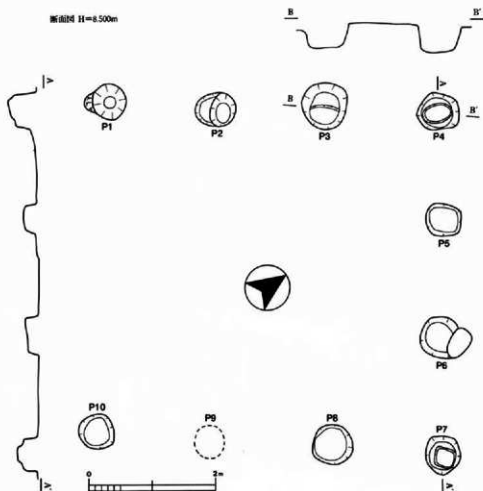
(3) 3号掘立柱建物跡

3次調査区域のえ4・え5Grに位置する側柱建物跡で、台地北側に立地する。P7が17号土坑と重複しているが、遺物混入はあるものの、この土坑は風倒木痕と思われる覆土堆積をしており、当該時期に位置付けられるものではない。主軸は、隣接する堅穴住居跡から90度東に振るも



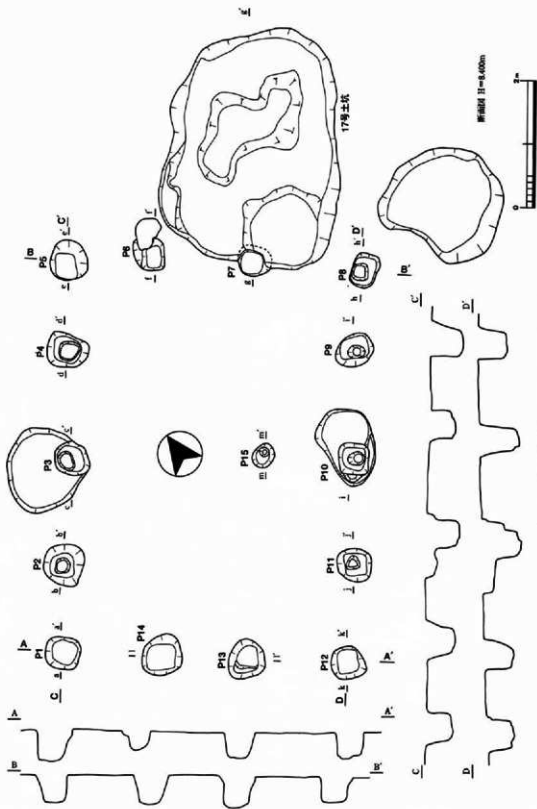
1号獨立建物跡柱穴層土層註
 1層 暗褐色土：炭化粒少量含有。秋葉。
 1'層 1層上りややしまり。黄土塊少量含有。
 2層 (暗)褐色土：しまり有り。
 3層 暗褐色土：黄土粒・塊多め含有。
 4層 暗褐色土：黄土粒少量含有。
 5層 暗(細)色土：炭化粒・塊少量含有。
 6層 黄褐色土：炭化塊多。黄土粒少量含有。
 7層 暗(細)色土：しまり有り。
 8層 暗黄褐色土：黄土多量混在。秋葉。
 9層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。

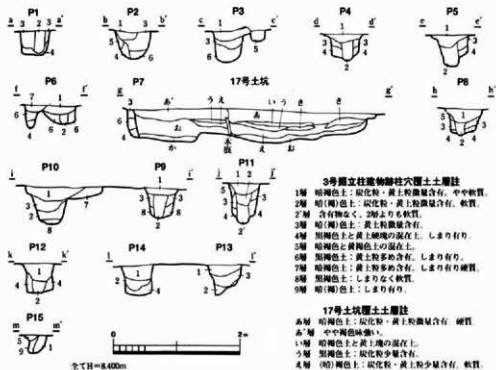
第92図 1号獨立建物跡平面・断面図 (S=1/60)



第93図 2号掘立建物跡平面・断面図 (S=1/60)

ので、北から東に36度振る。規模は梁行3間(460cm)×桁行4間(620cm)、床面積28.5㎡を測り、柱間は、梁行で四隅から中央へそれぞれ1本目が140cmに対し、2本目が170cmと長くなっており、桁行でも四隅から1本目の150cmとその間の135cmと異なっている。柱掘り方はいずれも径50cm前後の略方形であるが、桁行の中央のP3とP10のみ土坑状の浅い掘り込みを伴っており、深さにおいてもこの2本のみ60cmと最も深くなっている。他の柱穴は、50cm前後とほぼ似通った深さであり、この2本が主柱となっていたものと予想され、このライン状の小ピットP15も建物に関連する柱穴であると予想する。覆土は柱痕の見られるものが7本確認され、柱痕には暗褐色の軟質土、掘り方埋土は黄土塊を含む暗褐色系ないしは黒褐色系のしまりのある土で、特に下層では黒褐色土が目立つ。これ以外の柱穴は柱抜き取り後の土層堆積を示し、ここでも中層に柱痕状の暗褐色系の軟質土が見られる。出土遺物は土師器製の小片が50点以上出土しているが、図示できたものは521の1点のみである。41号土坑、16号土坑と接合している。





第95図 3号獨立柱建物跡ピット断面図 (S=1/60)

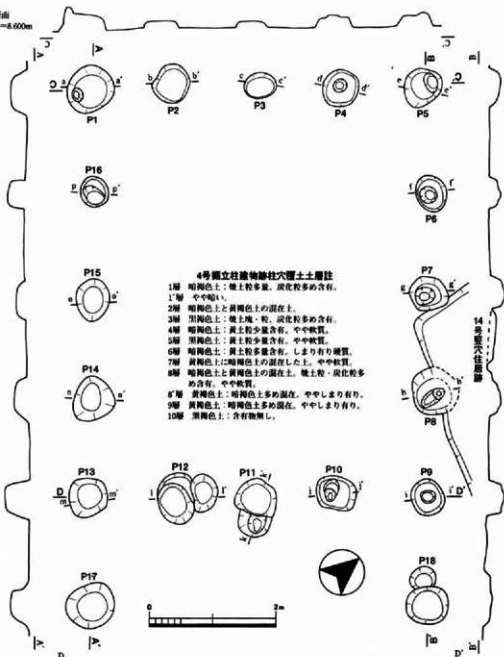
(4) 4号獨立柱建物跡

3次調査区域のか8・お8Grに位置する側柱建物跡で、台地北西側に立地する。P7・8が14号竪穴住居跡と重複しており、その一部が竪穴住居跡により切られている。主軸は、東側に存在する竪穴住居跡とほぼ同方向を向き、北から西に50度振る。規模は梁行4間(540cm)×桁行4間(650cm)、床面積35.1㎡を測る。柱間は、梁行でほぼ均等に130cm、桁行でも170cmと均等に配列しており、南東部分桁行の延長線上に同じ間隔で掘られている。この延長線上の柱穴は桁行の並びはあるが、梁行きの柱は存在せず、庇状ではあるが、庇付きの建物とは呼べないものである。柱掘り方はいずれも径60cm前後の略円形で、深さは四隅の柱穴がやや40cm程度と深い傾向、その間の柱穴は概して浅い掘り込みである。柱穴が浅いために覆土堆積がよくわからないものもあるが、一部で柱痕の見られるものがあり、焼土粒・炭化粒を多量混在する暗褐色系の土が入っている。この焼土分布は掘り方埋土には確認できないものであり、建物放棄後の周辺ないしはこの建物の火災を示唆するものと予想する。出土遺物はなく、切り合いから14号竪穴住居跡以前と推察されるが、当該時期の枠内に位置付けられるものと予想する。

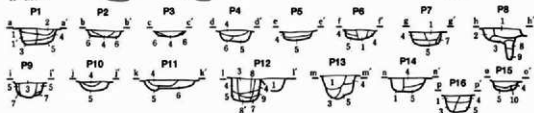
(5) 5・6・7号獨立柱建物跡

3次調査区域のお3・お4・か3・か4Gr、台地の北西隅付近に存在する3棟の獨立柱建物

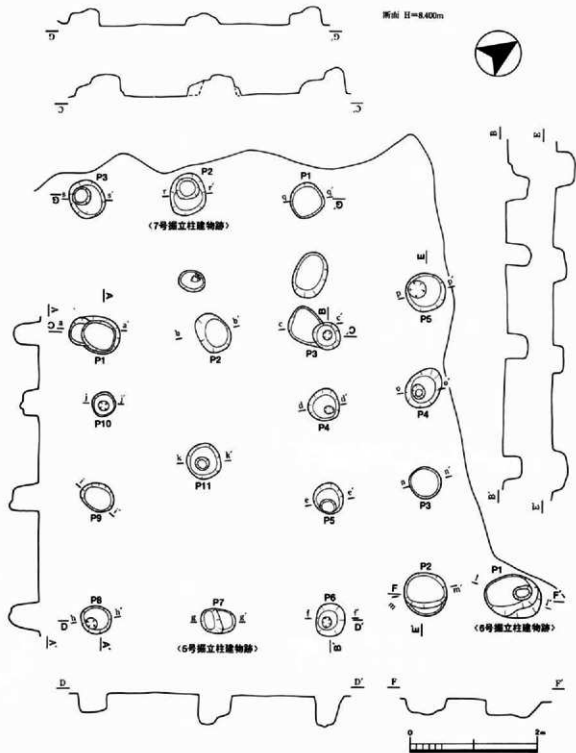
断面
H=6.600m



ピット断面
H=8.500m

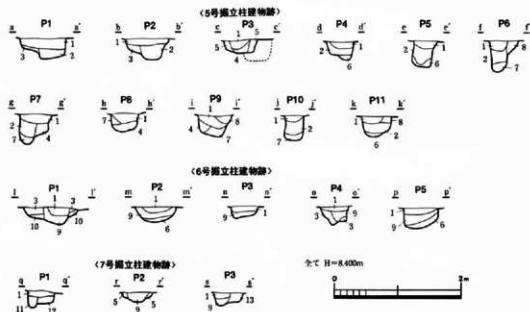


第96図 4号獨立柱建物跡柱穴層土層註



第97图 5号·6号·7号獨立柱建物跡平面·断面图 (S=1/60)

跡で、3棟とも同一主軸、東側に隣接する3号掘立柱建物跡と90度近く振って存在しており、5号掘立柱建物跡の主軸は、北から51度西に振っている。建物全体の様子が分かるのが、5号掘立柱建物跡のみで6・7号掘立柱建物跡の半分以上は調査区域外に延びているため、6号掘立柱は桁行と梁行の間のみ、7号掘立柱は梁行のみしか分からない。ただ、5号掘立柱の梁行2間(360cm)×桁行3間(450cm)の規模(床面積16.2cm)と、6号掘立柱の桁行3間(470cm)、7号掘立柱の2間(360cm)が合致した長さをもつことを考え、3棟ともほぼ同規模の2間×3間の建物である可能性が高く、そのように考えれば、同規模の建物を均等の配置で、同一主軸で建てる建物群であると考えられるわけである。柱間は梁行で合う5・7号掘立柱については180cm程度で合致し、対面するかのように柱が並ぶ。桁行では6号については柱間160cm程度で均等に並ぶが、5号掘立柱については北西側から南東側へ徐々に柱間を延ばしており、均等性がない。しかし、この柱の配列は6号掘立柱の配列の中2本でよく合致しており、6号掘立柱の柱を意識して配列したものと予想する。柱間は合わないが、桁行長では5・6号掘立柱とも合致する点はその考えを補強している。柱掘り方は5号掘立柱が径40~50cm程度の小型略円形に対し、6号掘立柱・7号掘立柱ともに径50~



6号・6号・7号掘立柱建物跡柱穴土層註

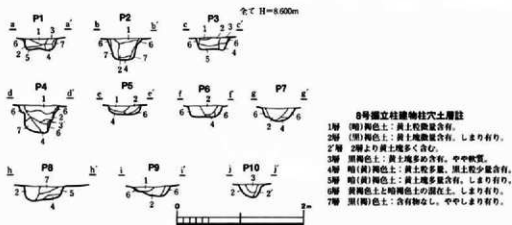
- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1層 暗褐色土：黄土粒少量含有。 | 8層 暗褐色土：黄土粒・須土粒少量含有。 |
| 2層 黒褐色土：黄土粒・炭化粒微量含有。 | 9層 黒褐色土：黄土粒・炭化粒少量含有。やや軟質。 |
| 3層 黒褐色土：しまり有り。 | 10層 黄褐色土に黒褐色土混在。 |
| 4層 黒褐色土：黄土粒多め含有。軟質。 | 11層 暗(陶)色土：炭化粒・黄土粒微量含有。 |
| 5層 暗褐色土：黄土塊多量混在。しまり有り。 | 12層 暗(陶)色土：軟質。 |
| 6層 黒褐色土と黄褐色土の混在土。軟質。 | 13層 暗(陶)色土：黄土粒少量含有。しまり有り。 |
| 7層 黒褐色土：しまりなく軟質。 | |

第98図 5号・6号・7号掘立柱建物跡柱穴断面図 (S=1/60)

60cm程度のやや大きめの略円形となっており、これは深さでも前者のものが40cm程度の深めのものに対し、後者の30cm以下の浅いもので対応しており、覆土についても前者と後者では若干異なる。柱配置から見て、6・7号掘立柱が5号掘立柱よりも先行する建てられた可能性が高いが、基本的には同時期に併存していた建物跡であると評価する。なお、5号掘立柱の梁中央柱穴列のほぼ中央には同規模のピットP11が存在しており、当建物に関連する柱穴であると予想する。出土遺物は土師器甕と土師器内面黒色堊の数点だけで、これらから詳細な時期比定することは難しい。

(6) 8号掘立柱建物跡

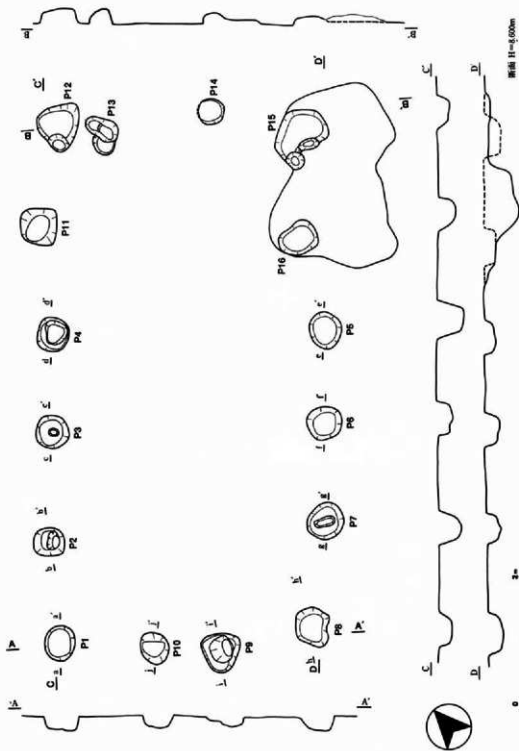
3次調査区域のえ13Grを中心として存在する側柱建物跡で、台地中央に立地する。主軸は、竪穴住居跡群の主軸から90度近く振る横向き建物で、北から東に33度振る。さて、この建物は梁行3間、桁行5間を予想したが、P4・P5から北東側へは桁行の柱列がずれて存在しており、つながりがない可能性もある。ただ、この建物は比較的並びのよいP1～P10の柱列でも真っすぐ通るものは少なく、少しずれて存在しており、しかも、P4とP5間の柱が検出されなかった点を重視し、一連の建物と予想したい。規模は、全体では梁行3間(400cm)×桁行5間(820cm)の床面積32.8㎡。P1からP10までは桁行3間(480cm)の床面積19.2㎡である。柱間は、桁行ではほぼ140cm間隔で存在しており、ずれている部分での大きな違いはないが、梁行については南西側の柱配置がしっかりした配列であるのに対し、北東側が不均一な配置となっており、付属的な感じを受ける。これは柱掘り方でも同様で、P1～P10がいずれも径50cmの略円形で掘っているのに対し、P11～P16は大きさにばらつきがあり、やや不整形である。ただ、深さは比較的似通っており、覆土も類似している。3×3間の建物を桁行で2間ほど拡張した建て増しによる建物と推察する。遺物はどの柱穴でも出土しておらず、時期は掘立柱建物跡から類推するしかない。



第99図 8号掘立柱建物跡柱穴断面図 (S=1/60)

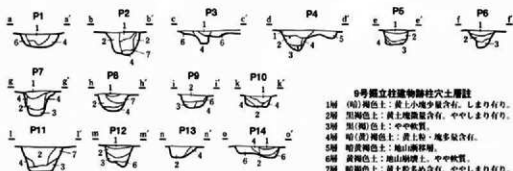
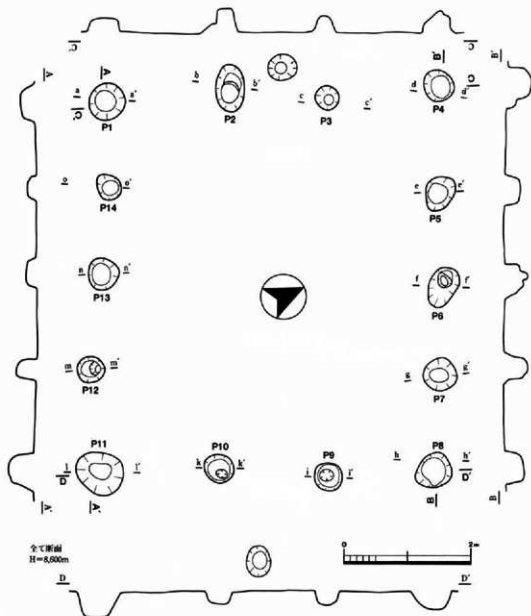
(7) 9号掘立柱建物跡

3次調査区域のか13・お13Gr付近に存在する側柱建物跡で、台地中央に立地する。主軸はグ



第100图 8号独立柱建筑物平面·断面图 (S=1/60)

比例 1:1=0.000m



第101図 9号獨立柱建物跡平面・断面図 (S=1/60)

リッド方位に近い向きを示し、北から西に66度振る。規模は梁行3間(530cm)×桁行4間(600cm)、床面積31.8㎡を測る。柱間は、梁行で四隅から中央へ1本目が180cmだが、中2本間が160cmと短く、桁行でも四隅から中央へ1本目が160cmだが、2本目が140cmと短くなっている。柱掘り方は径50cm以下の小型円形であるが、四隅の柱穴のみ一回り大きく径50cm以上を測り、深さも比例して、四隅のみ中間の柱穴よりも深くなっている。柱穴覆土は柱痕的な堆積を示すものもあるが、抜き取り後の堆積的なものも多く、柱痕部分の土によく見られる軟質土はここでは確認できない。ただ、掘り方埋土のような黄土塊混在土は存在しており、全体的にはしまりのよい土が多い。出土遺物は土師器甕小片のみで詳細な時期は不明だが、当該時期の枠内に位置付けられるものである。なお、この建物には建物の外側、両方の梁中央(P2とP3の間、P9とP10の間)に、つまり建物の主軸上に柱穴が1本ずつ存在する。この建物に伴う必然性はないが、付属的なものとして関連する柱穴の可能性はある。

(8) 10号掘立柱建物跡

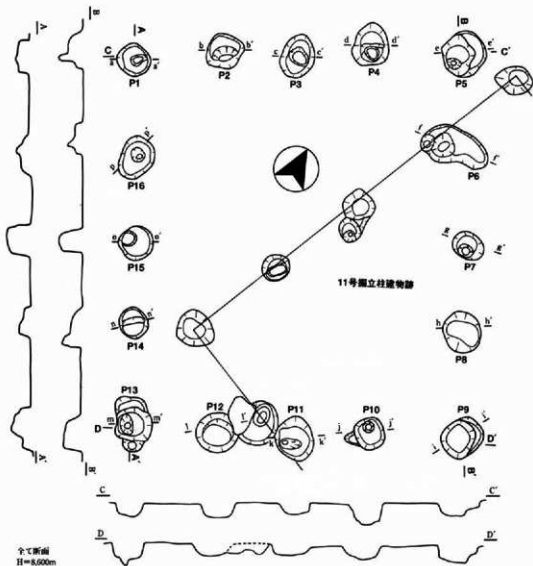
3次調査区域う15・う16Gr付近に存在する側柱建物跡で、11号掘立柱建物跡と主軸を違えて重複する。P6部分で柱穴が重複しており、11号掘立柱建物跡に切られている。主軸は、この時期の建物としては最も北へ向くもの一つであり、北から西へ29度振る。規模は梁行4間(520cm)×桁行4間(600cm)、床面積31.2㎡を測る。柱間は、梁行で四隅から中央へ1本目が140cmだが、中3本間が120cmと短く、桁行でも四隅から中央へ1本目が150cmだが、中3本間が130cmと短くなっている。柱掘り方は径50～60cm程度の略円形で、深さはいずれも20～30cm程度と浅いが、桁行の中央の柱P7とP15のみ40cm程度とまわりよりも一段深くなっている。柱穴覆土は柱痕状堆積を示す縦に入る軟質土の存在も見られるが、柱抜き取り後の堆積的なものも目立ち、掘り方埋土の黄土塊混在土も定量存在している。出土遺物は土師器甕小片のみで詳細な時期は不明。

(9) 11号掘立柱建物跡

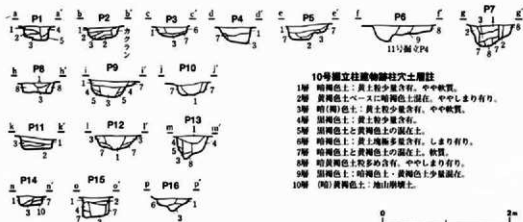
3次調査区域い15・う15Gr付近に存在する側柱建物跡で、10号掘立柱建物跡よりも主軸を大きく東に振って、横向きの配置をしている。P4で10号掘立柱建物跡を切って存在しており、主軸は、北から東へ33度振る。南東側の2本の柱穴が1次調査後の工事によって破壊されており、存在していないが、位置の復元は可能である。復元値での規模は梁行3間(520cm)×桁行4間(640cm)、床面積33.3㎡を測る。柱間は、桁行でいずれも等間隔の160cm、梁行でも中央の2本は同様の160cmの柱間であるが、四隅から中央への1本目は180cmと広くとってある。柱掘り方は径50cm程度の小型略円形で、深さは北西側の隅柱で50cm以上を測るが、他は20～30cm程度と浅く、そのギャップが大きい。柱穴覆土は柱抜き取り後の堆積状態も一部見られるが、柱痕状の堆積を示すものも多く、柱痕覆土の軟質土が大半の柱穴で確認できる。出土遺物はほとんど確認しておらず、時期は切り合いから10号掘立柱建物跡に後出することはわかっているが、詳細不明である。

(10) 12号掘立柱建物跡

3次調査区域う17Gr付近に存在する側柱建物跡で、北東側の柱穴が28号土坑と重複している。



全断面
H=8.600m

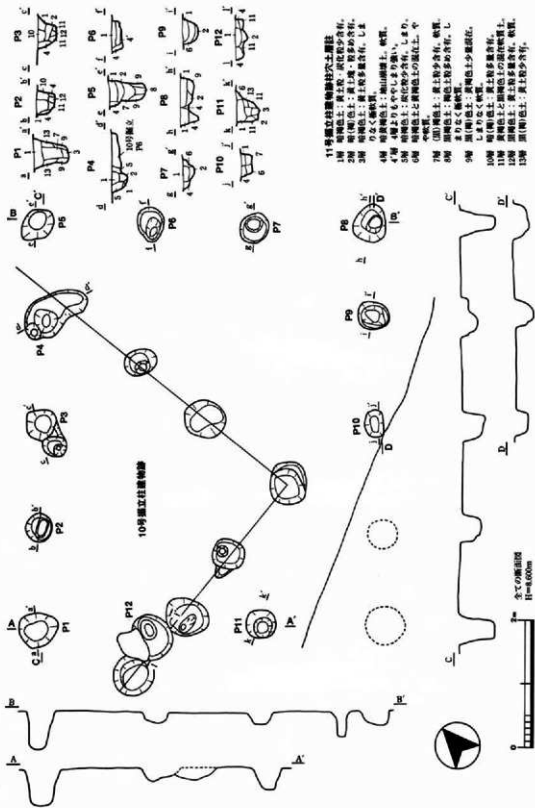


10号獨立柱建物跡柱穴土層註

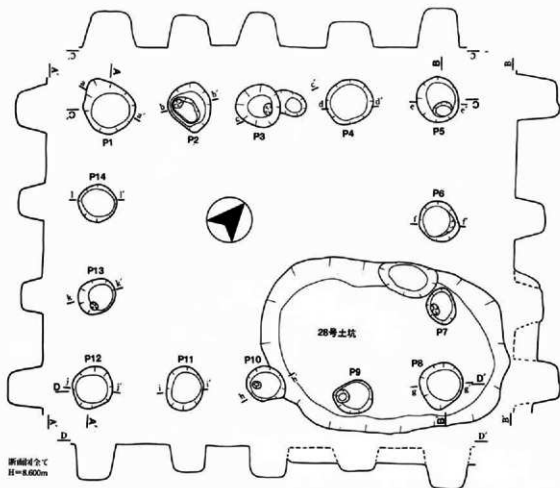
- 1層 暗褐色土；黄土粉少量含有、やや軟質。
- 2層 黄褐色土ベースに暗褐色土混在、ややしまり有り。
- 3層 暗(黄)色土；黄土粉少量含有、やや軟質。
- 4層 黒褐色土；黄土粉少量含有。
- 5層 黒褐色土と黄褐色土の混在土。
- 6層 暗褐色土；黄土塊多量含有、しまり有り。
- 7層 暗褐色土と黄褐色土の混在土、軟質。
- 8層 暗黄褐色土粉多め含有、ややしまり有り。
- 9層 黒褐色土；暗褐色土・黄褐色土少量混在。
- 10層 (附) 黄褐色土；地山崩壊土。



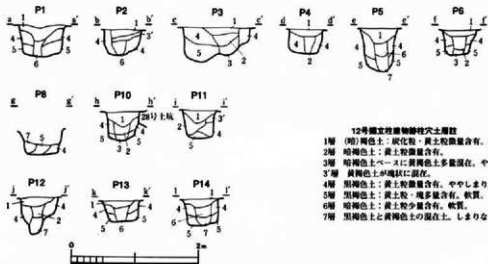
第102図 10号獨立柱建物跡柱穴土層註



第103図 11号獨立柱建物跡平面・断面図 (S=1/60)



断面は全て
H=8.600m



12号掘立柱建物跡性穴土層註

- 1層 (明) 褐色土：炭化粒・黄土粒微量含有。しまり有。
- 2層 暗褐色土：黄土粒微量含有。
- 3層 暗褐色土ベースに黄褐色土多量混在。やや軟質。
- 3'層 黄褐色土が塊状に混在。
- 4層 黒褐色土：黄土粒微量含有。ややしまり。
- 5層 黒褐色土：黄土粒・塊多量含有。軟質。
- 6層 暗褐色土：黄土粒少量含有。軟質。
- 7層 黒褐色土と黄褐色土の混在土。しまりなく極軟質。

第104図 12号掘立柱建物跡性平面・断面図 (S=1/60)

主軸を東に振る横向き配置のもので、北から東へ48度振る。規模は梁行3間(440cm)×桁行4間(540cm)、床面積23.8㎡を測る。柱間は概して狭く、桁行でいずれも等間隔の140cm、梁行でも南西列では等間隔の140cmを測るが、北東列については等間隔でなく、P5からP8に向かって徐々に柱間が狭くなっている。柱掘り方はいずれも大きく深く円筒状に掘り込む特徴をもち、径60cm程度の円形で、深さは四隅柱で60cm程度、中の柱でも40~50cmを測る。柱穴覆土はほとんど柱痕状の堆積を示すもので、柱痕覆土には暗褐色系の軟質土、掘り方埋土には黄土を含む黒褐色系のやや軟質の土が埋められている。出土遺物は土師器碗が1点見られる以外は、土師器壺小片で、それから時期の特定は難しく、遺構との重複から28号土坑よりも新しく位置付けられるという前後関係のみである。

(11) 13号掘立柱建物跡

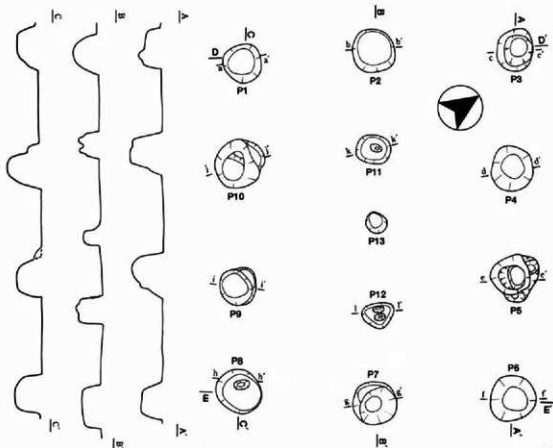
3次調査区域のお23G r付近、1号溝の南側に存在する建物跡で、当該時期の遺構としては最も南側に存在するものである。中の柱列の規模が小さいが、軸上に並んでおり、総柱建物跡と位置付け可能のものである。主軸は1号溝に近い向きを示しており、北から西へ56度振る。規模は梁行2間(440cm)×桁行3間(560cm)、床面積24.6㎡を測る。柱間は概して広く、梁行で等間隔の220cm、桁行でもほぼ等間隔の180cmを測る。ただ、縦軸中央列の柱穴は中央に1本小型のものがあり、それから前後に120cm、140cmと配する。柱掘り方は側柱で大きめの径60~70cm、深さ30~40cm程度。中列の柱でひとまわり小型の径30~40cm程度、ただ深さについては同様の30~40cm程度を測る。柱穴覆土は柱痕状の堆積を示すものと柱抜き取り後の堆積を示すものと半々程度あり、柱痕状のものには褐色味の強い軟質土が、抜き取り穴状のものには暗褐色系・黒褐色系のしまりのある土が存在している。柱穴への遺物混入はほとんど無く、時期の特定は困難である。

(12) 14号掘立柱建物跡

3次調査区域のき13・き14G rに存在する3本の柱列で、調査時に掘立柱建物跡と番号付けしただけ、掘立柱建物跡として報告するが、建物と断定できるものではない。ただし、柱穴はいずれも径30~40cm程度、深さ20cm程度で、長さは370cmと、これを掘立柱建物跡の梁の部分だとすると、主軸方向や大きさと合致する。ただそう仮定した場合でも、桁にあたる部分の柱穴がなく、21号竪穴住居跡と重複していたとしても不明な点が多い。

(13) 15号掘立柱建物跡

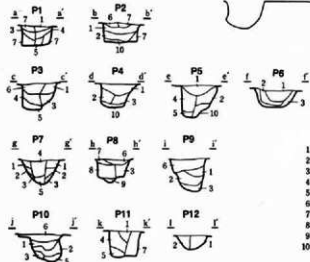
3次調査区域のき5・き6G r付近、台地の北西端近くに立地する側柱建物跡である。16号竪穴住居跡、19・20号土坑と重複しており、竪穴住居跡よりも主軸を大きく東に振って、横向きの配置をしている。主軸は、北から東へ39度振る。規模は梁行3間(480cm)×桁行4間(570cm)、床面積27.4㎡を測る。柱間は、桁行でいずれも等間隔の140cm、梁行でもほぼ等間隔の160cm(中2本間は150cmか?)である。柱掘り方は径60cm前後の略円形で、深さは一部浅い柱穴もあるが、ほぼ同程度の40~50cmと深く、竪穴住居跡の床の下にまでとどいている。柱穴覆土は柱痕状の堆積を示すものと、柱抜き取り後の堆積を示すものとに分けられ、意識的に埋め戻されたようなも



断面H=8.900m



ピット断面H=8.900m

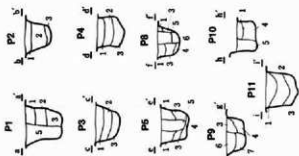
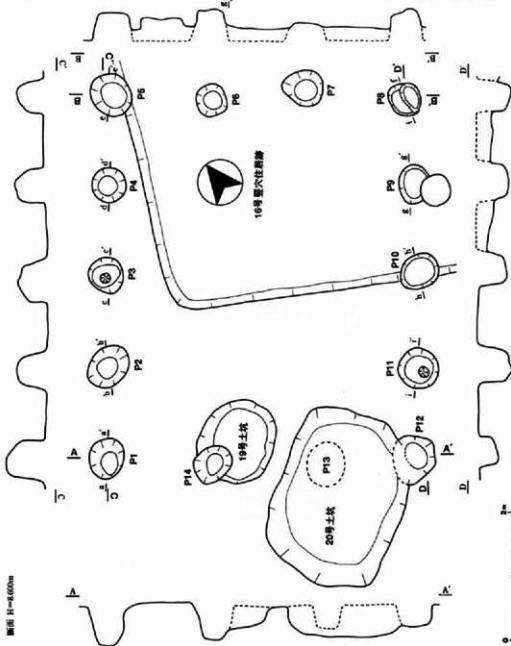


13号掘立柱建物軸線柱穴土層註

- 1層 暗褐色土：黄土粒少量含有。しまり有。
- 2層 黒褐色土：炭化粒多め。黄土粒微量含有。
- 3層 暗黄褐色土：暗褐色土・炭化粒少量含有。
- 4層 (暗)褐色土：黄土粒・炭少量含有。軟質。
- 5層 (黒)褐色土：しまりなく軟質。
- 6層 暗(黒)色土：黄土粒多量含有。しまり有り。
- 7層 (暗)黄褐色土：炭化粒微量含有。ややしまり有り。
- 8層 暗褐色土：黄土粒・粒多量含有。やや軟質。
- 9層 暗(黄)褐色土：黄土粒・粒多量含有。ややしまり。
- 10層 黒褐色土ベースに黄褐色土が混在する土。軟質。

第105図 13号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/60)

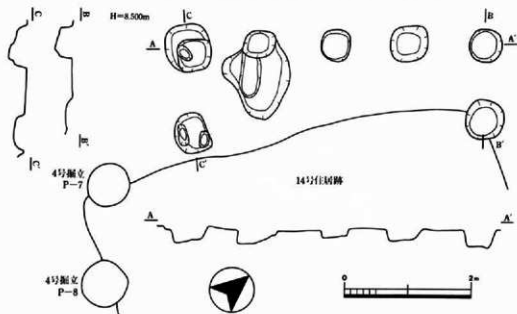
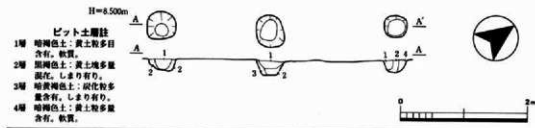
縦横 H=8.000m



P8・792& H=8.300m
他は全て H=8.500m

- 16号獨立柱建物柱土層図
- 1層 (内)褐色土：黄土層多量含有、中央部褐色をひく。高低数少量含有、しきり有無不明。
 - 2層 暗褐色土：黄土層少量含有、中央部質。
 - 3層 暗褐色土：黄土層少量含有、中央部質。
 - 4層 暗褐色土：黄土層多量含有。
 - 5層 暗褐色土：黄土層・高低数少量含有、しきりなく無砂質。
 - 6層 暗褐色土：しきり有無不明。
 - 7層 暗褐色土：黄土層多量含有。

第106図 15号獨立柱建物諸平面・断面図 (S=1/60)



第107図 14号掘立柱建物跡(上)・16号掘立柱建物跡(下)平面・断面図(S=1/60)

のではない。竪穴住居との重複関係は、はっきりと確認していないが、竪穴住居に先行する建物と予想され、土坑との重複では後出する建物と予想する。出土遺物は土師器甕小片が10点程度あるのみで、時期比定は困難である。

(14) 16号掘立柱建物跡

3次調査区域のか6・か7Grに存在する掘立柱建物跡で、4号掘立柱建物跡の北東側に主軸をほぼ同じくして並列して建てられている(主軸北から西へ50度)。南東側の半分以上が14号竪穴住居跡と重複しており、柱穴掘り込みが浅いため、住居跡の床下から柱穴を検出することはできず、重複部分から南東側がなくなっている。よって、全体規模は不明であり、残存する梁行のみ4間(460cm)であることが確認できるのみである。梁行の柱間はほぼ等間隔の120cmで、桁行の柱間では1本目のみであるが、同間隔の120cmであることが分かっている。柱掘り方は径40~50cm程度の円形もしくは隅九方形で、深さは20cm程度と浅い。14号竪穴住居跡との切り合いは確認していないが、並列する4号掘立柱建物跡と同時期と思われることから、14号竪穴住居跡よりも以前、14号竪穴住居跡に切られているものと推察する。

(15) 17号掘立柱建物跡

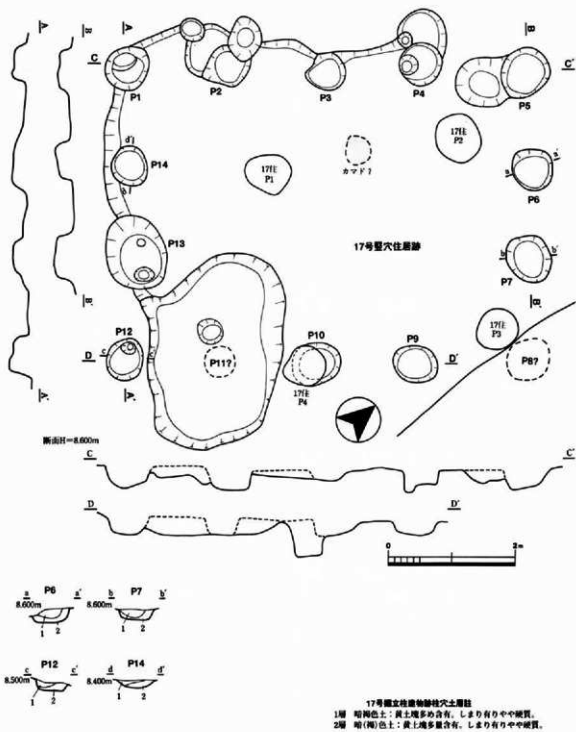
3次調査区域のい11Gr付近に存在する掘立柱建物跡で、台地のほぼ中央付近に立地する。17号竪穴住居跡とまったく重なっており、掘立柱建物跡廃絶後、竪穴住居が掘られたものと予想する。主軸方向が北から東へ41度振る横向きの建物跡で、重複する竪穴住居跡よりも大きく東へ振っている。東隅柱穴1本のみが1次調査時の工事によって破壊を受けているが、規模は復元可能であり、梁行3間(470cm)×桁行4間(640cm)で、床面積30.1㎡を測る。柱間は梁行がほぼ等間隔の155cm、桁行もほぼ等間隔で160cmを測り、柱掘り方は径60cm前後の略円形で深さ20cm前後のものである。柱穴覆土は浅いためよくわからないが、柱痕状の土は確認されず、しまりのある土が堆積している。遺物の混入はなく、時期の詳細は不明。

(16) 18号掘立柱建物跡

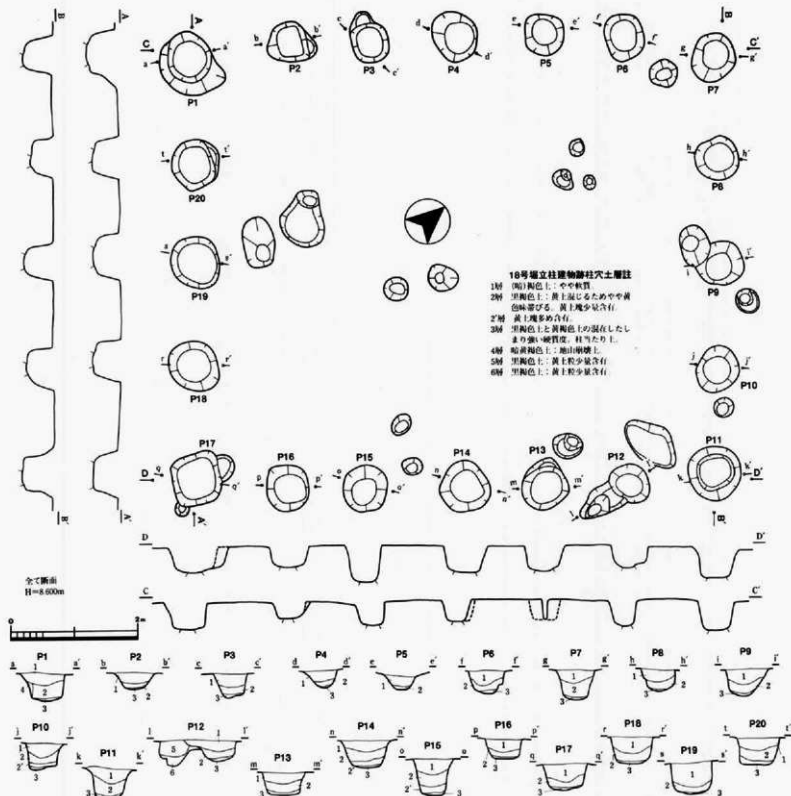
4次調査区域のK2・K3・L2・L3Grに存在する当遺跡最大の建物跡で、台地の南西側に立地する。1号溝に主軸をほぼあわせる横向きの掘立柱建物で、北から東へ41度振る。規模は梁行4間(660cm)×桁行6間(830cm)で、床面積は54.8㎡を測る。梁部分の柱筋については比較的通っているが、桁部分についてはやや外に膨らむ傾向があり、特に北西側において顕著である。柱間は総体的に狭くとり、梁行ではほぼ等間隔の160cm、桁行では隅柱から中へ1本目が140cmを測るが、それから中については120～130cmとさらに狭くなっている。柱掘り方は円形に近いものもあるが、P17は確実に方形基調であり、隅丸方形と呼べるものも目立つことから、方形を基調とした掘り方プランであると判断する。大きさは北西側柱列が径60cm程度とやや小型であるが、他は径70～80cmと大きく、深さも40cm前後の深いものが主体的である。四隅の柱が一段深く掘っており、50cm程度を測る。柱穴覆土は柱痕を確認できるものはなく、いずれも柱抜き取り後の堆積状で、最下層には必ず柱当たりの硬質の土が確認される。出土遺物は図示した須恵器坏Aなどの他、須恵器甕や土師器甕、土師器など多く出土しているが、いずれも柱抜き取り後に混入したものであり、建物に伴う埋納的な出土のものは存在しない。

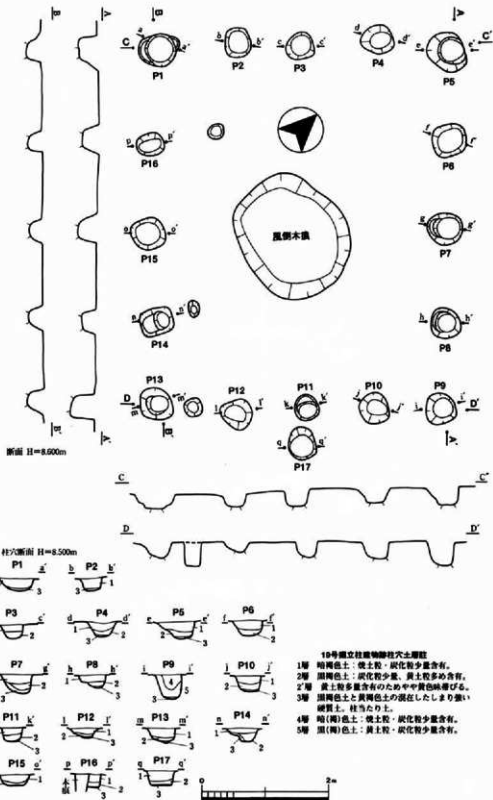
(17) 19号掘立柱建物跡

4次調査区域のM3Gr付近、台地南西側、18号掘立柱建物跡の南西側に並列して存在する掘立柱建物跡で、これも1号溝に軸を合わせるかのようにして建てられている。主軸は北から西へ47度振り、18号掘立柱建物跡から90度近く西へ振っている。規模は梁行4間(450cm)×桁行4間(560cm)で、床面積は25.2㎡を測る。ちょうど18号掘立柱建物跡の半分程度の床面積で、18号掘立柱建物跡南東側柱列に19号掘立柱建物跡の北東側柱列をあわせる形で建てられている。柱筋は18号掘立柱建物跡よりも比較的通っているが、南西側柱列のみやや外側に膨らんでいる。柱間は桁行で140cmづつの等間隔であるが、梁行では100～120cmの間でややばらつき、一定していない。柱掘り方は径40cm以下の小型のものもあるが、50cm前後を測るものが多く、略円形を呈す。深さは30cm前後、四隅の柱がやや深くなる傾向はある。柱穴覆土は18号掘立柱建物跡同様、柱痕を確認できるものはなく、いずれも柱抜き取り後の堆積状で、最下層には必ず柱当たりの硬質の



第108図 17号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/60)





第110図 19号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/60) (エレベートのケバは柱アタリ部分)

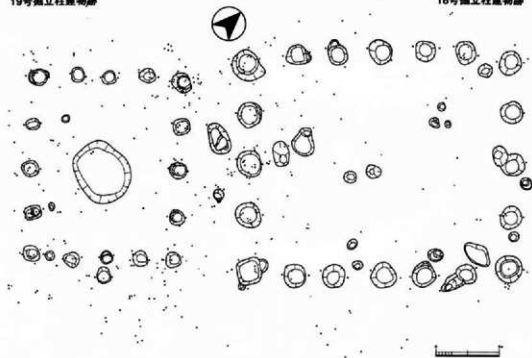
土が確認される。出土遺物は図示した須恵器坏Aの他、土師器甕小片が出土している程度で、いずれも柱抜き取り後に混入したものであり、建物に伴う理納的な出土のものは存在しない。

〈18号掘立柱建物跡・19号掘立柱建物跡の遺物出土・接合状況〉

18号掘立柱建物跡の柱穴からは多くの土器が出土していることは前述した通りであるが、その包含層からも土器は多く出土しており、その分布状況を図示したのが第111図である。これを見ると、包含層土器の分布は18号掘立柱建物跡の南西側半分から19号掘立柱建物跡全体にかけて目立つようで、特に18号掘立柱建物跡の南西側柱列から19号掘立柱建物跡の北東側柱列にかけて集中する。柱穴内出土の土器もほぼこの周辺に集中し、18・19号掘立柱建物跡間で接合が見られるのもこの空間においてのみで、図示できた大型破片もほぼこの区域にまとまる。また、18号掘立柱建物跡のこの区域の柱穴出土土器は、29号竪穴住居跡の土坑内土器と2個体において接合関係にあり、この点から竪穴住居跡の説明では掘立柱建物跡で使用した遺物の竪穴住居跡廃絶後の空間への廃棄の可能性を考えた。基本的に両遺構出土土器間での時期差はほとんどなく、そのような関係にあるものと推察するが、掘立柱建物跡の柱穴内遺物は柱抜き取り後のものであり、遺構に伴う可能性は薄く、この土器での接合関係では29号竪穴住居跡との直接的な関連性は乏しい。消費土器の廃棄場所の確保の問題と廃棄場所をどのように設定するかの問題に関連することであり、即断できないが、掘立柱建物跡での竪穴住居跡の廃絶後復地利用は想定しやすいことである。

19号掘立柱建物跡

18号掘立柱建物跡



第111図 18・19号掘立柱建物跡区域包含層出土土器ドットマップ (S=1/120)

3. 土坑

当該時期の遺物を出土する土坑を全てピックアップすれば、当遺跡に存在する半数以上の26基の土坑が該当することになるが、出土量も多く、風倒木痕状の土層堆積をしていないものとなる。以下で個別に述べる土坑のみとなり、その中でさらに出土量も多く、廃棄土坑として当該時期の集落に付属する遺構として確実視されるものは16号・20号・21号・26号・28号土坑の5基のみとなる。基本的に堅穴住居跡や掘立柱建物跡の多く分布する空間に建物に近接して存在しており、建物が疎らとなる空間では存在していない。さて、これらの廃棄土坑として性格づけできるもの他に墓坑的なものも存在しており、これについては1号溝の南側に存在している。

(1) 3号土坑・6号土坑

いずれも1次調査区域I 3 Grに存在する土坑で、遺跡南西側の谷部へと傾斜して行く斜面上に立地している。2基とも円形のすり鉢状で、形はやや不整形。径は150cm程度の大きさで、覆土もやや黄土の混じりが多い。風倒木痕の可能性はあるが、土器の出土量が比較的多かったため、取り上げた。土器は3号土坑で須恵器9点、土師器99点、6号土坑で土師器のみ116点出土しており、3号土坑では4号堅穴住居跡との接合も確認されている。

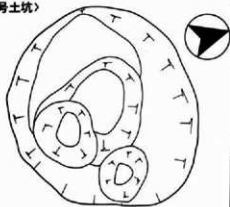
(2) 16号土坑

3次調査区域のお・か・4・5 Grにまたがって存在する土坑で、5号掘立柱建物跡の南西側に並列する形で位置する。長軸330cm、短軸160cmを測る隅丸長方形で、壁は比較的都つぐ立ち上がる。さて、この土坑の中央は円形のすり鉢状に一段深くなっており、覆土もこの部分で異なる堆積を示している。土層断面図では円形のすり鉢状に異なる土層が確認され、土坑中央で、もう1基の土坑が切っている可能性もある。土器出土状況を見ても、円形すり鉢状部分に多く集まる傾向があり、この部分での接合が目立つ。しかし、2基土坑が存在したとするには、平面プランでそれが確認しにくいこと、そして土器接合において、長方形土坑全体で接合するものがやはり定量存在することから、2基存在したとは判断し難く、土坑埋没段階で、中央に集中廃棄されたような、通常とは異なる廃棄状況であったのであろう。出土土器の量は多く、須恵器27点、土師器768点を数え、他の遺構との接合関係では、12号堅穴住居跡・14号堅穴住居跡・20号土坑・5号掘立柱建物跡と確認されている。

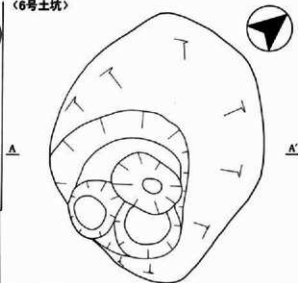
(3) 20号土坑

3次調査区域のき6・き7 Grに存在する土坑で、16号堅穴住居跡の南側に隣接し、15号掘立柱建物跡のP12・13と重複して存在している。長軸275cm、短軸198cmを測る隅丸長方形で、深さ40cmを測る。覆土は中層から下層にかけて焼土塊・炭化塊の混在の多い土層が入り込んでおり、柱穴覆土に多量の焼土塊・炭化塊を含む4号掘立柱建物跡との埋没時点での同時性、遺構としての関連性が指摘できる。これも廃棄土坑的なものと予想するが、出土土器は少なく、須恵器19点、土師器145点のみで、他の遺構との接合も16号堅穴住居跡と16号・21号土坑とあるのみである。また、西側に小型土坑の19号土坑が隣接して存在しているが、こことも少量ながら土器接合があ

〈3号土坑〉

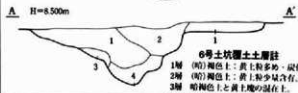


〈6号土坑〉



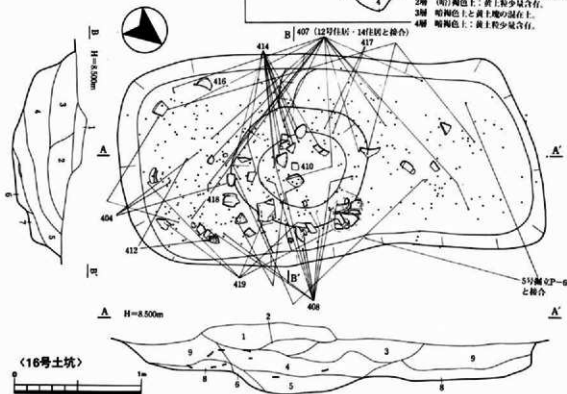
16号土坑層土層註

- 1層 暗褐色：黄土粒・炭化物少量含有。
- 2層 黄褐色土：暗褐色土混在。
- 3層 (暗)褐色土：黄土粒多め、炭化物少量含有。
- 4層 暗褐色土：炭化塊・黄土粒少量含有。
- 5層 黑褐色土：黄土粒・炭化物少量含有。
- 6層 黑褐色土：黄土粒・炭化物少量含有。
- 7層 黑褐色土：含有物なし、軟質。
- 8層 暗(褐)色土：炭化物・黄土粒少量含有。
- 9層 暗(黄)褐色土：黄土粒多め含有。



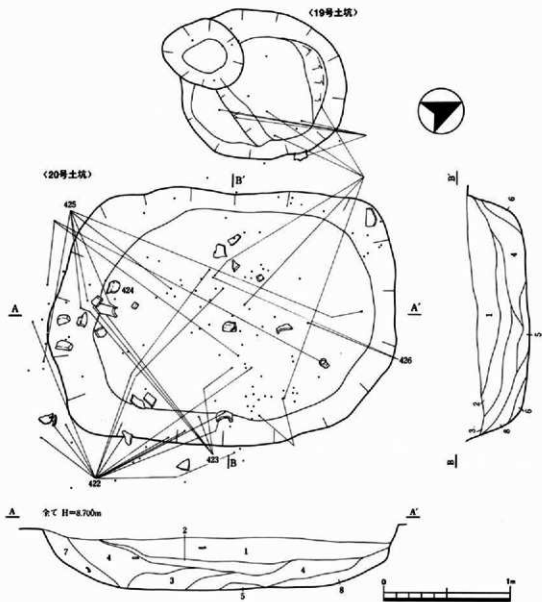
6号土坑層土層註

- 1層 (暗)褐色土：黄土粒多め、炭化物少量含有。
- 2層 (暗)褐色土：黄土粒少量含有。
- 3層 暗褐色土と黄土粒の混在。
- 4層 暗褐色土：黄土粒少量含有。



〈16号土坑〉

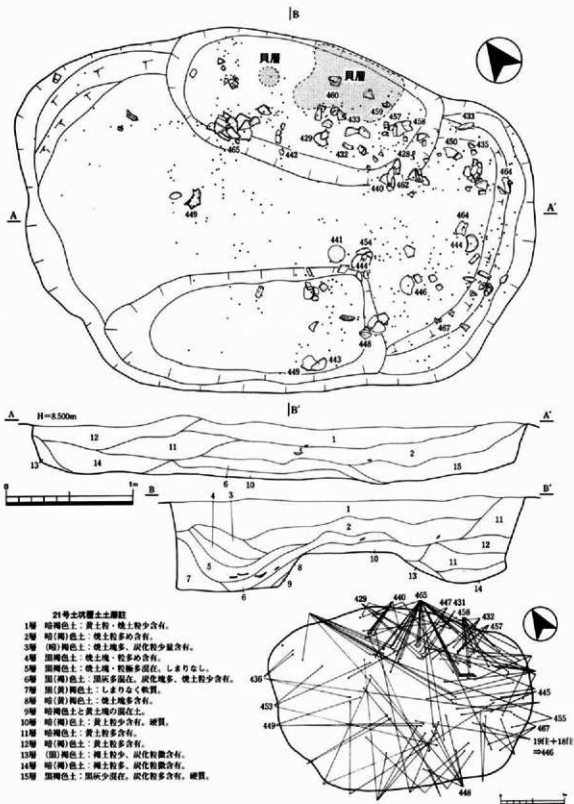
第112図 3号土坑(左上)・6号土坑(右上)・16号土坑(下)平面・断面・土器接合図(S=1/30)



20号土坑層土層註

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1層 暗(褐)色土：黄土粒・炭化粒少量含有。 | 5層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒・黄土粒少量含有。 |
| 2層 暗(赤)褐色土：黄土粒・炭化粒・黄土粒多量含有。 | 6層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有。 |
| 3層 暗(赤)褐色土：黄土粒・炭化粒多め、黄土粒少量含有。 | 7層 暗黄褐色土：黄土粒多量含有。 |
| 4層 暗(黄)褐色土：黄土粒多量含有。硬質。 | 8層 暗褐色土：黄土粒・炭化粒多量含有。 |

第113図 19号土坑・20号土坑平面・断面・土器接合図 (S=1/30)



第114図 21号土坑平面・断面・土器接合図 (右下のみS=1/60、他はS=1/30)

り、一連のものかもしれない。ただ、出土量は極少なく、不整形である。

(4) 21号土坑

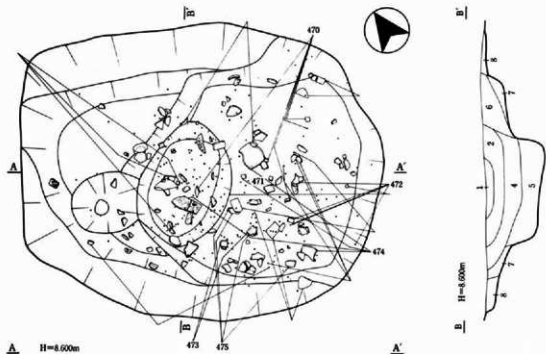
3次調査区域のか9・き9Grに存在する長軸400cm、短軸280cmを測る大型の土坑で、4号掘立柱建物跡の南西側に並列する。平面形は楕円形に近く、両側に一段深い掘り込みをもっている。この土坑からは土器が多量に出土しているが、点数では須恵器58点、土師器498点とさほど多くない。これは接合・復元された土器が多いため、図示できた個体数は竪穴住居跡よりも多い。土器の分布状況は、主に北東側の掘り込み部分から土坑の南東半分に見られ、特に中層から下層にかけてが顕著である。南西側掘り込みから北西側では疎らで、特に中層以下では少ない。この土器の分布状況と覆土堆積を対応させると、大きく3回の埋没が確認できそうである。まず、初期の堆積土である10～14層は黄土粒・褐土粒を含む暗褐色系土で、南西側掘り込みから北西側に位置し、土器の出土は極稀である。その上から北東側掘り込みにかけて堆積する層に3～9・15層があり、いずれの層にも焼土塊・炭化塊・黒色灰が多量に混在し、土器が顕著に出土している。この中での土器接合・復元可能な個体は多く、遺物量のわりにはこの部分と他の遺構間ではほとんど接合関係を確認できず、一括性の高い土器廃棄・土層埋没であろう。また、北東側掘り込みから多量の貝が出土しており、貝のみで構成された貝層が存在する。さて、この焼土塊・炭化塊の混在は4号掘立柱建物跡の柱穴覆土からも確認されるものであり、同時期埋没を示唆するもので、この遺物も4号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。これら2つの埋没土の上には焼土粒の混在する暗褐色系の1・2層が存在する。この土層は下の層とは異なり、通常竪穴住居跡で見られる土層であり、土器も多く混在している。他の遺構との接合関係も、14号・15号・18号・19号竪穴住居跡、21号竪穴住居跡の床下、20号竪穴住居跡の上層埋没土と多くの遺構間であり、一括廃棄されたような性格はもたないと予想する。

(5) 26号土坑

3次調査区域のき12・き13Grに存在する土坑で、19・23号竪穴住居跡、21号竪穴住居跡、9号掘立柱建物跡の中間に位置する。長軸285cm、短軸235cmを測る隅丸方形で、この土坑も中央部に一段深い掘り込みをもっている。土層堆積がこの掘り込み部分で変わっており、層の切り合いから見れば、中央の掘り込み部分は後に掘られた可能性もあるが、土器接合では掘り込み部分の中層とその外側の土層との接合関係も何例か確認できるため、2基切り合っていると考えるのはやや難しい。ただ、埋没段階で何回かに別れる可能性はあり、土器の分布が掘り込みから南東側でのみ集中することもそれを示唆する。土器は須恵器11点、土師器342点で、多いとは言えないが、大きな破片が目立ち、土坑内接合も少なくない。遺構間での接合は確認できない。

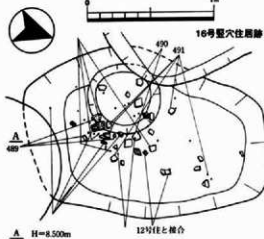
(6) 28号土坑

3次調査区域のう17Gr付近に存在する土坑で、10・11号掘立柱建物跡の南側に隣接する。12号掘立柱建物跡のP7～9と重複して存在しており、土坑の埋没後、掘立を建てている。規模は長軸390cm、短軸270cm、深さ30cm。底面には掘り込みはなく、広い平坦面を形成しており、平面



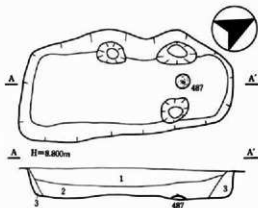
26号土坑覆土層註

- 1層 暗褐色土；炭化粒少量含有。
- 2層 暗褐色土；黄土塊・炭化塊少量含有。
- 3層 暗褐色土；黄土塊・炭化塊少量含有。
- 4層 暗褐色土；黄土塊・炭化塊・焼土粒少量含有。
- 5層 暗褐色土；焼土塊・粒・炭化粒少量含有。
- 6層 暗褐色土；3層より褐色味強。
- 7層 暗褐色土；炭化粒微量含有。
- 8層 暗褐色土；炭化粒微量含有。軟質。



41号土坑覆土層註

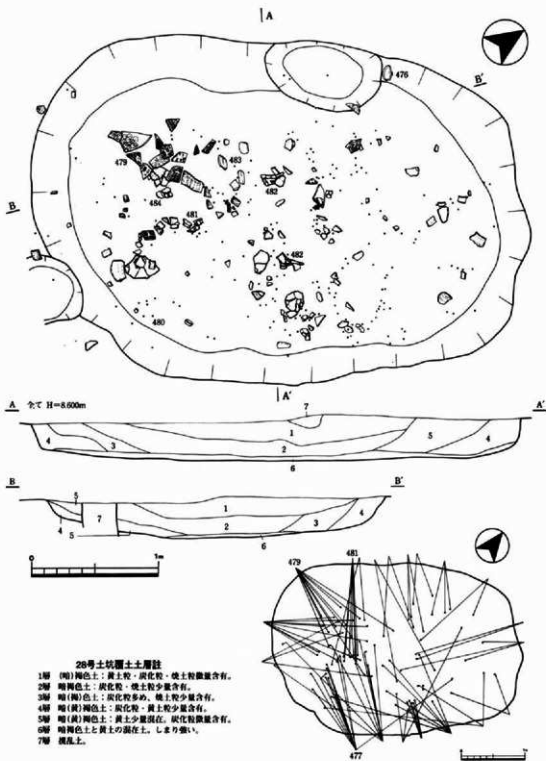
- 1層 暗褐色土；黄土粒・炭化粒少量含有。
- 2層 暗褐色土；黄土粒少量含有。硬質。
- 3層 暗褐色土；炭化粒・黄土粒微量含有。
- 4層 暗(黄)褐色土；黄土粒含有。



36号土坑覆土層註

- 1層 暗褐色土；炭化粒少量含有。
- 2層 暗褐色土；黄土粒多。炭化粒少量含有。
- 3層 暗褐色土と黄褐色土塊の混在土。炭化粒少量含有。

第115図 26号土坑(上)・36号土坑(右下)・41号土坑(左下)平面・断面・遺物接合図(S=1/30)



第116図 28号土坑平面・断面・土器接合図 (右下のみS=1/60、他はS=1/30)

形は楕円形を呈す。他の土坑とは形態的に異なり、堅穴状遺構と言えるもので、覆土堆積も堅穴住居跡に類するものである。土器は須恵器19点、土師器389点と土師器の方が多いが、須恵器は3点を除いて全て大甕の胴部破片で、土坑内接合するものが多く、1点で10点以上と接合するのが半数であり、出土量の実感としては須恵器の方が多い。他の遺構間では1点のみ19号堅穴住居跡と接合関係にある。

(7) 41号土坑

3次調査区域のか5Grに存在する土坑で、3号掘立柱建物跡、5号掘立柱建物跡、15号掘立柱建物跡、16号掘立柱建物跡の中間に位置し、16号堅穴住居跡の北東隅に切られて存在する。規模は長軸190cm、短軸130cmを測り、小型楕円形を呈す。底面は比較的平坦で、深さは25cmを測る。分布図でも分かるように、土器の出土は少ないものの、12号堅穴住居跡、14号堅穴住居跡、3号掘立柱建物跡P3上層の3遺構と接合関係にある。堅穴住居跡との接合に関しては同じ廃棄場所としての感覚だろうと予想するが、3号掘立柱建物跡との接合については、建物と直接関連する可能性があり、柱穴出土の土器が大きな破片であったこともそれを示唆している。

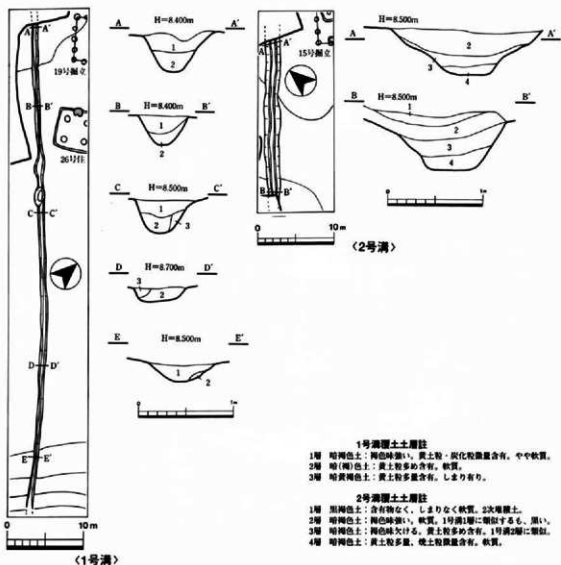
(8) 36号土坑

3次調査区域のう24Gr、1号溝の南側に存在する土坑で、形態や土器出土状況より、墓坑の可能性の高いものである。南北に主軸をもつもので、規模は長軸165cm、短軸80cm。隅丸長方形の平面形を呈す。深さは20cm強で、底面は平坦に掘られている。北側壁から35cm南側の中央床面からは須恵器杯B蓋の完形が出土しており、もう1個体略完形の小型短頸壺が上層から出土している。これ以外の遺物はほとんどなく、覆土堆積も比較的単純層であることから、埋め戻しされたものと予想する。

4. 溝

当該時期に位置付けられる溝は1号溝と2号溝で、1号溝は、遺跡の南西側、南東側の谷部（等高線）に直交する向きで掘られている。幅は50～80cm、深さは30～40cmで、谷部へと下がって行く部分ではやや浅くなる。覆土は暗褐色系のやや砂質土で、遺構上層で見られるような覆土である。遺物の出土は極少なく、須恵器と土師器が数点あるのみである。次に2号溝であるが、調査区域の北西側隅に一部かかったもので、この調査では全体の様相は分からないが、覆土や遺物出土の特徴は、1号溝とほぼ同様のものであり、向きは1号溝に直交、谷部に対してほぼ水平に走っている。1号溝とは直角に曲がる同一の溝と想定しているが、幅は120～150cmと広く、2段掘り状で、深さも50～60cmと、全体的にしっかりと掘り込みの溝となる。この溝の北西側は数mで台地の端部となっており、台地の縁辺に掘られた溝ということになる。さて、この1・2号溝を同一の溝と仮定し、ほぼ直角に曲がるL字形の溝とした場合、南東側の谷と北東側の谷とはほぼ直交しており、この空間が長方形に区画される。大凡ではあるが、区画の長軸は110m程度、短軸は80m程度を測る。この区画は集落を区画するものであるか、厳密には13号掘立柱建物跡と36

号土坑の存在からそれは否定される訳であるが、建物の分布はこの溝を境に途切れることは事実であり、36号土坑についても墓坑としての性格から区画外にあって自然で、何よりも包含層での土器の分布が明らかにこの溝を境に激減する状況は、集落を区画する溝としての機能を想定させる。ただ、それにしては溝があまりに狭く、浅いものであり、このようなもので区画することは甚だ疑問でもあるが、外敵から防御するような溝とは違い、土地区画を目的としたものであったなら、これで十分なかもしれず、完全とした方形区画を作るこのほうが重要なかもしれない。



第117図 1号溝・2号溝平面・断面図 (平面S=1/500、断面S=1/40)

第2項 遺物

古墳時代後期でもほぼ6世紀末から7世紀初頭の短期間にまとまるもので（ほんの少量7世紀後半まで下るものも含んでいる）、主に堅穴住居跡と土坑から出土している。出土遺物はほとんどが土器で、出土量はパンケースで97箱を数え、須恵器35箱、土師器62箱で構成されている。須恵器と土師器の比率については、土師器の過半数が煮炊具の胴部破片のため、箱に詰まりやすく、重量としては土師器がもう少し上回るものと予想する。土器以外では、土鍾や土製紡錘車の土製品、管玉や石製紡錘車、砥石などの石製品、耳環の金属製品なども出土しており、鍛冶滓も少量ながら出土している。

出土遺物の大半が土器であるため、土器を中心として述べるが、各遺構出土の説明を行う前に、須恵器・土師器の器種・器形分類と胎土分類について述べておくこととする。また、土器以外の遺物については、その他の遺物として、項の終わりでまとめて述べることとする。

1. 土器の分類

(1) 須恵器の分類

a. 器種・器形分類

出土遺物の時期が比較的短期間にまとまるため、ここで示す分類は時間差というよりも形態差として捉えられるものである。

器種は蓋坏A（平城分類坏H）・蓋坏B（平城分類坏G）・埴・鉢・高坏A（有蓋高坏）・高坏B（無蓋高坏）・高脚碗・胞・提瓶・長頸瓶・短頸壺・壺・甕が確認される。以下に、器種説明と器形（調整）分類を提示する。

蓋坏A……合子型の古墳時代以来の伝統的蓋坏で、平城分類では坏Hに該当する。蓋の椽や沈線、口縁部の内傾段は消失し、身も口縁部立ち上がりは低くなって、だいふ寝てくる段階のもので、基本的にはヘラ削りをしなくなる時期のものである。このように、型的にはまとまりをもっているが、法量にはバラつきがあり、浅いものと深いもの両方が存在。口縁端部の器形から、いずれも内傾する面をもつa類と丸く面をもたないb類に分けられ、さらに切り離し後の調整から、ヘラ削りする1類（切り離しのための切り込みの補助削りは削りとは見なさない）と削らないナデ調整のみの2類に細分。特に、口縁部立ち上がりが極短く、口径の小さな身を身c類とした。

蓋坏B……伝統的蓋坏Aが逆転して蓋天井に宝珠形つまみがつくようになる新型の蓋坏で、平城分類では坏Gに該当する。蓋は口縁部に返りを持ち、身は体部真つすぐに立つ、やや深身の器形である。若干の時間幅があり、器形により、蓋は返りが長く口縁部より下に出る古手のa類と返りが小さくなって下に出ない新手のb類に、身は法量から大きめのa類と小型化してゆくb類に分けられる。調整では、底面にヘラ削りをもつ1類は少なく、ナデ調整を基本とする2類が主体的で、体部にカキ目をもつものについては3類とした。

また、蓋坏Bに類似する器形で、蓋のつく器種があるが、底面に丁寧なヘラ削りを施し、体部に沈線や刺突文を施す精製品であり、金属器写し的であったため、鏡とした。

埴……基本的に埴形の無蓋器種をくくったもので、蓋坏Aの蓋が逆転して身となったような器形を呈す

A類と真つぐ立ち上がる深身で、体部に沈線が入る鍋から派生したようなB類に分けられる。

A類は口縁部の外屈するa類が主体で、底部は切り離しが蓋環Aの蓋よりも平坦に切られており、安定性がある。坏H蓋とする意見もあるが、古墳などの副葬においてこのタイプの身となってセットをなすものが確認しにくいことや同器種重ね焼きを想定させる火ダスス灰が見られることから身と判断した。A類には、a類と同様、底部の平坦な器形で、口縁端部を薄く引き上げるb類と、底部の丸い深身器形で、口縁部が薄く作られているc類とがあるが、いずれも量は少なく、客体的。

B類は元来、蓋付きの陶器形と思われるが、厚手で口縁端部もシャープさに欠け、有蓋の痕跡はなく、無蓋化して、在地化したようなものであろうか。

鉢……………口径20cm以上の大型の食器具容器を鉢とした。鉢は底部平坦で体部が立ち上がる無蓋陶器形のA類と体部が外傾する平底器形のB類に分けられる。A類は調整や作りのにやや粗雑ではあるが、該期に単発的に出現する金属器を模したような、特殊大型容器に類するものであり、これについては蓋を伴わないが、粗形は有蓋器種と目されるものである。

高坏A……………有蓋高坏を高坏Aとする。

蓋はいずれも天井部に扁平なつまみをもつもので、蓋環A同様、口縁端部に内傾する面をもつa類と面をもたないb類に分け、天井部調整からヘラ削り調整をもつ1類、ナデのみの2類、カキ目調整をもつ3類に分けられる。

身は2段スカシをもつような高脚a類と壺脚状の低い脚をもつ低脚のb類とに分けられる。

a類はスカシをもつタイプのみで、2段3方スカシの1類が主体的で、2方スカシの2類は極少ない。概して坏部の口径は大きい。

b類はスカシをもたないタイプのみで、基部径細く裾広がりがする1類と基部径太くやや壺脚状の器形(段や椽を形成し端部に面をもつ)を呈する2類に分け、そして特にこの2類のうち、口縁部立ち上がりの特に短い特徴的な一群を1'類とした。坏部器形は基本的に蓋環A身に共通するが、(ア)としたヘラ削りを底面にもつ調整が主体的で、カキ目調整の(イ)も定量あり、ナデのみか無調整の(ウ)は極少ない。

高坏B……………無蓋高坏を高坏Bとする。

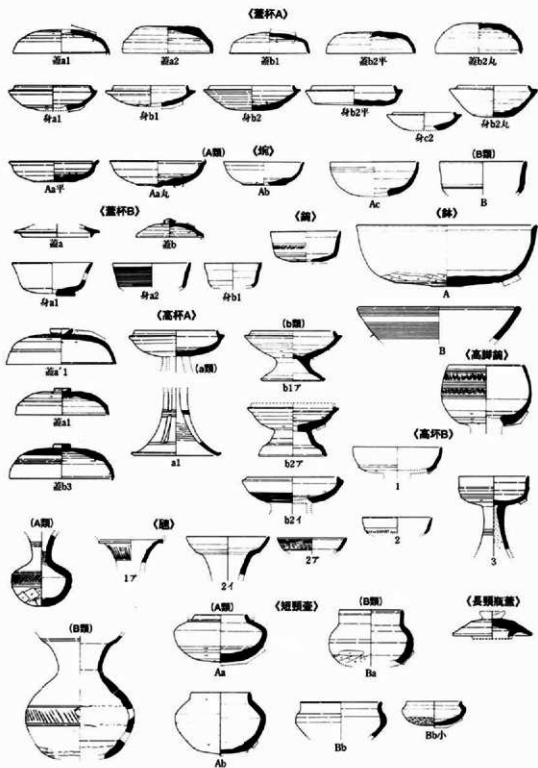
脚は基本的に高脚のもののみで、低脚の無蓋高坏は確認されない。坏部はいずれも底部転換点付近に椽をもつものであるが、全体的な器形から、口径大きくやや浅身の1類と口径やや小さめで深身の2類、口径小さく浅身の3類に分けられる。

高脚鉢……………脚付きの鉢で、金属器模倣器種ということで鉢とした。器形は体部内湾器形で、体部には直線と波状で構成した櫛描き文をもつ。内面降灰の状況から無蓋器種と想定されるが、器種自体は有蓋が主体的であると予想する。

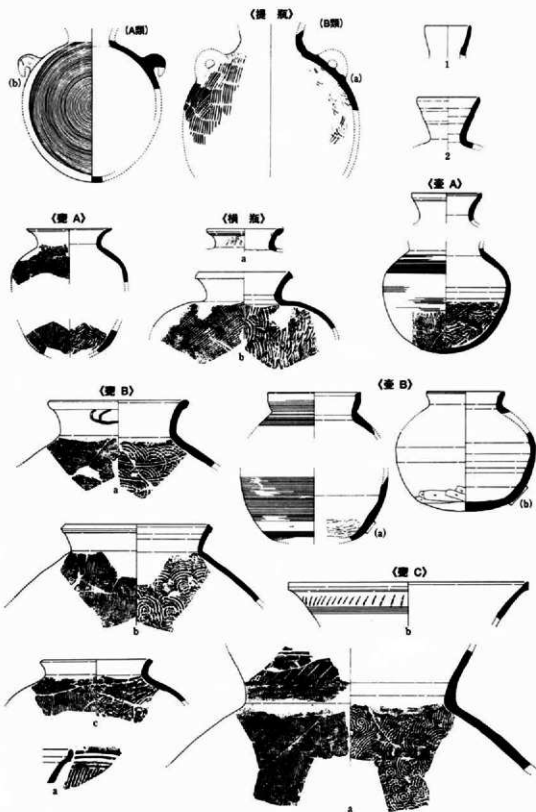
甕……………従来からの器形変化造る通常器形のA類と、特殊大型法量の甕類似器形のをB類とする。

A類は、胴部径が10cm以下に小型化して、口頸部が長大化する段階の甕で、胴部の円孔は大きくなっている。口縁部はいずれも外反から直立気味になる転換点で段を形成しているが、段の部分で椽を形成す1a類と椽はなく段を形成するのみの2類に分けられ、さらに口縁部文様をもつA類とまたないイ類に分けられる。

B類は、蓋程度の法量で、形態が甕であるもので、頸部の穿まりや全体的なプロポーションは異なるが、胴部円孔や口縁部器形、胴部文様帯は同様のものである。



第118圖 須惠器分類圖(1) (S=1/6)



第119图 须惠器分類图(2) (S=1/6)

また、皿には台の付くものがあり、台のみ出土している。

短頸壺……有蓋をA類、無蓋をB類とした。

A類は口縁部が短くやや内傾気味に立ち上がるもので、重ね焼き痕跡により明瞭に蓋付きであることがわかるものである。胴部器形により、低身で、肩の強く張るa類とやや器高高く、胴部が丸味をもつb類に分けられる。

B類は頸部の窄まりが弱いもので、明瞭な蓋の痕跡を止めないものである。器形から明瞭に2分される。a類は口縁部長めに直立するもので、胴部は丸く球胴形。口縁部内側には沈線が走る。これに対し、b類は器高が低く、口縁部の短く外反する器形で、鉢状器形に近いものである。

長頸瓶……頸部の長い瓶類はあるが、確実に長頸瓶と判断できるものはなく、長頸瓶の蓋のみ出土している。

提瓶……胴部成形の方法により、通常見られる粘土積み水挽き成形のA類と粘土積み叩き成形をする横瓶的な大型のB類に分けられる。A類はカキ目調整で、作りもよく、通常見られるものであるのに対し、B類は厚手で、叩きを器面にそのまま残し、やや粗雑な感を受ける。また、把手の形態により完全な輪状となるa類とカギ形突起となるb類に分けられ、口頸部器形により口縁部で直立気味となり端部丸く内湾気味となる1類と外傾気味に立ち上がり端部で面を形成する2類に分けられる。

横瓶……基本的に胴部整形にはカキ目が目立たず、叩き成形痕を残すものが主体的である。口縁部器形により、口縁端部が外側に折り返すように肥厚するa類と口縁端部がやや肥厚して上端に面を作るb類に分けられる。

壺……比較的大型の壺類で、全体的に球胴に近いものである。胴部上半にはカキ目やナデ調整が行われる。胴部下半の器形・成形方法と口縁部器形により、胴部下半に叩き出し成形を行い丸底にする小型壺に類するA類と平底のままで、叩き出し成形を行わないB類とに分けられる。A類の口縁部は口縁部上方で直立気味となるものが多く、上端には面を形成し、沈線などの装飾性が見られる。これに対し、B類の口縁部は短く立ち上がるもので、装飾性に欠けるものである。やや胴部長めとなるa類と短頸壺的に胴部の張りが強いものをb類とした。

この器種では台の付くものが存在しているが、主にA類の底面までカキ目が施される、叩きの痕跡が消去されたものに付くようである。

甕……量により、小型のA類、中型のB類、大型のC類に分けられる。

A類は口径15cm以下の量量である。最大径を胴部上半にもち、底部は叩き出しでやや砲弾状を呈す器形のみである。さて、法量的に整合性をもつものとして壺Aがあるが、この器種との区別は基本的に装飾性もち、台が付きそうな器種と甕を小型化したものという点で区分したが、その中間的な器形を呈するものもあり、明確に区別することは困難と言える。

B類は口径20～25cm前後を測るもので、最もポピュラーな量量である。胴部の張りは強く、肩はなで肩で、全体的に器高が低く、口縁部は短く外傾する。口縁部器形から、外側に折り返すように丸く肥厚するa類と上下端部（上端のみ）でやや肥厚して突出するb類、短く外傾するのみのc類に分けられる。主体はa類のようで、次いでb類が占める。上下端が強く突出する6世紀代の流れの器形は確認できず、新しい器形に転換したもので占められる。

C類は口径40cm以上の所謂大甕で、口頸部の立ち上がりの長い器種である。甕の中では唯一口縁部文線をもつもので、ヘラ描きの直線と斜線、又は刺突文で構成されている。口縁部器形から、口頸部があまり開かず立ち上がり、口縁部上端が突出するa類と口縁部上方へとやや外反気味に

開く傾向をもつb類とに分けられる。前者はやや古手の様相、後者は新しく出てくる器形であり、その転換時期に当たっている。

b. 胎土分類

須恵器の胎土は生地自体の質感やきめ、含まれる砂粒・小石の種類・量等により大きく3類に、そして特にa類とc類についてはさらにその中で2つに細分している。

a類は極細かな白色の砂粒を多量に含み、黒色の吹き出しをもつもので、素地のきめの粗い胎土である。表面には砂粒が浮き出しており、割れ口がスジ状にギザギザする感じが強い。色調は灰色系統が多く、青灰色でも鮮やかな青の発色は少ない。基本的にこの胎土は砂粒を多く含むことを特徴とするが、その含有量によって、極多量のa1類と多量のa2類に細分している。

b類はa類同様の極細かな砂粒を含むもので、粘土素地も類似性が強いが、砂粒の量は確実にa類よりも少なく、割れ口もa類ほどギザギザが強くない。また、発色も比較的濃い灰色が目立ち、砂粒の表面への浮き出す感じも乏しい。ただ、全体的な感じとしては類似性があり、系統的にはa類に近い胎土と言える。

c類は白色砂粒の含有が極少ないもので、表面への砂粒の浮き出しはなく、全体的に素地は粘土質で、緻密な感じが強い。割れ口はa類・b類のような凸凹はなく平滑で、発色は灰色を基調とするが、薄く青味がかかったものが多い。さて、この胎土はあまり含有物の目立たない胎土ではあるが、ところどころ1mm以上の軟質のくず石が入り込んでおり、その量により極少ないc1類と目立って含むc2類とに細分できる。

(2) 土師器の分類

a. 器種・器形分類

土師器は一部、小型壺などに貯蔵容器としての機能を残すが、基本的には食卓容器としての機能と煮炊具としての機能とに2分されるものである。ただし、小型鍋とした煮炊具器種には定量の煮炊具として使用した痕跡をもたないものがあり、当器種が全て煮炊具としての機能を持ち得たかはやや不確定である。さて、器種は食卓容器で高坏・瓿が、貯蔵容器で小型壺が、煮炊具で小型鍋・壺A（小型壺）・壺B（通常法壺壺）・壺C（把手付き壺）・甗がある。以下に、器種説明と器形（調整）分類を提示する。

高坏……長脚で皿状の坏部が付く大型のA類と低脚で碗形の坏部が付くB類に分けられる。

A類は脚筒部が柱状に長く伸び、裾で大きく開くもので、坏部では浅い皿状に大きく開いている。坏部の器形から口縁部外反するa類と口縁部そのまま開くb類に分類できる。

B類は脚基部からそのまま開く低い脚で、やや器高の高い碗状を呈する坏部が付く。坏部器形から口縁部の外反するa類とそのまま立ち上がるb類に分けられる。

さて、A類、B類ともにほぼ同様の調整をしており、坏部内面に全て磨きが施され、内面黒色処理を行っている。そして、ともに外面調整から削り主体の1類と刷毛主体の2類に細分できる。

瓿……内面黒色のものと黒色でないものとに2分されるが、器形と調整によって以下に分類する。

a類は全体的に内湾器形を呈す内外面磨き調整の5世紀後半的な様相をもつものである。内面黒色処理するものではなく、赤褐色の発色が目立ち、数量は極少ない。

b類は口縁端部の内湾する丸底風器形のものである。細部器形から、やや器高高く丸底を呈す1類とやや器高低く一部平底状となる2類、厚手でやや小型の3類に分類できる。内面黒色を基本とする器形で、一部見られる内面ナデ調整のものは別として、外面削り、内面磨きの入る(ア)調整においてはほぼ内面黒色処理するもので占められる。

c類は口縁端部の内湾(内屈)する平底風器形のもので、b類に類似するが、口縁端部内屈のなごころと底面の広さが異なる。細部器形から、底面小さく体部外傾する1類と底面大きく腰の張る器形を呈す2類に分けられる。この類型は1類に一部内面黒色処理するものも見られるが、黒色焼成しないものが主体的で、底面の大きな2・3類においては黒色処理するものは見られない。

d類は内湾気味に立ち上がった後に口縁端部で極短く外屈する深身丸底器形のもので、鉢に近いものもある。細部器形から、口縁端部外屈というよりも肥厚して内傾する面を形成する小型の1類と、口縁端部をシャープに短く外屈させる大型の2類、底部深く半球形を呈す小型3類、口縁部がやや長めに外屈する小型変的な4類に分けられる。基本的に内面黒色処理する類型で、そうでないものは目立たないが、特に4類については内面黒色処理していない。

e類は口縁部の外反(外傾)する丸底風器形のものである。細部器形から、口縁部外反の極短いやや深身の1類と、口縁部外反が長い2類、口縁部外反が長く浅身の3類に分けられ、1類に類似するも口縁端部シャープで内傾面をもつものは1'類として細分した。この類型も内面黒色処理を基本とし、特にその割合は高いが、1'類についてのみ非黒色を基調としているようである。

f類は体部外傾したまま口縁端部へと至る器形のもので、b類の口縁端部が内湾しない器形の1類と厚手で小型少量の2類に分けられる。

以上の器形細分に加えて、調整の方法により、さらに内外面磨きの(ア)調整、内面磨き・外面上半横ナデ下半削り(ヘラナデ)の(イ)調整、内面ヘラナデ・外面上半横ナデ下半削り(ヘラナデ)の(ウ)調整、内面横ナデ・外面上半横ナデ下半削り(ヘラナデ)の(エ)調整、内面横ナデ・外面上半横ナデ下半削毛の(オ)調整、内外面横ナデ(粘土結核み痕跡残す)の(カ)調整に分けられる。主体を占める調整方法は(イ)で、境の過半数を占め、この調整のほとんどは内面黒色処理するという特長がある。(ウ)調整については半々程度の内面黒色の割合。それ以外の調整のものについては逆に黒色焼成しないものが主体的である。

以上、境について分類したが、内面黒色処理で把手の付く内外面磨き調整を施す小型食器があり、これについても境的な器形を想定する。特殊須恵器の角付きの壺器種を模倣したものとするが、器種名については手付き境とした。

蓋……………古墳時代の蓋形土器の器形の流れて追えるもので、低くまっすぐ闊く口縁部に長い柱状のつまみがつく器形である。内面は丁寧に磨きが施され、黒色焼成されている。少量や器形から小型壺の蓋である可能性をもつ。

小型壺……………小型の丸底壺で、胴部は球形に近い。口頸部と胴部の器形から、頸部太く口縁部短く直立気味に立ち上がる、胴部ややつぶれ気味のa類と胴部はつぶれ気味であるが、頸部のすぼまりがあり口頸部の長く立ち上がるb類、胴部がほぼ球形に近く、頸部すぼまり弱いが、口頸部が長く立ち上がるc類に分けられる。基本的にこの器種は内面黒色処理しているものが多く、特にa・b類において

顕著で、これにおいては細かな内外面磨きを施すもの（1類）が主体的である。これに対し、c類の調整はやや粗雑なもので、内面の口縁部磨き調整は粗く、外面は縦刷毛を施すしている（2類）。
小型鍋……従来は鉢として扱われていたものであるが、ここで小型鍋としたのは、外面ススと内面コゲ状付着物のつくものが目立つため、煮炊具として使用された器種であることを想定し、その痕跡のないものも含めて、小型鍋として包括したものである。当器種は碗器形を大型化したような口縁部内湾器形を呈すA類と広口壺的な底部丸底で口縁部の外反するB類に分けられる。

A類は内外面に粘土粒積み痕跡を残す粗い整形が特徴的で、丸底状でも必ず平たい底面を残す器種である。細部器形から、底面が小さく、体部外傾するやや深身の碗器形を呈する1類と、体部外傾器形だが、1類よりも浅いため底面がやや広めとなる2類、体部外傾強く、浅身の3類、底面が広く、立ち上がりがやや硬の張る4類、口縁端部の内屈しないやや浅身の5類に分類できる。調整は碗の調整に共通する部分もあるが、碗で一般的であった内面磨きは極少なく、内面が横ナデかヘラナデで仕上げるものが多い。内面磨きのあるものをA類とし、内面ヘラナデ・外面下半削りをイ類、内面ヘラナデ・外面刷毛調整をウ類、内面横ナデ・外面磨きをエ類、内面横ナデ・外面刷毛調整をオ類、内外面ナデ調整をカ類として分類する。

B類は口縁部に最大径をもつ、広口の器形で、口縁部外反・外傾する鉢状の器種を包括した。細部器形から、胴部に張りがなく外傾して立ち上がり、口縁部で外反するa類と、胴部に張りがある口縁部外反器形のb類、胴部外傾器形で口縁部外反した後口縁端部をつまみ上げるc類、口縁部外反が弱くA類との中間的器形を呈すd類に分けられる。調整は基本的に外面では刷毛が目立つが、a類についてのみ刷毛はなく、A類に類似したような調整（部分的に削りか磨き、横ナデが施され粘土粒積み痕跡を残す）をする。他のb・c・d類は外面が刷毛、内面がヘラナデか削りで、壺Bに類する調整が行われている。

壺A………口径18cm未満の小型法量で、長胴とはならない胴の短いいわゆる小型壺である。底部は丸底が基本であるが、平たくなるものもある。器面の状態は外面で厚くススの付着が、内面でコゲ状の付着が見られ、強い加熱により脆く剥落しているものが目立つ。全体的な器形から、胴部は張るが、長めの胴をもつ（胴部最大径<器高）a類と、胴部はa類と同様の張りであるが、胴の長くないb類（胴部最大径=器高）、胴の張りが強く球形の胴部をもつ広口壺に近い器形のc類（胴部最大径>器高）、c類よりも器高が低くつぶれたような感じのd類、口縁部に最大径があり、鉢状器形を呈すe類に分類できる。

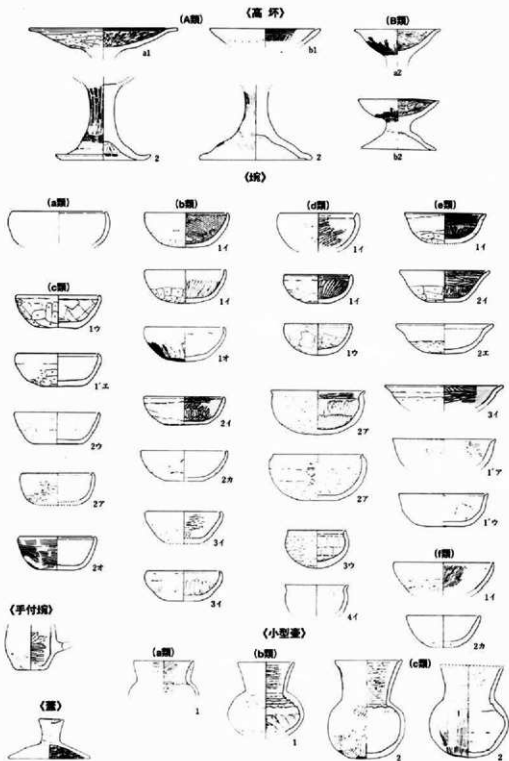
a類は長胴傾向をもつが、壺Bよりは長胴化せず、湯釜としては用いられていない。ただ、法量的に大きめのものが多く、壺Bとの区別がやや困難なものである。口頸部器形から、頸部のすばまりの弱い1類、ゆるやかに外反する2類、「く」字状屈曲の3類に細分できる。

b類は壺Aの最もポピュラーなタイプで、a類とc類の中間的なものを包括する。口頸部の器形から、a類同様、1～3類の細分でき、さらに口頸部直立気味に立ち上がり口縁端部で外屈する4類が加わる。法量は小さいものからやや大きめのものまでバラつきがあり、偏らない。

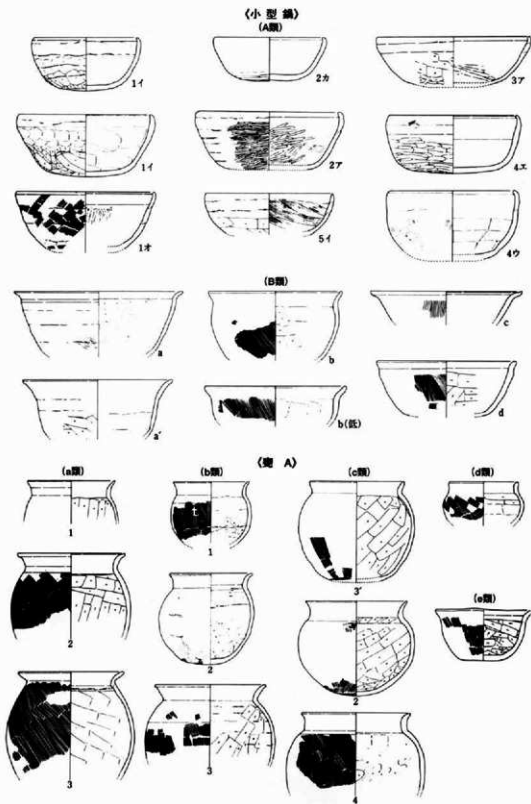
c類は広口壺的な器形で、口径の大きなものである。口頸部器形から1～4類に細分できるが、特に3類の「く」字状屈曲は短いのが特徴である。全体的に大きめの法量が多く、口径は大きい。

d類とe類はいずれも小型のみで、数量も少なく、一般的な類型ではない。

以上、器形について述べたが、基本的に当器種は口縁部横ナデ以外は外面刷毛調整、内面ヘラ削



第120图 土器分類图(1) (S=1/6)



第121圖 土師器分類圖(2) (S=1/6)

りかヘラナド調整で、調整方向は縦方向を基本として、それから縦のまま頸部まで行くものと胴部上半へと斜め方向に展開しているものがあり、基本的には変Bと同様である。

変B……………口径15cm以上の変で、全体的な量で変Aとは明瞭に識別できる通常量の変である。全体的にやや長胴気味を呈するものであるが、胴部の張りが総体的にはまだ強く、あまり長胴化しないものもある。外面ススの痕跡が変Aよりは弱く、内面のコゲつきはほとんど確認できない。多くはカムドに設置される湯釜的なものと予想されるが、全てがそうとは言えず、極変Aに類似するような被熱痕跡をもつものもある。頸部器形・胴部器形により、以下に分類できる。

a類は口頸部で屈曲した後には胴部でやや張る胴部中位付近か中位以上に最大径をもつタイプで、全体的に長胴気味の器形である。最も一般的な器形と言え、胴部の器内の厚さにより、さらに細分できそうであるが、明瞭には区分できない。

b類は口頸部の屈曲が弱く、胴部の張りの弱いもので、胴部径が口径に近いタイプである。これも長胴化するもので、あまり大きな量のものも目立たない。

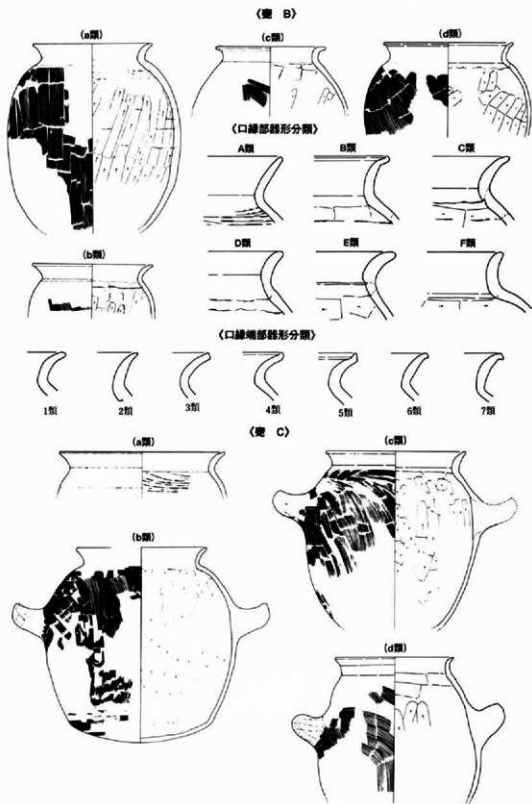
c類は口頸部の屈曲が弱く、なで肩となるもので、胴部最大径を中位以下にもつタイプである。これも長胴気味となるもので、やや下膨れタイプである。

d類は口頸部で屈曲した後には胴部で張る点はa類と同様であるが、口径がa類よりもやや大きく、あまり長胴とならないもので、広口壺的な感じのものである。器形的には把手が付く変Cの可能性があり、これを含んでいる可能性はある。

以上の変Bは口縁部器形から、「く」字状に弱く屈曲するA類、A類のうちさらに口縁部上方で外屈する「こ」字に近いB類、「く」字に外反するC類、外反の弱いD類、強く短く外反し口頸部器内が胴部よりも肥厚するE類、E類同様口頸部肥厚すが外反しないF類に細分可能で、そしてさらに、口縁部器形から、端部丸くなる1類、端部へと先細りする2類、端部に平坦面をもつ3類、上端つまみ上げで端部丸い4類、上端つまみ上げで端部に面をもつ5類、下端突出で端部丸い6類、下端突出で端部に面をもつ7類に細分できる。

また、調整方法については、変Aでも述べたように、口縁部横ナド、胴部外面刷毛、胴部外面ヘラ削りないしはヘラナドであり、個体によってその調整方向は若干異なるが、縦方向を基調としている。特に外面調整は、単独で横刷毛を行う部位は最終的な底部付近のみに限られ、胴部上位や頸部付近での横方向に近いものも、底部・胴部下位からの縦方向→斜方向→横方向の一連の流れの中での結果であり、単独の横刷毛はなく、縦を基調とするものに限られる。それもほぼ右下から左上へと展開するものがほとんどで、その逆は皆無に近く、縦のみで頸部まで施すものも少量見られる。これに対し、内面調整については、ヘラナドとヘラ削りがあり、施す段階に時間的なズレが生じている。つまり、ヘラナドが下から上まで完了した後にはヘラ削りされるわけで、ヘラナドは成形時の粘土積み痕跡の消去を目的としたもので、横方向を基調としたものであり、その後には施されるヘラ削りは器壁を厚くすることを目的としたものである。ヘラ削りは、底部付近については丸底にするために多方向から削るが、それより上へは縦に削り上げており、胴部中位付近か上位まで行っている。この削りは頸部まで行うものは少なく、頸部付近に削りを実施場合は改めて横方向に削っているが、これについては例外的で、通常は、胴部上位ではヘラナドをそのまま残している。

変C……………基本的に変B器形のものに2個対で胴部中位付近に把手の付くタイプである。変Bよりは長胴化せず、口径が大きい広口壺的な器形を呈するものが目立つ。内面のコゲつきが一部に見られる傾向が



第122図 土師器分類図(3) (S=1/6、口縁部分類図のみ1/2)

あり、変Bとは異なる使用状態を想定する。口頸部・胴部器形により以下に分類する。

a類は口径が大きく、胴部径との差があまり大きくない、広口を呈するもので、口径よりも器高が小さい器形を予想する。把手の付くものは確認していないが、多分当器種に該当するものだろう。

b類は胴部の張りの強いもので、球形に近い胴部をもつものである。底部は比較的平たくっており、把手の付くものは胴部中位より上に付けられている。変Bのd類器形に類似する。

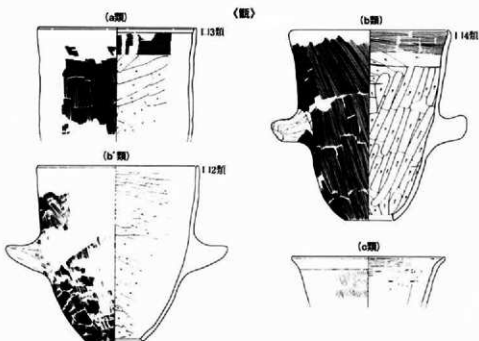
c類は胴部の張りが弱く、変Bのa類器形の胴の張る類いのものととの区別がやや困難なものである。胴部最大径は中位より上にあり、その部位で把手が付けられている。

d類は胴部の張りが弱く、最大径が下位にあって下膨れ状を呈するものである。器形は変Bのc類器形に近く、把手は比較的下の方に付けられている。

以上の変Cは口縁部器形・口縁端部器形から、さらに細分されるが、変Bとその分類基準は共通しており、また、調整方法についても変Bと同様である。

甗……………いずれも底部穿孔が多孔とならずに底部全体が孔となるもので、基本的に把手が2つ付くものである。湯釜としての変Bとセットで使用されたものと予想される。

全体的な器形から、胴部下位不明だが中位以上は筒状のびて口縁部に至るずん胴型のa類と、口縁部からやや外傾気味にそのまま胴部へ至り、底部へと穿まってゆくb類、胴部外傾気味で、口縁部で強く外屈するc類に分けられ、b類ではさらに胴部上位から口縁部にかけてまっすぐ立ち上がるものをb'類とした。また、特にa・b類では口縁端部の器形から、端部先細りとなる1類、端部丸くなる2類、上に面を形成する3類、内面端部を突出させる4類に細分できる。いずれも把手の位置は胴部中位付近で、やや上に向いて付けられるものが主體的だが、反るものからそのまま横に付けられるものまで、形態はいろいろある。



第123図 土師器分類図(4) (S=1/6)

次に、調整だが、外面刷毛、内面削りを基本とする点では、壺と共通するが、幾つかの点で異なっている。まず、外面調整であるが、いずれも基本的に縦方向の刷毛で、口縁部横ナデ後に底部から連続的に胴部上位か口縁部付近まで施される。順序・方向は壺と共通するが、そのまま調整を終える外面1類に加え、さらに口縁部から下方3～5cmを再度横ナデし刷毛を消す外面2類が定量存在する。そして、内面調整では、こちらも縦方向のヘラ削りを基本とする点、そして削りの前に横方向の調整を行う点では壺と同様であるが、横方向の調整がヘラナデかナデ程度の内面1類に加え、削り前に横方向の刷毛が施されている内面2類が定量あり、さらに胴部上位以上を削り後に斜め方向の粗い磨き状調整をしている内面3類も少量ながら存在する。瓶の調整の特徴は、刷毛後の外面横ナデと内面横刷毛であり、頸部をもたない器形がこのような調整の違いを生んでいるようである。

b. 胎土分類

土師器の胎土は粘土素地自体の質感とそれに含まれる砂粒・小石・鉱物の種類・量等により分類している。

A類は粘土素地自体に白色ないしは淡褐色・濁灰白色の細かな砂粒が多量に含まれるもので、表面には細かな砂粒が浮き出し、割れ口がスジ状にギザギザして、砂粒が多量に露出している。あまり大きな小石状のものは入らず、砂粒の粒の大きさは均質である。含有鉱物では、雲母（黒雲母？）粒や角閃石状の光る撥形の黒色鉱物があり、雲母粒はほぼいずれにおいても、角閃石状のものは入るものと入らないものがある。色調は肌色系で、やや赤味の強いものから薄く灰白色に近いものまでであるが、大半は濃い肌色から淡い肌色の範疇に収まるものである。

B類も砂粒（A類と同様の種類の砂粒）を多く含有する点ではA類に類似しているが、A類よりも確実に砂粒の量が多く、含まれる砂粒の粒もA類よりは大きく、大きさにバラつきが出ている。A類のように粘土素地自体に含有された砂粒のみではなく、混和材として混入された砂粒である可能性が高い。また、A類同様、雲母粒が含まれているが、角閃石状の鉱物は目立たず、入っても極微量である。色調は、橙褐色系のものか淡黄褐色系のもので、赤味を帯びるものが目立つ。さて、このB類には特に雲母粒を多量に含むものがあり、これには角閃石状の鉱物も多く含まれる。他の特徴はB類と同様であるため、別胎土とは言えないものであるが、一応、B'類として区別しておきたい。

C類はA・B類のような砂粒が目立たず、極細かな白色の砂粒を少量含有する程度で、混和材的なものも確認できない。粘土素地は極細かな気泡が空いており、軽い感じを受けるもので、全体的に粉っぽいという印象を受ける。鉱物は雲母粒らしきものが稀に確認されるが、一般的には入らないものである。色調は濃い肌色系から橙系で、赤色酸化粒も少量であるが確認される。

D類は粘土素地自体に砂粒が含まれないサラッとした質感で、海綿骨針が少量ながら含有されることを特徴とする。砂粒は混入されたものと予想されるもので、淡黄褐色系か灰色系の色調、多く入るものと少なく入るものがあるが、だいたい1mm程度の大きさである。色調は淡橙褐色か橙褐色、淡赤褐色で、赤色酸化粒を含む橙系統の濃い色調である。

E類は粘土素地に砂粒を含まないサラッとしたD類に似た質感のものであるが、海綿骨針は含まず、そのかわりに多量の雲母粒を含むものである。鉱物系の含有物は雲母だけで、粒の大きさは細かく、含まれる量はA・B類の数倍である。極稀に小石状のものを含み、色調は橙系のものである。

2. 竪穴住居跡出土の土器

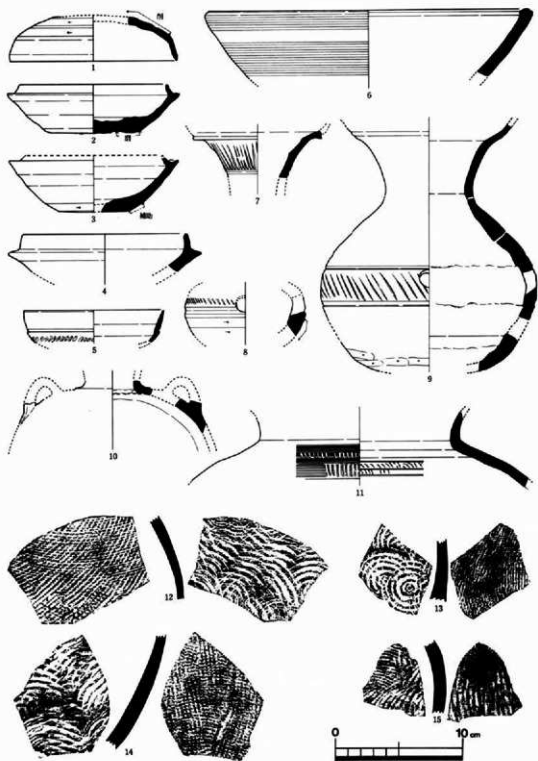
(1) 3号竪穴住居跡出土土器

当住居跡において使用された可能性をもち、住居廃棄時に住居内に捨てられたと予想される土器が少量ながら存在する。食器類では2の須恵器坏Aの身と18の土師器碗e類の内黒焼成、煮炊具では29の甕B a類と30の甕B d類、33の甕b類で、前者は住居壁際の床面から、後者はカマド内に廃棄された形で出土している。これらは一住居における食器の所有状況を示す資料とは言い難いが、住居の帰属時期を推察できる数少ない土器である。2の須恵器坏A身には底面に摩耗痕が見られ、土師器と甕にも略完形を呈す。煮炊具は完形ではないが、カマド内部に捨てられた大型の破片で、使用痕跡はいずれも薄く外面にススが付く程度である。

以上の土器を除くと、当住居から出土するものは、貼床下の土坑から出土する土器群と住居埋没土の中に存在する土器群とに分けられる。両者は住居が存在していた時期を境にそれ以前とそれ以後とに区分できる訳で、以下では分けて述べるが、両者間で接合するものも見られる。

床下土坑から出土した土器は、9の須恵器甕や16の土師器碗、24の土師器小型鍋、25の土師器甕Aなどがそうで、他にも須恵器坏Aや甕、土師器煮炊具類が多数出土している。須恵器は坏A身3個体、高坏B1個体、甕5個体の他に、9の大型壺状を呈す甕B類が存在する。当遺跡から出土するB類はこれ1点のみで、やや特殊品の感があるもので、細部の器形や文様など甕と同様であるが、胴部と口頸部の比率は異なっており、壺状器形を呈す。土師器は内黒焼b類が4個体、非黒焼b類1個体、煮炊具では24の小型鍋Bb類以外は甕で、甕A2個体、甕B4個体、うち25の甕Ac2類は半完形品である。24・25ともに内外面のコゲ・スス状付着物は見られなかった。

次に、住居埋土から出土した土器であるが、他の遺構との接合関係を見ると、近隣に存在する4・5・6号竪穴住居と弥生時代の遺構である20号竪穴住居の上層埋土との間でのみ確認され、この竪穴住居のグループが同時期に埋没したことを物語るかのようである。埋土から出土した土器は須恵器では坏Aと鉢B類、高坏B、甕A類、提瓶A類・B類、甕B、甕C、土師器では高坏A類、碗、小型鍋B類、甕A、甕B、甕で、その構成は以下の通りである。なお、個体数は口縁部個体識別を基本としているが、土師器甕類は頸部であっても換算。また、特徴ある部位での確認個体数の方が口縁部個体数を上回っている場合は、その個体数を優先させた。そして、須恵器甕類では口縁部破片が極少ないため、胴部破片の叩きから同一個体をグルーピングし、小破片を除くある程度大型胴部片のみ個体数として換算した。この構成を見ると、まず、食器類における須恵器割合の優位が上げられる。坏Aの蓋と身は本来セットではあるが、あえてここでセット



第124图 3号住居跡出土土器(1) (S=1/3)

	須 惠 器					土 師 器				食膳具計
	坏A蓋	坏A身	鉢	高坏B	計	高坏A	内黒魂	非黒魂	計	
個体数	13	19(3)	B1	2	35	3	7(3)	11(1)	21	56
(%)	37.1	54.3	2.9	5.7	62.5	14.3	33.3	52.4	37.5	32.9

	須 惠 器					土 師 器					
	皿	提 瓶	甕	甕 C	貯蔵具計	小銅A	小銅B	甕 A	甕 B	甌	煮炊具計
個体数	A8(B1)	A1.B1	2	3	15	2	2(1)	16(2)	75(5)	4(1)	99
(%)	53.3	13.3	13.3	20.0	8.8	2.0	2.0	16.2	75.8	4.0	58.2

3号住居出土土器器種別構成表〔()内の数値は土土以外の出土個体数〕

での個体数で上げなかったのは必ずしも使用時に一つの器として扱われていたか疑問であったため、蓋の内面摩耗痕から見ても定量は逆さの状態で使用していたものと予想する。ただ、セットで使用されていたものもあつたらうから、この数値よりも須惠器食膳具は少なくなる訳で、須惠器と土師器と近い割合であった可能性をもつ。全体ではやはり土師器煮炊具量の高さが目に付くが、これは甕Bの多さに起因するもので、甕Aとの割合から見ると、予想よりも高い。

須惠器食膳具は坏Aの蓋でc類胎土の2個体のみ天井に削りの見られるものがあるが、他はヘラ切り未調整のもので、口縁端部は丸く仕上げb類のみである。食膳具で坏A以外は極少なく、図示した高坏B類と同様の器形がもう1個体あるのみで、また、6の鉢B類については、やや特殊器種として扱えるものである。貯蔵具では皿8個体以外は甕の胴部破片が主で、11の甕Bの内面Da当て具後に沈線が施されている。叩き・当て具はH a類+D a類が主で、僅かに格子目叩き(14)、H b類+D b類(12)が見られる。

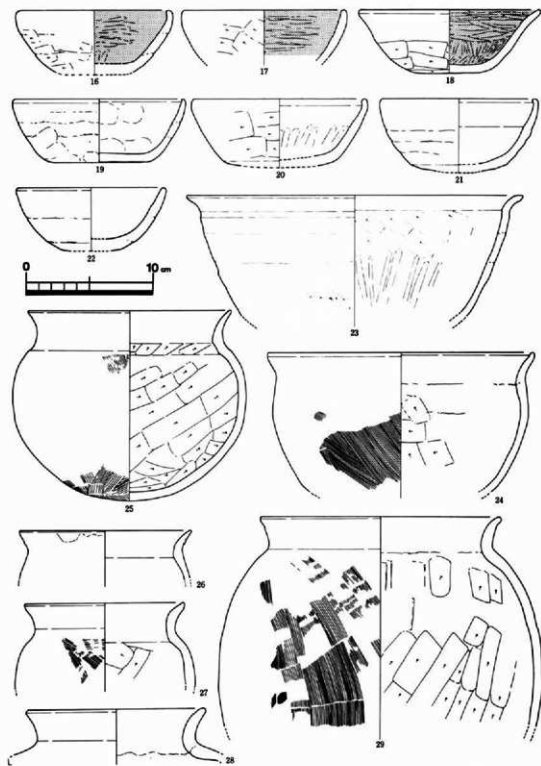
土師器食膳具は極少量の高坏以外は魂である。魂は内黒処理では1個体d 2類がある以外は全てb類で、ほとんどイ類調整であるのに対し、非黒では内面磨きを施すものは極少なく、粘土紐痕を残すものが定量存在。器形はb類少なく、c類主体、f類定量で存在する。煮炊具では小型銅がA類に良好な資料がなく、B類では磨き調整をもつ23がある。これは体部外面に粘土紐痕を残すもので、外面にはスス状痕跡、内面にはコゲ状の変色帯が確認できる。甕は甕Bが主体で、胴部の張るd類器形が目立つ。口縁部器形はA1が1、B1が3、B3が1、C1が3、C2が4、C3が1、C5が2、F3が1で構成される。甕Aは少なく、胴部張りの丸甕状のものはなく、破片も含めa類かb類が主体である。甌は体部外傾のb類のみ、口縁端部器形はすべて4類である。

なお、胎土の構成は以下に示したとおり。数値は土土・床下等の区別なく住居より出土した土器全てを掲示した。なお、破片数での数量であり、個体数ではない。器種による胎土の偏りは須惠器において食膳具と貯蔵具で見られる。

須惠器胎土	a1	a2	a	b	c1	a2	d
食 膳 具	5	16	2	18	4	3	0
貯 蔵 具	5	6	14	14	0	0	1
須 惠 器 計	10	22	16	32	4	3	1

土師器胎土	A	B	D	E
食 膳 具	62	0	1	0
貯 蔵 具	843	4	10	8
土 師 器 計	905	4	11	8

3号住居出土土器胎土構成



第125图 3号住居跡出土土器(2) (S=1/5)

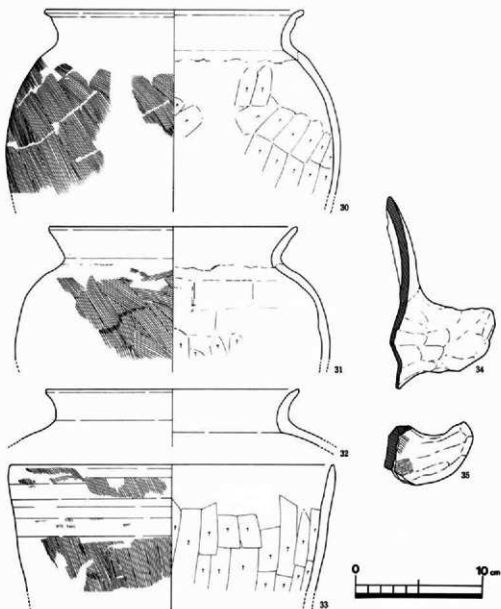
須 志 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
1	坏A壺b1	□13.2,高3.6	c2	良好	1/6		9	甌B2イ	胴17.0	a2	良	1/6	接取下
2	坏A身b2	□11.6,高3.8	b	◇	4/5		10	提瓶Aa	頸4.3	d	良好	1/10	接4住 20住
3	◇ b2丸	□10台	c2	不良	1/3		11	壺B	頸15.6	a1	良	胴片	接5住
4	◇ b	□13.0	a1	◇	1/10		12	壺片		a2	良好	◇	
5	高坏B2	□11.0	a2	良好	坏片		13	◇		b	◇	◇	接5住
6	鉢B	□25.8	a1	良	1/6		14	◇		a2	僅良	◇	
7	甌A1ア		a2	良好	胴片		15	◇		b	良好	◇	
8	◇ A7	胴9.5	b	◇	胴片		土 師 器 器 種						
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
16	甌b3イ	□11.0,高5.1	A	1/4	内黒	26	壺Aa1	□13.5	A	□片	強被熱		
17	◇ bイ	□12.6	◇	1/10	◇	27	壺Ab2	□12.3,胴14.2	B	1/12			
18	◇ c2イ	□14.2,高5.0	◇	略完	◇	28	壺Bb(F1)	□14.0	A	□片			
19	◇ c2ウ	□13.3,高5.0	◇	1/4		29	壺Ba(F1)	□18.8,胴25.4	B	1/4	僅スス		
20	◇ c2イ	□13.5,高5.3	◇	1/8		30	壺Bd(B3)	□20.2,胴26.4	A	1/4	◇		
21	◇ b3カ	□12.2,高5.8	◇	1/6		31	壺Bd(A1)	□19.5,胴25.0	◇	1/15	◇		
22	◇ c2カ	□11.5,高5.0	◇	◇		32	壺Bd(F3)	□20.0	◇	□片			
23	小鍋Ba	□26.6	◇	1/4	黒コゲ,接5住	33	甌b1(外2内1)	□25.3	◇	1/20	僅スス		
24	小鍋Bb	□21.0	◇	1/5		34	壺C把手?		◇	手片			
25	壺Ac2	□16.0,高15.0 胴18.4	◇	1/2	外面赤く変色	35	甌C把手?		◇	手片			

(2) 4号壺穴住居跡出土土器

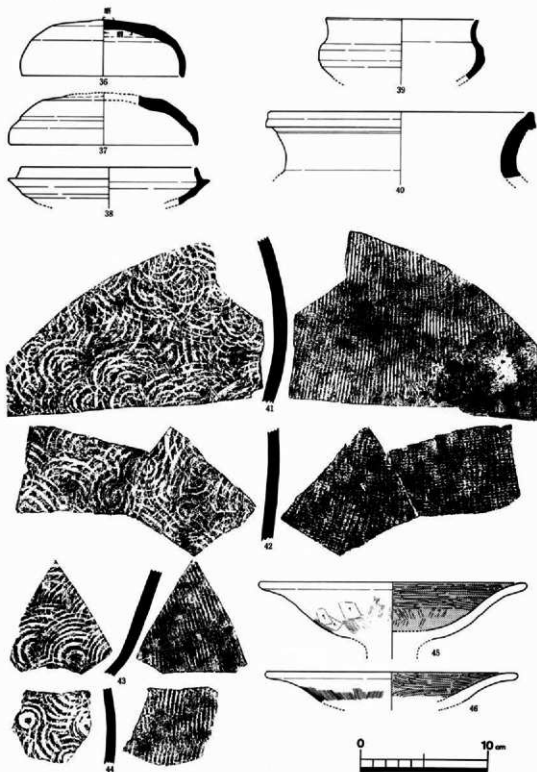
当住居跡において使用されたかは不明であるが、住居廃棄時かその直後に住居内に捨てられた土器群が存在する。全て土師器で、食膳具では45・47の高坏A a 2類の内黒処理が床面直上から、煮炊具では50の小型鍋A 5イ類、52の壺A c 4類、54の壺A c 2類、58の壺B d類、59の甌a 3類がカマド内及びその周辺の床面から出土しており、特に50・58・59は大型の一括廃棄品であり、その可能性が高い。高坏Aはいずれも脚部欠損の坏部みの破片ではあるが、坏部の残存率は高く、両者とも類似する器形を呈す。同タイプの脚部完形品が覆土から出土しているが、接合せず、床面からやや浮いて出土している。煮炊具は小型鍋に一部ススの痕跡、58の壺Bには外面上半にスス帯、内面の胴部中位以下には薄くコゲ状の変色部、そして頸部付近には明瞭な厚いコゲ帯が確認できる。使用痕跡と言えるものであり、貴重である。

以上の土器を除くと、当住居から出土するものは、貼床の下から出土する土器群と住居埋没土の中に存在する土器群とに分けられるが、床下遺物は少なく、図示したものでは56の甕B d類のみで、他は土師器甕B 1個体と小破片数点である。

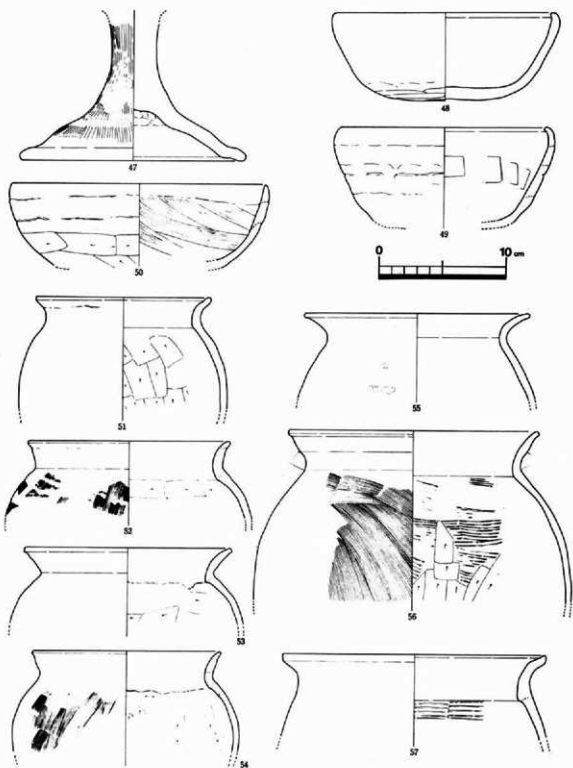
住居埋土から出土した土器は、3号住居跡でも述べたように、近隣に存在する竪穴住居と接合関係にあり、当住居跡では主に上層出土の土器について顕著である。さて、出土器種についてだ



第126図 3号住居跡出土土器(3) (S=1/3)



第127图 4号住居跡出土土器(1) (S=1/3)



第128图 4号住居跡出土土器(2) (S=1/3)

が、須恵器では坏A以外では短頸壺B b類、壺B片、甕片程度と少なく、量も3号住居跡に比べて半分以下となっている。土師器では高坏A類、埴、小型鍋A類、甕A、甕B、甕が確認でき、小型鍋が目立っている。構成割合は3号住居跡と同様の基準で以下に上げた。これを見ると、食膳器具種の少なさが目につく。煮炊具・貯蔵具は3号住居跡とさほど変わっていない。

	須 恵 器			土 師 器				食膳具計	
	坏A蓋	坏A身	計	高坏A	内黒埴	非黒埴	赤彩埴		計
個体数	2	1	3	4(2)	1	2	1	8	11
(%)	66.7	33.3	27.3	50.0	12.5	25.0	12.5	72.7	15.9

	須 恵 器				貯蔵具計	土 師 器				煮炊具計
	短頸壺B	壺	壺 B	甕 類		小鍋A	甕 A	甕 B	甕	
個体数	1	2	2	6	11	6(1)	16(2)	24(3)	1(1)	47
(%)	9.1	18.2	18.2	54.5	15.9	12.8	34.0	51.1	2.1	68.1

4号住居跡土内土器器種別構成表〔()内の数値は埴土以外の出土個体数〕

須恵器食膳具は坏Aの蓋で内面底部に弱く摩耗痕が見られる以外は確認されず、いずれも口縁端部b類器形、調整2類のものである。貯蔵具では小型の無蓋短頸壺が1個体以外は、ほとんど胴部破片で、ここでも定量のD b類当て具が見られる。

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考
36	坏A蓋b2丸	□12.8,高4.4	b	良好	1/3		41	甕片		b	良好	胴片	
37	◇ b2	□14.8	a2	不良	1/6		42	◇		a1	良	◇	
38	坏A身b2	□13.6	a2	良好	1/8		43	◇		b	◇	◇	
39	短頸壺Bb	□12.0,胴13.1	a1	良	1/10		44	◇		◇	良好	◇	
40	壺Bb	□20.6	a2	良好	□片								

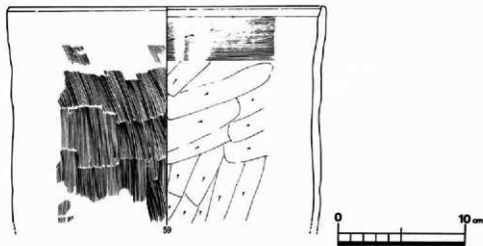
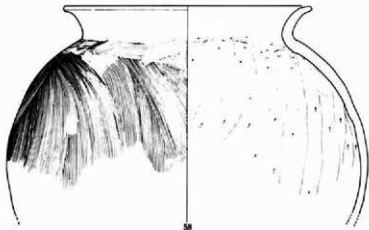
土 師 器 器 種											
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考
45	高坏Aa2	□21.2	A	坏1/3	内黒	53	甕Ab3	□16.2	A	□片	外薄煤
46	◇	□20.0	◇	坏1/4	◇	54	◇ c2	□14.6,胴18.0	◇	1/10	
47	高坏脚b	脚17.8	◇	脚完		55	甕Bb(C1)	□17.8	◇	1/18	
48	小鍋A2カ	□17.4,高6.9	◇	1/4	外強被熱	56	◇ d(A6)	□19.5,胴25.0	◇	1/12	外薄煤
49	◇ A1イ	□16.4,高8.0	◇	1/6		57	◇ b(C4)	□20.6	◇	1/20	
50	◇ A5イ	□20.0	◇	1/3	外一部煤	58	◇ d(B1)	□19.5,胴28.6	◇	1/6	煤コゲ帯
51	甕Ab1	□13.8,胴16.4	◇	1/5	煤コゲ顯著	59	甕a3 (外1内2)	□24.8	◇	1/10	口煤
52	◇ c4	□16.0	◇	1/15							

土師器食膳具は壊が少なく、図示できたものはないが、外面赤彩の甕底部片が出土している。胎土は通常のA類であり、後出するものかもしれない。高坏はA類の脚部完形が1個体と数点の脚部破片で、外面ハケ調整が主体的である。煮炊具では3号住居跡と対照的に小型鍋は全てA類で占められ、器形もほぼ2類にまとまるようである。いずれでもススの痕跡はないが、48の外面は強く被熱しており、器面が剥落している。甕は甕Bが主体で、胴部の脹るd類器形と長胴器形のb類器形が目立つ。口縁部器形はA6が4、B1が3、B3が1、C1が1、C2が1、C3が2、C4が1、C5が2で構成される。甕Aは少なく、a類かb類が主体である。甕では目立った使用痕跡を残すものはS1の甕A程度で、これは器面が強い被熱で剥落しているが、残った所では厚くススが付着、内面では胴部中位以下で薄いコゲ状の変色部が存在し、口縁部で明瞭なコゲ帯が見られる。

なお、胎土の構成は右のとおり。
基準は3号住居跡と同様である。

須恵器胎土	a1	a2	a	b	土師器胎土	A	B	D
食膳具	2	3	0	3	食膳具	18	0	0
貯蔵具	5	3	4	6	煮炊具	479	4	1
須恵器計	7	6	4	9	土師器計	497	4	1

4号住居跡出土土器胎土構成



第129図 4号住居跡出土土器(3) (S=1/3)

(3) 5号壑穴住居跡出土土器

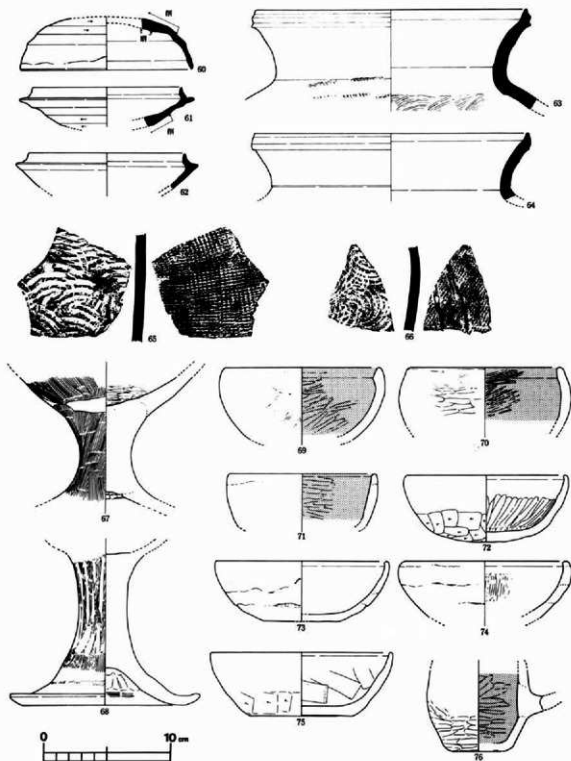
3・4号住居跡同様、当住居跡でも住居廃棄時かその直後に捨てられたと思われる土器群が存在する。全て土師器で構成されており、煮炊具以外は柱穴内やそのすぐ横の床面から出土している。67の高坏脚部や75の甕c 2ウ類、80の小型壺b 1類がそうで、高坏は脚部付近の完形、甕・小型壺も2/3程度の完形に近いものである。さて、67の高坏であるが、大型の高坏A類と判断されるが、中でもやや短いb類脚であり、この類としては坏部がかなり塊形を呈している。坏部にも刷毛を施しており、ややタイプが異なる可能性はある。煮炊具はカマド内とその袖部脇付近から出土する場合が多く、78の鍋A 3ア類や81の甕A b 2類、85・91の甕B b類、86・90・92の甕B a類などが出土している。特に78・81・92は大型の破片であり、カマドの使用に関連した可能性が高く、81の甕Aは外面が強い被熱により剥落、92の甕Bも外面口縁部被熱痕跡が見られる。さて、甕Bの内面調整については、通常、縦方向削り上げで調整を終了するが多いのであるが、縦方向の削り上げの後に胴部上位を横方向の削りで仕上げているものがある。86・90・92がそうで、これらは口縁部にも刷毛調整が見られる点、甕B a類器形を呈す点で共通し、同一工人による製作品である可能性をもつ。また、カマド支脚として68の高坏A類のb類脚部完形品が使用されており、脚基部付近から上面(坏部底面)にかけては強い2次被熱を受けている。

以上の土器を除くと、直接的に当住居跡に伴うものはなく、住居跡埋没時の土器群と床下遺構に混在する土器群ということになるが、ここでも床下遺物は少なく、図示できたものは土師器の70(甕d 1ア類)、89(甕C a類)、93(甕B a類)の3点のみ、それ以外は須恵器坏A・高坏A・高坏Bの破片と土師器甕Bの口縁部・胴部破片である。

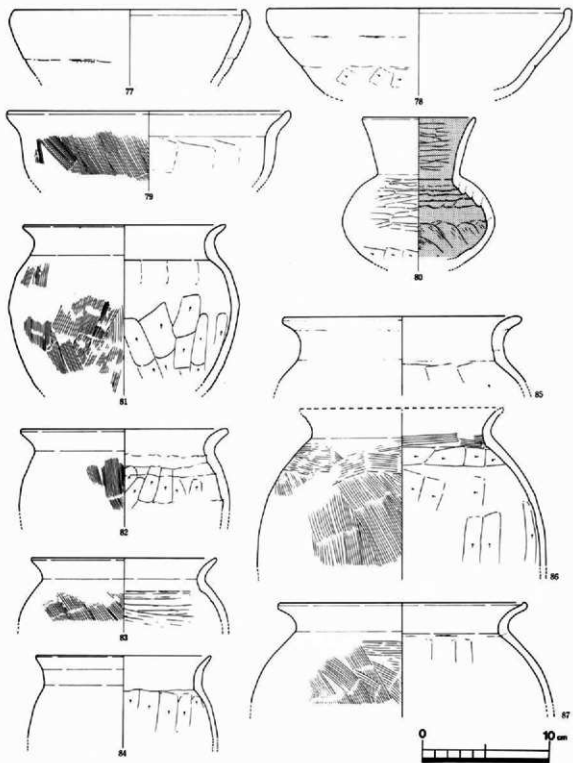
これに比べ、住居内埋土には多くの土器が廃棄されているが、ここにおいても土師器の量が目立つ。須恵器は坏Aと甕A、高坏B、甕A、甕、甕胴部で、土師器は高坏A、甕、手付き甕、小型壺、小型鍋A類、小型鍋B類、甕A、甕B、甕が確認できる。構成割合は3号住居跡と同様の基準で以下に上げた。これを見ると、須恵器食膳具の少なさが目につく。図示できたものも食膳具では土師器甕類が大半であるが、破片数では少なく、総体的に食膳具の量が少ないよう

	須 恵 器						土 師 器					食膳具計	
	坏A壺	坏A身	甕A	高坏A	高坏B	計	高坏A	内黒甕	非黒甕	手付き甕	計		
個体数	5	5	1	0(1)	2(1)	13(2)	4(1)	13	8	1	26(1)	39(3)	
(%)	38.5	38.5	7.7	0.0	15.4	33.3	15.4	50.0	30.8	3.8	66.7	25.5	
	須 恵 器					土師器 貯蔵具計	土 師 器					煮炊具計	
	甕A	甕	甕B	甕胴	計		小型壺	小鍋A	小鍋B	甕A	甕B		甕
個体数	2	4(1)	4	6	16(1)	1	17(1)	3(1)	2	8	83(13)	1	97(14)
(%)	12.5	25.0	25.0	37.5	94.1	5.9	11.1	3.1	2.1	8.2	85.6	1.0	63.4

5号住居埋土内土師器種類構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕



第130图 5号住居跡出土土器 (1) (S=1/3)



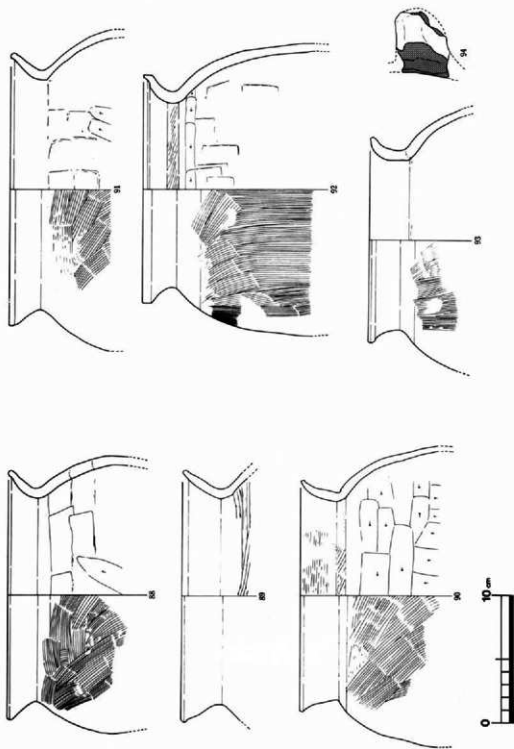
第131图 5号住居跡出土土器(2) (S=1/3)

である。煮炊具は甕Aが少なく、小型鍋も少ない。ほとんどが甕Bで、図示できたものも大半がこの器種である。甕の類は少なかった。

須恵器食膳具はほとんど破片で、かろうじて坏Aが図示してある程度。基本的に端部の丸いb類器形を呈すもので、口径は小型化しているが、削り調整するものが60・61で確認され、作りも薄い傾向にある。貯蔵具では甕B b類が2点ほど出土している。叩き・当て具は外面がH a類、内面がD a類主体で、D b類も数点確認される。また、図示していないが、特徴的な甕A a類が1点確認される

土師器食膳具は碗が主体的に存在し、内面黒色処理は内湾の強い器形のd 1類が目立ち、いずれも内外面磨きしている。非黒色の碗は完形に近いものが72・73・75と3個体あり、これについては底部の平たい、磨きをあまり施さないものが目立っている。また、内外面磨きを入れ、内面黒色処理する手付き碗76が出土しているが、角付き盤を写したような特殊な器種であり、当遺跡

須 恵 器 器 種																			
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考						
60	坏A甕b1	□13.5,高3.2	b	良好	1/4		64	甕Bb	□21.5	a1	不良	□片							
61	坏A身b1	□11.6	+	+	+		65	甕片		+	良	胴片							
62	+	b2	□12.2	+	+	1/8	66	+		b	良好	+							
63	甕Bb	□21.3	+	+	□片														
土 師 器 器 種																			
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
67	高坏A脚b		A	1/4		81	甕Ab2	□16.0,脚18.2	A	1/5	強被熱	82	+	b2	□16.2,脚16.7	+	1/10		
68	+	a	脚15.0,高11.9	+	脚完		83	+	b2	□14.5	+	1/15		84	+	a1	□13.6,脚15.0	+	1/5
69	碗d1イ	□12.1	+	1/8	内黒		85	甕Bb(E1)	□18.9	+	□片	86	+	a(C1?)	□16?,脚22.8	+	1/10		
70	+d1ア	□11.5	+	1/15	+		87	+	d(C4)	□19.3	+	1/10	88	+	d(C4)	□19.5,脚21.8	+	1/8	
71	+c2ア	□11.4	+	1/10	+		89	甕Ca(A1)	□19.4	+	□片	90	甕Ba(F3)	□18.0,脚23.8	+	1/15			
72	+b1イ	□12.5,高5.3	+	2/5			91	+	d(A4)	□21.0	+	1/18	92	+	a(C5)	□18.0,脚23.1	+	1/5	外口赤変
73	+b2カ	□13.5,高4.8	+	1/3			93	+	a(D1)	□16.1	+	1/15							
74	+b1イ	□12.5	+	1/10			94	甕把手		+	手片								
75	+c2ウ	□14.2,高5.0	+	2/3															
76	手付き碗	体径8.1	+	1/5	内黒														
77	小鍋A2カ?	□18.0	+	1/10															
78	+	A3ア	□23.5	+	1/3	強被熱													
79	+	Bb低	□22.8	B	1/8														
80	小型甕b1	□8.7,脚12.1 脚高4.6	A	2/3	内黒														



第132圖 5号住居跡出土器(3) (S=1/3)

ではこれ1点のみの出土である。煮炊具では図示できたものが多く、小型鍋A類とB類が両方存在し、壺でもA・B・Cが存在する。壺Aはほぼb類であり、壺Bはa類とd類が目立つようである。壺Bの口縁部器形はA2が2、A4が2、B1が3、B2が3、B4が1、C1が1、C2が5、C3が5、C4が6、C5が2、F2が1で構成される。煮炊具で目立った使用痕跡を残すものは少なく、ススの付着は少なかった。

なお、胎土の構成は右のとおりである。算出基準は前述のものと同様にしたが、土師器は多くが小破片である。

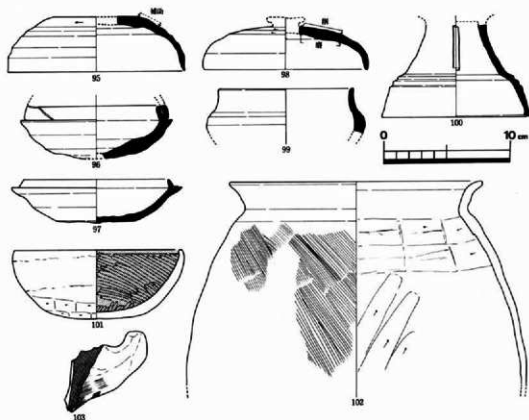
須恵器胎土	a1	a2	a	b	c2	土師器胎土	A	B	D
食 膳 具	2	3	5	15	0	食 膳 具	63	1	1
貯 蔵 具	10	4	3	9	1	煮 炊 具	978	4	3
須 恵 器 計	12	7	8	24	1	土 師 器 計	1041	5	4

5号住居跡出土土器胎土構成

(4) 6号壑穴住居跡出土土器

床面直上付近で大きな土器片が出土しているが、当住居跡に直接伴うものかは判断できず、一括して扱うこととする。

出土量は少なく、器種は須恵器で坏Aと高坏A蓋、短頸壺B類、壺脚、壺C、土師器で高坏、



第133図 6号住居跡出土土器 (S=1/3)

碗、甕A、甕B、甌が確認される。少ない割りには須恵器が定量出ており、食膳具の図示した数は4・5号住居跡よりも多い。いずれも坏Aの口縁端部はb類であり、96のような口径が10cmを切るものも見られる。そして、98の高坏A蓋の内底面には摩耗痕が見られた。また、100の甕脚は2方向の長方形スカシをもつ高いもので、長頸甕(甕)の脚となるものと予想する。次に、土師器であるが、101の内面黒色処理した碗b1類は口縁部を一部欠損する程度の略完形品で、口縁部付近にはスス状のものが付着している。102の甕B c類の胴部外面には厚くススが付着、この器形は肩の張らない下腹タイプのものである。

なお、胎土の構成は右のとおり。

須恵器胎土	a1	a2	b	c1	土師器胎土	A	B
食膳具	2	0	2	2	食膳具	2	0
貯蔵具	1	1	4	0	煮炊具	68	1
須恵器計	3	1	6	2	土師器計	70	1

6号住居跡出土土器胎土構成

	須恵器			土師器		食膳具計	須恵器		貯蔵具計	土師器			煮炊具計
	坏A蓋	坏A身	高坏A	高坏A	内黒碗		短頸甕B	甕C		甕A	甕B	甌	
個体数	1	2	1	1	2	7	1	1	2	2	4	2	8
(%)	14.3	28.6	14.3	14.3	28.6	41.2	50.0	50.1	11.8	25.0	50.0	25.0	47.1

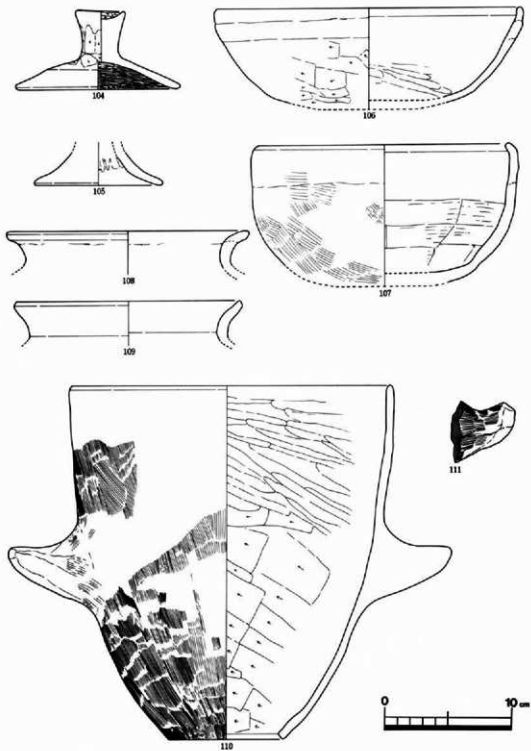
6号住居内土器器種別構成表

須恵器器種													
番号	器種分類	法量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法量	胎土	焼成	残存	備考
95	坏A蓋b2	□13.9,高4.3	a1	良好	1/4		98	高坏A蓋b1	□12.8	c1	良好	1/4	
96	坏A身b2	□9.8,高4.1	○	○	1/3		99	短頸甕Bb	□10.6	a2	○	1/6	
97	○ b2	□11.3,高3.4	c1	○	3/4		100	甕脚	脚11.7	b	良	脚片	

土師器器種												
番号	器種分類	法量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法量	胎土	残存	備考	
101	碗b1イ	□13.2,高5.4	A	略完	口外面黒内黒	102	甕Bc(B1)	□20.0,脚26.8	A	1/10	外面全体黒	
						103	甌把手		○	手片	黒	

(5) 10号壑穴住居跡出土土器

他の住居跡と同様、住居廃棄時かその直後に捨てられたと思われる土器群が存在しており、カマドの廃棄に伴うかのように、カマド袖土の崩壊土やカマド内床面から出土している。これらはいずれも土師器で、104の内黒処理の蓋をはじめ、107の小型鍋A4ウ類、110の甌b'2類(調整外面1類、内面3類)と完形に近いもので占められる。さて、107・110の煮炊具器種には、使用痕跡が認められ、107の外面全体にススの付着と強被熱による剥落が、110でも外面の底部付近と口縁部付近を除いたほぼ全体に同様のススの付着と剥落が認められた。ただ、内面では110の底部付近に一部コゲ状のものが認められた程度で、明瞭な痕跡は確認できない。



第134图 10号住居跡出土土器 (S=1/3)

以上の土器を除くと、直接的に当住居跡に伴うものはなく、住居跡埋没時に廃棄又は流れ込んだ土器群ということになる。出土量は他の住居跡に比べて極少なく、大半が破片で、特に須恵器は坏A、高坏B、甕胴部などの数える程度の破片しか出土していない。土師器についても、破片が主で、以下に示した個体数のとおり、甕A・Bの煮炊具が少ない。

	須恵器			土師器				食膳具計	須恵器 甕 類	貯蔵具計	土師器				煮炊具計
	坏A蓋	坏A身	高坏B	高坏B	内黒陶	非黒陶	蓋				小鍋A	甕 A	甕 B	甕	
個体数	1	1	1	2	6	6	0(1)	14(1)	5	5	1(1)	7	13	1(1)	22(2)
(%)	7.1	7.1	7.1	14.3	42.9	42.9	0.0	34.1	100.0	12.2	4.5	31.8	59.1	4.5	53.7

10号住居埋土土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

さて、各器種についてだが、境は内黒処理と非黒色が半々で、器形はa類2、b類2、d類4、f類4で構成される。高坏は図示した小型B類の脚部のみ。小型鍋は106のA3類の1個体のみで、内底面にはコゲ状の薄いこびりつき

がある。甕Aは小破片のみ。甕Bも図示したものも含め破片のみで、口縁部器形はA1が1、B2が1、C2が2、C3が1、E1が1 E4が1である。なお、胎土別構成については右の表のとおり。

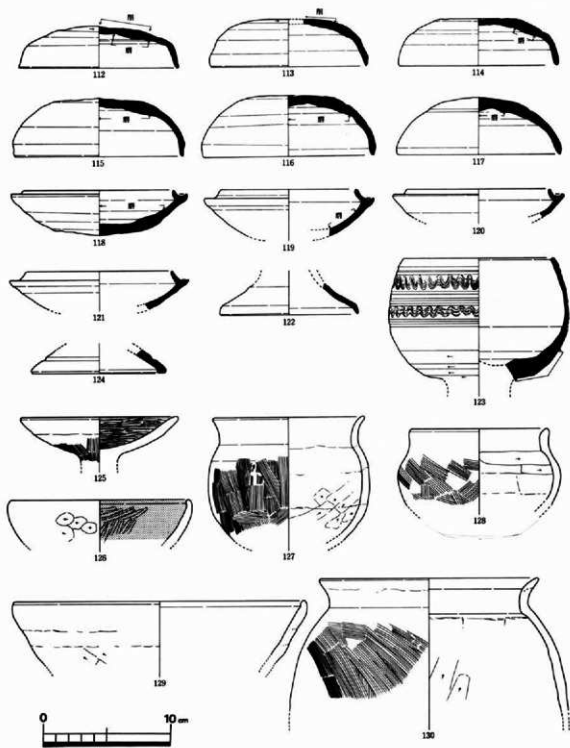
須恵器胎土	a1	a2	b	土師器胎土	A	B	D
食膳具	0	2	3	食膳具	35	0	0
貯蔵具	1	2	2	煮炊具	212	1	4
須恵器計	1	4	5	土師器計	247	1	4

10号住居跡出土土器胎土構成

土 師 器 器 種											
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考
104	蓋	□13.0,高6.1 つまみ高3.3	A	略完	内黒	108	甕B (E1)	□19.1	A	□片	
						109	◇ (C3)	□17.6	◇	◇	
105	高坏B脚	脚10.2	◇	脚片		110	甕b' 2 (外1,内3)	□25.8,高27.8 手径35.6,底9.1	◇	4/5	底以外全黒 内底コゲ
106	小鍋A3ア	□23.6	◇	◇	内底コゲ						
107	◇ A4ウ	□19.5,高11.2	◇	◇	外全黒顕著	111	甕把手		◇	手片	

(6) 11号壜穴住居跡出土土器

住居廃絶に直接伴うような土器はないが、住居廃絶直後に捨てられた可能性をもつ一括土器群がカマド周辺に存在する。食膳具では須恵器坏Aの113・114・117の蓋、118・119の身で、いずれも大きな破片が多く、半完形のものも目立つ。器形はいずれもb類、113で削りの入るものがあるが、これは内天面に同心円当てに具痕が見られ、例外的で、それ以外は未調整である。これらは蓋・身ともに内面平坦部に摩擦痕の見られるものが多く、118などは底面全体に見られる。土師器食膳具は125の内面黒色処理する高坏B a 2類のみで、坏部だけの破片である。これ以外は、土師器煮炊具で、破片としては大きなものであるが、器形全体を復元できるものはない。主体は



第135图 11号住居跡出土土器(1) (S=1/3)

甕B（130～133）で、器形はb類。口縁部の短く外反するものが目立ち、ススの付着など使用痕跡の残るものはない。他は128の甕A d 4類と134・135の甕b 1類で、これらについてもススの付着などは確認できなかった。

以上の一括土器を除くと、住居跡覆土から出土した土器は、住居の埋没過程で廃棄ないしは流れ込んだものとなるが、これら埋土土器以外に、床下遺構に混在する土器がある。ただ、この住居ではこの遺物が少なく、116の坏A蓋b 2類以外は土師器甕胴部破片のみである。さて、埋土土器であるが、これらの土器はこの周辺に存在する住居跡群と埋土内土器の間で、接合関係をも

	須 恵 器					土 師 器					食糧具計
	坏A蓋	坏A身	高坏B	高脚碗	計	高坏A	高坏B	内黒塊	非黒塊	計	
個体数	9(4)	8(2)	2	1	20(6)	1	0(1)	4	7	12(1)	32(7)
(%)	45.0	40.0	10.0	5.0	62.5	8.3	0.0	33.3	58.3	37.5	31.7

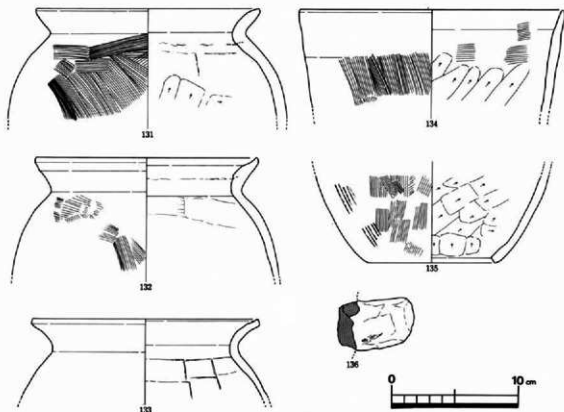
	須 恵 器				食糧具計	土 師 器				食糧具計
	甕A	蓋	甕B	甕胴		小鍋A	甕A	甕B	甕	
個体数	1	1	1	8	11	4	12(1)	40(4)	2(2)	58(7)
(%)	9.1	9.1	9.1	72.7	10.9	6.9	20.7	69.0	3.4	57.4

11号住居埋土内土器器種別構成表〔（ ）内の数値は埋土以外の出土個体数〕

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
112	坏A蓋b1	□12.4,高3.3	b	良好	完形		119	坏A身b2	□10.6	a2	良好	1/4	
113	〃	□12.3,高3.8	c1	不良	1/3	内当煎	120	〃	□11.2	c1	不良	1/10	
114	〃 b2	□12.5,高3.6	b	良	1/2		121	〃	□11.5	a2	良好	〃	
115	〃 b2丸	□13.2,高4.6	b	良好	1/4		122	高坏B脚	脚10.7	a1	良好	脚片	
116	〃	□13.4,高4.8	c1	不良	1/2		123	高脚碗	□11.6,体14.2 身高9.5	b	良好	1/3	
117	〃	□12.8,高4.5	a1	良好	〃		124	甕A脚	脚10.4	〃	〃	脚片	
118	坏A身b2平	□11.8,高3.6	c2	不良	略完								

土 師 器 器 種												
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	
125	高坏Ba2	□12.3	A	坏1/2	内黒	131	甕Ba(C2)	□17.5,脚22.0	A	1/15		
126	甕bイ	□13.8	〃	1/8	〃	132	〃(D3)	□17.4	〃	1/6		
127	甕Ab1	□12.0,脚12.8	〃	1/5	外上黒内白色	133	〃(C3)	□17.8	〃	1/18		
128	〃 d4	□10.6,脚12.8	B	1/4		134	甕b1(外1内2)	□20.6	〃	1/20		
129	小鍋A3	□22.6	A	1/15		135	甕底	底10.0	〃	〃		
130	甕Ba(C2)	□17.2,脚22.0	〃	1/8		136	甕把手		〃	手片		

ち、埋没時での同時性（廃絶段階での同時性）を示唆するものである。器種は須恵器で坏A、高坏B、高脚碗、甕A、壺、甕B、土師器で高坏A、碗、小型鍋A類、甕A、甕B、甗が確認できる。構成割合は以下の表のとおりで、食膳具の中での須恵器の割合の高さが目立つ。まず、須恵器食膳具であるが、ほとんど坏A器種で、蓋・身ともにb類器形。身の立ち上がりはかなり寝てきており、ヘラ削りを施すものは例外的で、未調整が一般的である。一括土器同様、内面摩耗痕の見られるものが目立ち、特徴的である。坏A以外では高坏Bの脚部破片と123の高脚碗のみである。高脚碗は櫛描波状文と直線文で構成された文様帯をもち、下端に丁寧な削りを施す特殊品で、内面降灰の状況から無蓋器種と思われるが、本来は有蓋器種となるべき金属器模倣の器種と思われる。ただ、胎土は精選された感じはなく、通常の須恵器食膳具の胎土である。土師器食膳具は大半が破片で、図示できたものは126の内黒碗b類のみである。内黒と非黒色の比率はほぼ均衡しており、器形はb・c類主体。また、非黒色には薄手の古い器形を残すa類が1点確認される。土師器煮炊具は小破片のみで、図示できたものは極少ない。129の小型鍋A 3類と127の甕A b 1類で、後者は外面上半に厚くススが付着し、内面口縁部にも一部及んでいる。内面のコゲは明瞭なかたちでは確認できず、薄く変色するような感じで上半部に確認されている。甕Bは破



第136図 11号住居跡出土土器(2) (S=1/3)

片のみで、口縁部器形ではA1が1、A2が1、A4が1、A6が1、C1が1、C2が3、C3が1、C4が2、C5が2、E2が2確認できる。

胎土は右の表のとおり。

須恵器胎土	a1	a2	b	c1	c2	土師器胎土	A	B	D
食膳具	5	4	6	9	3	食膳具	55	0	1
貯蔵具	2	3	2	3	1	煮炊具	542	3	0
須恵器計	7	7	8	12	4	土師器計	597	3	1

11号住居跡出土土器胎土構成

(7) 12号竪穴住居跡出土土器

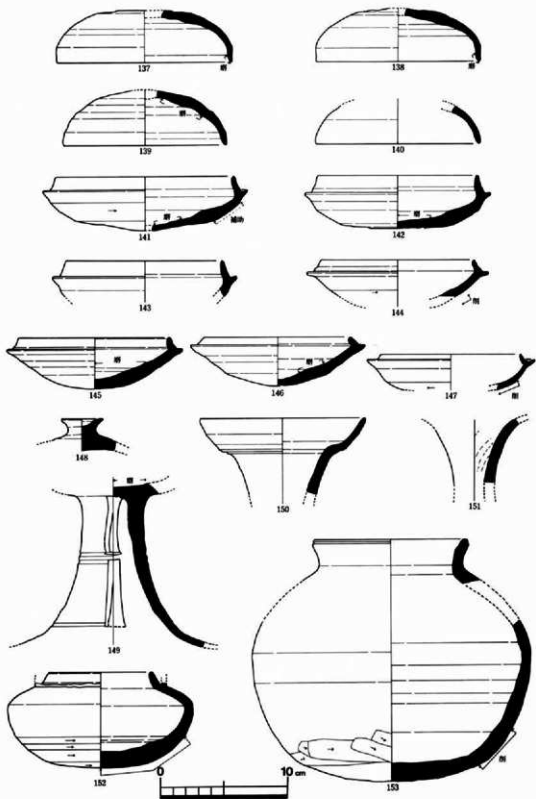
当住居の廃絶時に伴うような土器はカマド内でのみ出土している。ただし、これらの土器も完形などに復元できるものではなく、カマドに設置してあった土器というイメージよりも、住居廃絶時にカマド内に捨てられた土器群というイメージである。このカマド内土器群以外は住居埋没に伴う埋土土器であり、11号住居でも述べたように、周辺の竪穴住居跡の埋土土器とよく接合している。特にこの住居では接合が多く、12号竪穴住居跡を中心として周辺の竪穴住居跡の土器が接合関係を結んでいるような印象を受ける。

さて、カマド内廃棄土器群であるが、全て土師器で、しかも、166の小型壺c類以外は全て煮炊具で占められる。まず、小型壺であるが、球形の胴部を呈する口頸部直立の器形で、胴部に縦刷毛を施し、口頸部内面には磨きが見られる。基本的には内面黒色処理する器種であるが、黒色は見られず、外面が強く剥落しているため、2次被熱を受けた可能性もあり、そのために黒色が飛んだ可能性もある。カマドで使用された可能性をもつものである（支脚とか?）。略完形品で出土している。他は161の小型鍋A1才類、168の甕B a (D1)類、177の甕b 4類で、小型鍋は強い被熱による外面剥落、甕Bは外面口縁部と胴部に明瞭なスス、甕にも外面にところどころススが付着している。いずれも使用の痕跡が目立つものであるが、完存率は1/4以下の破片である。

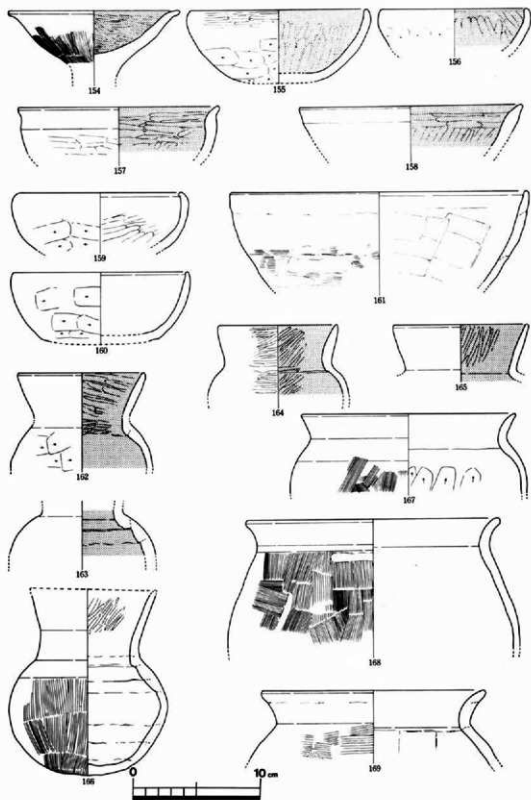
これら以外は、ほとんど埋土土器なのであるが、少量の土器が床下遺構からも出土している。須恵器では150の甕A類の他に坏H破片4点、土師器では160の甕c 1類と内黒甕e類1点、内面黒色処理の小型壺a 1類（164）2点、小型鍋A類1点、170・171の甕B d類とその口縁部破片5点、そして甕胴部破片多数が出土しており、その内容にはこれといった特徴は感じられない。

さて、埋土土器であるが、器種は須恵器で坏A、高坏A、高坏B、甕A、短頸壺A類、提瓶A類、壺B、甕B、甕C、土師器で高坏A、高坏B、甕、小型壺、小型鍋A類、小型鍋B、甕A、甕B、甕C、甕と、該期のほとんどの器種が出土しており、出土量も最も多い。構成割合は以下の表のとおりで、土師器煮炊具、特に甕Bの量の多さが目立つが、これは大半が小破片であり、実感としては食膳具の量が多い感じを受ける。食膳具では須恵器特に坏Aが6割を占め、土師器甕では内黒よりも非黒の方が主体的に存在する。須恵器貯蔵具は種類は多いが、量はやや少なく、内黒の土師器小型壺が定量存在することが特徴と言える。

まず、須恵器食膳具であるが、僅かの高坏を除けば、全て坏Aで、蓋・身ともにb類器形を呈す。調整も底部周縁に補助削りが見られる程度で、基本はヘラ切り未調整であり、147の薄手で



第137图 12号住居跡出土土器(1) (S=1/3)



第138图 12号住居跡出土土器(2) (S=1/3)

	須 恵 器					土 師 器					食 膳 具 計
	低A蓋	低A身	高A	高B	計	高A	高B	内黒陶	非黒陶	計	
個体数	27	16	2	3	48	1	1	10(1)	16(1)	28(2)	76(2)
(%)	56.3	33.3	4.2	6.3	63.2	3.6	3.6	35.7	57.1	36.9	30.5

	須 恵 器							土 師 器 貯 蔵 具 計		土 師 器					煮 炊 具 計	
	壺 A	短頸壺 A	提 壺 A	壺	壺 B	壺 C	壺 刷	小型壺	小 鍋 A	小 鍋 B	甕 A	甕 B	甕 C	甕		
個体数	3	2	1	A1, B4	1	1	13	6(2)	32(2)	4(2)	5	19	106(3)	2	5(1)	141(5)
(%)	9.4	6.3	3.1	15.6	3.1	3.1	40.6	18.8	12.9	2.8	3.5	13.5	75.2	1.4	3.5	56.6

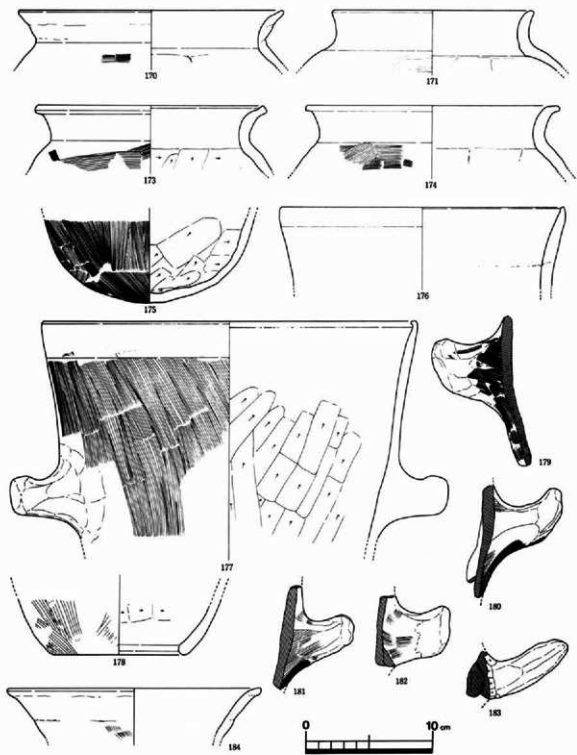
12号住居埋土内土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

特徴的な器形を呈する（精品的）もののみ削り調整が確認できた。さて、当資料の特徴として、蓋でも身でも口径の大きなものがあり、身の立ち上がりも大きく、古い印象を受けるものが定量存在することが上げられる。ただ、小型低身で立ち上がりも寝てくる器形も定量あり、全てそのような古手のものだけで占められるわけではない。また、摩耗痕についてだが、通常見られる内面平坦部につくのはほとんど身だけで、蓋では口縁部内面に見られるものが多く、身とセットで使用されたための身立ち上がり部との擦痕と思われるものである。これは身の蓋としての使用されるケースが多かったことを物語るものであり、他の資料の違いからも使用状況の違いを考えると、興味深い。高坏では高坏Aの蓋のつまみ部分（148）、高坏Aの2段2方向スカシをもつ大型脚部（149）があり、後者の身底面部分は強く摩耗していた。

次に、土師器食膳具であるが、高坏は明瞭なA類がなく、154のB類のみ図示した。器形はやや碗形のa類で、外面刷毛、内面磨き、内面は黒色処理してある。壊も少なく、破片が主で、完形復元できるのはない。非黒色が主体で、口縁部内湾器形のb・c類主、体部外傾のf類も少量ある。内黒は口縁部内湾のb類が主で、157のような外屈深身のd 2類が定量、外傾で口縁部面をもつe 1'類も少量ある。

貯蔵具は通常の須恵器に加え、定量の内黒土師器小型壺があり、当資料の特徴となっている。小型壺は内面黒色処理しないものも極少量見られるが、基本は黒色であり、主にa・b器形が出土している。調整は、口頸部内面は磨き、外面は磨くものもあるが、ナデか削りが主体である。次に須恵器であるが、甕は比較的少なく、壺類が目立つ。152の短頸壺A類は小型低身のa類で、包含層や15号住居跡と多くの破片で接合している。153の壺B b類も当住居跡内のみではあるが、21点の破片で接合しており、いずれも2/3以上の復元品となっている。この153の壺Bであるが、底外面に下駄の歯状の成形台痕跡を残すものであるが、底面はやや丸く突出している。これは外面整形による作り出したものではなく、内面からの強いナデツケによって、押し出したものであり、成形方法は簡略化しているが、丸底を意識したものであろう。甕は胴部叩き外面H a、内面D a基本で、1点のみD b当て具が見られる。

煮炊具であるが、破片ばかりであり、図示できたものも破片復元が大半である。小型鍋はA類



第139图 12号住居跡出土土器(3) (S=1/3)

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
137	坏A蓋b2	□13.7,高4.1	a2	良好	1/3	11住残	147	坏A身b1薄	□11.0	b	不良	3/5	
138	◇ b2	□12.8,高4.2	◇	◇	1/2		148	高坏A蓋		a1	良好	紐片	
139	◇ b2	□13.6	c2	不良	1/5		149	◇ 身a		c2	◇	脚片	41住残
140	◇ b	□12.8	c1	良好	1/6		150	淵A2イ	□13.0	a1	◇	口片	
141	坏A身b2平	□14.1,高4.2	a1	良	1/4		151	◇		a2	良	頸片	
142	◇ b2平	□12.5,高4.2	◇	◇	1/2		152	短頸甕Aa	□8.0,胴14.6 高8.5	◇	良好	1/2	15住残
143	◇ b2	□12.3	a	◇	1/12		153	甕Bb	□12.0,胴22.0 高19.0	a	◇	3/5	底彫台 の痕跡
144	◇ b2	□12.0	c1	良好	1/5								
145	◇ b2	□11.8,高4.1	a1	不良	2/3	15住残							
146	◇ b2	□11.5,高3.8	b	◇	1/4								

土 師 器 器 種											
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考
154	高坏Ba2	□13.6	E	坏完	内黒、14住残	169	甕Ba(D1)	□17.6	A	口片	
155	魂b1イ	□13.9,高5.7	A	1/6	内黒	170	◇ (C1)	□20.8	B	◇	
156	◇ b3イ	□11.4	◇	1/10	◇	171	◇ d (E1)	□15.8	A	◇	
157	◇ d27	□15.7	◇	1/4	◇、床下残	173	◇ a (C5)	□17.8	◇	◇	
158	◇ e1ア	□17.5	◇	1/5	◇	174	◇ d (B2)	□20.0	◇	◇	
159	◇ aイ	□12.6	◇	1/12		175	甕B底		◇	底片	煤なし
160	◇ c1エ	□13.6,高5.7	◇	1/10		176	甕a4	□22.0	◇	1/20	ナデのみ
161	小鍋A1才	□23.2	B	1/6	外強被熱	177	◇ b4 (外2,内1)	□29.6 手径34.6	◇	1/15	外僅か煤
162	小甕b1	□9.7,胴11.2 口高3.8	A	◇	内黒	178	◇ 底	底10.4	◇	底片	
163	◇ ◇	胴11.6	◇	◇	◇	179	甕C把手		◇	手片	
164	◇ a1	□9.2,胴11.2 口高3.2	◇	1/10	◇	180	◇		◇	◇	
165	◇ ◇	□10.4,口高3.6	◇	口片	◇	181	甕把手		◇	◇	
166	◇ c2	胴12.5,胴高9.5	◇	4/5	被熱	182	◇		◇	◇	
167	甕Ac2	□16.8,胴18.6	◇	1/12	外胴・内口僅	183	不明把手		◇	◇	
168	甕Ba(D1)	□20.0,胴23.0	◇	1/8	外胴・口僅	184	小鍋Ba	□19.8	◇	口片	

とB類どちらもあるが、図示できたのはBa'類のみ。甕Aについても、図示できたのは167のAc2類のみである。煮炊具の大半は甕Bであるが、これについても、半分以上を復元できたもの

はなく、全て口縁部付近の破片で、全体的な器形がわかるものがない。口縁部器形はA1が1、A6が2、B1が1、B2が2、B3が1、B4が1、B6が1、C1が8、C2が2、C3が2、C4が1、C5が1、C6が1、D1が1で、やはりC器形が主体。調整方法は、胴部上位外面が斜めから横方向の刷毛、内面が横方向のヘラナダが主体的で、これも通常見られる方法と同じである。この器種以外では把手のみからの推察ではあるが、甕Cが定量ありそうで、179・180の把手がそれに該当するであろう。甕も破片ばかりで、詳細は不明だが、底部破片が多く、端面取り整形が目立った。また、甕や甕Cとは異なる形態をしている把手(183)があるが、調整でも接合部で削りを施す点で異なっており、別の器種を想定する。ただ、接合部はかなり厚く、甕などと同様の差し込み式となっているため、食膳具などの小型品ではなく、厚手の壺や鉢などの把手となるものと予想する。

次に、胎土であるが、全体の構成表を以下に示した。全体的に須恵器ではc類が目立っており、特に食膳具での割合が顕著である。概してb類はc類に比べて少なめで、食膳具よりも貯蔵具で少ない傾向はc類と同様である。a類はどちらも似通った数値で存在していた。また、土師器については、食膳具はほぼA類に統一。煮炊具では他の胎土も少量見られた。

須恵器胎土	a1	a2	a	b	c1	c2	c	d	土師器胎土	A	B	D	E
食膳具	9	18	1	16	21	10	5	0	食膳具(甕)	88(12)	0	0	1
貯蔵具	5	12	1	6	1	2	5	3	煮炊具	1499	2	13	0
須恵器計	14	30	2	22	22	12	10	3	土師器計	1587(12)	2	13	1

12号住居跡出土土器胎土構成

(8) 13号壑穴住居跡出土土器

焼失家屋の可能性があり、床面近くで出土した土器は当住居に伴う可能性の高いものである。特に、185の完形の須恵器短頸壺A類や188の完形に近い甕C b類などは住居所有の土器と言えるものであり、186の内黒土師器小型壺や187の瓿d類も伴う可能性が高い。さて、188の甕C類であるが、底部平底に近いもので、全体的にかなり薄く丁寧に作っており、精製品の感を受ける。基本的な調整方法は他の甕類と変わらないことから、製作段階での意識や技術が異なるものなのだろう。この甕には外面の胴部上位から底面にかけて全体的に煤が付くが、把手周辺の部分には付かず、この器種の使用状態を連想させるものである。また、内面の焦げについては頸部に明瞭な帯で見られ、胴部から底部にかけては所々でポイント的に見られた。

以上の土器以外にも覆土中に破片で土器が混入しているが、その量は少なく、以下の表に上げ

	須恵器			土師器			食膳具計	須恵器			土師器			貯蔵具計	土師器			煮炊具計
	坏A	内黒瓿	非黒瓿	短頸壺A	甕A	甕B		小型壺	甕A	甕B	甕C							
個体数	1	3	3	7	1	2	1	4	2	6	1	9						
(%)	14.3	42.9	42.9	35.0	25.0	50.0	25.0	20.0	22.2	66.7	11.1	45.0						

13号住居内土器器種別構成表

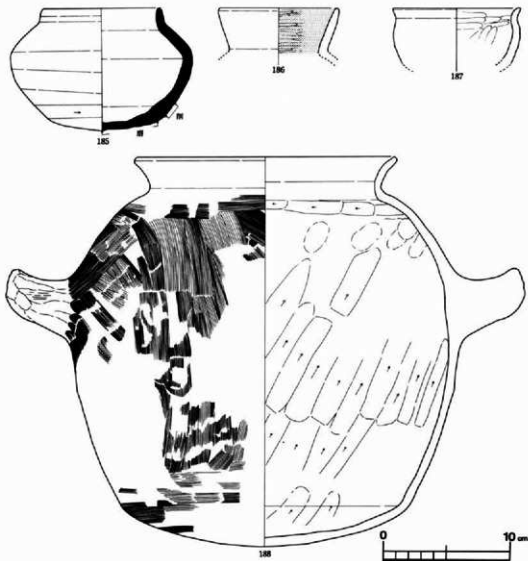
た程度である。焼失家屋のため、埋没が一気に行われた可能性を示すものであろう。

須恵器器種					
番号	器種分類	法量	胎土	焼成	残存
185	短頸壺Ab	□9.2, 胴14.4 高9.7	b	不良	完形

土師器器種					
番号	器種分類	法量	胎土	残存	備考
186	小壺a1	□9.4, 口高3.4	A	口片	内黒
187	埴44イ	□10.0	+	1/3	外壁か僅
188	甕Cd(C1)	□20.4, 胴31.0 手径41.0 高30.7	+	1/2	外脚底僅 内黒魚帯 胴所4僅

須恵器帯土	a1	a2	b	土師器帯土	A
食 膳 具	0	1	0	食膳具(壺)	9(1)
貯 蔵 具	1	1	1	煮 炊 具	77

13号住居跡出土土器胎土構成



第140図 13号住居跡出土土器 (S=1/3)

(9) 14号竪穴住居跡出土土器

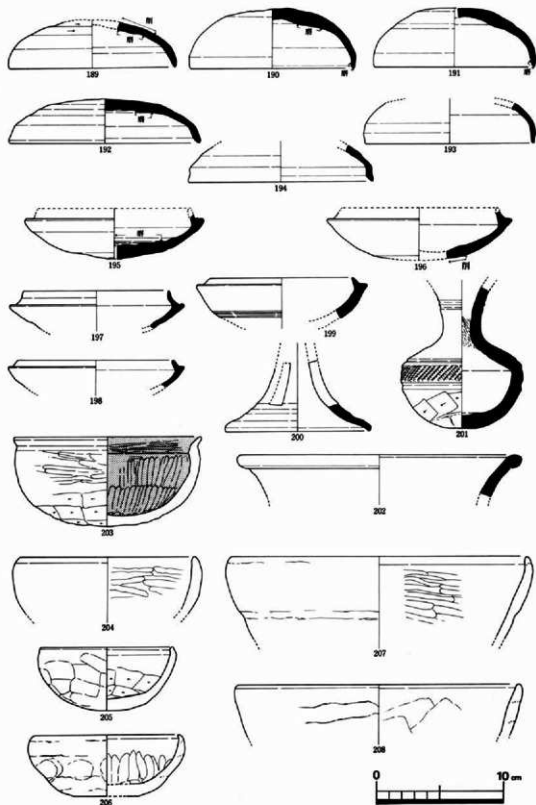
土器の出土状況から、当住居廃絶時に直接伴う可能性が高いと判断される土器群が定量存在しており、図示した190・191の須恵器坏A蓋、203・205・206の土師器碗、210～213の土師器甕A、214～216の土師器甕Bが該当する。カマド内やカマド周辺の床面、柱穴内から出土しており、まとまった形で廃棄されている。完形に復元できるものは少ないが、いずれも大きな破片が多く、半完形のものが目立つ。まず、須恵器坏A蓋であるが、いずれも半完形品で、器形調整はb2類の天井丸タイプ。口縁部内面に摩擦痕が見られる。胎土も類似しており、同一産地の可能性がある。次に、土師器碗であるが、203はd2類器形の特徴的な深身大型タイプで、磨きが内外面に見られる内面黒色処理の精製品である。これに対し、205・206は黒色処理しない口縁部内湾器形の小型タイプで、作りは粘土紐積み痕を残すやや粗製品である。これら土師器碗は食器としての機能をもつものと予想するが、206には口縁部内面に煤か焦げ状の帯が巡っており、何かを煮た可能性もある。次に、土師器甕であるが、210～213の小型甕Aと214～216の長甕型の甕Bに分けられる。甕Aは強い被熱により外面が剥落したものが多く、特に210は内面全体が焦げのためか黒くなっている。210はほぼ完形。211～213は胴部上半のみであるが、同一個体と推察できる胴部下半の破片があることから、本来は完形に近いものであったと考える。甕Bも大きな破片が多く、これに関しても図示したものは完形復元できていないが、同一個体の胴部下半の破片を接合しきれておらず、本来は半完形か完形復元できるものであったらと思う。器形は胴長のa類かb類、調整方法も類似する傾向がある。214のみ外面で煤が確認されており、胴部では片側半分程度、頸部にはなく口縁部に帯状に巡っている。

以上の住居に伴う一括土器を除くと、住居跡覆土から出土した土器は、住居の埋没過程で廃棄ないしは流れ込んだものとなるが、これら埋土土器以外に、床下遺構に混在する土器がある。ただ、この住居では少なく、図示したものでは204の土師器碗b類1点のみで、破片でも土師器甕B類の口縁部が1点ある以外は、甕の胴部小破片のみである。さて、埋土土器であるが、これらの土器は12号竪穴住居跡の部分でも述べたように、この周辺に存在する竪穴住居跡や土坑との間で、接合関係を持ち、埋没段階での同時性が想定されるものである。器種については、須恵器で

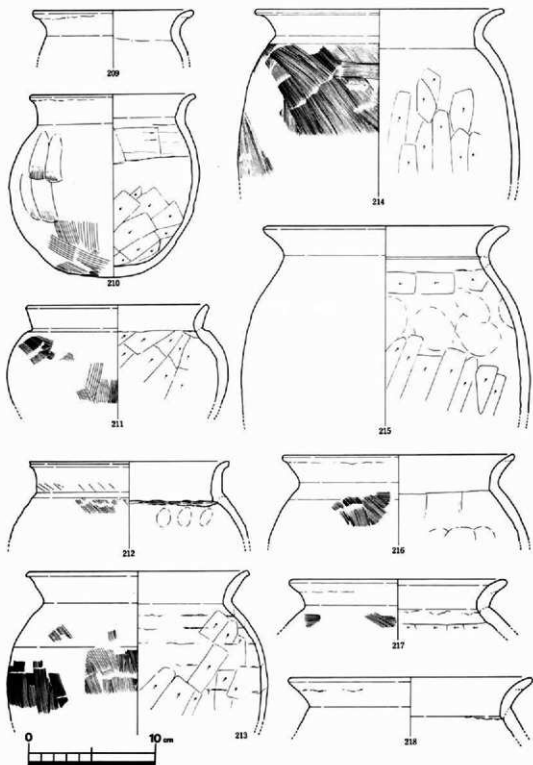
	須 恵 器					土 師 器				食器具計
	坏A蓋	坏A身	高坏A	高坏B	計	高 坏	内黒碗	非黒碗	計	
個体数	14(2)	11	2	1	28(2)	3	4(1)	7(3)	14(4)	42(6)
(%)	50.0	39.3	7.1	3.6	66.6	21.4	28.6	50.0	33.3	22.6

	須 恵 器						貯蔵具計	土 師 器					食器具計
	甕 A	提 瓶	横 瓶	壺	甕 B	甕 別		小鍋A	甕 A	甕 B	甕 C	甕	
個体数	2	4	1	2	2	6	17	8	32(4)	81(4)	1	5	127(8)
(%)	11.8	23.5	5.9	11.8	11.8	35.3	9.1	6.3	25.2	63.8	0.8	3.9	68.3

14号住居埋土土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕



第141图 14号住居跡出土土器(1) (S=1/3)



第142图 14号住居跡出土土器(2) (S=1/3)

坏A、高坏A、高坏B、甌A、提瓶、横瓶、壺、甕B、土師器で高坏、碗、小型鍋A類、甕A、甕B、甕C、甌が確認できる。構成割合は前頁の表のとおりで、食膳具の中での須恵器の割合の高さ、特に坏Aが目立つ。内面黒化する土師器は比較的少なく、そのままの境が主体的である。また、煮炊具では小鍋や甕Aの直火の小型煮炊具が比較的多く存在している。まず、須恵器食膳具であるが、ほとんど坏Aで、蓋・身ともにb類器形主体であるが、蓋に端部面形成するa類が少量見られ、また、ヘラ削りを施すものも少ないながら、定量見られる。これらは古い要素であることは間違いないが、どちらかと言えば、該期の一つのバリエーションと考えたほうが妥当である。内面摩耗痕はあまり目立たない傾向にある。坏A以外では199の高坏A b 2イ類と200の高坏Bの脚部破片程度である。土師器食膳具は大半が破片で、図示できたものなく、内黒境は内湾器形、非黒境は内湾器形と外傾器形がある。土師器煮炊具は復元可能なものはなく、主に口縁部付近の破片のみ図示した。小型鍋A類は207・208いずれも1類器形で、煤などの使用痕跡は見ら

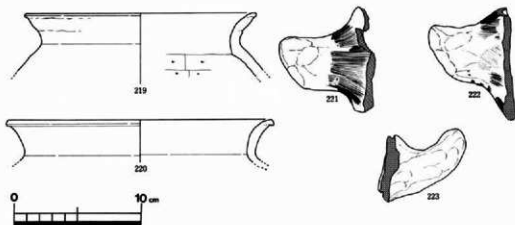
須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考
189	坏A蓋b1	□13.0	c	良好	1/3		196	坏A身b1		c2	不良	1/6	
190	○ b2丸	□12.8,高4.7	b	良	2/3		197	○ b	□11.4	b	○	1/4	
191	○ ○丸	□12.5,高4.7	○	○	1/2	シブ	198	○ ○	□12.1	○	○	1/6	
192	○ ○	□15.0,高3.5	a1	良好	2/3		199	高坏Ab2イ	□11.1	a	良好	1/12	
193	○ ○	□13.2	a2	○	1/5		200	高坏B脚	脚11.6	b	良好	脚片	
194	○ a	□14.4	a1	○	1/10		201	甌Aア	胴9.6,胴高6.5	b1	○	2/3	
195	坏A身b2		a2	良	1/5	量41	202	甕Ba	□22.4	a1	○	口片	
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考		
203	碗d2ア	□14.7,高7.0	A	1/3	内黒	213	甕Ab3	□17.5,胴20.4	A	1/10	内胴黒色		
204	○ b?	□13.6	○	1/8		214	甕Bb(C3)	□19.6,胴22.2	○	1/6	外口胴煤		
205	○ d1ウ	□10.4,高5.0	○	3/4		215	○ a(E1)	□19.4,胴22.8	○	1/8	外被熱		
206	○ b3イ	□11.2,高4.8	○	1/2	内煤帯?	216	○ a(D1)	□18.2	○	1/4	外肩変色		
207	小鍋A1ア	□23.3	○	1/20		217	○ (C1)	□17.2	○		口片		
208	○ 1イ	□22.2	○	1/12		218	○ (A1)	□19.2	○	○			
209	甕Ab2	□12.6	○	1/20		219	○ (C2)	□18.2	○	○			
210	○ ○	□13.0,胴14.9 高14.5	○	4/5	外被熱 内膚黒色	220	甕Ca(A7)	□21.0	○	○	外口煤		
211	○ c3'	□12.1,胴17.4	○	1/8	外胴煤	221	飯把手		○	手片	222同一		
212	○ c4	□15.6	○	1/15	外被熱	222	○		○	○	221同一		
						223	○ ?		○	○			

れなかった。甕類も小破片のみで、図示できたものは極少なく、甕Aでは極小型法量の209のb 2類のみ。破片では口縁部1類か2類器形が主である。甕Bは図示したものを初めとして口縁部器形C1・C2が主体で8個あり、次いでB類が4個、他はA類3個である。

胎土は右の表に記した通り。須恵器ではb類が目立ち、c類はやや少ない傾向にある。土師器ではややD類が目立つ。

須恵器胎土	a1	a2	a	b	c1	c2	c	土師器胎土	A	B	D
食 器 具	5	7	1	17	4	3	2	食 器 具	53	0	0
貯 蔵 具	6	2	1	11	3	0	3	煮 炊 具	1077	16	17
須恵器計	11	9	2	28	7	3	5	土師器計	1130	16	17

14号住居跡出土土器胎土構成



第143図 14号住居跡出土土器③ (S=1/3)

(10) 15号竪穴住居跡出土土器

当住居から出土する土器は大半が覆土上層からのものであり、住居の廃絶時や廃絶直後に廃棄されたような土器群は存在しない。P1出土の227の須恵器坏A蓋a 2類のみがその可能性をもつ半完形品である。内天井面には広く摩耗痕をもち、外天井面には重ね焼き状の火ダスキ痕が見られる。

これ以外はカマド内出土の土器も含め、ほとんどが住居埋没段階に周辺から廃棄された土器なのであるが、少量の土器が床下遺構からも出土している。図示したものでは242の土師器碗c 1ウ類1点のみで（口縁部内面に煤状の黒色化した帯が巡っており、外面には弱い被焼痕跡が認められる）、量は少なく、破片で、須恵器坏A・蓋・甕が計6点、土師器甕胴片が10数点出土する程度である。

さて、埋土土器であるが、これらの土器は他の周辺の竪穴住居跡同様、接合関係をもち、特に12号住居や18号住居と顕著である。位置的に両住居の中間にあるため当然ではあるが、21号土坑

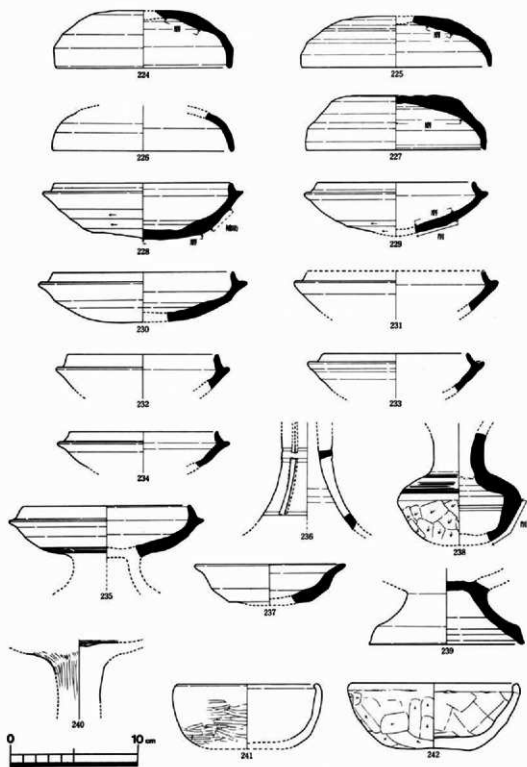
	須 惠 器					土 師 器				食膳具計
	坏A蓋	坏A身	高坏A	塊 ?	計	高坏A	内黒陶	非黒陶	計	
個体数	11(1)	18	2	1	32(1)	3	1	8(1)	12(1)	44(2)
(%)	34.4	56.3	6.3	3.1	72.7	25.0	8.3	66.7	27.3	32.4
	須 惠 器				土師器	貯蔵具計	土 師 器			煮炊具計
	甌 A	壺	甕 罎	小型壺	小鍋B		甕 A	甕 B	甌	
個体数	1	6	8	1	16	2	20	50	4	76
(%)	6.3	37.5	50.0	6.3	11.8	2.6	26.3	65.8	5.3	55.9

15号住居埋土内土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

とも接合しており、埋没過程での土器廃棄の状況を窺わせる。器種については、須恵器で坏A、高坏A、塊状のもの、甌A、壺、甕、土師器で高坏A、塊、小型鍋B類、甕A、甕B、甌が確認できる。構成割合は上記の表のとおりで、食膳具の中での須恵器の割合の高さ、特に坏Aが目立つ。内面黒色する土師器塊は極少なく、黒色処理しない塊が主体であるが、これについても量は少なく、総体的に土師器塊の量は少ない。また、煮炊具では小鍋Aは未確認で、小型鍋Bが少量確認できるのみ。やはり甕Bが主体である。貯蔵具は少なく、壺が目立つ程度。

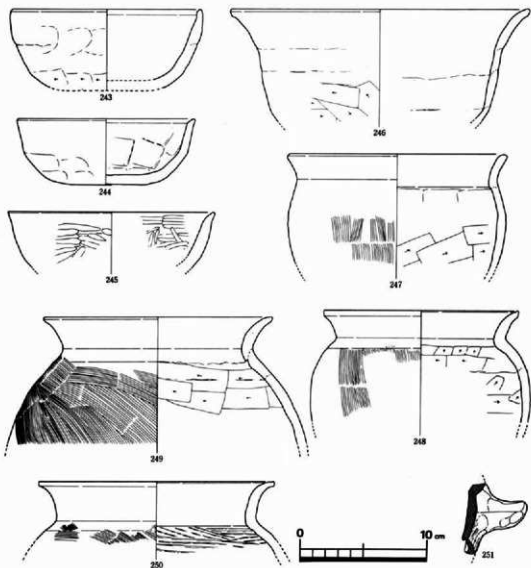
まず、須恵器食膳具であるが、坏Aでは、身が多く、蓋は破片が主で、いずれもb2類である。

須 惠 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
224	坏A蓋b2	□13.6,高4.6	a2	良	1/3		232	坏A身b2	□11.8	a	不良	1/5	
225	◇ ◇	□14.8,高4.0	b	良好	1/3		233	◇ ◇	□10.4	a2	良	1/7	
226	◇ b	□14.1	a1	◇	1/12		234	◇ ◇	□11.6	b	良好	1/6	重焼痕
227	◇ a2	□14.0,高4.3	◇	良	1/2	大層痕	235	高坏Ab2イ	□13.0,坏高3.7	a2	良	1/6	塊1塊
228	坏A身b2	□14.0,高4.4	a1	良好	略完	内当痕	236	高坏Aa脚		◇	良好	脚片	
229	◇ b1	□12.2,高4.2	c1	◇	1/4		237	塊?	□11.8,高3.2	◇	◇	1/12	塊1塊
230	◇ b2平	□14.2,高3.9	a2	良	2/3	内指痕	238	甌A2イ	胴9.6,胴高5.5	a1	◇	1/2	
231	◇ ◇		a	不良	1/10		239	壺脚	肩12.2,肩高4.3	a2	良	脚片	
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
240	高坏a脚		B	脚片	内黒	246	小鍋Ba	□23.6	A	1/10	外頸煤帯		
241	塊c2ア	□11.0,高5.1	A	1/6		247	甕Ab1	□17.1,胴17.2	◇	1/10	外被熱		
242	*c1ウ	□13.1,高5.1	◇	1/2	内口煤	248	◇ b2	□15.4,胴17.3	◇	1/20			
243	*c2エ	□14.7,高6.3	◇	1/8		249	甕Ba(C1)	□16.2	◇	1/12			
244	*e1'ウ	□13.8,高5.2	B	1/3		250	◇ a(B5)	□18.6	◇	1/20	外口煤帯		
245	*e1'ア	□16.3	A	1/12		251	甌把手?		◇	手片			



第144图 15号住居跡出土土器(1) (S=1/3)

身は228・230の完形に近い14cm台の大型法量があるが、口縁部立ち上がりは短く、底面はヘラ切り未調整の粗雑な作りのものである。228の内底面には同心円当て具で突いた痕跡、230の内底面には指で突いた凹凸があり、特徴的である。また、228の外底面には「+」のヘラ記号が記されている。他の身は、だいたい口径13cm以下で、229には削り調整が、234には通常の重ね焼きではない蓋を逆転させた上に身を乗せた重ね焼き痕跡が確認できた。坏A以外では235の高坏A b 2イ類と236の2方向2段スカシをもつ比較的大型な高坏A a 類の脚部破片、そして底面にヘラ切り痕を残す口縁部外反器形的小型製品(237)がある。塊?としたが、食器かどうか不明である。次に、土師器食膳具だが、通常見られる器形が少なく、e 1'類やc 2類が目立つ。外面磨



第145図 15号住居跡出土土器(2) (S=1/3)

きが見られるなど調整も特徴的である。土師器煮炊具は復元可能なものが少なく、主に口縁部付近の破片のみである。246の小型鍋B a類は内外に粘土粒積み痕跡を残すもので、頸部から口縁部付近の外面上には煤帯が巡る。甕Aは2類口縁部器形が主体で、247・248の調整には刷毛が主体的。外面は被熱による剥落が見られる。甕Bはa類器形主体で、口縁部器形はCが10個と最も多く、その中でもC1・C3が目立ち、Aが4個、Bが2個、Eが1個と続く。煮炊具は全体的な器形が分かるものが少なく、破片の廃棄という感じのものである。

胎土は右の表に記した通り。須恵器ではa類が主体的で、c類は少ない。土師器では他と大差無く、D類が少ないながらも定量ある。

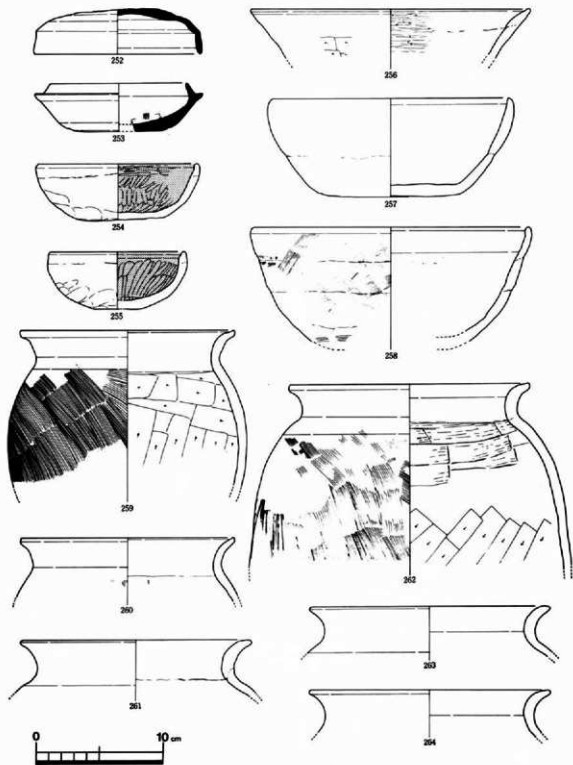
須恵器胎土	a1	a2	a	b	c1	c2	c	土師器胎土	A	B	D
食 膳 具	10	19	11	11	4	2	5	食 膳 具	37	2	0
貯 蔵 具	4	10	0	7	2	0	0	煮 炊 具	695	2	4
須恵器計	14	29	11	18	6	2	5	土師器計	732	4	4

15号住居跡出土土器胎土構成

(11) 16号壑穴住居跡出土土器

当住居廃絶時に直接伴う土器群は存在しないが、廃絶後すぐに廃棄されたと予想される一括性の高い土器群が定量ある。図示した252・253の須恵器坏Aの蓋と身、254・255の土師器甕、257・258の土師器小型鍋A、259の土師器甕A、262の土師器甕Bがそれに該当するわけであるが、カマド内からのものは259のみで、それ以外はその周辺の床面から出土している。完形に復元できるものが食膳具で多く、煮炊具でも半分程度まで復元可能な大きな破片が多い。まず、食膳具であるが、須恵器坏Aは蓋・身ともにb2類の平たいタイプで、法量も類似するが、胎土は異なっており、セット関係にはないかもしれない。ただ、蓋には摩耗痕跡はなく（身には底面に顕著に確認できる）、蓋として使用されていた可能性は高い。252の天井外面には「Ⅱ」のヘラ記号が記されていた。土師器甕は2個とも内面黒色で、254はb1イ類、255はd1イ類であるが、両者ともよく似た法量を呈しており、類似性は高い。いずれも半完形品である。次に、土師器煮炊具であるが、小型鍋A類は257が2カ類、258が1オ類で、いずれも半分以下の破片である。257の器面の摩滅が著しく、使用痕跡は分らないが、258の外面上半には厚く煤が付着している。内面には何も観察できていない。甕は259のA a 2と262のB a (B1)で、両者とも外面頸部の横ナデは斜方向の刷毛の後に施しており、特徴的である。また、262では内面の縦削りが上から下に向かって施されており、通常のものとは逆になっている。最終的に縦方向の削り上げを行わなかった可能性もあるが、やや特殊である。両者とも外面に薄く煤が着く程度である。

以上の一括土器を除くと、あまり土器の出土量は多くなく、図示できるものは少なかった。そして、その中でも床下遺構から出土した土器と住居の埋設過程で廃棄ないしは流れ込んだ埋土土器とに分けられるわけであるが、前者の土器は、図示した263の土師器甕B以外は、須恵器で坏A 2点と甕1点、土師器で甕2点と甕B 3点のみで、量的には少ない。埋土土器は定量あるので



第146图 16号住居跡出土土器(1) (S=1/3)

あるが、これについても、図示できたものは256の土師器高坏A b類、260の土師器甕A a 2類、261・264の土師器甕B、265の甕b⁴類のみであり、いずれも破片復元である。これらも含め器種構成の量を提示したのが以下の表であるが、総合的に出土量は少なく、特に須恵器の少なさが目につく。他の遺構との接合もほとんど確認できておらず、当住居の南東側に存在する堅穴住居跡群とは別の様相である。

	須 恵 器			土 師 器					食膳具計
	坏A蓋	坏A身	計	高坏A	高坏B	内黒魂	非黒魂	計	
個体数	1(1)	2(1)	3(2)	3	1	1(3)	4	9(3)	12(5)
(%)	33.3	66.7	25.0	33.3	11.1	11.1	44.4	75.0	26.1

	須 恵 器		貯蔵具計	土 師 器					煮炊具計
	甕 B	甕 別		小鍋A	甕 A	甕 B	甕 C	甕	
個体数	3	7	10	0(1)	5(1)	16(5)	1	2	24(7)
(%)	30.0	70.0	21.7	0.0	20.8	29.6	4.2	8.3	52.2

16号住居埋土内土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考
252	坏A蓋b2平	□13.0,高3.5	b	良好	2/3	見記号	253	坏A身b2	□10.7,高3.8	a1	良	1/4	

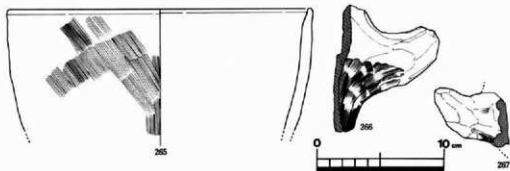
土 師 器 器 種											
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考
254	甕b1イ	□12.5,高4.5	A	4/5	内黒	261	甕B(E1)	□18.2	A	□片	
255	*d1イ	□11.6,高4.5	B	3/5	*	262	*a(B1)	□19.0,胴25.4	*	1/5	外胴薄煤
256	高坏Ab	□22.0	A	坏片		263	* (E1)	□19.0	*	□片	
257	小鍋A2カ	□18.6,高7.8	B	1/4		264	* *	□19.1	*	*	
258	* 1オ	□21.6	A	2/5	外上半煤	265	甕b ⁴	□23.5	*	胴上	外一部煤
259	甕Aa2	□16.8,胴18.8	*	1/10	外中位煤	266	甕把手		*	手片	
260	* *	□16.8	*	□片		267	甕C把手?		*	*	

胎土は右の表に記した通り。

須恵器ではa類、特にa 1類が主体的で、b類、c類は少ない。土師器は少ないながらもD類が確認される。

須恵器胎土	a1	a2	a	b	c	土師器胎土	A	B	D
食 膳 具	7	1	1	1	2	食 膳 具	30	2	0
貯 蔵 具	6	1	4	2	1	煮 炊 具	324	2	2
須恵器計	13	2	5	3	3	土師器計	354	4	2

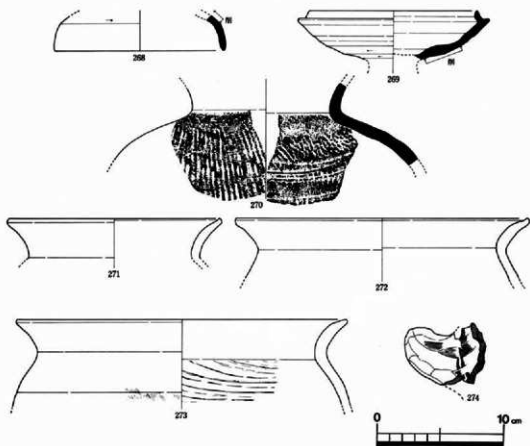
16号住居跡出土土器胎土構成



第147図 16号住居跡出土土器② (S=1/3)

(12) 17号竪穴住居跡出土土器

当住居は竪穴の掘り込みが浅いとの、明瞭な壁面を確認しきれていないことから、住居プランを明瞭に確認していない。そのため、ここで示すものはその周辺の包含層土器も含めた形で報告する。総体的に出土量は他の竪穴住居跡の2割程度で、カマド周辺に集中している。図示したものは主にカマド周辺出土のもので、須恵器は坏A、高坏A、壺、甕である。坏A蓋はb類器形の



第148図 17号住居跡出土土器 (S=1/3)

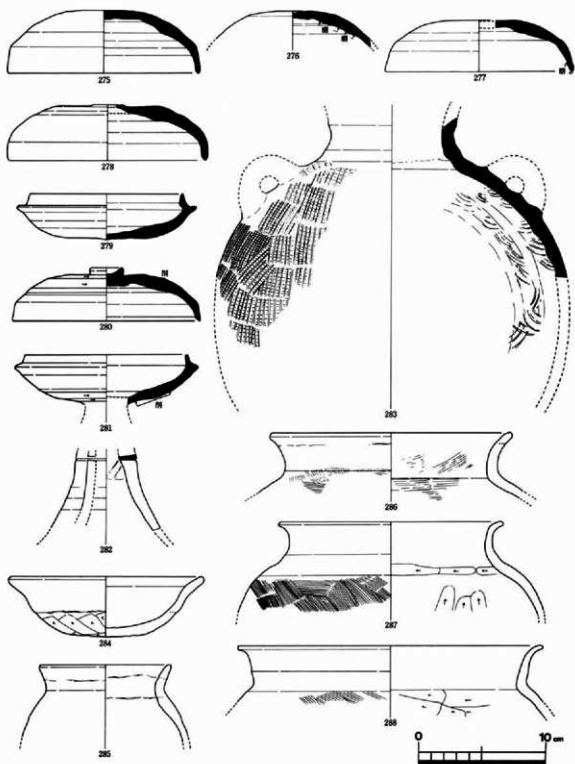
み3個体で、図示した268には削りが施される。坏A身も底部削りをもつもので、1個体確認。高坏A類は図示した低脚のb類のみ1個体で、内面には当て具による押圧痕が見られる。壺は16号住居でも出土している脚台の破片1個体。甕は図示した外面Ha類、内面Da当て具の中型B類以外にも、3個体出土しており、いずれもB類である。胎土は食膳具がa1類5、a2類1、b類2で構成される。次に、土師器であるが、器種は魂、小型鍋A類、甕A、甕B、甕C、甌がある。魂は図示できたものはないが、内黒が2個体、非黒が3個体で構成される。小型鍋A類も図示できたものはないが、2個体出土。甕はAが図示した271の1個体のみ。Bは10個体。Cは図示した272・273である。甕Cの使用痕跡は272では摩滅しているためよくわからないが、273では胴部上位から口縁端部まで煤が厚く付着していた。甌は図示した把手のみの破片である。胎土は、食膳具がAのみ9、煮炊具はA-169、B-2、D-1である。

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
268	坏A蓋b1	□13.2	a1	良好	1/10		270	甕B	類11.6	a1	良好	胴片	
269	高坏Ab1ア	□13.2, 坏高3.8	〃	良	1/4			外Ha内Da					
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考		
271	甕A2	□16.7	A	□片		273	甕Ca(C1)	□26.0	A	1/20	外全煤		
272	甕Ca(C4)	□23.2	〃	〃	内外剥落	274	甌把手		〃		手片		

(13) 18号壜穴住居跡出土土器

床面直上からの出土で、当住居廃絶時に伴う可能性のある土器が2個体あるだけで、他は住居廃絶後の埋没過程において、周辺から廃棄ないしは流れ込んだ埋土土器である。さて、床面出土の土器であるが、275の須恵器坏A蓋b2類と284の非黒色土師器魂e2エ類はいずれも完形復元できるもので、どちらにも焼き歪みが確認され、摩耗痕などは確認されなかった。

上記2個以外は、埋土土器となるが、出土量はあまり多くなく、特に土師器の量が他の住居に比べて少ない。しかし、遺物量の割には、他の遺構との接合関係は多く、主に須恵器であるが、隣接する15号住居の他に、離れた区域にある19号住居、21号住居とも確認され、特に19号住居とはよく接合している。出土器種・構成は以下のとおりで、個体数で見ると、土師器甕が多いように見えるが、胴部破片は少なく、多くの破片が接合している須恵器甕が須恵器の破片数を増やしており、出土量の実感としては、半々に近い感じを受けている。まず、食膳具であるが、図示できたものは須恵器のみで、土師器は破片のみ、高坏Bの脚部と内黒魂のb類・e類器形がある。須恵器は坏Aと高坏Aのみで、坏Aは蓋・身ともにb2類を呈す。あまり顕著な摩耗痕は見られず、277の蓋の口縁部内面のみ確認できた。277の蓋の天井部内面の周縁盛り上がり部分に連続



第149图 18号住居跡出土土器 (S=1/3)

	須 恵 器					土 師 器				食 膳 具 計
	坏A蓋	坏A身	高坏A蓋	高坏A身	計	高 坏	内黒碗	非黒碗	計	
個体数	3(1)	1	1	2	7(1)	2	2	0(1)	4(1)	11(2)
(%)	42.9	14.3	14.3	28.6	63.6	50.0	50.0	0.0	36.4	23.9

	須 恵 器			貯蔵具計	土 師 器			煮炊具計
	甌 A	提瓶B	甕 朋		甕 A	甕 B	甕 C	
個体数	1	1	5	7	2	25	1	28
(%)	14.3	14.3	71.4	15.2	7.1	89.3	3.6	60.9

18号住居埋土内土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

した指押さえ痕が、279の底部外面にはスノコ状痕が確認できる。高坏Aはa1類の蓋と、2段3方スカシの高脚a類、低脚で基部細目のb1ア類があり、蓋の内面天井部には広い範囲で摩擦痕が確認できる。坏A蓋と同様に、蓋としての機能よりも逆転させて身として使用するケースが多かったであろう。貯蔵具は大半が須恵器甕破片であるが、甌A2イ類の破片と図示した提瓶B類がある。提瓶B類は叩き整形する大型製品で、破片では他の遺構でも出土しているが、図示できたのはこれ1個体のみである。他は土師器煮炊具となるが、大半が口縁部破片で、器形復元可能なものはない。大半が甕Bなのであるが、287のような口縁部器形B2が多く、288の甕Cにおいても同様の器形となっている。また、当器形においては、外面の刷毛調整後の頸部横ナデ調整、内面頸部での横方向削り調整でも共通しており、器形と技法の共通性が指摘できる。なお、胎土は右のとおり。

須恵器胎土	a1	a2	b	c	土師器胎土	A
食膳具	4	4	1	0	食 膳 具	8
貯蔵具	2	5	2	2	煮 炊 具	61
須恵器計	6	9	3	2	土師器計	70

18号住居跡出土土器胎土構成

須 恵 器 器 種							
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	
275	坏A蓋b2丸	□15.0,高5.0	a1	良好	略完	歪み	
276	坏A蓋2丸		a2	良	1/3		
277	〃 b2	□14.7,高4.1	b	良好	1/2	内指押	
278	〃 〃	□15.5,高4.4	a2	不良	1/2		
279	坏A身b2	□12.0,高3.6	〃	良好	1/2	甕の子	

土 師 器 器 種							
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	
284	甕c2エ	□15.4,高4.8	A	1/2	歪み		
285	甕Ab3'	□10.4	〃	1/19	外強被熱		
286	甕B(C1)	□19.0	〃	1/13			

280	高坏A蓋a1	□14.7,高4.2	a2	良	1/2		
		つまみ2.7					
281	高坏Ab1ア	□12.8,坏高3.7	〃	〃	1/10		
282	〃 a脚		a1	不良	脚片		
283	提瓶B	頸10.8,胴28.0	c	〃	1/5	接19位	

(14) 19・23号竪穴住居跡出土土器

23号住居廃絶後間もなく、19号住居が重複して掘られているため、23号住居の床面にはほとんど遺物が残っておらず、PVI出土の322～324のみが唯一伴う可能性をもつものである。ただし、使用された土器という意味ではなく、炭化材や焼土と一緒に出土していることからの同時廃棄性である。これらはいずれも土師器甕Bで、322が1/6の大きな破片である以外は1/12以下の破片である。322の外面はほぼ全体には厚く煤が付着しており、内面のコゲは確認できなかった。これに対し、後に掘られた19号住居には、カマド内とカマド左壁際に一括の土器群があり、住居廃絶後に一括して土器廃棄されたような出土状況を呈す。須恵器では291・294の坏A身と305の壺A、土師器では313の小型鍋A、316の甕A、318・325の甕B、326の甌で、量としてはさほど多くはないが、カマド内を中心として、まとまった形で廃棄されている。完形に復元できるものは少ないが、いずれも大きな破片が多く、半完形のものが目立つ。まず、須恵器坏A身であるが、いずれも半完形品で、器形調整はb2類である。須恵器壺Aは胴部下半に叩き成形をもつ甕状の丸底のもので、多くの破片からの接合で、3/4まで復元している。次に、土師器小型鍋Aであるが、4エ類の半完形品で、外面底部が被熱のため赤変している。煮炊具として使用したためであろう。土師器甕Aはb3'類。土師器甕Bと甌はカマド内からの出土で、甕Bは多くの破片からの接合で、1/4まで復元している。外面全体に煤の痕跡、内面胴部上位にはコゲ帯が巡る。甌は胴部中位がないが、口縁部付近と底部付近が残るもので、内外面が剥落していた。

以上の住居に伴う土器を除くと、19・23号住居の埋設過程で廃棄ないしは流れ込んだものとなるが、これら埋土土器以外に、床下遺構に混在する土器がある。図示したものでは303の須恵器甌の2イ類口縁部破片、320の土師器甕B a類の口縁部破片、327の土師器甌把手片がそれで、他に須恵器坏A破片や土師器小型壺破片、土師器甕胴部破片が数点ある。量は概して少なく、埋土土器と接合するものが多い。さて、埋土土器であるが、19号住居と23号住居との埋土内土器間で接合するものがあり、区分することは困難で、一括のものとして扱うこととする。周辺遺構との接合は、比較的多く、特に須恵器に顕著で、当住居周辺では18号住居・21号住居・21号土坑・26号土坑と、また、やや離れたところでは16号土坑とも接合している。16号土坑については例外的

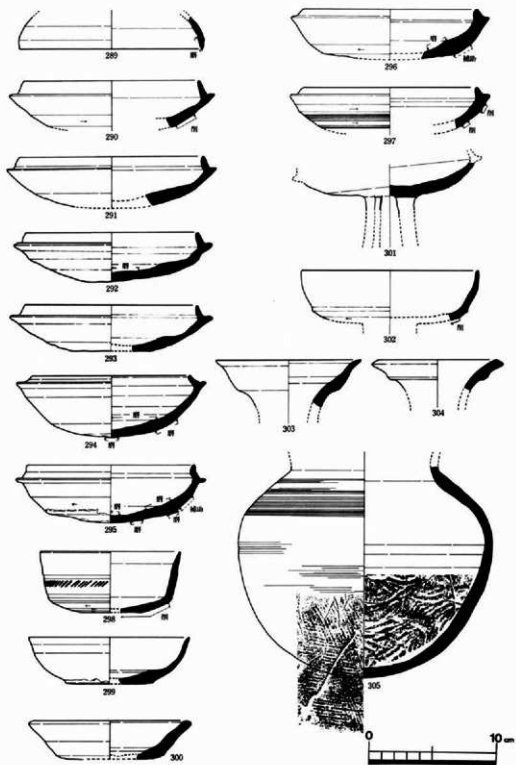
	須 恵 器								土 師 器				食器具計
	坏A蓋	坏A身	甌 A	鍋	高坏A	高坏B	すり鉢	計	高 坏	内黒甌	非黒甌	計	
個体数	6	21(2)	1	2	5	2	1	38(2)	9	4	1	14	52(2)
(%)	15.8	55.3	2.6	5.3	13.2	5.3	2.6	73.1	64.3	28.6	7.1	26.9	30.6
	須 恵 器							土師器	貯蔵具計	土 師 器			煮炊具計
	甌 A	提 瓶	壺	甕 A	甕 C	甕 別	小型壺		小鍋A	甕 A	甕B	甌	
個体数	2(1)	4	6(1)	1	2	11	5(2)	31(4)	0(1)	13(1)	71(8)	3(1)	87(11)
(%)	6.5	12.9	19.4	3.2	6.5	35.5	16.1	18.2	0.0	14.9	81.6	3.4	51.2

19・23号住居埋土内土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

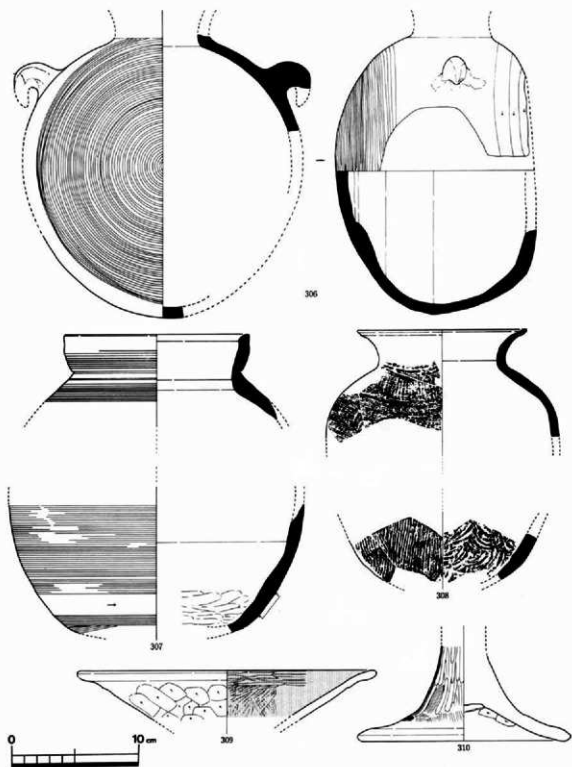
であるが、周辺遺構との接合については、埋没段階での同時性を示唆するものであり、北側の12号住居を中心とする竪穴住居群に対比可能な竪穴住居群であると類推する。次に器種についてだが、表の通り、食膳具では須恵器が圧倒的主体で、中でも特に坏A身の割合が高い。鍋や甕が定量あることも注目される。また、土師器では甕が少なく、逆に高坏の割合は高い。貯蔵具では壺と提瓶の定量存在と土師器小型壺の定量存在。土師器煮炊具では甕が主体的で、その他の器種は少ない。

まず、須恵器食膳具であるが、ほとんど坏Aで、特に身が多く、蓋はあまり目立たない。どちらもb2類で、口径は身で13cm台が主流。内面摩耗痕は身のみではあるが、底部付近に見られる

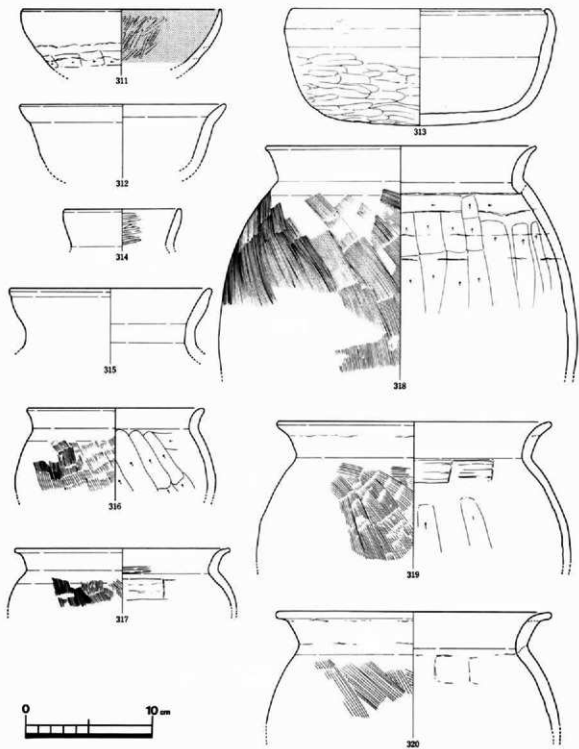
須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
289	坏A蓋b	□14.4	a	良好	1/5		299	甕Ab	□12.6,高3.7	c	良好	1/2	様床下
290	坏A身b1	□13.7	o	o	1/5	接22住	300	坏?台?	□12.8,高3.0	a2	o	1/6	
291	o b2平	□14.4	c	不良	1/5		301	高坏Aa		a	o	1/10	
292	o o	□13.4,高3.9	a2	良好	2/3	接18住 ・21住	302	高坏B1	□14.0	o	o	1/10	
293	o o	□13.5,高3.7	o	o	1/3		303	甕2イ	□11.5	a1	不良	□片	
294	o b2丸	□12.4,高4.9	a1	o	1/2		304	o	□10.4	o	o	o	
295	o b2	□13.2,高4.7	o	良	1/2		305	壺A	胴20,胴長16.4	a2	良好	3/4	
296	高坏Ab2	□13.6,坏高3.9	b	o	1/2	接21住	306	提瓶Ab	胴長22.0 胴幅15.7	o	o	1/4	様床下
297	o b2イ	□13.6	a1	o	1/5		307	壺Ba	□14.5,胴23.4	a1	不良	1/6	
298	甕	□11.0,高4.8	d	良好	2/5		308	甕A	□13.5,胴18.0	c	良	o	様床下
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考		
309	高坏Aa1	□23.6	A	坏片	内黒	319	甕Ba(C1)	□21.8,胴25.0	A	1/6			
310	o b脚	脚16.8	o	1/3		320	o o (B1)	□21.8	o	1/10			
311	甕b1イ	□15.4	o	1/4	内黒	321	o o (E1)	□16.0	o	1/15			
312	甕Ae	□16.2	o	1/8	内黒?	322	o o (C4)	□19.3	o	1/6	外煤、 23住床面		
313	小鍋A4エ	□20.1,高9.2	o	1/4	赤変	323	o (A1)	□20.1	o	1/18	23住床面		
314	小型壺a1	□9.0	o	□片		324	o d (D5)	□22.4	o	□片	o		
315	壺?	□16.0	o	1/20		325	甕B底		o	1/15	外煤内赤		
316	甕Ab3?	□13.8,胴15.8	o	1/10		326	甕b4(外1内1)	□25.0,底11.2	o	1/10			
317	o c2	□17.0,胴18.0	o	1/20		327	甕把手		o	手片			
318	甕Ba(B2)	□21.4,胴28.0	o	1/4	外煤内焦げ	328	o		B	o			



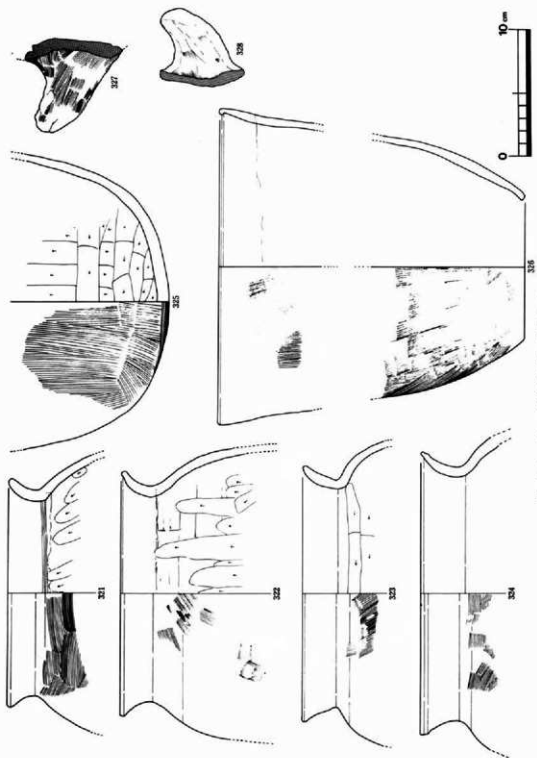
第150图 19号·23号住居跡出土土器(1) (S=1/3)



第151图 19号·23号住居跡出土土器(2) (S=1/3)



第152图 19号·23号住居跡出土土器(3) (S=1/3)



第153圖 19号・23号住居跡出土器(4) (S=1/2)

ものが多い。292の底部外面には「X」のヘラ記号がある。高坏は有蓋低脚の高坏A b 2類と2段3方スカシの脚部をもつ有蓋高脚の高坏A a類がある。前者の坏部は口縁部立ち上がりと器内の厚さに特徴があり、カキ目が施されるものが目立つ。甕は坏A蓋を逆転させたようなA b類で底部平坦面を形成することと口縁端部をシャープに引き延ばす特徴がある。甕にはこれ以外に金属器模倣的な鏡があるが、これは底面に丁寧な削りを施したり、体部に刺突文をもつなどとは違う優品であり、胎土も精選されている（d類胎土）。重焼き痕跡から有蓋器種と思われるが、どのような蓋が付くかは不明である。以上の図示したものの他に在地の胎土で鏡的な器形のものも1点ある。また、食膳具かは不明であるが、内面に軸が付着し、外面に窯の砂が付着した壺脚部をひっくりかえしたような厚手の300があるが、焼台的でもあり、用途は不明。次に、土師器食膳具であるが、高坏が主体で、特に高坏A類が主体である。坏部内面を黒色処理するものが多く、器形は口縁部外反の浅いものが目立つ。類減少なく、図示できたものは内黒の311の1点のみ。破片でも数は少なく、非黒色のものは口縁部破片が1点だけである。

貯蔵具は、通常の須恵器に加え、土師器の小型壺が定量ある。図示したa類が主体的であるが、長頸を呈すc類もあり、内面黒色処理するものが主体的である。須恵器は提瓶、壺が目立つ。提瓶は図示した半完形品に加え、もう1個半完形品があるが、残存部位が中途半端で図示できなかった。タイプはA b類と同様のものである。壺は図示した口縁部短かいB a類の他、B b類的なものもあるが、大半は胴部破片であり、どのような器形になるかわからないものである。甕は小型の甕Aがあるが、当遺跡で図示できたものは308の1点のみであり、特殊な法量のものであろう。叩きは外面がH a類、内面がD a類である。甕胴部破片の当て具ではほとんどD a類で、D b類は1個だけであった。

次に、土師器煮炊具であるが、埋土出土で図示できたものは、甕A 2点と甕B 2点のみで、その大半は小破片である。甕Aでは小型法量の鉢状器形を呈すe類があり、これについては内外横ナデ調整であった。この器種はかなり小型である点と煮炊具痕跡がないことから、甕Aに含めるべきものではないかもしれないが、食膳具としては扱えず、当器種に含めた。内面底部付近にのみ煤状のものが部分的に付着している。口縁部器形では3類と4類が多いようである。甕Bの口縁部器形ではC類が19個で圧倒的の主体を占め、次いでA類の5個、B類の4個。C類の中ではC1が9個と最も多く、他はC2が3、C3が1、C4が3、C5が2、C6が1と大差ない。

胎土は右の表のとおり。須恵器ではa類特にa 1類が圧倒的に多く、食膳具でも貯蔵具でも主体を占める。b類・c類は少なく、他の遺構のものに比べて特に顕著である。土師器は他の遺構と同様、A類主体の構成で、ややD類が目立つ存在か。B類も多い傾向もある。

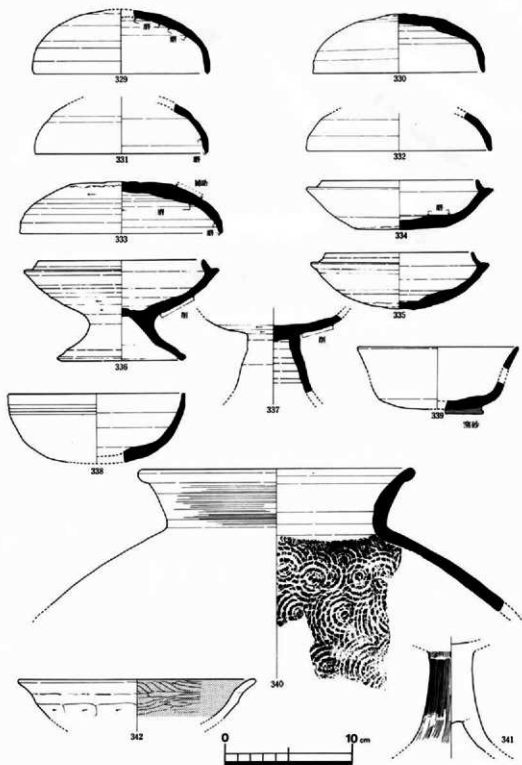
須恵器胎土	a1	a2	a	b	c1	c2	c	d	土師器胎土	A	B	D
食膳具	34	13	2	7	1	2	3	1	食膳具	51	0	0
貯蔵具	23	4	1	8	2	0	2	0	煮炊具	172	16	9
須恵器計	57	17	3	15	3	2	5	1	土師器計	223	16	9

19・23号住居跡出土土師器胎土構成

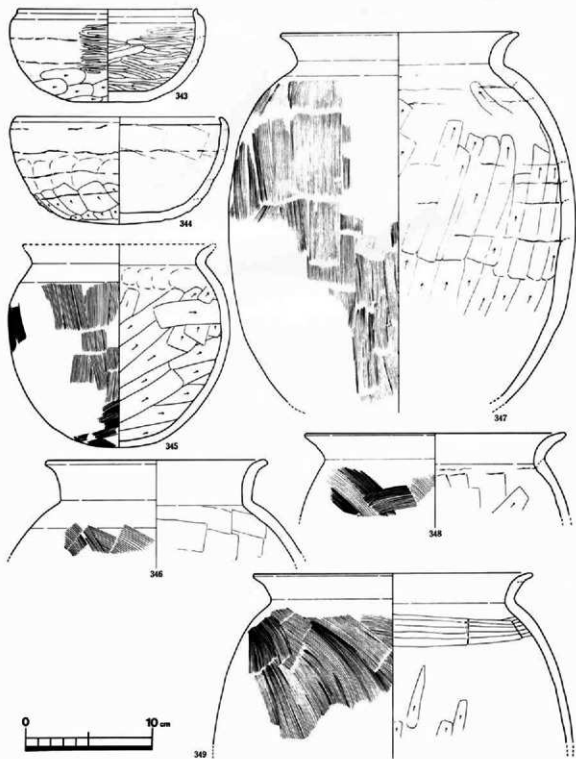
(15) 21号竪穴住居跡出土土器

土器の出土状況から、当住居廃絶時に直接伴うと判断可能な一括廃棄土器群が、カマド内とその周辺、P2奥付近、住居中央とその右側において定量存在しており、図示したものの多く、特に土師器ではその大半がこれに該当する。食膳具では須恵器で、329・330の坏A蓋、334の坏A身の3点、土師器で、343の碗1点のみで、いずれも床面からの出土で半分以上の完形に近いものばかりである。須恵器坏Aは蓋・身ともにb2類で、蓋は丸形をしており、身は平形をしている。土師器碗はd2類で、内外面磨きが入る丁寧な調整のもので、内黒ではないが、本来は内黒となるべき器形である。貯蔵具で該当するものはなく、他は全て土師器煮炊具で、344の小型鍋A類、345・350の甕A、346・347・349・351の甕B、352の甕Cが該当する。かなり細かな破片となっているものが多いが、接合できており、大半は1/2以上まで復元できている。まず、小型鍋A類であるが、1イ類としたもので、法量的には碗の大きめの法量と区別しにくい、外面には煤、内面には体部上位にコゲ帯痕跡があり、煮炊具での使用痕跡が残る。甕Aは345の小型タイプで、外面胴中位以下煤、内面下半薄いコゲ状の使用痕跡が、350のやや大型タイプでは外面に被熱による剥落と赤変が認められる。甕Bと甕Cでは完形に近いものが出土しており、甕Bでは347と351の2個体、甕Cでは352の1個体、どちらも薄くではあるが、使用痕跡が残る。347のa類器形は、通常の甕Bの胴部器肉の倍程を呈す厚手の製品で、通常内面整形で見られる横方向のヘラナデはなく、最終的な凝削りのみで、粘土積み痕跡を残すものである。外面には胴部中位以下で薄く煤が付き、内面には胴部中位以下に薄くコゲ状のものが一部見られるが、コゲついたという感じではない。これに対し、351では外面の煤の状態はほぼ同じではあるが、内面では底部付近で部分的にコゲツキ状の黒褐色部分が見られるもので、胴部内面にヘラナデが施される粘土積み痕跡を残さない通常の厚さの器肉をもち、前者とは異なっている。以上の甕Bに対し、甕Cでは外面に明瞭な煤の痕跡を残す点で異なり、薄い煤は胴部上位から、胴部下位付近以下では厚い煤が付着している。ただ、内面の状態は347に近く、はっきりとしたコゲの痕跡はなく、火に掛ける状況は違ったであろうが、内容物はそう違わなかったように思う。甕Cの器形はc類で、調整等は通常の甕Bと大差ないものである。これ以外では、346の甕B c類器形、349の甕B a類器形があるが、どちらも使用痕跡は確認できない。

以上の住居に伴う土器を除くと、住居の埋没過程で廃棄ないしは流れ込んだ埋土土器か、床下遺構に混在する床下土器となるが、床下土器は348の甕B b類を図示した程度で、出土量は極少ない。住居廃絶に伴うような一括土器群以外の大半は埋土土器となるわけだが、大型の住居の割にはその量は少なく、他の遺構と接合する土器もあまり多くはない。接合資料は全て須恵器で、19・23号住居・26号住居・18号住居とあり、19・23号住居で述べたような同時期埋没の住居群が想定される。さて、器種についてだが、表に示した通り、食膳具では須恵器が主体で、特に坏A蓋の割合が高い。これに対し、坏A身の量は極少なく、割合がひどく偏っている。土師器食膳具は19・23号住居ほどではないが、少なく、やはりここでも高坏が目立っている。貯蔵具は全体量



第154图 21号住居跡出土土器(1) (S=1/3)



第155图 21号住居跡出土土器(2) (S=1/3)

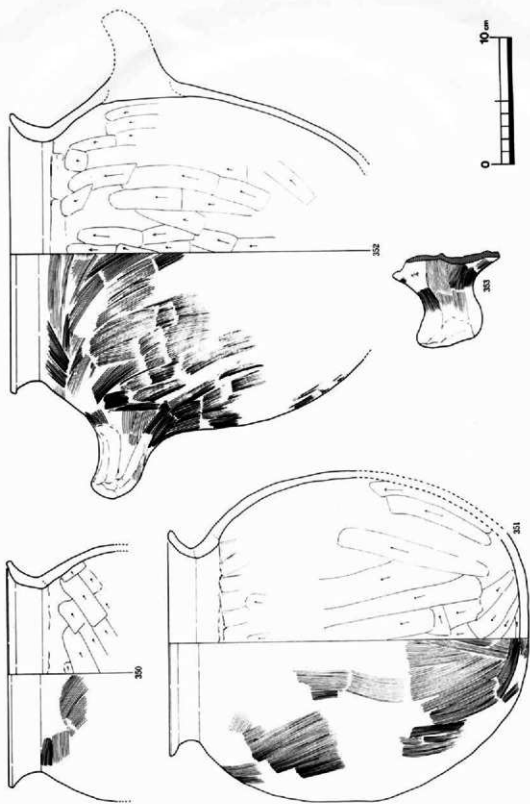
	須 恵 器						須 恵 器				食膳具計
	坏A蓋	坏A身	甕 A	高坏A	高坏B	計	高 坏	内黒魂	非黒魂	計	
個体数	12(2)	1(1)	1	3	1	18(3)	5	4(1)	4	13(1)	31(2)
(%)	66.7	5.6	5.6	16.7	5.6	58.1	38.5	30.8	30.8	41.9	33.3
	須 恵 器			貯蔵具計	土 師 器					煮炊具計	
	甕 A	甕 B	甕 別		小鍋A	甕 A	甕 B	甕 C	飯		
個体数	1	1	3	5	5(1)	0(2)	49(6)	1(1)	2(1)	57(11)	
(%)	20.0	20.0	60.0	5.4	8.8	0.0	86.0	1.8	3.5	61.3	

21号住居埋土土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

が少なく、煮炊具は、個体数は多いが、甕Bに集中し、特に甕Aの少なさが目立つ。

まず、須恵器食膳具であるが、ほとんど坏A蓋で、身は少ない。333の蓋の内面天井において顕著な摩耗痕があり、身として使用された可能性が高い。このような摩耗痕の顕著な物は他に2例ほどあり、蓋を身とし使用したための坏A身の少なさであるかもしれない。ただ、図示した335の坏A身では摩耗痕は確認できず、摩耗痕イコール身ということでもなく、この器種の取り扱いには慎重を要する。高坏では坏部刺突文をもつ無蓋B類が1点ある以外は、有蓋低脚で、いず

須 恵 器 器 種																		
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考					
329	坏A蓋b2丸	□13.7,高5.1	b	良	1/2		336	高坏Ab1ア	□13.0,脚10.1 高7.9,坏高4.3	a2	良	4/5	蓋み					
330	〃	□13.4,高4.7	〃	不良	2/3		337	〃		a1	良好	1/6						
331	〃 b丸	□13.5	a2	良	1/10		338	甕Ac	□13.8,高5.5	a2	良	1/4	埋10E					
332	〃 b	□14.4	〃	良好	1/10		339	坏B身a1	□12.7,高4.9	b	良好	1/10	埋土着					
333	〃 b2	□15.8,高4.1	a1	〃	3/4		340	甕Ba	□22.0	a1	〃	胴上 破片	埋10E -18E					
334	坏A身b2	□12.4,高3.9	〃	良	完形													
335	〃 b2丸	□11.6,高4.5	a2	〃	2/3													
土 師 器 器 種																		
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	
341	高坏Ab脚		A	脚片		349	甕Ba(C2)	□24.1,胴26.6	A	1/12		350	甕Ab2	□17.7,胴20.2	〃	1/12	外被熱	
342	甕c3イ	□18.8	〃	1/10	内黒	351	甕Ba(E1)	□17.7,胴26.0 高28.4	〃	1/2	外厚煤 内一部コゲ	352	甕Cc(D2)	□22.2,胴26.8 手径38.5	〃	2/3	外厚煤 内コゲ?	
343	甕d2ア	□14.0,高7.3	〃	3/5	未内黒	353	〃 把手		〃	手片								
344	小鍋A1イ	□16.0,高8.5	〃	2/5	煤コゲ帯													
345	甕Ab3	胴17.4,高16.2	〃	1/2	煤コゲ													
346	甕Bc(B1)	□17.6	〃	1/8														
347	〃 a(E2)	□19.0,胴28.0	〃	〃	薄煤コゲ													
348	〃 b(〃)	□20.6,胴21.5	〃	1/20														



第156图 21号住居跡出土土器(3) (S=1/3)

れも基部の細い1類、337はやや脚が長めとなるようである。甕は体部上位に沈線状の浅い条が入るもので、やや深身を呈す。内面に摩耗痕は認められない。土師器食膳具は、図示できたものは高坏A類の脚部片と甕e類のみで、破片で高坏脚部と甕のd2類、b類、e類がある程度である。貯蔵具は、図示した340の須恵器甕B以外は須恵器甕の破片と須恵器甕胴部破片のみで、まとまった出土はない。土師器煮炊具も同様で、主に甕Bの小破片であり、図示できたものは甕Cの把手片のみ。甕Bの口縁部器形別個数では、A1-1、A2-1、A4-1、B1-1、B4-1、C1-5、C2-7、C3-6、C4-1、C5-2と、C類が圧倒的多数を占める。

胎土は右の表のとおり。須恵器ではa2類とb類が目立ち、c類は少ない。土師器ではA類主体であるが、D類が定量存在。当遺跡で極少量しか確認できないE類が存在する。器種は甕Bの胴部破片で、細かな刷毛が施される。

須恵器胎土	a1	a2	a	b	c1	c	土師器胎土	A	D	E
食膳具	4	16	0	4	1	1	食膳具	32	2	0
貯蔵具	2	3	1	6	1	1	煮炊具	945	7	6
須恵器計	6	19	1	10	2	2	土師器計	977	9	6

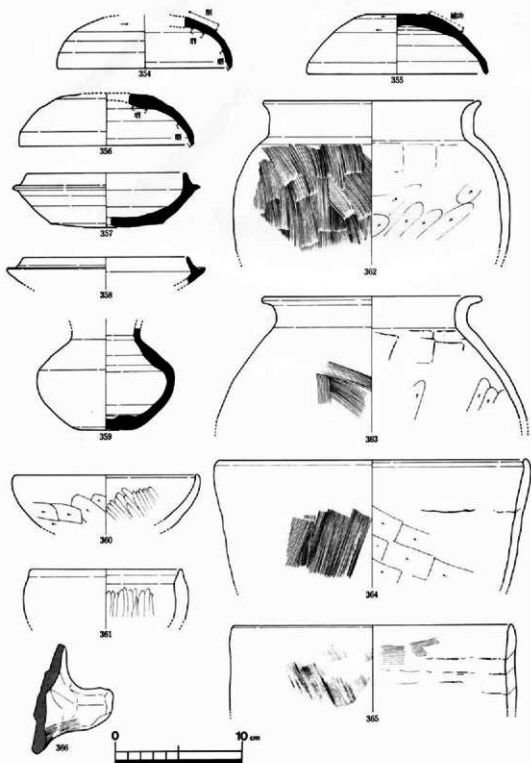
21号住居跡出土時胎土構成

(16) 25号壘穴住居跡出土土器

当住居廃絶直後に一括廃棄されたような土器がカマド周辺に数個体存在しているが、他は全て住居廃絶後の埋没過程において、周辺から廃棄ないしは流れ込んだ埋土土器である。さて、カマド周辺出土の土器であるが、須恵器坏Aと土師器煮炊具で、355・356の坏A蓋b2類、363の甕Bc類、364の甕b4類、365の甕a1類が該当する。完形に近いものはないが、当住居では大型の破片である。土師器煮炊具には外面に煤の付着が見られるがコゲのような痕跡は見られない。上記の土器以外は、埋土土器となるが、出土量は少なく、他の住居跡の大体1/3程度で、他の遺構との接合も見られない。出土器種・構成は以下のとおり。まず、食膳具であるが、土師器の率が高いが、図示できたものは須恵器が多い。須恵器は坏Aが大半で、図示した天井部削りの坏A蓋b1以外はb2類。357の坏A身には重ね焼き時の蓋の口縁部片や窯土塊が溶着している。図示していないが、1点だけ坏B身の破片がある。土師器は破片が大半で、内黒は少なく、非黒

	須 恵 器				土 師 器				食膳具計
	坏A蓋	坏A身	坏B身	計	高坏	内黒甕	非黒甕	計	
個体数	3(2)	3	1	7(2)	1	1	8	10	17(2)
(%)	42.9	42.9	14.3	41.2	10.0	10.0	80.0	58.8	41.5
	須 恵 器		貯蔵具計	土 師 器			煮炊具計		
	小壺?	甕 胴		甕 A	甕 B	甕			
個体数	1	2	3	4	14(1)	3(2)	21(3)		
(%)	33.3	66.7	7.3	19.0	66.6	14.3	51.2		

25号住居埋土土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕



第157图 25号住居跡出土土器 (S=1/3)

色の瑤が主体である。貯蔵具は少なく、図示した小型壺状器形を呈すもの以外は甕胴部破片のみ。土師器煮炊具も少なく、小型鍋は確認されず、甕A・甕B・甕のみで、特に甕Bの量が少ないようである。甕Bの口縁部器形はA1-1、C3-2、B2-1、B3-1で、B類が目立つ。

出土土師の胎土構成は右のとおりである。

須恵器胎土	a2	a	b	c	土師器胎土	A	B	E
食膳具	6	2	4	0	食膳具	13	0	0
貯蔵具	1	1	1	1	煮炊具	229	4	2
須恵器計	7	3	5	1	土師器計	242	4	2

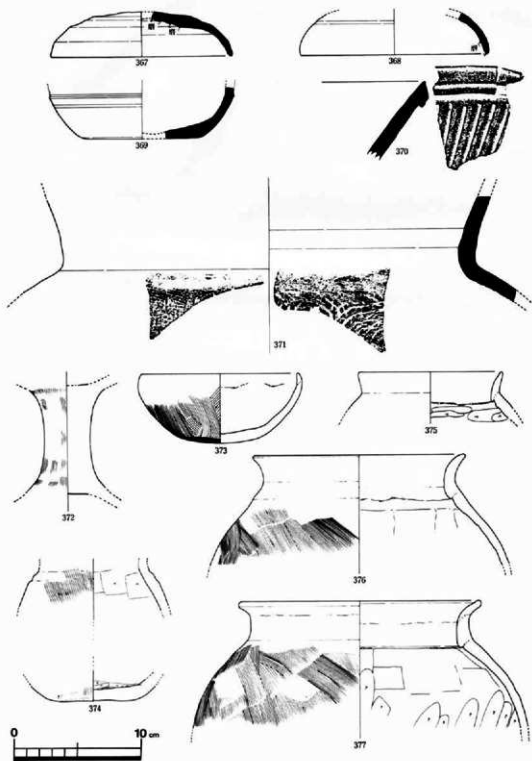
25号住居跡出土時胎土構成

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
354	坏A蓋b1	□13.6	b	良	1/5		357	坏A身b2	□12.5,高4.3	a2	焼過	1/3	量土層
355	◇ b2丸	□14.1,高4.7	a	不良	1/3		358	◇ b	□12.8	◇	不良	1/10	
356	◇ b2	□13.6,高4.1	a2	良好	1/4	歪み	359	小型壺?	胴10.8,胴高7.3	c	良好	1/10	
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
360	瑤b1イ	□14.4	A	1/10		364	瓶b4(外1内1)	□24.2	B	1/15			
361	◇d1イ	□11.8	◇	1/15		365	◇ a1(外1内2)	□21.6	A	1/20	外胴一部煤		
362	甕Ac4	□17.2,胴21.9	◇	1/10	内胴コゲ	366	◇ 把手		◇	手片			
363	甕Bc(B2)	□17.4	◇	1/10	外胴煤								

(17) 26号壘穴住居跡出土土師

25号住居同様、当住居廃絶直後に一括廃棄されたような土器群がカマド周辺に存在している。全て土師器であり、373の瑤b1才類、374の小型壺状器形のもの、375の甕A b 1'類、377の甕B d類が該当する。瑤は略完形品であり、外面刷毛の入るやや珍しいタイプ。小型壺状器形のものはやや特異な器形で、海綿骨針が入るD胎土であり、搬入品の可能性がある。カマド内からの出土である。煮炊具は甕Aと甕Bで、甕Aは強い被熱による外面剥落、甕Bは外面胴部に薄く煤の痕跡が残る。煮炊具はカマド外からの出土で、胴部上半の破片であり、カマド使用に伴うようなものではない。

上記の土器以外は、埋土土器となるが、当住居でも出土量は少なく、他の住居跡の大体1/5程度である。遺構間接合は、21号住居とのみ見られ、他の遺構とはない。出土器種・構成は表のとおり。まず、食膳具であるが、全体的に少なく、須恵器と土師器に近い割合で存在する。土師器は瑤で内黒と非黒が均衡するが、体部破片では非黒の方が圧倒的に多く、21号住居などと類似する。須恵器は図示した坏A蓋程度で、特殊なものとしては369のような底部へら切りの鉢状器形がある。体部には稜が数条見られ、特異である。貯蔵具は口縁部文様をもつ甕Cが2個体存在。土師器煮炊具は数量が少なく、胴部破片も他の住居に比べて極少ない。甕Bの口縁部器形はC類



第158图 26号住居跡出土土器 (S=1/3)

	須 惠 器				土 師 器				食膳具計	
	坏A蓋	高坏A	鉢?	計	高 坏	内黒碗	非黒碗	計		
個体数	2	1	1	4	2	1	1(1)	4(1)	8(1)	
(%)	50.0	25.0	25.0	50.0	50.0	25.0	25.0	50.0	28.6	
	須 惠 器			土師器 貯蔵具計	土 師 器				煮炊具計	
	壺	甕 C	甕 朋		小壺?	小鍋A	甕 A	甕 B		甌
個体数	2	2	1	0(1)	5(1)	1	4(1)	9(1)	1	15(2)
(%)	40.0	40.0	20.0	0.0	17.9	6.7	26.7	60.0	6.7	53.6

26号住居埋土内土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

が多く、D類とB類が1点ずつ存在する程度である。

胎土は右の表のとおりで、須惠器はa類が多く、土師器はほぼA類のみである。

須惠器胎土	a1	a2	a	b	土師器胎土	A	B	D
食 膳 具	1	1	1	0	食 膳 具	13	0	1
貯 蔵 具	2	0	0	2	煮 炊 具	118	1	0
須惠器計	3	1	1	2	土師器計	131	1	1

26号住居埋土出土胎土構成

須 惠 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
367	坏A蓋b2平	□14.2,高3.5	a	良	1/5		370	甕Ca		a1	良好	□片	
368	◇ b	□14.8	a2	◇	1/10		371	◇◇	頸32.8	a2	◇	頸部	
369	鉢?		a1	良好	1/8	■2位		(外Ha,内Db)					付近
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
372	高坏A脚		A	脚片		375	甕Ab1*	□11.2	A	1/8	外赤実		
373	甕b1才	□12.2,高5.5	◇	略完		376	甕Bc(D2)	□16.8	B	1/6			
374	小型壺?		D	1/5		377	◇ d(B4)	□19.0,胴26.5	A	1/4	外煤		

(18) 28号竪穴住居跡出土土器

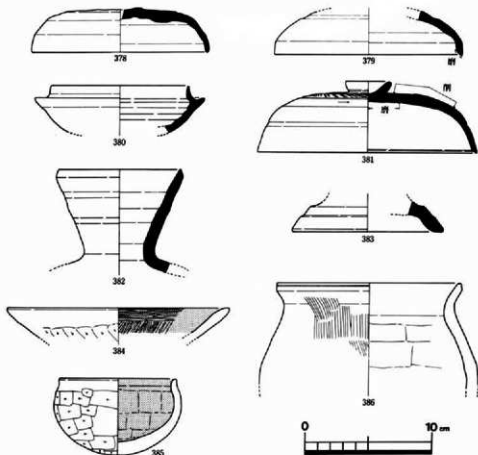
カマド周辺に一括の土器がなく、一括廃棄土器群というものは形成されない。強いて当住居に伴う可能性を考えれば、床面から出土した半完形品の378の須惠器坏A蓋と381の須惠器高坏A蓋がそれにあたる。坏A蓋はb2類の平形で、内面に摩耗痕跡をもたない。高坏A蓋は口縁端部に段を形成するタイプで、天井に刺突文をもつ優品である。口径は他の高坏蓋よりも一回り大きく、胎土は精選されている。内面天井には摩耗痕が見られる。

以上の2点の須惠器以外は埋土土器となるが、少量の土器が床下土坑から出土している。ただ、土師器甕の胴部破片ばかりであり、図示したものは無い。さて、埋土土器であるが、全体的に量

	須 恵 器				土 師 器			食膳具計
	坏A量	坏A身	高坏A量	計	高 坏	内黒魂	計	
個体数	1(1)	1	0(1)	2(2)	2	1	3	5(2)
(%)	50.0	50.0	0.0	40.0	66.7	33.3	60.0	23.8
	須 恵 器				貯蔵具計	土 師 器		煮炊具計
	甕 A	提 瓶	壺	甕 別		甕 A	甕 B	
個体数	1	1	1	2	5	3	8	11
(%)	20.0	20.0	20.0	40.0	23.8	27.3	72.7	52.4

28号住居埋土内土器器種別構成表〔()内の数値は埋土以外の出土個体数〕

は少なく、特に土師器が少ない。器種構成は以上の表のとおりである。食膳具は少なく、破片ばかりであるが、その中では385は半完形のものである。この器形は土師器碗の中でも半球形を呈す小型深身のもので、内面黒色処理する。須恵器貯蔵具は図示した以外は甕と甕胴部程度。土師器煮炊具は図示したものも含め甕Aに大きな破片がある。



第159図 28号住居跡出土土器 (S=1/3)

出土土器の胎土を右に示した。土師器でB類が定量あり、また、ここでもD類が少ないながらも、存在する。須恵器でa2やbが多い傾向。提示した数値は住居出土の胎土識別した破片数である。

須恵器胎土	a1	a2	b	土師器胎土	A	B	D
食 膳 具	0	3	1	食 膳 具	3	0	0
貯 蔵 具	1	0	3	煮 炊 具	92	5	1
須恵器計	1	3	4	土師器計	95	5	1

28号住居跡出土土器胎土構成

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
378	坏A壺b2平	□13.8,高3.4	a2	良好	2/5		381	高坏A壺a'1	□17.4,高5.6	b	良好	1/2	
379	* b	□14.8	*	*	1/4		382	提瓶A2	□ 9.5	*	*	口片	
380	坏A身b	□10.8	*	*	1/6		383	壺脚	脚11.8	a1	*	脚片	
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
384	高坏Ab1	□17.6	A	坏片	内黒	386	甕Aa1'	□14.6,脚17.3	A	1/8	外張・剥落 接床下		
385	甕d3ウ	□ 9.2,高6.0	*	2/3	*								

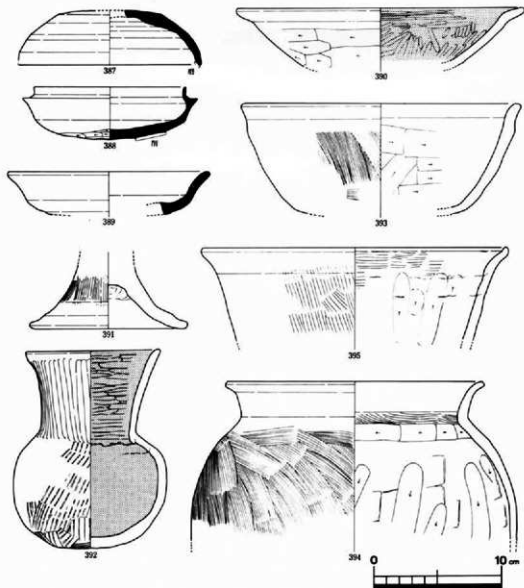
(19) 29号竪穴住居跡出土土器

一部の調査であるが、出土量は比較的多く、住居内土坑を中心に数個体の土器が一括廃棄されている。須恵器では388の坏A身の完形品（破損していない）と甕の胴部破片で、甕はB類の薄手のもの。坏A身の完形品は外底面を手持ちへら削りする薄手でシャープな作りの精製品で、内底面に当て具で叩き広げた痕跡を残す。土師器では391の高坏A脚、390の内黒塊e3イ類、392の小型壺c2類、394の甕Bd類があり、他にも内黒高坏Aの坏部破片や甕A・甕Bの口縁部破片、甕の底部破片などがある。392の小型壺は内面黒色処理するもので、多くの破片の接合で略完形まで復元している。394も胴部中位以上を完存する半完形品で、頸部内面に削り以前の刷毛調整が施される。また、当資料では18号掘立柱建物跡の柱穴出土土器と接合するものがあり、当土器群と掘立柱建物跡とで関連性をもつ。

	須 恵 器					土 師 器			食膳具計
	坏A壺	坏A身	高坏B	坏 ?	計	高 坏	内黒塊	計	
個体数	1	1(1)	1	1	4(1)	4(2)	2(1)	6(4)	10(5)
(%)	25.0	25.0	25.0	25.0	40.0	66.7	33.3	60.0	47.6
	須恵器	土師器	貯蔵具計	土 師 器				煮炊具計	
	甕 胴	小型壺		小鍋A	甕 A	甕 B	甕		
個体数	2(1)	1(1)	3(2)	1	2(1)	6(2)	1(1)	10(4)	
(%)	66.7	33.3	14.3	10.0	20.0	60.0	10.0	47.6	

29号住居埋土内土器器種別構成表 [() 内の数値は内土以外の出土個体数]

以上の土器群を除いたものが埋土となるが、土師器煮炊具は少ないものの、周辺の住居跡よりは概して出土量が多い。他の遺構と接合するものはなく、埋土土器内で接合する事例が多く、土坑内廃棄土器群とも少なからず、接合関係をもつ。器種構成は表に示したとおり。まず、食膳具であるが、須恵器は少なく、土師器特に内黒の坏部大きく外反する高坏Aが目立つ。また、須恵器には389とした厚手で口縁部外反する坏状の器形があるが、外面に軸を被っており、焼きは強く、焼台状でもある。次に、貯蔵具であるが、須恵器は甕胴部破片のみ。土師器は口頸部長い小型壺c類がある。煮炊具は甕B主体の通常構成であるが、図示した393の小型鍋B d類や395の甕c 4類など他の遺構で存在する器形とは若干異なっており、土坑出土の他の器種も含め、特徴



第160図 29号住居跡出土土器 (S=1/3)

的である。なお、胎土についても、特に土師器において他とは違い、B類の量が目立つ傾向で、図示した煮炊具は大半がB類という状況となっている。

須恵器胎土	a1	a2	b	c	土師器胎土	A	B
食 膳 具	1	2	3	0	食 膳 具	11	1
貯 蔵 具	1	0	1	1	貯 蔵 具	143	11
須恵器計	2	2	4	1	土師器計	154	12

29号住居跡出土土器胎土構成

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考
387	坏A蓋b2	□14.4,高4.3	a2	良	2/5		389	坏?	□15.7,高3.4	a1	良好	1/10	外輪
388	坏A身b1	□11.8,高4.1	◇	◇	完形	内黒							
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考		
390	甌c3イ	□22.8	B	1/6	内黒焼18型	393	小鍋Bd	□22.0,高8.9	B	1/8			
391	高坏Aa脚	脚12.5	A	脚片		394	甕Bd(B1)	□20.4,脚25.6	◇	1/3			
392	小型壺c2	□10.6,高15.6 脚12.1,口高6.5	◇	略完	内黒	395	甌c4 (外1・内2)	□24.2	◇	1/18			

3. 土坑出土の土器

土器を多量に出土する大型の土坑が5基あり、これについては個別に説明するが、他の小規模な土坑については取りまとめて述べることにする。

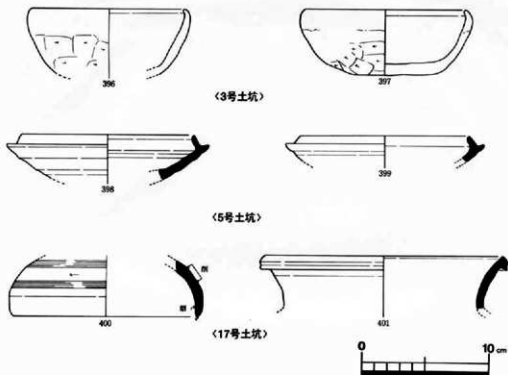
(1) 3・4・5号竪穴住居跡周辺の小規模土坑出土土器

3・4・5号竪穴住居跡の周辺には該期の土器を出土する、3号土坑、6号土坑が存在している。3号土坑と4号住居との接合が確認されており、住居内埋土土器と一連のものと考えられる。また、5号土坑から出土した須恵器坏A身2個体も図示したが、この土坑は風倒木痕と思われるもので、他に土器は出土していない。

まず、3号土坑であるが、須恵器は坏Aの破片3個と甕破片6点と少なく、大半は土師器である。土師器は図示した非黒色の土師器甌c1エ類2個体の他、同非黒色の土師器甌2点と内黒の小型壺1点、甕B8点があり、破片もあわせれば99点を数える。

次に、6号土坑であるが、図示したものはないが、土師器の内黒甌e類1点、d類2点、非黒色甌c類3点、e類2点、高坏1点、小型鍋A1点、甕B6点が出土しており、破片もあわせれば、116点を数える。須恵器は出土していない。

3号土坑出土の土師器						6号土坑出土の須恵器						
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	焼成	備 考
396	甌c1エ	□12.0	A	1/3	内黒塗?	398	坏A身b2	□13.6	b	1/3	良好	
397	◇c1エ	□12.8,高5.2	◇	1/2		399	◇ ◇	□13.4	◇	1/8	◇	



第161図 3号土坑・5号土坑・17号土坑出土土器 (S=1/3)

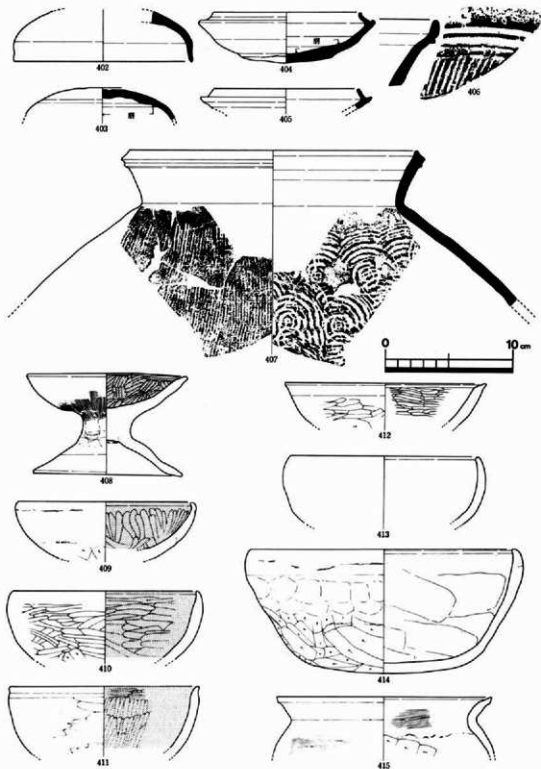
(2) 16号土坑出土土器

最も土器の出土量が多い土坑で、他の遺構との接合も12号住居や14号住居、20号土坑、5号掘立柱建物跡、19号住居など多数にわたっている。出土器種の構成は、以下の表のとおりで、食器

	須 恵 器			土 師 器				食器具計				
	坏A蓋	坏A身	計	高 坏	内黒埴	非黒埴	計					
個体数	4	3	7	2	12	6	20	27				
(%)	57.1	42.9	25.9	10.0	60.0	30.0	74.1	32.5				
	須 恵 器					土師器	貯蔵具計	土 師 器				煮炊具計
	甌 A	甌 B	甌 C	甌 胴	小型壺	小鍋A		甌 A	甌 B	甌 C	飯	
個体数	1	3	1	7	1	13	4	15	19	2	3	43
(%)	7.7	23.1	7.7	53.8	7.7	15.7	9.3	34.9	44.2	4.7	7.0	51.8

16号土坑出土土器器種別構成表

具では、土師器碗が主体を占める。須恵器は坏Aのみ。図示した坏A身は口縁部立ち上がりがないふたであり、新しい様相を感じる。403の蓋内面と404の身内面に摩耗痕が広い範囲で確認される。土師器では碗が主体で、特に内黒が主体的である。器形は内黒でb類とd類がほぼ同数で存在。非黒色ではc類が主体で、a類やe類も見られる。全体的に調整に外面磨きが目立ち、作り



第162图 16号土坑出土土器(1) (S=1/5)

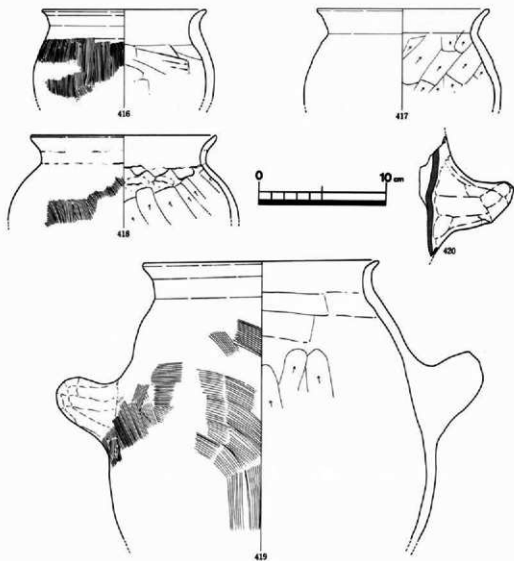
は丁寧である。貯蔵具では1点内黒の土師器小型壺があるが、他は須恵器で、ほとんどが甕である。口縁部破片が定量あり、胴部の大きな破片も多い。当て具はD a類のみである。土師器煮炊具は甕Aの量が目立ち、図示した甕も大半が甕Aである。甕Aは強い被熱による外面剥落するものが多いが、416とした小型厚手のものは被熱痕跡があまり見られないもので、このような極小型のものについては異なる用途が想定される。甕Bは図示できたものはなく、破片のみ。甕Cの長胴タイプであるd類が半完形で出土している。摩滅が著しく煮炊具としての使用痕跡はよくわからないが、外面一部に煤が残っていた。小型鍋Aは、図示できたものは1点であるが、略完形であり、A 1イ類に分類される。使用痕跡が残っており、外面下半に薄く煤が付着、底面にも部分的に見られる。内面には上半のみコゲ状の付着物が見られるが、全周はしていない。さて、この小型鍋の底面には焼成前の棒状の工具による記号「卍」が見られ、類似したものが21号土坑の土師器甕Aの底部でも見られる。須恵器のへら記号に類似したものであり、興味深い。

出土土器の胎土は右表のとおりで、須恵器では食膳具にc類が多く、貯蔵具にa類が多い傾向が見られ、土師器ではA類以外に多様な胎土が見られることが特徴である。特にD類は定量存在している。

須恵器胎土	a1	a2	b	c1	c2	土師器胎土	A	C	D	E	F
食 膳 具	2	1	3	4	2	食 膳 具	66	0	0	0	0
貯 蔵 具	6	4	4	0	0	煮 炊 具	680	1	21	1	1
須恵器計	8	5	7	4	2	土師器計	746	1	21	1	1

16号土坑出土土器胎土構成

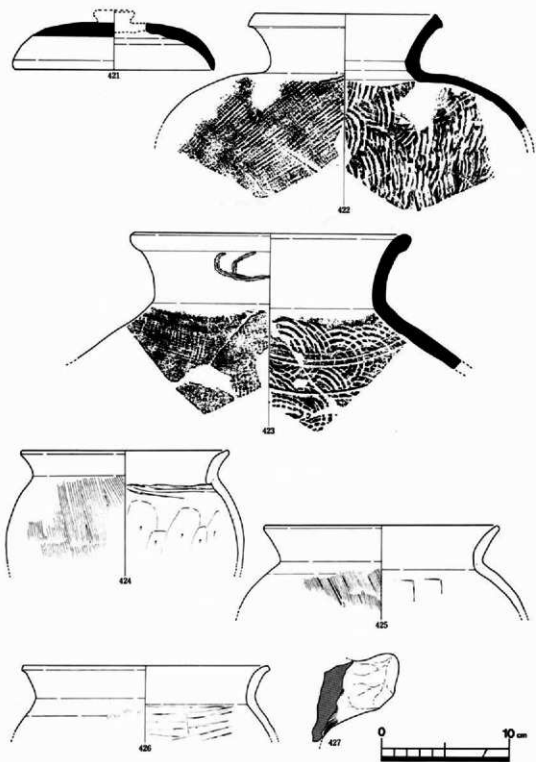
須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考
402	坏A蓋b	□14.0	b	良好	1/6		405	坏A身b	□11.4	c1	不良	1/10	
403	◇ 2		c1	良	1/4		406	甕C		b	良好	□片	
404	坏A身b2	□11.6,高4.0	b	◇	1/2		407	甕Bb (外Ha・内Da)	□23.0	a2	◇	胴上 破片・14枚	量12
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考		
408	高坏Bb2	□12.7,脚11.7 高8.0	A	4/5	内黒	414	小鍋A1イ	□20.6,高9.9	A	略完	煤・コゲ・記号		
409	甕b1イ	□13.6	◇	1/8	◇	415	甕Ac2	□17.0	◇	1/18			
410	◇b1ア	□14.5	◇	1/6	◇	416	◇ b2	□13.0,脚14.3	◇	1/8			
411	◇d2ア	□14.8	◇	1/15	◇	417	◇ ◇	□13.5,脚15.6	◇	1/12	外面強被熱		
412	◇e1ア	□16.0	◇	1/12		418	◇ c2	□14.6,脚18.2	◇	1/12			
413	◇ a	□14.8	◇	1/15		419	甕Cd	□18.7,脚25.8	◇	1/2	一部外面煤		
						420	◇ 把手		◇	手片			



第163図 16号土坑出土土器(2) (S=1/3)

(3) 20号土坑出土土器

以下に示した土器の個体数は比較的多いものの、出土破片総量は少なく、図示できた土器も少ない。他の遺構との接合は隣接する16号住居以外では16号土坑とあり、主に須恵器甕で接合している。出土器種の構成は、全体的に須恵器が目立ち、土師器は少なく、それは食膳具での須恵器主体、須恵器貯蔵具の定量存在、という状況につながっている。食膳具は、坏Aがb2類のみで、高坏は有蓋のA類のみ。2段3方スカシの脚部が出土している。土師器碗は破片でも非黒色が主体で、内黒碗にD類胎土がある。須恵器貯蔵具は甕が主体で、内面D a 当て具の甕胴部破片がまとまって出土している。また、図示した423の甕B a 類の口縁部外面にはヘラ描きで記号状のも



第164图 20号土坑出土土器 (S=1/3)

のが記されており、胴部内面の当て具痕の上から沈線が巡っている。土師器煮炊具は、甕Bが少なく、そのぶん、甕Aが目立つ。破片が主で、半分まで復元できるような大きな破片はなく、1つの個体を投棄したものではない。胎土については、須恵器が食膳具でa1-5、a2-2、貯蔵具でa1-4、a2-2、b-6、土師器が食膳具でA-6、B-1、D-1、煮炊具でA-127、B-11の割合となっている。

	須 恵 器					土 師 器			食膳具計
	坏A蓋	坏A身	高坏A	高坏A蓋	計	内黒陶	非黒陶	計	
個 体 数	4	1	1	1	7	1	2	3	10
(%)	57.1	14.3	14.3	14.3	70.0	33.3	66.7	30.0	28.6

	須 恵 器				貯蔵具計	土 師 器				煮炊具計
	甕 A	横 瓶	甕 B	甕 別		甕 A	甕 B	甕 C	甕	
個 体 数	1	1	5	4	11	4	8	1	1	14
(%)	9.1	9.1	45.5	36.4	31.4	28.6	57.1	7.1	7.1	40.0

20号土坑出土土器器種別構成表

須 恵 器 器 種							土 師 器 器 種					
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考
421	高坏A蓋b3	□15.6	a1	良好	1/5		424	甕Ab1	□16.4, 胴18.7	A	1/12	
422	横瓶b	□15.4	b	+	1/7		425	甕Ba(A1)	□18.6	B	1/20	外頸薄煤
423	甕Ba	□22.3	+	不良	1/25	□外に ヘラ量	426	甕Ca(A1)	□19.5	A	□片	
							427	甕把手		+	手片	

(4) 21号土坑出土土器

遺構の部分でも述べたように、覆土の状態から3層に分けられそうで、下層はほとんど遺物を含まない層であるため、主に出土土器は中層と上層とに分けられる。上層については他の遺構との接合も多く(周辺の19・23号住居はもとより、21号住居や18号住居、15号住居、20号土坑、弥生の住居である20号住居の埋土とも接合している)、堅穴住居跡の埋土土器と同様の性格をもつと思われるが、中層については、焼土塊や炭化粒の混在から4号掘立柱建物跡の廃絶に伴う可能性が想定されており、大量の貝の廃棄も含めて、かなり一括性の高い土器群であると予想される。

まず、上層の土器群であるが、図示できたものは少なく、428・433・438・439の須恵器坏A身や446の須恵器高坏A、458の土師器甕A程度で、主に破片での出土が多い。破片では他に須恵器高坏B・提瓶・壺・甕、土師器高坏・甕Bがあり、図示した土器からも分かるように、まとまった様相はもっていない。混在土器というイメージである。

さて、中層土器であるが、図示したほとんどがこれに属し、出土量は多い。20号土坑同様、須恵器の量が多く、特に須恵器食膳具の類が高い占有率をもつ。さて、須恵器食膳具であるが、坏

Aはb2類のみで、比較的まとまった様相をもつ。高坏は高脚のa類と低脚のb類が両方おり、高脚は2段3方スカシである。高坏蓋の口径はやや大きく、この蓋の内面には顕著な摩耗痕が見られる。無蓋高坏はスカシ無しのものであるが、まだ脚部は高く、しっかりしている。また、当資料には坏A蓋をひっくりかえしたような碗Aが数個あるが、440のものにはこれのみで積み重ねる重ね焼きの痕跡があり、身器種としての可能性を示唆する資料である。底面と口縁部内面には摩耗痕が顕著に見られる。441と442は小型のもので、442には内面に厚く釉が付着している。碗A器種をまとめて出土する遺構は当土坑のみであり、他は包含層からの出土である。これに対し、土師器食膳具は図示したような大型の高坏A a類が定量あるが、これを除くと碗としてはやや特異な刷毛調整を施す453の碗c 2才類と内黒碗d 3類の破片1点のみであり、通常組成の中で定量存在する碗器種は含まれていない。意識的に須恵器食膳具のみを廃棄したのか、そのような須恵器でほとんど構成される食膳具組成が存在したのか、興味深いところである。須恵器貯蔵具は比較的少なく、図示した甕B以外は少量の破片である。土師器煮炊具も竈穴住居跡等の埋土よりは確実に少なく、ここでも他の土坑と同様、甕Aの数量が目立ち、甕Bの比率は低い傾向をもつ。甕Aには460とした底部破片があるが、これの底面には16号土坑の小型鍋Aで見られたような棒状工具で記した記号状のものが見られ、類似した記号であり、その関連性が想定される。また、455とした小型のe類は、調整等から甕Aに分類したものであるが、厚手の器内や被熱痕跡が見られないことから煮炊具として扱うこと自体問題がありそうで、他のd類なども含め、小型容器として考えたほうがよいものである。煮炊具は甕類の他に、小型鍋A類とB類が定量あり、甕も465の略完形品を含め、定量ある。この甕の略完形品は、多数の小破片からの復元であり、破片が土坑内に広く分布している。煤などの付着や被熱による剥落など使用痕跡は見られない。

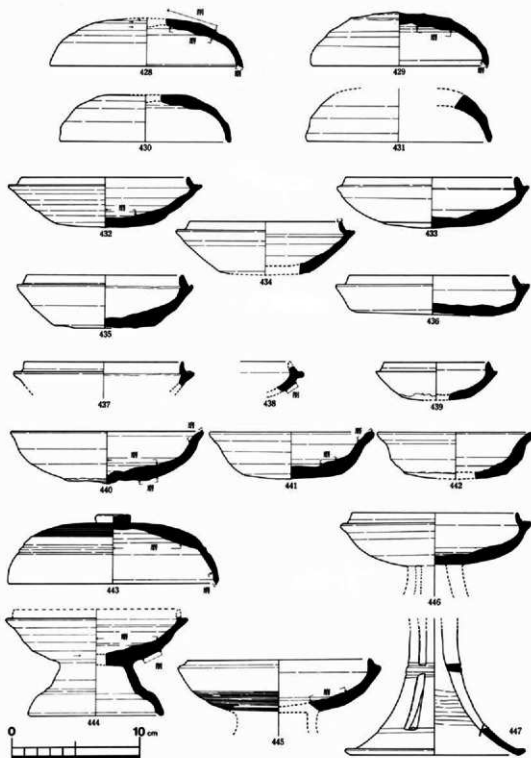
出土土師の胎土は右表のとおりで、須恵器では特に食膳具にa 2類への偏りが見られ、c類は全体的に少量である。土師器は通常の胎土構成と変わらない。

須恵器胎土	a1	a2	b	c1	c2	土師器胎土	A	B	D
食膳具	7	24	8	1	2	食膳具	18	0	1
貯蔵具	0	5	7	2	1	煮炊具	465	8	1
須恵器計	7	29	15	3	3	土師器計	483	8	2

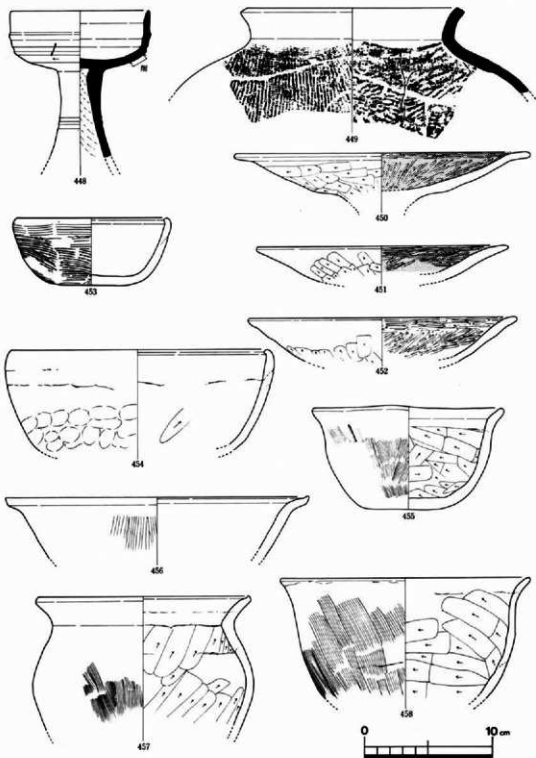
21号土坑出土土師器胎土構成

	須 恵 器						土 師 器					食膳具計
	坏A蓋	坏A身	碗A	高坏A	高坏A重	高坏B	計	高 坏	内黒碗	非黒碗	計	
個体数	10(4)	7(5)	3	6(2)	1	1(1)	28(12)	3(2)	1	1	5(2)	33(14)
(%)	35.7	25.0	10.7	21.4	3.6	3.6	84.8	60.0	20.0	20.0	15.2	46.5
	須 恵 器					土師器	土 師 器					煮炊具計
	提瓶A	甕	甕 B	甕 刷	小型甕	貯蔵具計	小鍋A	小鍋B	甕 A	甕 B	甕	
個体数	1(1)	0(2)	2	3(3)	1	7(6)	2(1)	3	8(5)	15(7)	3	30(13)
(%)	14.3	0.0	28.6	42.9	14.3	9.9	6.5	9.7	25.8	48.4	9.7	43.7

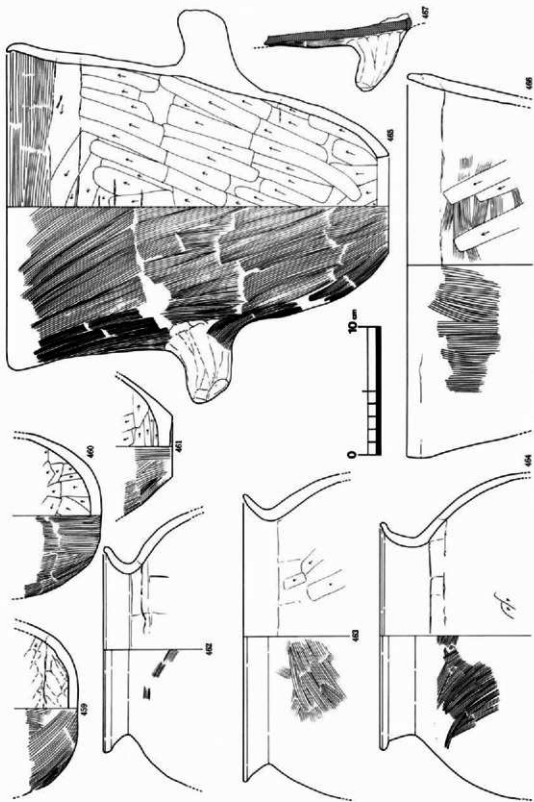
21号土坑中層出土土師器種別構成表 (()の数値は中層以外の出土個体数)



第165图 21号土坑出土土器(1) (S=1/3)



第166图 21号土坑出土土器(2) (S=1/3)



第167图 21号土坑出土铜器(3) (S=1/3)

なお、461の壺底部を図示してあるが、底部平底で底面を削るものである。胎土は当該時期のものに類似するが、平底器形からすれば、古い時期（弥生後期～古墳前期）に伴う可能性をもつ。ただ、弥生時代のものともやや異なっており、丸底化しなかった可能性もある。

須恵器器種													
番号	器種分類	法量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法量	胎土	焼成	残存	備考
428	坏A蓋a1	□15.2,高3.8	b	良好	1/3	接2住	440	碗Aa	□13.2,高4.1	b	良	1/2	重複
429	◇ b2	□13.9,高4.3	a2	◇	2/3		441	◇ ◇	□13.0,高3.6	◇	不良	略完	
430	◇ ◇	□13.3,高3.7	◇	良	1/4	火曜肌	442	◇ ◇	□12.2,高3.7	a2	良好	1/6	内厚輪
431	◇ b	□14.3	◇	不良	1/5		443	高坏A蓋b3	□16.2,高5.5 つまみ径2.7	a1	良	1/2	
432	坏A身b2	□13.2,高4.0	◇	良好	2/3		444	高坏Ab2ア	脚10.6,脚高3.9	◇	◇	1/2	
433	◇ ◇	□13.4,高4.0	a1	不良	略完		445	◇ b2イ	□14.3,坏高4.1	a1	不良	坏完	
434	◇ ◇	□12.0,高4.2	a2	良好	1/4		446	◇ a	□13.0,坏高4.0	a2	良好	◇	接19住 18住
435	◇ ◇	□12.2,高4.2	a1	不良	1/2		447	◇ 1脚	脚14.2	◇	◇	脚完	
436	◇ ◇平	□13.0,高3.2	a2	◇	◇		448	高坏B3	□10.8,坏高4.3	a1	不良	1/2	接20坑
437	◇ b	□12.5	a1	良好	1/8		449	壺Bc	□17.6	c1	◇	1/30	
438	◇		c1	不良	□片								
439	◇ c2	□8.2, 高3.0	a1	良好	1/4								
土師器器種													
番号	器種分類	法量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法量	胎土	残存	備考		
450	高坏Aa1	□23.4,坏高3.2	A	1/6	内黒	460	壺A底		A	底片	外薄く煤 底地埋記号		
451	◇ ◇	□20.0	◇	1/15	◇	461	壺底(弥生?)	底4.6	◇	◇	内薄くコゲ		
452	◇ ◇	□21.4	◇	1/8		462	壺Ba(C4)	□16.2	◇	1/8			
453	碗c2オ	□11.8,高5.3	◇	2/3		463	◇ ◇(C2)	□22.4	◇	□片	外薄煤		
454	小鍋A4エ	□20.6	◇	1/4		464	◇ ◇(B4)	□17.8,脚25.6	◇	2/9	外煤と刺添		
455	壺Ae	□15.1,高8.0	D	2/3		465	瓶b4 (外1,内2)	□25.0,高30.1 底7.7,手径31.0	◇	略完	煤なし		
456	小鍋Bc	□24.0	A	1/15		466	瓶b1(外1,内2)	□29.4	◇	□片			
457	◇ b	□19.7	B	1/3		467	瓶把手		B	手片			
458	壺Ab2	□17.0,脚17.4	A	1/3									
459	壺A底		◇	底片									

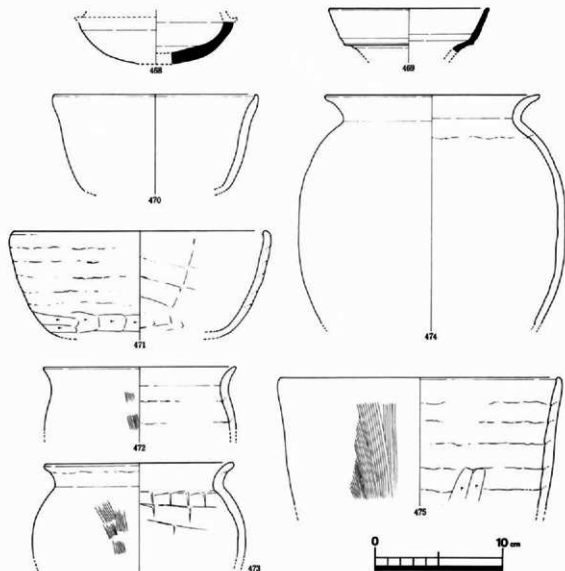
(5) 26号土坑出土土器

出土破片数が多いが、図示できたものは少なく、遺構間での接合は19・23号住居と1点だけ見られる程度である。以下に器種構成を示したが、他の土坑の土器群に比べて、須恵器の量が少なく、全部で7個体のみ。破片数でも11個のみである。土師器食膳具はなく、食膳具の総体的な量

	須恵器		炊器具計	須恵器			土師器		貯蔵具計	土師器				煮炊具計
	坏A蓋	坏A身		甗A	甗	甗B	小型甗	小鍋A		甗A	甗B	甗		
個体数	1	2	3	1	2	1	1	1	5	2	2	35	2	41
(%)	33.3	66.7	6.1	20.0	40.0	20.0	20.0	10.2	10.2	4.9	4.9	85.4	4.9	83.7

26号土坑出土土器器種別構成表

も極少ない。出土土器のほとんどが土師器煮炊具であり、特に甗Bで占められるが、甗Bで図示できたものではなく、口縁部の小破片のみである。煮炊具で図示できたものは小型鍋A類と甗A類、甗で、全体的に焼きが弱く、内外面が摩滅しているものが目立つ。図示したものの中には、甗A



第168図 26号土坑出土土器 (S=1/3)

でも長胴気味でやや大型法量である474や内面削り調整前のヘラナアが行われず、粘土紐積み痕跡を残す475の甎などがあり、また、ここでは小型鍋Aに分類したが、法量が小さく、小型容器としての可能性をもつ470などがある。また、胎土については、須恵器が食膳具でa2-3、c2-2、貯蔵具でa1-1、a2-2、b-4、c1-1、土師器が煮炊具でA-315、B-24、D-4の割合となっている。

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
468	坏A身2		a2	不良	1/10		469	甎A1イ	□12.6	b	良好	□片	
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
470	小鍋A2	□15.8	A	1/2		473	甎Ab2	□14.8, 胴16.7	A	1/5			
471	◇ 1イ	□19.6, 高8.6	◇	1/8	外薄煤	474	◇ a2	□17.0, 胴21.0	B	1/2			
472	甎Ab1	□15.0, 胴15.2	◇	1/3	外縁内コゲ	475	甎b2(外内1)	□21.6	A	1/15			

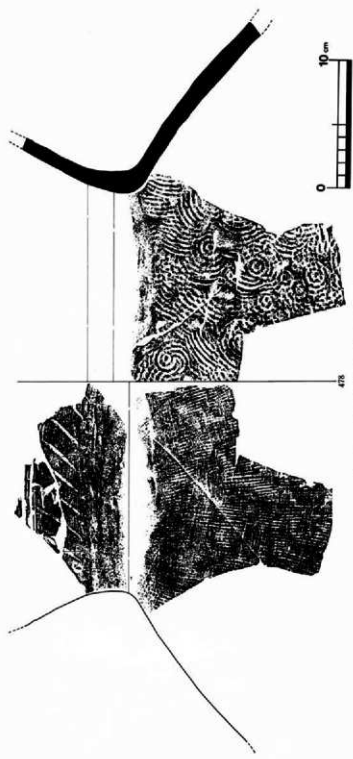
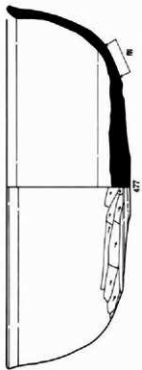
(6) 28号土坑出土土器

当土坑では大量に須恵器製の胴部破片が廃棄されており、調査した実感では須恵器の方が土師器を上回っている印象を受ける。しかし、以下に上げたように、個体数では土師器煮炊具が多く、特に甎Bが多い。食膳具は須恵器、土師器とも少なく、図示した須恵器高坏A蓋b3類の半完形品と須恵器鉢Aの略完形品がある程度である。この鉢Aは口径30cm程度の測る大型の盤状器種で、体部下端には手持ちヘラ削りが施される。あまり精製品という感じは

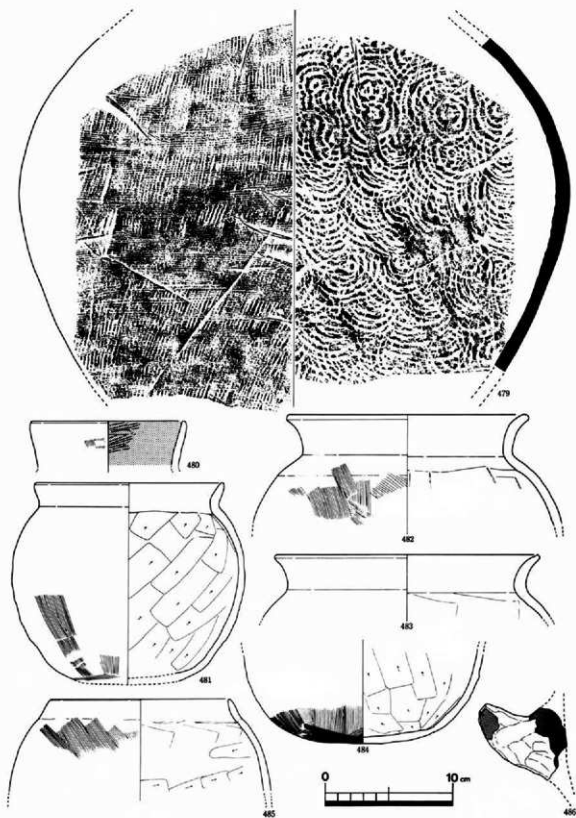
	須 恵 器			土師器		食膳具計	
	坏A?	高坏A蓋	鉢 A	非黒陶			
個体数	1	1	1	2		5	
(%)	20.0	20.0	20.0	40.0		9.8	
	須 恵 器				土師器		貯蔵具計
	壺	甎 B	甎 C	甎 胴	小型壺		
個体数	1	1	1	7	1	11	
(%)	9.1	9.1	9.1	63.6	9.1	21.6	
	土 師 器					煮炊具計	
	小鍋A	甎 A	甎 B	甎 C	甎		
個体数	4	4	25	1	1	35	
(%)	11.4	11.4	71.4	2.9	2.9	68.6	

28号土坑出土土器器種別構成表

りも丁寧とは言えない。焼きが強く、歪んでおり、内面には厚く釉が付着、坏A蓋の1/6破片も溶着している。貯蔵具は壺1点以外は甎ばかりで、半分近くまで復元できたものもあるが、破片主で、甎胴部破片を一括廃棄したという感じである。1点だけD b当て具が見られるが、他は外



第169圖 28号土坑出土土器(1) (S=1/3)



第170图 28号土坑出土土器(2) (S=1/3)

面H a 叩き、内面D a 当て具のものばかりである。土師器煮炊具は481の甕Aの半完形品以外は破片ばかりある。481は外面が強い被熱により剥落、特に胴部中位が顕著で、ただし、底面付近は被熱が弱くあまり剥落していない。内面は胴部下半で所々剥落しているが、外面で強く剥落した部位から上では剥落はなく、外面の状況と対応している。484の甕B底部破片も煮炊具痕跡が見られる個体で、内面の底面から5cmあたりでコゲ帯が見られ、その部位から上と下とは明瞭に色調が異なっている。外面でも痕跡は確認できるが、コゲ帯ラインにあたる部位から上で被熱による剥落が見られ、それより下ではやや色調がくすんだ程度、底面では3点ほどポイント的に煤が付着している。器形としては甕Bを想定しているが、甕A的な煮炊具痕跡である。さて、485の器形であるが、甕の頸部ですぼまるように、口縁部が内傾してそのまま終わっている器形で、甕の底部とも考えたが、煮沸痕跡から甕Aのように使用されたものと予想される。外面は口縁部付近を除いてそれ以下では強い被熱により剥落しており、剥落していない部分では煤が厚く付着している。内面は剥落開始部位からやや下方でコゲ帯が見られ、それより上では黒褐色化している。全体的に薄手で、作りは粗雑であるが、小型煮炊具として使用されたものと推察する。

胎土は須恵器が食膳具でa2-2、b-1、貯蔵具でa1-5、a2-7、b-2、c2-1、土師器が食膳具でA-8、煮炊具でA-376、D-6であった。

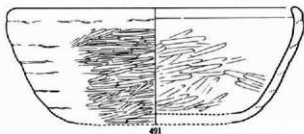
須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備 考
476	高坏A蓋b3	□15.3,高4.5	b	良好	1/3		478	甕Ca(HaDa)	頸33.2	a2	良好	頸片	
477	鉢A	□28.6,高9.8	a2	+	5/6	内面黒	479	甕B(HaDa)	胴43.6	a1	+	胴片	
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備 考		
480	小型甕a1	□12.1	A	口片	内黒	483	甕Ca(C3)	□20.8	A	1/20			
481	甕Ac3'	□14.8,胴18.4 高16.0	+	1/3	内外剥落	484	甕B底		+	底完	外剥落内コゲ		
482	甕Ba(D1)	□19.1	+	1/6	外薄煤	485	甕?	□13.8,胴20.6	+	1/9	外煤、内コゲ		
						486	甕把手		+	手片			

(7) 36・41号土坑出土土器

以上の土器を大量に出土する土坑以外で、確実に該期に伴うと予想される土坑が2基ある。1基はこれまでと同様の廃棄土坑と目される41号土坑であるが、出土土器は少なく、土坑の規模も小型である。出土土器の内容は、須恵器坏A 1個、横瓶 1個、甕胴 1個で、破片では甕胴部破片が他に5点ほど。土師器は内黒塊 1個、小型鍋A 1個、甕B 5個あり、破片では他に内黒塊 2点、甕胴破片 29点出土している。図示できたものは3点で、須恵器横瓶は口縁部だけ固化してあるが、同一個体の胴部破片 13点も出土している。外面H a 叩き、内面D a 当て具を残す。土師器は内黒の塊e 1類と小型鍋A 2類で、いずれも半完形のもので、小型鍋は内外面の磨きが入るが、丁



〈36号土坑〉



〈41号土坑〉



第171図 36号土坑・41号土坑出土土器 (S=1/3)

寡なものではなく、外面に煤の付着が見られる。遺構間の接合は12号住居・14号住居と3号掘立柱建物跡である。胎土は須恵器が裏破片1点がc以外は全てa2で、土師器は裏破片1点がB以外は全てAである。

さて、もう1基は墓坑の可能性をもつ36号土坑であるが、出土土器は、図示した全く破損していない須恵器坏B蓋と略完形に復元できる短頸壺の2点のみで、坏B蓋は床面から、短頸壺は上層から出土している。これ以外では上層に土師器裏腹部小破片3点があるだけで、覆土も埋め戻したような土であり、これまでの土坑の性格とは明らかに異なるものである。487の蓋の内面天井には摩耗痕があり、口縁端部の身と擦れる部位でも同様の摩耗痕がある。488の短頸壺には摩耗痕はなく、焼きの具合から蓋なしの重ね焼きであると予想される。

36号土坑出土の須恵器							41号土坑出土の須恵器・土師器								
番号	器種分類	法	量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法	量	胎土	焼成	残存	備考
487	坏B蓋b	□10.6,高2.9 返り径8.8	a2	良好	完形			489	須 横瓶a	□12.2		a2	良	□片	破片多
488	短頸壺Bb小	□8.5,胴10.1 高3.8	a1	○	略完			490	土 碗e1イ	□12.8,高4.7		A		2/5	内黒
								399	土 小瓶A27	□22.0,高9.2		○		1/3	外煤 接3把

(8) その他の土坑出土土器

以上の土坑以外でも、当該時期の土器を出土する土坑はあるが、その量は極少なく、木痕状の

土坑の中に土器が混在したという感じである。一応、土坑出土の土器を列挙すれば、以下のとおりで、17号土坑についてはやや出土量が多かったため、図を載せてある。

17号土坑……須恵器(坏A-1、高坏A蓋-1、甕B-1、破片甕1)・土師器(非黒埴-1、甕B-8、破片埴1、甕62)

18号土坑……須恵器(甕破片2)・土師器(甕破片3)

19号土坑……須恵器(甕破片1)・土師器(非黒埴-1、甕A-1、甕破片13)

22号土坑……須恵器(坏A 1個体)・土師器(内黒小型壺 1個体、甕破片14)

23号土坑……須恵器(なし)・土師器(内黒埴-2、小型鍋A-1、甕B-1、甕-1、破片甕7)

4. 弥生時代の竪穴住居跡内に廃棄・混在した土器

弥生時代の竪穴住居跡には20号住居と22号住居、24号住居の3軒があるが、その埋土には当該時期の遺物が混在することが多く、意識的に廃棄された土器も存在する。

(1) 20号竪穴住居跡埋土内土器群

遺構の部分でも述べたように、竪穴住居が深く、住居に伴う土器群は下層にのみ存在し、中層より上では、当該時期の土器群が大量に廃棄されている。住居放棄後の窪地を利用した土器廃棄であり、この時期まで、弥生時代の竪穴住居が埋没しきってなかったことを物語る。遺構間での接合が多く、比較的近い距離にある3号住居、15号住居、18号住居、19・23号住居、21号土坑と接合している。

器種構成は表のとおりで、食膳具の割合は高く、貯蔵具も比較的高い割合をもつ。まず、食膳具であるが、須恵器主体で構成されており、高坏類は少なく、大半は坏Aで構成されている。須恵器坏Aはいずれも口径の大きめのものが目立ち、蓋で14cm程度、身で13cm台が主体的である。蓋・身ともにa 1類が少量ながらありそうで、古手の印象を受ける。内面に摩擦痕があるものは少なく、顕著に摩耗するものは確認できない。さて、坏A蓋の中には496のような、内面に厚く軸が降り、口径の大きさや口縁端部の器形から埴Aの可能性のあるものがある。法量や器形から坏A蓋にしたが、埴の可能性も高い。埴には無蓋の金属器タイプであるB類がある。このタイプ

	須 恵 器					土 師 器				食膳具計			
	坏A蓋	坏A身	埴 B	高坏A	高坏A蓋	計	高 坏	内黒埴	非黒埴		計		
個体数	16	12	1	2	1	32	6	1	5	12	44		
(%)	50.0	37.5	3.1	6.3	3.1	72.7	50.6	8.3	41.7	27.3	37.0		
	須 恵 器							貯蔵具計	土 師 器				煮炊具計
	短頸甕B	提瓶A	蓋付甕?	壺	甕 B	甕 C	甕 類		小鍋A	甕 A	甕 B	甕	
個体数	1	2	2	2	4	2	10	23	1	22	24	5	52
(%)	4.3	8.7	8.7	8.7	17.4	8.7	43.5	19.3	1.9	42.3	46.2	9.6	43.7

20号竪穴住居跡埋土混在土器器種別構成表

は当遺跡で1点のみの出土で、やや特異であるが、胎土から在地産と推定されるものである。高坏は2段3方スカシの有蓋高脚のみで、蓋はつまみのみ出土している。以上の須恵器に対し、土師器は少なく、図示できたものも少ない。埴は非黒色のものが大半で、内黒は1点のみ。埴よりも高坏の方が多く出土している。貯蔵具は小型有蓋短頸壺や506の壺付壺としたもの、提瓶、甕がある。壺付壺は短頸壺の口頸部が長く直立する器形で、たぶん台が付くものである。分類では提示できなかったが、そのような器種であると予想する。甕には胴部当て具のD b類が定量ありそうで、やや薄手の器内ものに見られる。次に、土師器煮炊具であるが、破片は多いが、図示できるような復元可能な個体はほとんどなく、個体数として提示したものは口頸部の小破片である。数量としては甕Aと甕Bが近い量で存在し、甕の把手も少なからず、出土している。

須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
492	坏A蓋a1	□15.0,高3.7	a2	良好	2/3		501	坏A身b2	□13.5,高4.1	a1	不良	1/4	
493	◇ a	□14.3	◇	良	1/6		502	◇蓋身b (蓋を身に使)	蓋□14.0 身□12.6	◇	良好	1/20	蓋身は 破品
494	◇ b2	□14.2,高3.9	◇	◇	1/6		503	高坏A脚1	脚11.6	b	◇	脚片	接18住
495	◇ b	□15.6	b	良好	1/8		504	埴B	□13.4	a1	◇	1/10	
496	◇ b2 (坏Aかも)	□16.0,高4.2	a2	◇	1/3	接18住 内輪	505	短頸壺Aa	□8.4,胴15.6	c	◇	1/15	
497	坏A蓋b2	□14.2,高4.1	a1	良	2/3		506	壺付壺	□10.0	b	◇	□片	
498	坏A身a1	□11.8,高4.0	◇	良好	1/5		507	壺A (Ha, Da)	胴20.3	a1	◇	1/8	接15住
499	◇ b2	□13.2,高4.2	◇	◇	1/3	接19住	508	甕B (Ha, Da)	頸20.4	b	◇	頸片	
500	◇ ◇	□13.8,高4.1	a2	不良	3/5	◇	509	甕Bb	□21.4	◇	◇	□片	
土 師 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	残存	備考		
510	高坏A脚		A	脚片	内黒	512	甕把手		B	手片			
511	甕Bd (A)	□20.8,胴20.0	B	1/15	被熱剥落	513	◇		◇				

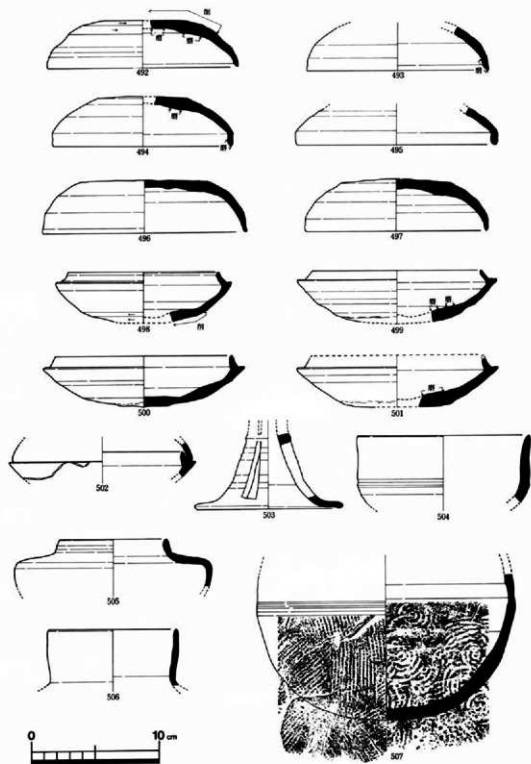
出土土師の胎土は右表のとおりで、須恵器ではa類が主体的で、特にa1類が多い。食膳具貯蔵具どちらでも多い胎土である。土師器は定量B類があり、D類とともに煮炊具でのみ見られる。

須恵器胎土		a1	a2	a	b	c	土師器胎土			
食 膳 具	17	16	0	8	1	食 膳 具	14	0	0	
貯 蔵 具	14	4	5	8	2	貯 蔵 具	587	21	17	
須恵器計	31	20	5	16	3	土師器計	601	21	17	

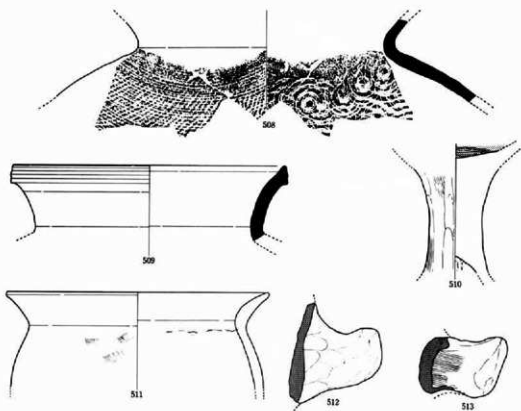
20号住居跡埋土混在土師胎土構成

(2) 22号竪穴住居跡埋土土器

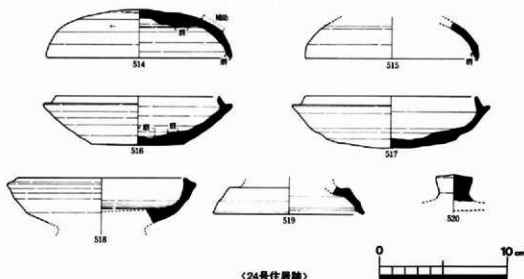
20号住居のようには大量に出土しておらず、埋土内へ後世に混在したという感じである。須恵



第172図 弥生時代住居跡内廃棄土器(1)〈20号住居跡〉(S=1/3)



〈20号住居跡〉



〈24号住居跡〉

第173图 弥生時代住居跡廃棄土器(2) 〈20号住居跡・24号住居跡〉 (S=1/3)

器で坏A身3個体のみ。土師器で小型鍋A1個体、甕A1個体、甕B6個体あり、他に甕胴部破片12点が出土している。図示できるようなものはなく、全て小破片である。

(3) 24号竪穴住居跡埋土内土器

20号住居ほどではないが、当該時期の土器を比較的多く出土しており、図示できるものもある。当該時期の25号竪穴住居跡と重複しているため、その土器が混在した可能性はあるが、だいたいプラン確認面レベル程度か埋土上層からの出土で、埋土上層に混在したという感じである。

出土土器の器種は以下の通りで、須恵器食膳具が大半を占め、土師器が少ない。胴部破片では、土師器煮炊具が20数点、須恵器甕が3点ほど出土しているが、それでも量は少なく、須恵器食膳具を主体的に捨てている。須恵器食膳具は坏A蓋が主体で、いずれも口縁端部の丸い、削りのないb2類のみ。身もb2類で、立ち上がりは短い。高坏A類は低脚のb類のみ。518は脚部まで残っていないが、口縁部立ち上がり形態から高坏と推察されるもので、底部はかなり厚手となっている。519はそのような低脚高坏の脚部と考えられるもの。520のつまみには天井部との接合面で同心円の線刻を施している。他の器種は図示できたものがなく、詳細不明。胎土は須恵器が食膳具でa1-3、a2-12、b-4、貯蔵具でa1-1、a2-2、b-2、c-1で、土師器は煮炊具のみでA-30である。

	須 恵 器				食膳具計	須 恵 器		貯蔵具計	土 師 器		煮炊具計
	坏A蓋	坏A身	高坏A	高坏A蓋		甕	刷		甕 A	甕 B	
個体数	10	2	2	1	15	2	1	3	1	1	2
(%)	66.7	13.3	13.3	6.7	75.0	66.7	33.3	15.0	50.0	50.0	10.0

24号竪穴住居跡埋土混在土器器種別構成表

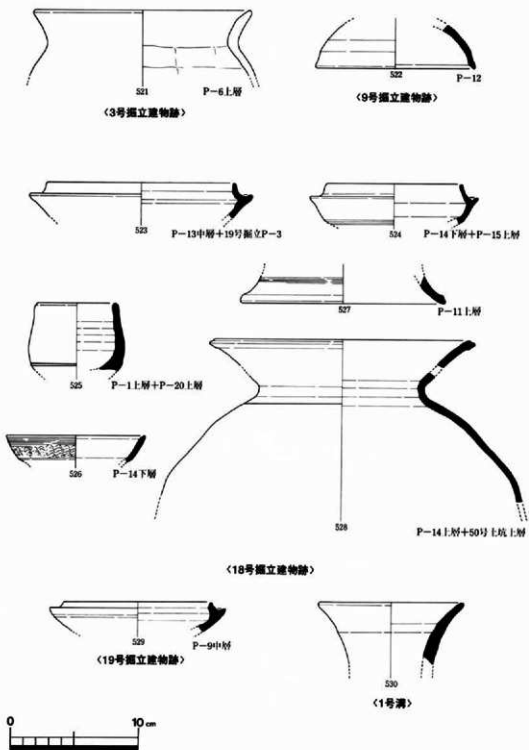
須 恵 器 器 種													
番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考	番号	器種分類	法 量	胎土	焼成	残存	備考
514	坏A蓋b2	□14.5,高3.8	a2	良好	2/3		518	高坏Ab2	□13.2	b	良好	1/4	
515	* b	□13.6	*	良	1/12		519	高坏Ab脚	脚11.8	a2	不良	脚片	
516	坏A身b2	□12.9,高3.9	*	*	1/2		520	高坏A蓋	つまみ2.8	b	良好	紐片	
517	* *	□13.5,高4.1	*	*	1/2								

5. その他の遺構から出土した土器

竪穴住居跡、土坑、弥生時代の竪穴住居跡以外で、土器を出土する遺構は掘立柱建物跡と溝があるが、いずれも出土量は極少なく、一括廃棄されたような土器群は存在しない。以下に出土土器の内容を記すが、図示できたものは極僅かの遺構のみである。

(1) 掘立柱建物跡出土土器

図示できたものは極少ないが、土器自体は出土しており、その内容も含め、以下に述べる。



第174图 3号·9号·18号·19号獨立建物跡及P1号溝出土土器(S=1/3)

- 1号掘立柱建物跡……須恵器(坏A身-1)・土師器(変破片12)。
- 2号掘立柱建物跡……須恵器(甕C-1、変破片1)・土師器(小型壺-1、変破片14)。
- 3号掘立柱建物跡……須恵器(甕A-1、横瓶-1、甕胴1、変破片3)・土師器(内黒碗-1、甕A-1、甕B-9、内黒碗片3、変破片79)。41号土坑と16号土坑に接合関係。
- 5号掘立柱建物跡……須恵器(変破片1)・土師器(甕B-1、内黒碗破片1、変破片10)。16号土坑と接合関係。
- 9号掘立柱建物跡……須恵器(坏A蓋1、変破片1)・土師器(変破片19)。
- 10号掘立柱建物跡……須恵器(変破片1)・土師器(変破片2)。
- 12号掘立柱建物跡……土師器(非黒色碗-1、変破片11)。
- 15号掘立柱建物跡……須恵器(変破片4)・土師器(変破片11)。
- 16号掘立柱建物跡……須恵器(変破片1)・土師器(変破片5)。
- 18号掘立柱建物跡……須恵器(坏A身-1、高坏A-3、小型碗?-1、甕A-1、変破片1)。
土師器(内黒高坏-1、甕B-1、瓶-1、内黒碗破片1、変破片36)。29号住居と接合関係。
- 19号掘立柱建物跡……須恵器(坏A蓋-1、坏A身-2、変破片1)・土師器(変破片2)。

(2) 溝出土土器

溝からも土器は少なく、集中する箇所もない。つまり、溝への土器廃棄が行われなかったものであり、流れ込み的に混入した土器も少ない。出土土器は須恵器が坏A破片2点、高坏A脚破片1点、長頸壺1個体、壺胴部破片2点、甕胴部破片3点、土師器は非黒色碗破片1点、甕胴部破片3点である。

番号	出土遺構	種類	器種分類	法	量	胎土	焼成	残存	備考
521	3号掘立柱建物	土師器	甕Aa3	□	17.2	A	甘い	1/20	
522	9号掘立柱建物	須恵器	坏A蓋a	□	12.6	b	良好	1/4	
523	18号掘立柱建物	○	坏A身b	□	14.6	a	不良	1/10	19号掘立と接合
524	○	○	高坏A	□	10.7	b	良好	1/8	
525	○	○	小型碗?	□	6.2	a	不良	1/5	
526	○	○	甕A2ア	□	10.8	○	良	□片	
527	○	○	高坏A脚?	脚	16.2	○	良好	脚片	
528	○	○	甕A	□	21.0	c	○	1/8	
529	19号掘立柱建物	○	坏A身b	□	11.4	b	○	1/8	
530	1号溝	○	長頸壺	□	11.4	○	○	□片	

6. 包含層出土の土器

包含層出土の土器について述べるが、その分布の状況はこの節の文頭で述べているため、ここでは土器の内容についてのみ述べることにする。

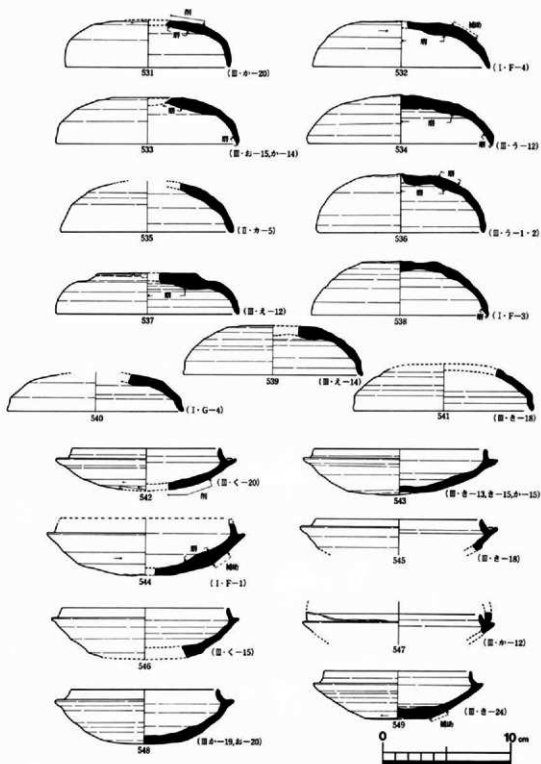
まず、須恵器と土師器の比率であるが、食膳具では須恵器の率が圧倒的に高く、土師器食膳具が半分近くを占める竈穴住居跡内の土器様相とはだいぶ異なっている。須恵器貯蔵具は種類豊富であるが、数量は少なく、土師器煮炊具器種では甕が目立つが、それ以外の器種は少なく、出土量の多い竈穴住居跡1軒分にも満たない程度である。以下に器種別に説明を加える。

まず、須恵器食膳具であるが、坏Aが大半を占め、他の器種では碗Aがやや目立つ程度。高坏の量は思いの外少ない。坏A蓋、身ともに口縁端部の面形成するa類は極少なく、数点確認できる程度で、削り調整も例外として施される程度である。つまり、大半がb2類であるわけで、蓋では13~14.5cm、身では11~13cmの口径にまとまる傾向をもつ。ただし、身には小型法量の薄手c2類が少量ながらあり、これについては新しく位置付けられるものと考えている。坏Aの内面の摩耗痕跡は蓋で顕著に見られる個体が目立つたのに対して、身では顕著な例はなく、底部完存しているものでも摩耗痕のまったく認められないものもあった。坏Aの底部破片での摩耗痕の検出率は52/125であり、4割以上の高比率を占める。蓋も身も容器として使用されたことを物語るものである。次に、碗Aであるが、坏A蓋状器形で口縁部外反するa類が定量ある。この器種は坏A蓋と報告される場合もあるが、当遺跡では火樽痕や内面降灰などのこの器種のみで重ね焼きした痕跡が認められることと内面の特に口縁部の摩耗痕があることから、蓋ではなく、身として生産・使用されたものであると考えたものである。このような器種は当該時期に他地域でも散見されるもので、口縁部外屈する器形を特徴とする。静岡県磐田郡豊岡村の新平山古墳群A4号墳の墳丘一括品としてこの器種の12個体出土しており、モデルはどのようなものかわからないが、特殊食器としての性格をもつものであろう(柴田隆「考古」『豊岡村史』資料編Ⅲ1993年)。坏Bは古手の蓋・身a類がと新しいb類とに分けられ、どちらも極少量のみの出土である。高坏は出土量が少ないが、その中では有蓋のA類が主体で、長脚のa類が5個体、短脚のb類が8個体出土している。a類はいずれも2段3方スカシのもので、b類は器部の細い1類と太い2類がある。蓋はいずれもb類で、つまみは大きく偏平状のもの、中窪みするもの、頂部の盛り上がるものがある。なお、蓋の内面中央に摩耗痕の見られるものが多く、これは遺構出土のものでも同様の状況が確認できた。無蓋のB類は体部下端に稜をもつ刺突を施す小型のもので、数は少なく、脚部の確認はできていない。

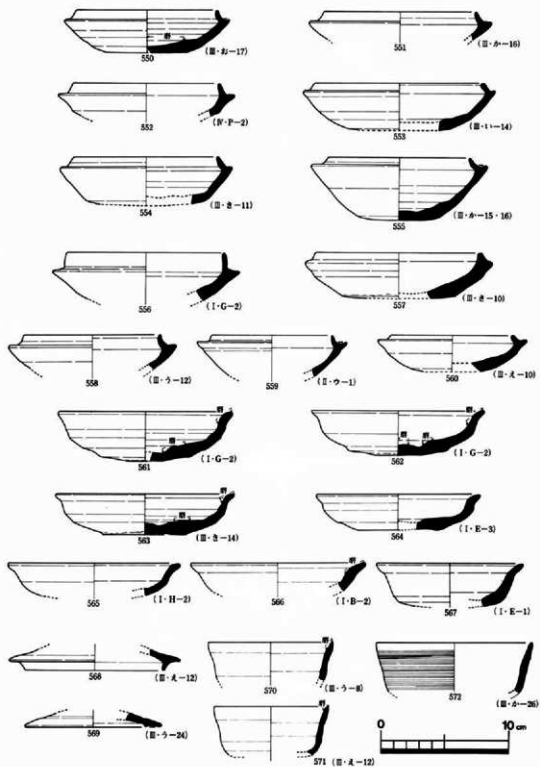
	須 恵 器											土 師 器				食膳具計
	坏A蓋	坏A身	坏B蓋	坏B身	甕 A	甕 B	不明	高坏a	高坏b	計	高 坏	内面高	赤泥高	計		
個体数	90	110	2	4	12	1	2	4	13	3	241	15	33	31	79	320
(%)	37.3	45.6	0.8	1.7	5.0	0.4	0.8	1.7	5.4	1.2	75.3	19.0	41.8	39.2	24.7	41.7

	須 恵 器											土師器	土 師 器				食膳具計
	器 A	長頸甕	短頸甕	捉飯A	蓋付甕?	甕	横 瓶	甕 B	甕 C	甕 別	小型甕	計	小銅A	甕 A	甕 B	甕	
個体数	8	1(蓋1)	3	8	1	7	2	11	11	15	7	74	16	119	224	15	374
(%)	10.8	1.4	4.1	10.8	1.4	8.3	2.7	14.9	14.9	20.3	8.3	9.6	4.3	31.8	59.9	4.0	48.7

包含層出土土器器種別構成表



第175图 包含層出土土器(1) (S=1/3)



第176図 包含層出土土器(2) (S=1/3)

須 惠 器 器 種

番号	器種分類	法	量	胎土	焼成	残存	出土地点	備考	番号	器種分類	法	量	胎土	焼成	残存	出土地点	備考
531	坏A蓋b1	□	12.8,高3.7	c	良好	1/4	3次か20		566	坏Aa	□	14.0	a	良	1/8	1次B2	大塚
532	＊ b2	□	13.8,高3.6	b	不良	1/4	1次F4		567	＊ a'	□	11.4,高3.5	＊	良好	1/8	1次E1	
533	＊ ＊	□	14.2,高3.6	＊	良好	1/5	3次B5, 34		568	坏B蓋a	□	12.6,高10.0	a2	＊	1/8	3次え12	
534	＊ ＊	□	14.5,高3.8	a	良	2/3	3次う12		569	＊ b	□	10.8,高8.2	a	＊	1/10	3次う24	
535	＊ ＊	□	13.4	c2	不良	1/5	3次か5		570	坏B身1	□	9.8	c	＊	1/8	3次う8	
536	＊ b2丸	□	13.0,高4.7	c	良	1/3	3次ウ1・2		571	＊ ＊	□	8.8	＊ ＊	＊ ＊	1/6	3次え12	
537	＊ b2平	□	14.4,高3.2	b	良好	1/4	3次え12		572	＊ 2	□	12.2	b	＊	1/8	3次か26	
538	＊ b2丸	□	13.8,高4.2	a	＊	2/3	1次F3		573	坏B	□	13.5	a	＊	1/10	3次か15	
539	＊ b2	□	14.0,高3.9	＊	良	1/4	3次か14		574	不明塊			＊ ＊	底片	3次ビット		
540	＊ ＊	□	13.6	＊	良好	1/6	1次G4		575	＊	□	11.4	c	＊	1/10	4次H2・3	
541	＊ ＊	□	14.0	＊ ＊	1/5	3次き18		576	高坏A蓋b3	□	14.8	a	良	1/10	3次き7		
542	坏A身b1平	□	11.6,高3.4	c	＊	1/4	3次く20		577	＊ 1	つまみ3.5	b	良好	1/6	3次く15		
543	＊ b2平	□	13.5,高3.6	a	＊	3/4	3次き13・15		578	＊ ＊	つまみ3.9	a	不良	1/4	3次え10		
544	＊ b2			b	良	1/5	1次F1		579	高坏Ab1			＊	良好	脚片	3次う18	
545	＊ b	□	13.0	a	＊	1/8	3次き18		580	腿A2イ	□	12.2	＊	良	□片	3次お17	
546	＊ b2	□	13.1,高4.1	＊	良好	1/5	3次く15		581	＊	胴9.4	b	良好	1/4	4次F3		
547	＊ b	□	12.9 (身口14.0)	b	良好	1/8	3次か12	重積	582	長頸壺	胴12.2,底7.6	c	＊	1/6	3次え24		
548	＊ b2	□	11.5,高4.4	c	良好	1/2	3次H・E9		583	小型壺	□	8.0,胴9.0	＊ ＊	1/5	1次G4・E3		
549	＊ ＊	□	11.6,高3.7	b	＊	1/3	3次き24		584	短頸壺Bb	□	12.6,胴14.2	a	＊	1/4	1次H2	
550	＊ ＊	□	11.0,高3.4	c	良	1/6	3次お17		585	＊ ＊	胴12.2	b	＊	1/10	2次ウ1		
551	＊ b	□	11.9	b	不良	1/8	3次か16		586	＊ Ba	□	9.8,胴13.2	＊ ＊	1/2	4次L2		
552	＊ b2	□	11.5	a	良好	1/8	4次D3		587	長頸壺蓋	□	12.6	a	＊	1/5	1次D1	
553	＊ ＊	□	13.2,高3.7	＊	良	1/5	3次い14		588	提瓶2長			b	＊	□片	3次え4	
554	＊ ＊	□	11.3,高3.8	c	＊	1/6	3次き11	重積	589	＊ 2	□	7.6	a	＊ ＊	＊ ＊	3次か14	
555	＊ b2丸	□	11.0,高5.0	a	不良	2/3	3次か15・16		590	蓋付壺	□	10.7	a2	＊ ＊	＊ ＊	1次E1	
556	＊ b	□	12.2	＊	良	1/4	1次G2		591	提瓶1	□	7.0	a	＊ ＊	＊ ＊	3次か19	
557	＊ (高坏形)	□	13.0,高3.6	b	不良	1/8	3次き・う10		592	＊ ＊	□	7.6	＊ ＊ ＊	＊ ＊ ＊	4次F3		
558	＊ a	□	10.6	＊	良好	1/8	3次う12		593	壺A	□	9.6	a2	＊ ＊	＊ ＊	2次エ1	
559	＊ c2	□	9.4	＊ ＊	1/6	2次ウ1		594	＊	□	11.0	a	＊ ＊	＊ ＊	3次く10		
560	＊ c2	□	9.4,高2.9	c	良好	1/6	3次え10		595	横瓶b	□	13.2	＊	不良	＊ ＊	3次え16	
561	坏Aa	□	13.8,高3.9	b	良	2/5	1次G2		596	＊ a	□	12.2	＊	良好	＊ ＊	3次お12	□内に 脱皮
562	＊	□	13.6,高3.5	＊	良好	2/5	1次G2		597	壺Bb	□	19.6	＊ ＊ ＊	＊ ＊ ＊	＊ ＊ ＊	3次う14	
563	＊	□	14.1,高3.2	a2	＊	1/4	3次き14	大塚	598	＊ a	□	20.2	a2	＊ ＊	＊ ＊	3次お8	
564	＊	□	13.0,高2.9	a	＊	1/4	1次E3		599	壺Cb	□	38.0	a	＊ ＊	＊ ＊	1次G2	
565	＊	□	13.6	a2	＊	1/6	1次H2										

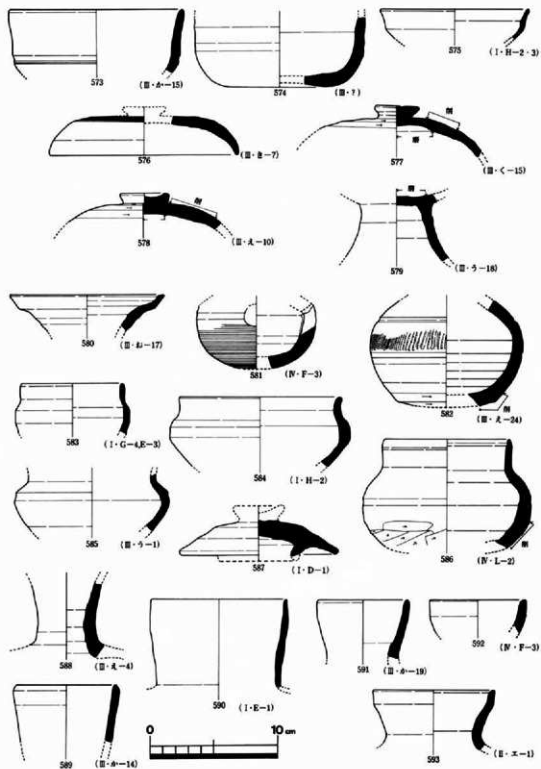
土 師 器 器 種															
番号	器種分類	法	量	胎土	残存	出土地点	備考	番号	器種分類	法	量	胎土	残存	出土地点	備考
600	高坏Aa脚			A	脚片	3次き9	内黒	608	甕Bc(C6)	□19.2,脚20.1	A	1/20	3次い14	外一部剥落	
601	魂d27	□13.2,高6.5	*	1/6	1次F3	*		609	* a(D1)	□19.8	*	1/12	3次い14		
602	* b2'イ	□12.4,高5.2	*	1/8	3次え6	*		610	* b(B1)	□16.8	*	1/30	3次く15		
603	* e2イ	□13.2,高4.6	*	1/9	1次F3	*		611	瓶b'4 (外2,内1)	□30.4	*	1/20	2次ウ1		
604	* e2エ	□17.4	*	1/10	1次E1			612	瓶a3	□26.6	*	□片	2次エ2		
605	小型罎A3オ	□27.0	*	1/15	1次F2	外底薄く僅		613	瓶把手		*	手片	3次い18		
606	甕Ab4	□13.5,脚16.0	*	1/12	3次え10	外底熱剥落		614	*		*	*	3次う11		
607	甕Aa3	□16.8,脚20.2	*	1/5	4次M2ピット	外全体剥落 内黒コゲ状		615	*		*	*	3次か11	甕C把手?	

次に、土師器食器具であるが、高坏と魂のみで、図示したものは少なく、いずれも破片の出土である。高坏は主に脚部破片のみで、A類が主体。魂は内黒と非黒色がほぼ同量程度であるが、破片も含めれば、内黒124/非黒色68の比率となって、内黒主体となる。器形は内黒がb類半数、e類1/3、d類少量、非黒がc類主体と定量のa類で構成される。

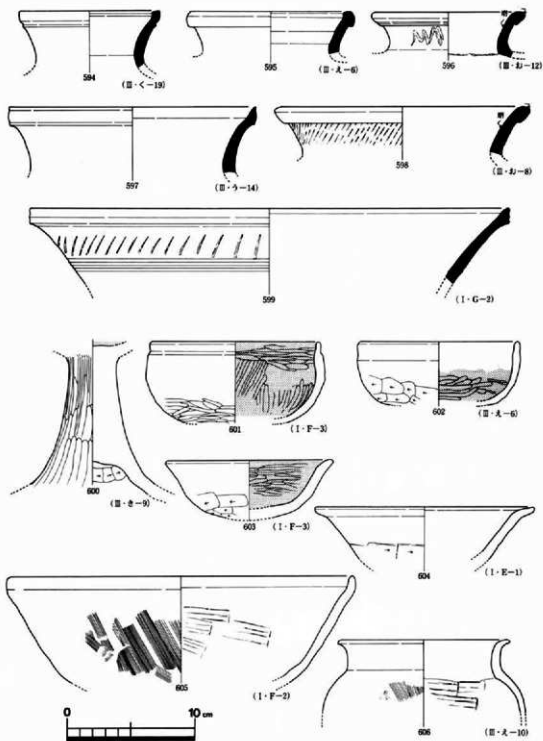
次に、貯蔵具器種であるが、土師器小型甕の破片が7点ある以外は、須恵器で、罎Aと提瓶A、甕が目立つ以外は、量としては少ない。罎Aは口縁部の段形成の部分で明瞭な稜をもつ1類と稜をもたない2類とがあるが、どちらも同量出土しており、液状文を施すものも定量見られる。短頸甕は無蓋のB類のみ。提瓶は量が多いが、胴部の破片と口縁部の破片のみで、口の長い2類タイプもあるが、通常見られるような1類が主体的である。甕も復元できるものはなく、胴部破片と口縁部破片で、胴部の破片のみであれば、20個以上出ている。横瓶も口縁部のみ。長頸甕は口頸部を欠損する胴部破片と蓋のみ1点づつ出土している。長頸甕は胴部に刺突文をもつ底面丁寧に削る良品で、胎土もc類ではあるが、精選された良質のものである。甕は小型A類は確認できず、中型B類と大型C類で構成される。C類は11個体、B類も11個で、B類口縁部はa類が5、b類6とほぼ同量である。さて、甕の破片には多くの胴部破片が出土しているが、2点以上接合したもののみ個体数として計算しているため、包含層で出土する須恵器甕破片の大半は、計算外となる。破片数では664点であり、その内容は右の表の通りとなる。叩きと当て具の種類を胎土別に上げたもので、叩きではやはりH a類が主体、当て具ではD a類が主体でそれは特にa胎土で顕著であり、b胎土では外面叩きがH b類、H c類のものが定量見られた。また、内面当て具のD b類が定量存在することが注目された。

叩き+当具	a胎土	a2胎土	b胎土	c胎土	合計
Ha+Da	190	99	104	14	407
Hb+Da	0	0	16	10	26
Hc+Da	1	0	11	0	12
He+Da	3	1	1	0	5
Ha+Db	42	0	20	0	62
Hb+Db	0	0	19	0	19
Ha+磨消	12	2	0	0	14
不明	92	7	20	0	119
合計	340	109	191	24	664

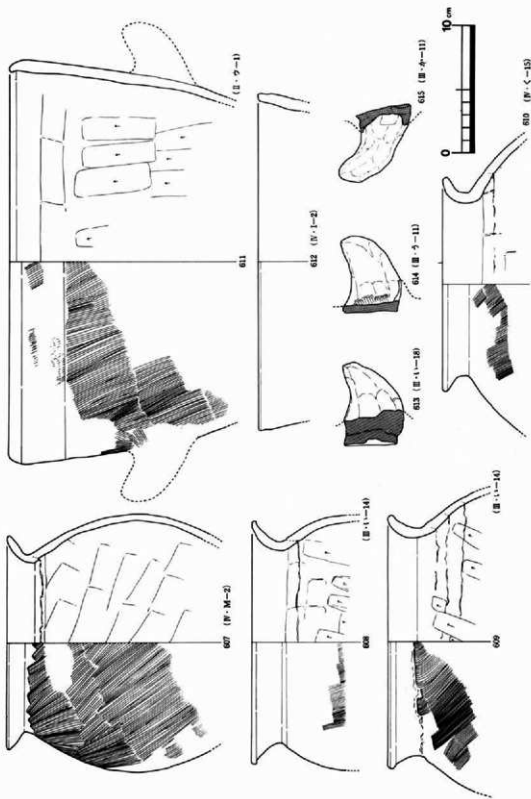
包含層出土須恵器甕叩きの胎土別構成



第177图 包含層出土土器(3) (S=1/3)



第178図 包含層出土土器(4) (S=1/3)



第179図 包含層出土器(5) (S=1/3)

次に土師器煮炊具であるが、ほとんど壺A・Bで占められ、小型鍋や甌は少ない。小型鍋はA類のみで、いずれも小破片のみ。甌の個体数は把手の個数で計算した。ただし、この中には壺C把手となるようなものも含んでおり、実際にはこれよりも少ない量となる可能性がある。口縁部は10個体分あり、丸く仕上げる1類が4、面形成する3類が2、端部内屈する4類が4ある。さて、壺であるが、Aの割合が比較的高く、Bの半数近くの割合をもつ。壺Aはa・b・c類いずれもあるが、b・c類が主体で、a類は少ない。図示した607のa3類は壺Aの中でも大型で、小型の壺Bという感じもあるが、外面全体に煤が付き、内面にもコゲが見られるような使用痕跡があり、使い方からA類に区分したものである。口縁部器形は2・3類が主体であるが、4類も定量見られるようである。壺Bはa類器形が主体で、口縁部器形はA系が25、B系が15、C系が43、D系が4、E系が3で構成される。一般的なCが最も多いのは当然であるが、A系、B系が比較的目的立った量をもっており、注目される。

以上、概観してきたが、最後に胎土について述べておく。右に示したものが須恵器と土師器の器種別の胎土構成である。須恵器胎土のa類はa類の中からa2類のみ抜き出したもので、a1類も含んでいる数値である。食膳具ではa類系が5割以上を占めるが、b類も多く、c類も15%の定量を占めている。これは貯蔵具でも壺・甌類に関しては同様の構成であり、壺類についてのみ異なる状況となる。壺はa類系が65%、b類が31%、c類が3%と、b類の率については食膳具とかわりないが、a類が1割以上高くなっており、その分c類が減っている。これは器種による胎土の偏重性と言えるものであり、時期による差というものもあるが、器種によって産地が異なる可能性を示唆する。なお、土師器については食膳具、煮炊具ともにA類が圧倒的主体で、他の胎土は混入品的に入る程度である。D類とE類が少ないながらも、存在している。

(以上 望月)

須恵器胎土	a	a2	b	c
坏A蓋身	125	43	105	53
坏B蓋身	1	1	2	2
甌AB類	7	3	3	1
高坏AB類	11	3	7	0
食膳具計	144	50	117	56
小型壺甌類	15	8	16	2
大型壺甌類	14	3	12	1
壺類	357	110	195	24
貯蔵具計	386	121	223	27
須恵器合計	530	171	340	83
土師器合計	A	B	D	E
食膳具	213	0	1	2
煮炊具	2659	20	1	0
土師器合計	2872	20	2	2

包含層出土須恵器・土師器胎土構成

7. 土器以外のその他の遺物

当遺跡からは土器以外の遺物が少なく、以下に述べる須恵質の紡錘車、石製紡錘車、砥石、打製石器、管玉状石製品、金属製耳飾り、鍛冶関連の鉱滓のみである。

須恵質紡錘車(1)

ほぼ平らな円盤形をなす。約4分の1が現存しており、径98mm、厚さ最大11mm(施孔部周辺厚

さ15mm)、孔径11mm、重量35.2gを計る。胎土は南加賀窯産のものである。中央部に両面から穿孔され、周辺には施孔の際に素地が押し出されて生じた出っ張りが、両面にそのまま残っている。また、孔内と施孔部に接した表面の一部に自然軸が観察される。なぜ孔内を覆うように自然軸が付着するのか疑問である。粗雑なつくりであり、表面にはゆるやかな凹凸がみられる。使用痕は観察されず、紡錘車としたが、舞錘法により火をおこす際の弾み車として用いられたもの、或いは把手の一部の可能性もある。3次調査区う12グリッド出土。

石製紡錘車(2～6)

2は、頂部径19mm、底部径32mm、孔径5mm、厚さ15mm、重量27.7g、淡褐色のタルク(滑石)製であり、断面はほぼ台形を呈する。底部の角を落としてあるため側面上部と下部が隈をもって明らかに区分されるタイプである。頂部は無紋、側面には格子入り鋸歯紋8つ、それをはさんで上部に2条、下部に1条、平行圏線が刻まれている。底部にも鋸歯紋を施そうとした明らかな痕跡が認められるが側面ほど明瞭なものではなく、紋様も崩れており、紋様の構成とは関係しない刻線も多く観察される。側面下部には面をもつ工具(砥石?)で研かれたような痕跡があり、他の面に比べてやや光沢がある。これがどのようにして生じたものかどうか判断しがたいが、最後にこの紡錘車に加えられた痕跡であることはほぼ間違いない。光沢が見られるのはこの部分のみである。21号住居埋土出土。

3、約3分の1が現存している。頂部径14mm、底部径33mm、孔径6mm、厚さ19mm、重量13.0g、明褐色タルク製、断面は他の紡錘車と比べ厚みのある、全体にまるみを帯びた台形である。頂部は2と同様に無紋である。側面には、ほぼ等間隔に縦に刻みがいり、これを目安にするかのように液状に紋様を刻んでいる。幾重にか施してはいるが、どの刻線も2に比べてかなり拙いもので、紋様もゆがんでいる。底部にも放射線状の刻線がはいっている。おそらく鋸歯紋を施そうとしたものと推測する。11号住居埋土出土。

4、頂部径18mm、底部径34mm、孔径6mm、厚さ14mm、重量31.8g、灰色タルク製である。2を少しつぶしたような、台形状の断面を有する。頂部から側面にかけて光沢があり、側面下部に特に強い。紋様は見られない。16号土坑出土。

5、約5分の2が現存している。台形状の紡錘車であるが、著しく摩滅しており、他のものにくらべ厚みがない。底部径38mm、孔径7mm、厚さ9mm、重量8.1gをはかる。4と同質の灰色タルク製で、やはり側面下部に強い光沢をもつ。もとは、4に近い形だったと推察される。28号土坑出土。

6、残存するのは、頂部および側面の一部のみで、重量1.2g、黒色タルク製である。頂部から緩やかに下降する側面上部にかけて、極めて強い光沢を有する。19号住居埋土出土。

砥石(7～14)

7、現存長83mm、厚さ最大29mm、重量281.4gを計る。石材は砂岩。扁平な角柱状で、先端が山高型を呈する。いづれの面にも擦痕がみられ、表面の一部にスプーンの背でなでたようなわずか

な凹が観察される。角に深く鋭い擦痕がいくつもみえるが、刃先を研いだものと思われる。15号住居埋土出土。

8、現存長65mm、厚さ最大24mm、重量93.4gを計る。石材は乳白色の凝灰岩である。表裏側面先端面ともに作業痕がのこる。表面には擦痕と打痕が残り、それを消すように半分が摩滅している。裏面は平らで、かすかな擦痕を残す程度である。2次調査区ア7グリッド出土。

9、現存長49mm、重量34.9gを計る。石材は乳白色の凝灰岩。方形の角柱状を呈す。四面とも研磨されている。3次調査区お4グリッド出土。

10、現存長42mm、厚さmm、重量12.5gを計る。研磨のため擦り減り扁平な形をしている。6mmほどの側面に刃先を研いだものと思われる深い擦痕がのこる。16号住居埋土出土。

11、現存長73mm、重量42.1gを計る。先端に5mmの孔が打たれている。紐等を通して釣り下げられていたものだろうか。孔に食違いがなく、一方の孔が他方よりわずかに大きいことから一方向から穿孔したものと考えている。石材は乳白色凝灰岩である。前面に細かい擦痕が観察される。21号土坑出土。

12、全長70mm、幅最大49mm、厚さ最大33mm、重量139.0gを計る。乳白色の凝灰岩。表面には無数の擦痕が、裏面には刃を打ちつけたようなキズがある。19号住居埋土出土。

13、重量33.0g、砂質泥岩。表面には刃先を研いだ鋭い痕があり、さらに煤が付着している。19号住居埋土出土。

14、重量23.3g、砂質泥岩。表面に擦痕が観察される。19・23号住居埋土出土。

打製石器 (15)

重量191.0g、石材は緑泥石片岩。板状の半月形を呈し、長い一辺に刃部がある。比較的軟らかい石質であり、何に使われたかは不明。5号住居埋土出土。

管玉状石製品 (16)

径19mmの円柱状で、現存する長さ30mm、重量13.0g、ヒスイ製である。中央部からやや片寄った位置に径7mmの穿孔がなされているが、その孔が食い違っている。硬い石材を用いていることもあり、両方から穿孔されたことが推測される。頸玉として用いられたものであろうか。14号住居埋土出土。

耳飾り (17)

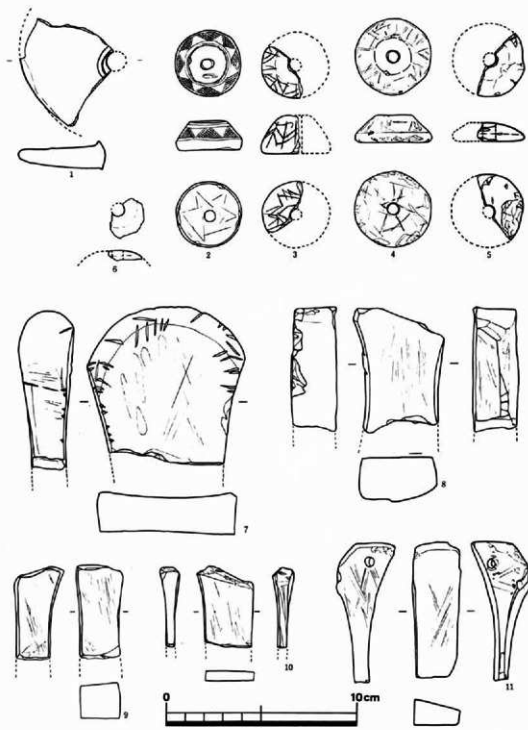
重量16.7g、長径31mm、短径27mmの楕円形をなし、地金の断面は円形である。もとは鍍金されていたであろうが剝離してしまっているため、表面は酸化し緑青色を呈している。地金は銅。

1次調査区F4グリッド出土。

(以上 橋)

鉄滓 (18~22)

鉄滓は図示した5点以外にも10点ほど出ており、計15点である。いずれもほぼ当該時期のものと見てよく、29号住居の床や21号住居の覆土下層、包含層から出土している。大半は、29号住居からのもので、遺構のところでも述べたように、29号住居では鍛冶遺構を連想させるような、焼



第180図 古墳時代後期のその他の遺物 (1) (S=1/2)

けた粘土塊や焼石、炭化塊、黒灰色砂質土が床面で分布しており、ここで出土する鉄滓がいずれも鍛冶滓である点とも符合する。

さて、29号住居出土の鍛冶滓は、18～20で、全体的に赤錆状を呈するものが多い。表面はゴツゴツしており、溶解したような面はツルツルと丸くなっている。比重は軽く、割ると中は細かな気泡が多く空いており、スカスカした感じ。磁着するものは少なく、金属探知機によるメタル反応はなかった。この中でも18は片面に青灰色の還元した土が着き、炉壁状。19は木炭痕が見られ、20は比較的この中では比重重く、砂粒が固まったような感じを受ける。19については大澤氏の分析調査を参照していただきたいが、鍛錬鍛冶に伴う碗形滓ということであり、他のいずれの29号住居出土のものも鍛錬鍛冶滓と考えて妥当であるという結果であった。大型のしっかりした住居であるため、工房とは思えないが、当住居廃絶後に鍛冶工房として利用した可能性もある。

これ以外の4点はいずれも29号住居以外のもので、21号住居の覆土下層から1点と、上層から1点、包含層から2点である。29号住居のものとは趣が異なり、比重は重く、メタル反応はないが、磁着するものばかりである。21はいずれの面も破面で、破面大きく、平滑、その破面に細かな気泡が空いている。所々赤錆状となっているが、全体的には青味かかった灰色を呈しており、擦ると、ザラザラとして細かな砂状になる。透明に光る結晶が全体に多く見られ、砂と光る結晶の集合体のような感じを受ける。砂鉄が焼結したような砂鉄製錬滓的である。これに対し、22は表面が酸化して赤くなっており、その面が溶けて流れたように液うっている。裏面は平滑で、酸化しており、土などは咬んでおらず、最も磁着の強い面である。側面はいずれも破面で、気泡極少なく、緻密であり、平滑な面を形成する。製錬に伴う流出滓と判断されるものである。これ以外のものは、鍛冶滓か炉内滓かと思われる表面がゴツゴツしたもので、比重は29号住居よりも重く、磁着するものである。

以上の鉄滓遺物出土の意義は、第1点として、当村落内で、鍛錬鍛冶が行われていたことである。炉自体は明確には捉えきれていないが、29号住居内で行われたと見てよく（住居廃絶後の鍛冶工房利用の可能性）、比較的多く出土している砥石なども関連の遺物なのかもしれない。次に第2点として、砂鉄製錬滓の出土である。さて、当遺跡では古墳時代後期より以前に遡る遺構はあっても、これを下る遺構の検出はなく、遺物にしても極少数の8世紀と11世紀の土器が出土するのみであり、時期が遡ることはあっても、下ることはまず考え難い。当該時期に伴う鍛錬鍛冶に伴う遺物として考えるのが最も妥当であり、そう考えれば、県内の砂鉄製錬滓資料としては最も古くなる。このような製錬滓の出土は、在地での鉄生産を想定させるものであり、これまでは7世紀後半からと考えられてきた（南加賀窯、運代寺遺跡の製鉄関連製炭窯が7世紀後半に位置付けられる）、南加賀窯における砂鉄製錬が半世紀、6世紀末～7世紀初頭まで遡ることとなる。これは、全国的な製鉄遺跡の増加期とほぼ一致するものであり、これまでも予測されて来たことであるが、当該時期に全国規模で行われた在地への基幹的生産業（生産基地）の普及施策の一環であると位置付けられるものである。（以上 望月）

第3項 小結

以上、古墳時代後期の遺構と遺物について説明してきたが、ここで当該時期の遺構と遺物の内容をまとめておきたい。

1. 遺物

ここでは出土遺物の考察を行うが、対象とするものは主に須恵器と土師器であり、その他の遺物については章を改めて考察している。さて、当該時期の土師器は、須恵器食膳具から判断するに、北陸古代土器編年（田嶋1988）Ⅰ₂期、Ⅲ₁期（飛鳥Ⅱ～飛鳥Ⅲ併行）まで下るものもあるが、その量は極少量であり、しかも包含層や土坑からの出土で、竪穴住居跡に伴って出土するものはない。大半は、北陸古代土器編年Ⅰ₁期（飛鳥Ⅰ併行）の範囲に入るもので、ややこれより潮りそうなものも少量ありそうであるが、主体はこの時期にある。まず、須恵器食膳具の変化を中心にして、当該資料のおおまかな編年の位置付けを最初に行っておき、その上で、当該土器群の器種構成、土器群の特徴等を述べてみたいと考える。

（1）須恵器食膳具の編年の位置付け

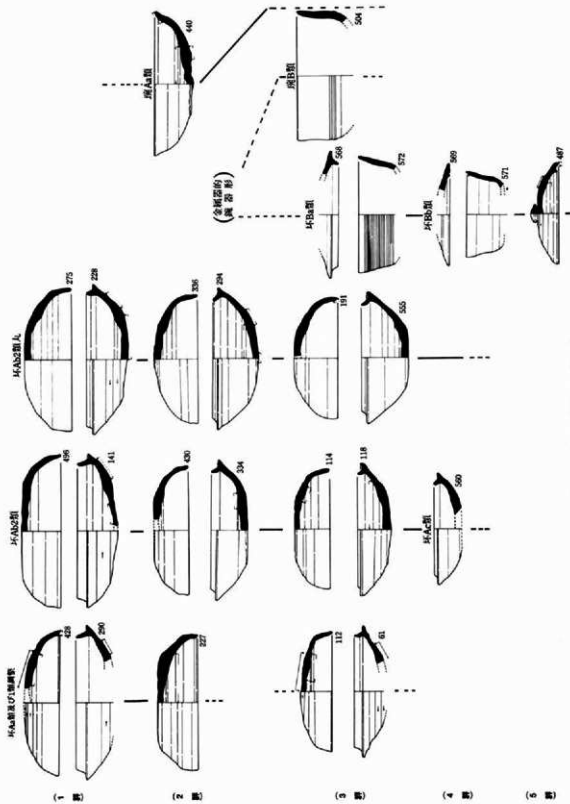
編年上の基軸となりやすい須恵器坏A（坏H）を主体にして、口径と口縁端部器形及び削り調整の有無から分類すると、1群須恵器～5群須恵器に分類できる。以下に各群の須恵器について述べるが、器種名は当器種分類名に則っている。

〈1群須恵器〉

坏A蓋口径が14.5～15cm程度、坏A身口径が13.5～14.5cm程度を測る一群で、蓋の口縁端部が内傾面を形成するa類が定量存在し、身の立ち上がりもやや立ち気味で存在する傾向をもつ。全体的にまだ口縁端部などにシャープさを残す傾向があり、底部切り離し面の広いものが多い。このために、底部切り離し後の削り調整も少ないながら定量あり、成形台切り離し時の補助削りも目立つ傾向にある。出土量は少なく、これのみで構成される一括土器はないが、18号住居跡と19・23号住居跡、20号住居跡の上層埋没土からややまとまって、21号土坑や12号住居跡、15号住居跡からも少量出土している。

〈2群須恵器〉

坏A蓋口径が13.5～14.5cm前後、坏A身口径が12～13.5cm前後を測る一群で、蓋の口縁端部に内傾する面を形成するものが僅かながら残存するが、ほぼ丸く仕上げる器形に統一される傾向にあり、全体的に作りにシャープさを欠いてくる。基本的に底部切り離し面はかなり小さくなってきており、削り調整をしなくても全体的に底部を丸く作り上げる傾向にある。一部器種によっては、削り調整が残るが、基本的には消滅の段階にあり、製作技法が大きく転換する段階にある（北野1993）。身の口縁端部立ち上がりは、やや寝る傾向にあり、口縁部高は0.5～1.0cmにまとまる。さて、当群には坏Aとは系譜を異にする新しい坏Bに繋がる金属器模倣の蓋坏が出現してくる段



第182図 須磨器式器具の変化 (S=1/4)

階にあるが、19・23号住居の蓋付き鍋の298が、そのような初期の金属器模倣の蓋坏器種と言えるものであるかはやや確信できない。ただ、蓋坏器種には直接繋がらないが、11号住居の高脚鍋の123は確実に当該階に位置付けられるような金属器模倣器種であり、このような器種が新出する段階として位置付けたい。また、当該階には、無蓋の碗器種が加わるが、これは坏A蓋の器形・技法と同一のものであり、坏A蓋を身として製作したものである。坏A蓋の身としての使用は恐らく、これよりも以前から行われていたものと予想されるが、蓋も身も食器として頻繁に使用されるようになったのは、食器の須恵器化が一層進行するであろう当該階であると予想され、それがこのような坏A蓋の口縁部を外反させただけのような器形を生み出すこととなったものと予想する。さて、出土量は、1群須恵器に比べて多く、本遺跡出土須恵器の一翼を担う須恵器群である。まとまりをもって出土するケースが多く、1群須恵器と共伴する遺構が多い。1群須恵器で述べた遺構は、ほとんどが2群須恵器を共伴しており、2群須恵器の方が主体的であるものが多い。これら以外にも、4号住居跡、5号住居跡、21号住居跡、25号住居跡、26号住居跡、28号住居跡、29号住居跡、16号土坑でも定量出土しており、こちらでは3群須恵器と共伴する場合が多い。

〈3群須恵器〉

坏A蓋口径が12～13.5cm程度、坏A身口径が10.5～12.5cm程度を測る一群で、2群須恵器よりも確実に小型化してくる。蓋の口縁端部に内傾面を形成するものはなくなり、1群須恵器の様相を払拭する動きが看取でき、製作技法も、2群で見られた底部切り離し面を小さくして、全体的に丸底に作る新しい技法は、当群でより顕著となり、浅身のものでも面を作らないものが主体的となる。また、このような動きの一方で、2群において消滅傾向にあった削り調整が、再び目立つようになる。ただ、これは、前技術の復活というよりも、当該時期に定量出現してくる坏B器種の精製品としての意識が削りを復活させたもので、前段階の流れとは切り離されて存在するものである。さて、当群からは2群の金属器模倣器種から発展的に定型化された器種が出現してくる。有紐蓋をもつ坏型器形の坏Bと体部沈線をもつ無蓋碗Bで、当群須恵器のメルクマールとなる器種であるが、量は極少なく、坏Aの5%にも満たない量である。当群須恵器の特徴は、日常食器的なイメージの強い坏A器種と祭器的なイメージの強い精製品器種（精製作りの坏Aや坏B、碗B）とが明瞭に作り分けられることであり、このような段階を踏むことによって、一層須恵器の中から祭器としてのイメージが欠落して行く。さて、当群須恵器は、2群須恵器同様、本遺跡出土須恵器の主体を占めるもので、2群須恵器と共伴する4号住居跡、5号住居跡、21号住居跡、25号住居跡、26号住居跡、28号住居跡、29号住居跡、16号土坑を初めとして、3群須恵器ではほぼ構成される遺構も、3号住居跡、11号住居跡、14号住居跡、16号住居跡で確認される。

〈4群須恵器〉

坏A身口径が10cm未満のもので、坏A器種の終焉段階に位置付けられるものである。蓋の確認はなく、蓋と身とがセットで使用されるイメージは既に欠落している器種と予想する。これに対し、蓋坏器種として定着するのが坏B器種で、この器種に関しても坏A同様、口径は小型化し、蓋で10cm台程度、身で9cm前後となる。須恵器の坏類で最も小型化する段階であり、新しい組成

へと転換する一種のモラトリアムと言える。さて、当群須恵器は3群須恵器からその量は激減し、遺構覆土上層や包含層で極少量確認されるだけである。遺物量から考えるに、集落群としては移動した後のものであると予想でき、次の5群須恵器とあわせ、集落として機能する場ではなかったものと予想する。

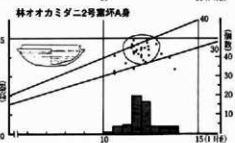
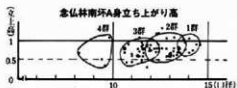
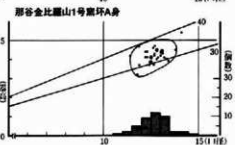
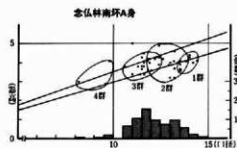
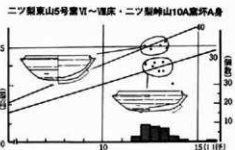
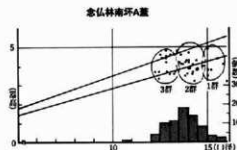
（5群須恵器）

36号土坑から出土する坏B蓋の完形1個体のみで、他は確認していない。坏Bは3群、4群を経て、食器として確立した段階のものであり、蓋口径で11cm台と、4群から大きくなっている。この36号土坑は墓坑と考えているもので、4群須恵器でも述べたように、当遺跡が集落として機能する場ではなかったものと考えられる。

以上、各群の須恵器食器の内容を述べてきたが、これらを既存の編年観や南加賀窯の基準資料と対比する必要がある。しかし、各群須恵器が必ずしも、単独で須恵器窯資料と合致する様相もっているものではなく、あくまでもその窯資料の中での標準的なものとの対比である。

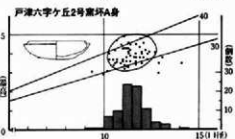
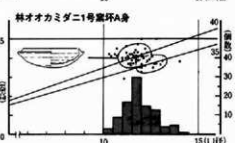
まず、2群須恵器と3群須恵器であるが、北陸古代土器編年I₁期に位置付けられることでは異論のないところであろう。当期は定型化した坏B（坏G器種）を組成の中に含むか含まないかを主要素として、古段階と新段階に細分しているのであるが（田嶋1988）、当然、坏A自体にも変化はあるわけである。そこで、坏Aの中での変化を見るため、坏A身の法量変遷図を示した。南加賀窯編年V期（望月1990）とされる二ツ梨東山5号窯VI～VII床と二ツ梨峠山10-A号窯から、I₁期古段階とされる那谷金比羅山1号窯、新段階とされる林オオカミダニ2号窯、同1号窯、戸津六字ヶ丘2号窯で、明瞭に口径が小型化へ推移している様子が読み取れる。いずれの窯資料でもピラミッド型に法量分布のバラツキがあり、単品での判断は困難な状況にあるが、中心的な法量は明瞭に推移しており、法量分布のみでの判断も可能である。ただし、このような分布変遷に対応していない資料も存在することは確実であり、他の要素、例えば、蓋口縁端部内傾面形成の残存度合いや身立ち上りの内傾化、底部丸底切り難し製作技法の転換度合いなども重要な判断材料となる。窯差についても十分考慮する必要があるが、坏Aのみでの変化は、那谷金比羅山1号窯から戸津六字ヶ丘2号窯まで流れをもっており、坏B器種で未だ金属器的様相を残存させる林オオカミダニ2号窯を多分に古段階からの過渡的様相を含んだ時期に位置付け、整理して考えれば、身口径12～12.5cmを標準的な法量の境目に見ることは可能であり、他の要素も加味しながら、2群須恵器を古段階、3群須恵器を新段階に位置付ける。

このようにI₁期の中でも、微妙な変化を逃がしている訳で、当然、I₁期以前の南加賀窯編年V期の二ツ梨東山5号窯VI～VII床、二ツ梨峠山10-A号窯の間にも暫時変化する様相が存在する。1群須恵器自体の特徴は、削り調整の残存や蓋口縁端部のシャープな内傾面の形成、法量の大きさなど、標準的に見れば、南加賀窯編年V期に該当する内容なのであるが、古代I₁期古段階に位置付けられる那谷金比羅山1号窯の法量分布を見ると、この時期のものとなり重複する



環A身口徑分布実測表

	9	10cm	11	12	13	14	15cm (1H)
ニツ梨東山5号Ⅵ～Ⅷ床						
那谷金比羅山1号						
林オオカミダニ2号						
林オオカミダニ1号						
戸津六字ヶ丘2号						



第183図 環A法量分布とその実測 (1/2)
(土器図はS=1/8、望月他1990、沢辺他1993、宮下1987より転載)

領域におり、法量からの識別ではそのようなものも含んでいることは事実である。ただ、I期での、口縁部形成の消滅傾向と底部丸底化傾向（丸底製作技法への転換）を念頭に置いた区分での2群須恵器設定であるため、基本的にはそれに先行する須恵器群であり、南加賀窯福年V期に位置付けられるのが妥当である。

次に、4群須恵器、5群須恵器であるが、4群須恵器は3群須恵器に後続する、北陸古代土器福年I2期、5群須恵器はII期にそれぞれ位置付けられる。

(2) 器種構成について

以上、各須恵器群について述べたが、ここで遺跡全体での器種構成について提示すると、以下の表となる。4・5群須恵器は極少量であり、土師器についてもこの4・5群に伴うようなものは極少量と判断され、つまりは、以下に示した器種構成は1・2・3群須恵器に伴うものといことになる。さて、大別器種での構成率は食膳具33.5%、貯蔵具12.0%、煮炊具54.5%であり、ほぼ同時期の村落遺跡である松梨遺跡の資料（食膳具61.9%、貯蔵具13.3%、煮炊具24.8%）と対比すると、貯蔵具比率はかわらないが、食膳具と煮炊具の量比が逆転している。つまり、煮炊具主体の構成と言えるわけであるが、概して堅穴住居主体の村落遺跡では、松梨遺跡のような掘立柱建物跡を主体とする村落よりも、煮炊具率が高い傾向をもっている。この食膳具比率と煮炊具比率は遺跡のランクを示す可能性が提示されているが、カマドという炊事場遺構が検出される遺構と土坑などの一括廃棄遺物とでは、やはり出方に大きな偏りが見られることは確実であり、遺構としての種類にも大きく関連するものであると言える。同質の条件下での対比が必要と言えるが、良好な対比資料がないため、何とも言い難い。

さて、次に、食膳具での須恵器と土師器の比率について注目したい。当資料の須恵器率は63.7%で、この率は松梨遺跡の同期資料の食膳具須恵器率57.5%と近い数値である。食膳具器種における土師器から須恵器への置き換え現象は在地での須恵器生産が開始されるTK47型式以降進行し、MT15型式～TK43型式併行期では、須恵器率は60%前後まで増加している（田嶋1989）。

須恵器食膳具 個体数計669 (21.4%) 食膳具内須恵器比63.7%

	環A壺	環A身	環B壺	環B身	環A	環B	罎	甕?	鉢	高環A壺	高環A	高環B	高脚罎	すり鉢
個体数	274	272	5	5	18	2	2	5	A1,B1	12	49	21	1	1
(%)	41.0	40.7	0.7	0.7	2.7	0.3	0.3	0.7	0.3	1.8	7.3	3.1	0.1	0.1

須恵器貯蔵具（土師器貯蔵具も含む） 個体数計376 (12.0%) 貯蔵具内須恵器比91.0%

	壺	短頸壺A	短頸壺B	長頸壺	提瓶	横瓶	蓋付壺	甕類	甕A	甕B	甕C	甕類	土師器小型壺
個体数	A36,B1	4	6	蓋1,身1	A23,B2	6	3	48	1	43	24	143	34
(%)	9.8	1.1	1.6	0.5	6.6	1.6	0.8	12.8	0.3	11.4	6.4	38.0	9.0

土師器食膳具 個体数計381 (12.2%) 貯蔵具内土師器比36.3%

	高環	内環壺	赤環壺	赤環壺	手付壺	蓋
個体数	88	134	156	1	1	1
(%)	23.1	35.2	40.9	0.3	0.3	0.3

土師器煮炊具 個体数計1,705 (54.5%)

	小鍋A	小鍋B	甕A	甕B	甕C	瓶
個体数	79	15	366	1,150	14	81
(%)	4.6	0.9	21.5	67.4	0.8	4.8

確かに、当該時期を主体とする小松市域の集落遺跡（銭畑遺跡）を調査した時には須恵器率9割近くを占めていたわけで、かなりの率で須恵器食膳具が普及していたものと予想されるが、置き換えというイメージでは、かなりの量の土師器碗が依然として存在している。この土師器碗は須恵器と同一レベルで使用されていたものと予想され、当段階においては、食膳具器種を須恵器に統一するという意識は希薄であったように思う。須恵器が食膳具として定着し、須恵器＝食膳具としての意識が確立するのは、I₂期のようなモロトリアムが過ぎて後の、食卓食器としての形・質を備えたものに変化した以後のものであり、これによって、伝統的な土師器食膳具は一度終焉し、代わって、これまで須恵器が担っていた祭器としての機能を具備した内外赤彩の特殊容器として生まれ変わったものと理解する。これをもって、完全に須恵器と土師器は役割が交替したものであり、古代的な様式が確立されて行ったものと予想する。

さて、次に、各須恵器群に区分した中で、伴う可能性がある土器群における構成比率を提示してみる。以下の表がそうであるが、1・2・3群で明瞭に区分することはできず、特に1群須恵器は他の須恵器とともに構成され、主体をなすことがないため、2群主体で構成される土器群と3群主体で構成される土器群の内容を提示してみる。まず、大別構成であるが、どちらも食膳具比率は3割程度であり、大きくは変化ないが、全体での須恵器率を見ると、2群で32%に対し、3群では27.3%に低下している。これは食膳具の須恵器率もあるが、大きくは貯蔵具量の差で出ているもので、時間的な変化というよりも遺構や遺跡としての性格によるものと考えられる。

さて、個別器種の変化では、まず、食膳具器種における、須恵器高坏Aと土師器高坏の低下、そして、内黒処理土師器主体（内黒処理の高坏も含めての主体化）から非黒色土師器主体傾向への転化が上げられる。須恵器高坏Aの低下は須恵器窯においても顕在化してくる時期であり、高坏の無蓋化という流れに則したものと評価できる。また、土師器高坏では大型のA類は減少傾向にあり、高坏自体は7世紀後半まで残存するが、B類主体である。さて、土師器碗における内黒主体から非黒（無垢）主体への動向は、須恵器食膳具の供給が少ない北加賀地域ではさらに顕著

2群須恵器主体で構成される古い様相が主体的な土器群（15号住居、18号住居、19・23号住居、29号住居）

	須恵器食膳具							土師器食膳具					須恵器貯蔵具				土師器貯蔵具				土師器煮炊具			
	坏A蓋	坏A身	高坏A	高坏B	碗	鉢	钵	高坏	内黒碗	赤黒碗	赤黒鉢	赤黒甕	小甕	小坏A	小坏B	甕A	甕B	甕C	甕					
個体数	37	46	4	4	A2	2	1	25	15	15	6	5	13	34	10	8	2	41	217	3	13			
(%)	23.0	28.6	8.7	2.5	1.2	1.2	0.6	15.5	9.3	9.3	8.8	7.4	19.1	50.0	14.7	2.8	0.7	14.4	76.4	1.1	4.6			
大別	食膳具計161(31.4%)							須恵器計65.8%					土師器計34.2%				貯蔵具計68(13.3%)				煮炊具計284(55.4%)			

3群須恵器主体で構成される新しい様相が主体的な土器群（3号住居、11号住居、14号住居、16号住居）

	須恵器食膳具							土師器食膳具					須恵器貯蔵具				土師器貯蔵具				土師器煮炊具			
	坏A蓋	坏A身	高坏A	高坏B	碗	鉢	钵	高坏	内黒碗	赤黒碗	赤黒鉢	赤黒甕	小甕	小坏A	小坏B	甕A	甕B	甕C	甕					
個体数	44	46	2	5	1	B1	12	23	33	12	6	1	3	32	15	3	73	230	2	16				
(%)	26.3	27.5	1.2	3.0	0.6	0.6	7.2	13.8	19.8	22.2	11.1	1.9	5.6	59.3	4.4	0.9	21.5	67.8	0.6	4.7				
大別	食膳具計167(29.8%)							須恵器計59.3%					土師器計40.7%				貯蔵具計54(9.6%)				煮炊具計339(60.5%)			

で、金沢市千木ヤシキダ遺跡D区包含層資料ではMT-15型式の下層境からTK209～TK217型式の下層Iへと食膳具の須恵器・内黒土師器・非黒土師器の内訳が、18.2%・63.6%・18.2%から15.0%・25.0%・60.0%へと変化しており、内黒から非黒へと割合が全く逆転し、内黒の3倍の量にまで増加している（出越1991）。これは3群須恵器にほぼ併行する野々市町御経塚ツカダ遺跡80-5号住居の一括遺物でも言えることで、ここでは内黒土師器は確認できず、非黒土師器のみで構成される（吉田1984）。念仏林南遺跡の非黒土師器への転換はあまり顕著な形では見えないが、このような一連の変化の中にあるものであり、須恵器坏Aなどの製作・焼成技法の変化（削り調整による丸底化から底部丸底成形技法への変化と良質焼成から焼き斑のある焼成、焼きの変化については北陸古代土器研究第5号に詳述してあるので参照されたい）に対応するかのようにより、磨きを多用し内黒焼成する必要のある、製作に手間と技術を要する内黒土師器から、調整と焼成が簡素化された非黒土師器へと転換することは同一の動きの中で顕在化したものであり、その背景には、食膳具の普及という大きなテーマが存在していたものと予想する。このような大量生産の波をくぐって初めて、食膳具器種は普及・定着したものであり、その次の段階として、実用食器としての形と焼きが生成されて行ったものと思われる。

次に、貯蔵具であるが、最も顕著な変化と言えば、2群で15%の定量存在していた土師器小型壺が、3群では確認できないことである。当器種は内黒焼成する器種で、壺の内黒減少に呼応する流れなのであるが、土師器貯蔵具がこの段階まで残ること自体特異なことであり、当器種の終焉をもって土師器貯蔵具は須恵器に全てとってかわられる。これも古墳時代的な器種組成からの脱却と言えるものであろう。

さて、次に煮炊具だが、壺Bが主体で、2群でも3群でも最も多い器種である。ただ、2群での76.4%から3群の67.8%へ、1割近く量を減らしており、代わりに壺Aや小型鍋A・B類の小型煮炊具が増加している。小型鍋は3.5%から5.3%へ、壺Aは14.4%から21.5%へ増加。この小型煮炊具の3割弱という数値は、松任市北安田北遺跡の8世紀代堅穴住居資料の小型煮炊具31%という数値に近いものであり、6世紀代の小型煮炊具量に比べれば、大きな変化である。小型煮炊具の定量存在の意味は、それまでの基本的には一法量のみであった煮炊具からの法量分化による機能分化であり、当段階ではその使い分けは未だ不明確な部分を残すが、カマドの出現とともに、定着の動きを見せる訳である。

（3）当土器群に見られる各器種の特徴

これまで、須恵器坏Aを中心とした編年区分の問題、そして編年区分に基づいた器種構成の変化について述べてきたが、次に、各器種に見られる当土器群の特徴をまとめてみたい。

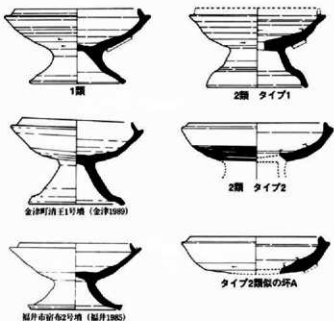
須恵器群の設定では、1群から5群まで変化することは述べたが、主体となる土器群は2群と3群のみで、極短期間に集中する土器群である。他の器種については、須恵器のように細かな変化を追うことは難しく、個別器種での変化はここでは取り上げず、2群・3群須恵器に伴う土器

群ということで、全体での当土器群の特徴をまとめることとする。

a. 須恵器食膳具

坏A・坏Bについては詳しく述べたが、他の器種については、説明していない。ここで取り上げる必要があるのは、高坏であり、特に当遺跡で目立った高坏Aの低脚タイプについて述べてみたい。低脚タイプの有蓋高坏は、当遺跡で有蓋高坏の6割近くを占めるものであるが、南加賀地域では稀な出土であり、これだけの量を出す事例は確認できない。当該時期の須恵器窯においても、6基調査したうちの3点のみの確認であり、当地域ではいかに例外的であるかがわかる。ところが、福井県に入ると、この状況は一変し、金津町の清王古墳群1号墳や福井市宿布古墳群2号墳、福井市天神山古墳群10号墳など、定量の低脚タイプの有蓋高坏が出土している。須恵器

の組成自体有蓋高坏の量が目立つのであるが、有蓋の中でもその比率は高いものがある。福井で出土する低脚有蓋高坏を見ると、いずれも当遺跡で分類した脚部基部の細い1類に該当し、当遺跡で大半を占める2類は確認されない。2類でも坏部分が通常の坏A器形と同様のタイプ1については、蓋の脚部が付いたものと考えれば、さほど違和感はないが、このタイプ1は図示した1点のみで、他は厚手で口縁部立ち上がりを短く丸く仕上げる独特な器形を呈するタイプ2である。これは一部ヘラ削りするものもあるが、底部カキ目



第184図 須恵器高坏Aa類対比図 (S=1/4)

調整するものが主体的で、蓋のカキ目調整と対応している。2群須恵器に共伴する場合が多く、古手の一群に主体的に存在する器種であるが、3群でも共伴しており、一括で供給された土器群ではない。ただ、この独特の器形から察するに、窯場は同一であった可能性が高く、坏A身でも類似した口縁部器形が確認できる。この器形のもは底部厚手で、平底状を呈し、極稚拙な作りをしている。器種としては搬入的なのではあるが、作りに関しては在地色の強いものである。

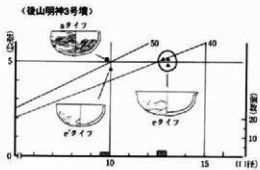
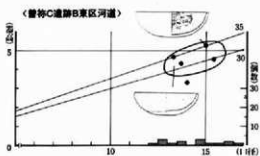
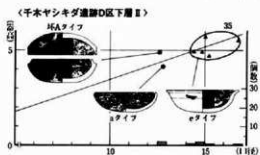
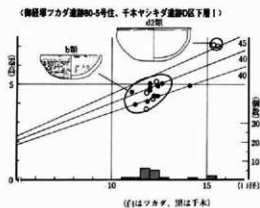
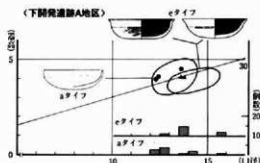
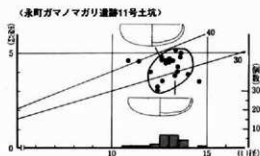
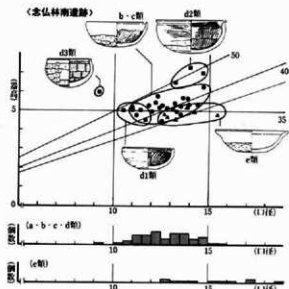
b. 土師器食膳具

土師器食膳具は高坏と埴にはほぼ限定される。両器種とも個体数は多く、図示できたものも多い。

まず、埴であるが、内黒と非内黒とが均衡した量で存在する。内黒には内面磨きという決まった調整が伴うが、それ以外は、基本的に分類した各器形において互換性がある。ただし、傾向と

しては、b類・d類・e類には内黒が多く、a類・c類には内黒がほとんどないという偏在性は確認される。さて、第185図には法量分布図が示してある。当資料はb・c類が主体となる器形であるが、口径は11～15cmの間で分布し、特に12～14cmにまとまる傾向がある。器高は5cm前後、径高指数40前後に分布する。これらは口縁部内湾器形のものであるが、内湾した後口縁部外屈するd類もほぼ似通ったところで口径分布している。総体的に深身のもので、径高指数は50前後に分布し、底部が極丸底となる器形を呈す。やや大型のものは鉢として器種分類されるケースが多く、丁寧な磨き調整が施され、ほぼ内黒で構成される。これら口縁部内湾系統の器形のものに対し、口縁部外反するe類は一回り大きな口径で分布する。12～13cm台の小型のものも存在するが、15cm以上の大型のものも定量あり、径高指数が35前後で分布するものが主体的である。

さて、当遺跡の壙塚について、同じ加賀地域の中での時間的変遷を捉えるために提示したのが図の右列の分布図である。上から5世紀後葉、5世紀末～6世紀初頭、6世紀中頃の順で示してあり、法量もそうであるが、伴った器形変化も読み取れる。さて、ガンマノマリ遺跡の段階は口縁部内湾器形のa類系統のみで、器高にややばらつきはあるものの、口径分布は13cm前後によくまとまる。この段階はまだ内面黒色するものはなく、意識的に赤く発色させるために赤色酸化粒を粘土に混ぜ合わせている（田嶋明人氏が赤色土器と呼称するもの）。初期の段階の壙であり、底面丸底のものであるが、一部柱状に肥厚した底部が付くものも見られる。さて、これが次の下開発遺跡A地区の段階になると、内黒が定量加わって来る。口縁部内湾器形のa類にも1点のみ確認できるが、極例外的で、口縁部外反のe類に主体的に確認できる。e類器形は当段階から出現するもので、定量存在し、a類に近い量比で確認される。詳しい量比率は分からないが、内黒よりも、まだ主体は赤色土器にあるようで、a類ではその大半が、e類においても半数近くは赤色土器のようである。口径はa類がやや小型化し、口縁部外反のe類と明瞭に分布域を分ける。これが次の段階になると、土師器壙よりも須恵器坏Aが食膳具の主体を占め、南加賀では土師器壙の良好な一括資料が確認しにくい。よって、ここでは須恵器食膳具の供給が少ない北加賀の資料（千木ヤシキダ遺跡D区下層Ⅱ）を使用する。若干の様相差は加味する必要性はあるが、それでも、かなり主体的に内黒が存在すると予想している。器形は口縁部外反のe類が主体的で、器高高くなり、15cm台の大振りが目立つ。内湾器形のa類は前段階と口径は変わらないが、低くなり、e類と別の変化をたどる。さて、当段階の特徴の一つに赤色土器の衰退が上げられる。赤色土器は意識的に赤を発色させた良品であり、古墳時代的な色彩をもつ土器群と言える。それが衰退する傾向は、内黒土器の増加に呼応する流れであり、土器食器として、美的感覚よりも実用性を重んじる意識が高まったことを意味するものと考えられる。ただ、同時期に位置付けられる後山明神3号墳の主体部内出土の土師器壙では、赤色土器が健在であり、器形・法量も千木とは異なる良品である。消費の場にあわせて、作り分けされていたものであり、供献用土器としてはその後も少ないながらも存続している。その後の資料は、念仏林南遺跡となるが、a類器形はほぼ消滅段階にあり、同じ内湾器形のb・c類が主体的となる。赤色土器は皆無に近く、内黒も無垢の土



※分布図中のドットは丸を内湾器形のa・b・c期、三角を外反器形のe期、四角を内湾後の外反器形のd期としているが、須恵器環A器形のものについても四角で示した。

第185図 土師器境の変遷と量分布 (土器は1/8)
(土器図は吉田1984、出越1991、岡本1995、田嶋他1987、北野他1988、櫻田他1989より転載)

師器も同様の胎土で、煮炊具ともさほど大きな違いは感じられないようになる。さて、b・c類のa類との違いは、体内内湾器形から外傾気味への転換、底面形成、外面磨き調整の欠落などで、同じ口縁部内湾器形を呈すが、基本的にはa類系統とは異なる系統のものとして考えている。法量は比較的広い範囲で分布するが、全体的に器高高目のものが目立つ。e類は減少傾向にあるが、定量存在し、以前と口径分布域も似通っている。ただ、碗底部の大きさは確実に小型化しており、その分口縁部外反が長くなっている。この器形でも内黒率は低下し、非黒色も定量存在する。さて、当段階で顕在化する器形として、口縁端部が外屈して上に面形成するd類が上げられる。この器形は、口縁端部面形成する点とやや深身である点を考えれば、下開発遺跡の段階で定量存在するようであるが、次の段階ではあまり目につかないものであり、当段階で確認できる小型のd1類と大型深身のd2類との分化の様相とも大きく異なる。内黒率が高い様相は古い形態を残すものであるが、外面にも磨きが入っており、精製品の感覚であったものと予想する。この器形・法量は内黒タイプでない場合、内外面磨きの赤色土器として存在し（御経塚ツカダ遺跡や法皇山横穴群で存在）、明らかに精製品の感覚で供献土器や祭器として位置付けられていたものと予想する。そう考えれば、端部面形成と法量の共通性から、都城などで出ている飛鳥I型式併行の放射状暗文の入る土師器坏Cがその祖形として浮かび上がる訳で、当地域の資料に暗文が入るわけではないため、直接的には結びえないものの、該期の食器組成が金属器模倣器種などの導入期であり、都城の土器様式を導入して来る初期の段階にあるため、時代的な可能性は高いものと予想する。

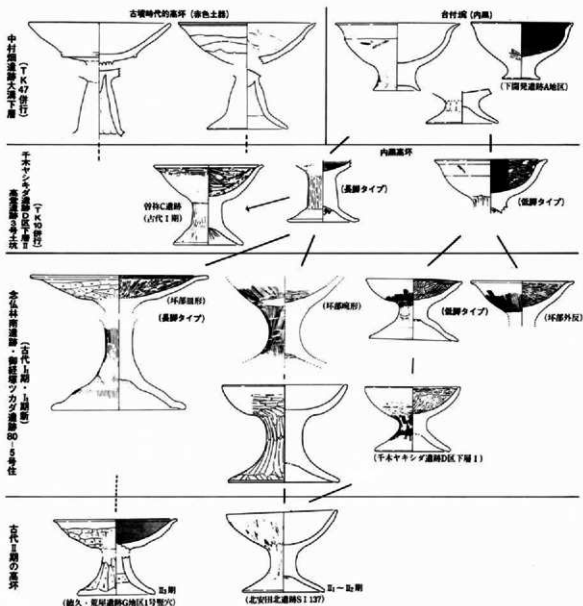
さて、地域的な対比をするために、念仏林南遺跡と同時期の資料を左の列に上げているが、器形的にはb・c類が主体である点、極共通した様相を呈している。しかし、内黒率で見ると、御経塚や千木などの北加賀では大半が無垢土師器で占められるように、確実に内黒率が低下しており、法量も小型の領域にまとまる傾向が看取できる。これに対し、能登地域の曾祢C遺跡では同じような器高ではあるが、口径が確実に大きく、内黒率も高いという特徴が見られる。時代的に碗の小型化や黒色率の低下の方向性にあるため、内黒碗が残存する地域であるかどうかという事になるのであるが、西から東へという単純な地域差ではなく、波状的に展開されていたものと考えられる。内黒碗は、ほぼこの時期を境に、衰退・消滅して行く訳であるが、それと同時に無垢の碗であっても、同様の器形のもはここで終焉を迎えている訳で、古墳時代的な碗の終焉期として位置付けできる。これに変わって、登場するのが、畿内系と言えるような赤彩碗や赤色土師の碗であり、再度、実用器としての性格から、祭器としての性格を帯びるものへと転換している。以後、再度内黒碗食器が出現する9世紀前葉までは、主に祭器的な土器として存在しており、実用器としての立場は、この時期から生産量を確実に向上させ、食卓土器として安定した器形に転換する須恵器坏類に譲っている。

さて、最後に、内黒碗の出現について、若干考えを述べたい。当地域での内黒碗の出現は下開発遺跡の段階にあると推察されているが（田嶋1986）、これは北陸のみの様相でなく、内黒碗が

分布する北陸から東国にかけての広い地域においてほぼ共通するものである（ただし、信州と群馬のみTK23型式まで潮る可能性があり、太平洋側の関東と東海東部はTK10型式まで下るといふ地域的なズレは存在するようである。長谷川1989）。特に内黒が導入される器形を見ると、口縁部外反する器形に目立って多い地域が東北日本海側と信州において確認され、共通する様相を呈している。ただ、東北日本海側や信州では埴出現の5世紀後半頃から既に口縁部外反ないしは外屈する器形（d類）が存在し、加賀地域のような内黒埴とe類器形の出現とが一体をなす状況とはならず、北の地域の方がe類器形を先行的に導入している。このことから、埴の内黒化は北からの流れで出現したとすることも可能であるが、太平洋側はこれとは異なる器形のものに内黒を導入しており、かなり錯綜した状況にある。また、一方では、埴全般であるが、器形や細部技法において須恵器杯Hの模倣とする状況もあり、一概には言えない。ただ、この内黒埴の展開が古墳築造の展開や初期の段階での須恵器供給圏と必ずしも合致しない状況は、西からの流れでの展開を予想しにくくさせており、東国の中で出現・普及した可能性を考えたい。この問題は簡単に答えが出るものではなく、資料を集め、再考の機会をもちたいと考える。

次に、高坏について述べる。高坏は長脚大型のA類と低脚小型のB類に分けられ、さらに細部器形や調整で細分している。いずれも坏部内面を黒色とするもので、内黒となっていないものでも、内面磨きは丁寧に行われていることから、焼成が失敗しただけで、基本的には内黒製品であると理解している。さて、内黒の高坏は、内黒埴の出現よりもやや遅れて出現して来る。内黒埴の出現する時期では、まだ脚部が中空となる古墳時代的な坏部埴形のタイプが主体で、当該階に見られるような脚部が中実となるタイプは出現していない。ただ、内黒埴の中に少量であるが、短い柱状高台状の台が付く埴が存在しており（TK47型式併行に位置付けられる下関発遺跡A地区や中村知遺跡B地区大溝下層資料）、短く開脚する台も出現している。このタイプは明確に高坏タイプと呼べるものではないが、中実タイプの内黒高坏の祖形となるものと予想する。高坏に内黒が導入されると言うよりも、それまで続いた従来の高坏と新しく出現した内黒高坏とが入れ替わったという状況であり、それは大体5世紀末～6世紀前半代の間で興った現象であろう。さて、脚部が明瞭に筒状となって長脚化するタイプと前段階の低脚タイプの流れで定型化するタイプとが存在するのは6世紀中頃のことであり、TK10型式併行頃に位置付けられる。この時期の坏部器形は、前段階の台付き埴同様、口縁部外反器形を呈しており、多分放期までは埴状の坏部器形は皆無に近かったものと予想する。低脚も長脚も基本的には坏部法量に差はなく、明確な分化はしていない。これが念仏林南遺跡の段階になると、長脚は大型法量、低脚は小型法量と明瞭に分化し、器形においても外反器形のみでなく、多様化してくる。まず、小型低脚B類は口縁部内黒埴と同程度の量比であろう。内黒埴と法量を同じくし、器形も類似するという点では、前段階の内黒高坏の流れの中にあり、理解しやすい。ところが、大型長脚A類は坏部法量が埴とは大きく異なり、脚も大型化して長くなる。坏部器形は埴状器形と口縁部が外反する器形に分けられる

点では類似していると言えるが、外反タイプは皿状器形となっており、碗形のものも浅い鉢状器形となっている。調整も碗とは異なり、低脚B類と一つの基点から派生したものであるが、別の器種として成立した感がある。それと同時に内面黒色されないものが定量加わるようになり、内黒台付き碗の流れから一歩進んだ型式に入る。その後は、土器高坏自体の量が減少し、小型B類はほぼ消滅。A類系統の内黒高坏のみ、B類との中間程度の法量まで小型化して存続する。刷毛調整する碗形のものとして削り調整する皿形のものとして2タイプが存続し、内黒も最終段階まで存続する。現在確認できるこのタイプの終焉は8世紀初頭頃で、内黒碗よりも半世紀ほど終焉



第186図 内黒高坏の出現と変遷 (S=1/5)

(図は谷内尾他1982、北野他1988、出越1991、田嶋他1990、岡本1995、吉田1984、金山1994より転載した)

時期が遅れる。さて、ここまで述べた内容は、加賀地域の特に南加賀を中心とした内容であるが、念仏林南遺跡の段階に見られたような展開の様相を示さない地域がある。能登の首椀C遺跡などの資料がそうで、これよりも東の越中や越後においても、法量には大型と小型の分化が認められるが、前段階の口縁部外反の器形の流れて、長脚と低脚の分化もさほど明確にならない、前段階からの器形変化がスムーズに行われている。基本的に内黒台付き碗の流れで形態変化している地域であり、高坏というイメージよりも、内黒碗の脚付き器種としてのイメージが強く、内黒碗に連動した器形変化をしている。それに比べれば、加賀の状況は純粋な内黒土師器食膳具文化圏の様相ではなく、その文化圏の中でも西寄りの様相を呈す地域であろう。

c. 須恵器貯蔵具

須恵器貯蔵具は器種構成でも示したように、突出して量の多い器種はなく、一般的な構成を示す。器形的には一部大型の胴や胴部叩きする提瓶など特異なものも見られるが、他はさほど目立つようなものではなく、かえて、この時期としては特異な器種がないことが特徴的と言えるかもしれない。さて、ここでは甕について少し述べる。消費地の調査をしていいつも思うことなのだが、在地での須恵器生産が始まり、終焉するまで消費地からはよく須恵器甕の胴部破片が出土する。いつの時代も定量存在し、竪穴住居主体の集落であっても、掘立柱建物跡主体の集落であっても、ほぼ同様に出土する。稀に、完形や半完形に復元できるものもあるが、まったく接合しない胴部の小破片が多く、何故このような形で出土するか疑問に思っていた。今回の調査事例では土坑内に一括廃棄されていたとしても完形や半完形に復元できるものではなく、せいぜいが1/5以下であり、数個体の破片が一括して廃棄されるケースが目立った。また、竪穴住居跡の出土の仕方でも埋土内に入り込んだものが多く、同一個体のものが5～6軒の住居跡間で接合する事例は一般的で、出土地点が10カ所に及ぶ例もあり、何故破片が独り歩きして、広範囲に分布するのか、気になったわけである。他の器種について見れば、大半が使用時の形や使用状態まで復元できるものが多く、須恵器甕のような出土の仕方はまずしないように思える。基本的に須恵器甕などはその形のままで使用であれば、掘え置き状態で使用していたものであり、水甕や穀物の貯蔵、酒造り用の甕など、移動しない状態が基本である。通常、破損しなければ、住居の作り替えや移動時に持って行ったものであり、製品自体の高価さから考えれば、廃棄という対象にはならないはずである。甕などは通常伝世品なども多いことを考えれば、たかだか50～100年程度営まれた村落で、これだけの個体数の甕が（詳しく原体同定していないため同一個体で認定がややあいまいであるが、100～200個体は確実に存在していたものと思われる）使用されることは不自然であり、完存した状態で使用されたものは少なく、破片として出土する多くは破損品の再利用に伴うものであったのではなかろうか。現在の生活の中では、中々目につきにくいのが、製品の再利用というのは日常的に行われるもので、本来の目的とは全く異質の使用があり得ることを想定すべきである。実際に須恵器甕の胴部破片をどのように使用したかは難しいが、下の半分程度であれば、十分な貯蔵容器として活用可能であり、上半分のものであっても、逆さにすれば何か

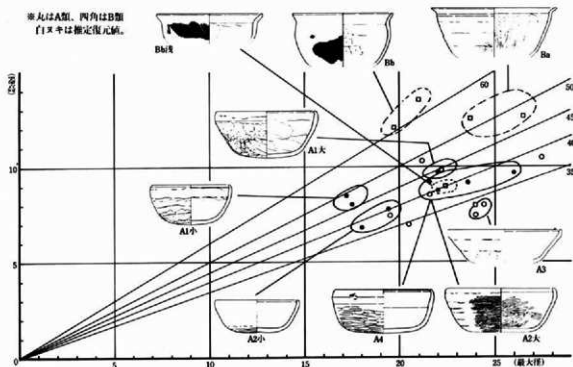
に使用できそうである。小破片自体での使用は難しいが、大きな破片であれば、皿や鉢のような盛る容器としても十分つかえる訳で、現段階では、そのような再利用の視点でこれらを観察していないが、何かの機会に調査してみたいと考えている。

d. 土師器煮炊具

土師器煮炊具は小型鍋A・Bと壺A・B・C、甔がある。

まず、小型鍋であるが、分類でも述べたように、小型鍋A類はこれまで鉢等で分類されていたものであるが、被熱痕跡や外面に煤状の付着物が確認される例が多いことから、煮炊具として扱った。詳しい用途については、後述するが、基本的にA類もB類も類似した被熱痕跡をもっているため、同様の用途に使われた小型煮炊具器種と推察する。分量分布図は以下に示した通りで、最大径から大きくは20cm以下の小と21cm以上の大に分けられ、B類は口縁部外反する分だけ一回り大きく分布領域をもっている。身の深さでは、B類は径高指数60前後の壺に近いものと50前後、40前後の浅身のものとに分化、A類でも50～45程度の底部丸くなる境形の1類と40前後に分布する平底の2・4類、35以下で分布する外傾器形の3類に分化する。このような分量分化は、意識的に分化したのではなく、用途に応じて、小型と大型に分けられた程度のものであり、壺Aなどの法量のバラエティー程度のものであると予想する。まず、A類器形であるが、5世紀に遡る資料がなく、6世紀前半～中頃の敷地天神山遺跡群C調査区土器溜まり資料や白江ネンブツジドウ遺跡18号溝資料が古い事例と言える。いずれも底部平底のA2類であり、体部には粘土積み痕

●丸はA類、四角はB類
白抜きは推定復元図。



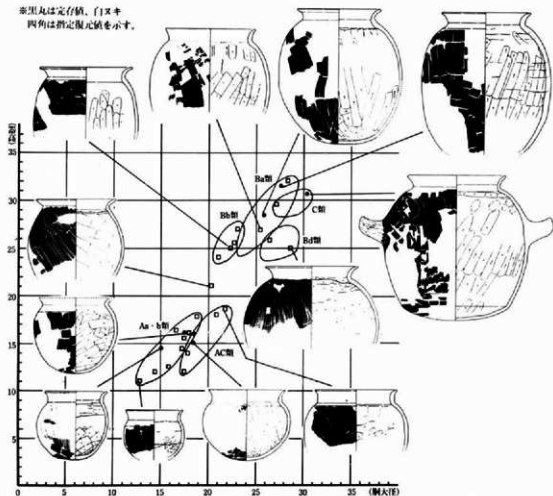
第187図 小型鍋A・B類法量分布図(土器図S-1/8)

跡をそのまま残している。あまり顕在化しない器種と言えるが、念仏林南遺跡時期が最も目立つ段階と言え、以後は確認例がない。また、地域的にも加賀地域に限定されそうで、特に南加賀に集中する傾向がある。さて、当器形は一部に共通す碗1類もあるが、平底の2～4類が主体的で、1類などはの盛行と碗にも器形を模倣したものであろう。祖型は別の所にあるものと思われ、平底で底部を薄くし、体部の粘土積み痕跡を残す技法は、平底の製塩土器に類似する。この器種自体、製塩土器と考えたこともあるが、製塩土器にしては内面の剥落がさほど顕著でなかったことと、製塩土器の平底器形出現は8世紀初頭以後であることから別器種を想定したもので、製塩土器の平底化に起因する器種なのかもしれない。A類器形の祖型は従来の土師器器種では求め難く、須恵器の大型鉢など平底器種の製作技術などが想定されるが、これについては、結論を得ていない。次に、B類器形だが、器形・技法ともに基本的には土師器がもっているものであり、特にb類は広口甕に共通する要素をもっている。この器形の出現は、6世紀前半まで溯る可能性もあるが(敷地天神山遺跡群で該期に位置付けられそうなものはあるが、やや詳細不明。近江では5世紀中頃には出現。植田1994)、確実なのは、当該時期であり、7世紀中頃には一回り大型になり、器形も定型化する。定型化した鍋の出現は7世紀中頃以降であり、この時期を鍋の出現とも捉えられるが、この鍋についても広口甕の発展的形態であると捉えられていることから、当遺跡のような小型鍋B類が先行形態として存在していたものと予想する。ただ、法量的に直接的には繋げられない器種である可能性もあり、用途も異なる可能性が高い。このような小型鍋の顕在化は甕Aなどの小型煮炊具の盛行と一連のものであり、甕の機能分化がこのような器種を生んだ可能性がある。

次に、甕について述べるが、甕は小型A類と通常のB類、把手付きC類に分化している。その法量分布を示したのが188図であるが、この中で、推定復元値としたのは、胴部が半分程度しかないものでも底部への窄まり具合で推定しているため、器高については前後2cm程度の幅はあるものと前以て断っておきたい。さて、当遺跡の分布図を説明する前に、加賀地域のこれ以前の土師器甕の様相について述べておく。189図の左に示したのが、5世紀後半～6世紀前半の土師器甕の法量分布である。分布位置は、この中で大に位置付けられる胴部最大径20～25cm、器高25～30cmを測る主体的法量のB類群と、胴径15～20cm、器高15～20cmの中型法量を示すA B類の群、胴径10～15cm、器高10～15cmの小型A類群の3群に分けられ、さらに、A類は胴部径の大きさと長胴気味～やや胴が張る程度のタイプと胴の球形状に張る広口甕タイプとに、中法量も同様に長胴気味タイプと広口甕タイプとに分けられる。さて、図示した時期に幅があり、一つの分布図で示すべきものではないかもしれないが、時期ごとに偏りを示すような感じはなく、大体まとまった様相を呈している。このような構成を示す段階は、永町ガマノマガリ遺跡の漆町編年13群土器以降であり、それ以前の構成とは大きく変わっている。さて、この時期の特徴は、以後に続く小型甕と呼べるタイプと広口甕タイプの出現で、これまで続いた布留系甕を払拭し、新しい構成の北陸型の長甕・小甕の原型を形成したことである。ただ、この時期の分化も、主体的なB類に対

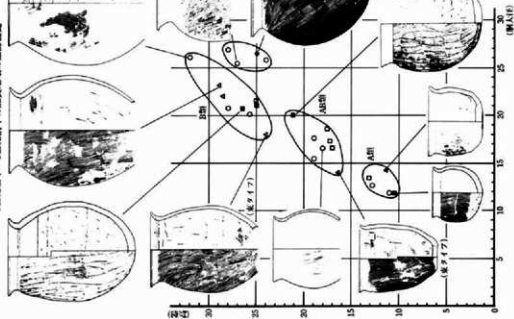
し、小型のものが中と小の二つの群に別れており、まだ、整理された段階ではなく、次の念仏林南遺跡の資料と対比すると、その違いがはっきりと解る。これは、同時期の他遺跡資料でも同様であり、主体法量のB類は変わらないが、これに比べて小型法量であるA B類とA類は、A B類が小型化してA類と融合する形で、分布域を長く形成し、A類とB類の2法量分化に整理される。当遺跡のA類とB類の分布の境界は器高20~25cm頃で、A類はまだ斜めに長い範囲で分布し、一部A B類に属する器形のものも残存しているが、これに関しては例外的であり、2法量分化の段階にある。また、A類は胴部のさほど張らないa・b類器形と胴部の張る広口壺状のc類器形とに分布域が別れ、b類には特に小型の一群が存在。この小型の一群が前段階の小型A類に法量上共通する。c類の出現は、小型鍋B類の出現と同様の流れのものであり、これも一つの指標となる器種である。

次に、B類であるが、当遺跡のものは、長胴気味のb類と広口壺的なd類（壺C類と共通する

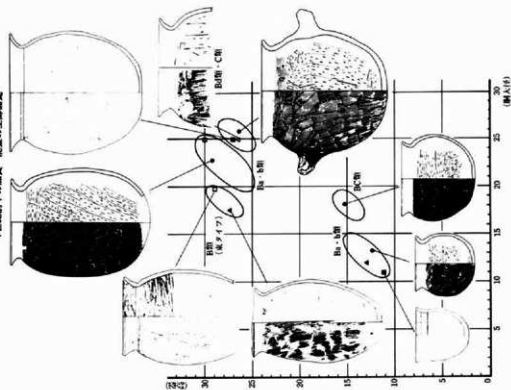


第188図 壺A・B・C類法量分布図 (土器図S=1/8)

5世紀後半～6世紀前半の加賀地域の土器図説



7世紀前半の加賀・能登の土器図説



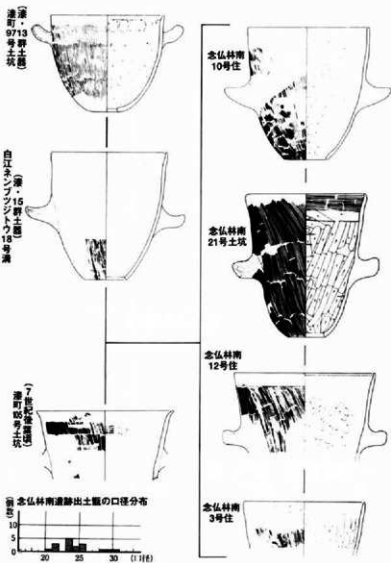
第189図 念仏林遺跡以外の5世紀後半～7世紀前半の土器器量法量分布図（土師器S=18）
 (左図：丸＝ガマノマガリ遺跡、四角＝下阿奈遺跡A地区、三角＝千木ヤシキダ遺跡、五角＝千木ヤシキダ遺跡、
 四角＝菅村C遺跡、尚、図は田嶋徳1987、北野他1988、出越1991、吉田1984、岡本1995より転載した。)

分布領域)、そして最も主体的なやや胴の張るa類の3つのタイプに分けているが、その法量分布領域を見ると、189図の右に示した他遺跡のB類とは微妙に領域が異なる。d類については基本的に同様と判断できるが、主体的なa類が他遺跡では確認しづらく、長胴気味のb類とあわせて一つの領域を形成している。本来、aとbは分けられるものでないのかもしれないが、前段階の流れで考えられるa類(前段階の分布図ではa類に該当する領域に空白があるが、復元できる資料が少なかったため、破片では定量存在する)と次の段階に主体となる長胴タイプとが共存する段階にあるとの想定で意識的に分類したものである。当遺跡の段階はb類主体とはならず、a類を基本として構成される内容は、時期的な特徴でもあるが、地域的な特徴でもあるように思う。さて、当遺跡の分布領域にはなく、他遺跡に存在するものがある。図で東タイプとしたものであるが、胴部径15~20cmに分布する平底状底部をもつ一群である。このタイプは前段階から確認されるものであり、特に金沢より東北地域で確認される。越中ではこのタイプが主体を占める状況にないが、越後では地域にもよるが、主体的に見られるもので、上越市一之口遺跡東地区の該期の資料(春日他1994)では、類似した器形のもので同法量のものが一般的な壺として存在する。このタイプの出現時期には地域によってバラツキはあるが、東日本に広範囲に広がるものであり、東日本的なタイプと言え、能登・北加賀を中心として定量存在している。今のところ、南加賀では確認しづらい器形であるため、分布圏はその辺が境目かと思われる。

さて、壺C類であるが、前述したように、壺d類と類似した法量分布を示し、この法量のものの出現も含め、ガンママガリ遺跡(38号土坑)段階以降確認される器種と言え。把手付き甌の出現時期とはほぼ一致しており、甌の導入と強く関連する器種であろう。出土量が多いとは言えず、把手のみの破片では甌との区別が難しいことから、実数の把握が困難である。ただ、把手の出土量は6世紀中頃から後半以降、確実に倍増しており、甌と同量とは言いが、甌の増加とともに、確実に増加しているものと思われる。把手の出土量は、7世紀末以降減少するが、当遺跡の時期がそのピークの段階にあると思われ、そのような把手付き煮炊具を多用する煮炊き技術が普及した時代であったのだろう。

さて、甌であるが、ここで扱うものは、把手をもつ大型甌と言われるものである。190図には南加賀地域の甌の変化と当遺跡の甌の口径分布を示した。甌の口径は20~30cm程度で分布し、24cm台を中心に分布する。口縁部器形は、分類で示した外反するc類は極少なく、やや開き気味かほぼ真つぐ立ち上がるものが主体で、口縁端部内屈ないしは内側につまみ上げるものが目立つ。さて、当地域で確認される甌は底部全孔タイプが主体で、多孔タイプはガンママガリ遺跡で確認されるが、例外的である。底部は丸底気味のものが多く、その中央に一か所穿孔される。底部がそのまま抜けるようなタイプもあるが、極少なく、タイプが違うものなのであろう。さて、図にはおおまかではあるが、当地域で主流となるタイプの器形変化を示した。出現期の漆町97号土坑の甌は器高短く、底部丸底のもので、把手の位置もだいぶ上に付いている。この時期は出土量も少なく、器形的にも定型化前のような様相を呈しており、また、この時期のみ多孔式のものが定

量あることも、甌導入段階の様相なのであろう。この様相は、次の漆・14群土器の段階まで続くものと予想され、出土量が確実に増加する15群土器併行頃に定型化するものと予想する。図示したものが典型的な器形かは資料が少なく判断しにくい。念仏林南段階のものと法量的に類似しており、器形・法量ともに安定した段階に入ったものと予想する。さて、当遺跡の甌であるが、15群段階と類似するものとしては、10号住出土のb^{*}類器形が上げられる。共伴する土器が少なく、他の土器からの時期判断は難しいが、これを当遺跡の中の古手資料とすることは問題なく、当遺跡で最も



第190図 南加賀地域の土器甌の変化 (S=1/8) と口径分布 (田嶋他1896、田嶋他1988より転載)

主体的な21号土坑のb^{*}類器形へと変化しているものと予想する。b^{*}類器形でもいろいろとバリエーションはあるが、全体的に長胴化しており、把手下の胴部径と口径との差が大きくなる、胴部外傾ないしは外反する器形へと変化している。また、b^{*}類では口縁端部を内屈させる特徴が目立ち、しだいに口縁部が薄くなって、引き伸ばしたような口縁端部も出てくる。次の7世紀後半代には、口縁部がそのまま真っすぐ立ち上がるような器形は確認しづらく、口縁部外反ないしは外傾器形が主体的となって、口縁部を薄く延ばす特徴がよく見られる。以上は、当地域で主体的となる器形のおおまかな流れであり、細部では該当しない事例もあるし、また、あくまでも一つの地域内に限定した中での変化である。地域対比は資料が少なく難しいが、越前とは類似した様相と思わ

れ、北加賀から東北部とは異なる様相を示すようである。ただし、これは全体的な傾向であり、細部ではもちろん、その中で地域差が看取できる。

(4) 土器胎土について

a. 須恵器の胎土構成

須恵器は大きくa類、b類、c類に分類しており、基本的にはいずれも在地の須恵器窯跡群産であると考えている。中で細分はしているが、基本的には大分類で包括して考えて差し支えないものである。a類は南加賀窯跡群産、その中でも砂粒の多く入る戸津・ニツ梨地区のものと思われる。b類も同様に南加賀窯跡群産であるが、この中では砂粒の少ないものであり、那谷・分校地区などの南部グループを主体としているものと予想する。c類は能美窯跡群産と思われるもので、この中では最も砂粒の混入が少ない胎土である。ただし、一部能美窯跡群産のものにb類と識別しにくい砂粒の多く入る胎土があり、基本的に能美窯跡群産に白いくず石が多く入るので、それを基準として分けてはいるが、c類とb類との識別が困難なものは確実に存在する。以上の通常見られる在地窯跡群産須恵器とは異なる胎土特徴を示すものが少ないながら存在している。これはd類として上げたもので、鏡など特殊器種に見られる良質の胎土である。この胎土は、目立つような砂粒は入らないが、全体的に砂っぽく、サラッとした質感のもので、6世紀前半代を中心として古い時代のみに見られる胎土である。胎土特徴は、陶器窯産のものに類似していることから、その可能性も考えたが、以前行った蛍光X線分析では南加賀窯跡群産の可能性が高いと出ており(望月1993)、窯資料では確認していないが、古い時代のみに見られる胎土と言える。さて、以下に胎土別の構成率を示した。基本的にd類は特殊器種のみに見られる特殊胎土であり、a・b・c類の3つの胎土で構成されると言える。器種に関係なく多いのはa類で、6割近くを占め、やや貯蔵具で割合が高くなっている。b類も貯蔵具での割合が高く、その分、c類は食膳具で高い。さて、須恵器一般において、食膳具などの小型器種よりも貯蔵具の大型器種に砂粒が多く見られるという傾向は、既に窯資料で確認していることで、器種による胎土の使い分けがあったことは間違いないが(望月1993)、窯群によって生産・供給器種の偏りがあったかは疑問が多く、c類胎土で砂粒が多く入る胎土をb類と誤判別した可能性が高い。つまり、食膳具のみで識別した方が信憑性をもっており、そうすれば、南加賀窯跡群産83%、能美窯跡群産17%で構成される。能美窯跡群の開窯時期は6世紀末～7世紀初頭頃と考えているが、その開窯当初から、定量の供給を江沼地域の方にも行っていたものであり、該期は能美窯跡群も南加賀窯跡群も江沼郡であったわけであるから、郡域を越えた供給とはならないが、南加賀窯跡群のお膝下という印象の強い当地域であっても、定量の須恵器が能美窯跡群から供給される状況を重視すべきであり、土器供給というものは基本的に一源的供給にはあまりならなかったことを物語るものである。

b. 土師器の胎土構成

土師器の胎土分析は、章を改めて考察しているため、ここでは分類した胎土の構成を示すだけ

に止めることとする。主体となるのはA類で、器種に関係なく、ほぼ全てこの胎土で占められると言ってよい。ただ、興味深いのは、明らかに在地産の土師器と考えにくい胎土特徴をもつD類が定量存在することで、梯川周辺の古代の消費遺跡の土師器胎土では確認できなかった事例である。産地の推定も合わせ、詳しくは考察に譲る。

器種・胎土	a類系	b類系	c類系	d類	器種・胎土	A類	B類	C類	D類	E類
食膳具	528	254	157	1	食膳具	934	7	0	9	3
(%)	56.2	27.0	16.7	0.1	(%)	98.0	0.7	0.0	0.9	0.3
貯蔵具	932	457	124	4	煮炊具	13,996	162	2	122	18
(%)	61.4	30.1	8.1	0.3	(%)	97.9	1.1	0.01	0.9	0.1
計	1,460	711	281	5	計	14,930	169	2	131	21
(%)	59.4	28.9	11.4	0.2	(%)	97.9	1.1	0.01	0.9	0.1

須恵器胎土構成表

土師器胎土構成表

(5) 食膳具と煮炊具の使用痕跡について

a. 食膳具に見られる使用痕跡の観察

須恵器と土師器の食膳具の摩耗痕観察から使用状態を復元する。

まず、須恵器であるが、坏A蓋、坏A身、瓿A a、高坏A蓋、高坏A a、高坏A b、高坏Bの器種を対象として実施した。まず、摩耗痕の付く場所であるが、内面底部（蓋では天井）と口縁部内面、口縁端面部の3カ所あり、さらに内面底部の摩耗痕の付く位置から3細分した。蓋も身も基本的には同様の分類基準で行っており、分類項目は以下のとおりである。なお、各実測図に「←磨→」で表示しているため、詳しくは図を参照願いたい。

（摩耗箇所） a類…底部内面。 b類…口縁部内面。 c類…口縁端面。 d類…摩耗痕なし。

なお、複数の箇所に見られる場合は、a b類やa c類などで表示する。

（底部内面摩耗位置） 1類…体部立ち上がり付近の盛り上がり部分のみ。 2類…底部中央付近のみ。
3類…体部立ち上がり付近から底部中央まで広く観察できる。

以上の分類にしたがって、器種ごとに示したのが以下の表である。基本的に摩耗箇所のみの提示であり、摩耗の度合いについては、今回は行っていない。これは、摩耗度合いが弱いもののみで構成されていたため、8～9世紀などに見られるような器表面がツルツルとした顕著に摩耗したものは確認されなかった。底部に広い平坦面をもつ坏盤器種に比べて、坏A類の器形が摩耗痕の着きにくいという器形自体の違いもあるが、やはり摩耗される行為の頻度やその行為の内容の違いによる可能性もある。十分検討していないが、8世紀以降のものに比べて使用頻度が低かった可能性は高いと思われる。さて、以下のとおり、摩耗箇所は底部が主体で、これについては、食器使用に伴う使用痕跡であると思われる。1～3類まで及ぶ範囲は異なるが、基本的に盛り上がった面が多く、底部が平坦なものは広い面で摩耗痕が確認される場合が多い。どの器種でもa類痕跡の確認されないものが定量あるが、特に高坏A a類身で多く、坏A身でも比較的多く確認さ

れる。身よりも蓋が総体的に底面使用痕頻度は高く、坏A身で52.6%、高坏A蓋で66.6%確認され、明らかに身よりも高い量比を示す。ただし、坏A蓋の逆転したような器形を呈す無蓋碗A器種は身ではあるが、62.5%の高い頻度であり、これは口縁部立ち上がりをもつ合子器形に起因するものと考えられる。食器としての使い勝手から考えれば、合子器形の受け部部分は邪魔であり、使いにくかったのではなかろうか。ただ、身器種も確実に使用痕跡をもっていたものであり、蓋も身も同レベルの食器として使用されていたものと考えられる。ただし、長脚の高坏A a身については、使用痕の低さから、他のものと同レベルとは言い難く、異なる使われ方をしたか特殊な場の使用が想定される。さて、ここまで、食器としての使用痕と推察するa類摩耗痕について述べたが、これ以外に、口縁部内面のb類と口縁端面のc類摩耗痕がある。これらについては、使用痕と呼べるか疑問であり、食器から口へ運ぶ道具が存在せず、手食であったのか、匙状の食事が存在したのか分からないが、どちらにしても口縁部付近にこのような摩耗痕が付くことは理解しがたく、食事行為（洗浄も入る）に伴うものではなく、食器どうしの重ねによる擦れた痕跡だろうと考える。c類については、蓋と身をセットとして重ねれば、このような痕跡が付くであろうが、b類については理解できず、この痕跡が蓋のみに見られるものであることを重視すれば、蓋どうして重ねたための擦れ痕ではないかと考える。蓋のb類箇所は特に面となっていたり、その部分が膨らんでいたりする部位で、丁度重なるあたりであり、食器の保管段階から、蓋と身とがセットで保管される場合と別々の食器という感覚で扱われる場合とが存在したことを意味する。蓋のA類

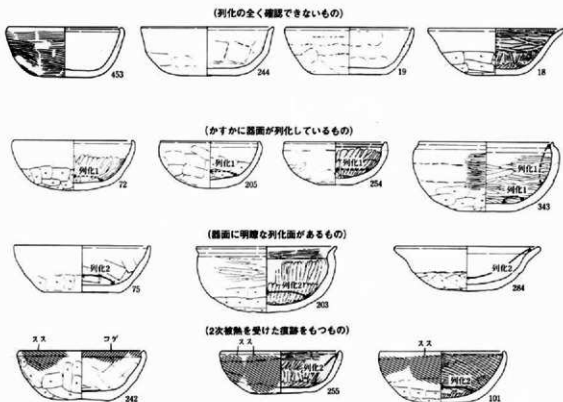
器種・摩耗型	a1類	a2類	a3類	ab1類	ab2類	ab3類	ac1類	c類	d類
坏A蓋	5(8.5)	2(3.4)	16(27.1)	3(5.1)	1(1.7)	1(1.7)	3(5.1)	6(10.2)	22(37.3)
坏A身	5(9.8)	4(7.8)	10(19.6)					3(5.9)	29(56.9)
碗Aa身	2(25.0)	0(0.0)	3(37.5)					0(0.0)	3(37.5)
高坏A蓋	0(0.0)	3(33.3)	3(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(11.1)	0(0.0)	0(0.0)	2(22.2)
高坏Aa身	0(0.0)	0(0.0)	1(25.0)					0(0.0)	3(75.0)
高坏Ab身	2(25.0)	1(12.5)	1(12.5)					0(0.0)	4(50.0)

須恵器食膳具に見られる摩耗痕類型と頻度

摩耗痕の多さから、蓋も逆さまにして碗的な食器として使用していたことは先の結果で明白であるが、食器管理の段階から、蓋と身を別々に扱っていたことを示すものであり、その状態は日常的な頻度であったと予想する。該期は坏A蓋を逆転したような器形の無蓋碗器種が定量出現して来る時期であるが、これはまさに蓋の使用の状態を反映したものであり、須恵器供献土器が祭器として器形を重視する在り方から実際の食器としての機能を重視する須恵器食膳具の在り方に転換して行く状況を反映したものであると理解したい。

次に、土師器食膳具の使用痕であるが、これについても摩耗痕跡を確認したが、その多くが内面磨き調整を行っているために、使用に伴う摩耗は分からず、別の視点で観察した。土師器を見ていると、よく器面が荒れて、砂粒が露出したようなものが目に付くが、多くは焼きが甘かったり、保存状態（埋没していた土質）に起因するものである。しかし、煮炊具のように2次被熱を

受けて、器面が劣化したり、度重なる使用によって器面が摩耗して砂粒が浮き出るなど使用痕跡を示すものもあると考える。今回注目したのは、このような使用による器面の劣化であり、主に2段階に分けて、矢印範囲の破線と実線でその範囲を示した。前者は部分的に劣化らしき磨きが消えたり擦れたような痕跡が見られるもので、軽度のものであり、劣化1とした。後者はそれが進行して部分的に砂粒が浮き出たり、亀裂が見えたり、細かな剥落など器面の劣化が明らかなので、劣化2とした。観察した資料は、破片では困難のため、特に焼成が良い、半分以上現存する個体を中心に行った。191図はそれを観察した土師器食膳具であり、1段目は劣化の確認ができなかったものである。2段目は内底面に軽度の劣化が認められるもので、底部の特定の箇所に見られるという感じではない。ここで気になるのが、343の深身の瓿で、内湾する体部上半に認められる。劣化は極軽度のものであるから、洗浄時の痕跡の可能性もある。3段目には明らかに器面の劣化が確認できる劣化2のもので、284は内面全体に確認できた。以上を見ると、器形や内黒・非黒の違い、法量に関連なく、確認できることが解る。ただ、ここで図示していないが、高坏類はこのような劣化を確認できる個体はなく、長脚でも短脚でも同様で、確実に瓿類とは異なる。高坏と瓿は長い脚が付くだけでなく、坏部器形も異なるため、日常食器として使用されたとしても、同様の使用痕跡が付くとは限らず、基本的な使用方法による違いも想定されるが、祭



第191図 土師器瓿の使用痕 (S=1/4)

祀など非日常での使用の場、祭器的な性格をもった食器として使用された可能性もある。この考えは、埴類がほぼいずれも日常食器として使用された状況を想定する前提にあるのであるが、埴類の中にも劣化の確認されない個体が定量存在するわけであり、その使用頻度、廃棄までの使用回数は様々であったように見える。器面の劣化は焼きの具合やその後の保存状態に左右されるものであり、有効な識別方法とはなりにくいが、例えば、古墳主体部内の土師器埴類との差を観察することによって、使用状態の違いなどを想定する判断材料になり得るものと予想する。さて、以上の使用に伴う劣化以外にも、2次被熱を受けた使用痕跡がある。4段目に示した斜線範囲がそうで、左は外面口縁部に煤、内面口縁部に焦げが、右は外面のみであるが広範囲に煤の付着が認められた。このような土師器小型器種の被熱痕跡は、弥生時代から高坏などの供献土器で確認されるもので、量は少ないが、時代を通して確認できるものである。これは食べ物を煮たり、炊いたりという行為による場合とただ単に火を受けた場合と両方あると思うが、仮に前者であっても、実際の日常的な煮炊具に使用されたとは考え難く、何か祭祀行為の一つとして行われたものであると考えたい。確認個体数は少なく、全体で占める割合は、1割に満たない量である。

以上、須恵器と土師器の食膳具の使用痕跡を観察したが、基本的に高坏類は須恵器の低脚器種を除いて、坏A類や埴類とは異なる使用状態にあったものと言え、使用される頻度の違い、洗浄回数の違い（固形のを盛るだけなら洗わなくてもよい）、使用される場所や使用される行為の種類の違いなど、その原因はいろいろと想定されるが、日常で多く使用された器種は後者の脚部の付かない器種であったことは間違いないと思う。さて、これら脚の付かない埴類の器形の土器は、比較的類似した法量をもっているが、須恵器と土師器という異質の焼き物によって構成されており、その使い分けはなされていなかったのが、問題となる。さて、須恵器と土師器が日常の食卓の場に存在しているのは、加賀地域に限定するが、土師器が内黒埴食器として存在している時期のみと言って過言でない。つまり、当該時期と9世紀後半～10世紀前半であり、その中間時期は日常の食膳具は須恵器で構成され、土師器は内外を赤く塗る祭器的な埴となる。須恵器と土師器の意味がその始まりと終わりという点や基本的なモデルの問題など、意識を別にする必要はあるが、須恵器食膳具が卓越する時期の前後で同様の現象が見られることは興味深く、内黒土師器という焼き物をもつ質・性格を感じさせる。そのような焼き物であったればこそ、須恵器と共存できたわけで、基本的には焼き物の違いは、用途の違いを示すものでなく、一部須恵器において、蓋と身をセットとして使用するものは異なる可能性は高いが、基本的に同様の使われ方をしていたものと思う。使用される場や使用する人間たちの階層によって違いはあるが、一般村落レベルでは、それほど食器構成にこだわりがあったとは思えず、その村で手に入った焼き物で食器を構成するという、いたって単純なものであったらと思う。

b. 煮炊具に見られる使用痕跡の観察

煮炊具の使用とは、つまりは煮炊き行為であり、主に外面の煤の付着、内面のコゲツキの状態によって、その煮炊き痕跡を観察した。外面の使用痕跡は、煤のみでなく、強い被熱による器面

の剥落や変色（赤く変色）、内面の使用痕跡も内容物のコゲツキの他に器面の変色などヨゴレに見られ、それらを観察することによって、煮炊具の使用状態を想定できる。このような観察から煮炊具の使用状態を復元する研究は、これまで多く行われているが（外山1989、1990、1992。小林1992a、1992b。藤田1986。西川1983）、それらを参考にし、分類したのが以下の項目である。ただし、今回は内面のヨゴレ痕跡をうまく観察できず、コゲツキのみを扱った。

〈外面〉 Aタイプ……強い被熱によって赤変・剥落したり、煤が厚く付くものである。小型煮炊具に多い。

A a………底部から口縁部まで全面に煤・剥落が見られる。

A b………A aの中でも特に口頸部や肩部付近が顕著に煤・剥落が見られる。

A c………底部付近以外のはほぼ全面に煤・剥落が見られる。

A d………底部付近と口頸部付近以外に煤・剥落が見られる。

Bタイプ……被熱が強くなく、顕著な変色や剥落はない。煤の付着は薄い。大型煮炊具に多い。

B a………煤が全面を覆うことはないが、ほぼ全体に煤の付着が見られる。

B b………肩部付近から口頸部以外のはほぼ全体に煤の付着が見られる。

B c………胴部中位（最大径）付近以下で煤の付着が見られる。

B d………胴部は煤が付くが、底部付近に煤の付着が見られない。

Cタイプ……把手付き器種の被熱痕跡で、Bタイプに類似。

C a………把手も含めてほぼ全面に煤が付着する。ただし、甌では底部付近の煤は付かない。

C b………把手周辺には煤が付かず、把手レベル以下でのみ煤の付着が見られる。

C c………C bと類似するが、部分的に把手レベルより上へも煤が付着する。

Dタイプ……煤の付着や剥落、変色など被熱痕跡の見られないもの。

〈内面〉 Iタイプ……胴部上半付近以上のみでコゲ（脱して薄いコゲ）が見られるもの。

I₁………口頸部付近のみコゲが見られる。

I₂………胴部上半以上でコゲが見られる。

IIタイプ……頸部付近から以下のはほぼ全面でコゲが見られるもの。

II₁………頸部付近以下でコゲの濃淡があまり確認できない、比較的薄いもの。

II₂………コゲの上部が濃いコゲツキとなってバンドを形成する総体的に濃いもの。

II₃………上部にコゲツキバンドが見られるが、それ以下では部分的にしか見られないもの。

IIIタイプ……胴部中位以下でのみコゲが見られるもの。

III₁………胴部中位以下、コゲの濃淡は確認できない、比較的薄いもの。

III₂………底部付近にコゲツキが確認できるもの。

IVタイプ……底部付近でのみコゲが見られるもの（主にコゲツキ）。

Vタイプ……明確なコゲの確認ができないもの。褐色に変色しているようなヨゴレも含む。

192図にはこれらの項目に基づいて主な個体についてのみ示してあるが、外面と内面の対応関係を見ると、被熱痕跡が器体の上位まで及ぶものは、対応してコゲ痕跡も上位からあるものが多い傾向が看取できる。また、Aタイプの被熱の強いものにはコゲの顕著なものも定量見られ、Bタイプの弱い被熱のものには、顕著なコゲを確認できるものは極少ない。つまり、Aタイプのよう強い火に掛けたようなものは、内容物がコゲつく場合が多かった訳で、内容物の種類を除外

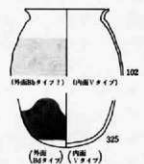
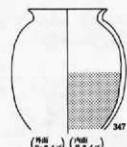
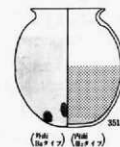
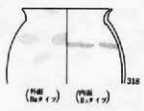
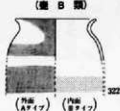
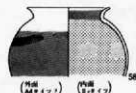
(小型鍋A類)



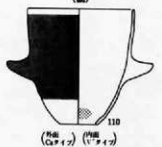
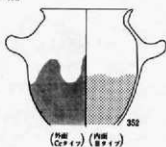
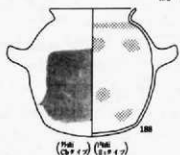
(型 A 類)



(型 B 類)



(型 C 類)



うすい煤付者 濃い煤付者 焼熱が著しく 器面が剥落 うすいコゲが全体的 に見られる。(部分的にハッチ状) コゲで強く変色 (コゲツキ) コゲで強い炭化物 が顕著に付着

第192図 土師器煮炊具の使用痕状況図 (S=19)

して考えれば、当然の結果であると言える。

さて、基本的に外面の被熱痕跡からは、過熱方法や過熱施設が求められ、内面のコゲ痕跡からは、内容物の種類や調理方法が求められる。どちらも、煮炊具の使用法を示すものであるが、ここでは一度切り離して考えることとする。まず、外面痕跡から、過熱方法・施設を考えてみたい。当遺跡竪穴住居には基本的に造り付けカマドが存在し、多くの煮炊具はカマドで使用されたものと予想される。カマドにおける煮炊具の使用痕を想定すれば、まず、支脚部分と重なる部位を除いては基本的に底面から胴部かけて炎が当たる訳で、掛け口の下部分、胴部最大径付近から底面にかけて煤や被熱の及ぶものが第1に上げられる。ただ、底部が最も温度の高い炎が当たり、煤が付かず、胴部下位以上で煤が付く場合や、一度煤が付いたとしても幾度の使用によって煤切れ状態となるものもあり、その場合は変色などの被熱痕跡で判断する。また、基本的にカマドの掛け口以上へは煤などは及ばないが、掛け口から煤が漏れる場合もある。しかし、この場合も顕著な煤の付着はなく、被熱度合いも明らかに弱いことから判断できる。これは、群馬などでカマドに立て掛けられたまま潰れた出土事例から補足できることで、この条件を満たすものとしては、外面BタイプとC b・C cタイプが上げられる。B aやC cは口縁部付近まで煤の付着が見られるが、部分的なものであり、掛け口から漏れたようなものであろう。器種はほとんど壺B、壺Cの大型煮炊具であり、胴部の長い器形のものである。一部小型壺Aにこのタイプの被熱痕をもつものがあるが、被熱痕をもつものの15%という低い割合であり、カマドで使用される煮炊具は主に大型煮炊具で、小型煮炊具は一部使われる程度であったと推察できる。主体を占める壺Bは多くをBタイプが占めるが、壺Bではこの被熱痕をもつものよりも全く被熱痕のないDタイプが多く、全体の43%を占める。Dタイプは煮炊具として全く使用されなかったものも存在するであろうが、Bタイプの被熱痕が極軽いものであることやBタイプの主体が胴中位以下の被熱痕であることを考え合わせれば、Dタイプもカマド使用による煮炊具である可能性が大きく、Bタイプの多い壺BにDタイプが多いことも符合する。壺AでもDタイプは34%の定量存在し、先に壺Aのカマド使用は低い割合であると述べたが、Dタイプも含めれば、半数までは行かないまでも、かなりの割合を占めており、必ずしも、壺Aがカマド以外の施設で使われたとは言えない。

さて、以上のカマド使用に伴うと思われるBタイプに対し、Aタイプは基本的にカマド以外のオープン式の施設で使用されたものと考えられる。ただ、Aタイプでも全面被熱するA aと底部被熱のないA cとに分けられ、前者は炎が底部から上へ当たるタイプ、後者は炎が胴下半部から上へ当たるタイプに相当する。A aは燃料に直に置くか支台状のもので燃料から浮いた状態での過熱と想定され、それを裏付けるかのように、底面に三つの支台状の痕跡が見られるものも確認できる。これに対し、A cは地面に直に置かれるもので、燃料はその周りに置かれ、炎は胴部から直接当たる。どちらにしても、Aタイプは強い炎が直接近距離から当たるもので、強い過熱が求められた方法なのであろう。この方法は、カマド出現以前の過熱方法の系統であり、前代からそのまま継続するかはやや問題があるが、基本的な方法は同様のものであろう。器種は、主に

壺Aと小型鍋Aにおいて確認されるもので、壺AでのAタイプ率は56%、小型鍋Aでも69%という高い率を占める。器高の低い小型煮炊具に使われる過熱方法と言えるが、壺Bなど大型煮炊具においても被熱痕跡のあるもののうち24%という定量で確認されるものであり、比較的胴部の張る器形において目立つ傾向がある。また、甌にも把手や胴部に煤の付くCaタイプが確認され、甌は壺Bとのセットで使われることを前提とすれば、このようなAタイプの過熱方法を行う壺Bの上に乗っていたことが想定されるわけで、つまり、甌+壺Bのセットも必ずしもカマドのみでなく、炉のような施設でも定量使われていたことを物語る。ただ、基本的に甌はカマド使用が一般的で、煤の付着など見られるものは30%と少なく、付着していても極一部分であることが多く、図のような全体に煤が付く状況は極稀である。また、同様に把手付きの壺Cにおいても、基本的にはカマド使用以外のものが見られない状況とも一致しており、把手の確認個体のうち煤が確認されるのは3%程度であり、把手付き煮炊具とカマドというのはかなり一体性の高いものであったのだろう。

以上、壺A・小型鍋などの小型煮炊具はオープンな過熱での煮炊具として、壺B・壺C・甌などの大型煮炊具はカマドで使用される煮炊具として、大枠としては使い分けられていたことが解ったが、次に、内面のコゲ等から内容物の種類や調理方法を考えてみたい。

まず、内面のコゲツキから判断する視点についてであるが、特に口縁部から底部までの全体の状況から判断する必要がある。それは、胴部下半から底部付近でのみコゲツキが見られるものが多いことに理由がある訳で、煮方や内容物によって違いはあるが、全体で捉えることが必須条件として挙げられるのである。つまり、内面コゲツキの観察には、完形ないしはそれに近い個体が必要であり、胴部上半などの個体からVタイプと判断しても、それよりも下方でコゲの確認がなされる可能性が高い訳である。当遺跡の資料では、そのような観察を行い得る資料が乏しく、不十分な観察結果であることを前以て述べておき、あくまでもおおまかな傾向であることをことわっておきたい。さて、甌については基本的に壺Bとセットで蒸し器として使われたと考えられているが（坂井1982）、その場合、壺Bの中には蒸しあげるために湯が入っている訳で、このような湯による内面の変化はコゲツキとしては現れず、ヨゴレ程度に変色するか、何も変化が見られないものである。今回の観察では明確にヨゴレを観察できていないため、コゲのないものは一括してVタイプとして上げている。さて、Vタイプであるが、胴部上半を中心とする率であるが、壺Bでは89%と高く、内面にコゲの確認できるものは僅か11%と低い。ただ、湯釜としての使用は考え難い壺Aにおいても65%と高い率で存在しており、小型鍋でも77%の高い率を示している。水を沸かしたら、コゲツキは起こらない訳だからVタイプの痕跡となるが、コゲツキが形成されにくい水分が多い状態で野菜などを煮る、茹でる行為においてもVタイプの痕跡となる可能性が高く、水分に何か加わるスープ状のものや流動食的なシチュー・粥状のものでなければ、コゲツキは形成されない可能性が高い。現段階で、湯釜としての使用と、野菜などを煮て調理するオカズ鍋としての使用と、それを分ける判断材料はないが、基本的に壺Bは湯沸かし、壺Aなどの

小型煮炊具は煮る・茹でる容器として使われたものと予想したい。総体的には、湯釜であろうと鍋であろうと、内面コゲツキが少ない調理方法であったようであり、あまり炊飯や粥などのコゲツキが多く発生する調理は全体的な傾向として主体的でなかったことを物語る。では、コゲツキの見られるものはどのような調理であったのだろうか。コゲツキのできるような調理容器は小型煮炊具主体ではあるが、定量の壺Bも含むことが特徴的である。まず、Iタイプは水面下にコゲがなく、水面上でコゲツキとして形成されたもので、調理の最後まで水分はなくなり、茹でる調理やスープ状の調理であったのだろう。このような類型は小型鍋や壺Aなど小型少量のしかもやや浅い容器に見られる傾向があり、壺Bにおいては全く確認されない類型である。次に、IIタイプとIIIタイプであるが、胴部上位以上の部位から底部にかけて広くコゲの見られるものであり、内容物の入っている量（水面の高さ）によって分化しているだけで、基本的には同類型と言える。全体的にコゲの薄いものと濃いものがあるが、コゲツキはIタイプのような水面上で形成されるコゲバンドのみでなく、水面下でも形成される特徴があり、底面にコゲツキが残るものも存在する。これは、Iタイプよりも内容物の濃いものであった可能性が高く、スープ状のものも含め、シチュー状のものや底面がコゲツクような粥状のものも調理した可能性がある。この類型はコゲツキ痕跡のあるものの7割を占めるもので、小型煮炊具を初めとして、壺Bや壺Cの大型煮炊具でも定量確認される。何を煮たかは解らないが、炊飯状の米を炊く調理とは別であり、粥を煮た可能性はあるが、オカズの調理が主体であったと思われる。次に、IVタイプであるが、これは水分が最初から多くなく、水分を蒸発させるような調理方法と思われるもので、炊飯に近いものなのかもしれない。確認例は少なく、小型煮炊具の小型鍋と壺Aで僅かに見られる程度で、主体的な調理方法ではなかったものと予想する。

以上、コゲツキ痕跡から内容物と調理方法について述べたが、IVタイプとした炊飯状調理の可能性のあるものやII・IIIタイプの中の粥状の調理の可能性のあるものを除いては、基本的に主食である米の調理は、蒸し器である甑と湯沸かし壺である壺Bのセットで行われたものと予想される。甑と壺Bのセット使用は、基本としてカマドを使用したものと思われるが、カマド以外のオープンな施設でも使用されたものであり、カマド・甑・壺Bのセットは必ずしも固定されていない。甑を使った米を蒸す調理以外に、米を炊いたり、粥として調理した可能性はあるが、内容物まで限定できる資料はなく、可能性だけ提示し、しかもそうであったとしても例外的なものであったろうと思われる。また、米の炊飯に目立って見られると言われる外面の吹きこぼれ痕跡は確認されておらず、それも米の調理で蒸す以外の調理が主体的でなかったことの補足となりえると思われる。さて、オカズやオカズの下準備などの調理は、小型煮炊具が主体であった。小型煮炊具は基本的にはカマド以外の施設で使用されたもので、竪穴住居跡内中央付近から炉的な火を使った痕跡が確認されることから、そのような空間で、カマドのすぐ近くで行われた可能性もあるが、そのような痕跡の認められない住居が大半であり、屋外での調理が主体的であったろうと思う。ただし、壺Bや壺Cの中にオカズ調理を思わせる個体が定量存在し、それらがカマド使用の痕跡

が認められる状況は、カマド使用も定量存在していたことを物語るもので、小型煮炊具にカマド使用のものが定量見られる状況もあり、必ずしも、一定のものではなかったのだろう。ただ、おおまかな状況としては、主食である米の調理は家の中で、各家庭で行われ、オカズ的な副食の調理は、屋外で集落共同で行われた状況が想定され、米の主食調理とオカズの副食調理とが分離して行く傾向が看取できる。これはカマドの出現やそれに伴う煮炊具を長壺と小壺に分化することと一体的に行われたものと言え、大きな変革点であったろう。

2. 遺構

(1) 竪穴住居跡形態

当該時期の竪穴住居跡は22軒存在するが、1号住居と2号住居については、竪穴遺構ではあるものの、住居跡とは断定はできず、報告では一応、竪穴住居跡としたが、確証をもてないものに関してはやはり除外して考えるのが妥当である。以下に、その竪穴住居跡の特徴を述べる。

a. 竪穴の形態と規模

平面プランは方形基調で、小型長方形プランを呈す13号住居と18号住居以外は、いずれも、縦軸と横軸の長さがほぼ等しい正方形に近いものが主体である。コーナーの形状はやや丸くなるが、隅丸形状を呈するものは例外的で、3号住居がややその傾向をもつ程度である。前記2住居に比べ、規模が大きく、いずれも倍以上程度の床面積をもつ。後者の主体を占める住居と前者の小型長方形住居とは他の構造でも大きく異なっており、前者を通常の住居と考えることは困難で、別の機能をもった住居と考えるべきものである。仮に、通常の竪穴住居跡を竪穴A類、前者の小型長方形を竪穴B類としておく。

竪穴A類の規模は1辺450cmから800cmの間で分布し、縦軸・横軸分布を見ると、ほぼその中軸線上にまとまる。意識的に分類すれば、竪穴規模を450～550cm、550～650cm、650～700cm、700～800cmの4つに分けることはできるが、小型のものに集中するなど分布の割合に偏りはなく、明瞭に規模を分けることは難しく、連続的な分布と言える。これら住居規模の違いは、その違いに理由があったはずで、全て同レベルには扱えない。最も大きな規模をもつ7m以上、50㎡以上を測る3・12・23号住居を通常言われるような大型住居とは言いが、大型のクラスに入るものであり、これに準ずる規模の6.5～7m、40～50㎡の14・19・21・25号住居も含め、I類とし、前者はI a類、後者はI b類とする。他の住居から突出した存在の大型住居とは性格を異にするが、当集落の大型クラスの住居と性格付けたい。これ以下の床面積40㎡、6.5m以下の規模を有する住居は、中型クラスの住居とし、II類とする。大型に対して小型とすべきではあるが、この規模は、該期としては小型住居と呼べる規模ではなく、当集落では小型住居が欠落するような、中型と大型で構成される集落と言える。この中型クラスも、その中で6m前後にまとまる30㎡代規模のII a類と5m前後、24㎡以上規模のII b類とに分けられ、傾向としてはII a類に主体があるよ

うに思われ、当集落の通常規模の堅穴と言えるものである。

さて、先に、小型住居の欠落する構成と述べたが、小型住居と言われるような規模を有するものに、堅穴B類がある。床面積は22㎡以下で、A類のⅡb類と面積ではそれほど大きな隔絶はないが、明らかに平面形が長方形を呈すことで、同様の住居形態とは言い難い。A類と意識的に区分したのは、堅穴規模のみでなく、平面形態や明確な柱穴をもたないという住居構造に大きな違いがあることで、当集落では通常の住居という見方はしにくいものであり、工房的な存在なのかもしれない。

住居番号	主軸	縦軸×横軸	床面積	壁高	竈規模	炉	柱穴(径×深)	柱間規模	付属穴	貼床状況	床下遺構
3号住居	N-58-W	760×750	49㎡	33	170×190	無	4本(55×63)	420×400	無	全面	左右左手前土坑3
4号住居	N-67-W	615×555	32㎡	13	140×90	中央焼	4本(50×55)	330×280	無	中央以東	左右土坑2
5号住居	N-30-W	590×580	35㎡	15	150×100	中央焼	4本(35×70)	320×300	竈左横と左手前貯蔵穴	全面	浅土坑右1
6号住居	N-60-W	5～6m程度	30㎡程度	無	燃焼面のみ	無	3本のみ確認	280×240	無	全面旭山床	無
10号住居	N-26-W	525×470	24.5㎡	20	160×100	無	4本(30×45)	220×210	無	全面	浅土坑左1
11号住居	N-45-W	500×500	25㎡	18	130×110	無	4本(65×45)	250×245	貯蔵穴状3	全面	浅土坑右1
12号住居	N-64-W	790×780	60㎡	25	190×100	中央 炉穴	4本(90×43)	430×390	中央土坑1 貯蔵穴状1	全面	浅土坑右1
12号前住居	◇	5.5m程度	30㎡程度	—	—	—	4本(60×45)	280×280	—	—	—
13号住居	N-67-W	470×350	16㎡	18	簡易的竈 38×50	中央 炉穴	無	—	中央小穴2	全面	無
14号住居	N-54-W	630×660	41㎡	8	130×120	中央焼	4本(55×60)	360×360	無?	全面	浅土坑右1
15号住居	N-50-W	580×640	37㎡	15	150×95	無	4本(55×57)	280×310	無	全面	浅土坑右1
16号住居	N-57-W	590×580	33㎡	10	110×95	無	4本(45×55)	350×300	無	全面	浅土坑右1
17号住居	N-51-W	6m程度	35㎡弱	無	燃焼面のみ	無	4本(65×45)	320×300	無	主柱間	浅土坑右1
18号住居	N-31-W	410×530	21.5㎡	8	無	無	2本?(40×60)	430	無	全面	無
19号住居	N-69-W	720×660	47.4㎡	30	160×110	無	4本(75×40)	360×340	右浅土坑1	全面	浅土坑右1
21号住居	N-43-W	685×670	45.5㎡	35	160×95	無	4本(70×60)	340×340	右手前と側壁に浅土坑	全面	浅土坑右階と手前に2
23号住居	N-30-W	730×740	52㎡程度	15	—	—	4本(75×60)	360×380	無	全面	右手前土坑
25号住居	N-76-W	700×700	49㎡	10	160×100	無	4本(100×45)	350×320	右手前土坑	全面	左右土坑2
26号住居	N-33-W	530×545	28.5㎡	15	80×90	無	4本(70×60)	290×290	無	全面	中央土坑1
28号住居	N-46-W	540×540	29㎡	5	燃焼面のみ	無	4本(45×65)	260×260	無	全面	中央土坑1
29号住居	N-40-W	7m程度	50㎡弱	25	—	—	4本(35×75)	—	右手前深土坑、巖密炉	全面?	—

堅穴住居跡規模・形態一覧表

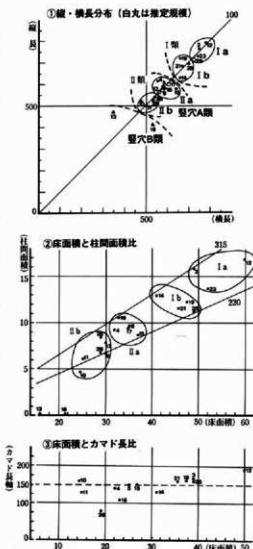
b. 主柱穴の位置と形態

堅穴A類の主柱穴は基本的に方形堅穴の対角線上に4本配置されるもので、堅穴床面積に対して1/4程度の規模の柱間面積をもつものである。柱穴はいずれも円形の掘り方で、大きさにばらつきはあるが、堅穴大型クラスで70cm前後、中型クラスで50cm前後を測り、柱痕に比べてかなり大きく掘り方をもっている。柱穴の配置や堅穴規模との関係は、住居構造に大きく関連するものであるが、堅穴A類においては、住居間にその差を認めることはできず、全体的な規模の違いによる幅はあるが、基本的には同一構造の類似した規格の堅穴住居と言えるものである。

これに対し、堅穴B類は明確な柱穴をもたないもので、18号住居に主軸上2本の柱穴らしきものが確認できるが、これについても堅穴A類に比べれば、極貧弱なビットである。基本的に主柱穴をもたない構造と考えてよく、4本柱穴でしっかりと建てるA類とは別の構造をもったものと言える。主柱穴をもたない堅穴住居構造がどのようなものであったか、考察する資料をもちえていないが、壁外柱穴は確認できず、火災にあった13号住居においても住居内で主柱と思われる炭化材は確認されていない。

c. カマド構造と炉

堅穴A類では基本的に壁際中央に造り付けカマドが存在する。堅穴の浅い6号住居や17号住居、28号住居ではカマドとしては確認していないが、壁際中央に焼土分布があり、この部分をカマド燃焼部の被熱面とすれば、位置的に合致しており、粘土構築部分が飛んでしまった状態が想定される。ただ、他のしっかりとしたカマド構築されるものとは、床下構造の違いなどから見て、異なる可能性があり、28号住居で検出された粘土塊の存在など、簡易的な移動可能な構造をもつカマドである可能性がある。さて、それ以外の造り付けカマドであるが、基本的に堅穴の貼り床が行われた後にカマド部分のみ掘り込んで別の土を入れて構築したもので、堅穴貼床の上にそのまま乗るようにして造られるものはない。堅穴掘り方の時点から、カマド部分のみ掘り込まず、地山土をそのまま残すものもある状況から、カマド構築の場所は堅穴掘り方が掘られる段階で、既に決まっていたものと予想する。カマド掘り方は深く



第193図 堅穴住居跡の規模・面積分布

掘り込まれるものもあるが、概して堅穴掘り方と同様の深さである場合が多く、貼り土は基本的に床土と同様の土を用いる。ただ、床面に当たる層と奥壁付近は砂質粘土塊や焼土塊を混在させた土を貼っており、燃焼部にあたる部分は粘土を貼り付けている。カマドの構築は、この基盤貼土層の上に乗る形で造られ、砂質粘土をベースとする土を使って造られる。袖は堅穴の壁に直交して築かれ、堅穴の壁から外へはほとんど拡張されることはなく、壁の手前で緩く逆「U」字状に回ることが多い。カマド袖の遺存部分からではあるが、奥壁から手前へ長さ150cm前後を測るものであり、それは堅穴住居の規模に関係なく、ほぼ同様の規模を保有する。燃焼部の位置はカマドによって差はあるが、カマド手前側、袖のされる部位前後に存在し、その奥にすぐ支脚が存在している。つまり、支脚部位に当たるカマドの掛け口は、カマドとして構築される部分の手前側に存在しており、それから奥の空間が何のために設けられていたか、被熱痕跡がほとんど無いことも含めて問題である。通常、カマドはここから堅穴の壁外へと煙道が伸びる構造となるが、壁外の煙道への繋ぎの存在のみであれば、無駄な空間である。仮に、堅穴外に煙道が伸びる構造であったとしても、カマド奥壁に被熱痕跡が全く確認できない状況や、カマド内の燃焼部より奥に被熱が続いて行かない状況を説明するのは困難であり、燃焼部から奥壁側そして住居外へと続く火(熱)の流れは考えられず、住居外へ伸びる煙道施設が存在していなかったとするのが自然と思われる。ただ、全く奥側に煙出しがなかったかは問題があり、空気抜きのなものが住居内でカマドの奥に設けられていた可能性はある。ただし、煙道が確実に壁外に伸びて行く構造のものとは別に考える必要性を感じており、火の流れが、焚口から煙道へという竈状の流れをもつものに対し、明確な煙道をもたない火を焚く場所を粘土で覆っただけの簡易な「へっつい」的なカマド施設であったものと予想したい。このような堅穴の外に煙道が伸びない構造と煙道が伸びる構造は、時間的変遷で論じられる部分が多いが、基本的に構造転化したものとも考えることはでき、必ずしも単一の構造ではなかったものと予想する。さて、基本的な構造の他に、カマドの支脚や掛け口の数により、分類が行われている(杉井1992)。当資料では、一例のみ支脚の2個並列するものがあるが(5号住居)、これについてはカマドの幅を拡張した際に2個に増加されており、通常は支脚の確認されるものは全て1個である。ただし、この支脚の位置が左右いずれかに寄って設置されており、中央に設けられるものはなく、位置から考えて2個並列の掛け口が存在することを想像した。これは火床面が片側に寄って検出される例がないことから想定されるものであり、2個掛けであっても、支脚が1個しかない群馬などの事例とも一致している(外山氏の論考に記載されるカマド事例では複数の壘が嵌め殺して造り付けられているが、支脚は長壘に1個使用されるのみで、他の壘には支脚は存在していない。外山1989、1991)。つまり、支脚と掛け口から見れば、群馬の事例と同一であるが、袖の造りを重厚にし、壘を嵌め殺して据え付けてカマドが造られている東日本の状況は、当遺跡では確認できず、西日本的と言われるような薄く造る構造に類する。カマドの掛け口と重厚な造りのカマド構築は西と東で地域圏を形成しており、それが炉の構造の地域圏と合致する様相が指摘されているが(都出1987、杉井1992)、北陸地域は

その両方が錯綜する地域であり、このカマド構造からもそれが窺えるであろう。

以上が堅穴A類の壁際造り付けカマドであるが、堅穴B類の13号住居にはこのタイプをより簡易にした小型のカマドがある。堅穴のコーナー付近に造られるもので、砂質粘土で袖を造り、その手前に支脚が設置され、その手前側が焼けているという状況は、煙道をもたない造り付けカマドと基本的に同様で、小型化して構造を簡易にしたものと位置付けできる。さて、この住居には、中央に炉穴が存在しており、カマドの火床面よりもよく焼けている。床の被熱度合いは、その焼けた施設の使用頻度を示すものとは必ずしも言えず、火力や火を使用する目的や施設の機能にも関連していたであろうが、これについて見れば、カマドの使用頻度は低かったものと予想され、炉穴で煮炊きしたかは別問題として、炉穴の使用頻度は高かったものと予想する。

炉とカマドの併設される事例は、カマドの出現期に多く見られる事例と言えるようであるが(田嶋1992)、当遺跡の堅穴A類でも4号、5号、12号、14号住居でカマド以外で火床面が見られる。いずれも堅穴のはほぼ中央で存在し、12号住居では中央がやや窪み、炉穴状を呈すが、明確な施設として設けられたという感じはない。被熱面の薄さや周辺状況から判断して、煮炊き機能の場所としてカマドに併設されたというイメージはなく、囲炉裏的な住居中央の焚き火場的な存在であったろうと考える。これがカマド出現期のみに関係する現象とすれば、炉からカマドに煮炊き施設が転換する時の、炉の保有する機能の残存現象とも捉えられ、興味深い。ただし、確認事例は全体の2割程度であり、大型クラスの住居にのみ確認されるような偏在性が特に認められないことは、日常的な囲炉裏機能ではない可能性もあり、一概には論じきれない。

d. 柱穴以外の付設穴

堅穴住居内には主柱穴以外に確認される土坑やピットは少なく、貯蔵穴状のしっかりした形態のものは確認されない。ただし、29号住居には長方形のしっかりした土坑が右手前壁際に掘られており、これについては貯蔵等何らかの機能をもった土坑と思われるが、例外的である。堅穴住居で確認される土坑状のものは、不明柱穴状のものを除いては、楕円形ないしは隅丸方形の極浅いものが一般的で、コーナーや壁際付近に掘られる。掘られる場所が一定しないのと、土器の出土が比較的多く、カマドの焼土塊の出土も見られることから、住居に伴うような施設として掘られたものではなく、住居廃絶時に伴う埋納土坑的な意味合いが想定される。当該遺跡では、住居廃絶時に伴うような、カマド内やその両側壁際付近の一括土器群が存在しており、これらの存在とも関連するものと思われる。カマド破壊を含めて、住居廃絶(廃棄)時に何らかの祭祀行為が行われ、一括廃棄されたものと言えるであろう。

e. 貼り床構造と床下遺構

堅穴の掘り込みが極浅い6号住居を除いては、いずれも貼り床が確認され、そのほとんどが堅穴内全面を貼り床している。堅穴の掘り方は、底面が凸凹しているが、明確に掘削の工具痕などを確認できたものではなく、底面を平滑に整形していないということを確認したのみである。さて、貼り床下の掘り方には、単なる凸凹だけではない、明確に遺構として掘られた土坑が存在してい

る。楕円形か隅九方形のプランで、比較的大きな土坑である。堅穴の右か左に偏った、中央縦方向に掘られるものが主体的で、左右2基掘られるものや中央に1基掘られるのものもあるが、大半は右側に1基だけ掘られる。除湿機能などが想定されるが、土坑内も硬質の貼り床土が埋められているため、それほど効果があったとは思えず、それよりも、堅穴掘削の方法や貼床など堅穴住居構築の方法に関連する可能性はないだろうか。土坑が支柱穴が掘られる以前にその配置が決まっていたかのように、柱穴間で大体収まるように掘られていることは、何を意味するかよく解らないが、その配置に強い法則性を感じるのである。

(2) 掘立柱建物跡形態

a. 平面形態と規模

掘立柱建物跡は、明確に総柱建物と言えるものはなく、いずれも側柱建物の範疇で捉えられるものである。ただ、主体となる柱穴とは別に補助的に設けられた柱穴があり、これらの配置の仕方から平面形態を以下に分類している。

A類……………通常の側柱建物であり、補助的な柱穴をもたないものである。

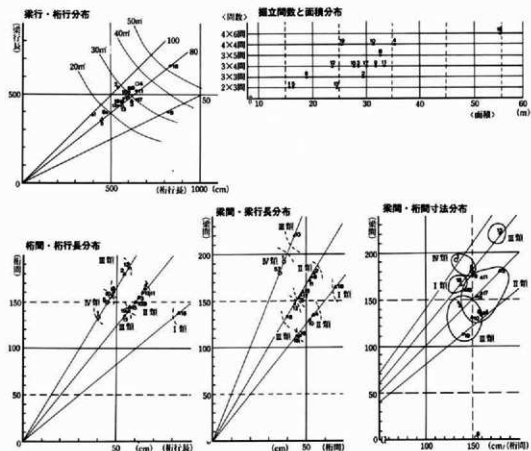
B類……………A類の桁行に1本のみ拡張される形で2本掘られるもの。梁間の柱は存在せず、庇付き建物とは異なる。

C類……………A類の側柱内中央軸線上に柱が並ぶもの。桁行き間中央の軸線で並ぶC1類と梁行き間中央の軸線で並ぶC2類とに分けられる。両者とも軸線上の柱穴は側柱よりも小型であり、配列も側柱とは違う配列をしている。

D類……………A類の梁行側の中央外側に一本柱穴が掘られるもの。梁部分の補助的な柱として存在したもののか。

以上の分類は単なる補助的な柱穴の配置の仕方ではあるが、建物構造に関連するものと思われ、特にC類は軸線上の柱が束柱に類するものであることから、総柱建物に近い構造であった可能性がある。基本的に、平面プランは長方形で、桁行長と梁行長の分布では、梁/桁比が80前後に集中する傾向が見られる。50前後の桁に長い8号掘立は3×3間からの建て増しの可能性があるが、桁行で拡張して行く傾向は新しい動きであり、50前後の桁に長い建物という点でも理解しやすい。ただ、この掘立を除けば、分布は75程度どまりで、桁行きにあまり伸びない掘立で占められる。このような桁行に伸びて行かない平面形のみで構成される掘立は、基本的に古い段階に見られる特徴であるが、5世紀中頃～6世紀後葉の掘立であっても、60前後の一群が定量存在しており(川畑1995)、80前後でまとまる傾向は比較強い規格性を感じるものである。面積は50㎡以上を測る特殊建物の可能性が高い大型の18号掘立を除くと、15㎡から35㎡の間で分布する。面積と柱間数構成は相関関係にあるが、必ずしも比例の関係にはなく、構成の仕方には幾つかのタイプがある。まず、柱間数構成について示すが、2×3間が3棟(+2棟)、3×3間が2棟、3×4間が6棟、3×5間が1棟、4×4間が3棟(+1棟)、4×6間が1棟であり、これに面積を対比させると、図に示したものとなる。基本的には、2×3間の15㎡前後と、3×4間の30㎡前後がよくまとまり、その建物を基軸として構成されていることが解るが、他の遺跡の掘立では確認例がほとんどない4×4間掘立の存在など、梁間をつめて建てる掘立が定量存在し、当掘立資料

の一つの特徴と言える。また、その逆の柱間数を増やさずに面積増を図る13号掘立も存在しており、柱間数構成には幾つかのタイプがある。さて、掘立の柱間数構成は、桁間では比較的一定した寸法を取り、桁行の3間から4間への柱数増加は桁行長が550cm頃を境に行われているという程度の法則性は読み取れる。しかし、梁間では梁行長の増減がさほどないにもかかわらず、柱間本数は2間から4間まであり、梁間寸法に大きく幅が出てくる。つまり、基本的に梁間での柱本数には規則性がなく、基本となるのは梁の長さであり、梁行長をベースとして、それに柱を配置するという在り方であったのだろう。本数の少ないものは比較的小型の掘立に、本数の多いものは大型の掘立にという基軸が存在することは間違いないが、それを超越する意味での梁行長の基準があり、梁2間で建てられる掘立は、中軸に東柱状の柱で補強するC類形態で対応している状況が見られる。この梁間の取り方は、これ以降の掘立で見られる梁間を基軸として構成される梁2間掘立の盛行を招くこととなるわけで、基本的に面積増は桁行での柱本数の増加によって図られる建物の基本形が当掘立資料に読み取れるものと予想する。ただし、桁と梁の柱間寸法は比較的類似するという古墳時代の様相を色濃く残すという面もあり、新しい掘立様式に転換して



第194図 掘立柱建物跡規模・面積・柱間寸法分布

いる状況にはない。これは先に示した桁行長、梁行長分布で古い様相を残すことと同じことであり、全体的な様相としては、依然として古墳時代の建物の様相をもっていると言えるものである。

b. 柱穴規模と掘り方形態

柱穴掘り方は、円形を基本とするが、確実に方形プランをもった掘立が存在する。3号掘立と18号掘立がそれで、柱穴径は比較的太く深い傾向はある。しかし、そのような柱穴のものに全て方形掘り方が採用された訳でなく、大型建物のみ採用された訳でもない。傾向としては比較的しっかりした建物に採用される傾向はあるが、18号掘立の一部の柱には円形掘り方が見られることや、また16号掘立の一部に方形掘り方が見られるなど、その採用に当たっては、統一した理念は感じられない。柱穴掘り方の規模は40～80cmで、50cm前後が半数以上を占め、60cm台は3割、70cm台を測る大型のものは1割程度である。大体、柱穴の深さは径に比例する傾向があり、深いものは底面がしっかりと掘られ、突き固めたような面を形成している。

c. 掘立面積区分と建物の性格

掘立の面積の内容は先に述べたとおりであるが、建物の基準を桁間本数に置いて見て行けば、

掘立番号	主軸	平面形態	規模(間数)	梁長	桁長	面積	掘り方・形態・深さ	平均柱間寸法	付属施設
1号掘立	N-44-W	鋼柱C ₁	2間×3間	385	400	15.4	70～80・略円形・40～50	梁192・桁133	無し
2号掘立	N-56-W	鋼柱A	3間×3間	540	540	29.2	50～60・略円形主・20～40	梁桁とも180	無し
3号掘立	N-36-E	鋼柱C ₁	3間×4間	460	620	28.5	50・略方形・50～60	梁153・桁155	桁中央軸に小P
4号掘立	N-50-W	鋼柱B	4間×4間	540	650	35.1	60・略円形・30～40	梁135・桁162	南東面庇状
5号掘立	N-51-W	鋼柱C ₂	2間×3間	360	450	16.2	40～50・略円形・40	梁180・桁150	梁中央軸に小P
6号掘立	*	鋼柱A?	?×3間	—	470	—	50～60・略円形・30	桁156	無し
7号掘立	*	鋼柱A?	2間×?	360	—	—	50～60・略円形・30	梁180	無し
8号掘立 (拡張)	N-33-E	鋼柱A	3間×3間 3間×5間	400 400	480 820	19.2 32.8	50前後・略円形・40 拡張部不整形	梁133・桁160 拡張部不均衡	拡張部は付属的
9号掘立	N-66-W	鋼柱D	3間×4間	530	600	31.8	50前後・円形・30前後	梁176・桁150	梁中央間外側P
10号掘立	N-29-W	鋼柱A	4間×4間	520	600	31.2	50～60・略円形・20～30	梁130・桁150	無し
11号掘立	N-43-E	鋼柱A	3間×4間	520	640	33.3	50前後・略円形・20～50	梁173・桁160	無し
12号掘立	N-48-E	鋼柱A	3間×4間	440	540	23.8	60前後・円形・40～60	梁146・桁135	無し
13号掘立	N-56-W	鋼柱C ₂	2間×3間	440	560	24.6	60～70・円形・30～40	梁220・桁186	梁中央軸に小P 列3本、総柱的
15号掘立	N-39-E	鋼柱A	3間×4間	480	570	27.4	60前後・略円形・40～50	梁160・桁142	無し
16号掘立	N-50-W	鋼柱A?	4間×?	460	—	—	40～50・円形と略方形・20	梁桁110～120	無し
17号掘立	N-41-E	鋼柱A	3間×4間	470	640	30.1	60前後・略円形・20前後	梁156・桁160	無し
18号掘立	N-41-E	鋼柱A	4間×6間	660	830	54.8	70～80・略方形主・40前後	梁165・桁138	無し
19号掘立	N-47-W	鋼柱D	4間×4間	450	560	25.2	50前後・略円形・30前後	梁112・桁140	梁中央間外側P

掘立柱建物跡規模・形態一覧表

3間と4間（5間も含む）、6間の3つに分けられ、先述した2×3間の15㎡前後と、3×4間の30㎡前後、4×6間の50㎡代を基軸とする建物に対応する。全ての掘立がこれに該当すれば、何も問題はないのであるが、桁間2間と3間の間には、20～25㎡程度の掘立の一群があり、その中間的状况を示している。面積分布で単純に考えれば、桁4間クラスのものに含めることも可能であるが、4間クラスのものがある程度の規則性をもって存在していることと、柱間構成の感覚としては3間クラスの建物に近いものであることを考え、桁4間クラスの建物とは別の建物と考え、桁3間クラスの建物とも区分し、一つの建物クラスとして認定したい。つまり、15㎡前後のⅣ類掘立、20～25㎡前後のⅢ類掘立、30㎡前後のⅡ類掘立、50㎡代のⅠ類掘立として分類するので、建物の性格を規定するものであると考える。ただ、具体的に何に該当するかは、何ら根拠をもちえておらず、竪穴住居との関連からも考える必要はあるが、それは後述することとし、ここでは概念的に考えだけを述べておく。まず、Ⅳ類掘立であるが、基本的に居住以外の建物を想定したい。掘立形態C類の採用や、柱穴のしっかり掘る傾向は倉庫のイメージがあり、それに類する建物を想定したい。Ⅲ類掘立も、基本的には居住用よりも倉庫に近い機能の建物ではないかと思っている。柱穴をしっかり掘る傾向や、C類形態の採用、多柱傾向など、建物自体、これより大きいⅢ類よりもしっかりしている。Ⅱ類掘立は、基本的に居住的建物と想定する。居住用の根拠を明確にできないが、Ⅲ・Ⅳ類掘立の対比で考えれば、3×4間の建物として定型化し、面積もまとまる傾向があることや、竪穴住居の中型クラスの中心的面積に最も合致していることが上げられる。Ⅰ類掘立も基本的に居住的機能を想定するが、Ⅱ類の通常規模のものに対し、大型特殊建物として区別される存在であり、竪穴住居の大型クラスと対比可能である。掘立の機能は、基本的に住居か倉庫かという区分が可能であるが、居住用であってもいろいろなレベルでの建物があった訳で、同様に倉庫であっても、穀物類を入れた米蔵のイメージと道具小屋などの物置小屋のイメージとは大きな違いがある。その点を加味して機能については論じる必要はあるが、当集落では住居として竪穴住居と掘立柱建物が併存する状況にあり、まず、その違いの意味を理解しなければならないという難解な問題が残っている。その問題は次項に述べることとする。

（3）廃棄土坑及び竪穴住居内廃棄について

ここでは当遺跡の土器廃棄行為について考えてみる。

土器廃棄は、竪穴住居内と土坑内の2遺構のみで見られ、掘立柱建物跡や溝からは意識的な土器廃棄行為は認められない。当遺跡の土器廃棄の特徴はここにある。掘立柱建物跡でも竪穴住居跡でも柱穴の柱抜き取り穴や掘方へ意識的に土器廃棄した形跡は認められず（竪穴住居柱穴上層からは出土するが、柱抜き取り後の穴に意識的に土器を入れた事例はない）、また、溝への廃棄行為も確認できない。つまり、竪穴住居跡と土坑にのみ土器を捨てている訳で、この2遺構の廃棄状況を以下にまとめてみる。

まず、竪穴住居跡への土器廃棄であるが、竪穴住居の説明の部分で述べていることであるが、

基本的に3つの出土状況がある。まず一つは、竪穴住居床面からあまり間層を挟まずに出土するもので、住居廃絶時に直接伴うものである。この出土の仕方は、特殊な事情により、生活用具がそのまま住居に遺棄されたものであり、特に火災などによる住居廃絶が予想される。この場合の造り付けカマドは遺存度高く検出されることが多く、住居内に意図のないしは意識的に廃棄行為が行われなかったものである。当遺跡では13号竪穴住居がその可能性をもち、完形の須恵器短頸壺と土師器甕Cが出土している。この廃棄状況をA型とする。2つ目は竪穴住居のカマド内やその周辺壁際付近の床面近くに一括廃棄されるもので、まとまった量の土器が出土している。壁際から斜めに堆積する覆土最下層に混在する場合が多く、下に間層を僅かであるが挟むものである。この最下層は住居廃絶に伴う竪穴周縁盛土の埋め戻し土など住居付属施設に伴う土層と思われるもので、住居廃絶に伴う住居の取り壊し行為に伴う土層である。竪穴住居には基本的に造り付けカマドがあるが、当遺跡でカマドが完存する事例はなく、天井はもちろん、袖の残りも悪い。支脚残存の事例も少なく、支脚石やカマド土をまとめて住居内土坑に廃棄した事例もある。これはカマドの自然崩壊の状況を示しておらず、住居廃絶時に意識的にカマド破壊行為が行われたことを示すものと予想する。つまり、カマド破壊行為であり、住居廃絶時の取り壊し行為と一体的に行われ、これに土器の一括廃棄が伴ったものなのであろう。この一括廃棄は当遺跡の大半の竪穴住居において確認できるものであり、完形ないしは半完形の土器が主体を占める。器種は土師器煮炊具が6割を占め、他は食膳具。須恵器貯蔵具は極少ない。使用痕跡がほとんど確認でき、住居で使用していた容器である可能性が高い。ただし、A型のような使用されていた状態を示すものは少なく、数個体の土器が破片でまとめて廃棄されたりなど、確実に人為的な廃棄行為を伴うものであり、A型のような「置き去り」の状態ではなく、選択的に廃棄ないしは何らかの「行為」に伴う廃棄であるものとする。カマド破壊については、祭祀行為として捉える見方が大勢で(堤1989)、寺沢知子氏が「カマド祭祀は……住居廃絶と一体化した祭祀として機能していた場合が多い」(寺沢1986)と述べるように、カマドだけでなく、住居廃棄行為の一連の祭祀行為と思われる。つまり、これまでの住居を取り壊し、新たな住居に移る行為において、使用してきた土器の廃棄行為とカマド破壊行為は一体的なものであったものであり、それは特別な祭具を使って行うのではなく、生活特にカマドを中心とする炊事場道具を使って行う祭祀であったものと位置付けできる。竈神や宅神という観念が存在していたかは、別の視点からの分析が必要とは思いますが、住居廃絶時の一つの「しきたり」として、この集落に慣例的に存在していたものであると予想する。以上の土器廃棄状況をB型とし、祭祀性を強く帯びた廃棄状況として位置付ける。3

出土地	須恵器食膳具	土師器食膳具	須恵器貯蔵具	土師器煮炊具	平均出土個体数
廃棄土坑内	48(16.8)	30(10.5)	43(15.1)	164(57.5)	57個体
竪穴住居埋土内	266(16.8)	204(12.9)	188(11.8)	929(58.5)	88個体
竪穴住居一括廃棄	27(18.0)	26(17.3)	6(4.0)	91(60.7)	9個体

土器廃棄の器種構成と1遺構平均個体数

つめに、埋土中の一括性に乏しい土器出土状況がある。土器はほとんどが小破片で構成されるもので、器種は煮炊具が多いが、B型のような完形に近いものがほとんどなく、須恵器貯蔵具が定量存在することが特徴である。出土量は住居平均で88個体であるが、各住居で差は大きく、住居の大きさに関係なく見られる。大体の傾向としては、住居の密集する12号住居周辺や3号住居周辺で多く、10号住居や25・26号住居などの集落の縁辺に位置する住居で少ないという出土状況が見られる。さて、この堅穴住居埋土の土器は、基本的に住居廃絶後に住居が埋没する段階で、入り込んだものであり、堅穴住居に直接伴うものではなく、B型とは明確に区別できる。住居の埋没段階で、主に周辺の住居から廃棄されたものと予想され、主に周辺住居で使用していた土器の破損品を廃棄したのが溜まったと考えれば、住居密集区域で出土量が多く、縁辺区域で少ないという傾向は頷ける。ただ、この廃棄行為が長期継続的なものなのか、一時的に短期間で行われたものなのか、堅穴住居のその後の処理の仕方に関連してくる。住居覆土は所謂レンズ状の堆積が一般的で、壁際から中央へ堆積して行くが、これを自然の土砂の流れ込みによる堆積と考えるには、以下の2点で無理がある。1点は、堅穴住居埋土内の土器が埋土内で接合することは確かであるが、比較的接合個体数は少なく、他住居埋土間で接合関係を結ぶ事例も多々あり、埋土上層と下層との接合や包含層との接合など、土層堆積の新旧を飛び越えた接合関係が存在することである。そして、もう1点は、集落内でこのような廃絶堅穴が無数に空いたままで放置される状況が想定できないことであり、住居建て替え時に前の堅穴が埋まり切っていない状況も想定できないことである。つまり、堅穴は住居廃絶後、比較的早い段階で、埋没したものであり、人為的な埋め戻し行為が行われたことを示している。ただし、埋土であっても、何層かに別れている住居が多く、何回かの埋め戻し行為があったことは確かであろう。つまり、埋め戻し行為のみの目的で行われたのではなく、新規の堅穴掘削時の土砂処分や不用排土処分とも関連する可能性をもち、そのために数回の埋め戻しで埋まるものや1回の埋め戻しで埋まるものがあつたであろう。集落の建て替え行為がどのような形で行われたか難しい問題であるが、堅穴住居の老朽化に伴うような住居ごとに順次行われるものでなく、集落全体で建て替え行為が行われたものと予想され、一斉にというのは無理かもしれないが、かなり計画的に新規堅穴の掘削と廃絶堅穴の埋め戻しが行われたものと予想される。では何故、このような土器が混在するかであるが、住居の断面ドットマップを見ると、比較的上層のそれも中央付近で密に分布する傾向がある。つまり、埋め戻し層であっても、下層はあまり土器を多く混在していないもので、つまりは、埋め戻し土に意識的な土器廃棄はなかったものと思われる（ただし、住居によっては下層から上層まで均一に土器が入るものもあり、一様でないことは確かである）。さて、埋め戻し上層であるが、先述したように、周辺の住居から廃棄されたものが主体的であると思われる。上層と下層の土器接合は、埋め戻しが近接した時間の中で行われたためおこつたもので、一気に埋め戻されたためであろう。また、この上層埋め戻し土は、弥生時代の堅穴住居（20号住居）の陥没穴にも存在するもので、同様に多くの須恵器・土師器を混在させている。陥没穴を完全に埋め切る、集落内の整地行為に類

するものであり、このような土器の廃棄行為は、堅穴の陥没穴の整地行為に関連したものでなかろうか。単なる破損土器の廃棄であり、ゴミ穴として利用したのだとも考えることはできるが、陥没穴に土器片を廃棄し、混在させることによって、土だけの埋め戻しよりも、地盤を締め、整地を高める効果があったとも考えられ、意識的に混入していた可能性を考えたい。堅穴住居の埋土内土器の評価については、これまでに色々論じられている分野であるが、筆者なりの考えを述べた。このような土器出土をC型としておきたい。

以上、堅穴住居の土器廃棄に対し、廃棄土坑と認定した大型土坑がある。この土坑は短軸300cm近く、長軸400cm前後を測る大型のものが多く、形状も隅丸長方形形状ないしは長楕円形状のしっかりした掘り込みのものが目立つ。掘られる場所は、堅穴住居跡と重複するものは少なく、掘立柱建物跡と重複する傾向があり、大体、掘立柱建物跡が先に存在し、土坑が後から掘られるようで、これは堅穴住居跡と掘立柱建物跡との重複と同様である。近くにある建物に近い主軸を取って存在する傾向があり、16号土坑は5号掘立と、20号土坑は4号掘立か16号掘立と、21号土坑は4号掘立か23号住居と、26号土坑は21号住居と、28号土坑は10号掘立と、建物の主軸に土坑長軸を合わせて、主軸を合わせる建物と密接な関係をもつものと予想する。土坑の掘削の意味は、主に土器を廃棄するためのものと予想され、建物に付随するゴミ廃棄穴か建物の建て替えなどに伴う堅穴住居B型廃棄のような「かたづけ」的な埋納穴だったものと予想する。出土土器の構成は、堅穴住居C型に類似した状況を呈すが、須恵器甕が特に出土量が多く、倍近い率で存在している。また、土器の完存率は確実にC型よりも高く、B型のような一括廃棄に近い状況を呈す。ただ、破片での出土も定量あり、特に土師器煮炊具は顕著で、B型とC型の中間の様相を呈している。土坑内覆土は堅穴住居に類する堆積を示しており、自然の堆積という感じではなく、埋め戻しによるものと思われる。埋め戻し土層は数層に別れるものが多く、掘り直しているものもあり、また、上層は、時期のやや新しい土器が陥没穴に堆積するように存在する場合もある。ただし、このような上層堆積の明確に確認できる例は少なく、数回の建物からの廃棄とは別に存在するものである。基本的には、堅穴住居B型廃棄のような建て替えに伴う土器廃棄が主体的であったと思われ、埋め戻し行為自体は同じでも、堅穴住居の埋土内の土器群とはかなり性格を異にするものであろうと考える。ただ、煮炊具が少ないのは、堅穴住居B型とは異なり、小破片を定量含むことも異なる。煮炊具が少ないのは、この土坑が主に掘立柱建物に付随する傾向が強いため、堅穴住居に伴う可能性がある26号土坑は煮炊具が多いという傾向とも一致している。小破片が定量存在する傾向は、堅穴住居B型のような一括廃棄のみでなく、日常の破損品も含んでいたためであり、祭祀性を帯びた堅穴住居B型とは別の廃棄形態であったのだろう。このような土坑廃棄をD型とし、堅穴住居の廃棄型と同列に扱う。

以上、4つの土器出土の在り方の特徴とそこから想定される土器廃棄の意味と性格を述べてみた。基本的にA型は廃棄ではなく、土器の「置き去り」であるが、B型からD型は意識的な土器廃棄と位置付けた。堅穴住居廃絶に伴うカマド祭祀に強く関連したカマド周辺を舞台とした煮炊

具中心のB型廃棄。住居（建物）の建て替えや移動に伴うと予想される、その住居で使用した土器の「かたづけ」的行為に主体をおくD型廃棄。竪穴住居の建て替え時に伴う新たな竪穴の掘削と既存竪穴埋め戻し行為、そして最終過程の整地行為に伴う土器廃棄と位置付けたC型廃棄。土器はいずれも容器であることは間違いないが、時代によって、その使われ方は異なり、集落の中での使われ方の特徴を出すことは、集落の性格を考えるにおいて重要なことと考えている。そして、それは集落の中の空間を復元する作業において、有効な手段であると考えており、次項で、それを反映できればと考えている。

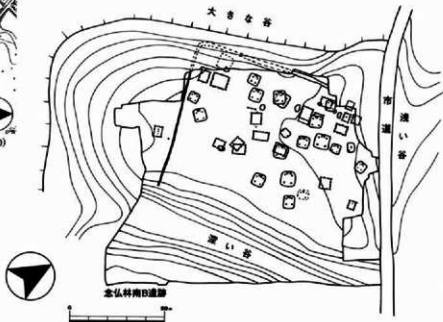
3. 住居・建物群の構成と集落としての景観復元

(1) 全体的な地形と集落の立地

地形と遺跡の立地については、1章で述べているが、ここで住居・建物群の構成を考える上でも、再度述べておきたい。さて、当遺跡の存在する月津台地は、北東側から南西側に伸びる台地で、柴山湯・今江湯と木場湯及び湯埋積平野に囲まれた独立地形をしている。台地には湯へと伸びる多くの開析谷が複雑に入り込んでおり、特に当遺跡の立地する部分は、柴山湯へと繋がる馬渡川の大きな谷がここを起点に「Y」状に分岐する。つまり、独立した舌状台地のような地形を呈している訳で、南側、西側の2面は比高差大きく、大きな谷を望む格好となっている。さて、さらに当遺跡は南東側を狭く深い谷によって念仏林南B遺跡と分断され、また、北の大きな谷から派生して伸びる浅い谷によって念仏林遺跡と分けられているため、地形としては一つの完結した台地となっている。台地平坦部は北東～南西に長く、南西側へとやや狭まって行く舌状を呈し、



調査区的位置 (1/10,000)



第195図 遺跡全体の地形と遺構分布

長さ120m、最大幅70mの7,500㎡の面積を測る。住居・建物はこの平坦部いっばいに広がっているが、北東側の最大幅区域にやや密集する傾向があり、南西側の台地端部へやや疎になる傾向がある。さて、この集落には「L」字を呈すると思われる区画溝が存在しており、溝の南東端はB遺跡を分ける深い谷と直交している。つまり、深い谷と区画溝で「コ」字区画を形成している訳で、市道と重なる北東側の浅い谷とともに自然地形を利用した方形区画を形成している。図には、復元地形と住居・建物の分布を示したが、この方形区画に沿うように、住居・建物が建てられているのが解る。区画方位よりも北へ主軸をもつものや西へ主軸をもつものが少なからず存在するが、最も多いのは区画方位に沿ったものであり、南東側の深い谷を区画の基軸として自然地形に沿った建物方位を基準としている。また、先に北東側台地基部の広い区域に住居・建物の分布が多く、南西側半分では少なくなる傾向は述べたが、特に区画溝よりも南西側では建物の確認は1棟のみであり、ほぼこの区画溝内で集落が経営されていることが解る。この区画溝は地形に沿えば、半円状に九く区域を広げられるが、溝を直角に曲げて方形区画を形成するには、この位置が最大であり、区画溝の西側コーナーは、谷への傾斜転換点ざりざりの所に位置している。ただし、この区画溝は集落形成当初から存在したとは限らず、全ての住居・建物が方形区画を指向したもとは言い難い。遺構の重複や主軸方位の相違から、住居・建物は何期かに分けられるものと思われ、次に、これらを考察する。

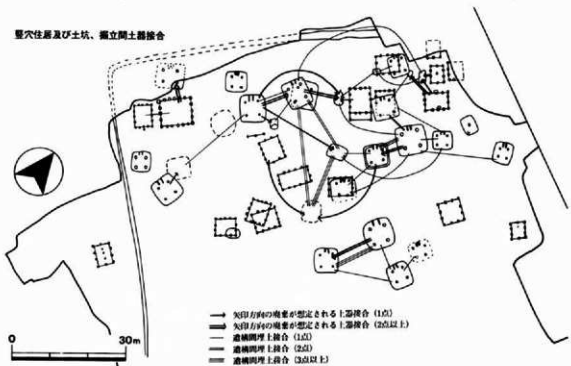
(2) 住居・建物の群構成

住居・建物の時期細分による構成を提示する前に、住居・建物の大まかな群構成を提示したい。当集落は、台地平坦部に間断なく、比較的均一に分布する傾向があり、全く建物が存在しない空間というのは確認しづらいが、竪穴住居と掘立柱建物とを別に考えて、グルーピングすると、ある程度の群構成は見えて来る。特に掘立では、台地中央部の居住用建物主体の6棟で構成されるb群を中心として、南西隅付近の大型建物を含む2棟で構成されるa群、北側隅付近の倉庫的小型建物(c'群)を含む7棟で構成されるc群に分布域が別れ、北東隅付近や南端に1~2棟で構成される小型建物主体のd群・e群が存在する。居住用建物はb群を主体として、比較的遺跡の中心部付近に分布するのに対し、大型建物や倉庫的小型建物は遺跡の縁辺部に存在し、機能により建物の場所(群域)を意識的に分けていた可能性はある。さて、竪穴では、掘立ほどの明瞭な群構成は難しく、比較的連続性をもった分布を示す。しかし、掘立a群周辺の竪穴は大型の竪穴が目立ち、比較的南北の横長の分布を示すのに対し、北東側の竪穴は東西に縦長に分布し、概して中型規模の竪穴が主体を占める傾向があり、大きく2分できる。そして、さらに縦長の竪穴群は3号竪穴を中心とする群(竪穴b1群)と12号竪穴を中心とする群(竪穴b2群)の2つに分けられる可能性があり、いずれも5軒程度の竪穴で構成されていたものと見る。南西側の竪穴群は掘立a群を内包するような形で存在しているため、同様の群とし、竪穴a群と位置付けられるが、北東側の竪穴b群は厳密に掘立群と対応関係にあるものではなく、掘立b群とともに一つの建物群として存在したのであろう。また、竪穴には小型長方形の竪穴B類が2軒存在するが、

竪穴住居と竪立柱建物のグループング
 (破線は編み、1点破線は竪穴)



竪穴住居及び土坑、竪立開土器接合



第196図 竪穴住居・竪立柱建物のグループングと遺構同土器接合

これは工房等の一般住居以外の用途が想定されるものである。位置的に堅穴b 2群に入れることも可能であるが、堅穴・掘立の群域の接点に位置しており、異種建物として独立した存在だった可能性がある。さて、堅穴と掘立は、同種建物の重複よりも、重複することが多く、群域の重なっている部分では必ず重複している。これは意識的に前の建物があった場所に建てられているものであり、建物の間隔や配置により、そのような選地がなされたのであろう。このような重複区域以外では基本的に掘立と堅穴は区域を分けて建てられており、堅穴と掘立が同時併存していたという前提ではあるが、異なる建物として明確に区別されていたことが窺える。

さて、以上の堅穴住居・掘立柱建物の群構成は、おおまかなものであり、田嶋明氏が提唱するような「建物群」・「建物小群」に対応するものではない。この辺については、住居・建物の時期細分を行ったうえで、考えることとする。

(3) 住居・建物の時期と細分

さて、当集落は、基本的に、土器から見た時間幅は狭く、6世紀第4四半期から7世紀第3四半期までであり、しかも、出土量が安定し、住居や建物に伴うという条件で考えれば、7世紀前半代の半世紀間にはほぼ絞り込まれ、確実に集落として成り立っていたのは、この半世紀の期間と考えられる。これは土器型式では1つの型式にあたる期間(北陸古代Ⅰ期)であり、つまり、当集落は短期間で廃絶された集落と言えるものである。須恵器から2群須恵器(古代土器編年Ⅰ期古段階)主体で構成される時期と3群須恵器(Ⅰ期新段階)主体で構成される時期に分けられるが、厳密な意味で、土器群を区分することは難しく、ましてや、遺構の所属時期を当てはめて行く行為は、住居の場合、その住居廃絶に伴う可能性が高い資料という前提が伴うため、資料的に限られており、至難の業と言える。土坑は廃棄土器に基本的に大きな開きがないため、主体的な土器の時期を所属時期として捉え、提示すればいいが、堅穴住居は廃絶と埋没とで異なる土器廃棄が存在するものであり、資料提示には、先に述べた土器廃棄型に則して提示が必要となる。以下にそれを示すが、堅穴住居はA型廃棄かB型廃棄であることを前提としたものであり、C型廃棄は除外するが、特にまとまった資料の場合のみC型廃棄と明記して提示する。

・2群須恵器主体の古手土器中心(「」はこの中でも新手的なもの)

「4堅穴」、10堅穴、15堅穴C廃棄、18堅穴、19堅穴、「25堅穴C廃棄」、「28堅穴」、「29堅穴」、「21土坑」、20弥生堅穴上層、24弥生堅穴上層

・3群須恵器主体の古手土器中心(「」はこの中でも古手的なもの)

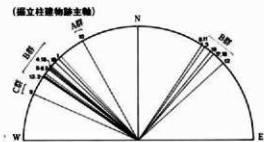
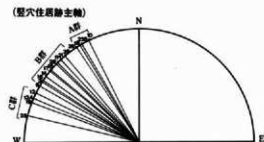
3堅穴、5堅穴C廃棄、6堅穴、11堅穴、12堅穴C廃棄、14堅穴、16堅穴、「21堅穴」、16土坑、26土坑

以上の土器から求めた時間軸をベースとして、これに住居、建物の主軸方位や位置関係を当てはめて行く。まず、住居、建物の主軸方位であるが、197図のように、掘立柱建物跡の90度東に振る横向き建物という前提で考えれば、10堅穴の26度西に振るものから25堅穴の76度西に振るものまでの50度の幅の中で分布している。分布の中心は45度前後で、堅穴、掘立とも40～60度の間で密集する。さて、この集中部分を仮にB群とすると、それから北に振れる一群(A群)と西へ振れる一群(C群)に別れ、主に3つの方位群に分類可能である。ただ、ここで示した方位は小

型磁石を使用したものであり、細かな部分では信憑性に欠け、おおまかな傾向であることを断っておきたい。さて、A群であるが、10掘立以外は全て堅穴で、5堅穴のC型廃棄でまとまった3群須恵器がある以外は、いずれも2群須恵器併行の堅穴である。対局にあるC群も、9掘立以外は堅穴で、これも12堅穴が3群須恵器を出土する以外は、いずれも2群須恵器併行の堅穴住居である。つまり、2群須恵器併行の堅穴住居はB群を扶んで両極に主軸を振っており、類似した建物構成を示している。B群に位置する堅穴住居で、2群須恵器併行のものもあるが、比較的A群に近い方位であり、方位からは2群須恵器併行の堅穴住居はA群とC群、3群須恵器併行の堅穴住居はB群というおおまかな傾向は読み取れる。

さて、2群須恵器のA群とC群ではどちらが古く位置付けられるものであろうか。これは19堅穴と23堅穴の重複で、A群の先行することがはっきりしており、A群を最も古手の住居・建物群、C群を次に位置付けられる住居・建物群と位置付けできる。これをI期、II期として図示したものが第198図であり、以下にその住居・建物構成を述べる。

《I期》先に述べた堅穴住居に、方位の同一性から10掘立を、掘立に伴う廃棄土坑（21土坑）の時期から4掘立を加えている（21土坑と4掘立の同時併存は土器接合と同一焼土層の覆土混入によりほぼ立証され、この焼土層は20土坑でも確認される。隣接する23堅穴は火災住居であり、23堅穴と4掘立の同時火災の可能性も考えられる）。つまり、6軒の堅穴と2棟の掘立で構成されるものであり、南西側のa群堅穴を主体とし、掘立はb群とc群に別れて1棟づつ配置される。10堅穴は飛び地的に離れて存在するが、調査区域外に対となる堅穴が存在する可能性もある。さて、a群堅穴の配置であるが、主軸を合わせた3軒の堅穴が12m間隔で並列して建てられ、L字の位置に26堅穴が存在する。29堅穴・23堅穴は大型I a類、26堅穴・28堅穴は中小型II b類で、大型堅穴と中小型堅穴が対となる可能性があるが、それら2軒で一つの単位を構成するというよりも、4棟で一つの堅穴群を形成していると言える。さて、同時併存の掘立は、4掘立が29堅穴の並列ラインの延長線上にあり、堅穴群と一体的な構成を示すようにも見えるが、厳密に主軸を合わせる様子はなく、10掘立と同様に、意識的に群を分けていたような気がする。ただ、4掘立までは29堅穴からの並列ラインにあり、L字配置をとる26堅穴と最も東側に位置する10掘立によって囲まれた空間はあった訳で、総体的には広場的な空間を中心とする建物配置と言うことができ

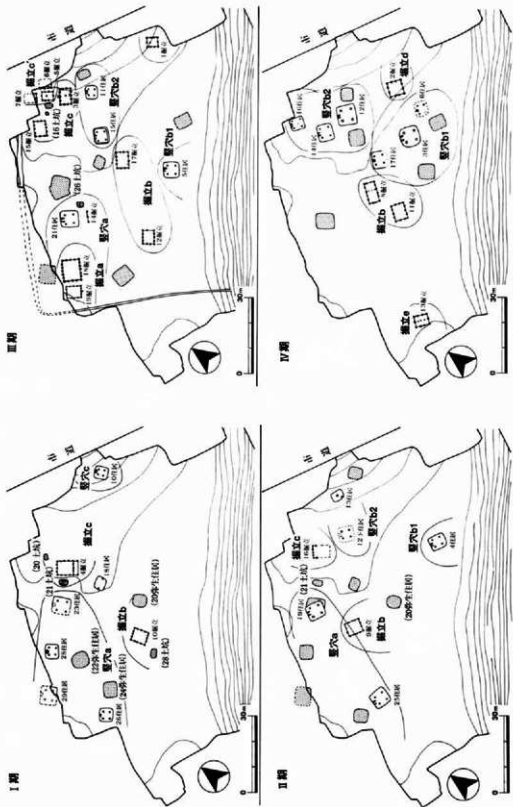


第197図 堅穴・掘立の主軸方位（無線は90度方位転換）

る。さて、この広場的空間には、弥生時代の竪穴住居廃絶後の陥没穴が存在し、当期の土器廃棄場となっている。主に20号弥生住居の陥没穴が土器廃棄として使われているが、掘立に伴う形で廃棄土坑も掘られている。当遺跡の廃棄土坑の半分はⅠ期に存在するもので、当期のものは大型規模を有する特徴がある。土器の出土は、20号弥生住居、21土坑、18竪穴において多いが、これを中心として遺構間での土器接合が確認される。

《Ⅱ期》先に述べた竪穴住居に方位の同一性から9掘立を加えているが（9掘立柱穴と20号弥生住居廃棄に土器接合確認されることも補足となる）、さらに3群須恵器に位置付けられる12竪穴の下層に存在する一回り小型の12下竪穴も主軸方位からこれに加えられと予想する。4掘立の建て替えと予想する16掘立もこの時期に位置付けたが、4掘立と同時併存の可能性もあり、Ⅰ期に位置付けられる可能性もある。Ⅰ期で主体的であった竪穴a群は19竪穴と25竪穴の大中型Ⅰb類が2軒存在するだけで、Ⅰ期で見せた建物構成は崩れ、その中間に掘立b群の9掘立が入る感じで、南北に並列する様子をとる。中型竪穴は竪穴b1群と竪穴b2群にそれぞれ1軒づつ散り、小型長方形の作業場的竪穴の13竪穴は18竪穴の位置から、北端に移動する。Ⅰ期とは建物が位置していた場所をだいぶ変えてはいるが、基本的な建物配置の様相は、重複する19竪穴と23竪穴を基軸として、29竪穴のラインから25竪穴のラインへと45度南へ振っただけの、広場的空間を中心とする建物構成であることには何ら変わりはない。竪穴・掘立の軒数規模もⅠ期と同じであり、これに小型竪穴B類が伴うことでも同様で、大きな建物の主軸方向の転換はあったが、基本的な建物構成には変化がなかったものと言える。さて、Ⅱ期の土器廃棄場はⅠ期の竪穴住居陥没穴を使用するものであるが、東へ位置を大きく変えることから、西側の28・29竪穴はあまり土器廃棄場としては使われておらず、当期の住居・建物の中心に位置する18竪穴と20号弥生住居陥没穴へ主体的に土器廃棄されている。建物から廃棄場への土器の流れは、9掘立から20号弥生住居と、19竪穴から21土坑の遺構間土器接合で確認され、埋土間土器接合では、18竪穴を軸に、20号弥生住居陥没穴と19竪穴間で見られる。この時期に新たに掘られる廃棄土坑はなく、専らⅠ期の廃絶竪穴を廃棄場としていたものであるが、Ⅰ期も含め、総体的に土器の廃棄量は少ないように思う。4竪穴と19竪穴で定量のB型廃棄が見られるが、顕在化する感じはなく、これ以降の土器廃棄量に比べると少ないという印象である。

以上のⅠ期、Ⅱ期の竪穴・掘立の構成から見れば、3群須恵器主体のB群でも時期区分されるはずで、主軸方位を見ると、竪穴でも掘立でも、ある程度のまとまりが確認できる。竪穴では55度前後と45度前後に、掘立でも55度前後と45度前後にまとまりが確認できるが、掘立では50度前後にもまとまりがあり、ここに最も集中する。掘立主体の構成となる時期が存在する可能性はあるが、5・6・7掘立は住居以外の倉庫的機能が想定されるものであり、倉庫主体の建物構成というのは不自然で、建物配置から考えれば、45度前後の竪穴・掘立の一群に50度前後の掘立を加え、55度前後の一群と2分するのが妥当と思われる。前後関係では、3群須恵器の中では古手に



第198図 遺構分布の変遷 (スクリーントーン黒点=竪穴住居跡、スクリーントーン斜線=竪穴土坑)

位置付けられる21堅穴はⅡ期に後続する時期として捉えられることから、50度より北寄りに主軸をもつ住居・建物はⅢ期として位置付け、45度前後の一群はⅣ期として位置付ける。Ⅲ期とⅣ期の建物には重複があり、16堅穴と15掘立が、17堅穴と17掘立が切り合っている。いずれもⅢ期掘立以後、Ⅳ期堅穴が掘られており、前後関係は一致している。以下にⅢ・Ⅳ期の構成を述べる。

《Ⅲ期》南東側の狭い谷部ラインに最も建物の主軸が揃う時期で、谷部に直交して延びるL型の区画溝も当期に位置付けられるものと予想する。つまり、当期は谷とL型溝によって方形区画された中で、住居・建物が営まれるもので、区画に沿った建物配置がなされる。これまで主体的な群であった堅穴a群は、堅穴と掘立が合体して、堅穴と掘立で構成される堅穴・掘立a群となり、堅穴1軒と掘立2棟で構成される。堅穴は大中型I b類、掘立も大型のI類であり、類似した建物規模を保有する。これまでa群は大型の堅穴2軒で構成されていたが、大型の堅穴1軒と大型の掘立1棟の構成になっただけで、大型建物2軒で構成される状況に変化はない。この大型掘立には桁行と梁行を並列させる形で19掘立が建てられているが、19掘立は柱配置や規模から納屋・倉庫的な機能が想定され、18掘立の付属的な存在であったものと予想される。堅穴はⅡ期同様、b1群とb2群でも存在し、b2群は2軒に増えるが、いずれも中型Ⅱ類の規模であることは同様で、継続の様相を見せている。これに対し、掘立は小型倉庫的なⅣ類掘立が顕在化することが特徴で、北隅c'群と北東隅d'群の遺跡の縁辺部にかたまっている。このⅣ類掘立のみが倉庫として機能していたとは考えていないが、規模・柱配置に統一性があり、当期のみに存在することを考えれば、機能は別としてⅢ類掘立とは異なる建物の可能性はある。Ⅳ類掘立はこれまで同様、縦向きの建て方をしているが、これ以外の掘立は、大型18掘立に合わせるように、横向きの建て方となり、これまでの東西棟から南北棟へ90度転換している。さて、Ⅰ・Ⅱ期の建物配置は、広場的な空間を中心として行われていた傾向があったが、当期はそのような一つの空間を中心据えて、建物が配置されるような様子はなく、各建物群が独立した構成で存在するような感じを受ける。ただ、集落全体での構成を見ると、大型規模を保有する建物群を基軸に据えて、中型規模の掘立群と堅穴群とが扇状に展開、倉庫的小型建物群はその奥の大型建物群の反対側の集落縁辺部に配置されるという一つの規則性があり、a群を基軸とする建物の展開である点では、それ以前とは変わらない。ただ、集落の中での空間配置と機能を群によって分割する方向性は卓越した建物の存在を抑制していたⅠ・Ⅱ期とは大きな違いを感じる。さて、Ⅲ期の土器廃棄もⅡ期の廃絶堅穴を使用しているが、廃棄土坑も掘られている。主に、それまでの堅穴が存在しなかったc群掘立区域で、掘立の柱穴内土器と土坑内土器とが接合するという同時埋没が確認される。廃絶堅穴では21堅穴に対し19・23堅穴が、18掘立に対し29堅穴が、5堅穴に対し4堅穴が存在し、それぞれ土器接合が確認され、廃棄場所として使用されていたことが窺える。特に、18掘立に対する29堅穴は堅穴内に掘られた土坑内土器と18掘立柱穴内土器が接合しており、18掘立時に29堅穴内土坑を掘削、そして29堅穴内の製鉄鍛冶遺構もこの時期に伴う可能性がある。鉄滓は29堅穴以外では21堅穴で出土するのみで、製鉄に関連すると思われる磁石の出土もⅢ期以降の土器廃棄

場で出土、当期に製鉄鍛冶が行われていたことを補足するものである。また、当期の廃棄場として想定される16土坑や19廃棄堅穴からは土器以外に石製紡錘車等が出土しており、これ以前では確認できなかったものである。このような特殊製品の出土は当期以降に顕在化するものであり、当期の集落構成が大きく転換したことと何らかの関連性があるものと予想する。

《Ⅳ期》Ⅲ期の区画溝は埋め戻され、主軸方位はⅡ期よりもやや西へ振る。これまで当集落の中心的な場所であったa群から建物がなくなり、堅穴b1群と堅穴b2群に1軒づつ大型Ia類堅穴が配置される。つまり、堅穴a群から堅穴b群に大型建物が移動したものであり、大型堅穴を中心として、中型堅穴2軒が東西につく、3軒で構成される堅穴群を形成する。この2つの堅穴群は近接して存在し、連続性をもつが、3軒で一つの住居単位を構成していた可能性があり、別群と捉えたい。掘立はb群がⅢ期と同様、横向きで2棟対で存在し、もう1棟d群に確認できる。2掘立は正方形プランであるため何とも言い難いが、横向きの南北棟の可能性があり、そうすれば、Ⅲ期同様、掘立は横向きの配置で建てられていることになる。Ⅲ期で確認された小型Ⅳ類掘Ⅲ期に区画溝が存在した区域よりもさらに南側に位置する台地の南端に建てられ、位置的に居住域とはかなり離れて存在し、倉庫域として意識的に分離したものであったのだろう。当期の建物構成は、大型建物を独立させるⅢ期の建物配置から、大型建物を中型建物群内に包括させる建物配置へ大きく転換していると言えるが、一つの空間を中心として建物配置されるのではなく、各建物の単位群に独立した構成が見える様相や、倉庫的建物を保有する点ではⅢ期に共通しており、Ⅲ期からの建物構成の流れであることは間違いない。さて、このような2～3軒で構成される建物単位の在り方は、土器廃棄の様相にも反映されており、Ⅰ・Ⅱ期的な広場の空間に存在した共同の土器廃棄場から、Ⅲ期では特定の廃棄場を中心とする様子は見られず、建物に近接する土器廃棄場を使用する傾向に変化、そして特に当期ではそれが堅穴群単位でまとまる傾向が見えて来る。土器接合は堅穴b1群と堅穴b2群とで確認できるが、同時併存の建物群であったなら、群どうしの接合関係が見られるのは通常である。しかし、当期は堅穴群内で土器接合が完結する様相をもち、堅穴群内で強い場所意識が存在したことを想像させる。ただ、単に隣接の廃絶堅穴への土器廃棄がこのような結果を生んだ可能性はあり、過大評価かもしれないが、大型廃絶堅穴である21堅穴に土器廃棄があまり行われていない状況は、一つの廃棄場所としての空間を保有するようなそれまでの在り方とは異なっているものであり、土器廃棄行為というのも建物の群単位で行われていた可能性を提示しておきたい。さて、当期の土器廃棄量は多く、翡翠製の管玉状石製品や金環の可能性ある耳飾りなど特殊製品の廃棄も顕在化する。このような廃棄行為は所有時期が当期に限定される訳でないが、建物構成から見て、Ⅲ期以降の所有品である可能性が高く、集落の廃絶とともに廃棄されて行ったものなのであろう。

（4）まとめ

以上、各時期細分した中での集落の構成を述べてきたが、各期は約10～15年程度の期間に当た

ると考えている。つまり、この程度の周期で建物が建て替えられた訳で、基本的に各期の建物は同時併存するものであり、集落としての景観復元も、あわせて述べたつもりである。さて、堅穴住居や掘立柱建物の建て替えの要因の一つに、木造建築物であることによる主柱の腐朽による建て替えがある。主柱腐朽年数からの堅穴住居耐久年数を想定したものに松村恵司氏の論考があるが、それでは15～20年程度の周期と想定しており（松村1977）、また、重複集落と土器編年による堅穴住居の耐久年数を算出した論考でも（木野1993）、10～20年周期という、かなり短い周期での建て替え行為が考えられている。ただ、基本的に当遺跡の堅穴・掘立柱は同一箇所での建て替えがあまり目立たず、建物の建て替えというイメージではなく、建物構成・建物配置の組み替えであって、堅穴・掘立柱の耐久年数からくる建て替え行為とは別に考えている。基本的にこのような建物の建て替え行為と建物の構成・配列替え行為とを同一視するむきもあり、建物の耐久年数に伴って建物を一斉に建て替えたとする考えもあるようだが、建物の腐朽・破損などによる物理的な要因による建て替え行為は基本的に同一場所での同一主軸での建て替え行為であった可能性が高く、遺構としては残らなくても新しい部材に建て替えた可能性がある。それに対し、建物の主軸方位や配置を変え、建物の構成数や建物様式、建物規模を変えて行く行為は建物内部での要因のみでなく、どちらかと言えば、村落ないしはもっと大きな規模での土地地割りの組み替えや村落としての位置付け、又は外的な政治的統制や圧力などによるものであると考えられ、それがあある意味で、貫徹して行われるのが、古代村落経営の特徴であると予想する。

さて、そのような観点から、古代の建物構成を論述したものに、田嶋明人氏の「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」（田嶋1983）があるが、氏の建物概念を当てはめながら、各時期の建物構成を整理してみたい。まず、Ⅰ期であるが、堅穴a群の中で、大型堅穴と中型堅穴のセットが2単位存在するとも考えられるが、基本的にこれは建物小群と言えるものではなく、広場的な空間を中心として、堅穴4軒で構成される堅穴a群と2棟の別群に位置する掘立柱、そして小型の作業場の堅穴で構成される一つの建物群であり、建物小群が明瞭な形で現れて来ない形態と言える。このような類型は、田嶋氏の提示した①類型に類似するもので、倉庫が伴わない点でも一致する。この類型は建物配置や占地の点で移動はしているが、基本的に、Ⅱ期も継続されており、建物軒数や構成内容等踏襲される。さて、この①類型の建物構成であるが、建物小群の自立性が押さえられ、建物群を全面に押し出した構成であり、6世紀代のような建物小群が一定の自立性をもって存在していた構成とは大きく異なる（田嶋1987）。当集落のⅠ期からⅡ期への建物構成を保持しながらの建物位置の変動は、建物小群の中での家地的土地占有観念が存在していないことを示しており、Ⅰ期の集落成立時からそのような規制の中で集落形成されたのであろう。つまり、自生的に形成ないしは移動してきた集落ではなく、政治的に構成させられた集落の可能性をもっている。この集落も、次のⅢ期には倉庫を保有するなど、集落構成が転換するわけだが、大きく異なるのは方形に区画され、その中で集落経営されることである。建物構成でも①類型で見られた広場的空間を中心として建物配置されるものから、大型の堅穴・掘立柱が存在する区域と中

規模建物が存在する区域、倉庫的な小型掘立群が存在する倉庫域と機能的に分離し、特定の建物（大型掘立）に倉庫（納屋）状の小型掘立が付随する。さて、この中にあって、掘立群と堅穴群は別に存在し、それらは建物小群と呼べるような2棟セットとなる。ただ、6世紀代のような家地的感覚を保有する群形成とは言えず、建物小群個々の自立性はかなり弱いものと理解され、小群が集まって一つの建物群を形成しているという感覚ではなく、大型建物を中心として、それに管理統轄されて中型堅穴・掘立群、倉庫群が配置・構成されていたものと理解する。建物群としてはⅠ・Ⅱ期よりも自立性が高く、それを表す意味での区画溝の出現ではなかったかと考える。このような建物構成は、Ⅰ・Ⅱ期のような建物小群を否定するような強い規制の元で構成された建物群の在り方から、どのような要因で成立していったのであろうか。基本的にⅠ・Ⅱ期よりも建物棟数は増加しており、集落としては大きくなっているのであるが、主たる要因は卓越した大型建物域が中型建物域と分離したことであると思う。この大型建物は基本的にⅠ・Ⅱ期に存在した大型堅穴の2軒であると思われるが、1棟は掘立構造をとり、付属屋もつくという卓越した存在となり、台地の高所から他の建物を管理統轄している。このような存在を集落の中での「長」として位置付けできれば、倉庫域を形成し、富を蓄える方向性は、Ⅰ・Ⅱ期で最も抑制していた建物構成の在り方と言える。Ⅰ期で出現した建物群は基本的に集落の中での「長」の存在を否定することに主眼をおいたものであり、そのために建物小群の自立を抑え、Ⅱ期で家地を継承させないかのような建物群の組み替えを行っているわけだが、Ⅲ期の建物群の存在は外部からの規制を感じることはできず、堅穴群や掘立群もそれぞれ建物小群的単位を形成し、建物群として高い自立性を感じるのである。これは集落内部の集落としての成長もあるが、外部からの規制緩和が大きな要因であったと思われ、基本的にはこのような力を当集落はⅠ・Ⅱ期においても保有していたのであろうと考える。このような建物構成は、基本的には古代的な強い規制の元での建物構成ではなく、田嶋氏の類型には当てはめにくい、大型建物を持つ特定の建物小群に倉庫が伴い、他の建物小群を何らかの形で管理統轄するという形は10世紀の事例で挙げた④類型に類似し、古代的建物規制が緩和された時代の在り方に類似するものである。この建物構成も短時間で再編され、Ⅳ期には大型建物域は消滅し、中型建物域の中に大型堅穴が入り込み、その中で堅穴建物小群を形成、Ⅲ期で中型建物域を形成していた区域が建物群の中心的場所となる。倉庫域はⅢ期に存在した形態は廃棄され、それまで建物の存在していなかった南端に共有の倉庫として1棟建てられる。Ⅲ期で顕在化した方形区画内の機能分離した集落経営は区画溝の埋め戻しとともに消滅し、建物群の自立性は抑えられる。各建物小群は近接して存在し、特定の広場の空間も形成せず、建物が密集する集村の様相を呈し、明らかにⅢ期の建物構成を否定した集落再編がなされている。建物小群としての単位を残し、倉庫に類する建物を1棟保有させてはいるが、外部からの強い規制により、再編成されたものであり、何よりも大型建物域と倉庫域の否定がそれを物語る。このような建物構成は、②類型に該当するが、基本的に①類型からの構成員増加と倉庫の保有による発展的形態と考えている。田嶋氏は階層制での上下で理解しているが、集落として次の段階

(階層?)に発展したとすれば、同一の意味を持つものと考える。

以上、各時期の建物構成の変化を述べてきたが、Ⅲ期で構成員の増加が予測されるものの、基本的に成立から廃絶まで同一の構成員による単一の集落であると理解している。度重なる建物構成・配列の組み替えは、基本的に集落内部での行為ではなく、外部からの規制によるものであり、土地支配・農村支配への国家的施策に起因するものであると理解する。当集落は、農村であることは間違いないと思うが、Ⅲ期に見せたような「力」を内在させる集落であった。Ⅲ・Ⅳ期で出土して来る金環状耳飾りや翡翠製の管玉状首飾りの装身具類は、当期の古墳埋葬者の副葬品として出土するものと内容的に見劣りするものではなく、そのようなものを保有する人間が居住する集落であったわけである。だが、Ⅰ・Ⅱ期の建物構成では、そのような「力」は極度に抑制されている訳で、集落としてのランクとしては末端構成員的な位置付けがさがらである。一般的な農村とは何か。首長の否定から始まる7世紀の村落再編において、どのような基準で農村のランクを付けていけるのか、難しい問題であると思う。

補注

本文中では触れられなかったが、基本的に当集落では堅穴と掘立が共存しており、両者がどのような立場で共存していたか、建物群の中でどのような位置付けがなされていたのか、ここで少し考えてみたい。基本的には、掘立は倉庫と住居に分けられるが、30㎡前後以上のⅡ類、Ⅰ類掘立はどちらも居住用建物と考えている。Ⅱ類掘立は堅穴の中型Ⅱ類に対応し、Ⅰ類掘立は堅穴の大型Ⅰ類に対応しており、規模でも同様に分化している。基本的に掘立と堅穴はⅠ期から共存し、Ⅳ期まで存続、Ⅲ期で掘立が増加する傾向はあるが、この時期は他の時期とは違う建物構成で組まれたものであり、除外して考えれば、掘立1棟に対し、堅穴2軒の割合が全ての時期に共通してみられる。つまり、堅穴と掘立の建物の割合は決まっていたものであり、何か規則めいたものを感じる。基本的に、掘立は堅穴に対して、新しい建物構造であることは間違いないが、時期により増加している訳ではなく、堅穴が居住建物のベースであり、Ⅲ期以外は大型建物は全て堅穴で構成される。つまり、時間差ではなく、建物としての優劣でもないわけで、建物としての構造の違いだけが見える。集落成立時から堅穴で構成される群と掘立で構成される群が別れて存在していることは、堅穴を所有する集落構成員と掘立を所有する集落構成員とは別個であったことを物語り、堅穴で建物構成していた集落と掘立で建物構成していた集落とが集落再編によって、同一の場所に一つの集落として成立させられた可能性を想定する。確かに、堅穴と掘立とは構造のみでなく、機能面にも違いがあったわけで、単なるそれまで集落構成員が保持していた建物様式を踏襲したとしては短絡的すぎるが、居住者の性格や格式を反映したものと考えたい。ただ、Ⅲ期における掘立の増加、大型堅穴の掘立構造への転換は、掘立への建物様式転換を堅穴居住者が願っていた可能性を示唆するものであり、それがなされなかったのは、外部からの規制によるものなのかもしれない。堅穴2に対し、掘立1という割合もその規制による可能性もあり、そうなれば、建物様式すら規制する強いものだったと言うこととなる。

参考・引用文献

- 植田文雄 1994 「古墳時代土器論-近江の土師器、その変遷と両期-」『滋賀考古』第12号 滋賀考古学研究会
岡本恭一 1995 『曾根C遺跡』石川県埋蔵文化財保存協会
櫻田誠他 1989 『後山無常堂古墳・後山神明3号墳』小松市教育委員会
春日真実他 1994 『一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会
金津町教育委員会 1989 『清王1・2号古墳発掘調査報告書』

- 金山弘明 1994 『松任市北安田北遺跡Ⅰ』松任市教育委員会
- 川畑 誠 1995 『石川県の古代建物に関する基礎的考察-掘立柱建物の平面プランを中心として-』『石川県埋蔵文化財保存協会年報6』石川県埋蔵文化財保存協会
- 本野和紀 1993 『竪穴住居の耐久年数から見た房総における古墳時代須恵器の出現と終焉』『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』市原市文化財センター
- 北野博司他 1988 『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司 1993 『「加賀」の須恵器生産における7世紀初頭の画期』『北陸古代土器研究第3号』北陸古代土器研究会
- 小林正史 1992a 『煮沸実験に基づく先史時代の調理方法の研究』『北陸古代土器研究第2号』北陸古代土器研究会
- 小林正史 1992b 『中相川遺跡の竈の使用痕分析』『石川県松任市相川遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 杉井 健 1992 『竈研究の可能性-造り付け竈の地域性とその背景から-』『第32回埋蔵文化財研究会古墳時代を甞を考える』埋蔵文化財研究会
- 田嶋明人 1983 『奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡-加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚書-』『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 田嶋明人 1986 『漆町遺跡出土土器の編年的考察』『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人他 1987 『永町ガマノマダリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会・石川考古学研究会
- 田嶋明人他 1988 『漆町遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1989 『加賀・能登における古代手工業生産の様相』『北陸古代手工業生産』
- 田嶋明人他 1990 『小松市高堂遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1992 『北陸の竈とその周辺』『第32回埋蔵文化財研究会古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会
- 堤 隆 1989 『根岸遺跡における遺構および集落の様相』『根岸遺跡』御代田町教育委員会
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』
- 出越茂和 1991 『金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ』金沢市教育委員会
- 寺沢知子 1986 『祭祀の変化と民衆』『季刊考古学16号』
- 外山政子 1989 『群馬県地域の土師器について』『研究紀要6』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1990 『羽田倉遺跡の煮炊具の観察から』『長根羽田倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1991 『三ツ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊』『三ツ寺Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1992 『伊かカマドかもう一つのカマド構造について』『研究紀要10』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 西川卓志 1983 『弥生時代の煮沸形態とその変遷』『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古論叢』
- 藤田至希子 1986 『古墳時代前期の煮沸形態について-矢部遺跡を中心に-』『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 長谷川厚 1989 『討論1988年「黒色土器-出現と背景-」の成果と課題』『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
- 松村恵司 1977 『竪穴住居址の分析と集落の復元的考察』『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会
- 宮下幸夫 1987 『戸津六ツヶ丘竈跡』小松市教育委員会
- 望月精司 1990 『南加賀古窯跡群成立期の様相』『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』小松市教育委員会
- 望月精司 1993 『鏡田遺跡Ⅱ』小松市教育委員会・有限会社叶井
- 谷内尾晋司他 1982 『能登海浜遺跡関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 吉田 淳 1984 『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』野々市町教育委員会

第5節 古代以降の遺構と遺物

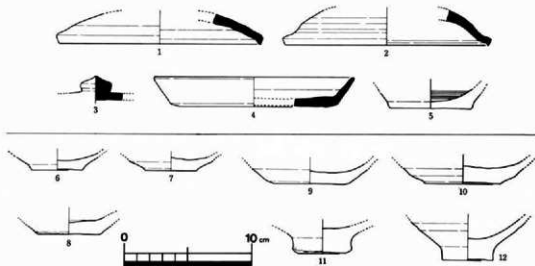
古代以降に位置付けられる遺物は包含層出土のみで、当期の遺構は確認されていない。つまり、土器の散布だけ確認されたもので、3次調査区域を中心に分布している。遺物は土器のみで、9世紀前半頃の1～5と11世紀後半～12世紀前半頃の6～12に分けられる。出土量は極少で、何故、このような土器が単独で出土するのか不思議であるが、生活域とは異なる場として、生産に関連する場や信仰に関連する場などで使われたのであろう。以下に、各時期の土器を説明する。

（9世紀前半頃の土器）

図の上段の他に破片も含めれば、須恵器食膳具は坏B蓋6点、皿（盤）A2点、土師器は煮炊具のみ小型壺4点が出土している。須恵器はいずれも南加賀窯産で、特に2・3は戸津窯の9世紀前半のみ特徴的に見られる胎土と焼きをしている。土師器は底面糸切りの北陸型煮炊具と言えるもので、5の底面には黒斑が確認される。破片のため、断定は避けるが、北陸古代土器編年のV期に位置付けられるものと予想され、短期間でまとまる土器群であると予想する。

（11世紀後半～12世紀前半の土器）

所謂古代末の土師器食器で、底部に糸切り痕を残し、内面に螺旋状工具痕を残す粗雑な作りの碗器種である。平底と柱状高台があり、平底碗は底径から4cm前後の小型、5cm前後の中小型、6cm前後の中大型に分けられる。出土量は平底碗13点と柱状高台碗3点で、胎土は均質な細砂粒を多量に含む黄褐色系・薄肌色系の発色のものと砂粒を含まない粉っぽい素地で橙褐色・濃肌色系の発色のものがある。主体となる胎土は前者で、後者の胎土は中型平底碗にのみ4点確認される程度である。当資料は、小松市松梨遺跡（小松市教育委員会1994『松梨遺跡』）の4号溝中上層一括土器群に極めて類似しており、胎土においてもほぼ同様の特徴（当遺跡の前者の胎土は松梨d胎土、後者の胎土は松梨e胎土に該当）が確認される。同一時期の資料と判断される。



第199図 古代以降の遺物 (S=1/3)

第V章 考察

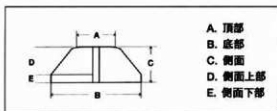
第1節 滑石製紡錘車に関する一考察

1. はじめに

今回の調査で出土した紡錘車は5点を数え、それらすべてが石製である。須恵質のものも1点存在するが、紡錘車であるという確証を得ることができないため、ここでは考察の対象から除外する。5点(第180図2~6)いずれも截頭円錐形を呈し、石材はタルク、いわゆる滑石製品である。

おもに古墳時代後期に用いられたこれら滑石製紡錘車については、仮器とする意見と、一部実用品とする意見とがある。本稿では、当遺跡出土の紡錘車を材料に、その使用痕跡、形態などの検討を通して使用のあり方を考えてみたい。

なお、部位の名称については、國下多美樹氏(1988)にならい、頂部、底部、側面、側面上部、側面下部とした。断面が台形状のものは、狭面が頂部、広面が底部である。また、本稿に述べる紡錘車とは考古学でいういわゆる紡錘車であり、「紡茎」と「紡輪」とからなる「紡錘」の「紡輪」を指す。



紡錘車の部位名称

2. 出土紡錘車の観察

念仏林南遺跡出土の滑石製紡錘車は以下のとおりである。

- ・側面下部にのみ光沢がみられるもの(2)
- ・全体的にやや光沢を有するもの(3)。
- ・側面のほぼ半分を除き、側面下部及び頂部と側面との稜を中心に光沢がみられるもの(4)。
- ・本来、孔と水平であった頂部がやや斜めに摩滅している。頂部及び側面の表面は固いもので削られた痕跡があるが、使用とは関係せず、2次的なものである。わずかに削られていない部分には光沢がみられる。側面下部にも光沢を有する(5)。
- ・頂部及び側面の一部しか残っていないが、やはり頂部と側面の稜を中心に極めて強い光沢を有するもの(6)。

いずれにも繊維によるものと思われるような条をなす痕跡は観察されない。(2)の側面下部の光沢は硬いもので面的に削られることによって生じているため加工痕と考えている。また(3)は線刻の前に全体に磨きかけたものであろう。刻線を侵すような痕跡は何もない。したがって、

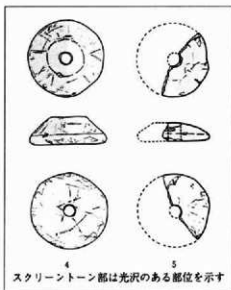
(2)、(3)には使用された形跡は認められない。

糸を巻き取る作業段階における使用痕は、残るとすれば孔を中心として同心円状に描かれた、線あるいは摩擦痕となる。この点に関して以下の報告がなされている。底部については「使用痕はラセン状(細い繊維のため同心円状の線状痕としてみえる)を呈し、使用頻度や材質の硬軟で明瞭さが異なる。また径の1/2程度の範囲の摩擦が顕著で、外縁部が弱いのは糸の巻取りの頻度と糸の絡まりによろう。孔の縁辺の摩擦が弱い例も多いこともこれとかわるものであろう。なお、断面台形のすべての個体が、広面にこの同心円状の使用痕が観察されており、使用方向に関しては明確な認識があったことが知られる。(春山秀幸1990、一部省)」また、頂部については「断面三角形を呈するものでは多くの場合、広面が巻取り面になるが、この時、下面である狭面にも光沢をもつものがほとんどである。この使用痕は広面に残された細かい線状のものとは異なり、むしろ面的な摩擦痕跡であり強い光沢を有するものが多い。摩擦の範囲も狭部にのみにとどまらず、側面にも若干広がり認められる。面的な摩擦であるがやはり回転運動の形跡が認められている(春山1990)」。

回転運動の痕跡が認められるこのような場合はかなりの速さで回転していると考えられる。果たして手で行なわれた巻取りであろうか。

当遺跡から出土した紡錘車の底部(広面)には使用を伺わせるこのような痕跡は全く観察されない。

しかし(4)と(6)は狭面、つまり頂部から側面上部にかけて摩擦し、光沢をもつ。また(4)には、孔を中心とした円の片側半分、扇形状に特に顕著に光沢が認められる。頂部を形成する円周状の一点を中心として摩擦しているのである。(5)も孔を中心として片側だけが擦り減っており、2次的に削られる以前は光沢を有していたことが伺える。



紡錘車の使用痕跡

このように、摩擦している面、あるいは光沢をもつ面が偏っていることから、(4)、(5)、(6)は実際に使用されたものと考えている。そして、側面から頂部、つまり巻取り面ではない面に孔を中心とした扇形状の光沢を有することから、この部分がなにかに接し、擦れたことが伺える。紡錘車として軸を通した状態で前後に転がしたのではないだろうか。ここで思い浮かぶのは紡錘車を膝の上で転がして用いる使用法である。

3. 紡錘車の使用法

現在、紡錘を用いて繊維を糸に紡ぐ、または糸に撚りをかけるためには、大まかに分けて3つの方法が考えられている。(藤村淳子1985)

(1) 紡錘を吊り下げて回す方法

(2) 紡錘を膝の上で転がす方法(転がし法)

膝のかわりに手押台の上に軸水平に紡錘を置き、手のかわりに手押木で軸を押さえて回す方法へと発展する。

(3) 両手で紡錘の端を挟み、手を摺り合わせて回す方法

(1)の紡錘を吊り下げて回す方法は、紡茎の回転により、糸に撚りをかけたり、糸の巻き取りを行なうものである。この場合紡錘車は紡茎の回転を促し、助ける働きをする。つまり、紡錘車は回転に勢いを生じさせ、持続させる弾み車としての働きをするのである。ただし、紡錘を行なう場合、回転の勢いが強いほどよいわけではなく、また、回転時間もただ長いほうがよいわけではない。紡糸の強さや長さ、撚りの精粗との関係から紡錘車の適当な大きさが自ずと決まってくるであろう。このことから紡錘車の法量が大きなポイントとなる使用のあり方といえる。

また、この場合に生じる使用痕跡を考えてみたい。撚りをかける際には、紡茎の先と片方の手との間に糸を張り、紡錘を回転させる。このとき、摩擦痕跡が生じるのは紡茎の方であり、糸との摩擦が起こらない紡錘車に痕跡は残らない。弾み車として働くだけである。そして巻き取る際には、一旦紡茎の先端に固定した糸を、手で紡錘を回しながら巻いてゆくことになる。紡錘車と糸との摩擦頻度はかなり低い。当遺跡から出土しているようなタルク製の場合、わざわざ紡錘車を擦るように紡茎の下方、紡錘車寄りから巻き取ったとしても、糸が擦れたと分かるような痕跡が残るには、相当使い込まなくてはならないだろう。

この方法は上にあげたなかで最もむらなく撚りがかかる方法であるという。(藤村1985)

(1)と同様に、(3)両手で紡錘の端を挟み手を擦り合わせて回す方法は、繊維を糸に紡ぐ、または撚りをかける際には、糸と紡錘車とに摩擦は起こらない。糸を巻き取る段階での摩擦頻度も低い。紡錘車に糸との摩擦による使用痕跡の残りにくい使用の在り方である。

(2)が発展した手押木、手押台を用いた方法は、おそらく平安時代末には用いられていたことが「信貴山縁起絵巻」からうかがい知ることができる。最近までこの方法による紡錘が行なわれていたらしいが、どの時期までこの方法が通るのか明らかにされていない。

この方法については紡茎を寝かせ、紡錘車を立てて転がすため、紡錘、特に紡錘車の形状が問題となろう。

膝の上にして、手押台上にして転がす場合、断面長方形を呈するもの、なかでも薄手のものは適さない。また、材質も軟質である土製品は適さないであろう。このような形態のものが多勢を占めるのは弥生時代である。弥生時代には断面が長方形を呈する土製紡錘車が多く見られる。このことから、少なくとも弥生時代には、紡錘車を横に転がす方法が広く用いられていたとは考え

離い。

膝の上を転がすことを考えると、側面にある程度の傾斜を持った台形或いは截頭円錐形が適しているように思える。この形態、材質も石製のものが主流を占めるのは古墳時代である。膝の上で転がす方法はこの頃広く用いられたのではないだろうか。

また、手押木、手押台を用いた方法になると、軸を水平に置き転がすことから、断面長方形の薄手、軟質のものに加えて断面が台形や算盤玉状を呈するものも不適である。紡錘車を立てるのに適した形態と考えられるもの、つまり断面方形、あるいは長方形の厚手のものがみられるのは、古墳時代末から飛鳥時代以降である。これは、古墳時代末から手押木、手押台を用いた方法が用いられていた可能性を示唆している。

以上は形態から考えられることであり、あくまでも推測の域を出ないが、当遺跡出土の滑石製紡錘車の形態、観察される使用痕跡から導かれる使用法はこれに一致する。

紡錘車は、その使用の実態に関して不明点が多い。紡錘車とされているものなかには、上記のような方法で紡錘に用いる以外に、舞踏法による発火や穿孔の際のはずみ車として利用されたものが含まれている可能性もある。その使用痕跡と使用法、双方からアプローチにより、これらが識別され、使用のあり方がより明らかとなることが期待される。

4. 仮器の検討

紡錘車(2)、(3)には使用された痕跡がない。実際には使用されなかったものだとすればその機会がなかっただけの未使用品なのか、あるいは仮器なのか。

(2)と(3)に他と異なって共通している点は、紋様として鋸歯紋が刻まれている、あるいは刻もうとしていることである。このことから仮器としての存在が伺えるのではないだろうか。

古墳時代の滑石製紡錘車にみられる鋸歯紋は、弥生時代・古墳時代を通じ用いられている。鋸歯紋を持つものには、弥生土器、銅鐸、鏡をはじめ古墳の壁画や、盾等がある。また、石棺に刻まれた鏡にも見られ、祭祀に関わるものが大半である。

また、紡錘車自体、古墳の副葬品にあげられることから、紋様の有無に関わらず仮器となりうる性格を孕んだものであったことは明らかである。

鋸歯紋は、鋸の歯状に三角形を並べたギザギザの紋様で、あたかも鋭い歯が並んでいるかのようである。先端部の尖ったものに対して、人は潜在的に恐怖を感じるのではないか。鋸歯紋については「悪魔など悪いものを寄せつけず、それを払う役割を果たしたのか(酒井龍一1978)」という解釈もなされている。

鋸歯紋が刻まれたものを考えると、この紋様には呪術的な意味が込められていることが伺える。紡錘車も例外ではないだろう。

(2)は類似品が近畿地方に集中して分布している。これら断面が台形を呈し、側面及び底部に鋸歯紋を施した滑石製紡錘車は、「意匠に極めて強い共通性が認められることから、かなり一

元的な生産体制の元で生産され、流通したものであろう（江浦洋1987）」との指摘がなされている。また、これらに伴伴する須臾器等の土器類が6世紀末から7世紀初頭前後に限られており、非常に短期間に生産され流通した可能性も同時に指摘されている。これらは近畿地方において、住居や古墳からの出土例が多い。

県内の出土状況は、確認できたのは他に1例（戸水C遺跡）のみである。また、(2)に共伴する遺物も6世紀末から7世紀初頭を示していることから、近畿地方に集中して分布している一群の紡錘車に属するものであり、一元的な生産体制の元で生産され、搬入されたものである可能性がある。

(3)はその紋様を真似ようとしたが、うまく出来なかったのであろうか。

5. 紡錘車の変遷

石川県下出土の紡錘車について、管見にのぼった範囲で時期が特定されるものについてその変遷を追ってみたい。

県下で出土している紡錘車には土製、石製、鉄製、陶製、木製のものがある。

弥生時代中期から土製品が現れ、後期から終末にかけて石製品が加わるが、中期から後期の土製品が大半を占めている。土製品には土器を転用したのも一部含まれており、形態は全てが断面長方形薄手のⅡa類（國下1988による分類、以下同）である。

古墳時代になると、石製品が土製品にとって変わり、土製品は見られなくなる。形態も弥生時代末の石製品に土製品を模したⅡa類のものが1点見られたが、古墳時代初頭には截頭円錐形或いは台形を呈するⅠ類へと移行している。これらが実用品であるか否かが問題となるところである。6世紀には陶製品が出現。中期には截頭円錐形の滑石製品が現れ、鉄製品も7世紀末～8世紀前半には用いられていた様子である。

全国的には弥生時代前期から中期には土製品が大勢を占める。後期には、九州を除く西日本では、紡錘車の出土は激減し、古墳時代前期にも碧玉製品以外、実用的な紡錘車はあまり見られない。古墳時代中期には截頭円錐形の滑石製品が現れ、それよりやや遅れて鉄製紡錘が出現している。

石川県下の様相は、土製品の初現がやや遅れる点、碧玉製品が確認されていない点を除き、ほぼこれに重なりあう様子である。

6. おわりに

滑石製紡錘車については仮器とする意見と、一部実用品とする意見とがある。

当遺跡出土の滑石製紡錘車を検討した結果、実用品としての紡錘車、仮器としての紡錘車が存在するという結論に達した。

前者のように、すべて仮器だとすれば他に実用品として用いられたものがあるはずである。弥

生時代に現われ、近代まで連続と用いられた道具である紡錘車が古墳時代前期、中期の間だけ使用されなかったとは考えられないからである。後の鉄製紡錘車の出現もなかったであろう。滑石製紡錘車を全て仮器とした場合、その空白を埋めるものを挙げるが出来ない今日、実用品、仮器、双方の紡錘車が存在するという結論は妥当と思われる。

ただ、「一部実用品」という表現には疑問が残る。「一部仮器」かも知れない。

滑石製紡錘車に占める実用品と仮器との比率については、今後、紡錘車の使用のあり方が解明され、使用痕の検討等、個々の紡錘車に関するデータの蓄積から明らかにされるであろう。











参考引用文献

- 江浦 洋 1987「滑石製紡錘車」『太井遺跡(その2)調査の概要』(財)大阪文化財センター
- 河北 秀美 1991「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」『Mie history vol.3』三重歴史文化研究会
- 國下 多美樹 1988「京都府下の紡錘車について」『京都考古 第50号』京都考古刊行会
- 酒井 龍一 1978「銅鐸—その内なる世界—」『摂河泉文化資料』
- 佐原 真 1964「土製品」『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会
- 春山 秀幸 1990「矢田遺跡出土の紡錘車から」『矢田遺跡 関越自動車道(上越線)地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤村 淳子 1985「紡錘車」『弥生文化の研究 5 道具と技術』雄山閣

付表 石川県下出土の紡錘車

- ・形態は下記の國下多美樹（1988）による分類に従う。
- ・転用品は形態分類にBで標示する。
- ・なお、これをまとめるにあたって多くの報告書を参考させて頂いた。各々については出土遺跡報告書等をあたっていただきたい。

紡錘車形態分類表（國下多美樹（1988）より転載）

大分類	断面形態の特徴	小分類	断面形	形態細部の特徴
I 類	截頭円錐形 あるいは 台形状を 呈するもの	a		○ 側面を数段に分けて大きく匙面取りするもの
		b		○ 全体に扁平（厚さ16mm未満）で側面で匙面取り状に浅く凹ませるもの
		b'		○ 平滑な面をもつもの（b）と丸味を帯びるもの（b'）がある
		c		○ 側面傾斜角50°未満
		d		○ 全体に厚手（厚さ16mm以上）で側面上部・中央部と下部の境が峻をもって明瞭に区別されるもの
		e		○ 側面傾斜角50°以上
II 類	長方形あるいは 隅丸長方形 を呈するもの	a		○ 薄手のもの（厚さ10mm以下）
		b		○ 厚手のもの（厚さ12mm以上）
III 類	算盤玉形 を呈するもの	a		○ 明瞭な平滑面をもつもの
		b		○ 全体が丸味をもつもの

土製紡錘草

番号	遺跡名	所在地	出土地点	径(mm)		高さ・厚さ(mm)	孔距(mm)	重量(g)	形態	時期	備考
				長さ	直径						
1	一の坪	七尾市下町	不明	—	—	—	—	—	不明	遺跡の時期は縄文	
2	藤野	七尾市藤野町	SB01	46	46	5	7	—	BⅡa	弥生中期	・出土遺物欄にカッコ書きで記載
3	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	111号土坑	42	39	5	*5.4	—	Ⅱa	弥生中期	
4	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	2号建物周溝	51	49	7	*9~5	—	Ⅱa	弥生中期	
5	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	3号建物周溝 A-イ	45	43	7	*6	—	Ⅱa	弥生中期	・「円盤状土製品」と記載
6	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	3号建物周溝 A-イ	39	35	6	*6	—	Ⅱa	弥生中期	・「円盤状土製品」と記載
7	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	3号建物周溝 A-イ	40	29	6	*6	—	Ⅱa	弥生中期	
8	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	3号建物周溝	43	42	7	未貫	—	Ⅱa	弥生中期	
9	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	3号建物周溝	32	27	7	未貫	—	Ⅱa	弥生中期	
10	磯辺運動公園	金沢市磯辺町	3号建物周溝	36	33	6	*6	—	Ⅱa	弥生中期	
11	高田	富来町高田	不明	58	—	*6	*6	—	BⅡa	弥生(中期~後期)	・「丸筒状土製品」と記載 ・弥生土器(硬片)を配用
12	高田	富来町高田	不明	*50	—	*10	未貫	—	Ⅱa	—	・未貫の凹あり
13	高田	富来町高田	不明	*75	—	*10	未貫	—	Ⅱa	—	・未貫の凹あり
14	高田	富来町高田	不明	*45	—	*10	未貫	—	Ⅱa	—	・未貫の凹あり
15	西念・南新保	金沢市西念・南新保	B-1区 T-1溝状遺構	34	32	4	4	—	Ⅱa	弥生後期	
16	西念・南新保	金沢市西念・南新保	B-1区 T-1溝状遺構	36	35	6	8	—	Ⅱa	弥生後期	
17	西念・南新保	金沢市西念・南新保	G-4区包合層	37	35	8	6	—	Ⅱa	弥生(中期~後期)	
18	西念・南新保	金沢市西念・南新保	G-4区包合層	44	42	8	5	—	Ⅱa	弥生(中期~後期)	
19	寺家	羽咋市寺家町	砂田地区包合層	30	—	5	4	—	BⅡa	弥生 弥生末期~ 古墳前期前半	・「弥生土器の硬片を配用」 ・「弥生土器の硬片を配用」
20	三ツ屋	羽咋市三ツ屋	I区包合層	45	—	5	5	—	Ⅱa	—	

21	中村畑	志賀町上郷中村	大溝下層(B地区)	44	*29	25	9	-	I d	古墳
----	-----	---------	-----------	----	-----	----	---	---	-----	----

石製紡錘車

番号	遺跡名	所在地	出土地点	径(mm) 長径 短径	高さ・厚さ (mm)	孔径(mm)	重量(g)	石質	形態	時期	備考
1	西念・南新保	金沢市西念・南新保	G-1区、T-2 溝状遺構内	69	14	9	84	軽石凝灰石	Ⅱa	弥生後期～終末	・I d欠
2	押野西	金沢市押野	2F	38	*20	7	50	I e	I e	法弘or月影	
3	古府クルビ	金沢市古府	溝状遺構底部	*18 45	*13	*7	-	蛇紋岩質	I b	古墳初頭	
4	御経塚ツカダ(B遺跡)	野々市町御経塚	81-1号住居	28 38	16	7~9	-	泥岩	I d		
5	水町ガマノマガリ	加賀市水町	D-2包含層	37	8	*7	63	I e	I e		・I d欠
6	水町ガマノマガリ	加賀市水町	D-3 pit中	45	13	不明	17.3	I b	I b		・I d欠
7	戸水C	金沢市戸水町 ・御谷田町	D、E区	23 42	20	6	-	I c	I c	古墳	・I d欠 ・断面形状底部に粘土入り断面あり
8	敷島天神山	加賀市大聖寺敷島町 ・御町	C遺構区 第2号室式住居内	*21 *36	*15	*6	-	I b	I b	古墳	
9	敷島天神山	加賀市大聖寺敷島町 ・御町	C遺構区 第12号室式住居内	*25.5 *39	*9	*5	-	I b	I b	古墳	
10	中海	小浜市中海町	6-9区、包含層 第1地点	26 46	21	7~8	-	I b'	I b'		
11	富栄町高田	羽咋郡富栄町	-	20 41	15	7	-	滑石	I b	古墳後期	
12	藤ノ木	加賀市大聖寺 藤ノ木町	5区	*25 44	14	9	-	I b	I b		
13	南吉田葛山	押水町南吉田	3号溝	*12 48	10	*6	13.5	I b'	I b'	古墳	・I d欠 ・上面に放射状痕跡あり
14	古府タブニキダ	七尾市古府町	8号溝、東郷柱列 北第4柱穴	42	26	6~7	-	I e	I e	古墳7C後半	
15	村井キヒダ	松任市村井町	8号土坑	46 44	14~15	未貫	42	緑色凝灰石	DⅡb		・側面を二分する稜線あり ・側面を二分する稜線あり ・緑褐色、比較的堅質の石材
16	津町	小浜市津町	不明	32~28 43	17~18	6.4~5.9	-	B I c	B I c		
17	保正・せみ塚古墳	羽咋郡保正町	石室内北川	35	16	7	32.4	I e	I e	古墳	・全面に磨き調整

18	茶臼山古墳	辰口町下岡発	第5号墳周溝内	11 40	14.5	7	19.45	I b I c	古墳後期 古墳	出灰色 ・外面に漆喰灰
19	三置りまのみや古墳	七尾市三室町	五坊外溝 (成石内溝)	19 35	20.5	7	—	—	—	—

鉄製紡錘車

番号	遺跡名	所在地	出土地点	径(mm)	厚さ(mm)	紡錘径(mm)	全長(mm)	重量(g)	形態	時期	備考
1	北安田北	依作山北安田北町 下代野末・徳元町	SD2515鉄杖溝底	*54	—	—	—	30.6	Ⅱa	7c末～8c前半 平安信?	
2	寺家	羽咋市寺家町	砂田地区SBT9型穴	38.45	*4	4	*8	2.8	Ⅱa		
3	寺家	羽咋市寺家町	砂田地区包含層	52	2.2	3.5	54.25	12.7	Ⅱa		
4	寺家	羽咋市寺家町	砂田地区包含層	37.2	2.3	4	31.3	11.6	Ⅱa		
5	寺家	羽咋市寺家町	砂田地区包含層	42.7	3	4	36.35	1.8	Ⅱa		
6	寺家	羽咋市寺家町	砂田地区包含層 *54型(S302) 上層と型配層の区別不明	57.9	3.35	6	*108	27.8	Ⅱa		
7	笹原新A	加賀市笹原新町	不明	—	—	—	—	—	—	奈良・平安	・出土遺物として記載

陶製紡錘車

番号	遺跡名	所在地	出土地点	径(mm)		高さ・P/3 (mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	形態	時期	備考
				頂径	底径							
1	高田	富永町高田	不明	44	*30	24	7	—	須恵質	Ⅱa	6C初頭 中世	
2	瓶田町	珠洲市瓶田町	106号溝	42	*33	18	10	—	珠洲焼	I d		

木製紡錘車

番号	遺跡名	所在地	出土地点	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	形態	時期	備考
1	道下元町	門前町道下		47	5	5	—	不明	Ⅱa	中世	

第2節 念仏林南遺跡出土土器の胎土分析

第1項 分析の目的と分析試料の概要

〈分析の目的〉

念仏林南遺跡は小松市域の西南部、海から続く潟湖に近く、古代の須恵器生産地である南加賀窯跡群から3～4kmの所に位置する。縄文時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期の主に4時期が存在する複合集落遺跡で、各時代の土器が大量に出土している。これらの土器は基本的にいずれも在地産の土器であるが、在地産でも古墳時代後期の須恵器は郡域程度を供給圏にもつ窯場からの流通品であり、これ以外の軟質の土器類とは異なる生産・流通にあるものである。須恵器については比較的肉眼観察での産地特定が可能な段階まできており、肉眼での識別が比較的困難な細部での産地特定（例えば、南加賀窯産の中での南部と北部の識別や南加賀窯産と能美窯産との識別）においては蛍光X線分析でも識別困難であることに変わりがない状況にあることから、今回は須恵器の産地特定は肉眼観察のみに止め、今回の分析は、集落周辺地域での生産・流通が前提とされる地元産の軟質土器類を対象としたい。

さて、今回の分析の目的は、このような地元産の前提にある軟質系の土器類の生産と供給がどのように行われていたか究明するものであり、これまであまり試みられることがなかった地元産土器の供給エリアの実態を少しでも把握し、資料化するものである。具体的には、肉眼観察上では各時代で異なる特徴をもつ土器胎土が提示できているが、これら分類された胎土と化学特性は一致するものなのか、つまり、一つの遺跡の資料で、時代毎に胎土は変化するものなのか、それとも共通する胎土領域で設定することが可能なかどうか、検討するものである。そして、特に資料の多い6世紀末～7世紀初頭のまとまりをもった胎土構成については、それが何を示すものなのか、南加賀窯跡群が距離的に近いことから、そこからの供給はないのか、そして、このような地元産とされる軟質系土器類でも他地域からの搬入品は存在しないのかを主な視点として検討してみる。ここまで、漠然と地元産という言葉を使ってきたが、地元とはどの程度のエリアを示すのか、大変重要な部分である。現在提示できる対比資料が小松市域でも北部に位置する松梨遺跡と錢畑遺跡の古墳時代後期の土器胎土であるため、細かな意味で地元の領域は出てこないが、この2資料と対比し、地元地域というエリアの広さを大枠であるが、捉えてみたいと考える。

〈分析試料の概要〉

今回、三辻利一氏に分析を依頼したのは縄文時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、古墳時代中期、古墳時代後期の4時期の軟質系地元産土器類で、弥生時代後期～古墳時代前期の土器のみは壺・甕・高坏の3器種に分けて、他の時期のものは主に深鉢や甕などの煮炊き具のみを提示した。弥生時代後期～古墳時代前期以外の土器を器種ごとに提示しなかったのは、同一系統の胎土に分類されるもので、器種ごとに微妙に砂粒の量などが異なるような器種別胎土の傾向

が看取できなかったためであり、細かく検討するうえでは器種別提示は必要であると考えている。

さて、以下の三辻氏の分析結果に入る前に、肉眼観察で分類した各時代の軟質土器類の胎土特徴を簡単にまとめておきたい。

a. 縄文時代中期の土器

A～D類に分類。A類とB類は細砂粒を含む砂質系統の胎土で、素地は同一、大粒砂粒の多いA類と少ないB類に分けている。C類は細砂粒が入るものの、やや粘質系統。D類は粘質系統の胎土である。

b. 弥生時代後期～古墳時代前期の土器

A～D類に分類。A類のみ細砂粒を含む砂質素地。他は粘質系の素地。B・C・D類の違いは、より緻密な素地のC類と若干細砂粒が入るD類、通常の粘質素地をもつB類によって分けている。

c. 古墳時代中期の土器

A～D類に分類。C類のみ細砂粒多い砂質素地で、雲母粒多量含有する。他は細砂粒少なく粉っぽい素地をしている。A・B・D類の違いは、この中では若干砂質系で大粒砂粒を多量含有するB類、大粒砂粒の含有が少ないが砂粒を含むA類、砂粒の混在なく赤色酸化粒（酸化鉄粒）を含むD類で分けている。A・B・D類は同様の粘土素地である可能性をもつが、砂粒の混在がほとんどない点でD類のみ素地自体も異なる可能性をもつ。

d. 古墳時代後期の土器

A～E類に分類。細砂粒を多く含有する砂質素地のA・B類と素地に細砂粒が目立たないC・D・E類に大別できる。A・B類には雲母粒も含有されており、素地自体同系統である可能性が高いが、含有される砂粒の大きさと量によって、大きく多いB類と均質の粒をもつA類とに分けている。C・D・E類は量的にかなり少なく、特殊胎土である。C類は粉っぽく、断面に細かな気泡の開く胎土で、赤色酸化粒をまれに含む。D類は海綿骨針が素地の中に含まれる当地域では特殊なもので、サラッとした質感を受ける。E類は素地に極多量の雲母粒が入るもので、これもサラッとした質感をもつ胎土である。また、さらに「[˘]」表示して細分したものもあるが、A類、B類は雲母の量（[˘]は多いもの）、C類は赤色酸化粒の多いもので分けている。

以上、各時期の胎土特徴を述べたが、各時期で同一のアルファベットを使っても、時期毎に全く異なるもので、今振り返って、表記を変えればよかったと反省している。混乱のないよう注意願いたい。

(望月精司)

第2項 蛍光X線分析

(1) はじめに

須恵器でも、埴輪、土師器でも、窯跡出土土器破片を大量に分析すると、その分析値に集中性があることが見つげられた。このことから、各窯の製品は一定の化学特性をもつことがわかった。

この化学特性は地域によって異なる。とくに、K、Ca、Rb、Srの4因子は有効に地域差を表すことが見つけられたことから、これら4因子を中心に、須恵器の産地推定法は開発された。

一般に、窯跡が残っていない土師器、弥生土器、縄文土器については未だ産地推定法は出来ていない。しかし、一つの地域内の遺跡から出土したこれらの土器の分析データを見ると、ある程度のばらつきはあるものの、まとまりがあることは確実である。ただ、窯跡が残っていないから、一地域の土器の化学特性をどのようにして決定するかが問題となる。この問題の解決には、いろいろのアプローチの仕方があるであろうが、考古学者による土器の器形や胎土観察の結果をからめて、胎土分析データを整理するのも一法である。さらに、在地の軟質土器の化学特性があるかどうかを見るために、一つの複合遺跡から出土する縄文土器、弥生土器、それに各時代の土師器を分析するのも一つの方法であろう。

本報告では、須恵器窯跡群である南加賀窯跡群に近い、小松市月津町の念仏林南遺跡から出土した縄文時代中期、弥生時代末期、古墳時代中期と後期と推定される軟質土器の蛍光X線分析の結果について報告する。

(2) 分析結果

分析方法は従来と同じであるので省略した。全分析値は表1にまとめられている。分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示されているが、%やppm濃度への変換は容易である。

はじめに、念仏林南遺跡から出土した各時代の軟質土器の胎土が基本的に同じであるかどうかを見るため、K-Ca分布図とRb-Sr分布図を作成した。主成分元素であるK、Caの分布図から説明する。図1には縄文土器、図2には弥生土器、図3には古墳時代中期、図4には古墳時代後期の土師器のK-Ca分布図を示す。各国にはこれらの分析値をほとんど包含するようにして小松領域を描いてある。この領域は定量的に領界を示す訳ではないが、各時代の土器胎土を比較する上には有効な対照領域となる。図1を見ると、縄文土器はそれ程大きな広がりを見せないことがわかる。限られた場所の粘土を素材にして土器を作ったものと思われる。よくまとまっているところから、念仏林南遺跡周辺で作られたものと思われるが、小松領域の左下に分布する2点(No30、34)は胎土が少し異なる。図2の弥生土器では小松領域の内では分布はかなり広がる。これらも、この遺跡の周辺で作られたものと見られるが、1箇所ではなく、何箇所かで粘土を採取し、土器を製作したものと思われる。その結果、分布に広がりが出たのであろう。しかし、大部分の弥生土器は縄文土器と同様、Ca量の少ない領域、すなわち、小松領域の左半分の領域に集中して分布している。図3の古墳時代中期の土師器も同じ領域に分布しており、この点で、縄文時代から古墳時代中期の土師器まで、同じ粘土を使用していたことを示す。図4の古墳時代後期の土師器を見ると、小松領域内に分布はするが、その分布位置が弥生土器や古墳時代中期の土師器に比べて、右側、すなわちCa量がやや多い領域に分布している点が注目される。このことは使用粘土の質に

若干の変化があったことを示す。この変化の原因は主として、粘土の採掘場所の違いか、あるいは含有される砂粒を筆者は考えている。もし、混和材が原因とすると、古代では混和材をきちんと天秤で秤量して添加しているはずがなく、その場合は、分析データはもっと大きくばらつくはずである。実際に、他の遺跡でCa、Srが大きくばらつく軟質土器はこれまでも検出されている。なお、E類の4点の資料は考古学的にも搬入品の可能性があると考えられていたものであるが、元素分析のデータでもCa量が多く、搬入品の可能性が高いことが示された。

次に、図5～8にはそれぞれ、縄文土器、弥生土器、古墳時代中期の土師器、古墳時代後期の土師器のRb-Sr分布図を示す。RbとSrは微量元素であるが、RbはKと、またSrはCaと正の相関性をもつため、Rb-Sr分布図はK-Ca分布図と類似した分布をする。ただ、Ca軸に比べて、Sr軸上に試料は大きく拡大されて分布するので、Rb-Sr分布図の方が見易くなる。その結果、縄文土器、弥生土器、古墳時代中期の土器はK-Ca分布図ではほとんど同じ領域に分布していたが、図5～7を比較すると、その分布位置が少しずつ異なることがわかる。その原因は各時代によって、粘土の採取場所が変わったことによると思われる。そして、図8を見ると、古墳時代後期の土師器は小松領域内でSr量が多い領域に明らかに偏在することがわかる。この図ではE類の4点は一応、小松領域内に分布するが、他の土師器の中に、領域をずれるものが数点出た。とくにNo186、201、216の3点の胎土についてはよくわからない。

このように、各時代の軟質土器の胎土は少しずつ、その化学特性が異なったが、大きくずれるものはなく、基本的に同じ化学特性をもつとみなされることがわかった。したがって、ここに示した小松領域というエリアが在地産軟質土器のエリアであるということができよう。そうすると、小松市域北部にある松梨遺跡や銭畑遺跡出土の古墳時代後期の土師器はK-Ca、Rb-Sr分布図でどこに分布するかが注目されることになる。図9、10にはそれぞれ、松梨遺跡、銭畑遺跡の土師器のK-Ca分布図を、また、図11、12にはRb-Sr分布図を示してある。これらの図において、松梨遺跡の土師器と銭畑遺跡の土師器は同じ領域に分布していることがわかる。つまり、両遺跡の土師器胎土は同質であるということである。したがって、両遺跡の土師器が分布した領域は小松市域北部の土師器の領域と言えるかもしれない。念仏林南遺跡は小松市域南部にある。そうすると、これまでみてきた念仏林南遺跡の縄文土器～古墳時代後期の軟質土器胎土にみられるCa、Srの変位は小松市域に分布する粘土の北部型、南部型に起因するのかもしれない。このように考えると、念仏林南遺跡でも古墳時代後期には小松市域の北部に近いところで粘土を採取して、土師器を製作したことも考えられる。そして、図7、8に見られる小数のSr量の多い土師器は小松市域の北部側から、また、図11に見られる松梨遺跡の土師器のうちの、Sr量の少ない3点は南部側からの搬入品であるのかもしれない。これらの点については考古学的にも検討する必要がある。同時にまた、小松市域の南部側と北部側で粘土を採集し、分析してみる必要もあろう。

ここで、混和材について考えてみる。混和材が粘土とは異質の材料であるとすれば、混和材を含んだまま土器胎土を分析すれば、分析値に何らかの影響が出るはずである。しかし、これまで

分析された窯跡出土須恵器、埴輪、土師器の分析データを見る限り、窯ごとに集中性があり、混和材の影響は認められなかった。このことから、筆者は混和材添加の証拠はないものと考えてきた。窯周辺の粘土を観察しても、粒子が細かい粘土もあれば、砂まじりの粘土もあった。これらの粘土を使い分けたのではないかと考えてきた。しかし、韓国の軟質土器や日本の軟質土器の中に、CaとSr量に異常に大きくばらつく場合があり、若しかしたら、これが混和材によるものなのかと推察してきたが、これまでのところ、混和材の土器胎土に対する影響についての詳しい報告はない。混和材が添加されていれば、胎土の肉眼観察によってある程度わかるから、今後、胎土観察と分析データとの関連についても注意を払ってゆくつもりである。

以下に、各時代の軟質土器を肉眼観察によって分類したものの分析結果について述べる。

縄文土器の分析値を見ると、A類がB～D類に比べて、Ca、Sr量が多いことに気付く。そこで、A類とB～D類に分けてRb-Sr分布図を描いてみたのが図13である。胎土観察によると、C、D類が粘土質の胎土であるのに対し、A、B類は砂粒を含んだ胎土である。特に、A類は大粒の砂粒を含んでいる。図13を見ると、B～D類に比べて、A類には明らかにSr量が多い。つまり、大粒砂粒の効果がここに現れている訳である。風化した粘土に比べて、岩石の破砕体である砂粒にはNa量も多い。図14にはNa因子を比較してあるが、明らかに、B～D類に比べてA類にはNa量が多いことがわかる。これも大粒砂粒の影響と見られる。この場合、大粒砂粒を混和材として添加したのか、それとも、砂混じりの粘土をそのまま使用したかどうかである。この判断が目下のところ、できないのである。なお、A類のうちの2点はSr量も少ないが、Na量も少ない。A類の中でも砂粒の含有率が少ないのではなからうか。また、D類の2点(No30と34)にはCa、Sr量のみならず、Na量も少ない。果たして、外見上の胎土観察では他のD類の資料に比べて如何なるものであろうか。

次に、弥生土器、A類とB～D類のRb-Sr分布図を図15に示す。表1を見ると、甕、壺、高坏などの器種に関係なく、むしろ、B～D類に比べて、A類にCa、Sr、Na量が多い傾向があったので、A類とB～D類に分けて図を作成することにした。図15より、明らかに、A類にはB～D類に比べてSr量が多いことがわかる。また、図14のNa因子でも、A類にNa量が多いことがわかる。胎土観察でも、A類は細粒の砂を含む砂質素地であるのに対し、B～D類は粘土質であり、弥生土器の場合も縄文土器の場合と同様、胎土観察の結果が分析データとよく対応することがわかった。すなわち、胎土が砂質であると、Ca、Sr、Na量が多くなるのである。これは今回得られた重要な結果の一つである。なお、甕D類のNo68資料はCa、Sr、Na量とも多く、A類に帰属すべきものであろう。

次に、古墳時代中期の土師器胎土を見てみよう。胎土観察によると、D類には赤色粒(Feを多く含むと推定される)がある。そこで、D類とA～C類に分けて、Fe因子を比較してみることにした。図16にFe因子を比較してある。明らかに、D類にはA～C類に比べてFe量が多い傾向があることが認められ、ここでも胎土観察と分析データのよい一致がみられる。もしかしたら、No152

はA～C類に、また、A類No111はD類に分類されるべきものなのかもしれない。なお、Rb-Sr分布図は図17に示してあるが、A～D類とも、砂質の胎土であるため、Sr量に顕著な差異は認められない。特に、B類には大砂粒が多く混入されているが、A、C、D類に比べて目立ってCa、Sr、Na量が多い訳ではない。

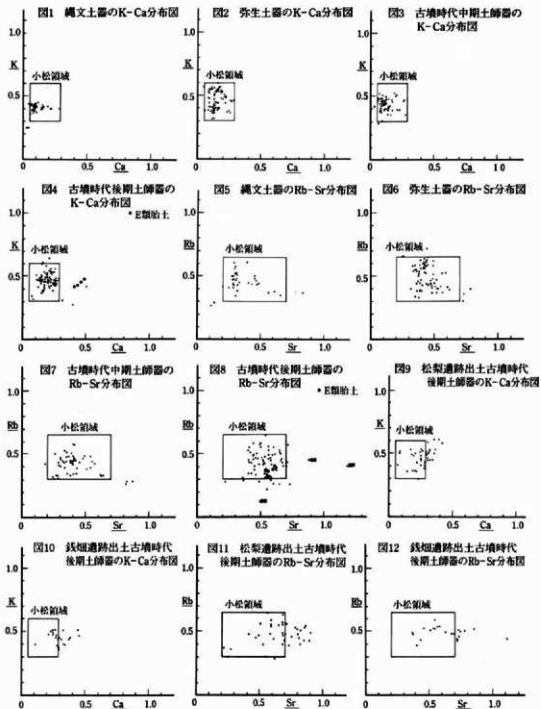
次に、古墳時代後期の土師器について述べる。その胎土はA、B類が砂質素地、C類は粉っぽく、D類には海綿骨針が入り、E類には雲母粒が多く入っている。そこで、図18にはA、B類とC～E類に分けて、Rb-Sr分布図を描いてみた。しかし、A～E類の全てにSr量が多く、Sr量では差異が認められなかった。むしろ、Rb量がA、B類に多く、C～E類には少ない傾向が認められた。このような場合、K-Rb相関図を描くと、相関直線に沿って、A、B類とC～E類は分かれるはずである。図19に示すように、予想どおり、両者は分かれる。D類のNo220はA、B類のいずれかである可能性がある。A、B類は砂質素地であるため、Ca、Sr、Na量が少し多くなっただけで、本質的には念仏林南遺跡の縄文土器～古墳時代中期までの軟質土器の胎土と同質であると言えよう。しかし、C～E類の胎土はそれとは少し異なるようである。特に、D、E類には図16に示すようにFe量が多く、A、B類とは全く異なる。D類は図14に示すようにNa量も多く、他類とは全く異なる胎土であることがわかる。C類はNaやFe因子ではA、B類に類似しているように見えるが、K、Rb因子では類似せず、A、B類とは別胎土である。

このように見てくると、古墳時代後期土師器のA、B類は在地産の軟質土器であるが、C～E類は他地域から搬入品である可能性が十分ある。このように、胎土観察の結果は蛍光X線分析の結果と非常に良い一致を示すことがわかった。

今回得られた結果は重要である。窯跡に残っていない軟質土器の胎土研究の方法として、胎土観察による分類と蛍光X線分析による分析データを組み合わせることによって、土器胎土から、より詳細な情報が引き出し得るということである。今後、この方法が軟質土器の胎土研究に定着することになろう。元来、窯跡が残っている須恵器や中世陶器といえども、無条件に分析すべきものではない。考古学的な詳細な条件が付いてはじめて、元素分析のデータも十分生かされるべきものである。この点から、筆者は土器の胎土研究は考古学者と分析化学者の学際共同研究であると主張しつづけてきたのである。今、ここにその成果の一つが得られたように思う。古墳時代後期の土師器胎土の解析から、前述した小松市域の北側と南側の粘土の問題はほぼ解決されたことになる。すなわち、縄文時代から古墳時代後期土師器のA、B類までは同質の胎土である。そして、砂粒（これは混和材と言えるのか、それとも、もともと砂粒を含んだ粘土なのかは不明）が多く含まれるか、それとも、粘土質に富むかによって、Ca、Sr、Na量に差異が生じたのである。

古墳時代後期土師器のC～E類が搬入品であるかどうかは、今後、この型の胎土をもつ土師器が能登半島側でも出土するかどうか見てみなければならないし、また、C類のような粉っぽい胎土が小松市域の粘土の中に得られるかどうか併せて検討する必要があるだろう。

最後に、古墳時代後期土師器のA類胎土が南加賀窯跡群で作られた土師器胎土と類似している



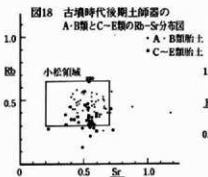
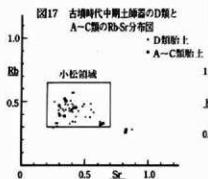
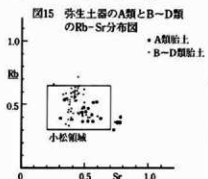
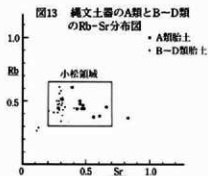


図14 Na因子の比較

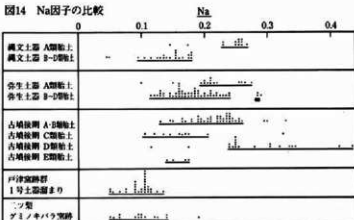


図16 Fe因子の比較

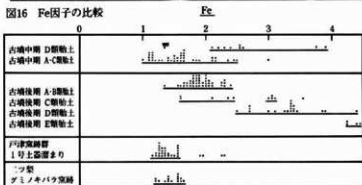


図19 古墳時代後期土師器のA-B類とC-E類のK-Rb相関図

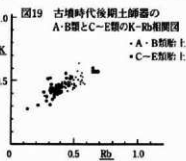


図20 南加賀窯土師器とA類胎土のK-Ca分布図

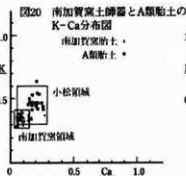


図21 南加賀窯土師器とA類胎土のRb-Sr分布図

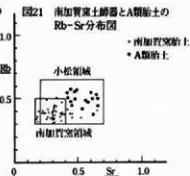


表1 念仏林南遺跡出土土師器の分析値

番号	時代・器種・胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Ni	Na	差分	時代・器種・胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Ni	
1	縄文土器 A組	0.408	0.144	1.69	0.439	0.476	0.259	0.41	*	時代・器種・胎土	0.390	0.082	1.29	0.539	0.335	0.150	
2		0.416	0.155	1.68	0.499	0.454	0.261	42	*		0.450	0.267	1.96	0.517	0.560	0.202	0.202
3		0.424	0.092	1.96	0.510	0.308	0.174	43	*		0.459	0.284	1.95	0.525	0.591	0.199	0.199
4		0.398	0.210	1.43	0.366	0.540	0.229	44	*		0.460	0.256	1.91	0.394	0.617	0.203	0.203
5		0.442	0.094	1.23	0.608	0.390	0.250	45	赤土土器 赤土組		0.529	0.194	1.59	0.378	0.420	0.128	0.128
6	*	0.427	0.148	1.71	0.437	0.473	0.268	46	*	0.452	0.135	2.04	0.531	0.632	0.211	0.211	
7	*	0.417	0.194	1.35	0.360	0.605	0.257	47	*	0.573	0.043	1.45	0.662	0.248	0.116	0.116	
8	*	0.401	0.222	1.45	0.349	0.656	0.228	48	*	0.564	0.131	1.54	0.637	0.420	0.163	0.163	
9	*	0.403	0.149	1.67	0.477	0.451	0.254	49	*	0.597	0.157	1.49	0.652	0.445	0.193	0.193	
10	*	0.370	0.074	1.79	0.445	0.278	0.145	50	*	0.390	0.161	1.65	0.418	0.506	0.217	0.217	
11	*	0.397	0.282	1.33	0.373	0.830	0.250	51	*	0.407	0.122	1.74	0.464	0.469	0.218	0.218	
12	*	0.415	0.154	1.71	0.466	0.445	0.262	52	*	0.400	0.169	1.63	0.403	0.530	0.223	0.223	
13	*	0.395	0.141	1.64	0.441	0.431	0.254	53	*	0.473	0.182	1.74	0.631	0.438	0.206	0.206	
14	縄文土器 B組	0.390	0.067	1.75	0.517	0.312	0.141	54	赤土土器 赤土組	0.470	0.200	2.38	0.515	0.492	0.288	0.288	
15		0.385	0.078	1.69	0.426	0.315	0.155	55	*	0.508	0.130	2.09	0.830	0.393	0.186	0.186	
16		*	0.391	0.084	1.76	0.476	0.306	0.153	56	*	0.317	0.173	2.54	0.331	0.136	0.136	
17	*	0.421	0.078	1.77	0.406	0.282	0.156	57	*	0.555	0.165	1.90	0.597	0.417	0.184	0.184	
18	*	0.367	0.105	1.81	0.341	0.302	0.136	58	*	0.488	0.220	2.37	0.419	0.483	0.242	0.242	
19	縄文土器 C組	0.378	0.084	1.81	0.385	0.316	0.133	59	赤土土器 赤土組	0.397	0.164	1.69	0.401	0.526	0.237	0.237	
20		0.420	0.097	1.94	0.518	0.299	0.182	60	*	0.497	0.133	1.06	0.435	0.464	0.173	0.173	
21		0.425	0.093	1.94	0.556	0.293	0.174	61	*	0.572	0.174	1.75	0.612	0.435	0.188	0.188	
22	*	0.419	0.095	1.92	0.576	0.303	0.173	62	*	0.432	0.149	1.52	0.502	0.375	0.123	0.123	
23	*	0.436	0.062	2.37	0.502	0.271	0.106	63	*	0.492	0.220	1.68	0.410	0.600	0.172	0.172	
24	*	0.443	0.044	3.07	0.414	0.250	0.116	64	*	0.543	0.156	1.50	0.564	0.415	0.134	0.134	
25	*	0.438	0.087	1.89	0.613	0.292	0.158	65	*	0.482	0.089	1.17	0.583	0.485	0.284	0.284	
26	縄文土器 D組	0.446	0.116	1.44	0.445	0.405	0.180	66	*	0.538	0.186	1.66	0.558	0.421	0.119	0.119	
27		*	0.418	0.101	1.73	0.450	0.328	0.178	67	*	0.529	0.190	1.55	0.561	0.418	0.129	0.129
28		*	0.398	0.082	1.91	0.428	0.285	0.126	68	*	0.359	0.256	1.41	0.560	0.733	0.285	0.285
29	*	0.430	0.082	1.92	0.467	0.305	0.136	69	赤土土器 赤土組	0.473	0.130	1.39	0.471	0.522	0.260	0.260	
30	*	0.252	0.030	2.13	0.274	0.113	0.045	70	*	0.473	0.184	1.78	0.566	0.519	0.216	0.216	
31	*	0.423	0.079	2.18	0.475	0.296	0.131	71	赤土土器 赤土組	0.543	0.154	1.70	0.599	0.410	0.158	0.158	
32	*	0.398	0.091	1.91	0.469	0.275	0.143	72	*	0.538	0.161	1.73	0.605	0.419	0.182	0.182	
33	赤土土器 赤土組	0.359	0.050	1.99	0.423	0.199	0.096	73	*	0.408	0.114	1.73	0.434	0.448	0.210	0.210	
34		*	0.248	0.056	1.99	0.289	0.127	0.050	74	*	0.514	0.208	1.57	0.514	0.408	0.170	0.170
35		*	0.436	0.062	1.44	0.469	0.280	0.163	75	*	0.551	0.163	1.66	0.594	0.447	0.162	0.162
36	*	0.445	0.146	3.23	0.366	0.483	0.196	76	*	0.527	0.182	1.63	0.723	0.444	0.157	0.157	
37	*	0.376	0.245	2.32	0.296	0.276	0.254	77	*	0.479	0.085	1.31	0.449	0.361	0.160	0.160	
38	*	0.444	0.216	2.16	0.366	0.561	0.218	78	赤土土器 赤土組	0.408	0.125	1.48	0.383	0.402	0.146	0.146	
39	*	0.374	0.233	1.32	0.397	0.782	0.277	79	*	0.530	0.143	2.13	0.587	0.350	0.167	0.167	
40	*	0.440	0.162	1.73	0.445	0.500	0.208	80	*	0.482	0.222	2.38	0.413	0.479	0.242	0.242	

番号	時代・器種・胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
81	弥生土器 土D型	0.408	0.092	1.39	0.524	0.380	0.146
82	弥生土器	0.439	0.090	1.59	0.445	0.385	0.192
83	弥生土器 高林A型	0.422	0.137	1.56	0.481	0.488	0.209
84	弥生土器	0.396	0.152	1.61	0.443	0.471	0.212
85	弥生土器	0.385	0.155	1.56	0.419	0.552	0.264
86	弥生土器 高林B型	0.358	0.061	1.38	0.395	0.312	0.099
87	弥生土器 高林B型	0.548	0.098	1.27	0.537	0.356	0.160
88	弥生土器	0.572	0.110	1.56	0.579	0.435	0.153
89	弥生土器	0.381	0.123	1.96	0.383	0.365	0.210
90	弥生土器	0.550	0.100	1.26	0.559	0.391	0.167
91	弥生土器	0.395	0.137	1.89	0.439	0.437	0.200
92	弥生土器	0.530	0.084	1.32	0.541	0.379	0.161
93	弥生土器	0.384	0.132	1.55	0.534	0.425	0.229
94	弥生土器	0.382	0.130	1.87	0.430	0.407	0.186
95	弥生土器	0.432	0.173	1.84	0.462	0.371	0.188
96	弥生土器	0.554	0.094	1.46	0.547	0.346	0.158
97	弥生土器 高林C型	0.363	0.121	1.98	0.383	0.385	0.202
98	弥生土器	0.318	0.120	2.03	0.336	0.553	0.187
99	弥生土器	0.367	0.125	2.02	0.394	0.387	0.218
100	弥生土器 高林D型	0.376	0.101	1.74	0.443	0.365	0.180
101	弥生土器	0.363	0.128	1.73	0.469	0.395	0.175
102	弥生土器	0.532	0.090	1.38	0.579	0.332	0.132
103	弥生土器	0.562	0.108	1.52	0.587	0.387	0.150
104	土器中層 土器器A型	0.483	0.057	1.64	0.333	0.268	0.111
105	土器中層	0.397	0.117	1.39	0.424	0.404	0.238
106	土器中層	0.458	0.062	1.51	0.308	0.281	0.113
107	土器中層	0.459	0.085	2.44	0.449	0.305	0.123
108	土器中層	0.385	0.082	2.09	0.426	0.288	0.121
109	土器中層	0.474	0.056	1.64	0.325	0.282	0.108
110	土器中層	0.522	0.185	2.34	0.416	0.568	0.299
111	土器中層	0.392	0.206	2.98	0.385	0.434	0.166
112	土器中層	0.391	0.226	2.09	0.337	0.620	0.219
113	土器中層	0.353	0.278	1.32	0.781	0.870	0.202
114	土器中層	0.457	0.172	1.13	0.460	0.478	0.225
115	土器中層	0.391	0.109	1.62	0.445	0.381	0.168
116	土器中層	0.395	0.081	2.13	0.437	0.319	0.150
117	土器中層	0.400	0.080	2.13	0.412	0.288	0.120
118	土器中層 土器器B型	0.439	0.099	1.82	0.359	0.377	0.175
119	土器中層	0.439	0.126	1.51	0.436	0.350	0.120
120	土器中層	0.440	0.119	1.54	0.433	0.329	0.123

番号	時代・器種・胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
121	弥生土器	0.495	0.121	1.10	0.377	0.539	0.316
122	弥生土器	0.474	0.174	1.17	0.380	0.540	0.216
123	弥生土器	0.357	0.162	1.140	0.384	0.505	0.174
124	弥生土器	0.521	0.070	1.90	0.504	0.364	0.135
125	弥生土器	0.453	0.092	1.87	0.340	0.400	0.162
126	弥生土器	0.286	0.064	1.15	0.302	0.251	0.089
127	弥生土器	0.497	0.094	1.23	0.474	0.441	0.194
128	弥生土器	0.447	0.115	1.53	0.475	0.349	0.118
129	弥生土器	0.475	0.124	1.11	0.441	0.549	0.275
130	弥生土器	0.356	0.134	1.48	0.336	0.426	0.131
131	弥生土器	0.475	0.122	1.46	0.479	0.490	0.257
132	弥生土器	0.477	0.139	1.17	0.426	0.452	0.201
133	土器中層	0.457	0.107	2.50	0.476	0.365	0.157
134	土器中層	0.399	0.137	1.65	0.428	0.383	0.129
135	土器中層	0.392	0.170	1.58	0.445	0.417	0.138
136	土器中層	0.440	0.111	1.12	0.571	0.397	0.159
137	土器中層	0.474	0.145	1.59	0.450	0.411	0.169
138	土器中層	0.391	0.139	1.61	0.437	0.400	0.135
139	土器中層	0.428	0.092	1.01	0.496	0.385	0.165
140	土器中層	0.414	0.139	1.66	0.425	0.391	0.141
141	土器中層	0.433	0.103	1.09	0.572	0.410	0.161
142	土器中層	0.482	0.089	1.20	0.482	0.403	0.179
143	土器中層	0.412	0.142	1.74	0.444	0.390	0.138
144	土器中層	0.456	0.084	2.38	0.523	0.340	0.154
145	土器中層	0.468	0.266	2.56	0.281	0.825	0.390
146	土器中層	0.463	0.258	2.62	0.364	0.818	0.387
147	土器中層	0.440	0.074	2.35	0.475	0.299	0.136
148	土器中層	0.501	0.075	2.19	0.334	0.636	0.353
149	土器中層	0.381	0.197	1.79	0.401	0.301	0.133
150	土器中層	0.505	0.202	3.89	0.325	0.625	0.358
151	土器中層	0.371	0.081	2.12	0.393	0.339	0.135
152	土器中層	0.402	0.123	1.37	0.452	0.417	0.231
153	土器中層	0.479	0.083	2.30	0.599	0.349	0.136
154	土器中層	0.425	0.062	1.76	0.336	0.355	0.192
155	土器中層	0.463	0.102	1.59	0.423	0.395	0.216
156	土器中層	0.313	0.090	2.40	0.318	0.240	0.076
157	土器中層	0.430	0.038	2.32	0.424	0.177	0.083
158	土器中層	0.409	0.172	1.83	0.396	0.446	0.194
159	土器中層	0.471	0.199	1.88	0.502	0.656	0.224
160	土器中層	0.450	0.167	1.81	0.419	0.530	0.208

番号	時代・芯棒・断上	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Nu
161	*	0.442	0.251	2.00	0.495	0.613	0.240
162	*	0.470	0.110	1.72	0.482	0.441	0.128
163	*	0.472	0.143	1.80	0.546	0.406	0.190
164	*	0.532	0.168	2.11	0.571	0.490	0.203
165	*	0.504	0.150	1.86	0.559	0.475	0.221
166	*	0.542	0.212	2.28	0.465	0.577	0.231
167	*	0.468	0.148	1.79	0.581	0.442	0.180
168	*	0.471	0.171	2.03	0.497	0.469	0.210
169	*	0.464	0.143	2.08	0.512	0.423	0.206
170	*	0.421	0.255	1.65	0.441	0.459	0.255
171	*	0.535	0.216	1.83	0.553	0.597	0.295
172	*	0.639	0.205	2.23	0.534	0.645	0.211
173	*	0.417	0.209	2.00	0.374	0.624	0.239
174	占頂後側 上部芯棒型	0.444	0.197	2.31	0.490	0.556	0.228
175	*	0.508	0.107	1.77	0.526	0.403	0.167
176	*	0.459	0.279	2.01	0.447	0.664	0.254
177	*	0.467	0.224	2.03	0.554	0.583	0.248
178	*	0.441	0.143	1.78	0.428	0.429	0.227
179	*	0.466	0.137	1.72	0.432	0.414	0.169
180	*	0.528	0.246	1.75	0.507	0.657	0.258
181	*	0.422	0.223	1.88	0.388	0.627	0.234
182	*	0.486	0.148	1.92	0.551	0.498	0.237
183	*	0.456	0.200	1.64	0.462	0.560	0.180
184	*	0.477	0.258	1.56	0.573	0.720	0.298
185	占頂後側 上部芯棒型	0.428	0.173	1.99	0.486	0.445	0.152
186	*	0.458	0.257	1.79	0.450	0.473	0.233
187	*	0.494	0.181	2.00	0.465	0.456	0.227
188	*	0.480	0.136	1.88	0.420	0.488	0.147
189	*	0.465	0.127	1.93	0.455	0.437	0.166
190	*	0.434	0.237	1.77	0.384	0.618	0.233
191	*	0.447	0.177	1.84	0.410	0.586	0.189
192	*	0.556	0.214	2.05	0.563	0.563	0.235
193	*	0.470	0.250	1.84	0.400	0.681	0.243
194	*	0.577	0.184	1.88	0.526	0.563	0.219
195	*	0.491	0.208	2.23	0.418	0.533	0.219
196	*	0.481	0.215	1.35	0.430	0.668	0.221
197	*	0.507	0.195	1.84	0.492	0.587	0.197
198	*	0.364	0.242	2.39	0.258	0.645	0.194
199	*	0.492	0.194	2.29	0.452	0.519	0.188
200	占頂後側 上部芯棒型	0.478	0.288	1.98	0.397	0.698	0.242

番号	時代・芯棒・断上	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Nu
201	*	0.415	0.501	1.60	0.395	1.18	0.332
202	占頂後側 上部芯棒型	0.362	0.146	3.11	0.334	0.463	0.173
203	*	0.399	0.174	3.00	0.369	0.453	0.159
204	*	0.311	0.307	3.54	0.216	0.546	0.168
205	*	0.382	0.163	2.44	0.279	0.486	0.135
206	*	0.407	0.213	2.12	0.264	0.604	0.207
207	*	0.461	0.198	2.35	0.256	0.729	0.326
208	*	0.310	0.082	1.58	0.307	0.361	0.105
209	*	0.386	0.171	3.06	0.345	0.403	0.173
210	*	0.382	0.161	3.06	0.345	0.425	0.163
211	*	0.471	0.141	1.61	0.450	0.402	0.144
212	占頂後側 上部芯棒型	0.442	0.253	3.39	0.309	0.540	0.241
213	*	0.442	0.248	3.35	0.323	0.571	0.248
214	*	0.473	0.250	3.33	0.323	0.548	0.248
215	*	0.443	0.257	3.35	0.313	0.559	0.249
216	*	0.279	0.396	5.60	0.126	0.494	0.252
217	*	0.519	0.233	2.72	0.443	0.526	0.346
218	*	0.438	0.254	3.40	0.307	0.547	0.257
219	*	0.338	0.074	3.37	0.284	0.224	0.113
220	*	0.599	0.149	3.23	0.570	0.497	0.342
221	*	0.454	0.223	3.33	0.383	0.541	0.280
222	*	0.429	0.262	3.38	0.321	0.556	0.244
223	*	0.440	0.253	3.39	0.330	0.550	0.246
224	*	0.454	0.223	3.33	0.383	0.541	0.280
225	*	0.438	0.241	3.47	0.339	0.528	0.238
226	*	0.526	0.219	2.71	0.468	0.511	0.321
227	占頂後側 上部芯棒型	0.516	0.185	3.88	0.294	0.583	0.307
228	*	0.518	0.194	3.45	0.310	0.578	0.304
229	*	0.408	0.126	2.48	0.386	0.361	0.173
230	*	0.604	0.159	3.08	0.645	0.538	0.413
231	*	0.556	0.256	2.97	0.431	0.712	0.586
232	占頂後側 上部芯棒型	0.430	0.433	4.46	0.362	0.558	0.140
233	*	0.421	0.407	4.35	0.375	0.543	0.150
234	*	0.475	0.465	4.38	0.404	0.607	0.176
235	*	0.453	0.464	4.44	0.380	0.603	0.169

という観察報告があるので、元素分析のデータを対応させてみることにした。図20、21には南加賀窯跡群の戸津1号土器溜まりと二ツ梨グミノキバラ窯跡から出土した土師器と、念仏林南遺跡の古墳時代後期土師器A類のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を示してある。明らかに両者の胎土は異なることがわかる。つまり、A類土師器は南加賀窯跡群で作られた土師器ではない訳である。縄文土器からこのA類土師器にいたるまで、その胎土は同質であることから、小松市域で作られた土師器であると言えよう。

今回の報告で、軟質土器の胎土研究について一つの方向性が得られたので、この方向で今後、一層の努力を積むことが必要であろう。

(三辻利一)

第3項 考古学的所見

三辻氏の分析結果について、考古学の立場から若干の所見を述べる。

今回の胎土分析の目的は冒頭で述べたとおり、地元産と推定される軟質系土器類がどのような胎土領域として設定できるのか、時代による変化はあるのかなど、地元産軟質系土器類の生産と供給の実態を解明することであるが、今回の三辻氏の分析結果において、興味深い指摘がなされているので、先にその問題について取り上げてみたい。

それは、土器胎土における粘土素地と混和材の問題である。さて、土器の胎土には多かれ少なかれ、砂粒の混在が見られるが、この砂粒はもともと粘土素地に含まれているものなのか、それとも混和材として添加されたものなのか、両方意見が分かれる所である。また、一方、粘土素地生成において水籠は通常行われていたとする考え方もあり、土器粘土生成にはまだまだ定説は存在していないと言える。今回の三辻氏の分析では、肉眼観察で砂粒を多く混在する胎土（筆者は粘土素地にもともと砂粒が入っているもので、砂質素地の粘土と判断）が粘質素地の粘土よりもSr、Ca、Naの3因子においていずれも高い数値を示す傾向が見られた。三辻氏はこの砂粒を混和材か粘土素地によるものか、結論を出していないが、砂粒の混在と3因子とは大きな関連性をもつと指摘している。これは肉眼観察での胎土分類と蛍光X線分析とが地元胎土の狭い領域の中でも一致する傾向をもった点で、高く評価できるもので、混和材かどうかは別として砂粒と化学因子の関係は注目すべきことである。しかし、ここで注意すべきことは全ての事例が当てはまる訳ではないことで、当遺跡の古墳時代中期の土師器のみは、前述した砂質素地（C類）が粘質素地（A・B類）に比べて3因子対比で高い傾向を確認できていない（図22）。そして、さらに、当遺跡以外の胎土との比較では、南加賀窯の戸津窯1号土器溜まり出土の土師器食膳具資料（混和材添加の可能性の低いもの）が肉眼観察で砂質素地に分類されるものであるが、念仏林南遺跡の砂質系粘土はもちろん、粘質系粘土よりも3因子で低い傾向が見られた（第20・21図）。これは素地についてのみ見れば、間違いなく、3因子の分布のズレは単純に砂粒が多く入るか、そうでないかの違いによるものではないことを示し、少なくとも肉眼観察での砂質素地と粘質素地と

の比較の上での数値傾向の一定性は提示できないと判断される。ただ、一つの胎土領域の中での（限られた粘土採取地での）傾向として、大きく二つの粘土採取地を確認できたことは大きく、それが肉眼観察と化学分析との一致において確認できたことは重要なことである。また、このような砂粒の多少と化学因子での高低の傾向は必ずしも一定の法則を描き切れない点で、砂粒の多少が化学因子に一定した影響を与える訳でない事を示し、三辻氏が従来から指摘している蛍光X線分析での数値の違いは混和材などの添加物によるものではなく、粘土素地自体の質の違いによるものであることを補強するものとなり、粘土素地の分析を中心とする化学分析方法として蛍光X線分析がかなり有効であることを物語るものと言える。ただ、古墳時代中期の土師器において同質粘土の中に入る混和材の多少が化学因子にどのように影響するかを見た場合（図22）、B類（多）とA類（少）とで僅かではあるが、Feを除くいずれの因子でも高い傾向がある。これは蛍光X線分析に混和材が全く影響しないとは言いきれず、もう少し検討の余地を残しているが、現段階では分布域を分けて考えるほどのものではなく、混和材の混入するものと素地のままのものとの対比では分布域を分けることは不可能である。どちらかと言えば、混和材を入れたものが、入れない素地に近いものよりも数値が高くなる方向性で分布域がバラつくといった一定ではない影響として現れる傾向はあり、分布域がまとまるものとバラつくものとの対比で考える場合に有効と考える（図23に松梨遺跡の古墳時代後半と古代前半の土師器の魂類と壺類を対比して載せているが、壺類は魂類の胎土に混和材を入れたような胎土であり、この両者の対比が混和材の影響を示す。【松梨遺跡】小松市教育委員会 1994年。なお、混和材については、以前に須恵器の分析からも述べたものもあるのであわせて参照願いたい。【錢畑遺跡Ⅱ】小松市教育委員会 1993年）。なお、混和材と粘土素地の問題については、以前飯島賢治らの研究で（飯島賢治・亀田修一・白石純・直原伸二「蛍光X線分析法による胎土分析に関する基礎的研究」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』第17号 1991年）「土器の胎土の化学組成は胎土中の砂粒の有無によって変化する」との指摘がなされているが、この報告でも増減の法則性は提示しきれていない。

さて、前置きはこの辺にして、本題について述べる。まず、地元産と推定される各時代の土器群の領域の問題についてだが、三辻氏は分析結果から時代によって分布域に若干のズレはあるが、一つに包括できる胎土領域が存在し、これが地元産軟質系土器の胎土領域であると判断された。考古学的に見て、この時代の軟質系土器群は地元生産であることが基本であり、予想していた結果となったわけであるが、古墳時代後期のA類・B類土師器については砂粒の入り具合や破面の状態等から南加賀産での生産品の可能性もあるのではないかと筆者は考えていた。南加賀産は当村落と距離的に近く、また7世紀初頭という時期が窯業生産の大きな転換時期であることもその想定を補佐する要因となったが、図20・21のとおり、分析結果では明瞭に分布域は異なり、南加賀産ではないと判断された。南加賀産での土師器生産は8世紀初頭以降確認されるもので、しかも同時に北陸型煮炊具の技法に転換しており、所詮、このような想定は無理があるのであるが、この時期の土師器胎土を見ると、A類占有率は全体の98%という極めて高い割合を示す状況にあ

図22 念仏林南遺跡古墳時中期土師器のA・B・C型型胎土対比

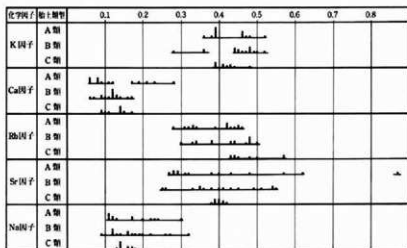


図23 松梨遺跡出土古墳時代後期及び古代前半土師器の器種別胎土分布

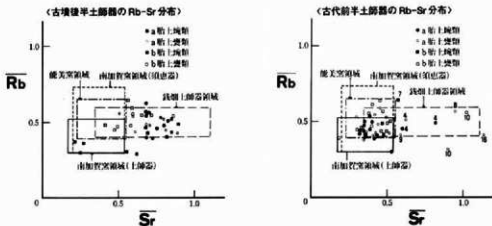
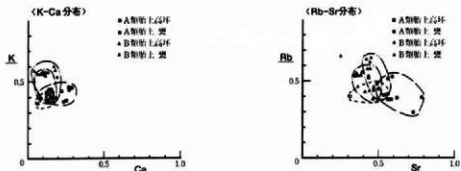


図24 念仏林南遺跡弥生土師器の器種別胎土分布



(図22及び図24は「辻氏分析表より作表し、図23は松梨報告から転載)

り、特定の生産地からの供給が行われた、つまり、窯場からの供給を想定した訳である。窯場からの供給の可能性はなくなったが、このような単一の胎土にはほぼ統一される状況は、これ以前の時期の軟質系土器類では確認できなかったことであり、地元産軟質系土器の生産と供給がこの時期に転換した可能性もあると考えたい（同時期の松梨遺跡や銭畑遺跡では複数の胎土類型が存在しており、この時期の特徴というよりも、当集落の特徴と言えるものである）。これを補足するかのよう、古墳時代後期のA・B類以外の胎土は地元産の可能性が薄く、他地域搬入品として捉えられるもので、分析結果でも、K-Rb相関図で地元胎土領域と明瞭に識別できている。しかも、C～E類のいずれの胎土もD類はNa因子、E類はCa因子など大きく分布域がズレる様相をもち、搬入元が生産地がどのような地域であるかは判断材料がないが（D類については類似する胎土が金沢周辺で主体的に確認できており、金沢産である可能性をもつ）、C～E類のそれぞれが別地域である可能性もある。該期の当集落の状況を考えれば（計画的に配置された村落）、これら別地域の胎土をもつ土器群は人とともに持ち込まれた可能性もあり、それはその胎土類型の出土量の少なさからも伺える。C～E類胎土の土器は当集落の成立に伴って、計画的に移動させられた人間たちによって持ち込まれた土器であり、そのような政治色をもった集落であったればこそ、単一の生産地からの土器供給が行われていたものとも予想できる。ただ、この点については、詳しく検討しておらず、ここではあくまでも仮説として提示する。

さて、話を戻して、地元産の軟質系土器類の胎土領域についてであるが、先に述べた一つの領域として括ることができる一方、各時代によって、ある程度の分布傾向が提示できると三辻氏は述べている。各時代で分布域が大幅にズレることはないが、縄文時代から古墳時代へと徐々にCa量やSr量が多い方に偏る傾向があり、若干ではあるが、時代によって、粘土が変化した様子が伺える。この変化の傾向について、採取地が移動して行った可能性を三辻氏は指摘しているが、胎土類型別に考えれば、砂質素地をもつ分布域には大きな変動はなく、どちらかと言えば、粘質系素地のものが変動して行ったと評価できるが、ただ、粘質系素地についても混和材の混入によっての分布域のバラつきとも評価できる。また、古墳時代後期の土師器については地元粘質系素地が存在しない点から、全体としてはCa量、Sr量が多い方に偏る傾向があった訳で、縄文時代から古墳時代にかけて、極端に粘土採取地の移動があったとは考え難い。肉眼観察で見た各時代の砂質、粘質ごとの胎土の変化程度の違いであり、基本的な粘土採取場所は変わらなかったと推察する。つまり、基本的に遺跡周辺の地元領域内での砂質素地と粘質素地の2つの粘土採取地を基本形として粘土採掘されたものであり、時代を違えて、その状況が存続することは興味深い。何故、2つの粘土が存在し続けるのかについては、現段階では推測する資料もない。ただ、これは当遺跡のみではなく、いずれの遺跡でもあるものであり（小松市域の集落遺跡では通常に見られる）、また、古代になっても存続する胎土類型である（松梨遺跡等で確認）。両粘土素地の違いは粘土採取地の違いと単純に述べられるものとは思えず、今後、整理して行く資料を検討する中で再考してみたい。

さて、以上の2つの胎土類型を基本として、地元胎土領域は設定される訳であるが、時代によって、分布域のまとまり具合は違う。これは縄文時代と弥生時代以降の対比で明瞭で、縄文土器の分布域のまとまりと弥生時代以降の分布域のバラつきから、三辻氏は縄文時代の遺跡周辺での限られた粘土採取から弥生時代には広い範囲での複数箇所での粘土採取へと変化したものと推察している。これは胎土類型別で見ると、より明瞭で、縄文土器では、K-Ca分布図でも、Rb-Sr分布図でもA類が右側、B～D類が左側に偏在。B～D類も明瞭な分離はしないが、K因子ではCが0.4以上、Bが0.4以下、Rb因子ではCが0.5以上、Dが0.5以下へ偏在する傾向が読み取れる。つまり、地元という領域の中で、複数の胎土の存在が想定できる訳で、それとかなり単一の特質をもつ。この状況は三辻氏の指摘する限られた場所での粘土採取によるものと思われ、それが土器の胎土としてストレートに現れる状況は、地元での生産であっても、特に粘土採取・生成から土器製作・焼成まで一貫した工程として存在するかなり小規模な生産であったことに起因するものと思われる。この時代の土器生産を基本的には集落内での構成員による極めて小規模なものとして予想しているが、粘土分布領域が狭い範囲で類型ごとにまとまりながら分布する状況は、粘土採掘の単位（製作単位）を示している可能性もある。

以上の分布域にまとまりをもった縄文土器の胎土分布に対し、弥生時代以降は分布域がバラつく特徴をもつのであるが、胎土類型ごとに見ると、弥生時代A類胎土や古墳時代中期B類胎土、D類胎土のように、胎土類型によって数値が偏在する傾向は見られる。ただ、縄文時代のまとまりとは質的に異なり、その分布域の形成の仕方とも法則性をもたない。つまり、胎土類型に分けても、分布域のバラつきは確実に存在する訳で、弥生時代以降の土器胎土に共通してみられる特徴である。これは当遺跡以外でも集落遺跡であれば共通して見られる特徴であり（松梨遺跡や銭畑遺跡の事例）、須恵器窯跡などの生産遺跡ではあまり顕在化しない特徴である。本来、須恵器窯などの粘土採取・生成はかなり一括して大量生産されるため、生産量に見合うような粘土の量を考えて採掘坑を掘る訳で、分布域もバラつくものと考えがちだが、実際は分布のバラつきは少なく、バラつくにしても法則性はあるように思う。つまり、弥生時代以降の土器胎土のバラつきは複数での粘土採掘に原因をもつのではなく、粘土素地以外の2次的な添加物によるものと予想する。前述したとおり、混和材の混入は胎土の分布域のバラつきを引き起こしている可能性があり、そのように仮定すると、弥生時代以降、混和材混入が意識的に物によって量を違えながら行われたことを物語る。つまり、粘土生成の段階よりも、土器製作の直前で添加された可能性をもち、そのためにバラつく結果となったものと予想したい。弥生時代は煮炊具用土器としての堯が機能分化してくる時代だが、煮炊具には粗い砂を多く入れる行為は確かにあり、食器や貯蔵具とは意識的に違えている（図24には弥生時代のA類胎土とB類胎土の混和材投入が予想される堯と混和材を入れないと予想される高坏の器種別対比図を載せているが、これを見ると、確かに同類胎土でも領域が広がる傾向が看取でき、肉眼では分け切れないものであっても、蛍光X線分析ではその傾向を提示している）。つまり、土器製作における粘土の使い分け、粘土への混和材添加の仕

方も、この蛍光X線分析値は示してくれる可能性があり、注目したい点である。基本的に、弥生時代以降も地元での集落周辺での生産を基本としていたものと予想するが、縄文時代のようなまとまった分布域を示さない点で、粘土採取から焼成までストレートな生産の状況とは予想できず、縄文時代よりは大きな生産単位、例えば地域の中で核となる村落での一括的な土器生産による、周辺集落への分配のような生産の状況も想定されるのではないかと考える。

さて、ここで述べた地域とはどのようなエリアを示すのであろうか。対比資料として上げられるものが、小松市北部の松梨遺跡と銭畑遺跡のみの古墳時代後期という限られた資料であるため、積極的に論じきれないが、三辻氏の指摘どおり、小松市北部の胎土とは分布領域が異なることは確かで、小松市域程度を包括するような広い地域設定が不可能であることは間違いない。ただ、小松市域を2分する大きなエリアを設定できるかどうかは疑問であり、もう少し小さな単位であったらと予想する。松梨遺跡と銭畑遺跡の分析事例から、この程度の地域は包括できるエリアであろうと推察されるが、地域というエリアは難しい問題である。資料の増加を待って考えるべき問題であるが、その時、注意すべきことは、生産単位や粘土採取地が違っても、同質の粘土が採れる地域が広がれば、胎土領域としては広く設定できる可能性で、粘土素地のみからの分析では限界がある。やはり、混和材の岩石観察も併用する必要性はあろう。

以上、考古学の立場から、三辻氏の報告された分析結果について、私見を述べたが、細部での意見の違いがあったものの、基本的な部分は、当初の予想と一致する見解であり、また付け加えて、今回の分析でこれまで指摘されていなかった多くの基本的な胎土分析での視点が得られたと思う。三辻氏も最後に述べているように、今回の分析の意義は大きく、胎土分析の一つの方向性を示していると感じる。胎土分析、特に地元での生産が可能な酸化焙焼成の軟質系土器類の胎土分析について、今後、研究を進展させるためにも、やはり三辻氏がこれまで再三主張しておられた考古学研究者と分析化学者との学際共同研究は不可欠であり、特に、考古学者からの積極的な研究参加が必要であると感ずる。このような土器の胎土分析は基本的に考古学での胎土分析を経た後の試料でなければ、分析結果の意味は半減し、それを活用して行くうえの方法も限られてくる。我々は、考古学の立場で、蛍光X線分析を積極的に活用して行くためには、分析方法は理解できなくとも、少なくとも、分析結果の数値を理解し、考古学の立場から、再整理を試みる必要がある。この作業なくして、三辻氏の精力的な研究成果を、考古学の分野で実質的に生かされて来ず、氏の業績を考古学にもっと多く反映させるために、一層努力すべきであると考える。最後になったが、ご多忙の中、三辻氏には大変無理を申し上げ、原稿をいただいた。その原稿に報いるためにも、考古学的所見を立場の違った見方で意見を述べるよう努力したが、十分な検討ができなかったことをお詫び申し上げる。

(望月精司)

図25 遺跡位置図



第3節 念仏林南遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大澤 正己

〈概要〉

古墳時代後期の遺構から出土した鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

<1> 出土鉄滓の1点は、塩基性砂鉄を始発原料とした製錬滓であった。鉱物組成はウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)を晶出し、化学組成で砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO_2)を17.22%を含む。当鉄滓は鍛冶原料となる荒鉄(製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄:鉄塊系遺物)を割り出した炉底滓の残滓である。

<2> 他種の鉄滓は、鍛冶炉の炉底に堆積形成された碗形状鉄滓で鍛錬鍛冶滓に分類される。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト(Wüstite: FeO)を多量に晶出し、鉄分が50%と高く、酸化チタン(TiO_2)は0.31%と低値となる特徴をもつ。該品が出土した29号堅穴住居跡は鍛冶工場の可能性をもつものと考えられる。

1. いきさつ

念仏林南遺跡は、小松市に所在する縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代中期・後期の4時期の遺構が存在する複合遺跡である。このうちの最終期にあたる古墳時代後期(6世紀末~7世紀初頭)の遺構は、堅穴住居跡29軒、掘立柱建物跡19軒のまとまりをもつ集落跡であり、出土遺物は金環(銅環?)やヒスイの玉など上位クラスの人物がもつ装飾品らと共に、鉄滓15点、棒状鉄片1点など総重量235gが検出された。この鉄滓の多くは29号堅穴住居跡の出土であって、この住居跡の大半が調査区域外にかかり、1/6程度の調査であって詳細は不明な点が多いが、床面に焼土分布があり、炉の確認はなされてないが鍛冶工場の可能性が指摘されていた¹⁾。

以上の観点をもとに、当時の鉄生産の実態を把握する目的から鉄滓調査の依頼を小松市教育委員会より要請された。

2. 調査方法

2-1. 供試材

調査試料は出土鉄滓15点のうちから外観の異なる2点を抽出した。その履歴と調査項目をTable.1に示す。

Table.1. 供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目		
				大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	EDX分析	化学組成
NRM-1	鉄滓(炉底滓)	3次調査き-26Gr	6c末~7c初頭	42×43×34	90.7	○	○	○
NRM-3	鉄滓(碗形滓)	29号住居跡F層147	6c末~7c初頭	42×48×20	30.7	○	○	○

2-2、調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) 顕微鏡組織

鉄滓は水道水で十分に洗浄・乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの 3μ と 1μ で仕上げ、光学顕微鏡の観察を行なった。

- (3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行なった。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

- (4) 化学組成

鉄滓は次の方法で分析している。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第1鉄 (FeO) : 容量法。炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。二酸化珪素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP法 (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果と考察

- (1) NRM-1 : 鉄滓 (炉底塊)

① 肉眼観察 : 表裏共に灰黒色を呈し、周辺部は破砕面で囲まれた炉底塊である。表面は砂鉄の2次付着があり、裏面は木炭痕を残す。破面は緻密質でキラキラ輝く結晶がみられ、気泡極く微量を発生する。炉底塊の塊鉄を割り出した残滓であろう。

② 顕微鏡組織 : Photo.1の①~③に示す。鉱物組成は、白色多角形の大きく成長したウルボスピネル (Ulvospinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) と、淡灰色盤状結晶のファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。砂鉄特有元素のチタン (Ti) の高い塩基性砂鉄を始発原料とした製錬滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度 : Photo.1の③に白色多角形結晶の硬度測定の圧痕写真を示す。硬度値は 627Hv であった。マグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4) の文献硬度値が $500\sim 600\text{Hv}$ であるので、チタン分の固溶したウルボスピネルは硬質となる。当結晶は硬度値からみてもウルボスピネル (Ulvospinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) に同定される。

④ 化学組成 : Table.2に示す。全鉄分 (Total Fe) は 40.48% に対して、金属鉄 (Metallic

Fe)は0.13%、酸化第1鉄(FeO)47.12%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)5.32%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は27.19%あって、このうち、塩基性成分(CaO+MgO)は7.43%あって、鉄と滓の分離を促進する自媒剤成分は高めである。これは媒溶剤の添加というより炉材粘土からの影響が大きからう。

砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は高く、17.22%あって、バナジウム(V)0.20%の組合せは砂鉄製錬滓に分類される。また、酸化マンガン(MnO)0.68%、銅(Cu)0.005%と前者は多く、後者が少ない成分傾向は砂鉄製錬滓を傍証する。他の随伴微量元素は特異な点はなく、酸化クロム(Cr₂O₃)0.09%、硫黄(S)0.02%、五酸化磷(P₂O₅)0.34%などであった。

(2) NRM-3:鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

① 肉眼観察:鍛冶炉の炉底に堆積した小型碗形滓である。表裏共に基底は茶褐色を呈し、表面は木炭痕を残して粗鬆であり、裏面は炉底粘土との反応痕を發して凹凸をもつ。局部的に少量の欠損部を有するが、ほぼ完形品に近い碗形滓である。

② 顕微鏡組織:Photo.1の④~⑧に示す。鉱物組成は大量の白色粒状のヴスタイト(Wüstite:FeO)と、淡灰色長柱状結晶のファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)、これに基底の暗黒色ガラス質スラグ、微量の金属鉄粒(⑦⑧の中央の白色角ばった結晶)などから構成される。鉄素材鍛打で返し曲げ鍛接の高温加熱で派生した鍛錬鍛冶滓に分類される。

③ ビッカース断面硬度:Photo.1の④に白色粒状結晶の硬度測定印痕を示す。硬度値は423 Hvであった。ヴスタイト(Wüstite:FeO)の文献硬度値が450~500 Hvなので³⁾、当結晶は若干下限値を下まわるもののヴスタイトと同定できる。

④ 化学組成:Table.2を示す。全鉄分(Total Fe)は多くなり49.79%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.000%、酸化第1鉄(FeO)45.37%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)20.77%と僅かに錆化鉄を含む。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は28.76%あり、このうちの塩基性成分(CaO+MgO)は低減して1.84%、同じく砂鉄特有成分も減じて二酸化チタン(TiO₂)0.31%、バナジウム(V)0.01%となり、更に酸化マンガン(MnO)も0.19%と少なくなる。

Table.2 供試材の化学組成

試料番号	NRM-1	NRM-3
全鉄分(Total Fe)	40.48	49.79
金属鉄(Metallic Fe)	0.13	0.000
酸化第1鉄(FeO)	47.12	45.37
酸化第2鉄(Fe ₂ O ₃)	5.32	20.77
二酸化珪素(SiO ₂)	16.05	19.93
酸化アルミニウム(Al ₂ O ₃)	3.22	5.82
酸化カルシウム(CaO)	1.18	1.00
酸化マグネシウム(MgO)	6.25	0.84
酸化カリウム(K ₂ O)	0.37	0.78
酸化ナトリウム(Na ₂ O)	0.12	0.39
酸化マンガン(MnO)	0.68	0.19
二酸化チタン(TiO ₂)	17.22	0.31
酸化クロム(Cr ₂ O ₃)	0.09	0.01
硫黄(S)	0.02	0.06
五酸化磷(P ₂ O ₅)	0.34	0.34
炭素(C)	0.06	0.01
バナジウム(V)	0.20	0.01
銅(Cu)	0.005	0.028
造滓成分	27.190	28.760
造滓成分/Total Fe	0.672	0.578
TiO ₂ /Total Fe	0.425	0.006

この様に鉄分は増加して、脈石成分が減少するのは鍛錬鍛冶滓の特質である。

4. まとめ

念仏林南遺跡の29号竪穴住居跡は、古墳時代後期の鍛冶工房跡の可能性をもつ。竪穴住居跡の大半は調査区外に属し、未発掘部分が多く、炉の検出までには至ってなくて全容は伺い知れないが、焼土分布と共に出土鉄滓の多くは鍛冶炉の炉底で堆積形成された碗形滓であり、そのうちの1点の分析結果は鍛錬鍛冶滓に分類された。

更に重要な点は、塩基性砂鉄を始発原料とする製錬滓の存在である。今回調査した試料の1点は炉底塊で砂鉄製錬滓の確認がとれ、他にも炉外流出滓の出土もあった。この事は、当遺跡の周辺に製錬炉の操業を語る状況証拠が挙がったのであり、当地において6世紀末から7世紀初頭において砂鉄製錬が行なわれている事を間接的に示唆するものと考えられる。

注

- (1) 小松市教育委員会 調査担当望月精司氏のご教示。
- (2) 日刊工業新聞社『焼結組織写真および識別法』1968
- (3) 前掲書(2)

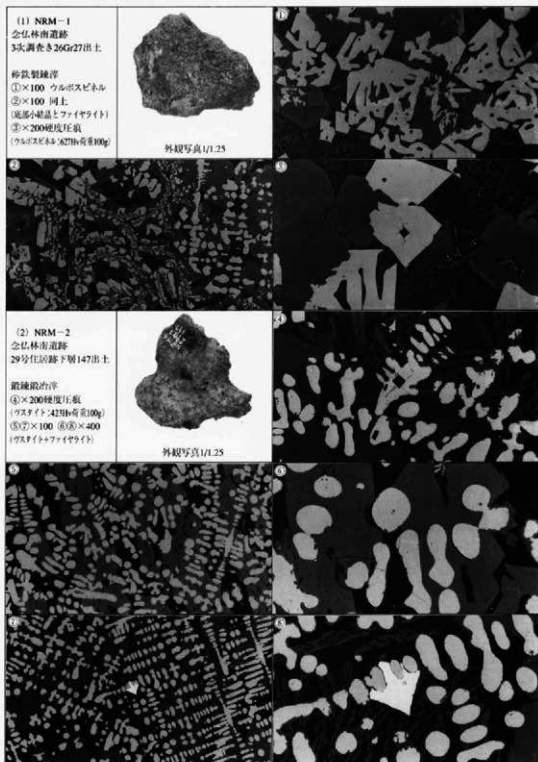


Photo.1 鉄滓の顕微鏡組織 (縮小:0.82)



月津台地遠景写真（南西方より）



念仏林南遺跡遠景写真（西方より）

〈遺跡遠景航空写真〉



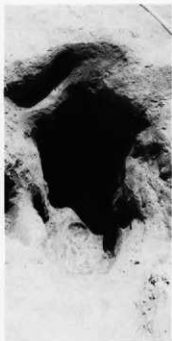
31号土坑全景写真



(27号土坑)



(35号土坑)



(30号土坑)

〈船し穴土坑全景写真〉

〈縄文時代の土坑〉



完掘後全景写真



土器出土状況写真



(全 景)



(土層堆積状況)

土層断面写真

〈弥生時代の竪穴住居跡・20号住居跡〉



22号竪穴住居跡完掘後全景

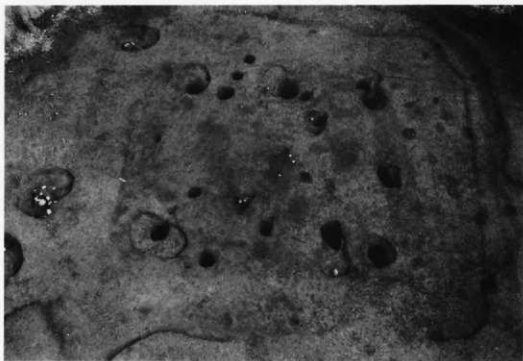


24号竪穴住居跡
①完掘後全景

▽掘り方、完掘後全景



〈弥生時代の竪穴住居跡〉



完掘後全景写真



掘り方完掘後全景写真



土層断面写真



一括発掘土器出土状況写真



土器出土状況写真

〈古墳時代中期の整穴住居跡 - 27号住居〉



34号土坑全景写真



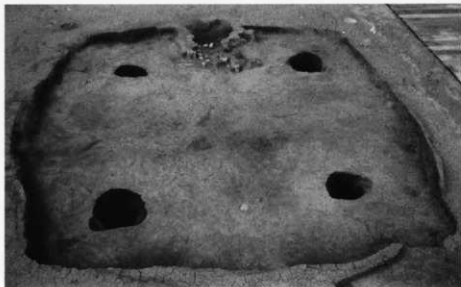
△43号土坑全景写真 (右上)

▽45号土坑全景写真 (左上)

◁46号土坑全景写真 (左下)



〈古墳時代中期の土器廃棄土坑〉



△完掘後全景写真



◁カマド全景写真



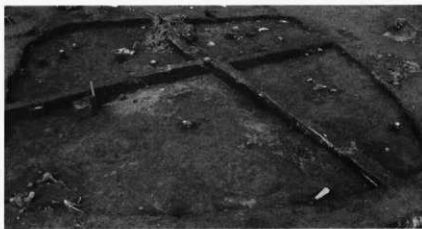
▽上層断面写真

〈古墳時代後期の竪穴住居跡・3号住居跡〉

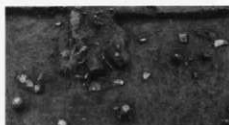


◁定置機全景写真

土層断面▷
写真



◁カマド全景写真



△カマド周辺の土器出土状況

◁古墳時代後期の竪穴住居跡・4号住居跡

◁完掘後全景写真



土層断面の
写真



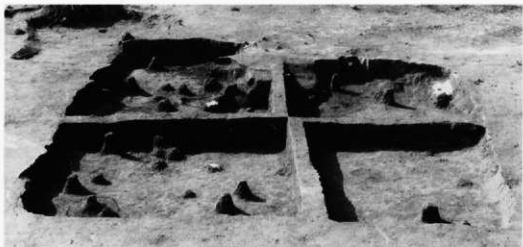
△カマド周辺（右側）土器出土状況

◁カマド全景写真

◁古墳時代後期の竪穴住居跡・5号住居跡



完掘後全景写真

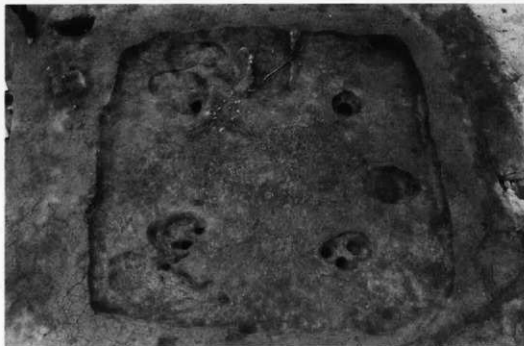


土層断面写真



掘り方完掘後全景写真

〈古墳時代後期の竪穴住居跡・10号住居跡〉



定窯坑全景写真



カマド全景写真



土器出土状況写真
(上:左コーナー
下:カマド右側)

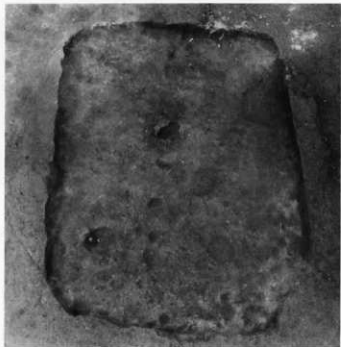


完掘後全景写真



掘り方完掘後全景写真（増築前柱穴検出状況）

〈古墳時代後期の竪穴住居跡・12号住居跡〉



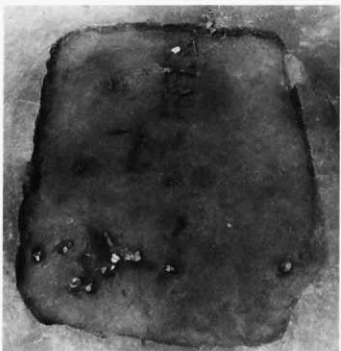
完備後全景写真



完形短冊壺出土状況



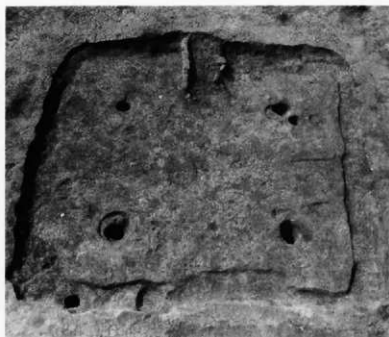
炭化材出土状況



遺物出土状況全景写真



14号住居跡完掘後全景写真

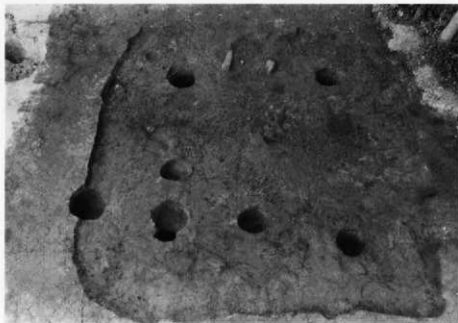


15号住居跡完掘後全景写真



15号住居跡カマド全景写真

〈古墳時代後期の壑穴住居跡・14号住居跡・15号住居跡〉



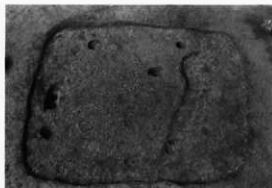
16号住居跡完備後全景写真



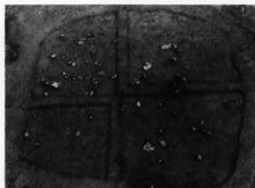
16号住居跡カマド全景写真



16号住居跡掘り方完備後全景写真



18号住居跡完備後全景写真



18号住居跡土層断面写真

〈古墳時代後期の竪穴住居跡・16号住居跡・18号住居跡〉



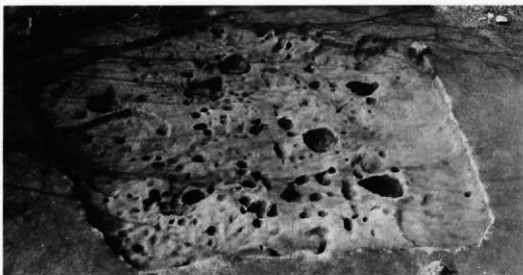
完掘後全景写真（左が19号住居跡、右が23号住居跡）



土層断面写真



23号住居跡出土炭化材

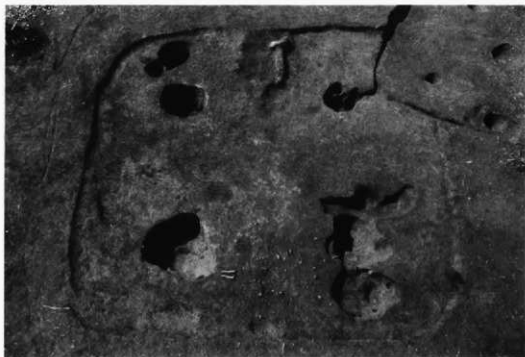


掘り方完掘後全景写真

〈古墳時代後期の壑穴住居跡・19号住居跡・23号住居跡〉

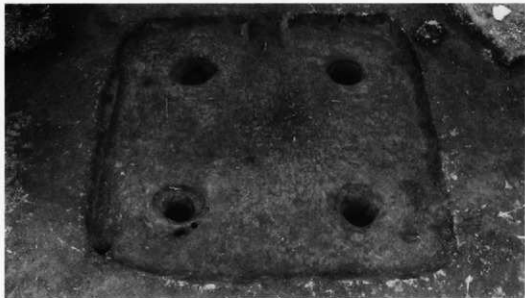


21号住居跡完備後全景写真

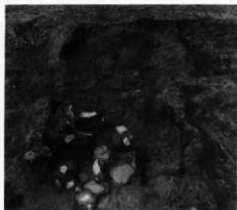


25号住居跡完備後全景写真

〈古墳時代後期の壘穴住居跡・21号住居跡・25号住居跡〉



26号住居跡完掘後全景写真



△土層断面写真

◁全景写真

21号住居跡カマド写真



25号住居跡カマド全景写真

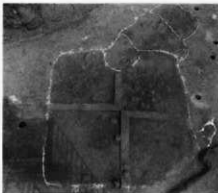


26号住居跡カマド全景写真

〈古墳時代後期の竪穴住居跡・26号住居跡及びカマド写真〉



28号住居跡完掘後全景写真



28号住居跡土層断面写真



29号住居跡完掘後全景写真

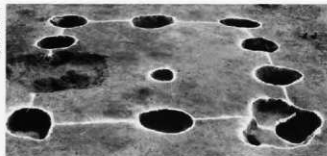


29号住居跡土器出土状況写真

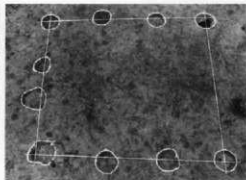


29号住居跡内土坑へ
廃棄された甕

〈古墳時代後期の壑穴住居跡・28号住居跡・29号住居跡〉



1号掘立柱建物跡全景写真



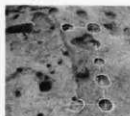
8号掘立柱建物跡全景写真(南側のみ)



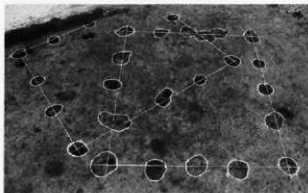
4号掘立柱建物跡全景写真



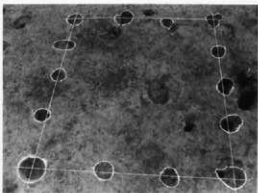
17号掘立柱建物跡全景写真



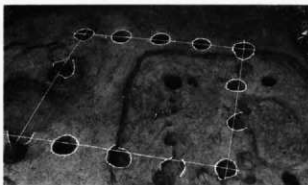
16号掘立柱建物跡全景写真



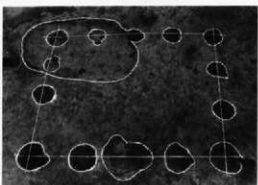
10・11号掘立柱建物跡全景写真(左は11号、右は10号)



9号掘立柱建物跡全景写真



15号掘立柱建物跡全景写真(右は16号住)

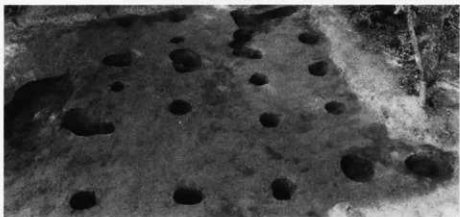


12号掘立柱建物跡全景写真(左上は28号土坑)

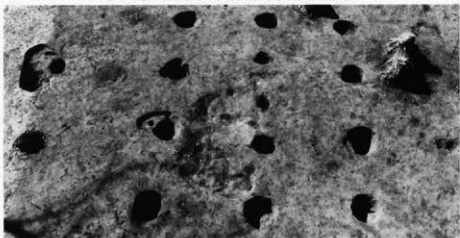
〈古墳時代後期の掘立柱建物跡〉



3号掘立柱建物跡全景写真



5・6・7号掘立柱建物跡全景写真（中央5号・右6号・左7号）



13号掘立柱建物跡全景写真

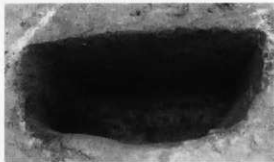
〈古墳時代後期の掘立柱建物跡〉



18・19号掘立柱建物跡全景写真（右19号、左18号）



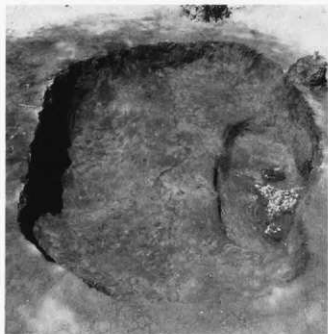
18号掘立柱建物跡P1土層断面写真



18号掘立柱建物跡P16土層断面写真



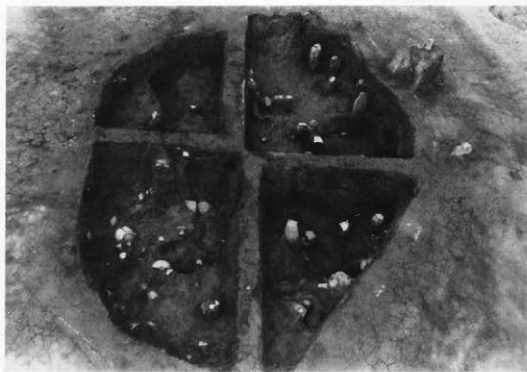
18・19号掘立柱建物跡区域上層遺物出土状況写真



完掘後全景写真（右側は貝塚）



貝塚出土状況写真



土器出土状況写真

〈古墳時代後期の土坑・21号土坑〉



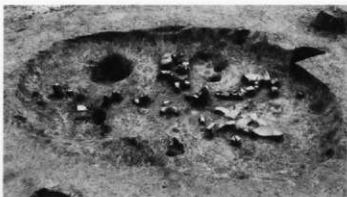
16号土坑土層断面写真



25号土坑土器出土状況写真



36号土坑完掘後全景写真



28号土坑土器出土状況写真



2号溝土層断面写真



1号溝土層断面写真

〈古墳時代後期の土坑及び溝〉



1次調査時の包含層掘り下げ作業写真



2次調査作業員記念写真（号掘立柱建物跡）



3次調査20号堅穴住居床面積査作業写真

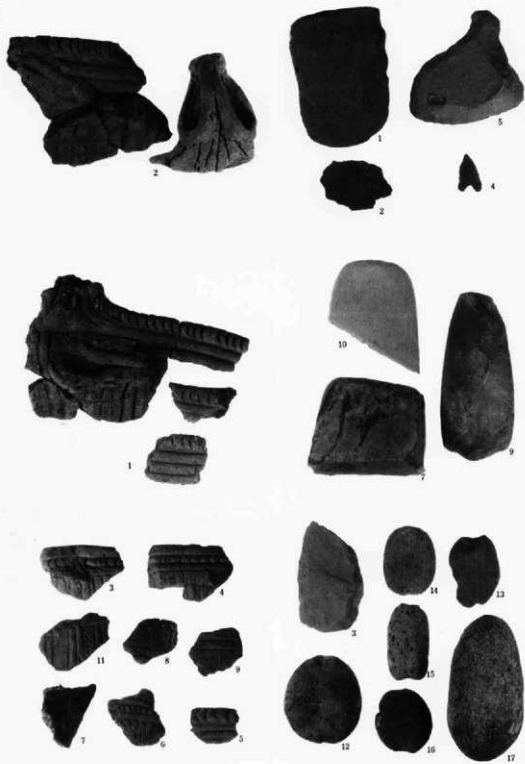


3次調査 34号土坑掘り下げ作業写真



1次調査 平面図作成作業写真

〈発掘調査風景写真〉



〈縄文時代以前の土器と石器〉



20号竪穴住居跡出土土器

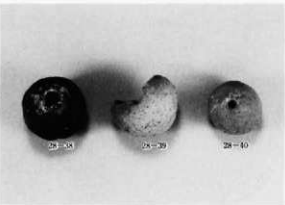
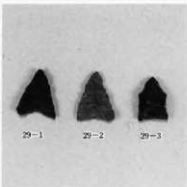
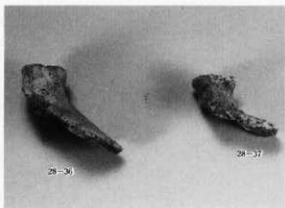


22号竪穴住居跡出土土器

〈弥生時代後期の遺物(1)〉



24号竪穴住居跡出土土器

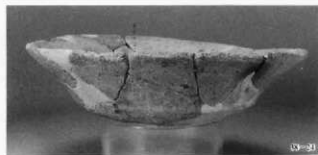


包含層出土遺物

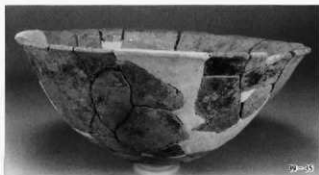
〈弥生時代後期の遺物(2)〉



〈古墳時代中期の土器：27号壑穴住居跡〉



〈古墳時代中期の土器：27号竪穴住居跡〉



〈古墳時代中期の土器：27号壜穴住居跡〉



34土坑

40-50



34土坑

40-53



47土坑

49-11



43土坑

40-45



40-48



44土坑

40-44



40-56

43土坑



45土坑

39-43

〈古墳時代中期の土器：周辺土坑〉



6住-95



内



3住-2



内

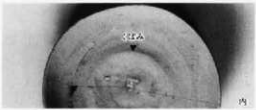


内

6住-97



4住-36



内



11住-114



内

11住-112

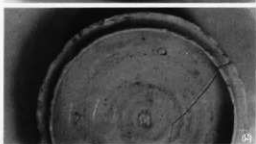
〈古墳時代後期の須恵器蓋環A〉



11E-116



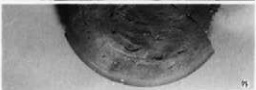
11E-117



11E-118



12E-138

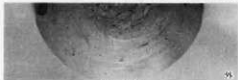
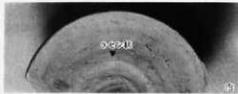


12E-142

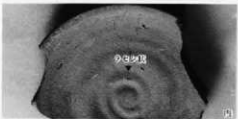
〈古墳時代後期の須恵器蓋坏A〉



14E-190



14E-191



14E-192



15E-227

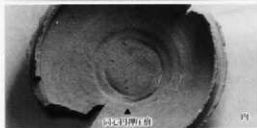


14E-189

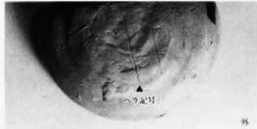


15E-225

〈古墳時代後期の須恵器蓋坏A〉



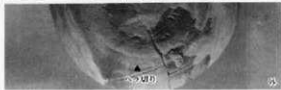
15住-228



16住-252



15住-230



18住-278

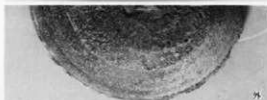


18住-275

〈古墳時代後期の須恵器蓋坏A〉



丙



19住-294

外



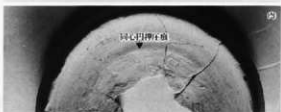
19住-292

外



19住-295

外



丙

19住-296



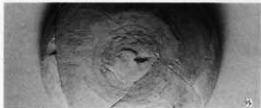
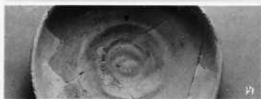
19住-299 (破A)

丙

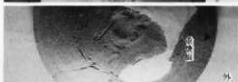
〈古墳時代後期の須恵器蓋坏A〉



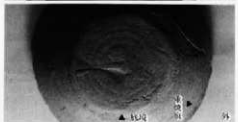
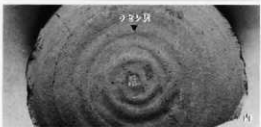
21住-329



21住-330



21住-335



21住-333

21住-334

〈古墳時代後期の須恵器蓋坏A〉



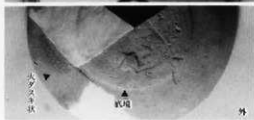
21住-338 (内A)



29住-338



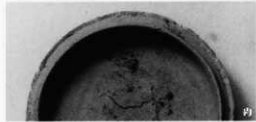
内



火
ダ
ス
キ
状

16土坑-404

外

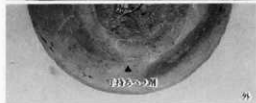


内



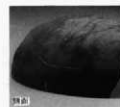
ク
ノ
ク
状

内

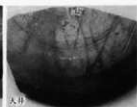


29住-339

外

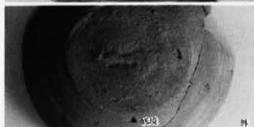


頂面



大目

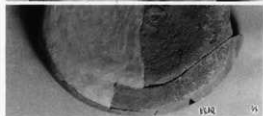
21土坑-430 (外面火ダスキ痕)



21土坑-429

外

(古墳時代後期の須恵器蓋坏A)



21土坑-436



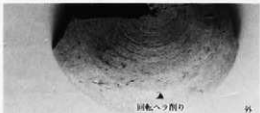
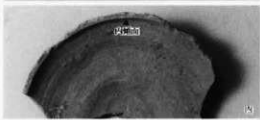
21土坑-432



21土坑-433 (外面大ダスキ痕)



20住理-497

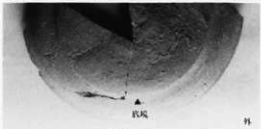


20住理-492

〈古墳時代後期の須恵器蓋坏A〉



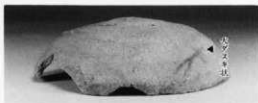
24住理-514



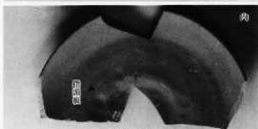
24住理-517



24住理-516



包含層-534

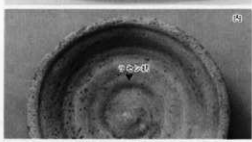


18住-277

〈古墳時代後期の須恵器蓋坏A〉



21土坑-440



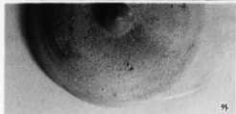
21土坑-441



包含層-563



包含層-562



36上坑-487 (蓋坏B)



28上坑-477 (鉢A)



11住-123 (高脚鉢)



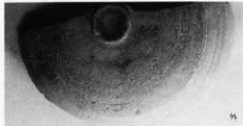
19住-298 (鉢)



28住-381 (高坏A蓋)



18住-280 (高坏A蓋)



21土坑-443 (高坏A蓋)



28土坑-476 (高坏A蓋)



21土坑-446 (高坏Aa)



21土坑-445 (高坏Ab)

《古墳時代後期の須恵器高坏》



21土坑-444 (高坏Ab)



21住-336 (高坏Ab)



21土坑-447 (高坏Aa)



12住-152 (短頸甗Aa)



12住-149 (高坏Aa)



13住-185 (短頸甗Ab)



21土坑-448 (高坏B)

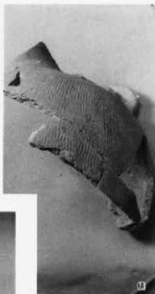


36土坑-488 (短頸甗B)

〈古墳時代後期の須恵器高坏・短頸甗〉



14住-201 (瓶)



18住-283 (投壺B)



15住-239 (壺脚)

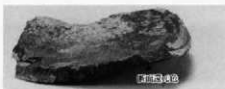


20土坑-423 (壺B)



19住-305 (壺A)

〈古墳時代後期の須恵器壺・甕〉



須恵器壺



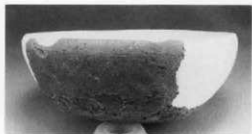
須恵器の片

須恵の上



須恵器の片

〈古墳時代後期の須恵器に付着した焼台〉



5住-72



3住-18



5住-75



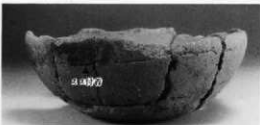
3住-19



5住-76 (手付破)



14住-205



6住-101



14住-206

〈古墳時代後期の土師器残〉



14住-203

内面



15住-242

内面



16住-254

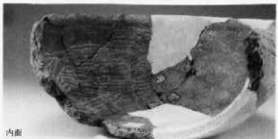


18住-284



16住-255 (○はスズ付石)

外面



21住-343

内面

〈古墳時代後期の土師器魂〉



21土坑-453



28住-385

(瓿)



4住-47



5住-68 (竈支脚転用)



5住-67



29住-391



19住-310



12住-154

(高坏)

〈古墳時代後期の土師器 瓿・高坏〉



16土坑-408 (高坏)



10住-104 (盖)



12住-166



29住-392



底面

(长颈罏)



口面



10住-107

(小型罏A)



19住-313

(古墳時代後期の土師器高坏・盖・长颈罏・小型罏)



(○)はスス付着

21住-344



内面



スス付着

16土坑-414



外面

[ヘラ記号]



4住-50



21土坑-457



3住-23



(○)はコゲ状

〈古墳時代後期の土師器小型鍋〉



3住-25



5住-81



14住-210



21住-345



28土坑-481



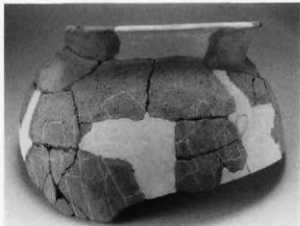
21土坑-458



3住-30



4住-58



14住-213



21住-351



21住-347

〈古墳時代後期の土師器類B〉

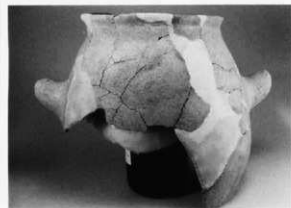


5住-92



(土師器壺B)

19住-318



16土坑-419



21住-352

(成範範囲はス)



(土師器壺C)

13住-188 (成範範囲はス)

〈古墳時代後期の土師器壺B・C〉



12住-175底面 (ヘラ記号)



10住-110
(◀マーク間は過熱のため剥落)



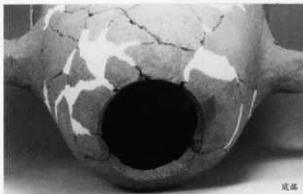
19住-325 (ヘラ記号)



21土坑-460 (ヘラ記号)



内面

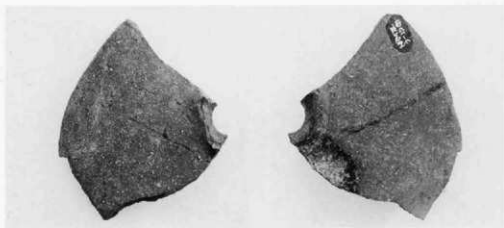


底部

21土坑-465



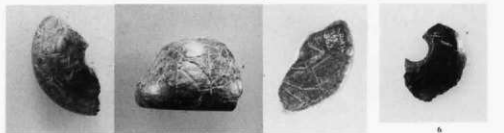
〈古墳時代後期の土師器甌と甕底部〉



1

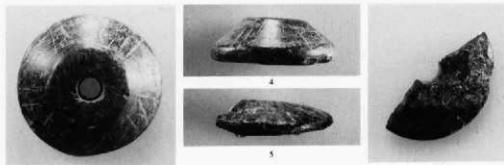


2



3

6



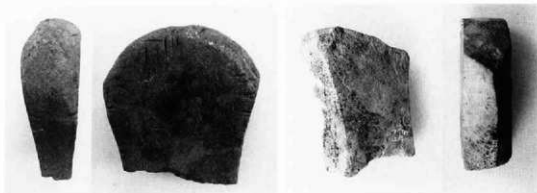
4

4

5

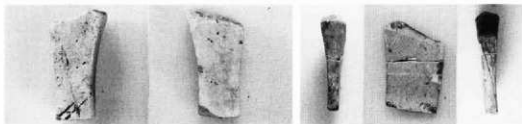
5

〔古墳時代後期のその他の遺物（1）〕



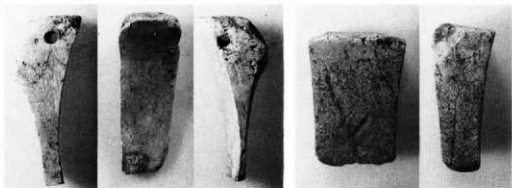
7

8



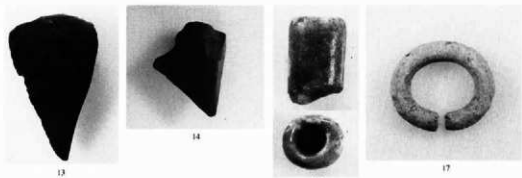
9

10



11

12



13

14

16

17

報告書抄録

ふりがな	ねんぶつりんなんふいせき							
書名	念仏林南遺跡Ⅱ							
副書名	老人ホーム第二松寿園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	望月精司・櫻田 誠・津田隆志・橋 雅子							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923 石川県小松市小馬出町91番地 TEL0761-22-4111							
発行年月日	西暦 1995年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査要因
		市町村	遺跡番号					
念仏林南	石川県小松市 月津町ヲ95		03099	36度 20分 55秒	136度 25分 5秒	1次調査 19840827～ 19841013 2次調査 19850304～ 19850513 3次調査 19850520～ 19860331 4次調査 19930408～	3,300 1,430 4,025 750	老人ホーム 新設及び 増築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
念仏林南	集落	縄文時代中期	陥とし穴土坑	縄文土器・石器				
		弥生時代後期 ～古墳時代前期	竪穴住居跡3軒	弥生土器				
		古墳時代中期	竪穴住居跡1軒 土器捨て土坑	土師器				
		古墳時代後期	竪穴住居跡22軒 掘立柱建物跡19軒 土器捨て土坑9基	須恵器・土師器 石製紡錘車 金環・鍛冶遺物 管玉状石製品				

念仏林南遺跡Ⅱ

老人ホーム第二松寿園建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

発行日 1995年3月30日

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地

印刷 有限会社源田美術印刷
